沖縄県文化財調査報告書　第131集

西　表　島

慶来慶田城遺跡

重要遺跡確認調査

1997年3月
沖縄県教育委員会

巻首図版１　西表島祖納半島の空中写真

巻首図版２　上：Ⅰ地区（伝鍛冶屋跡地）の方形状石組遺構
下：Ⅱ地区（伝薩摩在番跡地）の柱穴群

巻首図版３　上：Ⅰ地区（伝鍛冶屋跡地）の骨製品・磁器出土状況
下：Ⅱ地区（伝薩摩在番跡地）の土器検出状況

序

本報告書は、重要遺跡確認調査として文化庁の補助を受けて平成５年度から平成８年度までの４ヶ年計画で実施した「慶来慶田城遺跡」の成果をまとめたものであります。

竹富町西表島の祖納半島一帯には貴重な遺跡が分布しており、西表島における中・近世の集落遺跡の実態を把握する上で極めて重要な場所であることが確認されております。その代表的な遺跡として、半島の北東部を占める上村遺跡とそれに隣接する慶来慶田城遺跡があります。両遺跡とも保存状態が良好でオリジナルな遺物包含層が残っており、重要遺跡としての調査を実施してきたものであります。昭和63年度から平成２年度にかけて実施した上村遺跡の調査では、膨大な量の土器や中国陶磁器等の遺物と鍛冶跡等の遺構が発掘されており、出土した中国陶磁器から同遺跡の形成された時期が14世紀頃まで辿ることが確認されました。

今回調査した慶来慶田城遺跡は、『慶来慶田城由来記』等の古文献の中に村建てに関する記事が記録されており、発掘調査によって方形状石組遺構、掘立柱跡、石敷遺構や土器、中国陶磁器、骨製品、貝、獣・魚骨類の自然遺物等貴重な遺物が出土するなど、西表島における中・近世の集落の規模や形態・性格等が把握されました。とりわけ中国陶磁器については15世紀から16世紀の遺物がまとまって出土しており、本遺跡の時期的な位置付けが可能となりました。本調査によって、慶来慶田城遺跡の全体像を把握する一つの手がかりが得られたものと考えております。

近年、島の活性化を図る上から祖納半島一帯を中心としたリゾートの誘致計画や農地開発計画があり、遺跡保存と開発計画との調整も問われております。今後は祖納半島一帯に形成された、これらの重要な遺跡をどのように保存し活用を図っていくかが課題であります。この調査成果から、文化財指定の価値も十分に備わった遺跡であることが確認されております。

本書が、竹富町西表島ひいては八重山地域における文化財の保護活用や歴史研究の一助になれば幸いに存じます。

末尾になりましたが、調査及び報告書作成にあたり多大なご指導・ご助言を賜りました文化庁をはじめ竹富町教育委員会、地元の方々や関係者各位に対し厚く御礼を申し上げます。

平成９年３月

沖縄県教育委員会
教育長　仲　里　長　和

例　　言

1．本報告書は、平成５年度から平成８年度の４ヵ年におよぶ継続事業として、文化庁の補助金を受けて行われた重要遺跡確認調査の成果記録である。

2．発掘調査にあたっては、字公民館（館長：那根　昴）を中心とした地元の方々や「西表をほりおこす会」（会長：石垣金星）の協力のもと、多大な成果を上げることが出来ました。記して謝意を申し上げます。

3．国土基本図（1／5,000）は国土地理院発行、地形図（ 1／10,000）は竹富町役場製作の成果資料である。

4．周辺遺跡の分布図は『竹富町・与那国町の遺跡ー詳細分布調査報告書』（沖縄県教育委員会 1980年）の、祖納半島の歴史地図は『上村遺跡』（沖縄県教育委員会1991年）の成果資料である。

5．発掘対象地の決定や遺構の所見に関しては、社団法人温故学会所蔵の古地図の写しを参考にさせていただいた。記して謝意を申し上げます。

6．各資料は、下記の方々により同定並び分析を行いました。記して謝意を申し上げます。

獣・魚骨……金子浩昌氏（早稲田大学考古学研究室）
陶 磁 器……大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）
石器、石材……大城逸朗氏（北谷高等学校教頭）
人　骨……土肥直美氏（琉球大学医学部助教授）

尚、獣・魚骨及び人骨の同定並び分析の結果については、金子・土肥諸先生方の原稿を賜りました。記して謝意を申し上げます。

7．調査指導及び助言については、文化庁記念物課の松村恵司調査官、坂井秀弥調査官と竹富町教育委員会の仲盛敦氏の協力を得ました。記して謝意を申し上げます。

8．本報告書の執筆・編集は下記のとおり分担執筆した。

金　城　　透……第Ⅰ～Ⅲ章、第Ⅳ章・１．(1)～(3)、第１・２・21～23節
　　２．(1)～(3)、第１・２・13・14節
金　城　亀　信……第Ⅳ章・１．第３節～第16節　２．第３節～第８節
島　袋　　洋……第Ⅳ章・１．第17節～第20節　２．第９節～第12節
上　原　清　乃……第Ⅳ章・１．第27節～第28節　２．第19・20・22節
仲與根　ゆかり……第Ⅳ章・１．第24・25節　２．第15節～第17節
仲　間　留　美……第Ⅳ章・１．第26節　２．第18節、第21節

9．遺物の写真撮影は長田剛があたり、校正は島袋春美の協力を得た。

10．出土した資料及び本書作成の記録類は、沖縄県教育庁文化課資料室にて保管している。

本 文 目 次

序
例　　言
目　　次
報告書抄録
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査体制 …… 1
第Ⅱ章　位置と環境 …… 3
第Ⅲ章　調査概要 …… 5
1．調査地区の設定 …… 5
2．調査の方法 …… 5
3．発掘地の状況 …… 5
4．調査の経過 …… 7
第Ⅳ章　遺構と出土遺物
1．Ⅰ地区（慶来慶田城翁屋敷跡・伝鍛冶屋跡）
(1) 層　序 …… 11
(2) 遺　構 …… 12
(3) 出土遺物 …… 14
第1節　土器 …… 14
第2節　パナリ焼 …… 15
第3節　青磁 …… 22
第4節　白磁 …… 33
第5節　染付 …… 38
第6節　鉄釉染付 …… 43
第7節　天目茶碗 …… 49
第8節　茶入れ壺 …… 49
第9節　緑釉陶器 …… 50
第10節　赤絵 …… 51
第11節　瑠璃釉 …… 51
第12節　褐釉陶器 …… 52
第13節　褐釉水注 …… 59
第14節　中国産無釉陶器 …… 60
第15節　タイ産鉄釉 …… 61
第16節　カムイヤキ窯須恵器 …… 62
第17節　本土産陶磁器 …… 62
第18節　沖縄産施釉陶器 …… 68
第19節　沖縄産無釉陶器 …… 76
第20節　陶質土器 …… 82
第21節　石器 …… 85
第22節　骨製品 …… 85
第23節　玉類 …… 87
第24節　鉄製品 …… 88
第25節　青銅製品 …… 88
第26節　円盤状製品 …… 90
第27節　煙管 …… 92
第28節　貝製品 …… 94
2．Ⅱ地区（伝薩摩在番跡）
(1) 層　序 …… 95
(2) 遺　構 …… 96
(3) 出土遺物
第1節　土器 …… 99
第2節　パナリ焼 …… 101
第3節　青磁 …… 102
第4節　白磁 …… 104
第5節　染付 …… 105
第6節　鉄釉染付 …… 106
第7節　茶入れ壺 …… 106
第8節　褐釉陶器 …… 106
第9節　本土産陶磁器 …… 108
第10節　沖縄産施釉陶器 …… 109
第11節　沖縄産無釉陶器 …… 109
第12節　陶質土器 …… 109
第13節　瓦 …… 111
第14節　石器 …… 113
第15節　錘 …… 113
第16節　鉄製品 …… 115
第17節　青銅製品 …… 115
第18節　円盤状製品 …… 115
第19節　煙管 …… 116
第20節　貝製品 …… 116
第21節　貝類 …… 116
第22節　脊椎動物遺体 …… 123
第Ⅴ章　調査の成果 …… 138
付　編
西表島祖納伝鍛冶屋跡出土の人骨 …… 139

図　目　次

第１図　上：西表島の位置図 …… 4
　　下：西表島の遺跡分布図 …… 4
第２図　屋敷配置図 …… 9
第３図　上：祖納半島の歴史地図 …… 10
　　下：祖納半島の地積図 …… 10
Ⅰ 地 区
第４図　翁屋敷・伝鍛冶屋跡の発掘地 …… 11
第５図　翁屋敷・伝鍛冶屋跡の層序 …… 11
第６図　検出遺構（方形状石組・ピット群） …… 12
第７図 a 方形状石組遺構 …… 13
　　b 人骨出土状況 …… 13
第８図　パナリ焼① …… 16
第９図　土器 …… 20
第10図　土器・パナリ焼 …… 21
第11図　青磁① …… 29
第12図　青磁② …… 30
第13図　青磁③ …… 31
第14図　青磁④ …… 32
第15図　白磁① …… 36
第16図　白磁② …… 37
第17図　染付① …… 44
第18図　染付② …… 45
第19図　染付③ …… 46
第20図　染付④ …… 47
第21図　染付⑤ …… 48
第22図　鉄釉染付・天目茶碗・茶入れ壷 …… 49
第23図　緑釉陶器 …… 50
第24図　赤絵・色絵・瑠璃釉 …… 51
第25図　褐釉陶器① …… 56
第26図　褐釉陶器② …… 57
第27図　褐釉陶器③ …… 58
第28図　褐釉水注 …… 59
第29図　中国産無釉陶器 …… 60
第30図　タイ産鉄釉・中国産か
　　東南アジア産の鉄釉 …… 61
第31図　カムイヤキ窯須恵器 …… 62
第32図　本土産陶磁器① …… 66
第33図　本土産陶磁器② …… 67
第34図　沖縄産施釉陶器① …… 70
第35図　沖縄産施釉陶器② …… 73
第36図　沖縄産施釉陶器③ …… 75
第37図　沖縄産無釉陶器① …… 79
第38図　沖縄産無釉陶器② …… 81
第39図　沖縄産無釉陶器③ …… 83
第40図　陶質土器 …… 84
第41図　石器・硯 …… 86
第42図　骨製品 …… 86
第43図　玉製品 …… 87
第44図　鉄・青銅製品 …… 90
第45図　円盤状製品の大きさと素材の相関 …… 90
第46図　円盤状製品 …… 92
第47図　煙管 …… 93
第48図　貝製品 …… 94
Ⅱ 地 区
第49図　伝薩摩在番跡と発掘地 …… 95
第50図　層序 …… 96
第51図　柱穴・溝状遺構 …… 97
第52図　石敷・石段状遺構 …… 98
第53図　柱穴状遺構（柱穴・集石・土器集中） …… 98
第54図　集石遺構 …… 99
第55図　土器出土状況 …… 99
第56図　土器① …… 100
第57図　土器② …… 101
第58図　青磁① …… 103
第59図　青磁② …… 104
第60図　白磁 …… 104
第61図　染付 …… 105
第62図　鉄釉染付 …… 106
第63図　茶入れ壺 …… 106
第64図　褐釉陶器 …… 107
第65図　本土産陶磁器 …… 108
第66図　沖縄産施釉・無釉陶器・陶質土器 …… 110
第67図　瓦 …… 112
第68図　滑石製品・錘 …… 113
第69図　石器・硯 …… 114
第70図　鉄・青銅製品 …… 115
第71図　円盤状製品 …… 116
第72図　煙管 …… 116
第73図　貝製品 …… 116
第74図　シレナシジミ大きさ殻長別構成比 …… 117
第75図　イノシシ属・ウシ・ニワトリ
　　サメの計測位置 …… 127
第76図　イノシシ属歯の咬耗度 …… 131
第77図　人骨の出土部位 …… 140

図 版 目 次

巻首図版１　西表島祖納半島の空中写真
巻首図版２　上：Ⅰ地区（伝鍛冶屋跡地）の方形状石組遺構
　　下：Ⅱ地区（伝薩摩在番跡地）の柱穴群
巻首図番３　上：Ⅰ地区（伝鍛冶屋跡地）の骨製品・磁器出土状況
　　下：Ⅱ地区（伝薩摩在番跡地）の土器検出状況

Ⅰ 地 区

図版１　遺跡内屋敷 …… 143
図版２　発掘作業風景（Ⅰ・Ⅱ地区） …… 144
図版３　Ⅰ地区：鍛冶屋
　　方形状石組遺構① …… 145
図版４　方形状石組遺② …… 146
図版５　Ⅰ地区：遺物出土状況 …… 147
図版６　Ⅱ地区：石敷・石段遺構（E－１，２）　148
　　柱穴群（C－３） …… 148
図版７　遺構検出状況（D－５） …… 149
図版８　土　器 …… 150
図版９　パナリ焼、土器 …… 151
図版10　土器、パナリ焼 …… 152
図版11　青磁① …… 153
図版12　青磁② …… 154
図版13　青磁③ …… 155
図版14　青磁④ …… 156
図版15　青磁（復元） …… 157
図版16　青磁60・61　白磁11・12・15（復元） …… 158
図版17　白磁① …… 159
図版18　白磁② …… 160
図版19　染付① …… 161
図版20　染付② …… 162
図版21　染付③ …… 163
図版22　染付④ …… 164
図版23　染付⑤ …… 165
図版24　染付７・25・32　褐釉陶器（復元） …… 166
図版25　上：鉄釉陶器・茶入れ壺・天目茶碗 …… 167
　　中：緑釉陶器 …… 167
　　下：赤絵・色絵
　　瑠璃釉（左：表面　右：裏面） …… 167
図版26　褐釉陶器① …… 168
図版27　褐釉陶器② …… 169
図版28　褐釉陶器③ …… 170
図版29　１段：褐釉水注 …… 171
　　２段：中国産無釉陶器 …… 171
　　３段：タイ産鉄釉 …… 171
　　４段：カムイヤキ窯須恵器 …… 171
図版30　本土産陶磁器① …… 172
図版31　本土産陶磁器② …… 173
図版32　沖縄産施釉陶器① …… 174
図版33　沖縄産施釉陶器② …… 175
図版34　沖縄産施釉陶器③ …… 176
図版35　沖縄産無釉陶器① …… 177
図版36　沖縄産無釉陶器② …… 178
図版37　沖縄産無釉陶器③ …… 179
図版38　上：沖縄産無釉陶器④ …… 180
　　下：陶質土器 …… 180
図版39　上：石器　中：硯　下：骨製品 …… 181
図版40　上：玉　下：鉄・青銅製品 …… 182
図版41　円盤状製品 …… 183
図版42　上：煙管　下：貝製品 …… 184

Ⅱ 地 区

図版43　土器①（復元土器） …… 185
図版44　土器② …… 186
図版45　青磁① …… 187
図版46　青磁② …… 188
図版47　上：白磁（表）　中：白磁（裏） …… 189
　　下左：鉄釉陶器・茶入れ壺 …… 189
　　下右：青磁（復元） …… 189
図版48　染　付 …… 190
図版49　褐釉陶器 …… 191
図版50　上：本土産陶磁器 …… 192
　　中：沖縄産施釉陶器 …… 192
　　下：沖縄産無釉陶器 …… 192
図版51　瓦 …… 193
図版52　上：石器･硯 …… 194
　　下：滑石製品・錘・鉄・青銅製品 …… 194
図版53　上：円盤状製品 …… 195
　　下：煙管・貝製品 …… 195
図版54　貝類① …… 196
　　※貝種名は第26表（ａ）の番号と一致
図版55　貝類② …… 197
　　※貝種名は第26表（ａ）の番号と一致
図版56　貝類③ …… 198
　　※貝種名は第26表（ｂ）の番号と一致
図版57　サカナ　上下 …… 199
図版58　カメ・ジュゴン・イルカ・クジラ …… 200
図版59　上：ニワトリ・カラス・ネズミ・ネコ …… 201
　　下：イヌ …… 201
図版60　イノシシ属① …… 202
図版61　イノシシ属② …… 203
図版62　ウシ① …… 204
図版63　上：ウシ②　下：切痕 …… 205
図版64　講演会・現場説明会 …… 206
図版65　外離島調査 …… 207
図版66　鹿川村跡調査 …… 208

表　目　次

Ⅰ 地 区

第１表　遺物出土状況 …… 17
第２表　ａ土器観察一覧　ｂパナリ焼観察一覧 …… 18
第３表　青磁観察一覧 …… 25
第４表　白磁観察一覧 …… 35
第５表　器種分類と分類別の出現頻度 …… 40
第６表　染付観察一覧 …… 40
第７表　褐釉陶器観察一覧 …… 54
第８表　石器・石製品観察一覧 …… 85
第９表　骨製品観察一覧 …… 85
第10表　玉製品観察一覧 …… 87
第11表　簪計測表 …… 89
第12表　円盤状製品出土状況 …… 90
第13表　円盤状製品観察一覧 …… 91
第14表　吸い口観察一覧 …… 94
第15表　煙管（雁首）観察一覧 …… 94

Ⅱ 地 区

第16表　土器観察一覧 …… 99
第17表　パナリ焼観察表 …… 101
第18表　青磁観察一覧 …… 102
第19表　白磁観察一覧 …… 104
第20表　染付観察一覧 …… 105
第21表　褐釉陶器観察一覧 …… 106
第22表　瓦観察一覧 …… 111
第23表　瓦出土状況表 …… 111
第24表　石器・石製品観察一覧 …… 113
第25表　円盤状製品観察一覧 …… 115
第26表　貝類出土状況　巻貝（ａ）二枚貝（ｂ） …… 119
第27表　シレナシジミ大きさ別一覧（殻長） …… 121
第28表　マガキガイ大きさ別一覧（殻径） …… 121
第29表　脊椎動物遺存体種名一覧 …… 123
第30表　サメ計測一覧（脊椎骨） …… 124
第31表　カメ出土量 …… 125
第32表　ニワトリ計測一覧（中足骨） …… 125
第33表　イヌ計測一覧 …… 125
第34表　イヌ歯牙出土量 …… 125
第35表　イヌ出土量 …… 125
第36表　ネコ歯牙出土量 …… 125
第37表　ネコ出土量 …… 125
第38表　ジュゴン出土量 …… 126
第39表　ヤギ出土一覧 …… 126
第40表　種不明出土一覧 …… 126
第41表　イノシシ属計測一覧　歯骨・肩甲骨・上腕骨・尺骨・橈骨・脛骨 …… 127
第42表　ウシ計測一覧　上腕骨・尺骨・橈骨・指骨 …… 127
第43表　イノシシ属出土量 …… 129
第44表　イノシシ属歯牙出土量 …… 131
第45表　ウシ出土量 …… 131
第46表　ウシ歯牙出土量 …… 131
第47表　遺構出土の獣魚骨一覧 …… 131
第48表　魚類出土量 …… 133
第49表　青磁出土状況 …… 135
第50表　白磁出土状況 …… 135
第51表　染付出土状況 …… 135
第52表　色絵出土状況 …… 135

報告書抄録

ふりがな	いりおもてじまけらいけだぐすくいせき
書名	西表島慶来慶田城遺跡
副書名	重要遺跡確認調査報告
巻次	
シリーズ名	沖縄県文化財調査報告書
シリーズ番号	第131集
編著者名	金城亀信・島袋 洋・金城 透・仲間留美・上原清乃・仲與根ゆかり
編集機関	沖縄県教育委員会　文化課
所在地	〒900　沖縄県那覇市泉崎1－2－2　　TEL 098－866－2731
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
いりおもてじま 西表島 けらいけだぐす 慶来慶田城 いせき 遺跡ほか	おきなわけん 沖縄県 やえやまぐん 八重山郡 たけとみちょう 竹富町 あざいりおもて 字西表	47381		24° 23′ 08″	123° 44′ 48″	第1次調査 1993.8／10 ～9／10 第2次調査 1994.8／15 ～9／30 第3次調査 1995.8／8 ～9／8 第4次調査 1996.8／19 ～10／5	測量面積 60,000m² 発掘面積 190m²	重要遺跡 確認調査 のため

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西表島 慶来慶田城 遺跡ほか	集落	中世 近代	方形状石組遺構 石敷・階段状遺構造 柱穴群 集石遺構 屋敷囲い石垣 など	土器 輸入陶磁器 石器 貝製品 骨製品 鉄製品 土製品 貝類 獣魚骨類 など	西表島における中世から近世にかけての広範囲の遺跡で、集落の規模・形態を把握することの出来る集落遺跡である。

第Ⅰ章　調査に至る経緯

Ⅰ 地区

1．調査に至る経緯

祖納では、現集落西側背後の小高い丘陵地を「上村」と称している。これは以前、居住していた集落がこの丘陵地にあり、その立地条件から「うえの村」と呼んでいたことに由来するものである。

この上村には、村建に大きな影響を与えたとされる大竹祖納堂儀佐と慶来慶田城用緒という２人の人物ついての伝承があり、大竹祖納堂儀佐に関する御嶽や屋敷跡（竹富町指定史跡）が半島北側に、慶来慶田城用緒に関する屋敷跡（竹富町指定史跡）が南側にそれぞれ所在している。

このうち、大竹祖納堂儀佐屋敷跡周辺ついては、遺跡の把握等のため、昭和63年から平成２年にかけて沖縄県教育委員会が発掘調査に着手し、調査結果を『上村遺跡－重要遺跡確認調査報告－』としてまとめている。この調査報告により、上村が半島全域に及ぶ広大な集落遺跡であり、その保存状況も良好で、中世西表の集落規模・形態・性格等を把握する上で重要な遺跡であることが判明している。また、地理的環境から歴史的展開の著しい場所であったことが考えられる。当時の西表島西部の政治行政の中心地となっており、『李朝実録』などの文献からは集落の生活環境をある程度うかがい知ることが出来る。

しかし近年、このような興味深い遺跡の存在するこの祖納半島内にも開発の波が押し寄せてきている。特に上村に関しては、現集落の土地不足の影響により西表測候所や町営団地の上村への移転・建設などの計画が持ち上がっている。また、数年前の西表沖群発地震の際には石畳道が一部破壊され、セメント道に築造された事例も起きている。このような人為的・自然的破壊から遺跡を守る意義は大きく、重要遺跡確認調査として現状を把握し、早急に遺跡の保存活用と保護体制について策を構じなければならなくなってきた。そのため、このほど文化庁の補助を受け、調査を実施する運びとなった。

今回の調査では、半島南側に所在する「慶来慶田城翁屋敷跡」地周辺をその対象とし、西表島の中世・近世を代表する集落の規模とその生活空間である屋敷内の建物構造、鍛冶などの生産の場、近世支配体制の「伝薩摩在番跡」とされる屋敷等の発掘調査およびその結果をもとに基礎資料の作成にあたった。

現在、半島内における遺跡の保存範囲は「慶来慶田城翁屋敷跡」の一部分のみが竹富町の指定を受けているだけである。しかし、諸開発等から遺跡を守るためには、より広範囲の指定が必要になってくると考えられる。環境保全や自然保護の面のみでなく、西表の歴史、文化、生活を知る上でも貴重な遺跡を将来に向けて保存・活用していくために、半島全域の指定に向けて今後拍車がかかることを期待したい。

2．調査体制

調査主体……沖縄県教育委員会

教育長……嘉陽正幸（平成５年度～平成６年度）
　　仲里長和（平成７年度～平成８年度）
文化課長……糸数兼治（平成５年度）
　　西平守勝（平成６年度～平成７年度）
　　大城将保（平成８年度）
課長補佐……川満一成（平成５年度）
　　知念　勇（平成５年度～平成６年度）
　　新垣末子（平成６年度～平成７年度）
　　日越国昭（平成７年度～平成８年度）
　　稲嶺靖子（平成８年度）
発掘調査指導……松村恵司（平成６年度）　文化庁記念物課調査官
　　坂井秀弥（平成８年度）　　〃

調査事業事務

文化振興・管理係長…大　村　光　仁　（平成５年度）
比屋根　正　治　（平成６年度～平成８年度）
主　　査……新　垣　和　子　（平成５年度～平成７年度）
村　山　佐　代　（平成８年度）
副 主 査……比　嘉　美代子　（平成５年度）
宮　城　直　子　（平成５年度～平成６年度）
新　崎　文　子　（平成６年度～平成７年度）
新　垣　敏　子　（平成７年度～平成８年度）
主　　任……伊　波　盛　治　（平成５年度～平成６年度）
當　間　保　智　（平成７年度～平成８年度）
主　　事……上　原　直　樹　（平成８年度）

調査総括

埋蔵文化財係長……大　城　　慧　（平成５年度～平成８年度）
主任専門員……岸　本　義　彦　（平成５年度～平成６年度）
主　　任……金　城　亀　信　（平成５年度）
充指導主事……我那覇　　念　（平成８年度）
豊見山　　禎　（平成５年度）
西　銘　　章　（平成６年度）　現那覇西高等学校教諭
比　嘉　　聡　（平成８年度）
専 門 員……金　城　　透　（平成７年度～平成８年度）
仲　座　久　宜　（平成８年度）
上　地　克　也　（平成５年度）　現南風原町教育委員会
嘱 託 員……田　中　ゆきの　（平成６年度）
新　城　　恵　（平成６年度）
上　原　清　乃　（平成７年度）
仲與根　ゆかり　（平成７年度）

発掘作業員

石垣 金星、星 博、宮良 豊子、前津 克子、田原 千代、本原 愛子、那良伊 知子、山越 和世、星 良枝、加藤 昌子

資料整理員及び協力者

島袋春美、瑞慶覧尚美、又吉純子、仲間留美、比嘉登美子、謝名元かずみ、比嘉孝子、仲與根ゆかり、上原清乃、吉田昌子、新垣利津代、大城美和子、仲宗根三枝子、照屋利子、赤嶺雅子、池原直美、石橋朝子、折田衣代、嘉数禮子、金城洋子、金城美折、金城薫、源河秀子、国吉春美、高良三千代、田中ゆきの、玉城恵美利、玉寄智恵子、備瀬枝美子、牧志加代子

第Ⅱ章　位置と環境

石垣島の西方海上約18kmに位置する西表島は、周囲およそ129.99kmのほぼ平行四辺形をなす先島群島中最大の島である。亜熱帯性植物の宝庫として、またイリオモテヤマネコの生息地として、その名が知られているこの島は、竹富島、黒島、新城島、小浜島、鳩間島、波照間島の島々とともに、竹富町の行政区に編入され、町の人口（3,455人）の約54％にあたる1,875人が生活を営んでいる。（平成８年10月１日現在）

西表島は、復帰時に国定公園の指定を受け、その内の90％が国有地となっている。全島が標高400ｍ内外の定高性山地で、前述したように亜熱帯の原生林が生い茂り、国の天然記念物であるイリオモテヤマネコやイノシシなどの大型哺乳類をはじめとして、カンムリワシ、サキシマスオウノキ、ニッパヤシ等の動植物が自然のまま生息あるいは保護されている。沖縄有数の規模をほこる浦内川や仲間川河口部の湿地帯にはマングローブの原生林がよく発達し、全国で最も熱帯的な自然景観を形成している。また、産業の面では、島全体にわたり平坦な土地が少ないため、山間部の小さな平地を利用したパイナップル栽培や稲作が盛んに行われている。民俗的行事（習慣）もよく伝承されており、祖納・星立集落で行われている国重要無形民俗文化財の節祭をはじめ、数々の伝統行事が生活の中に息づいている。さらに、沖縄で唯一石炭を産出する地域で、一時期であるが採掘も行われ、炭坑の地として活況を呈したが、過酷な強制的労働に加えマラリアの蔓延に苦しめられるという辛酸をなめた歴史を持っている。

今回の調査地となった祖納半島は、西表島の北西側に位置する。祖納岳を後方に三方の海を見渡すことが出来る格好の場所にあり、半島西側には天然の良好な入り江が発達している。恵まれた立地条件により、昔からこの半島の利用価値はきわめて大きかったものと推測され、文献のいくつかにその様子をうかがい知ることができる。

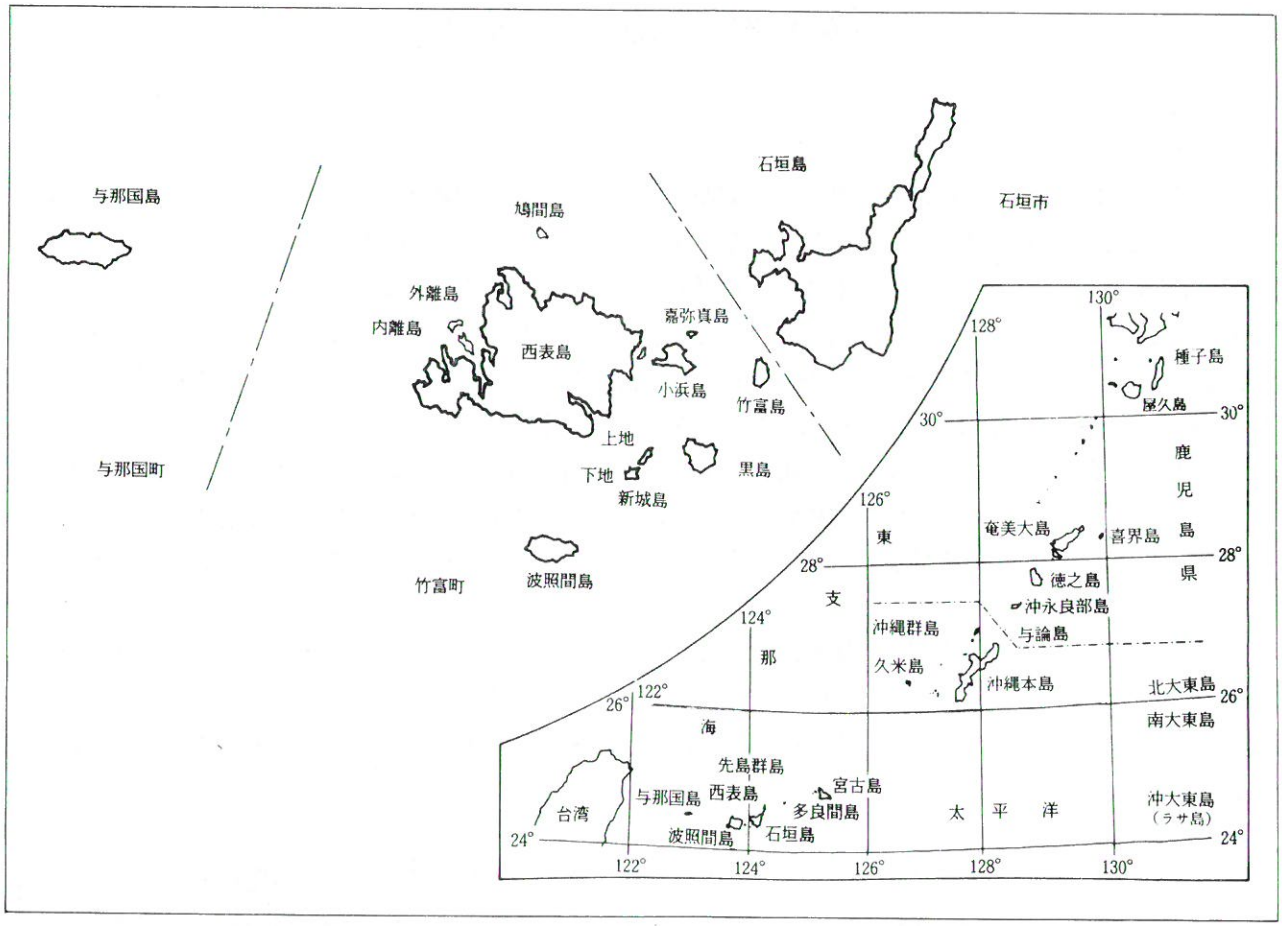
『竹富町・与那国町の遺跡』（1980）には、竹富町内に点在する100ヶ所以上の遺跡のうち、西表島については現在のところ32ヶ所の遺跡が報告されている（第１図）。それによると、「慶来慶田城遺跡」は、祖納半島にある大規模な集落遺跡で、八重山編年Ⅲ期（早稲田編年）に相当する遺跡と捉えられ、半島北側の大竹祖納堂儀佐屋敷跡周辺は鍛冶に関連する遺跡として報告されている。この地は、海上交通の便の良さからしばしば事件も起きており、慶田城統治時代にはオランダ船が盛んに往来し、難破船の救助・薪水の補給を行ったことが『慶来慶田城由来記』に記述されている。

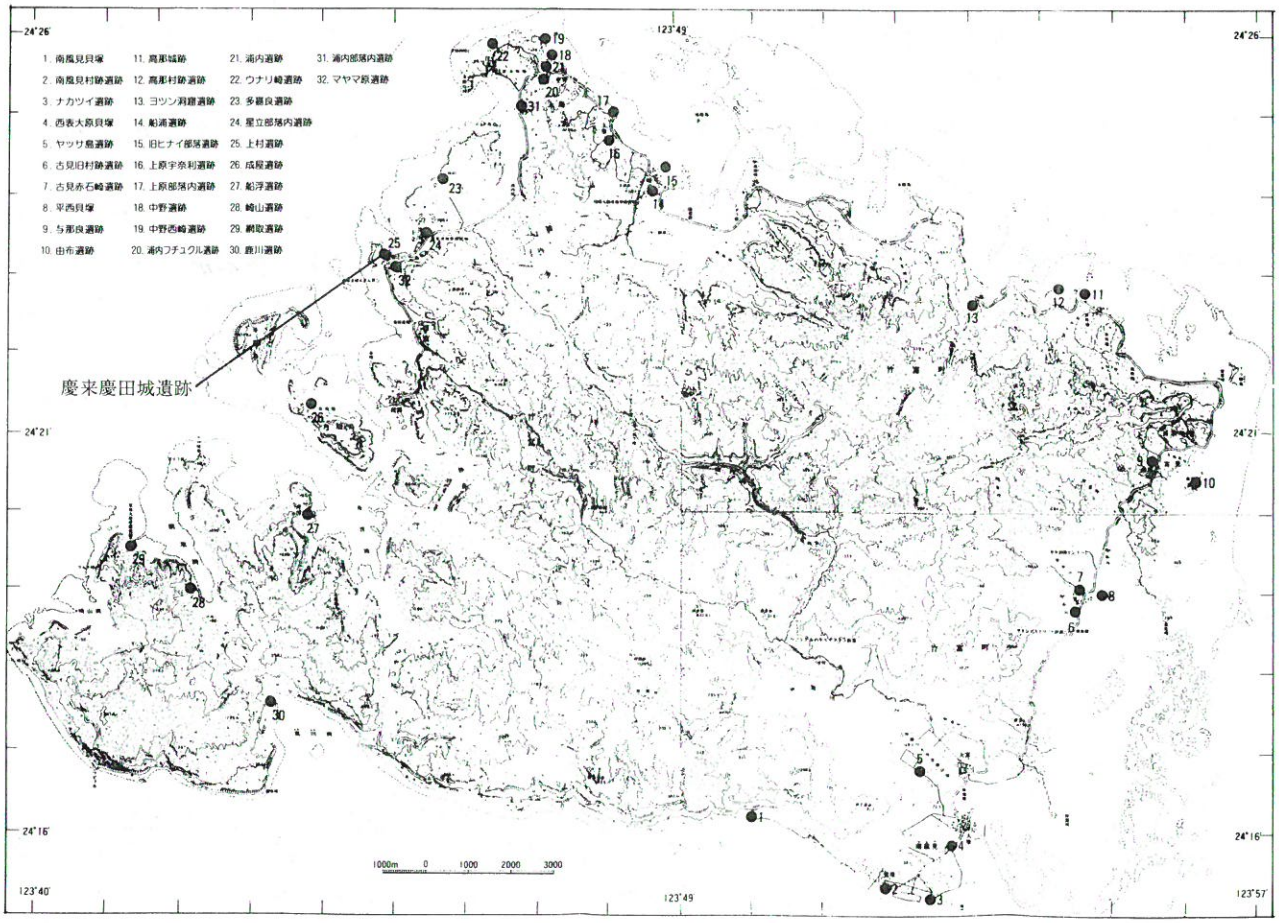
このように、幾多の歴史が展開してきたこの半島には、二人の伝説上の人物が存在する。その一人が前出の大竹祖納堂儀佐（おおたけそのどうぎさ）である。彼は村建の中心的な人物で、この地に鍛冶技術を伝えたとされ、与那国島の発見などでもその名が知られている。しかし、彼に関する文献資料等が皆無に等しいため詳細は不明である。「祖納」という現集落名は彼の名に因んでいる。そしてもう一人の伝説的人物が、王府時代の役人（首里大屋子）となり、祖納半島を含む西表西部を統治・支配してきた慶来慶田城用緒（けらいけだぐすくようちょ）である。彼は、今回の調査の対象地となった慶田城村を形成し、数々の業績を残して村の発展に寄与している。祖納半島が西表西部の中心となる地位を占めることとなったのは彼の活躍によるところが大きい。

さらに近・現代における祖納半島の状況について見ると、かつての集落であった上村から現集落への移住が開始され、昭和10年頃には移住が完了している。やがて戦争の波が半島にも押し寄せることとなり、昭和16年の太平洋戦争勃発時には日本軍部によって半島全域が強制的に接収されてしまう。そのため、現在でもこの半島の大半は「軍用地」となっている。一部、わずかにその合間をぬって狭小な畑地が散在し、野菜や牧草などが植えられているが、多くは野放し状態の荒地となっている。

参考文献

沖縄県教育委員会　新納義馬　『西表島の自然環境Ⅰ』「西表島天然記念物緊急調査報告Ⅰ」　1983年
沖縄県教育委員会　『上村遺跡重要遺跡確認調査報告』　1991年
角川書店　『角川地名事典　沖縄県』　昭和63年





第１図　上：西表島の位置図

下：西表島の遺跡分布図

第Ⅲ章　調 査 概 要

1．調査区の設定

今回の調査では、「慶来慶田城翁屋敷跡」（町指定史跡）とそれに隣接する「伝鍛冶屋跡」、18世紀に薩摩在番が駐在したと伝えられる場所の遺構確認および「慶来慶田城翁屋敷跡」の周辺から半島の南側に至る屋敷跡の測量を行った。それぞれの調査地区はかなりかけ離れている屋敷跡のため、調査の便宜上、町指定史跡である屋敷周辺をⅠ地区とし、それをさらに「慶来慶田城翁屋敷跡」と「伝鍛冶場跡」とに分けた。また、半島を一周する現農道から南側のフチコにつながる道沿い周辺をⅡ地区とし、「伝薩摩在番跡」として調査を進めた。発掘地の掘り下げについては屋敷囲い石積の長軸に準じてグリット設定を行った。そのため、Ⅰ地区とⅡ地区とのグリットの基本ライン（方向）は異なっている。前述したとおり祖納半島のほぼ全体が旧陸軍省（現営林署）の国有地となっていることから、発掘調査地は地権者の理解・協力の得られる私有地を対象として進めることとなった。現在、Ⅰ地区の「慶来慶田城翁屋敷跡」は宮良用奉氏、「伝鍛冶屋跡」は石垣全彦氏、Ⅱ地区の「伝薩摩在番跡」は松山忠夫氏の私有地となっている。

尚、今回の調査地は「慶来慶田城翁屋敷跡」を除き、伝承や推測とされる場所であるため、「伝鍛冶屋跡」「伝薩摩在番跡」と記述するべきであるが、今回の報告では調査・整理における作業の便宜上、第Ⅳ章（遺構・遺物）以降の本文や観察表では「伝」の文字を省き、「鍛冶屋跡」「薩摩在番跡」と記述することとした。

2．調査の方法

第一次調査において、半島の南側に約80本のトラバー杭を打ち込んだ。その杭を用い屋敷跡の長軸にほぼ並行する形でグリット設定を行い、発掘と測量を開始した。Ⅰ地区は、トラバー杭№10と№12を結んだラインを主軸とし、南側に向けてグリット設定を行った。東側から西側には１２３……の算用数字を、南側に向けてはＡＢＣ……のアルファベットを用いてグリットを組んだ。Ⅱ地区は、トラバー杭№29から№62のラインを主軸とし、南側にグリットを設定した。両地区とも基本的には４ｍ×４ｍのグリットによる遺構調査であるが、必要に応じて範囲を拡張し、遺構の検出作業を行った。

Ⅰ地区の「慶来慶田城翁屋敷跡」「伝鍛冶屋跡」については、両屋敷跡が隣接することから、グリットを延長して発掘を行った。「翁屋敷跡」では、屋敷中央と石積の一部を、「伝鍛冶屋跡」では、樹木が植生していない掘り下げ可能な場所である屋敷東側の発掘を行った。また、一部のグリットでは玉や穀物などの小さな遺物の検出のために洗浄作業をこころみた。

Ⅱ地区の「伝薩摩在番跡」では、建物跡の確認のため屋敷内のほぼ中央部と屋敷門の推定される東南隅の掘り下げを行い、遺構の検出に努めた。

3．発掘地の状況

なお、今回の調査で検出された遺構および遺物に関する考察について、より一層の理解を促すため、ここでは調査地区に関する歴史的背景や現状等についての概要を記述する。

慶来慶田城翁屋敷跡

慶来慶田城用緒の居住地として、現在、竹富町の史跡指定を受けている屋敷跡である。半島のほぼ中央に位置し、周辺の道より一段高い構築で屋敷内への階段が設けられている。面積は約750㎡を測り、周辺屋敷の中でも広い方に含まれる。石積みは高い箇所で約180㎝を測り、一部崩れてはいるが残存状況は良い方である。東側に屋敷門があり、屋敷を境に石畳（元石段）が現集落へ向かって延びている。この石畳道は、屋敷の北側を通る幅約２ｍの道へ続いている。かつてこの路上では綱引きが行われていたと伝えられている。前述したように、昭和16年頃には半島全域が軍事上重要な場所として日本軍部に没収されている。屋敷門へと続く石畳道を登りきった

場所には兵隊が門番として見張りに立っていたため、当時村人は半島内への出入りが許されなかったとのことである。さらに、石畳道はかつて石段であったが、戦時中の軍部駐屯に際し、手押し車等による軍事物資の搬入等のため階段が取り壊され、畳道に築造されてしまったとのことである。現在、階段状の面影を僅かに残す場所が一部認められる。

本屋敷は、近年まで畑として使用されており、広範囲に攪乱を受けていた。

伝鍛冶屋跡

慶来慶田城屋敷跡の西側に隣接している屋敷跡で、現在は石垣全彦氏所有の土地となっている。屋敷の規模は、慶来慶田城屋敷跡に比べるとかなり狭く面積は約150㎡である。石垣氏によると代々この地は鍛冶屋跡と伝承され、畑としての使用を禁じられていたとのことであった。そのため、遺物・遺構の保存状況は極めて良好で、小範囲の発掘ではあったが多くの復元土器や遺構が検出され、多大な成果を得ることができた。

屋敷北側の石積みは慶来慶田城屋敷跡からの延長であるが、積高約70㎝と極端に低くなり、石積みの高さに変化が見られる。屋敷西側ではこの石積みは見られなくなるが、隣接する６号屋敷と約100㎝の高低差があり、両屋敷の境界を示している状況となっている。以上の形態を考慮に入れ、屋敷門の位置を確認するため石積みの観察を試みたが、明確に門と確認できる場所の決定には至らなかった。しかし、門のない屋敷の存在は考えられず、屋敷の南隅側には約200㎝×約150㎝のフールと思われる石積みが確認されていることから、隣の慶来慶田城翁屋敷跡との連立屋敷形態で通用門が設けられていた可能性が推測される。今回の調査では時間的な都合上、両屋敷を区画する石積みでの門の確認には至らなかった。フール跡上面にはパナリ焼と湧田の灰釉陶器が確認できた。

この地は鍛冶屋跡であると伝えられていることから、鍛冶に関する遺構・遺物の検出が期待されたが、明確に鍛冶関係とわかる資料の検出は認められなかった。今後、さらに広い範囲の調査が必要である。

伝薩摩在番跡

半島南端部のウカリ村の一画に位置し、西南側の海を見渡すことのできる絶好の地で、かつて17世紀中頃には薩摩在番が置かれていたと考えられる場所である。この屋敷は、ウカリ村の中でも広面積を持ち、また古地図等に階段をうかがわせる構造物を持つ屋敷として描かれていること、さらに付近から薩摩藩を示す十文字の刻まれた印判が表採されたとの話もあることなどから、特別な意義のある屋敷跡ではないかと推定された。そのため、薩摩による異国船監視に関する資料の検出や在番の所在地確定への期待が大きいことから、この地を調査の対象として発掘を進めた。

さらに、伝薩摩在番跡周辺には近世・近代に使用された生業の痕跡がいくつか見られる。その一つに、塩づくりが行なわれていたという場所があり、２カ所見られる。１カ所が海面上に突出したマスソーヤと呼ばれる平らな岩盤である。そこに打ち上げられた海水が直射日光と風を受け水分の蒸発を促されるという自然現象によって、夏場にはこの岩盤から天然の塩を得ることができたということである。また、海岸線に面する岩陰には、海水を直接焚いて塩を取り出した窯場跡も残っている。

他に、在番跡から東側の海岸沿いには生活用水確保のための井戸（インガー）が存在する。この井戸へ至る坂道の途中に、小さな石橋と地盤である砂岩を人工的に掘って造られた階段があり、素朴ながらも見る者に感動をあたえる。古老からの聞き取り調査によると、この地での生活では、井戸からの水汲みが女性たちの毎朝の日課であり、坂道の往復を余儀なくされる大変な仕事であったという。

慶来慶田城用緒に関連する場所

フチコ

今回の発掘地である伝薩摩在番跡地から約100ｍ離れた半島南側海岸縁に、地元でフチコと呼ばれる場所がある。慶来慶田城用緒が「慶来慶田城翁屋敷跡」（町指定）に移る以前に居住していたと伝承され、海岸のすぐ縁に位置することから、打ち寄せる波の音にいらだたしさを覚え、やがて半島中央部へと移住したという興味深いエピソードも残っている。

このフチコには、大きい石灰岩盤が露出している。その岩面には円形状の幾つかの穴が点在しており、地元では溜井戸跡および竈跡と伝承されている。

今回の調査では、時間的な都合上この地まで調査することは出来なかった。

外離島（ソトパナリ）

祖納半島南西海上に位置する島である。慶来慶田城用緒が半島へと移住し、西表西部を統治する以前に居住していたと伝えられる場所である。つまり、外離島は用緒が西表へと足を踏み入れた最初の居住地にあたるわけであり、後に対岸である祖納半島に移住してきたということになる。

今回、外離島へは踏査のみに留まったものの、前述のフチコと並び外離島も慶来慶田城遺跡群に関する資料収集の際には、必ず調査を行わなければならない場所である。

４．調査の経過

平成５年度（1993）

調査最初の年は、８月10日から９月10日の伐採作業と平成６年１月11日から21日までの期間行われた。

まず、慶来慶田城翁屋敷跡を中心に伐採作業を開始し、半島の南側縁まで及んだ。伐採終了後、19号屋敷の№１番杭を始めとして半島南全体を覆うようにくまなく杭を打ち込み、半島中央付近にあるアーラ道から慶来慶田城翁屋敷北側にかけての測量を行った。その後、屋敷跡の写真撮影を行い調査を終了した。

平成６年度（1994）

本年度の調査は、発掘を中心に８月15日から９月30日までの期間行われた。

最初に慶来慶田城翁屋敷跡（町指定）の屋敷内の伐採作業を行い、前年度に設定したトラバー杭の№10と№12とを結ぶラインを基準線とする４ｍ×４ｍのグリットを設けて発掘を開始した。表土を剥ぐと第Ⅱ層が現れたが層厚は約20～30cmと薄く、すぐに地山に達した。また、近年まで畑地だったことから全面にわたって攪乱を受けており、屋敷内での遺物包含層や遺構の検出はなかった。屋敷縁辺部（石垣内側）付近には包含層が残っている可能性があったため、小グリットを設けて掘り下げを行ったが、そこでも包含層の確認はできなかった。この段階で屋敷内の調査を終了した。

続いて、翁屋敷跡に隣接する伝鍛冶屋跡の調査に入る。伐採作業を進めたところ中央部に約２ｍ四方の方形状の石組みが露出した。そこで、翁屋敷跡からグリットを延長して、表土を掘り下げたが、調査期間後半であったため遺構の上部検出のみに留まった。

さらに、発掘調査と並行して祖納半島一帯の踏査を行い、井戸や製塩跡等の生活跡の確認と、ガラス製玉や石器等の遺物を採集した。

平成７年度（1995）

本年度は、西表島の豊年際の終了を待ち、８月８日から９月８日までの約１ヶ月の発掘調査と11月13日から24日までの２週間の測量調査を行った。

発掘調査では昨年に引き続き、Ⅰ地区の伝鍛冶屋跡から開始した。伐採作業と仮埋土の除去を終えた後、前年度に検出された方形状石組み遺構の性格等を確認するため第Ⅱ層からの掘り下げを行った。時間的都合で遺構内

部の調査は次年度に持ち越すこととなったが、周辺から幅10～15cm、深さ10～15cmの円形状のピットを７ケ所検出することができた。ただ、そのうちの幾つかは木根と考えられるものもあり、明確に柱穴と判断するまでには至らなかった。ここで特筆される遺物として、鹿角を使用したヤスが第Ⅲ層より出土している。次に、調査区内の堆積状況を見るため、北側の木々の隙間に１ｍ×２ｍのトレンチ（Ｃ－７）を、南側には２ｍ×４ｍ（Ｇ－８）をそれぞれ設け掘り下げた結果、地山の傾きが北から南側にかけて見られ、約２ｍの高低差があることを確認した。両グリットでの遺構の検出はなかった。

また、伝鍛冶屋跡の発掘と並行してⅡ地区の伐採作業を行った。伝鍛冶屋跡の掘り下げ終了後に、伝薩摩在番跡にトラバー杭№29と№42の結線を基準としたグリットを設定し、屋敷中央付近および屋敷門の存在が考えられる東南隅での遺構の確認・検出を開始した。その結果、中央グリットでは一部地山（赤土）まで達し、３ケ所のピットが、東南隅においては石敷遺構とそれに伴う階段遺構を検出することができた。

その後、11月には伐採作業と慶来慶田城翁屋敷跡の西側屋敷石垣の追加測量を行い、調査を終了した。

平成８年度（1996）

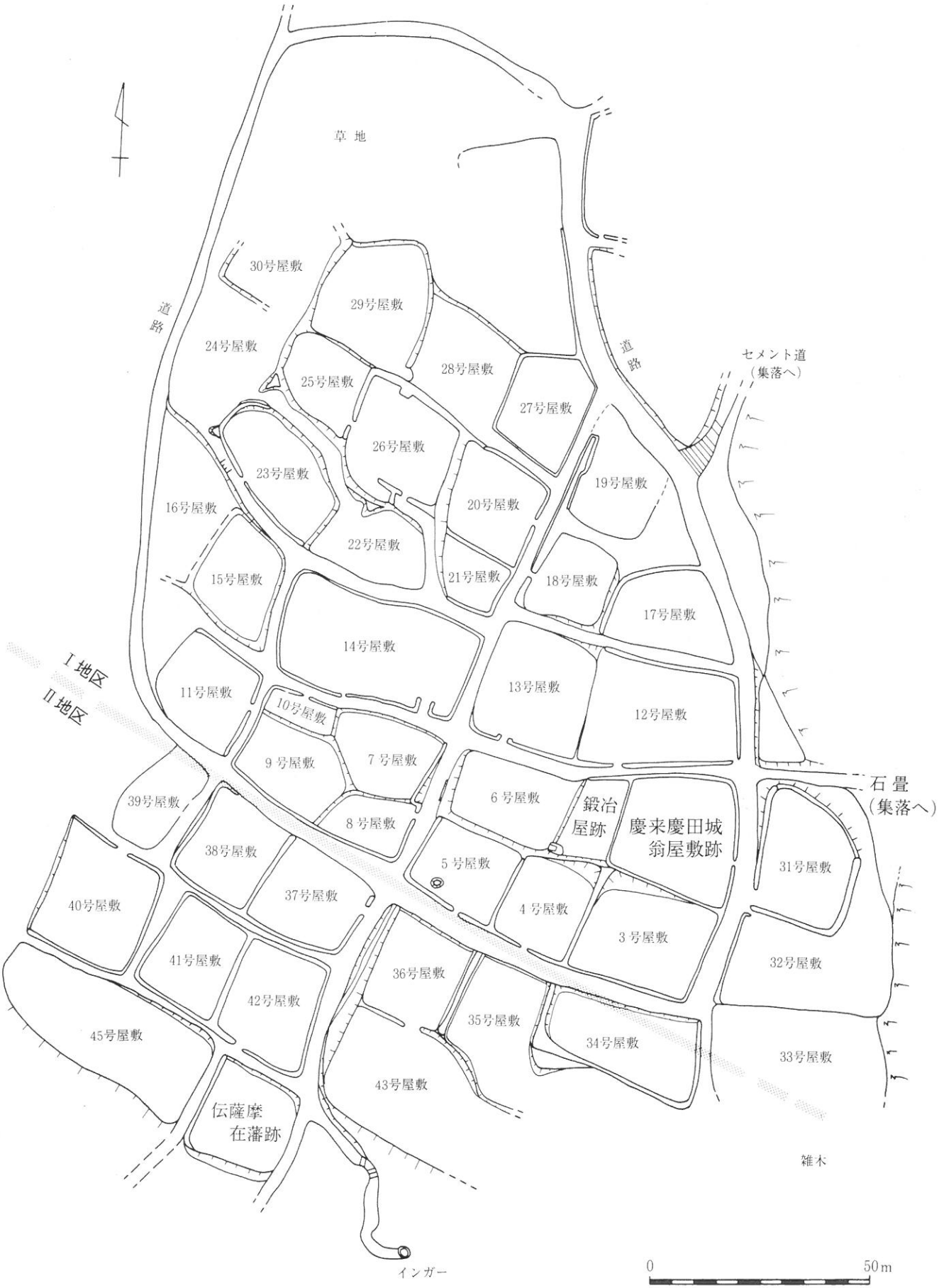
本年度は、８月19日から10月５日までの３週間の発掘調査と11月25日から12月６日までの測量調査を行った。

今回の発掘調査は、Ⅱ地区の伝薩摩在番跡を中心に行ったが、発掘は相次ぐ台風と雨に悩まされ、予定していた調査期間を大幅に越えることとなった。さらに、前年度確認できなかったⅠ地区での伝鍛冶屋跡の方形状石組遺構内部についての追加調査を実施した。

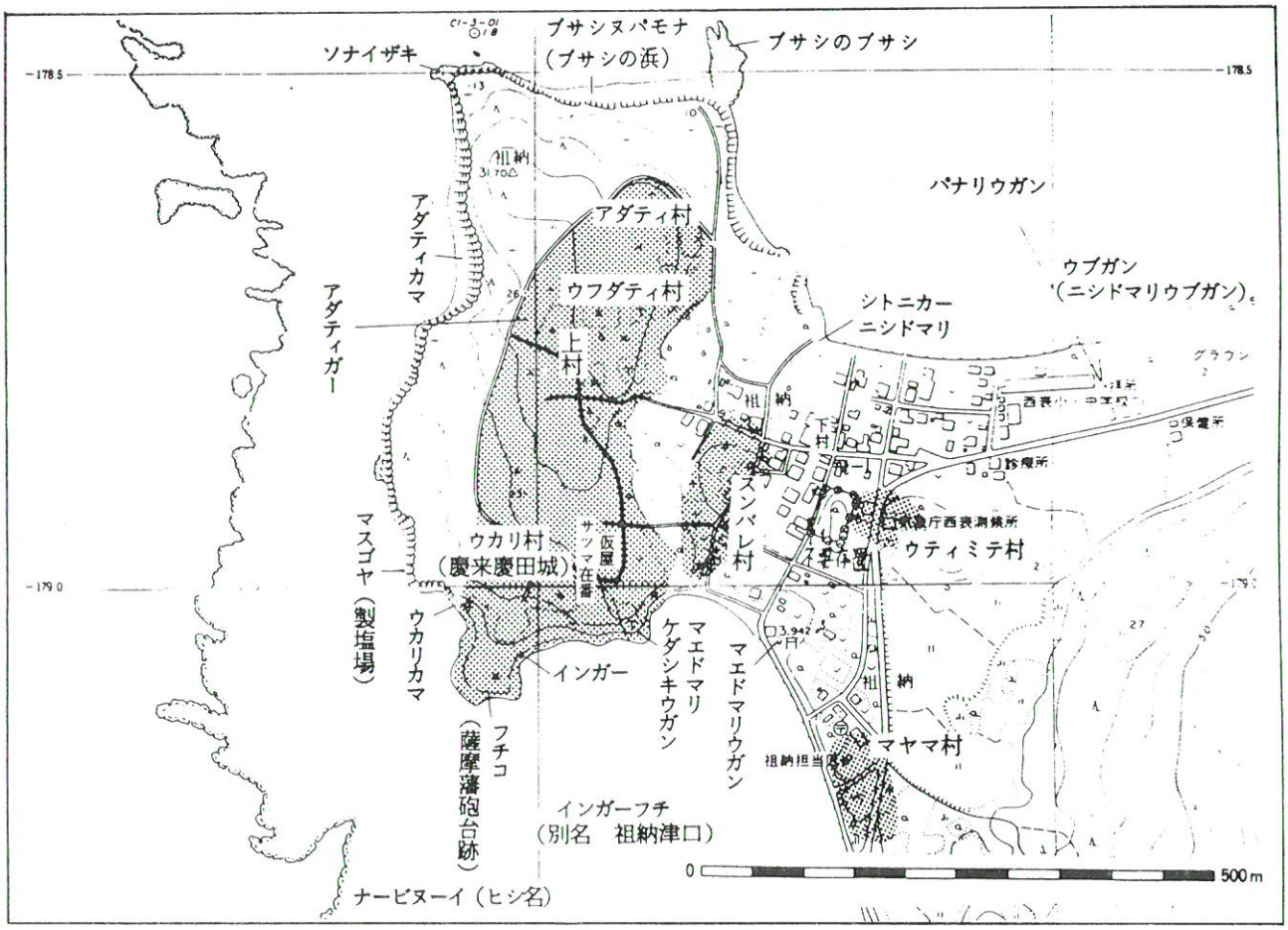
まず、伝薩摩在番跡では、昨年度途中で切り上げたＤ－５グリットの東半分（西半分は終了）の地山面および遺構確認のため掘り下げを進めた。その結果、地山まで達するのに予想外の時間を要したが、遺物を多く含む幾つかの堆積層があり、復元土器や集石遺構等が検出された。次に、建物跡検出のため、屋敷内の東側にＣ－３グリットを新たに設けて掘り下げを行った。さらに、Ｄ－３グリットの北側一部まで調査範囲を広げたところ、27ケ所のピットが検出され、建物跡に関する幾つかのプランを押さえることができた。また、前年度に検出された石敷・階段状遺構の南側への延びを確認するためにＦ－１・２の掘り下げを行った結果、階段状遺構の延びを検出することは出来なかったが、東西両側に延びる石垣を検出するに至った。他に、伝薩摩在番跡屋敷南東側の小屋敷跡の斜面で鉄滓等が表採されることから、関連遺構を確認するため１ｍ×３ｍのトレンチを新たに設け掘り下げたが、時間的余裕がなく表土層の剥ぎ取りにて終了することとなった。

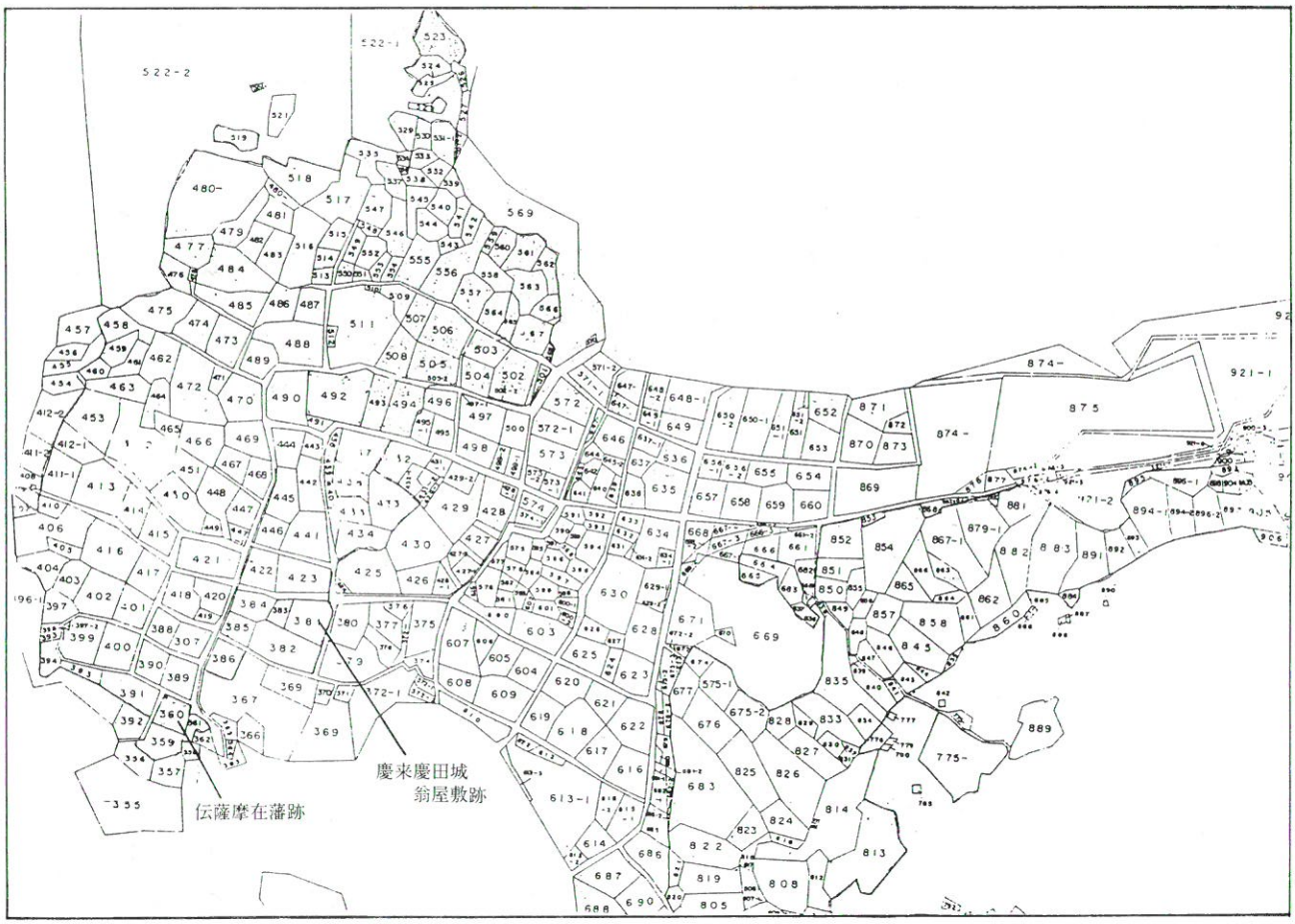
後半の発掘調査では、Ⅰ地区の伝鍛冶屋跡における方形状石組遺構の性格の把握に努めた。はじめに遺構上面の清掃を行ったところ、すぐに西隅からガラス玉が出土したことから墓の可能性が考えられた。そこで拳大から頭大の石を取り除きさらに掘り下げた結果、遺構東半分より上腕骨・尺骨・歯などの人骨が検出され、遺構が墓の可能性が高いと判断された。しかし、今回の調査では共伴遺物の検出が確認できず、年代の決定には至らなかった。今後の追加調査を待ちたい。

その後12月には、方形状石組遺構の追加実測と平板測量を行い、本遺跡の調査を終了した。


草地
道路
道路
セメント道
(集落へ)
石畳
(集落へ)
30号屋敷
29号屋敷
24号屋敷
25号屋敷
28号屋敷
27号屋敷
26号屋敷
23号屋敷
19号屋敷
16号屋敷
20号屋敷
22号屋敷
15号屋敷
21号屋敷
18号屋敷
17号屋敷
14号屋敷
13号屋敷
12号屋敷
11号屋敷
10号屋敷
9号屋敷
7号屋敷
6号屋敷
8号屋敷
39号屋敷
鍛冶
屋跡
慶来慶田城
翁屋敷跡
38号屋敷
5号屋敷
31号屋敷
40号屋敷
37号屋敷
4号屋敷
3号屋敷
41号屋敷
36号屋敷
32号屋敷
42号屋敷
35号屋敷
34号屋敷
45号屋敷
33号屋敷
43号屋敷
伝薩摩
在藩跡
Ⅰ地区
Ⅱ地区
雑木
インガー
0
50m

第2図　屋敷配置図





第３図　上　祖納半島の歴史地図

　　下　祖納半島の地積図

第Ⅳ章　遺構と出土遺物

Ⅰ 地 区

Ⅰ地区での調査は、既述したように、伝説的英雄である慶来慶田城用緒が居住していたと伝えられる地で、現在、竹富町の史跡指定を受けている「慶来慶田城翁屋敷跡」と、その西側に隣接し、鍛冶が行われていたと伝承される「鍛冶屋跡」の発掘を行った。以下、両屋敷の層序・遺構について記述する。

1．慶来慶田城翁屋敷跡

本場所は近年まで耕作が行われていたことから、土層の堆積土も薄く、地山面まで攪乱を受けており、遺物のほとんどが小破片で遺構も検出されなかった。

第４図　翁屋敷・伝鍛冶屋跡の発掘地

(1) 層序（第５図）

Ⅰ層：草の根などの多く含まれる黒色の表土で、約５cmの厚さを有する。遺物は耕作により細かく砕け、土器片や陶磁器片に混ざり現代遺物が出土する。

Ⅱ層：細粒砂岩の風化土した黄褐色土層で、約20～30cmの厚さを有する。水分を含みやや堅くしまった土層である。遺物も多く、土器片を中心に陶磁器片、ガラス玉や現代遺物が出土する。上層と同様にほとんどの遺物が細かく砕けている。

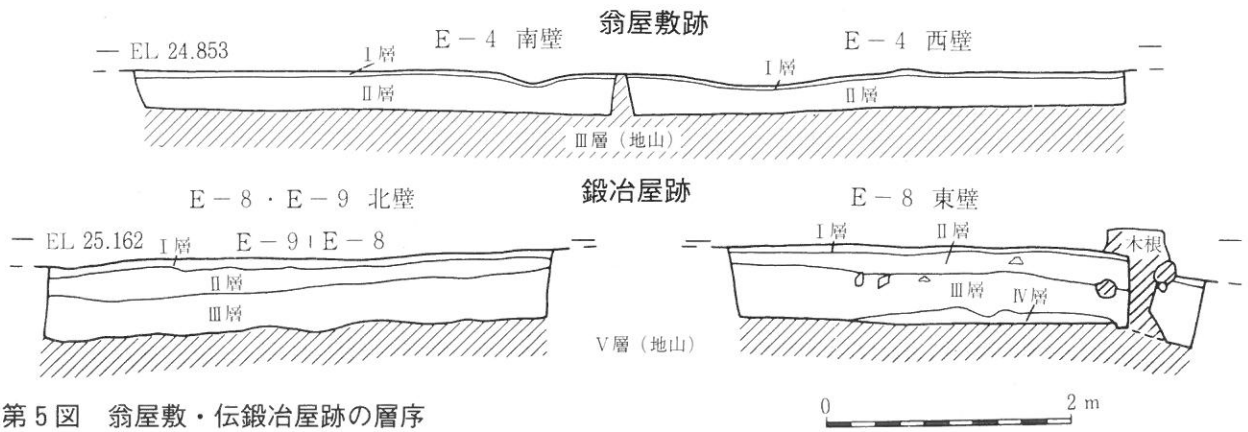
Ⅲ層：細粒砂岩の地山で、非常に堅く締まっている。上面には耕作の際の鍬痕が残っていた。

2．鍛冶屋跡

堆積土は砂質の細かい土である。地山は全面的に細粒砂岩が占めているが、屋敷内南側一部には風化した赤土が見られる。Ⅰ・Ⅱ層上面から出土する遺物に関しては、隣接の慶来慶田城翁屋敷跡からの投げ込み遺物の混ざりがあり、幾つか接合する土器も出土している。 また、地山面には方形状石組遺構とピットが検出された。

(1) 層序（第５図）

Ⅰ層：本屋敷内の全面に認められる淡灰褐色土の表土である。近・現代遺物を含む土層で、平均的な厚さは約５cm前後の堆積である。前述したとおり、隣屋敷からの投げ込みがあり、大きめの土器等が表面に散乱している。本層を僅かに剥ぎ取ると方形状石組遺構の上部が姿を現した。

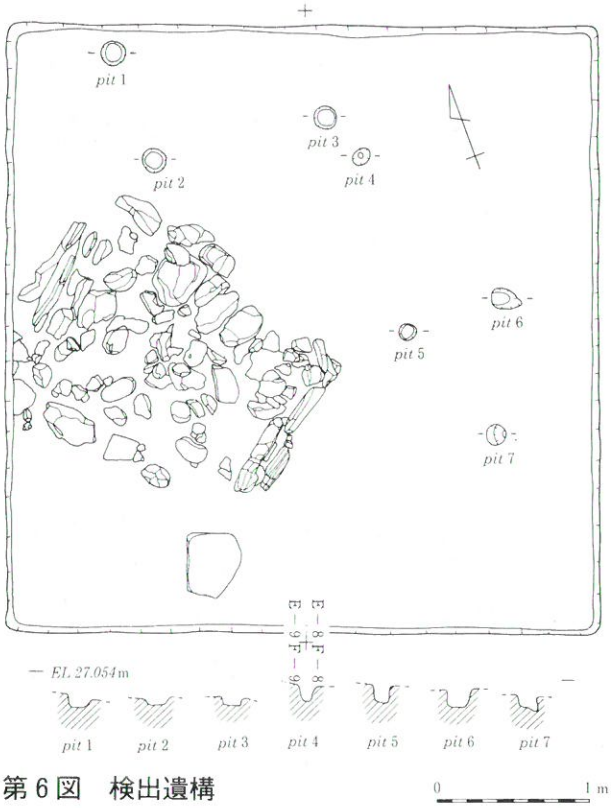


第５図　翁屋敷・伝鍛冶屋跡の層序

Ⅱ層：黒褐色土の包含層である。約20～30cmの厚さを有し、屋敷南側に向けて厚く堆積している。本層上部遺物には上層の遺物と接合する資料も見られる。遺物は土器、中国陶磁器が主をなし、東壁面（第５図、図版５の４）で青磁碗が確認できた。

Ⅲ層：Ⅱ層より少し黒みの強い暗黒褐色土の包含層で、約20～30cmの厚さを有する。比較的安定した土層で本屋敷の主体をなす層である。今回の調査では屋敷東側、方形状遺構の北東部での堆積が見られたが、方形状遺構の南部や屋敷内南側のＧグリットでは確認されなかった。遺物の包含量が多く、集中する形で出土しており、復元資料も多く得られた。中には、極めて珍しい骨製品であるヤスが出土した。

Ⅳ層：茶褐色土の無遺物層である。Ｅグリット南東隅に一部確認される層で、約10cmの厚さを有する。細粒砂岩の風化した土層だと考えられる。



第６図　検出遺構

Ⅴ層：細粒砂岩の地山である。層面に方形状遺構やピットが検出された。

(2) 遺　構

１．慶来慶田城翁屋敷跡

地山まで耕作による攪乱を受けていることから、明瞭に遺構と思われるものは確認できなかった。屋敷を取り囲む石積みの多くは崩壊しているが、一部は良好に残っている。石積みは、その構築方法に違いが見られることから、何度か修理を行ったことがうかがわれる。

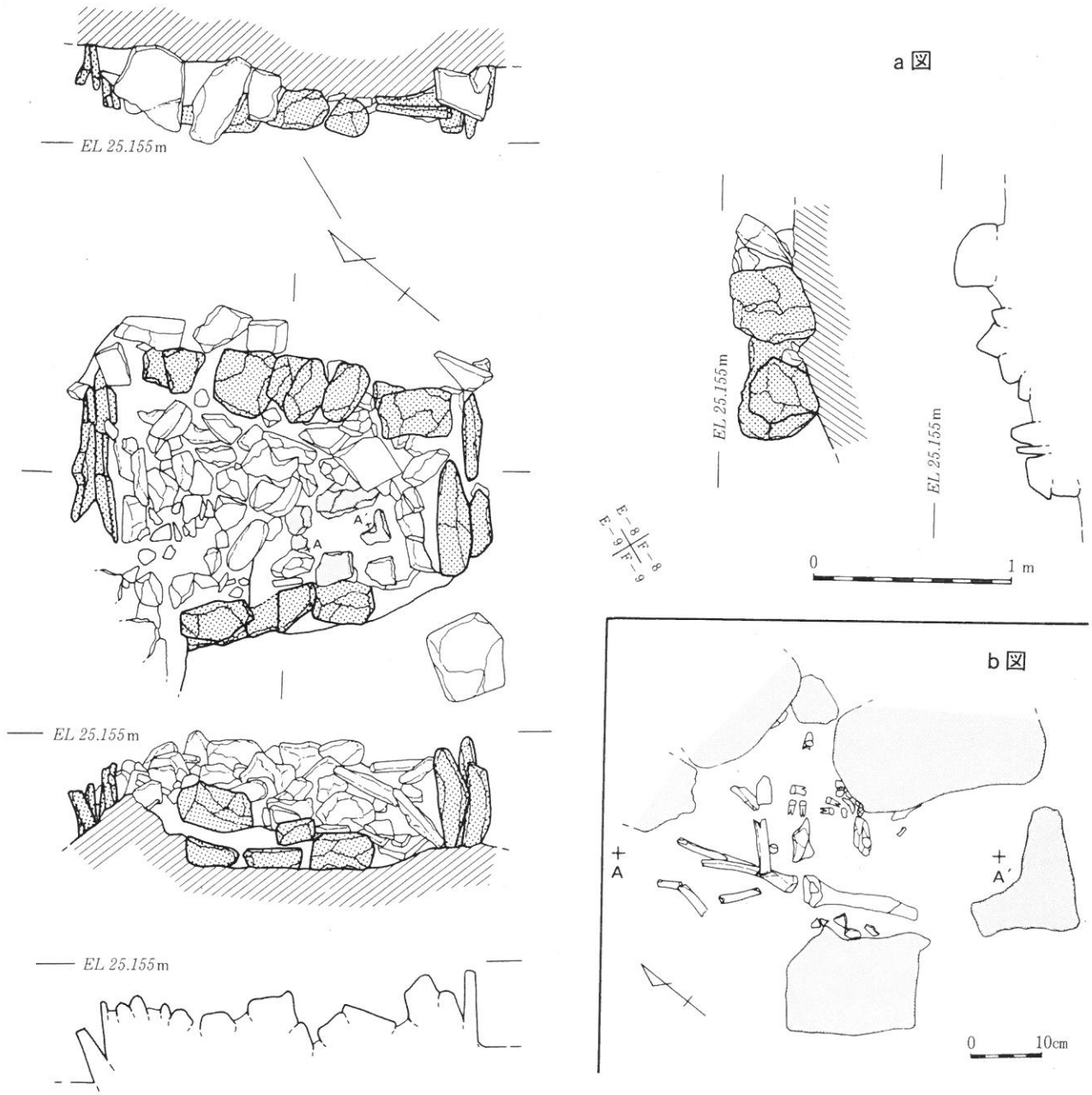
２．鍛冶屋跡

・方形状石組遺構（第６図・第７図）

Ｅ－８で検出された方形状の遺構である。砂岩（約20～30cm）と板石とを組み合わせたもので、緩斜面に構築され、明確な掘り込みは確認し得なかった。平面形は長方形を呈し、長軸約220cm・短軸約150cm・最大高約40cmを測る。北・南部を30cm前後の砂岩、東・西部を約40cmの板石を用いて四面を囲んだ箱形の様相を窺わせる遺構である。内部上には砂岩礫やサンゴ礫などが不規則に散在している状況であった。上部の面掃除を行った際にガラス玉、鉄釘が検出された。遺構の性格把握のため東側の半割を行った結果、７本の歯を含めた人骨（上腕骨など）を検出した。先に記した遺構内の西隅上部で確認されたガラス玉が供献品とも考えられることなどから、この遺構は墳墓の可能性が高いと推定される。現時点では、掘り下げ範囲の小さいこと、遺物の共伴が無かったことから構築時期等については不明である。なお、人骨の鑑定は、土肥直美氏、北條真子氏（琉球大学医学部解剖学第１講座）に依頼した。分析結果については後述する。

・ピット群（第６図）

Ｅ－８・９の方形状石組遺構の北東側で７ヶ所のピットが検出された。殆どが円形状のピットで、平均幅約10cm、深さ約10cmを測る。細粒砂岩である地山直から掘り込まれたもので、暗黒褐色土が入り込んでいる。掘り下げ範囲が狭いことから平面的プランがつかめず、また、屋敷内に何本かの木々が植生していたことから、木痕と考えられるピットもあり、明確に遺構としての把握には至らなかった。しかし、これらのピット群の検出が方形



第７図　a　方形状石組遺構
　　b　人骨出土状況

状石組遺構の北側に点在している傾向を示すことから、遺構と何らかの関連が推測される。

小　結

Ⅰ地区の鍛冶屋跡地においては、上記のように興味深い遺構が検出され、小範囲の発掘ではあったが多大な成果が得られた。

方形状石組遺構は、検出状況から墳墓と推定したが、同様の構築形態を持つ遺構の類例報告を他に見ないことから、初めての報告となる可能性がある。人骨は安置後に土を覆い、その上に掌・拳大の砂岩が押し込められていた状況の下で検出された。人骨分析については、後に述べる土肥直美氏のコメントを参照されたい。また、この遺構北側では鹿角製のヤスが出土しており、遺構と何らかの関係が推測される遺物として注目される。

ピット群に関しては、方形状石組遺構の周辺の発掘によって、より明確にすることが可能であるが、今回の調査では範囲を広げた発掘には及ばなかった。今後の調査を待ちたい。

(3) 出土遺物

本遺跡から、土器や陶磁器等の人口遺物と自然遺物を含めて、総数22507点が検出された。なかでも土器は殆どが「八重山式土器」の範疇に含まれるもので、多くの復元土器を得ることができた。青磁は鎬蓮弁文碗の古手から線彫細蓮弁文碗の新しいものが検出されているが、15世紀後半から16世紀代が主体となっている。他にも白磁・染付や滑石製品など多くのバリエーションが見られる。特筆される遺物として、中国景徳鎮の宜興窯産の褐釉水注破片と鹿角製のヤスがⅠ地区の「翁長敷跡」と「伝鍛冶屋跡」から出土している。

第1節　土　器

本遺跡の出土遺物の主体をなすものである。出土量が多く、鍋形と壺形・浅鉢の土器が確認された。なかでも鍋形土器が圧倒的に多く出土し、そのほとんどが平底を呈しているが、丸味を帯びると推定される底部が数点出土している。復元資料により全体の器形が確認できるものが数多く含まれており、その中には煤の付着した煮沸容器と考えられる物も含まれている。それらの土器は、いわゆる「八重山式土器」と呼ばれる土器の範疇に含まれるものである。

分類に関しては、器形と時間的位置づけを考慮した。また、遺跡の時代的特徴・様式等の比較のため、同半島内北側の上村遺跡の分類に準じ、口縁形態・器面調整等で分類を行い、必要に応じて細分した。壺形土器は復元資料がなく、底部については不明瞭であるため、大きめの口縁部についての分類にとどまった。胴部・頸部については、傾きや壁面の厚さ等で壺として分けた。

以下、両地区出土の分類概念を記述し、各地区別に観察一覧を呈示する。

分類概念

鍋形土器

鍋形土器については口縁形態等から、Ⅰ～Ⅴ類に分類し、必要に応じて細分を行った。いわゆる「八重山式土器」の範疇に押さえられるもので、両地区（Ⅰ・Ⅱ地区）で13点の復元土器が得られた。分類の基準は復元土器や分類上必要な資料で分類を試みた。

Ⅰ類

Ⅰ類は、直口する器形で平底を主体とする土器群（類）である。僅かに内彎・外反する土器も含まれる。

今回の調査では、Ⅰ地区で２点・Ⅱ地区で５点の復元土器が得られた。

Ⅱ類

Ⅱ類は、直口状の外傾する器形の逆「八」の字状に広がる土器で、平底を主体とすると思われる。僅かに外反する土器も含まれる。

今回の調査では、Ⅰ地区で１点の復元土器が得られた。

Ⅲ類

Ⅲ類は、Ⅱ類と類似する器形で逆「八」の字に広がる。口縁部で緩やかに外反する土器で平底が主体であるが、丸味の底部が考えられる土器も若干であるが見られた。

今回の調査では、Ⅱ地区で２点の復元土器が得られた。

Ⅳ類

Ⅳ類は、緩やかな膨らみをもって外傾する器形で、口縁部で僅かに内彎する。内彎する位置によって細分した。口縁近くから内彎するものをⅣ類ａ、耳部付近からの内彎をⅣ類ｂとした。口縁端部近くを凹線状に仕上げられているものも含む。丸味の底部が考えられる。

Ⅴ類

Ⅴ類は、外傾する器形で、口縁部が肥厚する土器である。今回の調査では検出出来なかった。

Ⅵ類

Ⅵ類は、浅鉢もしくは小振りの碗と見られる資料である。Ⅱ類同様の逆「八」の字に広がる形態であるが、器高が低く、小振りな事からⅥ類に分類した。

外耳については上記の復元土器などの分類に適用させ、外耳形態の特徴的な物を抜き出して図示した。口縁形態（復元・接合資料）との対応の可能なものは比較を行った。ほとんどがⅠ類に含まれると考えられる。

鍋形土器の底部

形態上特徴的なものを図示した。復元土器と不安定であるが大破片の特徴によって分類を試みた。

上記の鍋形口縁形態の分類に準じる底部は、可能なかぎりその分類に適用させてみた。

Ⅰ類　平底で立ち上がりが直口すると推定される土器：口縁Ⅰ類に推定される。

Ⅱ類　平底で立ち上がりが外傾（緩い膨らみも含む）する土器：口縁Ⅱ～Ⅳ類に推定される。

Ⅲ類　丸味を帯びると考えられる土器：口縁Ⅱ～Ⅳ類に推定される。

壺形土器

鍋形土器に比べて出土量は少ない。小破片がほとんどではっきりとした形態を窺える資料が極めて少なく、復元土器の検出もなかった。口縁から肩部資料で分類を試みた。ナデ肩タイプの出土数が圧倒的で、イカリ肩タイプと思われる壺は数点しか得られなかった。ほとんどが小破片のため図示は省略した。

壺形土器は、口縁部形態からⅠ～Ⅲ類に分類した。

Ⅰ類　口縁部がきつく外反する土器。ナデ肩タイプを主体とする。

Ⅱ類　口縁部が緩やかに外反する土器。ナデ肩タイプを主体とする。

Ⅲ類　口縁部が直口状に立ち上がり緩やかに外反する土器。ナデ肩タイプを主体とする。

壺形土器の底部

復元資料がなく、明確に壺底部とする物が少なかった。鍋底部との区別のつけにくい資料がほとんどで、土器の集計では器壁の厚さ・調整などで一応壺として取り上げた。

第2節　パナリ焼

パナリ焼き総数277点が検出された。圧倒的に壺形の出土が多く、僅かに鉢形が検出された。角鉢のパナリ焼きは遺跡からの出土例が見られず、類似例としては八重山市立博物館に一点のパナリ焼が展示され、土棺として表記されている。出土したほとんどのパナリ焼きが焼成も良く、硬く焼きしまっている。また、一般で言われている貝類の混入の多い焼物ではなく、混入物は見る限りではかなり少ない。

以下、両地区出土の分類概念を記述し、地区別に観察一覧を呈示する。

パナリ焼の分類概念

壺形パナリ焼

壺については、大形の破片資料が多く出土していることから、分類は大型壺を対象に行った。口縁部の形態でⅠ類からⅢ類に分け、さらに肩部形からナデ肩、イカリ肩タイプに細分を行い分類を試みた。

他、縦耳を持つ小形壺も出土している。

口縁形態		肩部形態	
Ⅰ類	直　口　状	a	ナデ肩タイプ
		b	イカリ肩タイプ
Ⅱ類	緩やかに外反	a	ナデ肩タイプ
		b	イカリ肩タイプ
Ⅲ類	きつく外反	a	ナデ肩タイプ
		b	イカリ肩タイプ

鉢形パナリ焼

鉢形は出土数が少なく分類には至らなかったが、平面形から特徴的な２つの器形が見られた。

丸鉢形……無文のパナリ焼きである。１点の出土があった。(第10図15)

角鉢形……土棺と考えられる無文のパナリ焼きである。１点の出土があった。(第10図16)

底部資料

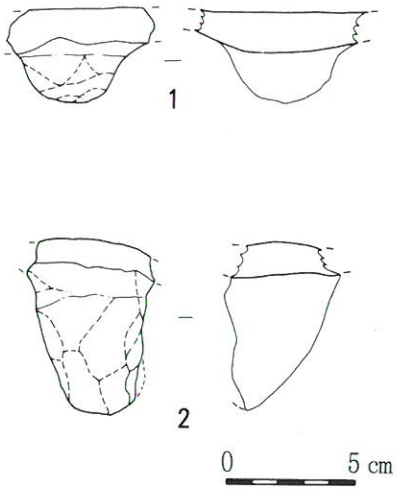
底部に関しては、口縁部・肩部と比較して極端に少ない出土量であり、分類までは至らなかった。

Ⅰ地区　パナリ焼

パナリ焼の脚部資料が２点出土している（第８図１．２）。両資料とも形態的に珍しい、検出資料の少ない資料である。鉢状のパナリ焼きも少なく、竹富島の喜宝院蒐集館に展示されているパナリ焼は、張り付け紋で装飾されているが、残念ながらこの資料には見られない。(第10図15)

第８図１（図版９の１）は、把手にも見えるが、火舎の脚部である。

第８図２（図版９の２）は、ツノ形で把手を思わせるが器種不明の脚部として取り上げた。両パナリ焼とも鍛冶屋跡表採である。



第８図　パナリ焼①

第1表　遺物出土状況

種類＼出土地	鍛冶屋跡						翁屋敷跡						薩摩在番所跡									不明	フチコ	合計
	表採	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	不明	小計	表採	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	不明	小計	表採	攪乱	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	不明	小計		表採	
土器	89	794	2384	1769	153	5189	38	299	481	97	69	984	7	1	162	713	3	389	536	106	1917			8090
パナリ焼	13	50	191	9	2	265			4		1	5				4		2		1	7			277
青磁	4	24	112	87	7	234	12	153	462	11	63	701	2		17	126	1	36	41	43	266			1201
白磁	5	22	38	15	4	84	1	84	251	2	38	376	0		6	21	0	0	3	3	33			493
染付	5	49	98	24	4	180	12	191	748	11	71	1033			20	66				29	115			1328
鉄釉染付			1			1						0				1					1			2
天目茶碗						0			1			1									0			1
茶入				2		2						0				1					1			3
緑釉陶器						0			7			7									0			7
赤絵		2	3	2		7		7	7		1	15									0			22
瑠璃釉						0			1			1									0			1
褐釉陶器	8	63	172	143	78	464	5	150	633	9	33	830	1		43	123	1	26	44	18	256			1550
水注（褐釉）						0		1	5	1		7									0			7
中国産無釉陶器		2	3	3		8		1	11	1		13				9				5	14			35
タイ産鉄釉						0	1		5		1	7									0			7
カムイ窯須恵器			1			1						0									0			1
本土産磁器	3	11	16	1	2	33	1	44	143		26	214			5	6				1	12			259
本土産陶器		5	20	10		35		12	46	3	11	72	1		2	5				1	9			116
沖縄産施釉陶器	6	71	114	11		202		68	264	2	1	335	2		24	80		1		1	108	60		705
沖縄産無釉陶器	30	119	157	30	6	342		533	1776	22	76	2407	2		36	54	1	2	2	15	112			2861
陶質土器		2	6	3	2	13		6	12	2		20			2	5					7			40
石製品・石器		2	1	2		5	1	3	4	1	1	10			3	1			1		5		1	20
硯	1					1						0	1								1			2
骨製品			3			3			1	1		2									0			5
玉製品					1	1			7			7									0			8
鉄製品	7	82	126	15	2	232	172	10	350	5	40	577	2		78	48		1		6	135			944
青銅製品		1	3			4		1	13		2	16				2		2			4			24
円盤状製品	1	4	7		2	14		1	15			16			1	3		1			5			35
煙管	1		5			6	1	3	8	10	1	23			1	2				1	4			33
貝製品						0	1					1				2					2			3
瓦	4	20	19		2	45		52	78		8	138			58	15				13	86			269
錐		1				1				1		1									0			2
銭貨						0		1	3			4									0			4
脊椎動物遺体	16	86	387	221	21	731	3	24	88	3	6	124	8		19	21	5	4	1	1	59			914
貝類遺存体	145	653	546	447		1791		201	532	28	6	767	35		232	385	4	1		23	680			3238
合計	338	2063	4413	2835	286	9894	248	1845	5956	210	455	8714	61	1	709	1693	15	465	628	267	3839	60	1	22507

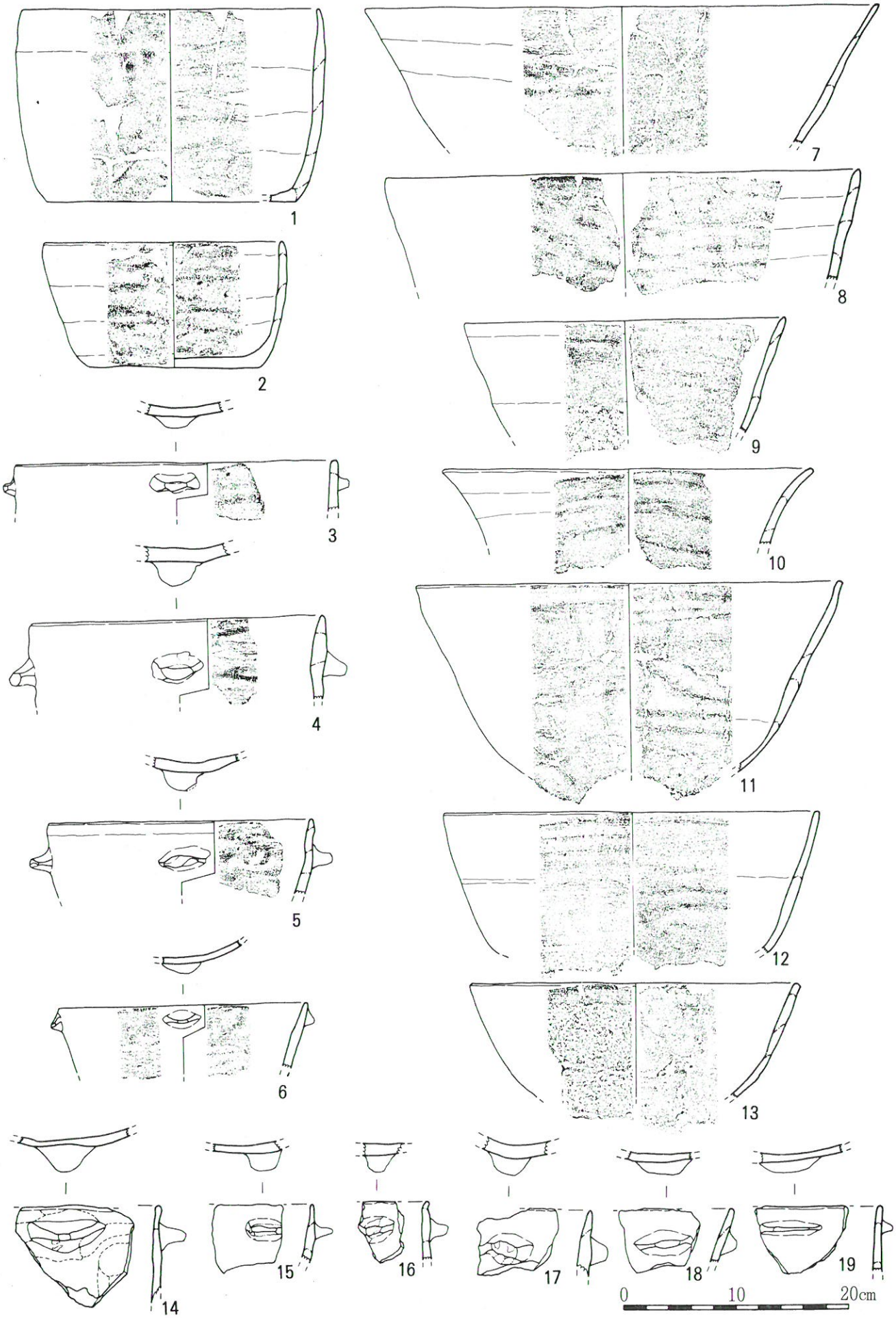
第２表ａ　土器観察一覧

押図番号 図版番号	器形	分類	法量 口底高	形態上の特徴	器面調整	器色	焼形・胎土・混入物	出土地区 層
第９図１ 図版８の１	土器 鍋形	Ⅰ類	27.0 22.4 17.1	底部が膨らみをもち立ち上がり、口縁部でゆるやかに内彎する。口唇は舌状に成形されている。	ナデ仕上げである。一部では器面の剥げ落ちがある。	淡黄茶色を帯びる。	焼成は良い。貝殻砕片を多く含み、壁面に露出している。	Ｅ－９ Ⅲ層
第９図２ 図版８の２			21.8 15.3 11.2	口縁部でゆるやかに内彎する。成形後に形がくずれたものを焼成した可能性がある。口唇は舌状後に平坦に成形されている。	雑なナデ仕上げである。内外ともに稜線が見られる。	黒めの褐色で外底に煤の付着がある。	焼成はあまり良くない。貝殻砕片を多く含み、壁面に露出している。	Ｃ－９ Ⅱ層
第９図３ 図版９の７			28.8 － －	口唇から下2.3cmに耳を貼り付けている。口唇部を平坦に成形しているが、雑である。耳の幅は薄く、やや横長である。	耳下の貼り付けは雑で左右に伸ばし圧跡がはっきりとしている。	明茶褐色を帯びる。	焼成も良く、胎土も細かく粘着性が強い。細かい微砂粒が少し見られるが殆ど混入物を含まない。	Ｅ－９ Ⅱ層
第９図４ 図版９の８			26.2 － －	口唇から下4.2cmに耳を貼り付けている。口唇は内彎気味の尖状に成形されている。外耳は厚手で平面形は半月状に近い。	雑なナデ仕上げである。外耳の貼り付けもかなり雑である。	口縁付近は明茶色で下部は淡茶となる。内面は少し黒みを帯びる。	かたく焼きしまり、胎土も細かい。殆ど混入物は見られない。	Ｃ－９ Ⅲ層
第９図５ 図版９の９			23.8 － －	耳部付近から緩やかに内彎する。口唇は尖り気味に成形した後軽く平坦に仕上げている。口唇下3.6cmに耳を貼り付けてある。耳の壁面は貼り付け時の圧痕のため凹状を呈する。	ナデで外面は丁寧に仕上げられている。内面は雑なナデ仕上げで指頭圧痕が見られる。	内外面とも明茶褐色を帯びる。	焼成も良く、かたく焼きしまっている。粗い貝殻砕片が混入されている。	Ｃ－９ Ⅱ層
第９図６ 図版９の10			22.4 － －	口唇は尖り気味で一部雑に成形している。口唇直下1.0cmに耳を貼り付けている。耳の平面形は半月状で、断面には指頭圧痕が見られる。内外とも口唇下２～３cm下は壁面が薄く剥がれ落ちている。	雑なナデ仕上げである。内面には貼り付けの際の指圧痕が残る。	外面は全体的に明褐色で内面は暗茶を帯びる。	焼成はあまり良くない。全体的にもろく、貝殻砕片が多量に混入されている。	Ｅ－９ Ⅲ層
第９図７ 図版９の３		Ⅱ類	46.5 － －	口唇を尖り気味に成形しているが、雑で平坦面もみられる。耳は見られない。	外面上部はナデ仕上げでその痕がよく残る。底部にはヘラ削りが残る。	外面は茶褐色、内面は明黄茶を帯びる。	焼成は良い。粘着性は弱い。貝殻砕片が多量に混入されている。	Ｃ－９ Ⅱ層
第９図８ 図版９の４			43.0 － －	直口する器形であり、口縁部で僅かに内彎する。口唇は舌状に成形している。ヘラ削りにより段が造られている。耳の剥がれ痕が見られる。	ヘラ削りのちにナデ消しが施されている。一部ヘラ削痕が残る。	全体的に茶褐色を帯びる。	焼成は良く、かたく焼きしまっている。貝殻砕片が多量に混入されている。	Ｅ－９ Ⅲ層
第９図９ 図版９の５			29.0 － －	口唇を尖り気味に成形している。はげ落ちのため、胴部に段が認められる。	ヘラ削りのちにナデ仕上げが施されている。	全体的に淡茶色を帯びている。	焼成は悪く脆い。胎土は粘着性が弱く粗い。粗い石灰質粒が混入されている。	Ｅ－９ Ⅲ層
第９図10 図版９の６		Ⅲ類	33.0 － －	外反のきつい器形で、口唇外端を突出させ平坦に仕上げてある。 Ⅲ類の特殊形と考える。	ヘラ削りのちにナデ仕上げが施されている。	淡褐色を帯びる。	焼成は良く、胎土は粘着性が弱い。貝殻砕片を多量に混入している。	Ｅ－９ Ⅱ層
第９図11 図版８の５			38.6 － －	口縁を窪ませて凹状に成形している。口唇は舌状に仕上げている。底部は丸味を帯びていると推定される。	ナデ仕上げである。指圧痕も見られる。	全体的に褐色を帯びる。内側に煤の付着がある。	焼成は良く、胎土は粘着性が弱い。貝殻砕片を多量に混入している。	Ｅ－９ Ⅲ層
第９図12 図版８の４		Ⅳ類	34.0 － －	僅かに膨らみをもち立ち上がり、口縁で微か内彎する。口唇は舌状に成形されている。 Ⅳ類ａに属する。	ヘラ削り後ナデ仕上げ。一部ヘラ削りが残っている。	全体的に茶褐色を帯びる。	焼成は悪く、胎土は粘着性が弱く粗い。多孔状である。僅かに貝殻砕片が混入されている。	Ｅ－９ Ⅲ層
第９図13 図版８の２			29.9	口唇を平坦に成形しているが雑である。疑似肥厚口縁を思わせる。底部は丸味を帯びると推定される。Ⅳ類ａに属する。	ヘラ削りのちにナデ仕上げが施されている。	全体的に茶褐色を帯びる。	焼成は良く、胎土は粘着性が弱い。貝殻砕片を多量に混入している。	Ｃ－９ Ⅱ層
第９図14 図版９の11		耳部	－ －	わずかなふくらみを持ち、たちあがり耳上部で指圧による凹状を呈している。耳は厚手で平面形が半月状を呈する。指頭圧痕が残る。口唇は全体的に丸味を帯びている。	調整痕が各所に見られ、ナデが明確に残る。	全体的に淡茶色を帯びる。	焼成は良く、かたく焼きしめ、粘質性は強いが粗い。貝殻片や石灰質粒が多量に混入されている。	Ｃ－９ Ⅲ層
第９図15 図版９の12			－ －	口縁部で僅かに内彎する。口唇は舌状に成形されている。口唇下1.6cm前後に耳を貼り付けている。	ヘラ削りのちにナデ仕上げが施されている。	明褐色で、内面は淡黄色を帯びる。	焼成は良く、かたく焼きしまっている。貝殻砕片を多量に混入している。	Ｅ－８ Ⅲ層
第９図16 図版９の13			－ －	口唇は舌状に成形された後、押しつぶされた形の平坦面を造る。口唇の下1.8cmに耳を貼り付けている。耳は厚手で、外縁部は丸味を帯びている。	ナデ仕上げであるが雑である。内面に指頭圧痕がみられる。	全体的に明褐色を帯びる。一部内面で黒味を帯びる。	かたく焼きしまり、胎土は細かい。砂粒が僅かに混入されている。	Ｅ－８ Ⅲ層
第９図17 図版９の14			－ －	口縁で僅かに内彎する。口唇下3.6cmに耳が貼り付けられている。口唇は舌状に成形されている。耳は厚手で幅とも大きく、半月状を呈する。	ナデによる仕上げであるが全体的に雑である。	全体的に暗茶色を帯びる。耳の一部は黒味を帯びる。	焼成は良く、かたく焼きしまっている。混入物は殆ど認められない。	Ｅ－９ Ⅱ層
第９図18 図版９の15			－ －	口唇3.1cmに耳を貼り付けている。口唇を丁寧に平坦に成形する。耳は厚手で平面形は半月状で指圧痕が見られる。耳先端を欠損している。	雑なナデ仕上げである。内外壁面とも欠落が見える。	全体的に明茶褐色を帯びる。	焼成は不良、胎土も荒く、粗い混入物を多量に含んでいる。	Ｅ－９ Ⅲ層
第９図19 図版９の16			－ －	口唇は舌状気味である。一部平坦に成形されているが雑である。口唇下2.4cmに耳が貼り付けられていて、耳は薄く、横長である。外側へは突き出してない。	内外とも丁寧にナデ仕上げが行われている。	外面は茶褐色を帯びている。内面は全体的に煤の付着が見られる。	粗い貝殻片や石灰片が多量に混入されている。焼成は良く、胎土は粘着性が弱い。	Ｅ－８ Ⅲ層
第10図１ 図版10の１		Ⅴ類	40.8 － －	逆八字に広がる直口状の器形である。口唇は尖っているが、肥厚口縁を呈する。Ⅱ類の可能性あり。	ヘラ削りのちにナデ仕上げが施されている。	外面は淡褐色で内面は淡茶を帯びる。	焼成は良く、胎土も細かい。ほとんど混入が見られない。	Ｅ－９ Ⅲ層
第10図２ 図版10の２	浅鉢	Ⅵ類	26.2 － －	ハの字状に直口するが器高の低い器形が推定される。口唇下2.3cmで「く」の字にまがり、口唇は舌状に成形されている。	ヘラ削りのちのナデ仕上げが施されている。内面は丁寧にナデ仕上げが施されている。	全体的に淡茶色、一部茶色で内面は明茶褐色を帯びる。	焼成も良く、かたく焼きしまっている。胎土も細かく、粘着性が強い。砂粒の混入が僅かであるが見られる。	Ｅ－９ Ⅰ層

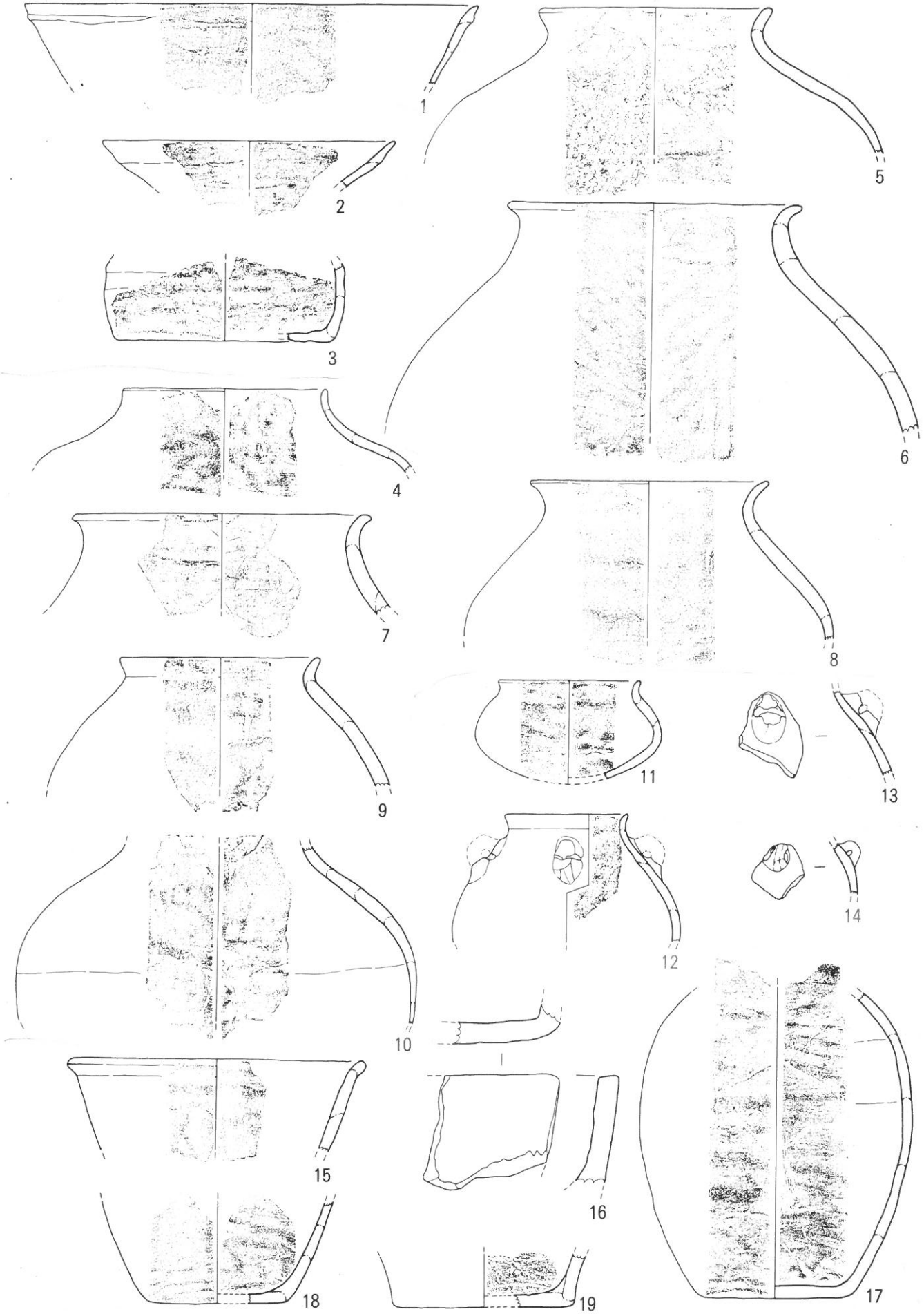
押図番号 図版番号	器形	分類	法量 口底高	形態上の特徴	器面調整	器色	焼形・胎土・混入物	出土地区 層
第10図3 図版10の3	鍋形土器	底部	－ － 20.0	立ち上がりから途中で緩やかに内彎し、下膨れ状となる。	器面は指頭によるナデである。全体的に丁寧に仕上げられている。	暗褐色を帯び、外面の一部と内面が黒く焼けている。	焼成も良く、かたく焼きしまっている。胎土は粘着性が強く、混入物は殆ど認められない。	E－8 Ⅲ層

第2表b　パナリ焼観察一覧

挿図番号 図版番号	器形	分類	法量 ／	形態上の特徴	器面調整	器色	焼成・胎土・混入物	出土地区 層
第10図4 図版10の4	壺形	Ⅰ類b	18.5 － －	イカリ肩タイプの壺で、口唇は尖り気味に成形している。頸部から口縁にかけて直口に立ち上がり僅かに外反している。	内面はナデ仕上げであるが雑で、指頭圧痕がはっきりしている。頸部はナデで丁寧に仕上げている。胴部はヘラ削りである。	口縁部は明茶で頸部から胴部にかけては淡褐色を帯びる。	焼成は良好。かたく焼きしまっている。細かい石英質砂粒が混入されている。	E－8 Ⅱ層
第10図5 図版8の6		Ⅱ類b	20.9 － －	イカリ肩に近いタイプの大型壺である。口縁部で緩やかに外反し、口唇は舌状にする。	全体的に丁寧なナデ仕上げが施されている。	少し暗めの褐色を帯びる。	焼成は良く、胎土はかたく焼きしまっている。粗い貝殻砕片と石英質粒が僅かに混入されている。	E－9 Ⅱ層
第10図6 図版10の5		Ⅲ類a	26.8 － －	大型のナデ肩タイプの壺である。外反端縁できつくまがっている。口唇は平坦状に成形されているが、一部舌状も見られる。厚手のパナリ壺である。	全体的に丁寧なナデ仕上げが施されている。胴部にヘラ状のナデ消しが見られる。	明茶色と淡茶色を帯びている。	焼成は良く、胎土はかたく焼きしまっている。一部、外面にヒビ割れが見られる。	E－9 Ⅰ層
第10図7 図版10の7			27.0 － －	大型のナデ肩タイプの壺である。外反端縁で摘みだした形で、口唇は平坦状に成形されている。厚手のパナリ壺である。	全体的に丁寧なナデ仕上げが施されている。胴部にヘラ状のナデ消しが見られる。	全体的に明褐色を帯びる。	焼成は良く、胎土はかたく焼きしまっている。粗い貝殻砕片と石英質粒が僅かに混入されている。	E－7 Ⅱ層
第10図8 図版10の8			21.4 － －	ナデ肩タイプの壺である。口縁が外側へ強く外反し、口唇を舌状に成形している。	全体的に丁寧なナデ仕上げが施されている。	全体的に明褐色を帯びる。	焼成も良く、かたく焼きしまり胎土も細かい。粗い貝殻砕片や石英質粒が混入されている。	E－9 Ⅱ層
第10図9 図版10の9		Ⅱ類a	18.0 － －	ナデ肩タイプで、厚手のパナリ壺である。外反の強い口縁で、口唇は舌状気味に成形されている。一部で尖面も見られる。	全体的に丁寧にナデ仕上げが行われ、内側には指頭圧痕が見られる。	少し暗めの褐色を帯びる。	焼成は良く、かたく焼きしまり胎土も細かい。粗い貝殻砕片や石英質粒が混入されている。	G－9 Ⅱ層
第10図10 図版10の10			－ 35.9 （最大径） 一径	ナデ肩タイプの壺の胴部である。頸部から肩部では器壁が厚く、胴部でかなり薄くなっている。	頸部は丁寧に調整されており、斜状にナデ痕が残る。内側には指頭圧痕が見られる。	頸部近くでは淡茶色を胴部では明茶色を帯びる。	焼成も良く、かたく焼きしまっている。粗い石英質粒が混入されている。	E－8 Ⅱ層
第10図11 図版8の7	壺形（小形）		12.8 － 9.1	小型の壺である。外底面が黒く変色していることから煮沸用とも考えられる。胴部で「くの字」になり、口部へ僅かに外反する。口唇は舌状に成形されている。	口縁ではある程度丁寧に仕上げられているが、胴部下は雑である。	全体的に明茶色を帯びる。外面の一部は黒色を帯びる。	焼成は良く、胎土も細かい。ほとんど混入が見られない。	E－9 Ⅱ層
第10図12 図版10の11			11.2 － －	口縁は少し外反気味で、口唇は舌状に成形されている。ナデ肩タイプの小型の壺で縦耳痕が見られる。縦耳痕が貼り付けてあるが、個数は不明である。	全体的に丁寧にナデ仕上げが施されている。内側には指頭圧痕が見られる。	全体的に明茶色を帯びる。	焼成は良いが、胎土は粘着性が弱い。貝殻砕片や石灰質微砂粒が多量に混入されている。	E－9 Ⅰ層
第10図13 図版10の11		耳部	26.8 － －	小型の壺の胴部片である。縦耳が貼り付けられている。	丁寧なナデ仕上げが施されているが、混入物の欠落が見られる。	全体的に明茶色を帯びる。	焼成は良いが、胎土は粘着性が弱い。貝殻砕片や石灰質微砂粒が混入されている。	E－9 Ⅱ層
第10図14 図版10の13			－ － －	小型の壺の胴部片である。縦耳が貼り付けられている。第10図12と同じ器形と考えられる。	全体的に丁寧にナデ仕上げが施されている。	全体的に明茶色を帯びる。	焼成は良く、胎土も細かい。僅かに微砂粒が混入されている。	E－9 Ⅱ層
第10図15 図版10の14	鉢形		26.8 － －	直口状に立ち上がる鉢で、口縁を窪ませて凹状にして僅かに外反した形に成形している。口唇は丸味を帯び、丁寧に仕上げられている。玉縁状に肥厚の可能性あり。	両面とも丁寧にナデを施している。内面には孔痕？と見られる箇所がある。	全体的に明茶褐色を帯びる。	焼成は良く、胎土はかなり細かい。混入物はほとんど認められない。	E－9 Ⅰ層
第10図16 図版10の15			－ － －	直口口状で僅かに開く方形状のパナリ鉢である。器壁はかなり厚く、口唇は平坦に成形されている。火舎や臓器が考えられるが用途不明の鉢である。	ナデ仕上げが施されている。壁面には混入物の欠落が見られる。	全体的に暗茶褐色を帯びる。	焼成は良く、かたく焼きしまり、胎土も細かい。粗い貝殻破片と石灰質粒が混入されている。	E－9 Ⅱ層
第10図17 図版8の8	壺形	胴部	－ 13.4 －	緩やかに立ち上がる、ナデ肩タイプの小形の壺である。最大幅は11.2を測る。	ナデ仕上げが行われ、内面には指頭圧痕が見られる。	全体的に暗茶褐色を帯びる。	焼成は良く、かたく焼きしまり、胎土も細かい。粗い貝殻破片が混入されている。	E－8 E－9 Ⅲ層
第10図18 図版10の16		底部	－ 13.0 －	立ち上がりが緩やかに丸味をもって立ち上がる。第10図15と同様な器形だと考えられる。	ナデ仕上げが行われ、内面には指頭圧痕が見られる。	外面は淡褐色で内面は黒味を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。粗い貝殻砕片が少量であるが混入されている。	E－9 Ⅰ層
第10図19 図版10の17			－ 16.4 －	立ち上がりが角をなし、緩やかにくびれるようになる。深鉢形とも考えられる。	ナデ仕上げが施されている。内面にヘラ痕が残る。	外面は明褐色で内面は淡褐色を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。混入物は殆ど見られない。	E－8 Ⅱ層



第9図　土 器



第10図　土 器（1～3）　パナリ焼（4～19）

第3節　青　磁

本遺跡で出土した青磁として古手のものは鎬蓮弁文碗や片切り彫りの蓮弁文碗などが存在する。新しいものは線彫細蓮弁文碗がある。時期的には14世紀前半から16世紀代と幅はあるが、主体となる時期は15世紀後半から16世紀代である。

Ⅰ地区と仮称された地域は、慶来慶田城用緒の屋敷跡と西隣りに接する鍛冶屋跡の2箇所である。Ⅱ地区はフチコと称された半島の突端に造られた薩摩在番跡である。青磁の出土状況などから、Ⅰ地区は14世紀から16世紀代と幅はあるが、主流は15世紀後半～16世紀代であった。Ⅱ地区は14世紀中頃から16世紀代とⅠ地区同様に幅が生じているが、主体となる青磁は線刻細蓮弁文碗の時期であり、15世紀終末から16世紀代であった。青磁の出土状況に於いては、両地区とも主体となる時期が15世紀中頃もしくは終末から16世紀代であり、時期的には両地区はある程度重なっている。15世紀後半～16世紀の青磁の多くは恐らく、17・18世紀頃まで伝世されていたことが推察された。

両地区で確認された青磁の器種として、碗・皿・盤・鉢・杯・瓶・壷・香炉の8器種であった。Ⅰ地区とⅡ地区との器種別の組成として、Ⅰ地区が碗・皿・盤・鉢・杯・瓶・壷・香炉の8器種の全てが出土しているのに対して、Ⅱ地区は碗・皿・盤・杯と4器種と半分も減少していることが注目される。

Ⅰ地区は首里王府時代に「西表首里大屋子」（1501年）に任ぜられた慶来慶田城用緒の屋敷が存在したことにより、Ⅱ地区からは出土しない鉢・瓶・壷・香炉の4器種が出土したものとして今のところ考えられた。

以下、両地区から出土した青磁の分類概念を記述する。個々の特徴等については、地区別に観察一覧表（第5表・第18表）を呈示することにする。

分類に際しては器種ごとに行い、必要に応じて細分した。

1）碗（第11図1～19、第12図20～42、第13図43～51、第58図1～16、第59図17～19）

碗の中には鎬蓮文・無鎬蓮弁文・線刻細蓮弁文・ラマ式蓮弁文・弦文・雷文などの他に無文の碗が含まれている。文様などの特徴などから、碗はⅠ群からⅧ群までの8群にまで分類し、必要に応じて便宜的にA・Bなどの種類に細分した。

Ⅰ　群（第11図1～6・19・第58図1）・（図版11・図版45）

Ⅰ群は鎬蓮弁文碗と蓮弁文碗のグループで、文様を片切り彫りで描いたものが主流であり、希に叉状の工具を用いて描いたものがある。口縁形態や文様などからA類からD類までの4類までに細分した。

Ⅰ群A類…薄手（厚さ3.8㎜）の直口口縁碗。幅の狭い蓮弁文を片切り彫りで描き、蓮弁への鎬が僅かに残存する。間弁を箆描きによって省略する鎬蓮弁文碗。（14世紀前半～14世紀中頃）。

Ⅰ群B類…厚手（厚さ4.1～4.9㎜）の内灣口縁碗。幅の広い蓮弁文を片切り彫りで描く。弁先が僅かながら空いているものと幅の狭い蓮弁を鮮明に描き、蓮弁内に丸箆を加えたものがある。前者をa種とし、後者はb種として2種に細分した。（14世紀中頃～15世紀中頃）。

Ⅰ群C類…厚手（厚さ4.0～4.7㎜）の外反口縁碗。外反はゆるく口縁に小さな玉縁状の肥厚を造る。片切り彫りで弁先の空いた蓮弁文を描くが、弁先は尖らず丸味を持たせている（14世紀後半～15世紀中頃）。

Ⅰ群D類…口造りはⅠ群C類と同様の成形である。胴上部に圏線を施し、その直下に片切り彫りの蓮弁を描くものと叉状工具で蓮弁を描いたものの2種類が存在し、前者をa種、後者はb種として細分した。b種は内底面の釉を掻き取って印花文を施している。（14世紀後半～15世紀中頃）。

Ⅱ　群（第11図7～18、第58図2～9）・（図版11・図版45）

Ⅱ群は線刻細蓮弁文碗のみのグループで、文様を箆や線描きで描いたものが主流である。希ではあるが叉状工具によるものが含まれている。文様などからA類からF類までの6類に分類した。

Ⅱ群A類…箆による細蓮弁が描かれるもので、弁先は雑に描かれるが意識して尖らせているもの。このグループには「顧氏」の字款を施したものもある（15世紀中頃～16世紀前半）。

Ⅱ群B類…丸箆による蓮弁を描くもので、弁幅はA類よりも2倍近く広くなり、弁先を丸味を持たせて丁寧に

描く。蓮弁とのズレは少ない（15世紀後半～16世紀中頃）。

Ⅱ群Ｃ類…線描きで蓮弁を描き、弁先を箆で波状に描いたものと蓮弁を丸箆で描き、弁先を線描きで波状に描いたものの両者が存在する。（15世紀後半～16世紀中頃）。

Ⅱ群Ｄ類…箆による蓮弁が描かれる点ではＢ類と類似するが、弁幅はＢ類よりも僅かに広くなり、弁先と蓮弁にズレが部分的に生じているものと、線描きのみで蓮弁と弁先を描くが弁先と蓮弁はズレているものの２種類が存在する（15世紀後半～16世紀中頃）。

Ⅱ群Ｅ類…弁先は雑な箆描きで表現されるが、蓮弁は叉状工具で描かれ、弁先と一致しているもの（15世紀）。

Ⅱ群Ｆ類…弁先が消えて、線描きの蓮弁文のみを描いたもの（15世紀後半～16世紀中頃）。

Ⅲ　群（第12図20・第58図10）・（図版12・図版45）

Ⅲ群は口縁が玉縁状に肥厚する外反型の碗で、外面にラマ式蓮弁類似文様を箆描きで表現するものである。このタイプは亀井明徳氏（註１）が仮称しているところの大振りの外反碗の範疇にあるものとみられる（14世紀中頃～15世紀中頃）。便宜的にⅢ群をラマ式蓮弁類似文碗として仮称する。

Ⅳ　群（第12図21～23）・（図版12）

Ⅳ群は口縁が玉縁状に肥厚する碗と直口口縁の碗の２種類がある。前者をＡ類とし、後者はＢ類として２類に分類する。Ａ・Ｂの両類とも内面に陽印花の蓮弁文を型押しするグループである。

Ⅳ群Ａ類…口縁が玉縁状に肥厚する碗。内面に二本一組で縦位の陽沈線文で区画し、区画内に陽印花花文を施したもの。

Ⅳ群Ｂ類…直口口縁の碗。内面に陽印花花文を施したもの。

Ⅴ　群（第12図24）・（図版12）

Ⅴ群はいわゆる弦文帯碗である。出土した弦文帯碗はすべて外反口縁のタイプであった（14世紀中頃）。

Ⅵ　群（第12図25～33・第58図11・12）・（図版12・図版45）

いわゆる雷文帯碗と称されているものである。すべて直口口縁のタイプであった。雷文の表現等によって以下のＡ・Ｂの２類に分類した。

Ⅵ群Ａ類…雷文を箆描きで描くもの。雷文はかなり崩れていて、雷文直下に櫛描きや箆描きのラマ式蓮弁文を雑に描く（14世紀中頃～15世紀中頃）。

Ⅵ群Ｂ類…雷文をスタンプで型押ししたもの。雷文直下に丁寧なラマ式蓮弁文を型押しする。（15世紀）。

Ⅶ　群（第12図34・第58図13）・（図版12・図版45）

Ⅶ群は内面に陽文の雷文帯と花文を型押しした直口口縁の碗（15世紀）。

Ⅷ　群（第12図35～42・第13図43～51・第58図14～16・第59図17～19）・（図版12・13・15・図版45・46）

無文碗のグループをⅧ群とした。無文碗は14世紀後半～15世紀中頃の碗と15世紀後半～16世紀の碗の二時期の碗が存在したため、前者の時期の碗をⅠ類とし、後者の時期に比定された碗をⅡ類として２種類に大別した後に口縁形態や成形などからＡ種からＤ種までの４種類に細分した。また、高台破片については時期別にⅠ・Ⅱ類に分類した後に高台の成形や釉掛けなどからａ種からｃ種までの３種類に細分した。

Ⅷ群Ⅰ類（14世紀後半～15世紀中頃）・（第12図35～41・第58図14～16）・（図版12・15・図版45）

Ⅷ群Ⅰ類は口縁形態や成形などからＡ種からＤ種までの４種類に細分した。

Ⅷ群Ⅰ類Ａ種…口縁を玉縁状に肥厚させて成形する碗と疑似肥厚の碗の２種類がある。

Ⅷ群Ⅰ類Ｂ種…直口口縁の碗。

Ⅷ群Ⅰ類Ｃ種…外反口縁の碗。

Ⅷ群Ⅰ類Ｄ種…外反の度合いは微弱で、口縁に箆を加えて成形するため、胴上部に稜線が横走する碗。

Ⅷ群Ⅱ類（15世紀後半～16世紀）・（第13図50・51・第59図17）・（図版13・15・図版46）

Ⅷ群Ⅱ類は外反口縁の碗のみで、外面への轆轤痕が特徴となっている。口縁の外反の度合いなどからＡ種・Ｂ種の２種類に分類した。

Ⅷ群Ⅱ類Ａ種…口縁がきつく外反する碗。

Ⅷ群Ⅱ類Ｂ種…口縁がゆるやかに外反する碗。

Ⅷ群Ⅰ類碗の高台分類（14世紀後半～15世紀中頃）・（第12図42・第13図43～49）・（図版12・13）

Ⅷ群Ⅰ類の碗と平行する時期の高台破片で、高台への施釉や成形などからａ種～ｃ種までの３種類に分類を行った。

Ⅷ群Ⅰ類ａ種…釉を高台外面まで施したもの。

Ⅷ群Ⅰ類ｂ種…釉が高台内面途中まで残存しているもの。

Ⅷ群Ⅰ類ｃ種…釉を外底面まで施した後に蛇ノ目状に釉を掻き取ったもの。

Ⅷ群Ⅱ類碗の高台分類（15世紀後半～16世紀）・（第59図18・19）・（図版46）

高台への施釉や成形などからａ・ｂの２種類に分類した。

Ⅷ群Ⅱ類ａ種…釉が高台内面途中まで施したもの。

Ⅷ群Ⅱ類ｂ種…釉を外底面まで施した後に外底の釉を雑に掻き取ったもの。

2）皿（第13図52～56、第14図57～59、第59図20～22）・（図版13～15、図版46）

皿の種類として口折皿・稜花皿・外反皿の３種類が確認されている。文様や口造りなどから皿はⅠ群からⅢ群までの３群に分類した。以下、各群の分類概念を記述する。

Ⅰ群（14世紀後半～15世紀）・（第13図52、第59図20）・（図版13・図版46）

Ⅰ群は口折皿であり、平鍔をもつ鍔縁皿である。弁先の尖った蓮弁文を丁寧に片切り彫りで描くもの。

Ⅱ群（15世紀後半～16世紀）・（第13図53～56・第59図21・22）・（図版13・15・図版46）

Ⅱ群はいわゆる稜花皿である。腰下部で折れる腰折皿であり、口唇に抉りを入れてラマ式蓮弁の弁先状に成形する。内面は稜花状の口唇に沿うように２・３本単位の櫛目を施し、胴部に片切り彫りのラマ式蓮弁類似文様を描く。見込みに圏線や印花文を施すもの。

Ⅲ群（15世紀後半～16世紀）・（第14図57～59）・（図版14）

Ⅲ群は無文の肥厚口縁皿で、口縁が外反するタイプ。外面の肥厚直下に丸篦で削りを加えて肥厚帯を造る。胴部には削りによる轆轤が顕著に観察される。内底面に圏線を施す。

3）盤（第14図60・61、第59図23・24）・（図版16、図版46）

口縁形態などから盤は以下のⅠ群とⅡ群の２つに大別した。

Ⅰ群（15世紀後半～16世紀）・（第14図60、第59図24）

Ⅰ群…鍔縁盤で、鍔を平坦に成形した口造りとなるもの。

Ⅱ群（14世紀中頃～15世紀）・（第14図61、第59図23）・（図版16・図版46）

Ⅱ群…Ⅰ群と同様の鍔縁盤である。鍔外端部をつまみ上げて成形したもの。

4）鉢（第14図62～64・71）・（図版14、図版46）

鉢は口縁形態などから以下の３つのグループが確認されている。他に17世紀後半～18世紀前半の福建・広東系窯の大鉢の高台片も採集されているのでこれも図化した。

Ⅰ群（14世紀）・（第14図62）・（図版14）

Ⅰ群…鎬蓮弁を高台脇まで描いた胴部片で、鎬蓮弁の大鉢とみられるものである。

Ⅱ群（時代不詳）・（第14図63）・（図版14）

Ⅱ群…口頸部が「く」の字状に折曲する鉢である。口縁部で僅かに内灣する。内面に片切り彫りによる刻花文を描く。

Ⅲ群（14世紀中頃～15世紀中頃）・（第14図64）・（図版14）

Ⅲ群…口縁が内側に大きく内灣する浅鉢とみられるもので、外面に圏線や刻花文を片切り彫りで描いているものである。Ⅲ群は香炉や水盤の可能もあるが一応、仮に鉢に含めた。

5）杯（第14図65、第59図25）・（図版15、図版46）

杯も口縁形態などからⅠ群とⅡ群の２つに分類した。

Ⅰ群（14世紀中頃～15世紀中頃）・（第14図65）・（図版15）

Ⅰ群…口縁の上面観が八角形状を呈する腰折れ杯で、腰下部から下は丸味を持たせて成形する。折れの部分から口縁までは面取りを兼ねていて口縁で外反させて成形する。

Ⅱ群（14世紀中頃～15世紀）・（第59図25）・（図版46）

Ⅱ群…いわゆる碁笥底の杯。

6）瓶（第14図66）・（図版14）

瓶の頸胴部の破片が１片のみ得られている。長頸型の瓶とみられる。（時代不詳）

7）壷（第14図67）・（図版14）

酒会壷の蓋が１片のみ得られていた。蓋は縁辺を波状に成形した縁造りのタイプである。（14世紀中頃～15世紀中頃）。

8）香炉（第14図68・69）・（図版14）

円筒型の三足香炉の一部とみられる資料が、１・２片得られている。口唇部を僅かに凹ませて成形した寄口口縁である。（14世紀中頃～15世紀中頃）。

9）器種不明（第14図70）・（図版14）

外面に片切り彫りの蓮弁を描き、内面には刻花文を施した胴部の破片である。大振りの碗・鉢のいずれかに所属するものとみられるが判然としない。（14世紀中頃～15世紀）

小　結

Ⅱ地区の青磁で碗Ⅱ群Ｂ類（線刻細蓮弁文碗）の中には「顧氏」銘（第58図２）を刻印したものが出土している。この種の「顧氏」銘入りの碗は、上村遺跡（西表島）（註２）・与那原遺跡（与那国島）（註３）・西表島ピニシ海岸（註４）・石垣島クード（註５）などで得られている。この「顧氏」銘を持つ碗については、亀井明徳氏は15世紀後半を遡らないことを指摘されている（註６）。従って、今回出土した「顧氏」銘入りの碗は、文字もかなり略式化され、碗に施された文様などからも15世紀後半～16世紀代のものであることが判断された。

皿Ⅱ群（稜花皿）については、亀井明徳氏は熊本県の出土例から次のような見解を示している「あまり時期の限定できる青磁ではなく、15世紀初めから、16世紀中葉まで長期間にわたり製作、使用されたと考えた方がよいであろう。」（註７）。本遺跡の例は碗Ⅱ群Ｂ類（線刻細蓮弁文碗）と皿Ⅱ群（稜花皿）と共伴関係を検討した場合、Ⅰ地区では碗Ⅱ群Ｂ類がⅡ層から１片、Ⅲ層から２片、皿Ⅱ群は表採１片、Ⅱ層２片、Ⅲ層１片の割合で出土していて、Ⅰ地区ではⅡ・Ⅲ層で両者は共伴していることが判るが、Ⅱ地区では碗Ⅱ群Ｂ類はⅢ層で１片、皿Ⅱ群はⅣ層で２片の割合で出土していて、両者は共伴していない点が今のところ注目されるところである。今後、Ⅰ・Ⅱ地区間の細かい検討も必要であろう。

註

註１．亀井明徳・知念勇ほか『沖縄出土の中国陶磁（上）』先島編　沖縄県立博物館　1982年。

註２．大城慧・金城亀信ほか『西表島 上村遺跡』 沖縄県教育委員会　1991年。

註３．金城亀信ほか『与那原遺跡』 与那国町教育委員会　1988年。

註４．註１に同じ。

註５．註１に同じ。

註６．亀井明徳 「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古希記念 古文化論攷』 1980年。

註７．亀井明徳「熊本県城南町出土の青磁資料」『貿易陶磁研究』№1　日本貿易陶磁研究会　1981年。

第３表ａ　慶来慶田城青磁観察一覧

挿図図版	番号	名称・仮称	分類	法量	器形・成形・文様等の特徴	素地・釉色	施釉・貫入	出土地
第11図 図版11	1	蓮弁文碗	ＩＡ	－ － －	薄手の直口型の碗。口唇を尖らせる。外面に片切り彫りによる蓮弁を施し、弁先の間に間弁を省略したとみられる蓮弁様の横線を篦描きする。	淡灰白色の細粒子。淡い青色の釉。	両面に施す。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第11図 図版11	2		ＩＢａ	13.0 － －	厚手の内湾気味の碗。口唇は丸みを持たせて成形。幅の広い蓮弁を片切り彫りで描いている。弁先が空いている。	灰白色の粗細粒。微細な黒色鉱物が少量混入する。淡い黄緑色の釉。	両面に施す。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第11図 図版11	3			－ － －	厚手の内湾気味の碗。口唇は丸みを持たせて成形。幅の広い蓮弁を片切り彫りで描く。弁先は丸味を持たせて描き、弁先が空く。	灰白色の微粒子。淡い青緑色の釉。	両面に施す。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層

第３表ｂ　慶来慶田城青磁観察一覧

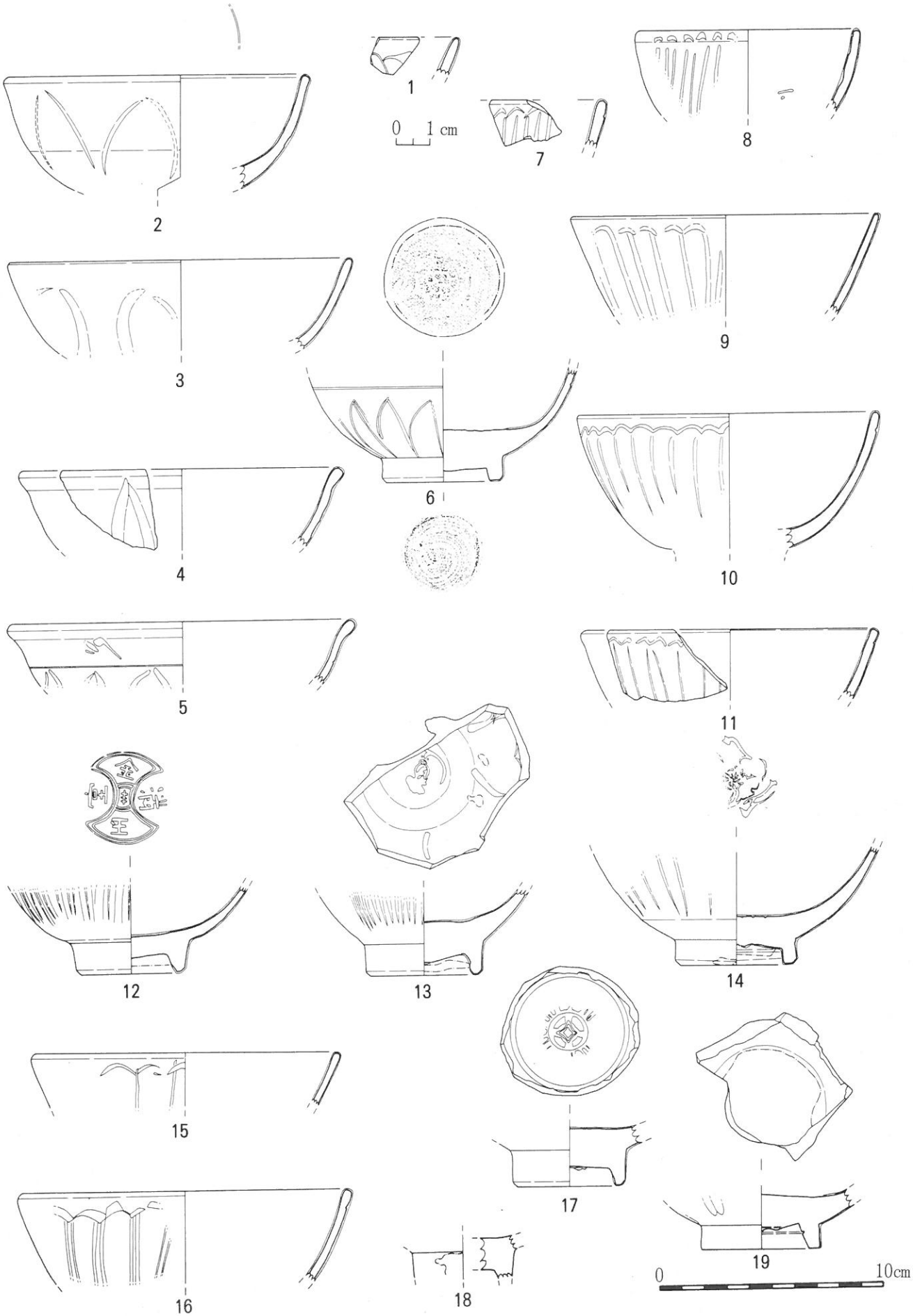
挿図図版	番号	名称・仮称	分類	法量	器形・成形・文様等の特徴	素地・釉色	施釉・貫入	出土地
第11図 図版11	4	蓮弁文碗	ＩＣ	14.4 － －	厚手の外反口縁碗。口縁が僅かに肥厚する。片切り彫りによる蓮弁を描く。弁先は雑に仕上げている。	白色の細粒子。淡い黄緑色の釉。	両面に施す。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅱ層
第11図 図版11	5		ＩＤａ	15.4 － －	厚手の外反口縁碗。口縁が僅かに肥厚する。口縁と胴上部を区画する圏線を施し、その直下に片切り彫りの蓮弁を描く。	淡灰白色の細粒子。淡い青緑色の釉。	両面に施す。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅱ層
第11図 図版11	6		ＩＤｂ	－ － 5.3	高台破片。見込みは露胎させた後に印花文を施す。外面は胴上部に圏線を施し、その直下に叉状の蓮弁文を高台脇まで施す。外底面に刷毛目様の調整痕。畳付は平坦に研磨される。	淡灰白色の細粒子。淡い青緑色の釉。	高台外面まで施す。見込みは露胎。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第11図 図版11	7	線刻細蓮弁文碗	ⅡＡ	－ － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。蓮弁は箆描きで描かれ、蓮弁と弁先は一致しない。	灰白色の微粒子。暗緑色の釉。	両面に施す。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第11図 図版11	8			9.9 － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。蓮弁は箆描きで描かれ、蓮弁と弁先は一致しない。内面に構図不詳の文様を箆描きする。	灰白色の微粒子。暗緑色の釉。	両面に施す。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅱ層
第11図 図版11	9		ⅡＢ	13.6 － －	内湾型の碗。口唇を箆で軽く加えて平坦に成形。蓮弁は丸箆で一枚一枚丁寧に描いている。両面は淡黄緑色の釉以外に白色（エナメルか）の釉が垂れている。	灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物が僅かに混入する。淡黄緑色の釉。	両面に施す。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第11図 図版11	10			13.4 － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。蓮弁は丸箆で一枚一枚丁寧に描いている。	橙白色の粗粒子。微細な橙色や白色の鉱物が少量混入。素地は半磁胎。灰緑色の釉（失透釉）。	両面に施す。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第11図 図版11	11		ⅡＣ	13.2 － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。弁先は箆で連続した波状文を雑に描く。蓮弁は線描きで描く。	淡灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物を僅かに含む。淡青緑色の釉。	両面に施釉す。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅲ層
第11図 図版11	12		ⅡＡ	－ － 4.8	線刻細蓮弁文碗の高台破片。ⅡＡの範疇にある。箆による細蓮弁を高台際まで描く。見込みに「金玉満堂」の吉祥文字と分銅を表現したものを刻印。	灰白色の細粒子。青緑色の釉。	外面は高台内面途中まで施す。内面は総釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅱ層
第11図 図版11	13			－ － 5.0	線刻細蓮弁文碗の高台破片。ⅡＡの範疇にある。箆による細蓮弁を高台際まで描く。内面は見込みに構図不詳の刻印文を施し、周辺に片切り彫りの捻花。外底面の釉は輪状に掻き取る。	淡灰白色の微粒子。黄緑色の釉。	両面に施釉した後で外底面の釉を掻き取る。貫入はない。	鍛冶屋跡 表採
第11図 図版11	14		ⅡＣ	－ － 5.4	線刻細蓮弁文碗の高台破片。ⅡＣの範疇に入るものと見られる。線描きの蓮弁を高台際まで施している。見込みに印花文を施す。外底面の釉を雑に掻き取る。	淡灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物を僅かに含む。淡緑色の釉	両面に施釉した後で外底面の釉を掻き取る。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第11図 図版11	15		ⅡＤ	13.6 － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。蓮弁を描いた後に弁先を描いた為、蓮弁が弁先より突出している。部分的に蓮弁を描き忘れた箇所もある。	淡灰色の細粒子。淡灰緑色の釉（透明釉）。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	翁屋敷跡 Ｄ－４ Ⅱ層
第11図 図版11	16		ⅡＥ	14.8 － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。叉状工具で蓮弁を描いた後に箆で弁先を描いている。	淡灰色の細粒子。濃緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第11図 図版11	17		ⅡＡ	－ － 5.0	ⅡＡの範疇にあるものとみられる。見込みに印花文と陰圏線を施す。外底釉を蛇ノ目状に掻き取る。素地や釉色等がⅡＡと一致。	淡灰色の微粒子。淡青緑色の釉。	両面に総釉した後に外釉を掻き取る。両面に細かい貫入。	翁屋敷跡 表採
第11図 図版11	18		ⅡＢ	－ － (4.4)	ⅡＢの範疇にある高台破片。畳付を欠いている。素地や釉色がⅡＢと一致。	淡灰色の粗粒子。微細な橙色や白色の鉱物が少量混入（半磁胎）。灰緑色の失透釉。	外面は高台脇まで施す。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第11図 図版11	19	蓮弁文碗	Ｉ	－ － 5.2	Ｉ群の範疇に含まれるものとみられ、素地や釉の色合いが一致している。見込みの釉を掻き取って円形状に仕上げ露胎させている。高台は「ハ」の字に成形し、内刳りが深い。片切り彫りの蓮弁が高台際まで描いている。	淡灰白色の細粒子。淡青緑色の釉。	見込みは露胎。外面は高台外面まで施釉。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅱ層
第12図 図版12	20	ラマ式蓮弁類似文碗	Ⅲ	12.2 － －	玉縁状の肥厚口縁碗。外面は箆によるラマ式蓮弁類似の文様を描いている。	淡灰白色の微粒子。淡灰緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｄ－４ Ⅱ層
第12図 図版12	21	陽印花蓮弁文碗	ⅣＡ	16.8 － －	玉縁状の肥厚口縁碗。内面に陽印花花文とそれを区画する二本一組の陽蓮弁文を型押しする。外面は無文。	淡灰色の細粒子。微細な黒色鉱物が僅かに混入する。濃緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第12図 図版12	22			15.2 － －	玉縁状の肥厚口縁碗。内面に陽印花花文とそれを区画する二本一組の陽蓮弁文を型押しする。外面は無文。	淡灰白色の微粒子。明青緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第12図 図版12	23		ⅣＢ	16.0 － －	直口型の口縁である。内面に陽印花花文を型押しする。	淡灰白色微粒子。明青緑色の釉。	両面に施釉。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第12図 図版12	24	弦文帯碗	Ｖ	18.8 － －	外反口縁の弦文帯碗。口縁に三本の弦文を廻らし、弦文を斜位に区切る三本単位の短沈線文を施す。胴上部にやや不明瞭な圏線を二本施している。内面には片切り彫りによるラマ式蓮弁類似文様とみられるものを描く。	淡灰白色の微粒子。明青緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第12図 図版12	25	雷文帯碗	ⅥＡ	13.8 － －	直口口縁の碗。文様は外面のみに残存し、箆描きで崩れた雷文を描く。	淡灰白色の細粒子。濃緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層

第３表ｃ　慶来慶田城青磁観察一覧

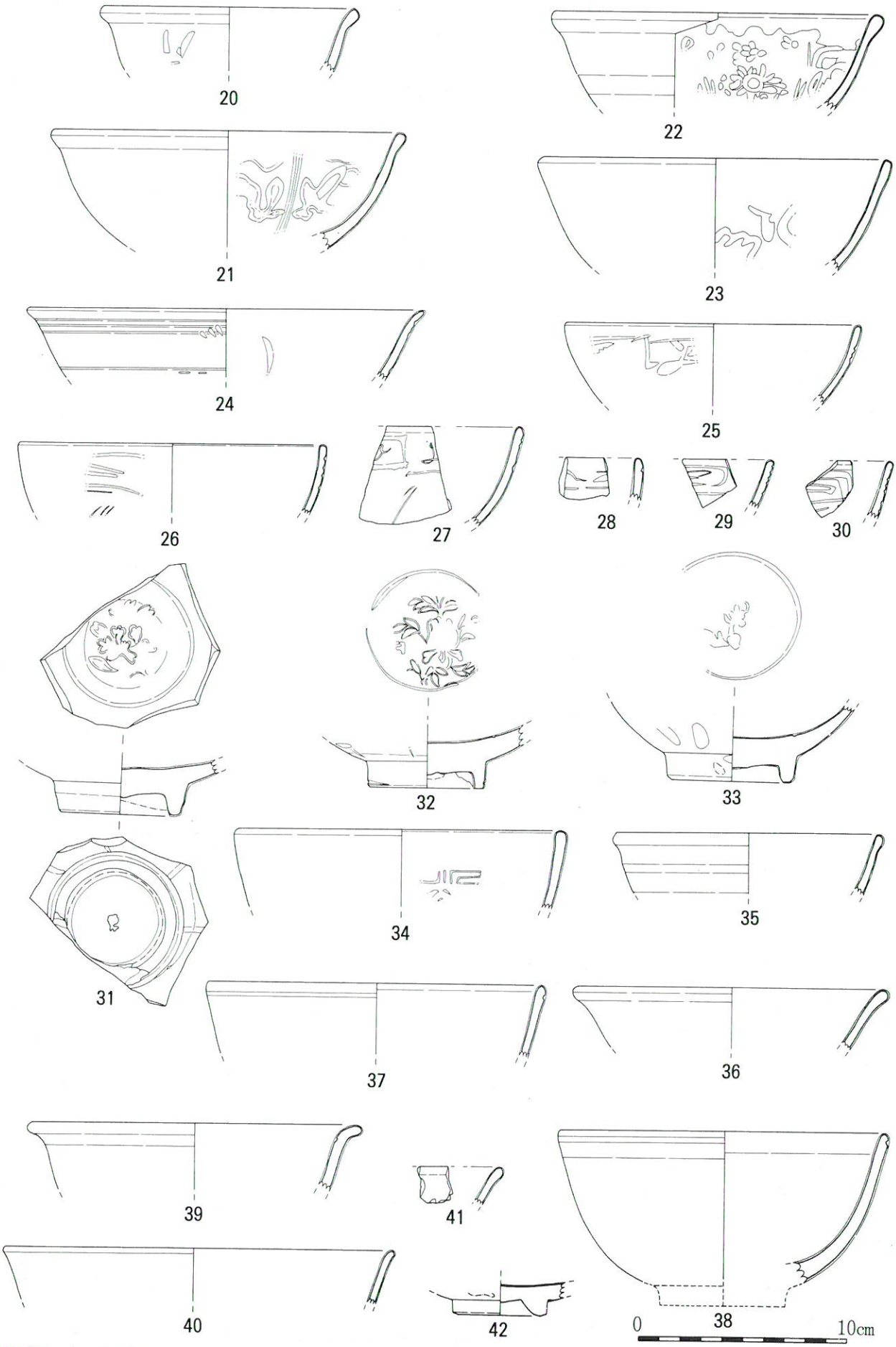
挿図図版	番号	名称・仮称	分類	法量	器形・成形・文様等の特徴	素地・釉色	施釉・貫入	出土地
第12図 図版12	26	雷文帯碗	ⅥA	14.0 － －	直口口縁の碗。文様は外面のみに残存し、篦描きで崩れた雷文を描く。雷文帯直下に櫛描き蓮弁文を描く。	淡灰白色の細粒子。微細な黒色鉱物が僅かに混入。明青緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第12図 図版12	27			－ － －	直口口縁の碗。文様は外面のみに残存し、篦描きで崩れた雷文を描く。雷文帯直下に篦描きの蓮弁文を描く。	淡灰白色の細粒子。青緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	翁屋敷跡 北側石積み表採
第12図 図版12	28			－ － －	直口口縁の碗。文様は外面のみに残存し、篦描きで崩れた雷文を描く。	淡灰白色の細粒子。青緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第12図 図版12	29			－ － －	直口口縁の碗。文様は外面のみに残存する。篦描きでやや丁寧な雷文を描き、その直下に圏線を施す。	淡灰白色の細粒子。明青緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第12図 図版12	30			－ － －	直口口縁の碗。文様は外面のみに残存する。雷文帯直下に篦描きの蓮弁文を描く。	淡灰白色の微粒子。明青緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第12図 図版12	31			－ － 5.8	雷文帯碗の高台破片。見込みに圏線と印花花文を施す。外面は高台脇まで篦描きの蓮弁文を施している。外底面に粗い胎土目の陶土が付着する。畳付に研磨あり。	淡灰白色の微粒子。明緑色の釉。	内面は総釉。外面は高台内面途中まで施す。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第12図 図版12	32			－ － 5.4	雷文帯碗の高台破片。見込みに圏線と印花花文を施す。外面は高台脇まで篦描きの蓮弁文を施している。	淡灰色の細粒子。明緑色の釉。	内面は総釉。外面は高台内面途中まで施す。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅱ層
第12図 図版12	33			－ － 5.6	雷文帯碗の高台破片。見込みに圏線と印花花文を施す。外面は高台際まで篦描きの蓮弁文を雑に施している。畳付の半分程度は研磨が入っている。	淡灰色の細粒子。明緑色の釉。	両面は総釉した後で外底釉を蛇ノ目状に掻き取る。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第12図 図版12	34	陽印花雷文帯碗	Ⅶ	15.8 － －	直口口縁の碗。外面は無文で、内面に陽刻で雷文帯と花文を型押しする。	淡灰白色の細粒子。淡青色の釉。半磁胎。	両面は総釉した後で外底釉を蛇ノ目状に掻き取る。両面に細かい貫入。	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第12図 図版12	35	無文碗	ⅧⅠA	12.8 － －	小さな玉縁のある肥厚口縁。肥厚帯直下を丸篦で調整。外面は轆轤痕が顕著に認められる。	淡灰色の細粒子。灰白色の釉。失透釉。	両面に施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第12図 図版12	36			13.0 － －	疑似肥厚タイプの口縁で、口縁が微弱に肥厚する。	灰白色の細粒子。微細な黒色鉱物が僅かに混入する。黄緑色の透明釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第12図 図版12	37		ⅧⅠB	15.7 － －	直口口縁の碗。口唇から下、５㎜の箇所に片切り彫りで圏線を施す。	淡灰色の細粒子。濃緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第12図 図版15	38			15.6 － －	直口口縁の碗。器壁が６㎜前後と厚い。釉も厚く、１㎜を測る。	淡灰白色の微粒子。青緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ⅱ層
第12図 図版12	39		ⅧⅠC	15.8 － －	口縁がきつく外反する碗。両面に片切り彫りによる文様を施しているが釉が厚い為、構図は不明。ラマ式蓮弁類似文碗の可能性が高い。	淡灰白色の微粒子。淡緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ⅱ層
第12図 図版12	40			19.0 － －	口縁がゆるく外反する碗で、器厚が４㎜前後と薄い。口唇から下、３㎜の箇所に丸篦を加え口縁を強調する。	淡灰色の微粒子。明緑色の釉	両面に施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第12図 図版12	41			－ － －	口縁が微弱に外反する碗。ベトナム青磁か中国南部の青磁とみられる。	淡灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物が多量に混入。灰緑色の透明釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	翁屋敷跡 Ｅ－５ Ⅱ層
第12図 図版12	42		ⅧⅠc	－ － 4.4	上記41の高台破片。ベトナム青磁か中国南部の青磁か。高台を蛇ノ目状に成形した後で畳付外端を斜位に削って面を取る。高台内面は深く斜位に削り取っている為、外底面が三角錐状に突出。	淡灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物が多量に混入。灰緑色の透明釉。	内面は施釉。外面は高台際まで施釉。内面に粗い貫入。	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅰ層
第13図 図版13	43	無文碗底部	ⅧⅠa	－ － 5.6	畳付外端を斜位に削り取った為、畳付の幅が極端に狭くなる。見込みに印文を施すが文様が判然としない。印文の周辺に片切り彫りで圏線を施す。	淡灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物が僅かに混入する。明緑色の釉。	内面は総釉。外面は高台外面まで施釉。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第13図 図版13	44			－ － 6.0	畳付外端を軽く斜位に削る。見込みに「卍」字文を花心とした印花を施す。	淡灰白色の微粒子。濃緑色の釉。	内面は総釉。外面は高台外面まで施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第13図 図版13	45			－ － 6.0	畳付外端を軽く斜位に削る。見込みに印文を施すが釉が失透釉で判らない。畳付が研磨されている。大振りの碗の高台破片。	橙茶色の粗粒子。微細な白色鉱物が少量混入する。黄緑色の失透釉。	内面は総釉。外面は高台外面まで施釉。両面に非常に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第13図 図版13	46		ⅧⅠb	－ － 5.7	畳付の両端を雑に削り取って成形している為、部分的に畳付が尖っている箇所がある。見込みに印花花文と圏線（陰圏線）を施す。大振りの碗の底部。畳付が研磨されている。	淡灰色の微粒子。明青緑色の釉。	内面は総釉。外面は高台内面途中まで施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第13図 図版13	47			－ － 5.7	高台の内刳りは他と比較して深い。内底面に片切り彫りによる圏線を施す。	淡灰白色の微粒子。明緑色の釉。	内面は総釉。外面は高台内面途中まで施釉。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｂ－４ Ⅱ層
第13図 図版13	48		ⅧⅠc	－ － 6.0	大振りの碗の高台破片。外底釉は総釉した後に蛇ノ目状に釉を掻き取っているが、掻き取りの際に畳付の一部を抉り取っている。見込みに印花文と圏線を施す。	淡白色の細粒子。濃緑色の釉。	内面は総釉。外底面を蛇ノ目状に釉掻き。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第13図 図版13	49			－ － 7.0	大振りの碗の高台破片。外底面を蛇ノ目状に掻き取る。見込みの釉を円形状に掻いて露胎させている。見込みに胎土目の陶土が付着。佐敷タイプから除外される碗である。佐敷タイプの後続のタイプか。	淡灰色の細粒子。濃緑色の釉。	両面に施釉した後に見込みと外底面の釉を掻き取る。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅱ層

第３表ｄ　慶来慶田城青磁観察一覧

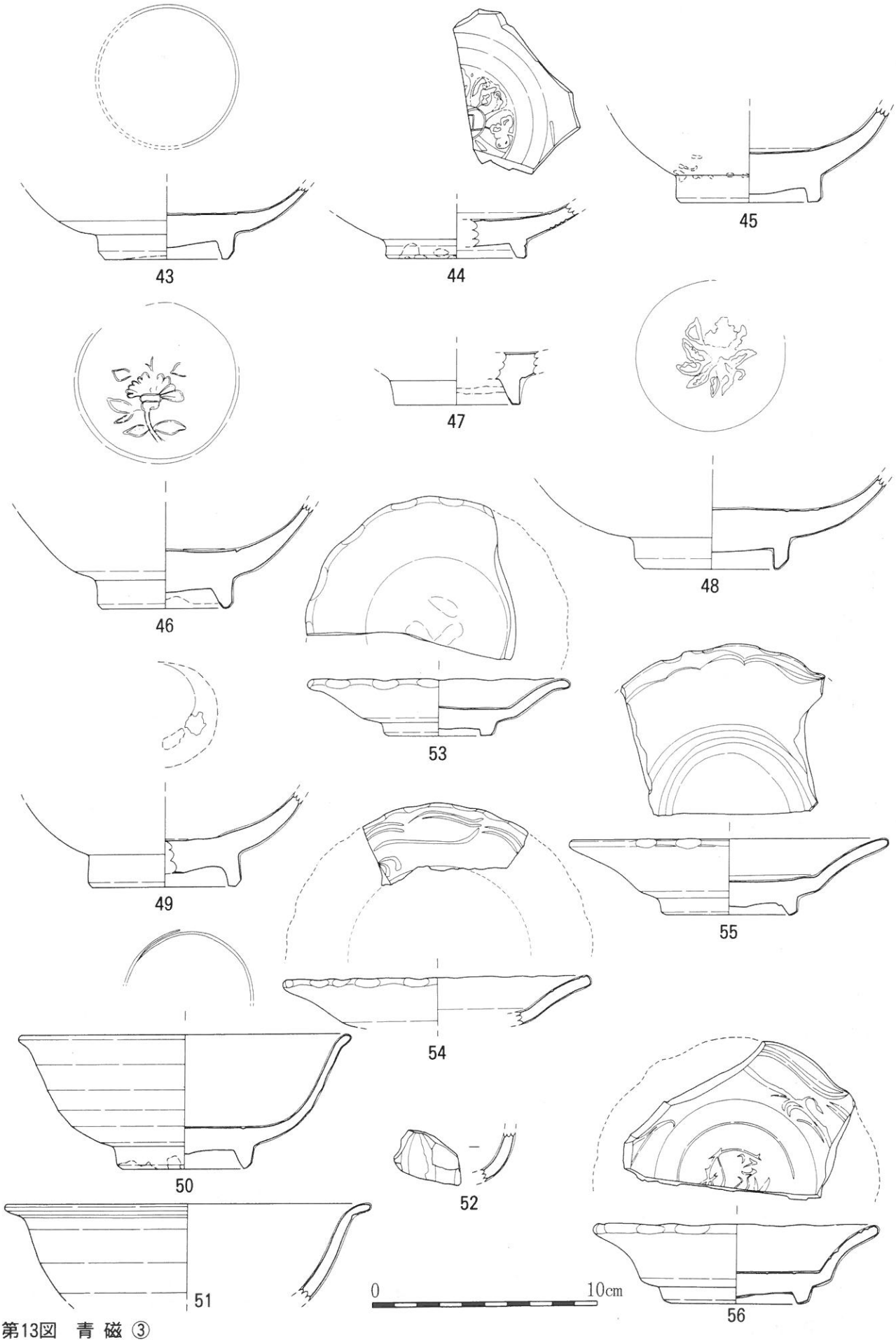
挿図図版	番号	名称・仮称	分類	法量	器形・成形・文様等の特徴	素地・釉色	施釉・貫入	出土地
第13図 図版15	50	無文碗	ⅧⅡA	－ － 5.6	口縁がきつく外反する碗。口唇は若干丸味を持たせて成形する。外面に顕著な轆轤痕が認められる。見込みにズレのある圏線を描く。高台内面を斜位に削り出している為、外底面が三角錐状に盛り上がっている。	淡灰色の細粒子。僅かに微細な黒色鉱物が混入する。明灰緑色の釉。	内面は総釉。外面は高台外面まで施釉。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第13図 図版13	51			16.0 － －	口縁がきつく外反する碗。口頸部に丸彫りで箆調整を加えて折れを強調。外面に轆轤痕が認められる。。	淡灰色の細粒子。僅かに微細な黒色鉱物が混入する。明灰緑色の釉。	両面とも施釉。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第13図 図版13	52	口折皿	Ⅰ	－ － －	口折皿の胴部片。片切り彫りによる蓮弁を描いている。	淡灰白色の微粒子。淡緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第13図 図版15	53	稜花皿	Ⅱ	12.6 3.5 6.4	口唇に刻みを入れてラマ式蓮弁の弁先を表現。腰下部で折れる。外底面の内刳りは浅いが削り出しは丁寧。畳付が研磨される。内面の文様は釉の透明度が著しく悪く判然としない。無文の稜花皿か。	灰色の細粒子。黄緑色の釉。	外面は高台外面まで施釉。内面は総釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第13図 図版13	54			13.6 － －	口唇に刻みを入れてラマ式蓮弁の弁先を表現。内面の口縁には二本櫛によるラマ式蓮弁の弁先を描き、弁先直下からは片切り彫りによる刻花文と圏線を描く。	灰褐色の粗粒子。微細な黒色鉱物が少量含まれる。明黄緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅱ層
第13図 図版15	55			14.7 3.3 6.7	口唇に刻みを入れてラマ式蓮弁の弁先を表現。内面の口縁には三本櫛によるラマ式蓮弁の弁先を描く。見込みに刻印を施すが文様は判らない。他に圏線を施す。外底面の仕上げは雑で凹凸が著しい。	淡橙白色の細粒子。微細な茶褐色の鉱物が少量含まれる。黄茶色の釉。	高台外面まで施釉。内面は総釉。両面に粗い貫入。	翁屋敷跡 北側石積みより採集
第13図 図版15	56			12.6 3.5 6.4	口唇に刻みを入れてラマ式蓮弁の弁先を表現。内面口縁に丁寧なラマ式蓮弁の弁先を二本櫛で描く。弁先直下からは片切り彫りによる刻花文を描く。腰の折れは他よりもきつく折れる。見込みに圏線と印花花文を施す。外底面の釉を蛇ノ目状に掻き取る。	淡灰白色の細粒子。淡緑色の釉。	両面は総釉した後に外底釉を掻き取る。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層上面
第14図 図版14	57	外反皿	Ⅲ	10.8 － －	当初、蓋の破片資料として考えていたが、内面に浅い圏線を施していることが確認されたので外反皿とした、口縁に削りを加えて玉縁状の肥厚を造る。肥厚帯直下からは轆轤痕が観察される。この種の皿の高台片とみられるのが、64であろう。	淡灰白色の細粒子。淡黄緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第14図 図版14	58			－ － (4.6)	Ⅲ群の高台片とみられる。畳付を欠く。見込みに印花文を施し、花芯に「全」の字款。	淡灰白色の細粒子。半磁胎。淡黄緑色の透明釉。	内面施釉。外面の釉は高台脇まで残存。両面に粗い貫入。	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第14図 図版14	59			－ － 4.4	器壁が2.5～3.0㎜と薄い皿。見込みの釉を雑に掻き取っている。外底面の削り出しも雑に成形。内底に浅い圏線。	淡灰色の細粒子。灰緑色の透明釉。	見込みは釉掻き。高台外面まで施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅰ層
第14図 図版16	60	盤	Ⅰ	21.4 9.4 5.2	鍔を平坦に成形する盤。口縁外面から高台脇まで明瞭な轆轤痕が観察される。見込みに印花花文と陽圏線を施す。	淡灰色の細粒子。黄緑色の透明釉。	内面は施釉。外面は高台外面まで施釉。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第14図 図版16	61		Ⅱ	23.6 4.0 8.2	鍔端をつまみ上げる鍔縁盤。内面に四本櫛（一本幅約2.5㎜による蓮弁文）による蓮弁文を描く。見込みに陽印花花文と陽圏線を施す。	淡黄白灰色の細粒子。黄緑色の釉。	内面は施釉。外面は畳付まで施釉。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅱ層
第14図 図版14	62	鉢	Ⅰ	－ － －	鎬のある蓮弁を施した大鉢の破片とみられる。蓮弁は丁寧に高台脇まで描いている。	淡灰色の細粒子。淡青緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第14図 図版14	63		Ⅱ	20.4 － －	口頸部で「く」の字状に折れ、口縁が内湾する。内面に片切り彫りによる刻花文を描く。	淡灰白色の微粒子。淡青灰色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第14図 図版14	64		Ⅲ	－ － －	口縁が大きく内側に内湾する浅鉢とみられる。口縁に三本櫛の圏線と片切り彫りによる刻印文を描く。	淡灰色の細粒子。淡灰緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 表採
第14図 図版15	65	杯	Ⅰ	7.8 4.9 3.4	八角形に面取りされた腰折の杯。内面の口縁には口唇に沿うように片切り彫りで沈線を描く。	淡灰色の細粒子。淡黄緑色の釉。	内面は総釉。外面の釉は高台脇まで施す。両面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第14図 図版14	66	瓶		－ － －	長頸の瓶とみられる。内面に轆轤痕が観察される。内面は薄く透明釉が掛けられ黄灰色を帯びている。	淡灰白色の細粒子。淡青色の釉。	両面とも施釉。外面に粗い貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第14図 図版14	67	蓋		－ － －	酒会壺の蓋。蓋の縁辺が波状に成形されたタイプの破片。	淡灰白色の細粒子。淡青緑色の釉。	外面から内面の縁辺まで施釉。	翁屋敷跡 Ｅ－３ Ⅱ層
第14図 図版14	68	香炉		8.6 － －	三足香炉の破片。口唇を僅かに凹ませた寄口口縁の香炉。外面に弦文を施す。胴中央に箆による斜沈線を加えている。	淡灰白色の微粒子。明緑色の釉。	外面は施釉。内面は腰下部まで施釉。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第14図 図版14	69			－ － 3.6	香炉の高台破片とみられ、薄造りである。文様はない。畳付外端を斜位に釉掻きを兼ねて成形した為、畳付の幅が１㎜程度と極端に狭い。外底の内刳りは深く、中央部で三角錐状に浅く盛り上がっている。	淡灰白色の微粒子。明緑色の釉。	内面は施釉。外面は高台外面途中まで施す。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅲ層
第14図 図版14	70	不明		－ － －	大振りの碗か鉢の破片。外面と片切り彫りの蓮弁を描く。内面には刻花文を描く。	淡灰白色の微粒子。明緑色の釉。	両面とも施釉。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第14図 図版14	71	鉢底部		－ － 10.7	大振りの鉢の高台破片。内面の釉は蛇ノ目状に掻き取っている。外面は外底面まで総釉した後に釉掻きを兼ねて高台の内外面を成形する。	淡灰白色の細粒子。明青色の釉。	内底釉は蛇ノ目掻き取り。高台の内外面と畳付を除き施釉。両面に粗い貫入。	翁屋敷跡 南側より採集



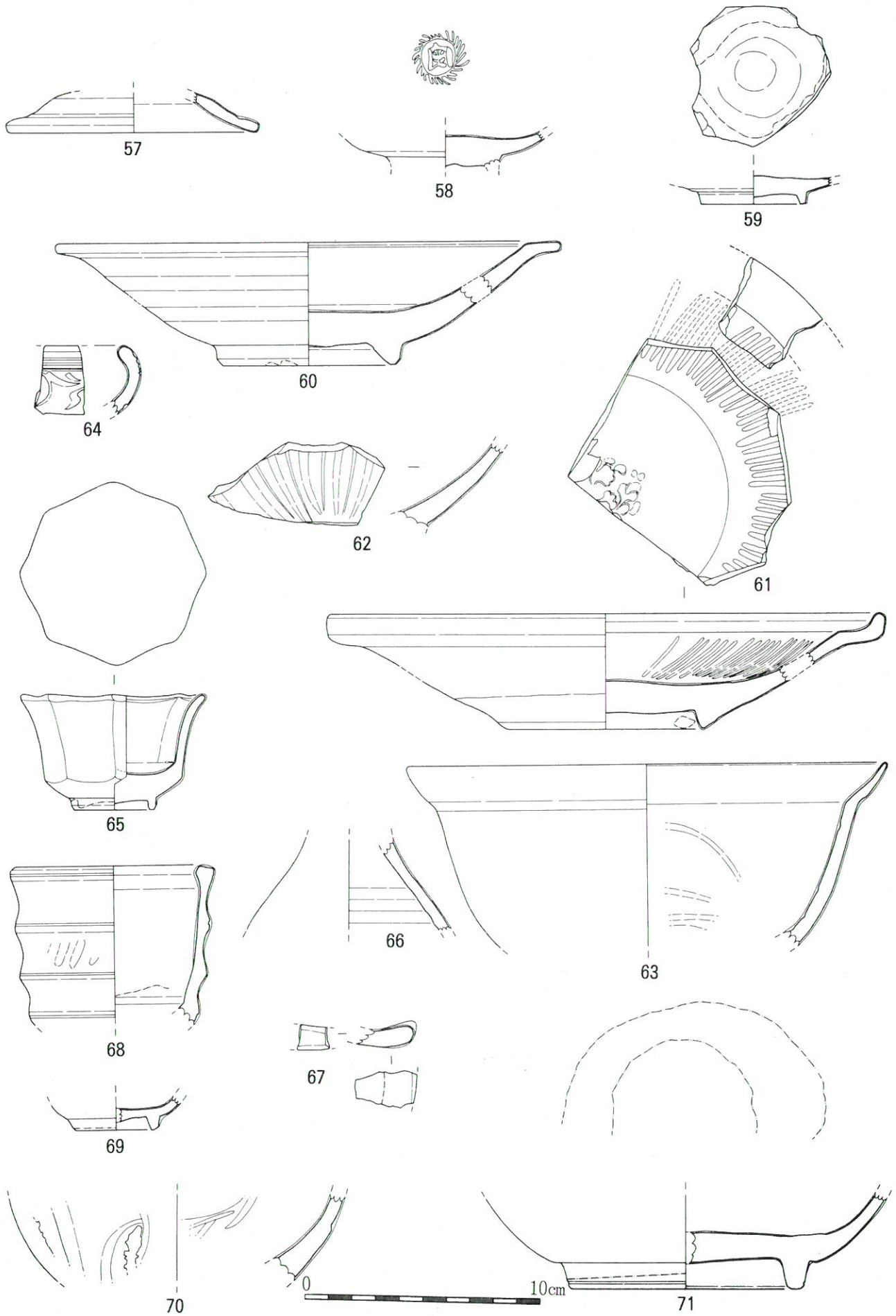
第11図　青 磁 ①


20
22
21
23
24
25
26
27
28
29
30
32
33
31
34
35
37
36
39
41
40
42
38
0
10cm

第12図　青 磁 ②



第13図　青 磁 ③



第14図　青 磁 ④

第４節　白　磁

白磁の器種として、碗・小碗・皿・小杯・壷・灯火器 ・蓮華の７器種が得られている。白磁の出土傾向として他の青磁・染付と同様にⅠ地区（翁屋敷跡・鍛冶屋跡）においては、Ⅱ地区（薩摩在番跡）よりも多量に出土していることが窺えた。白磁の中には古手の玉縁碗・ビロースクタイプ碗・端反碗なども含まれている点が注目されるところであった。白磁の時代観については、金武正紀氏の「沖縄の中国陶磁器」（註１）と大橋康二氏、同定の『湧田古窯跡（Ⅰ）・（Ⅱ）』（註２）を参考に決定した。以下、碗・小碗・皿などの各器種ごとに分類概念を述べてみることにする。個々の特徴などについては観察表に呈示した（第６表・第19表）。

イ）碗（第15図１～12、第16図13～17、第60図１・２）・（図版17、図版47）

碗の種類として、玉縁口縁碗・ビロースクタイプ碗Ⅱ（註３）・薄手直口縁碗・端反り碗・外反口縁碗・直口口縁碗などが出土している。これらの碗を分類整理したものが以下に記した分類である。

Ⅰ類（第15図１）・（図版17）

いわゆる白磁玉縁碗。器壁は薄造りで口縁の玉縁が小さいもの。（11世紀末頃～12世紀前半）。

Ⅱ類（第15図２・第60図１）・（図版17・図版47）

ビロースクタイプ碗Ⅱ。内灣型の碗。（13世紀末～14世紀中頃）。

Ⅲ類（第15図３）・（図版17）

端反碗。非常に器壁の造りが薄い碗で、口唇中央で尖らせ、両端を斜位に面取りの成形を実施するタイプで、口唇内端に鮮明な稜が横走するもの。（13世紀後半～14世紀前半）。

Ⅳ類（第15図４）・（図版17）

薄手直口口縁の碗。内側へ斜位に口唇を削り出して成形するため、口唇内端に明瞭な稜を示すものである。（13世紀末頃～14世紀中）。

Ⅴ類（第15図５～７）・（図版17）

外反碗。高台造りや施釉手法などはビロースクタイプ碗と類似するが、ビロースクタイプ碗より、大振りの碗である。（14世紀末～15世紀前半）。

Ⅵ類（第60図２）・（図版47）

ビロースクタイプ碗Ⅱに後続するタイプの碗。口造りなどで異なっている。（14世紀中頃～15世紀）。

Ⅶ類（第15図８～12・第16図13・14）・（図版16～18）

15世紀後半～16世紀頃に比定される薄造りの碗である。Ⅳ類と類似するが、Ⅶ類碗は口縁形態と高台の成形でⅣ類碗と区別が出来る。Ⅶ類碗は口造りなどでａ～ｃまでの３種類に細分した。ａ～ｃの３種とも外面に轆轤痕が観察される点で共通した要素を保持し、釉色も近似する。

Ⅶ類ａ種…口縁が直口口縁のもので、口唇を平坦に仕上げる。

Ⅶ類ｂ種…口縁が「く」の字状に折れて外反するもの。口唇を平坦に仕上げる。

Ⅶ類ｃ種…口縁の外反はｂ種よりも弱く微弱である。口唇を平坦に仕上げる。

Ⅷ類（第16図15～17）・（図版16・18）

器壁を非常に薄く成形した外反口縁の碗。高台を高目に成形し、内底釉を蛇の目状に掻き取っている。素地が軟質のものと硬質のものが存在する。前者をａ種、後者をｂ種とした。

Ⅷ類ａ種…軟質の素地を用いた薄手の外反口縁碗。（16世紀後半～17世紀）。

Ⅷ類ｂ種…硬質の素地を用いた薄手の外反口縁碗。（16世紀前半か）。

ロ）小碗（第16図18～20）・（図版18）

轆轤成形のものと型成形のものがあり前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。

Ⅰ類（第16図18）・（図版18）

高台外面を斜位に雑に削り出して低目に成形する小碗。高台外面の成形に関しては意識として低いが、外底面に関しては内刳りを意識して深く削り取っているもの。（15世紀後半～17世紀頃）。

Ⅱ類（第16図19）・（図版18）

高台の外面を型造りで型取った後に一部、外底面を浅く削り取って高台を造る。畳付に目痕が４ケ所で確認されているもの。（17世紀頃）。

Ⅲ類（第16図20）・図版18）

高台を完全なる型造りで仕上げたもので、畳付に胎土目が付着する。（18世紀～19世紀）。

ハ）皿（第16図21・22、第60図３）・（図版18、図版47）

高台や底造りで２種類のタイプが存在したものでⅠ類とⅡ類に分類した。

Ⅰ類（第16図21、第60図３）・（図版18、図版47）

いわゆる抉入高台皿。（15世紀～16世紀）。

Ⅱ類（第16図22）・（図版18）

碁笥底様に成形したタイプの皿。（15世紀後半～16世紀）。

ニ）小杯（第16図23、第60図４）・（図版18、図版47）

杯の高台破片が２片得られていた。内１点は型造り成形（16世紀～17世紀）であった（第16図23）。他は18世紀頃の小杯である。

ホ）壷（第60図５）・（図版47）

アンピン壷の底部片が１点得られていた。外底は削りによる成形でベタ底とする。（16世紀後半～17世紀前半）。

ヘ）灯火器（第16図24）・（図版18）

脚台付の秉燭。切り込みのある円筒状の灯心は貼り付けである。脚と身（器）の製作は個別に製作されたようであり、脚と身の境いに貼り付けの痕跡が認められる。（清代）。

ト）蓮華（匙）・（第16図25）・（図版18）

一般的に蓮華と称されるもので、蓮華の花びらが散った形のスプーンを散蓮華と称している。散蓮華の皿の一部から柄の根元までの破片が１点出土している。（18世紀～19世紀前半）。

小　結

第Ⅰ地区からは碗のⅠ類（白磁玉縁碗）・Ⅱ類（ビロースクタイプ碗Ⅱ）・Ⅲ類（端反碗）・Ⅳ類（薄手直口口縁碗）・Ⅴ類（外反碗）のタイプが少量ながら出土している状況にあり、恐らく、Ⅰ地区の翁屋敷跡・鍛冶屋跡のⅢ層は元来、碗Ⅱ類からⅤ類までを含んだ古い時期（13世紀中頃～14世紀中頃）のプライマリーな包含層が存在していた可能性が十分に考えられる。これは青磁の碗のⅠ群（鎬蓮弁文碗）・Ⅰ群Ａ類（薄手の直口口縁碗・無鎬蓮弁文）などの状況からも窺い知ることが出来る。

西表島で13世紀中頃～14世紀中頃の遺跡の発見例は、今までに浦内のフチュクル遺跡（註４）の一例のみであった。今回、Ⅰ地区の翁屋敷跡・鍛冶屋跡のⅢ層で13世紀中頃～14世紀中頃の遺物が僅かではあるが確認された意義は大きいものとみられる。13世紀中頃～14世紀中頃のプライマリーな包含層は、外離島から15世紀中頃から終末頃に上村に移住してきた慶来慶田城用諸を頭（領主）とする一族によって屋敷の普清などの造成による攪乱や近年の耕作などによって攪乱を受けていたことが予想される。

碗Ⅰ類（白磁玉縁碗）の類例として、石垣市のビロースク遺跡（註５）。波照間大泊浜貝塚（註６）などで出土しているが、本資料は水磨を受けている状況などから海岸や河川などから破片を持ち込んできた可能性が高いようである。このⅠ類の碗のみ他のⅡ類～Ⅴ類の時期と若干、掛離れていて11世紀末頃～12世紀前半の時期となっている。遺跡周辺に11世紀末頃～12世紀前半頃の遺跡（無土器の終末期）が将来発見されることも考えられる。

碗Ⅲ類（端反碗）は波照間大泊浜貝塚のタイプは異なり、時代が13世紀中頃～14世紀前半頃の端反碗である。糸数城跡（註７）で出土したタイプと同時期のものとして考えられる。

Ⅳ類（薄手直口口縁の碗）は与那国町慶田崎遺跡（註８）・与那原遺跡（註９）などで出土していて、金武正紀氏によって13世紀終末～14世紀中葉の時期（註10））に比定されている。

Ⅰ地区での主体は15世紀終末～17世紀に比定される碗Ⅶ類・碗Ⅷ類などの盛行期である。その他に管見の限り

先島（宮古・八重山地域）では報告例のない灯火器・アンピン壷が注目された。灯火器やアンピン壷は湧田古窯（註11）で報告があるのみで県内でも数が少なく重要な資料である。蓮華については、県内で初めて確認された資料とみられるものである。

註

註１　金武正紀「沖縄の中国陶磁器」『月刊考古学ジャーナル』　６月号　（第320号）　ニューサイエンス社　1990年６月。

註２　大城 慧・豊見山 禎ほか『湧田古窯跡（Ⅰ）』　沖縄県教育委員会　1993年。
　　島袋 洋・豊見山 禎ほか『湧田古窯跡（Ⅱ）』　沖縄県教育委員会　1995年。

註３　金武正紀「ビロースクタイプ　白磁碗について」『貿易陶磁研究』　第８号　日本貿易陶磁研究会　1988年。

註４　金城亀信「④浦内フチュクル遺跡」第６節　西表島『ぐすく　グスク分布調査報告書（Ⅲ）－八重山諸島』　沖縄県教育委員会　1994年。

註５　金武正紀・阿利直治ほか『ビロースク遺跡』石垣市教育委員会　1983年。

註６　金武正紀ほか『下田原貝塚・大泊浜貝塚』（第１・２・３次発掘調査報告）　沖縄県教育委員会　1986年。

註７　金城亀信ほか『糸数城跡』（発掘調査報告書Ⅰ）　玉城村教育委員会　1991年。

註８　金武正紀・大田宏好『慶田崎遺跡』　与那国町教育委員会　1986年。

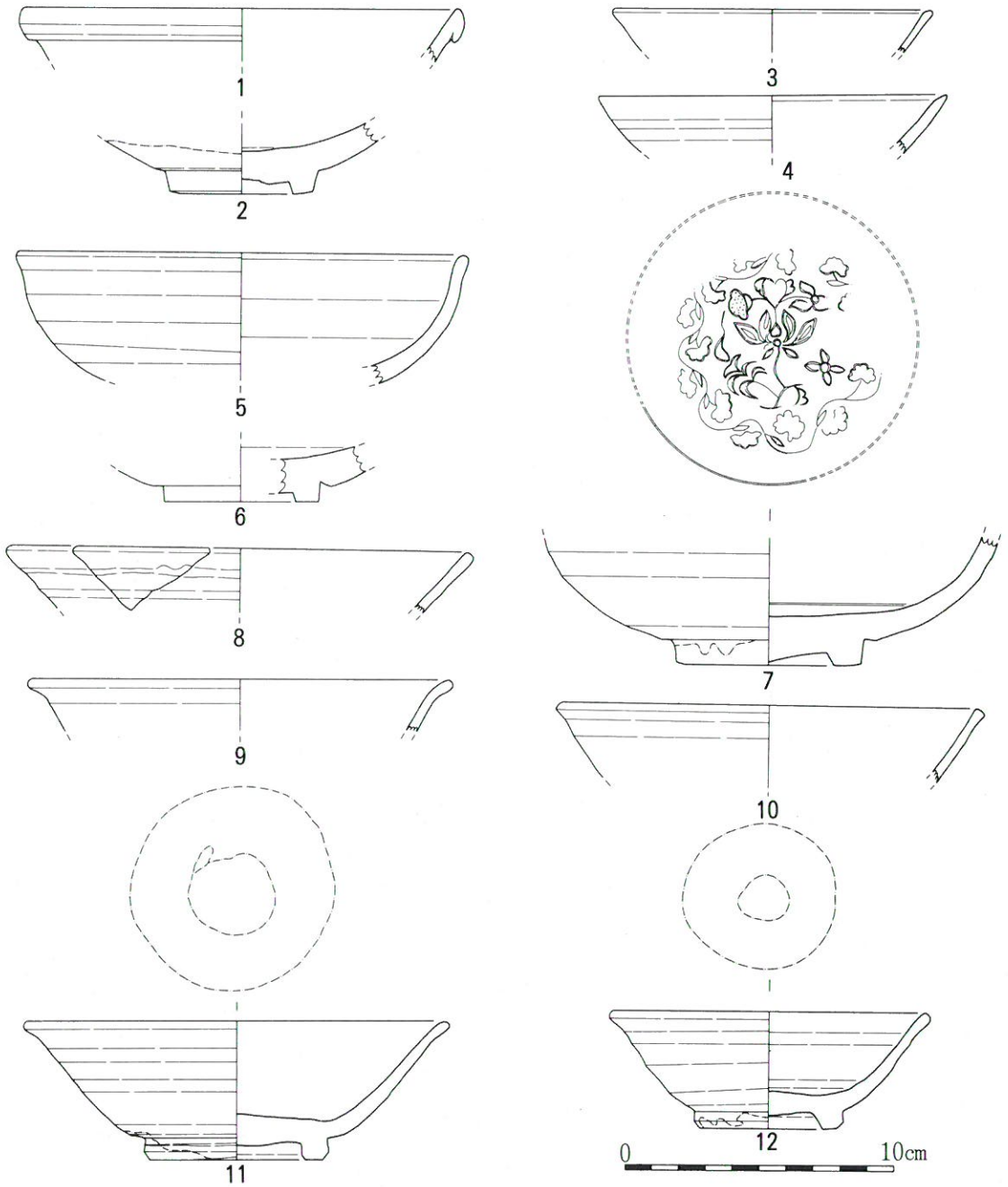
註９　金城亀信『与那原遺跡』　与那国町教育委員会　1988年。

第４表ａ　白磁観察一覧

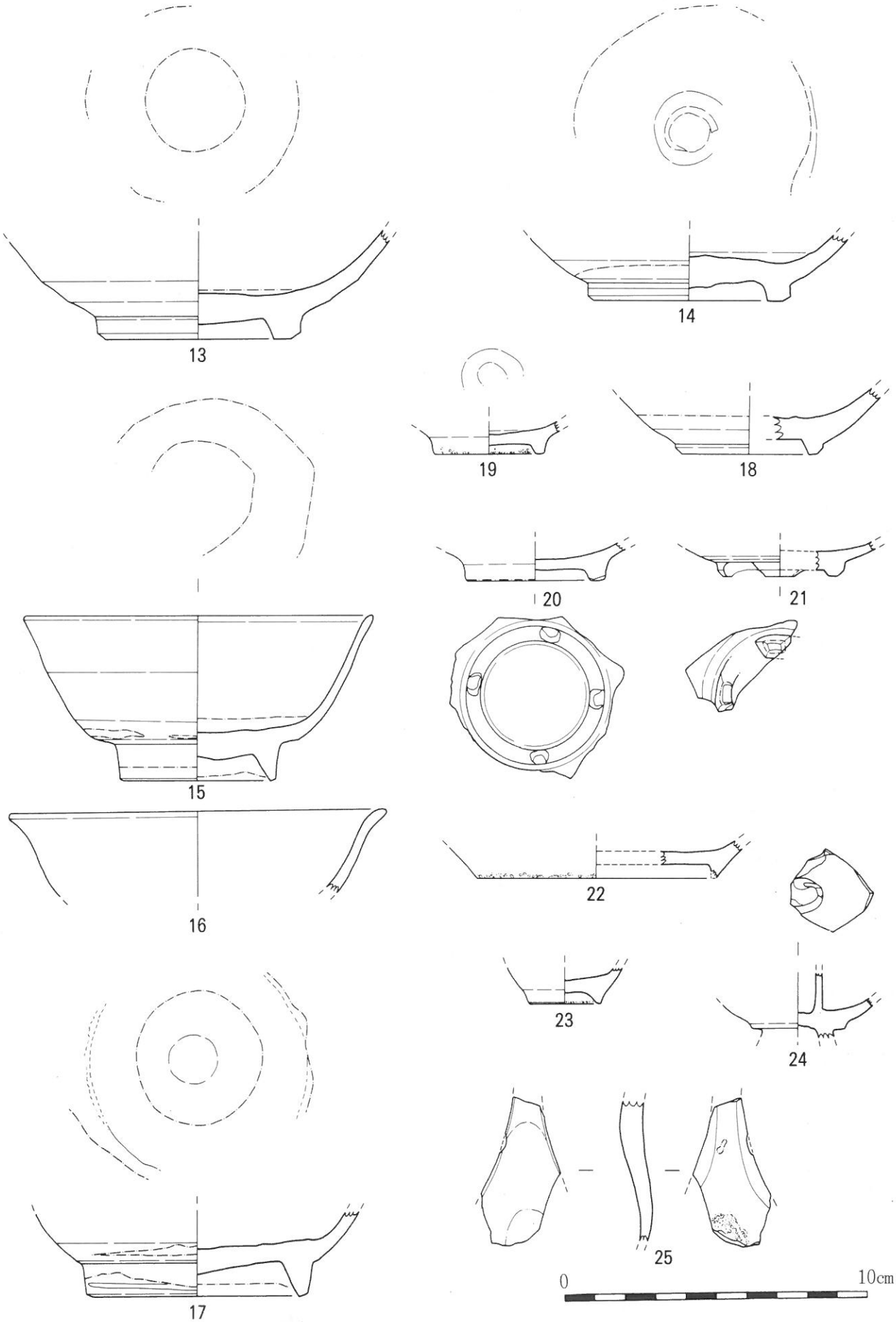
挿図図版	番号	器種	分類	法量	特徴	出土地
第15図 図版17	1	碗	Ⅰ	12.7 － －	玉縁碗の口縁破片で水磨を受けた資料である。玉縁の肥厚は折り返しで成形され、肥厚部に削りを若干、加えて仕上げている。釉は淡灰白色で両面に施した様であるが、肥厚部の釉は水磨によって禿げ落ちている。素地は白色の微粒子である。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅰ層
第15図 図版17	2		Ⅱ	－ － 5.2	淡灰白色の釉は外面が高台際まで施している。内面は総釉されている。高台際から高台脇にカンナ目が観察される。畳付は研磨が施されている。素地は灰白色の細粒子。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第15図 図版17	3		Ⅲ	11.8 － －	口縁が微弱に外反する薄造りのものである。口唇中央で尖っていて、口唇内端は斜位に面取りを兼ねた成形のため、鮮明な稜が走る。淡灰白の透明釉を両面に施している。両面に細かい貫入がある。素地は淡灰白色の細粒子。	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅲ層
第15図 図版17	4		Ⅳ	12.8 － －	直口口縁の碗の破片。口唇を内側へ斜位に削り出して尖らせている。口唇内端に明瞭な稜が観られる。外面に轆轤痕が観察される。灰白色の釉を両面に施している。素地は淡灰白色の微粒子である。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅲ層
第15図 図版17	5		Ⅴ	16.4 － －	外面に轆轤痕が顕著に認められる。淡灰白色の釉を両面に施している。灰白色の細粒子。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅰ層
第15図 図版17	6		Ⅴ	6.5 － －	外面は露胎で、内面にのみ灰白色の釉を掛けている。内底に圏線が施されている。素地は灰白色の細粒子。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅰ層
第15図 図版17	7		Ⅴ	－ － 6.8	外面に轆轤痕が観られる。内面には圏線と印花花文を施す。淡灰白色の釉を外面は高台脇まで掛けていて、内面は総釉されている。高台は１cm内外と幅広く成形され、蛇ノ目状となる。素地は淡灰白色の微粒子である。畳付は全体的に研磨されている。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層下部
第15図 図版17	8		Ⅶａ	17.2 － －	口縁が逆「ハ」の字状に開く直口口縁の碗の破片。口唇を平坦に成形するが釉が掛けられ舌状となっている。外面に轆轤痕が認められる。両面に淡灰緑色の釉を施す。素地は淡灰白色の細粒子。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｅ－４ Ⅱ層
第15図 図版17	9		Ⅶｂ	15.7 － －	口縁を外反させ、口唇を平坦に成形するが、釉溜まりが生じ舌状となる。外面に轆轤痕が観察される。淡灰色の釉を両面に施す。素地は淡灰白色の細粒子である。両面に粗い貫入がある。	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅱ層
第15図 図版17	10		Ⅶｃ	15.8 － －	口縁が僅かに外反する。口唇を平坦に成形する。外面に轆轤痕が僅かながら存在する。淡灰白色の釉を両面に掛けている。素地は淡灰色の細粒子で微細な黒色鉱物が僅かに含まれている。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第15図 図版16	11		Ⅶｃ	14.5 5.1 6.4	復元可能な資料。蛇ノ目状に高台を成形し、高台際から外傾しながら直線的に頸部まで延びている。逆「ハ」の字状に開く浅碗である。口縁が僅かに外反する。外面には轆轤痕が顕著に認められる。見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取っている。釉色は黄灰色の失透釉を用いて、高台際まで施している。素地は淡黄白色の細粒子。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第15図 図版16	12		Ⅶｃ	11.8 4.3 5.0	上記11よりも小振りの浅碗で、図11とセットで出土したとのことである。口縁が僅かに外反し、口唇を平坦に仕上げている。両面に轆轤痕が観察される。見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取っている。釉色は黄灰色の失透釉を用いて高台際まで施している。素地は淡黄白色の細粒子である。両面に細かい貫入が観られる。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第16図 図版18	13		Ⅶ高台破片	－ － 6.0	Ⅶ類ａ種かⅦ類ｂ種の高台片とみられる。高台は蛇ノ目状高台で、畳付外端を斜位に削り取っている。内底面の釉は蛇ノ目状に掻き取っている。淡灰緑色の釉を高台外面まで施している。素地は淡灰白色の細粒子。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅰ層
第16図 図版18	14		Ⅶ高台破片	－ － 6.2	高台は蛇ノ目状に成形されている。内底面は円形状に釉が掻き取られていて、見込みに指圧痕が観られる。淡灰色の釉を高台際まで施している。黄灰色の細粒子。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第16図 図版16	15		Ⅷａ	11.4 5.4 4.8	薄手の外反碗である。高台を高目に仕上げる。高台脇に削りを深く入れ高台を成形した為、腰下部で折れ気味となる。口縁の外反は微弱である。外面に轆轤痕が観られる。内底釉を蛇ノ目状に釉掻きを実施する。畳付と高台外面途までは露胎である。乳白色の釉を使用する。素地は淡黄白色の粗粒子で半磁胎である。両面に細かい貫入。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第16図 図版18	16		Ⅷｂ	12.4 － －	薄手の外反碗の破片。釉は両面に施され淡灰白色を呈している。素地は白色の微粒子である。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第16図 図版18	17		Ⅷｂ	－ － 7.2	高台を高く仕上げている。内底釉を蛇ノ目状に掻き取っている。釉は淡灰白色で外面は畳付を除いて釉掛けする。素地は白色の微粒子である。貫入は内底面の見込みの釉溜まりに粗く入っている。	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第16図 図版18	18	小碗	Ⅰ	－ － 4.5	高台外面は斜位に雑な削り出しが実施され高台は低い。外底面の内刳りは深い。外面は轆轤で成形されている。内底面及び内面は露胎である。外面の胴下部に黄白色の釉を掛けている。素地は淡黄白色の粗粒子で半磁胎。非常に細かい貫入がある。	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層

第４表ｂ　白磁観察一覧

挿図図版	番号	器　種	分類	法量	特　徴	出土地
第16図 図版18	19	小　碗	Ⅱ	－ － 4.5	型造り成形の高台で、型取りの後に外底面を浅く削り取って仕上げている。重ね焼きによって生じた目痕が畳付で４ケ所、内底面で３ケ所の計７ケ所で確認出来る。白濁色の釉は外底面と畳付を除いて施されている。素地は淡黄白色の細粒子で半磁胎となっている。非常に細かい貫入が観察される。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第16図 図版18	20		Ⅲ	－ － 3.6	型造りの高台で畳付に胎土目や釉が付着する。白濁色の釉は畳付を除いて両面に施す。素地は白色の細粒子。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第16図 図版18	21	皿	Ⅰ	－ － 3.8	抉入高台皿の破片。内底面と畳付に目痕が観察される。淡灰色の釉を施している。素地は白色の細粒子である。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅲ層
第16図 図版18	22		Ⅱ	－ － 7.8	碁笥底様に成形した皿。畳付は剥離して残っていないが、尖り気味に成形されたものとみられる。淡灰白色の釉を両面に施している。素地は白色の微粒子。貫入はない。	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅱ層
第16図 図版18	23	小　杯		－ － 2.3	型造り成形の小杯。畳付のみが露胎し、両面に淡黄白色の釉を施す。素地は白色の微粒子。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｃ－６ Ⅱ層
第16図 図版18	24	灯火器		－ － －	脚台付きの秉燭の破片。切り込みのある円筒状の灯心を皿の見込みに貼り付けている。脚と皿は個別に成形されていて最終的に貼り付けて一体化させている。残存部位は全て釉が掛けられている。白色の釉である。素地は白色の微粒子。内面にのみ細かい貫入が観られる。	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第16図 図版18	25	蓮　華		－ － －	散蓮華の破片である。皿の一部と柄の根元が残存している。皿の外底面に釉が付着している状況から型造りの可能性が考えられるが判然としないところである。淡い灰白色の釉を両面に施している。素地は淡灰白色の微粒子。貫入はない。	翁屋敷跡 Ｄ－４ Ⅱ層



第15図　白 磁 ①



第16図　白 磁 ②

第5節　染　付

染付はⅠ地区（翁屋敷跡と鍛冶屋跡）とⅡ地区（薩摩在番跡）の2地区間での細かい変化を把握する目的で、Ⅰ地区を翁屋敷跡と鍛冶屋跡の2ヶ所に分離して報告する。従ってⅠ地区は翁屋敷跡と鍛冶屋跡の2地点とⅡ地区の薩摩在番跡を含めた3地点となる。

ここでは上記、Ⅰ地区の翁屋敷跡・鍛冶屋跡とⅡ地区の薩摩在番跡の3地点から出土した染付の共通の分類概念を記述し、個々の特徴については観察表に呈示する（第8表a～第8表d）。

分類に際しては、大橋康二氏の鑑定した成果を踏えて分類に生かし、窯別あるいは年代別に実施した。

確認された器種として、碗・小碗・小皿・皿・小杯・瓶・水注の7種類であった。

イ）碗（第17図1～13、第18図14～24、第20図1～19、第21図20～22・24、第61図1～3）・（図版19～24）

碗についても復元可能な資料が2・3点と少なかった為、口縁の形態・文様・高台の形態と時期的なものを基準にしながら分類を実施した。その結果、碗はⅠ類からⅦ類までの7種類となった。これら7種類の中で細分分類が可能なものについてはa・b・cなどに分けた。

Ⅰ類（第17図1、第20図1、第61図1）・（図版19・22・図版48）

外反口縁の碗。文様として「宝相華唐草文」・「四方襷文」などを描く。（15世紀後半～16世紀代）。

Ⅱ類（第17図2、第20図2～4）・（図版19・22）

いわゆる「蓮子型」と称される碗。文様は「芭蕉文」・「アラベスク」などを描く。（16世紀前半～16世紀中頃）。

Ⅲ類（第17図3～7）・（図版19）

直口口縁の碗で、口縁が逆「ハ」の字状に開いている。外面の口縁に波濤文帯を描く。波濤文などの表現の方法などからa・bの2種類に細分した。（16世紀前半～16世紀中頃）。

Ⅲ類a種…文様帯の波濤文を具象的に描いて表現したものと波濤文の代わりに花文を描いたものも含めた。

Ⅲ類b種…文様帯の波濤文を描象的に描き、波状文と点描で表現したもの。

Ⅳ類（第17図8～10、第20図5～7）・（図版19・22・24）

腰折れ碗。復元可能な資料が1点得られている。口縁の傾き具合いはⅢ類よりもかなり内側へ閉じ気味となる。波濤文はⅢ類b種と同様に描象的に描いている。（16世紀前半～16世紀中頃）。

Ⅴ類（第17図11～13、第18図14・15、第20図8・9・13）・（図版19・20・22）

口縁がやや内灣するタイプの碗といわゆる「饅頭心型」の碗がある。文様の種類としては、「唐草文」・「蝶」などの他に外底面に「大明成化年製」の字款を描く。（16世紀末頃～17世紀）。

Ⅵ類（第18図18～21、第20図10～12・14～19、第21図20、第61図2）・（図版20・22・23・図版48）

口縁部が微弱に外反するものと僅かながら内灣する2種類の碗が存在し、前者をa種とし、後者はb種として細分した。

Ⅵ類a種…口縁部が微弱に外反するものを基本とするが直口口縁も含めた。文様として「唐草文」・「菊唐草文」・「四方襷文」・「飛馬文」などを描く。（17世紀後半～18世紀前半）。

Ⅵ類b種…口縁部が僅かに内灣する碗。文様は「竹葉文」を描く。（17世紀後半～18世紀前半）。

Ⅶ類（第18図22～24、第21図21・22・24）・（図版20・23）

口縁の形態などからa・bの2種類に細分した。Ⅶ類は18世紀代の碗である。

Ⅶ類a種…口縁が内灣する碗で、器壁が薄く成形されるもので、「菊唐草文」・「蓮弁文」・「唐草文」などを描く。（18世紀代）。

Ⅶ類b種…外反口縁の碗。文様として「草花文」を描く。（18世紀代）。

ロ）小　碗（第19図25～42、第21図23・第21図25～31、第61図４）・（図版21・23・24、図版48）

小碗は口縁形態・文様などと年代観を考慮しながらⅠ類とⅡ類の２種類に分類した。Ⅱ類については、ａ種～ｃ種までの３種類に細分した。

Ⅰ類（第19図25～27、第21図23）・（図版21・23）

口唇部を尖り気味に成形した内灣の小碗。文様として「四方襷文」・「唐草文」・「点描文」などの他に外底面に「大明成化年製」の字款を描いたものとして考えられるものもある。（17世紀～18世紀前半）。

Ⅱ類（第19図28～30・42、第21図25～31、第61図４）・（図版21・23・24・図版48）

Ⅰ類の小碗と「四方襷文」を描く点で類似するが、口縁形態などからａ～ｃの３種類に細分した。

Ⅱ類ａ種…口縁は僅かに外反し、口唇が口禿となるもの。（18世紀頃）。

Ⅱ類ｂ種…口縁は直口口縁となるもので、口唇が口禿となるものとそうでないものの２種類が存在する。文様として「芭蕉文」・「花と蜂」などを描く。（18世紀頃）。

Ⅱ類ｃ種…腰折れの小碗。文様として「如意頭繋ぎ文」・「波濤文」・「唐草文」などを描く。（16世紀末頃～17世紀前半）。

ハ）小　皿（第19図31～35、第61図５・６）・（図版21・図版48）

口縁形態や底造りなどの特徴からⅠ類からⅢ類に分類した。

Ⅰ類（第19図31・32、第61図５）・（図版21・図版48）

いわゆる「碁笥底」の皿。文様は「芭蕉文」・「波濤文」などを描いている。（16世紀前半～16世紀中頃）。

Ⅱ類（第19図33・34）・（図版21）

口縁部に小さな玉縁状の肥厚を造る皿である。文様は「四方襷文」・「界線」を描く。（16世紀後半～17世紀前半）。

Ⅲ類（第19図35）・（図版21）

口縁が内灣する皿。成形は型造り。「波濤文」・「界線」などを描いている。（18世紀頃）。

Ⅳ類（第61図６）・（図版48）

口縁が鍔縁状に強く折れて外反する皿。文様として「宝相華唐草文」・「界線」などを描く。（16世紀前半～16世紀中頃）。

ニ）皿（第19図36、第21図32・33）・（図版21・23・24）

高台径が６cm以上、7.5cm以下の範囲に納まるものを皿とした。内底面に「草花文」・「龍」などを描いている。

ホ）小　杯（第19図37～41・43～44、第21図34・35、第61図７）・（図版21・23・24、図版48）

小杯の口縁形態は直口型と外反型の２種類が存在し、前者をⅠ類、後者がⅡ類とした。

Ⅰ類（第19図37～41・43・44、第61図７）・（図版21・図版48）

直口口縁の小杯。「梵字文」・「草花文」などを描く。この種のものは16世紀後半～18世紀までと時代に幅があるが、主体は17世紀後半から18世紀のものである。

Ⅱ類（第21図34・35）・（図版23・24）

外反口縁の小杯。「飛馬文」・「芭蕉文」などを描く。（未同定）。

ヘ）瓶（第19図45、第21図36～38）・（図版23）

瓶の胴部片と底部片が得られている。「如意頭繋ぎ文」・「唐草文」・「蓮弁文」などを描く。（15世紀末頃～17世紀）。

ト）水　注（第21図39）・（図版23）

水注の高台とみられるものが１点得られていたので、これを図化した。文様は「如意頭繋ぎ文」などを描く。（16世紀～17世紀前半）。

小　結

染付の碗でⅡ類として取り扱ったものは、「蓮子型」と称された碗とⅣ類として取り扱った腰折れ碗については、過去に調査を実施した上村遺跡（註１）からも出土していて本遺跡の第Ⅰ地区と上村遺跡間に於いて一時期平行する関係にあったものとして解釈される。

さて、Ⅰ地区とⅡ地区の器種別の出現頻度を把握する目的で第７表を作成してみた。ここで注目されるのはⅡ地区の状況であった。Ⅱ地区の薩摩在番跡が機能した時期は、1640年頃～1648年頃（註２）（17世紀中頃）であり、Ⅱ地区出土の染付で時期的に一致するのは小杯Ⅰ類のみであった。他の碗Ⅰ類・Ⅵ類ａ種、小碗Ⅱ類ｃ種、小皿Ⅰ類・Ⅳ類の３器種は伝世品もしくは薩摩在番跡を普譜する際の造成の際に持ち込まれたかあるいは在番以前の遺物包含層が下位の層から上位の層へ攪乱によって移動していた状況などが考えられるところである。第Ⅱ地区においては、染付でのアプローチは困難であった。これとは逆に第Ⅰ地区においては慶来慶田城用緒が外離から移り住んできた時期と伝承されている15世紀中頃～15世紀終末頃の染付も出土している状況からも第Ⅰ地区については、伝世品が存在する確率は極めて低くなることが推察された。慶来慶田城の一族の古い歴史が染付で窺い知ることが出来るのではないだろうか。

第５表　器種分類と分類別の出現頻度

器種・分類＼出土地			Ⅰ地区 翁屋敷跡	Ⅰ地区 鍛冶屋跡	Ⅱ地区 薩摩在番跡	備考
碗	Ⅰ		○	○	○A	15C後半～16C前半。Aは16C。
	Ⅱ		○	×	×	15C末～16C。
	Ⅲ	a	○	×	×	16C前半～16C中。
		b	○	○	×	16C前半～16C中。
	Ⅳ		○	○	×	15C末～16C中。
	Ⅴ		○	○	×	16C後半～17C。
	Ⅵ	a	○	○	○B	16C後半～18C前半。Bは16C後半～17C前半。
		b	○	×	×	17C後半～18C。
	Ⅶ	a	○	○	×	18C。
		b	×	○	×	18C。
小碗	Ⅰ		○	○	×	17C～18C前半。
	Ⅱ	a	○	×	×	18C。
		b	○	○	×	18C。
		c	×	○	○C	16C末～17C前半。Cは16C末～17C前半。
小皿	Ⅰ		○	×	○D	16C前半～16C中。Dは16C末～16C中。
	Ⅱ		○	×	×	16C後半～17C前半。
	Ⅲ		○	×	×	18C。
	Ⅳ		×	×	○E	16C前半～16C中。Eは16C前半～16C中。
Ⅲ			○	○	×	16C前半～16C中。
小杯	Ⅰ		○	×	○F	16C後半～18C。Fは18C。
	Ⅱ		×	○	×	年代不詳（未同定）。
瓶			○	○	×	15C末～17C。
水注			×	○	×	16C～17C前半。
出現率			78%	60%	26%	

注：出現率は７器種（22分類）の上記表23項目を100％とした。

註

註１．大城慧ほか『上村遺跡』（重要遺跡確認調査報告書）沖縄県教育委員会　1991年。

註２．石垣金星「文献からみた祖納の歴史」（上村遺跡を中心として）。註１に収録。

第６表ａ　染付観察一覧

挿図図版	番号	器種・仮称	分類	法量	文様・呉須・釉色・素地等の特徴	産地・年代	出土地
第17図 図版19	1	碗	Ⅰ	13.2 － －	外反口縁の碗。外面に界線と宝相華唐草文。内面は界線。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。白色の微粒子。	景徳鎮 16世紀代	翁屋敷跡 表採
第17図 図版19	2	碗	Ⅱ	－ － 5.8	「蓮子型」の碗。外面にアラベスク文。内底面に界線と巻貝。呉須はやや鈍い。一部に呉須が釉上に浮遊。淡灰白色の細粒子。外底面にカンナ目。釉は外底面まで達しているが高台の両面と畳付は露胎。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	翁屋敷跡 東側石積み表採
第17図 図版19	3	碗	Ⅲａ	12.4 － －	直口口縁の碗で逆「ハ」の字状に開く。外面に具象的な波濤文帯を表現。内面は幅広の界線を一条施す。呉須は鮮明。釉は淡灰白色。淡灰白色の細粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	翁屋敷跡 E－6 Ⅱ層
第17図 図版19	4			12.8 － －	直口口縁の碗で逆「ハ」の字状に開く。外面に波濤文と花文を具象的に描く。内面は二本一組の界線。呉須は鮮明。釉は淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	翁屋敷跡 D－4 表採
第17図 図版19	5	碗	Ⅲｂ	10.6 － －	直口口縁の碗で逆「ハ」の字状に開く。外面に抽象的な波濤文帯を描き、胴部にアラベスクを描く。内面に二本一組の界線。呉須はやや鈍い。釉は淡灰白色。淡灰色の細粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	翁屋敷跡 E－4 Ⅱ層
第17図 図版19	6			12.0 － －	直口口縁の碗で逆「ハ」の字状に開く。外面に抽象的な波濤文を描き、胴部にアラベスクを描く。内面に幅広の界線を一条施す。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰色の細粒子で細かい黒色の鉱物が希に含まれている。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	翁屋敷跡 E－2 Ⅱ層
第17図 図版19	7			－ － －	直口口縁の碗で逆「ハ」の字状に開く。外面に抽象的な波濤文を描く、内面に幅広の界線を一条施す。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の細粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	翁屋敷跡 E－3 Ⅱ層
第17図 図版19	8	碗	Ⅳ	10.8 － －	直口口縁の腰折れ碗。口縁は内面に閉じ気味。外側に抽象的な波濤文帯とその直下にアラベスク文？。内面に幅広の界線を一条施す。呉須は鈍く、淡い。淡青白色の釉。淡灰白色の細粒子で微細な黒色鉱物を僅かに含んでいる。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	翁屋敷跡 D－4 Ⅱ層
第17図 図版19	9			－ － 9.0	大振りの腰折れ碗。外面にアラベスクと二本一組の界線。高台外面にも二本一組の圏線を施す。内底面も二本一組の圏線。呉須はやや鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	翁屋敷跡 D－5 Ⅰ層
第17図 図版19	10			－ － 6.2	腰折れ碗。外面にアラベスク。高台外面に二本一組の界線を施す。内底面に二本一組の界線と花文を描く。呉須の色合いは濃緑色でやや鈍い。淡灰色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	翁屋敷跡 B－4 Ⅰ層
第17図 図版19	11	碗	Ⅴ	15.0 － －	口縁が僅かに内湾するタイプの碗。外面に抽象化された細密な唐草文と界線を描く。内面には幅広の界線を一条施す。呉須はやや鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	福建省 16世紀末頃～17世紀末頃	翁屋敷跡 E－6 Ⅱ層

第６表ｂ　染付観察一覧

挿図図版	番号	器種・仮称	分類	法量	文様・呉須・釉色・素地等の特徴	産地・年代	出土地
第17図 図版19	12	碗	V	14.3 － －	口縁が僅かに内湾する碗。外面に界線と抽象化された蝶を描く。内面に界線を一条施す。呉須は鈍く、部分的に黒ずむ。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	福建系 16世紀末頃～17世紀前半	翁屋敷跡 Ｅ－４ Ⅲ層
第17図 図版19	13			－ － 6.0	口縁が僅かに内湾する碗。外面に界線と抽象化された蝶を描く。内底面に界線二本とダミ技法による大根の葉を描く。呉須はやや鮮明。釉は淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。高台内外面にカンナ目。畳付は平坦に仕上げる。畳付と高台内面下端が露胎。	景徳鎮 16世紀末頃～17世紀始	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅰ層
第18図 図版20	14			－ － 5.0	碗の高台破片。高台外面に一条の界線と二本一組の界線。外底面に界線と「大明成化年製」の字款。呉須は鮮明。釉は淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。畳付と高台内外面下端が露胎。高台外面にカンナ目。畳付は丸味を持って成形。	景徳鎮 17世紀前半	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第18図 図版20	15			－ － 4.8	「饅頭心型」の碗。外面の高台脇に界線。内底面に界線と構図不詳の文様を描く。呉須は鈍い。淡灰青色の釉。淡灰色の細粒子。畳付を含めて総釉。	福建省 17世紀	翁屋敷跡 Ｅ－３ Ⅱ層
第18図 図版20	16	碗 胴 部		－ － －	碗の胴部片。外面に具象化した宝相華唐草文。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	窯不明。中国 17世紀	翁屋敷跡 Ｅ－７ Ⅰ層
第18図 図版20	17			－ － －	碗の胴部片。外面にダミ技法にほる宝相華唐草文。内面は花文。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡い灰白色の微粒子。	景徳鎮 17世紀	翁屋敷跡 Ｅ－３ Ⅰ層
第18図 図版20	18	碗	Ⅵａ	(12.8) － －	口縁が微弱に外反。外面に界線と如意雲。内面は界線。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の細粒子。	福建・広東系 17世紀後半～18世紀前半	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第18図 図版20	19			12.4 － －	口縁が微弱に外反。外面に波状文と花文？。口唇と口縁端部に鉄釉を施す。呉須はやや鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	福建・広東系 17世紀後半～18世紀前半	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅱ層
第18図 図版20	20		Ⅵｂ	12.4 － －	内湾気味の碗。外面に界線と竹葉文。内面は界線。呉須は灰緑色でやや鮮明。淡灰色の釉。淡灰白色の細粒子で微細な黒色鉱物が僅かに混入する。	福建・広東系 17世紀後半～18世紀前半	翁屋敷跡 Ｄ－２ Ⅱ層
第18図 図版20	21		Ⅵａ	－ － －	口縁端を欠くが胴上部が僅かに外反。外面に菊唐草文。内面に四方襷文と界線。呉須はやや鈍い。淡青白色の釉。白色の微粒子。	景徳鎮 17世紀末頃～18世紀前半	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅱ層
第18図 図版20	22	碗	Ⅶａ	14.0 － －	薄手の内湾口縁の碗。外面の口縁に二本一組の界線と唐草文。内面口縁に二本一組の界線。呉須はやや鈍い。淡青白色の釉。白色の微粒子。	福建系 18世紀頃	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅲ層
第18図 図版20	23		Ⅶ	－ － 6.0	高高台の碗。外面高台脇に蓮弁と二本一組の界線。外底面にも二本一組の界線。呉須はやや鮮明。淡青白色の微粒子。	福建系 18世紀頃	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅱ層
第18図 図版20	24		Ⅶ	－ － (6.4)	碗の高台破片。畳付を欠く。外面胴部に唐草文と蓮弁。高台外面及び外底面に二本一組の界線。内底面に界線と葉文。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮系 18世紀	翁屋敷跡 Ｅ－４ Ⅱ層
第19図 図版21	25	小 碗	Ⅰ	9.2 － －	内湾口縁の小碗。外面に二本一組の界線と唐草文。内面に二本一組の界線。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	窯不明。中国 17世紀	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅰ層
第19図 図版21	26			－ － 3.6	小碗の高台破片。外面は高台脇と高台に界線を３本施す。（二本一組と単独の界線。外底面に二本一組の界線と大□□化□□（大明成化年製）の字款）。内底面にも界線。呉須は鮮明。白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 17世紀前半	翁屋敷跡 Ｄ－４ Ⅰ層
第19図 図版21	27			－ － (3.8)	小碗の高台破片。外面に具象的な草花文・点描文を描く。高台脇に界線。外底面に二本一組の界線と「璞玉斉明」の字款。内底面に二重界線と山水画（山・湖・草花文）。呉須は鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 17世紀後半～18世紀前半	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第19図 図版21	28	小 碗	Ⅱａ	9.5 － －	口縁が僅かに外反する小碗。外面は四方襷文と２本の界線。内面も２本の界線。呉須は鮮明。淡灰白色の釉。淡灰白色の微粒子。口唇を尖らせ口禿げとする。	福建（徳化系） 18世紀頃	翁屋敷跡 Ｅ－４ Ⅱ層
第19図 図版21	29		Ⅱｂ	7.0 － －	直口口縁の小碗。外面は四方襷文と２本の界線。内面も２本の界線。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	福建（徳化系） 18世紀頃	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第19図 図版21	30			－ － 5.0	小碗の高台破片。外面に芭蕉文と２本の界線。呉須は鈍い。淡灰白色の釉。淡灰白色の微粒子。高台は逆三角状を呈し、器壁に比べ厚造り。型づくりか。	徳化窯 18世紀後半	翁屋敷跡 Ｅ－４ Ⅱ層
第19図 図版21	31	小 皿	Ⅰ	10.6 － －	碁笥底皿の口縁破片とみられる。外面に波濤文を描く。内面は幅広の界線。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰色の細粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中葉	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅱ層
第19図 図版21	32			－ － 2.8	碁笥底皿。外面に芭蕉文と２本の界線。内底に樹木（あるいは草花文）と２本の界線を描く。畳付と胴下端部は露胎。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中葉	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第19図 図版21	33	小 皿	Ⅱ	11.4 － －	口縁に小さな玉縁を持つ皿。外面の口唇近くに界線。内面は口縁に四方襷文、内底に界線。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 16世紀後半～17世紀前半	翁屋敷跡 Ｅ－３ Ⅱ層
第19図 図版21	34			－ － －	小皿の高台破片。外面の高台脇と内底面に界線を施す。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。畳付を尖らせて成形する。畳付のみ露胎。	景徳鎮 16世紀後半～17世紀前半	翁屋敷跡 Ｅ－３ Ⅱ層
第19図 図版21	35	小 皿	Ⅲ	9.0 2.0 6.0	内湾型の小皿。内面の口縁と胴部には太描きと細描きの界線。内底面に波状文と構図不詳の文様を描く。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。口唇を平坦に成形する。型造り。	徳化窯 18世紀頃	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅱ層
第19図 図版21	36	皿		－ － 6.6	皿の高台破片。外底面に２本の界線。内底面に草花文を描く。呉須は鮮明。淡青白色の釉。畳付を内側に斜位に削り出して成形する為。畳付外端は尖り気味。畳付と畳付内端は露胎。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 17世紀	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第19図 図版21	37	小 杯	Ⅰ	4.4 － －	小杯の口縁破片。外面に界線と草花文。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。口唇を尖らせて仕上げる。	景徳鎮 16世紀後半～17世紀前半	翁屋敷跡 Ｄ－４ Ⅱ層
第19図 図版21	38			－ － 2.6	小杯の高台破片。高台脇から高台外面に太描きと細描きの界線。内底面に界線と構図不詳の文様。呉須は鮮明。淡青白色の釉。白色の微粒子。内底面が盛り上がっている。畳付と高台外端のみ露胎。	景徳鎮 16世紀後半～17世紀前半	翁屋敷跡 Ｅ－３ Ⅱ層

第６表ｃ　染付観察一覧

挿図図版	番号	器種・仮称	分類	法量	文様・呉須・釉色・素地等の特徴	産地・年代	出土地
第19図 図版21	39	小杯	Ⅰ	4.0 － －	小杯の口縁破片。口唇のみに鉄釉を施す。外面は界線と柳？を描く。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。口唇を平坦に仕上げる。	景徳鎮 17世紀後半～18世紀始	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第19図 図版21	40			－ － 1.8	小杯の高台破片。外面は蓮弁をダミ技法で描き、高台に界線を施す。外底面に「宝」の字款。呉須は鈍い。淡青白色の釉。白色の微粒子。	景徳鎮 17世紀後半～18世紀始	翁屋敷跡 表採
第19図 図版21	41			4.0 3.0 1.6	小杯の破片。外面に文様を描くが構図が判然としない。呉須は鮮明。淡灰白色の釉。白色の細粒子。型造り。口唇を尖らせて仕上げる。口唇は口禿げ。	福建（徳化系） 18世紀頃	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第19図 図版21	42	小碗	Ⅱｂ	6.2 － －	小碗のⅡ類ｂ種。外面に四方襷文様のものを描く。その直下に界線。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。口唇を平坦に仕上げて。口禿げとする。	福建（徳化系） 18世紀頃	翁屋敷跡 Ｄ－４ Ⅰ層
第19図 図版21	43	小杯	Ⅰ	5.4 － －	小杯の口縁破片。外面に界線と梵字文を描く。呉須は鈍い。淡灰白色の釉で若干、濁る。淡灰白色の微粒子。口唇を平坦に成形。型造り。	徳化系 18世紀頃	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第19図 図版21	44			－ － 2.2	上記、43と同一個体とみられる。外面に梵字文と界線。呉須は鈍い。淡灰白色の釉で濁る。淡灰白色の微粒子。外底面に砂目が付着。型造り。	徳化系 18世紀頃	翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第19図	45	瓶	瓶	－ － 6.5	瓶の高台片。外面の胴下部に如意頭繋ぎ文。高台外面に２本の界線。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。灰白色の細粒子。畳付を尖らせて成形。畳付のみ露胎。畳付に研磨面あり。	景徳鎮 16世紀～17世紀前半	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第20図 図版22	1	碗	Ⅰ	10.0 － －	外反口縁の碗。外反の反り具合は他と比較して微弱。内外面の口縁に２本の界線。外面に宝相華唐草文。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 15世紀後半～16世紀前半	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第20図 図版22	2	碗	Ⅱ	－ － －	「蓮子型」の碗の胴部破片。外面に芭蕉文。呉須はやや鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の細粒子。	景徳鎮 15世紀末頃～16世紀中葉	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第20図 図版22	3	碗	Ⅱ	－ － 4.8	「蓮子型」の碗の高台。外面高台に３本の界線。内底面に草花文。呉須は鮮明。青白色の釉。白色の微粒子。畳付のみ露胎する。	景徳鎮 16世紀	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第20図 図版22	4			－ － 6.6	「蓮子型」の碗の高台。高台脇に界線。内底面に草花文。呉須は鮮明。青白色の釉。淡灰白色の微粒子。畳付と高台内端が露胎。高台内面に砂目が付着。	景徳鎮 16世紀	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第20図 図版22	5	碗	Ⅳ	12.8 － －	直口口縁の腰折れ碗。外面に抽象的な波濤文とその直下にアラベスクを描く。内面の口縁と腰下部に２本単位の界線等を描く。呉須はやや鈍い。青白色の釉。淡灰白色の細粒子。	景徳鎮 15世紀末頃～16世紀中葉	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第20図 図版22	6			－ － 5.8	腰折れ碗の高台片。外面に唐草文？。内底面に唐草文と２本界線。呉須は鈍い。淡灰白色の釉。淡灰白色の細粒子。外底面の内刳りは深く、平坦に成形。高目の高台。	景徳鎮 15世紀末頃～16世紀中葉	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅲ層
第20図 図版24	7			12.6 6.8 5.8	直口口縁の腰折れ碗。外面に抽象的な波濤文とアラベスクを描く。高台に２本の界線。内面の口縁と腰下部に界線。内底面に十字花文。呉須はやや鮮明。淡青灰色の釉。淡灰白色の細粒子。畳付のみ露胎。畳付に若干研磨を加える。	景徳鎮 15世紀末頃～16世紀中葉	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第20図 図版22	8	碗	Ⅴ	－ － 4.8	「饅頭心型」の碗の高台。外面に界線、高台外面に２本界線。外底面に格子目状の字款？。内底面に２本の界線と龍。呉須は鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。畳付と高台内端は露胎。畳付に研磨。	景徳鎮 16世紀後半	鍛冶屋跡 Ｇ－９ 表採
第20図 図版22	9			－ － 4.6	碗の高台片。外面の高台際と脇に界線。内底面に２本の界線と構図不詳の文様。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。畳付と高台外端は露胎。畳付に研磨。	景徳鎮 16世紀末頃～17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第20図 図版22	10	碗	Ⅵｃ	14.0 － －	口縁でゆるく外反する。口縁の内外面に２本の界線。外面に唐草文。呉須は不鮮明。淡黄白色の釉。白色の微粒子。	景徳鎮 17世紀頃～明末か清初	鍛冶屋跡 Ｇ－９ 表採
第20図 図版22	11		Ⅵａ	14.6 － －	口縁が微弱に外反する。口縁の内外面に２本の界線。外面に唐草文。呉須はやや鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅱ層
第20図 図版22	12		Ⅵ	－ － 6.2	高台破片。外面および内底面に構図不詳文と２本の界線。呉須は鮮明。外底面に２本界線。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。畳付のみ露胎。高台は貼り付けか。	景徳鎮 17世紀中葉～18世紀初頭	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第20図 図版22	13	碗	Ⅴ	－ － －	口縁が僅かに内湾する。外面に２本界線と草花文。内面は界線。呉須は鈍い。白色の釉。淡灰白色の微粒子。	福建系 16世紀末頃～17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第20図 図版22	14	碗	Ⅵａ	－ － 6.2	直口口縁の碗。両面の口縁端部と腰下部に界線。呉須は鈍く、部分的に黒づむ。灰白色の釉。淡灰白色の細粒子で微細な黒色鉱物が多量に混入。外面は轆轤痕が顕著である。釉は両面とも腰下部で止まる。口唇は平坦に仕上げる。	福建か広東 17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第20図 図版22	15			－ － －	直口口縁の碗。両面の口縁端部と腰下部に界線。内面腰下部は２本界線。呉須は鈍い。釉のない箇所にも呉須を施す。呉須は茶黒色を帯びる。淡灰黄色の釉。外面の轆轤痕は顕著。釉は両面とも腰下部で止まる。淡灰色の細粒子で微細な黒色鉱物が多く含まれている。	福建か広東 17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第20図 図版22	16	碗	Ⅵ	－ － 6.2	碗ⅥａかⅥｂの高台。文様はない。内底面に重ね焼きの目痕。釉は両面に施されていない。高台内端は斜位に削り出しを行なう為、畳付の幅が２㎜と狭くなっている。淡灰白色の微粒子。	福建か広東 17世紀頃	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第20図 図版22	17			－ － 5.6	碗ⅥａかⅥｂの高台。文様はない。内底面の釉を円形状に掻き取り露胎させる。外底面の内刳りは雑で部分的に段状となる。外面の釉は高台外面途中で止まる。外底面は成形後にアクセントを付ける為に釉を施す。釉色は淡黄白色で両面に粗い貫入。淡黄白色の細粒子。（半磁胎）。	福建か広東 17世紀頃	鍛冶屋跡 Ｇ－９ 表採
第20図 図版22	18			－ － 7.8	碗ⅥａかⅥｂの高台。明確な文様は無いが僅かに灰緑色の呉須が付着する。内面は露胎。外面に灰白色の釉垂れがある。内底面に輪状の目痕。内底面中央部を指で深く窪ませる。外底面の内刳りは浅いが丁寧に仕上げる。淡灰白色の微粒子で微細な黒色鉱物を多量に含む。	福建か広東 17世紀頃	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第20図 図版22	19			－ － 7.0	碗ⅥａかⅥｂの高台。文様はない。内底釉を蛇ノ目状に掻き取る。灰白色の透明釉（外底面に細かいか貫入）。外面は高台外面と畳付が露胎。淡灰白色の微粒子。	福建か広東 17世紀頃	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層

第６表ｄ　染付観察一覧

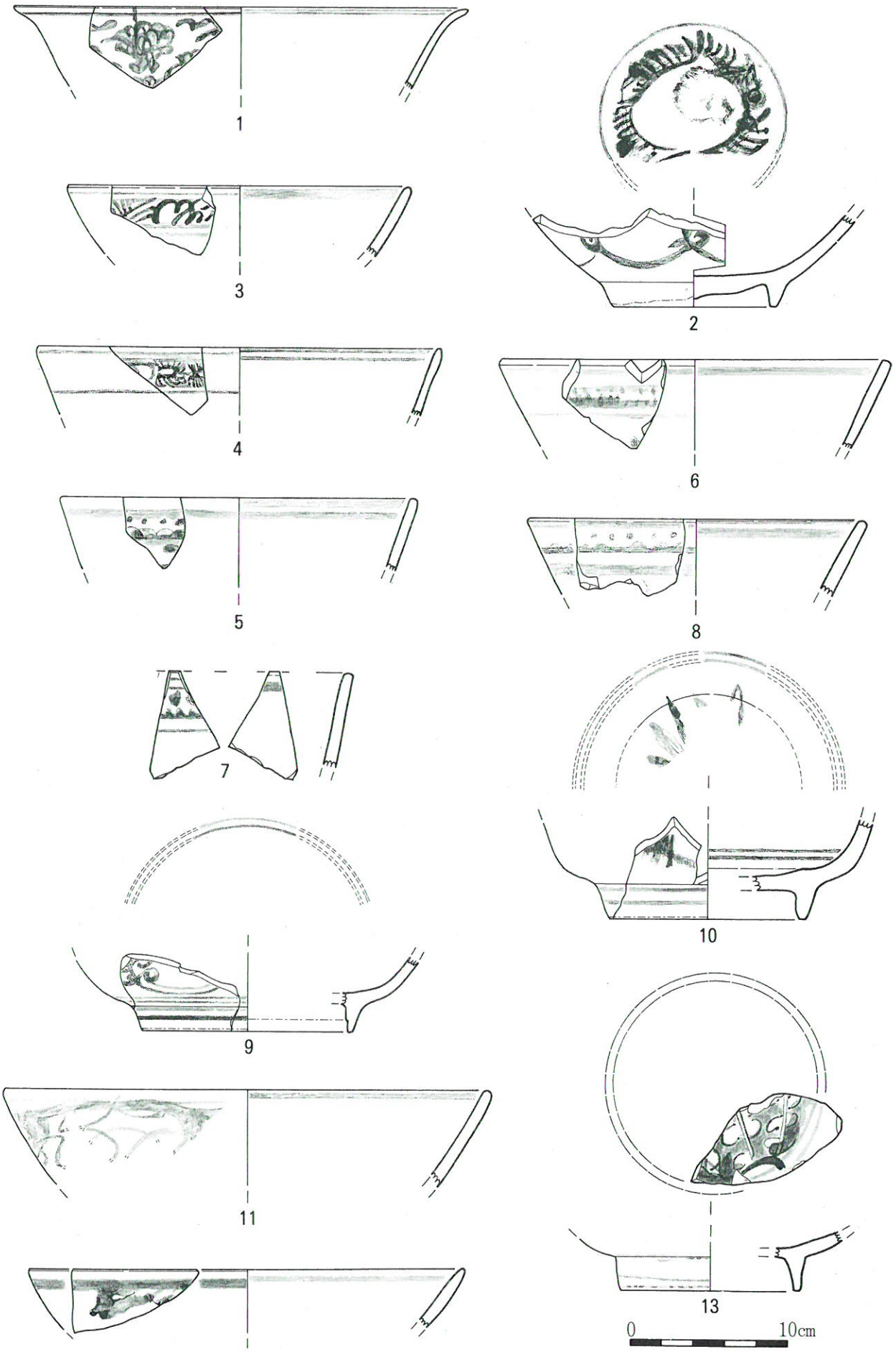
挿図図版	番号	器種・仮称	分類	法量	文様・呉須・釉色・素地等の特徴	産地・年代	出土地
第21図 図版23	20	碗	Ⅵ	－ － 7.0	碗Ⅵａか Ⅵｂの高台。外面に茶黒色の釉で丸文？。淡黄白色の釉を腰下部と高台内面から外底に施釉。内底面は蛇ノ目状の釉掻き。両面に細かい貫入。淡黄白色の細粒子。	福建か広東 17世紀頃	鍛冶屋跡 表採
第21図 図版23	21		Ⅶｂ	－ － －	外反口縁の碗。外面に唐草文。呉須は鈍い。淡灰白色の釉。淡灰白色の細粒子。口唇を平坦に成形。	福建？ 18世紀頃	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第21図 図版23	22			－ － －	外反口縁の碗。外面に草花文。呉須は鈍い。淡灰白色の釉で濁りがある。淡灰白色の細粒子。口唇は舌状。	福建周辺 18世紀	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第21図 図版23	23	小 碗	Ⅰ	9.2 － －	直口口縁の小碗。外面に四方欅文様と構図不詳文。内面に２本界線。呉須はやや鮮明で一部に呉須が釉上に浮遊。淡灰白色の釉。淡灰白色の細粒子。型造り。口唇に削りを加えて口禿げとする。	徳化窯 18世紀	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第21図 図版23	24	碗	Ⅶａ	12.0 － －	口縁で厚味が薄くなる内湾碗。外面に菊唐草文。呉須は鈍い。灰白色の釉。淡灰白色の微粒子。外面に轆轤痕あり。	福建 18世紀	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第21図 図版24	25	小 碗	Ⅱｂ	10.6 5.8 4.8	口唇が口禿げとなる直口口縁の小碗。外面は口縁と高台に２本界線、胴部に花と蜂。内面も口縁と腰下部に２本界線、見込み草文。呉須はやや鮮明。青灰白色の釉。淡灰白色の細粒子。高台は型造り。畳付のみ露胎し、周辺に砂目が付着。	徳化窯 18世紀	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第21図 図版23	26	小 碗	Ⅱｃ	9.0 － －	円筒型の腰折れ。外面は唐草文、如意頭繋ぎ文、界線、隆圏線。内面は２本界線。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の細粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第21図 図版23	27			－ － －	上記26と同一タイプ。口唇を欠く。外面の文様構成等は上記26と一致。呉須はやや鮮明。白色の釉。淡灰白色の細粒子。	福建 16世紀後半～17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第21図 図版23	28			－ － 4.8	円筒型の腰折れ小碗の高台。外面の腰部に如意頭繋ぎ文、高台外面に２本界線。内底面に２本界線と草花文。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の細粒子。畳付のみ露胎。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第21図 図版23	29			－ － (4.8)	腰折れ小碗の胴部片。外面は字款？と界線。内面は２本界線。呉須は鮮明。淡灰白色の釉。白色の微粒子。器壁を薄く仕上げている。	景徳鎮 16世紀末頃～17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第21図 図版23	30			－ － 4.8	腰折れ小碗の高台。外面は折れ部と高台に２本界線。内底面は花文？。呉須は鈍い。淡灰白色の微粒子。畳付と高台内面は露胎。高台外面にカンナ目が残る。	景徳鎮 16世紀末頃～17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅱ層
第21図 図版23	31			－ － 4.4	腰折れ小碗の高台。外面の腰部に花文と界線。内面は胴部に２本界線、内底は花文。呉須は鈍い。淡灰白色の釉。白色の微粒子。胴部と高台にカンナ目。畳付は幅が0.8～2.0㎜と極端な厚みをもって雑に成形。	景徳鎮 17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第21図 図版24	32	皿		15.4 3.8 7.2	内湾口縁の皿。外底面に２本界線。内面に梵字文・界線。内底に字款。呉須は鮮明。白色の釉。淡灰白色の微粒子。畳付と高台外端のみ露胎。	福建周辺 18世紀	鍛冶屋跡 表採
第21図 図版23	33			－ － －	大皿の底面破片。内底面の中央に月と雲、周辺に龍を描く。呉須はやや鮮明。黄灰白色の釉。灰白色の細粒子で微細な黒白鉱物が少量混入。外底面は露胎で茶褐色に窯変し、部分的に釉が付着。	中国製窯不明 年代不詳	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第21図 図版24	34	小 杯	Ⅱ	4.0 2.4 1.6	外反口縁の小杯。外面の胴部に芭蕉文様と界線、高台に２本界線。外底面に界線。呉須はやや鮮明。白色の微粒子。	中国製窯不明 年代不詳	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第21図 図版23	35			5.6 － －	口縁がきつく外反する。口縁の内外面に２本界線。外面の胴部に飛馬文。内底に界線。呉須は鈍い。淡灰白色の透明釉、淡灰白色の透明釉。淡灰白色の細粒子で僅かに黒色鉱物が混入。	中国製窯不明 年代不詳	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅱ層
第21図 図版23	36	瓶		－ － －	瓶の胴部。外面に唐草文。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色の細粒子。内面は露胎し、部分的に釉垂れ。	景徳鎮 15世紀末頃～16世紀	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅲ層
第21図 図版23	37			－ － 7.4	瓶の高台片。外面に間弁のある蓮弁文と界線。高台に２本の界線。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の細粒子。畳付のみ露胎。内底面の釉は散発的に禿げている。	景徳鎮 16世紀～17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｇ－９ 表採
第21図 図版23	38			－ － －	瓶胴部。外面に風物と界線。高台脇に界線。呉須はやや鮮明。呉須は淡青白色。淡灰白色の微粒子。胴継ぎ。内面も施釉。	景徳鎮 16世紀末頃～17世紀	鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第21図 図版23	39	水 注		－ － －	水注の高台。高台径は長径7.8㎝、短径6.2㎝。外面の胴下部に如意頭繋ぎ文。高台脇に２本の界線。呉須は鈍い。二次的に加熱を受けたか？。淡青白色の釉。素地は淡灰白色の微粒子。畳付は煤けて灰黒色を帯びる。畳付のみ露胎。内底施釉。	景徳鎮 16世紀～17世紀前半	鍛冶屋跡 Ｇ－９ Ⅰ層

第６節　鉄釉染付

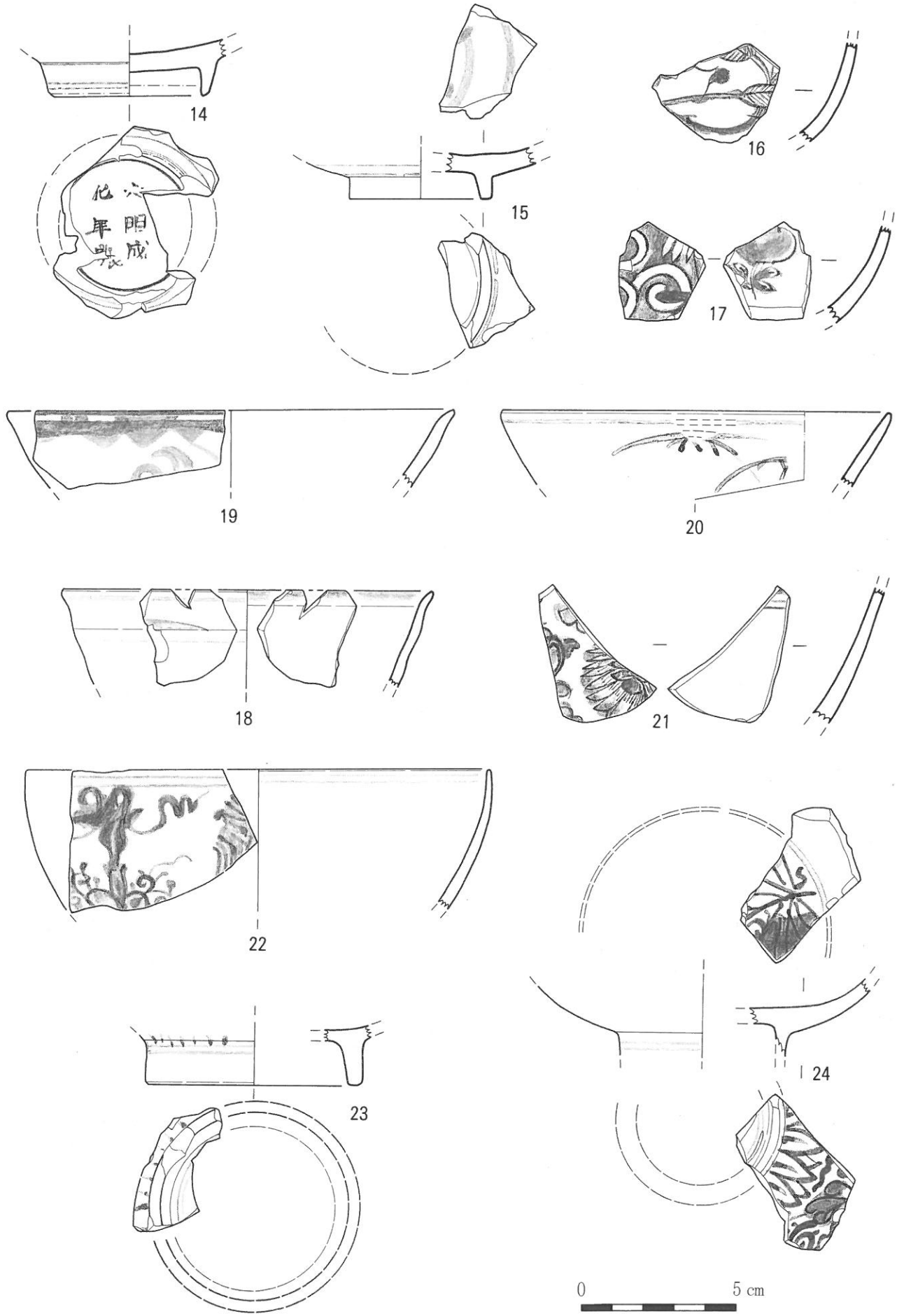
第Ⅰ地区と第Ⅱ地区から各１片ずつ得られた。いづれも小杯であった。以下、地区別に個々の特徴などを記述することにする。

イ）小杯（図版25　上：１）

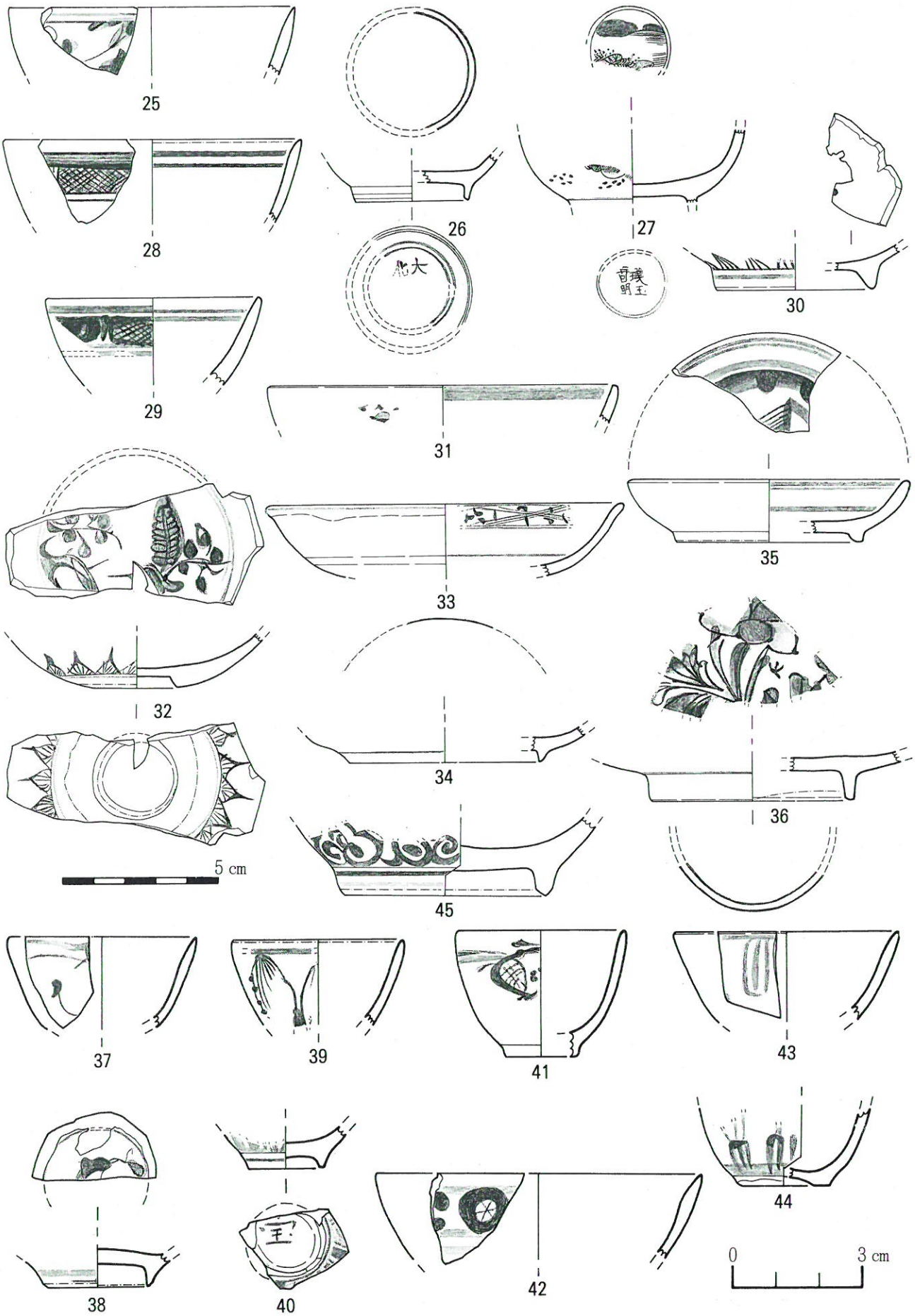
第22図１は図上復元が試みられた資料である。サイズは口径7.2㎝、器高4.4㎝、高台径3.8㎝であった。口縁が僅かに外反するタイプで、外面には口縁端から高台外面途中まで光沢のある鉄釉を施している。内面には呉須で、口縁と腰下部に二本一組の界線を施し、内底面に草花文とみられるものを描いている。外底面も同様に呉須で２本の界線を施している。釉色は淡青白色を帯びる。素地は淡灰白色の細粒子である。Ⅰ地区鍛冶屋Ｇ－９Ⅱ層よ



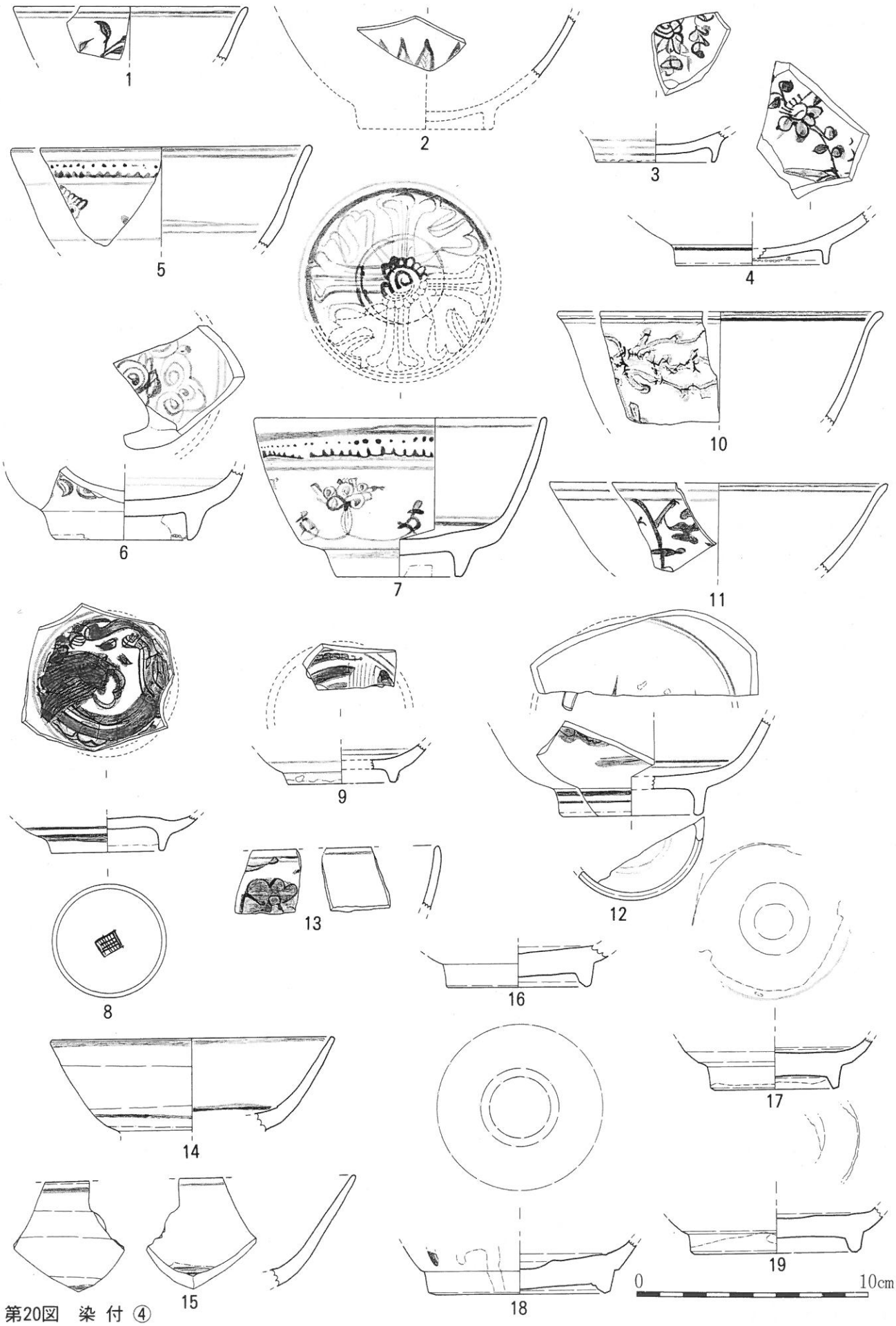
第17図　染 付 ①



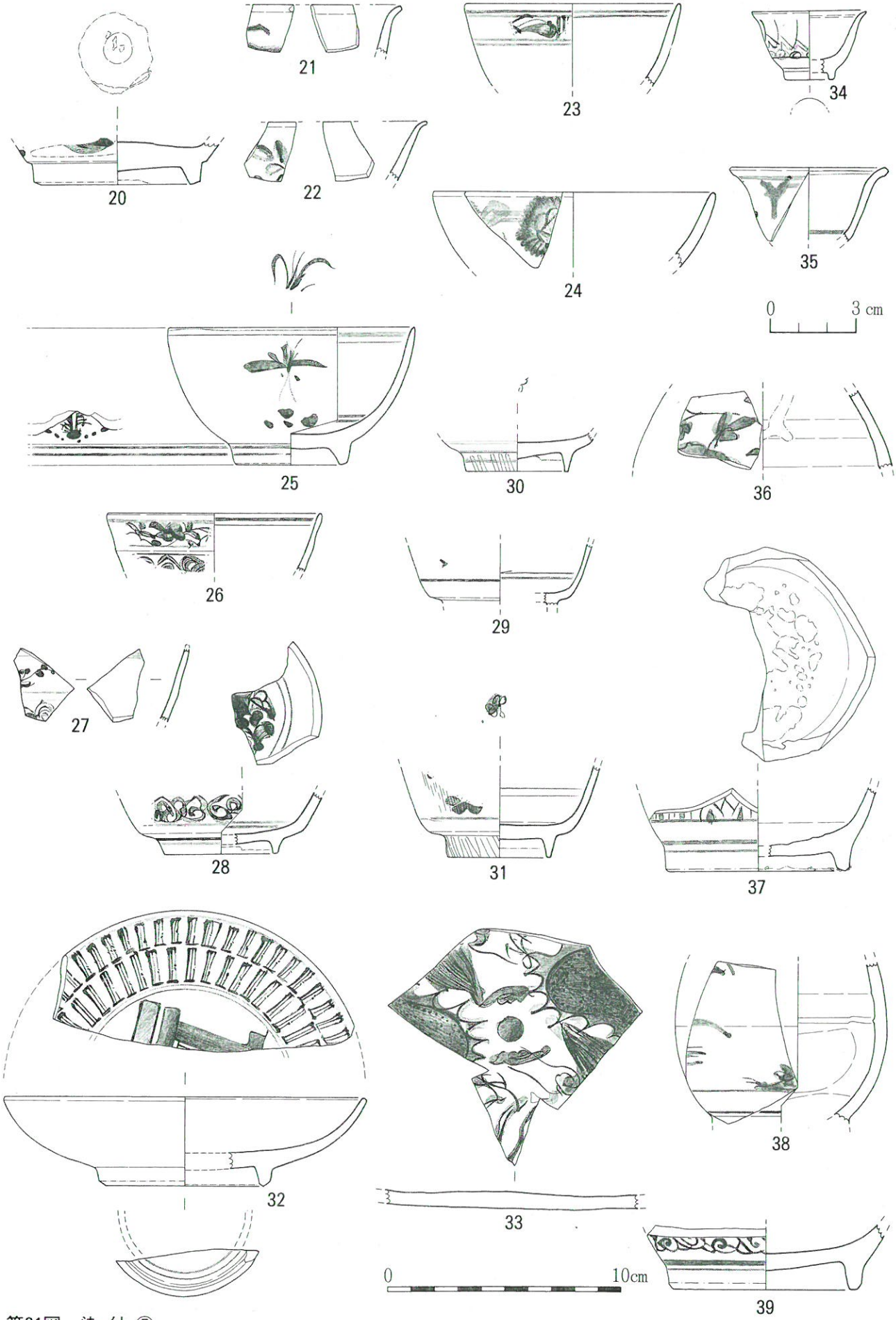
第18図　染 付 ②



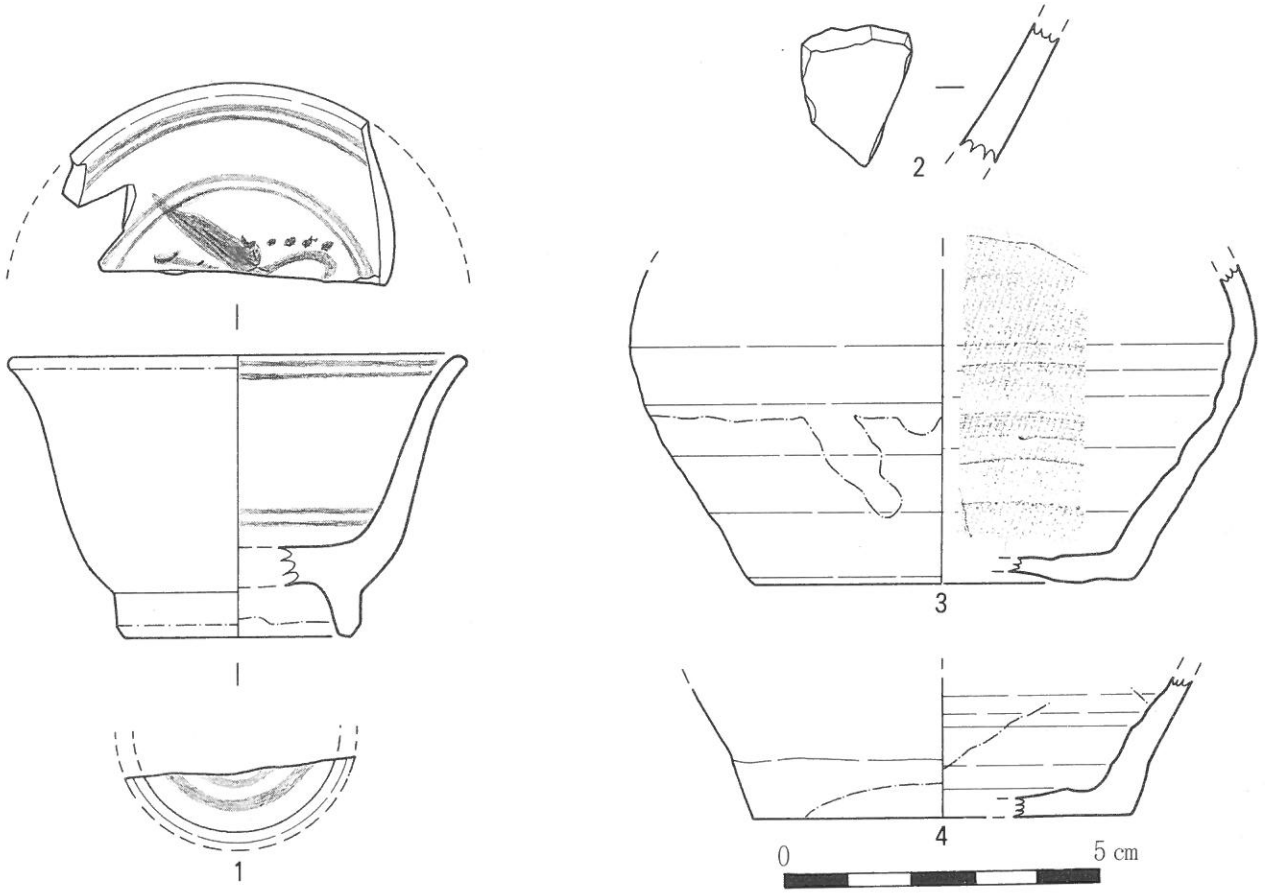
第19図　染 付 ③



第20図　染 付 ④



第21図　染 付 ⑤



第22図　鉄紬染付・天目茶碗・茶入れ壺

り出土。（景徳鎮　18世紀）。

第７節　天目茶碗

天目茶碗の胴部片が第Ⅰ地区から１片出土していたので、これを図化した。第22図２（図版25上：２）は両面に褐錆斑（茶黒色の斑文状）が観られ、黒釉の上で浮遊する。素地は淡灰色の粗粒子で、微細な黒色鉱物が多量に含まれている。福建省（14・15世紀）翁屋敷跡Ｅ－４第Ⅱ層の出土。

第８節　茶入れ壷

茶入れ壷の底部片が第Ⅰ・Ⅱ地区から３片出土していた。第Ⅰ地区出土の２片を図化した。（図版25上：３・４）。

第22図３は底径の推算が6.0cmと求められた茶入れ壷の破片である。器厚は最小で1.4mm、最大で5.4mm、と非常に薄く仕上げられている。黄緑色の釉を外面に施している。内底面には灰緑色の釉が垂れている。素地は精選された陶土を用いている。素地は淡灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が少量含まれている。外面は轆轤成形をナデ消しているが徹底していない。外底面の縁辺に砂目が付着する。Ⅰ地区鍛冶屋Ｅ－８第Ⅲ層の出土であった。

同図４は当初、上記３とは別個体として考えられていたが、外面の成形、外底面の目痕、内底面に垂れている灰緑色の釉、素地などから同図４と同一個体と判断されたが、直接は接合出来なかった。Ⅰ地区鍛冶屋Ｅ－８第Ⅲ層出土。

第９節　緑釉陶器

緑釉陶器の皿か鉢の破片とみられる資料が第Ⅰ地区の翁屋敷跡から出土および採集されている。６片得られていて、６片とも釉色・素地などが共通していて同一個体とみられる。中国南部で製作されたものとして考えられている資料であり、６片とも軟質の陶土であった。緑釉陶器は県内でも出土例が多くなっていて、概ね時期的には15世紀終末から16世紀に比定されている。

１．皿・鉢（図版25中：１～６）

イ）口縁部（図版25中：１・２）

皿か鉢の口縁破片は２片得られている。第23図１と２は口縁部に微弱な玉縁状の肥厚を造る。いづれも口唇に丸味を持せて成形する。外面は轆轤痕がナデ消されているようであり、釉が施されていて不鮮明である。淡緑色の釉を両面に施している。文様は片切り彫りで界線と蓮弁文とみられるものを内面に施している。素地は２点とも淡橙白色の細粒子である。素地に微細な茶褐色や黒色の鉱物を多量に含んでいる。１は翁屋敷跡Ｄ－４第Ⅱ層から出土している。２は翁屋敷跡Ｃ－５第Ⅱ層より出土している。

ロ）胴部（図版25中：３～５）

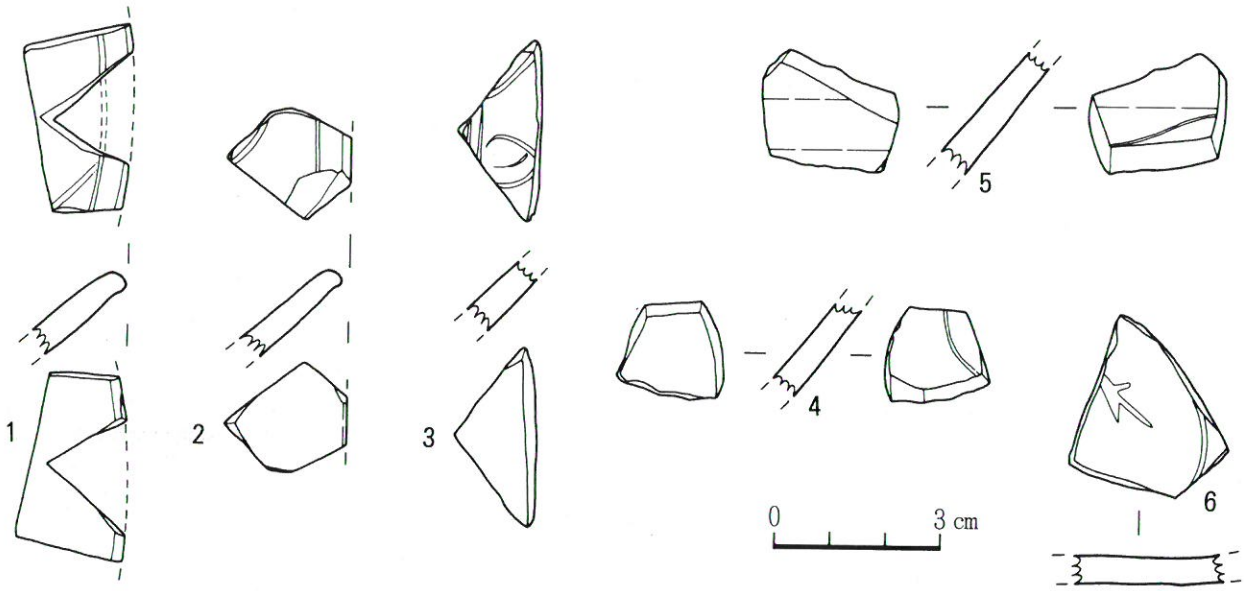
前記１・２の胴部片とみられるものが３片出土している。同図３～５に図示した資料である。同図３の内面には２本の界線と蓮弁文を片切り彫りで描いている。同図４・５は内面のみに片切り彫りで蓮弁文の一部を描いているようである。外面の調整は５のみ轆轤成形後にナデを加えているが轆轤痕は消え切っていない。他の２点は丁寧に消されている。３片とも淡緑色を両面に施している。部分的に２の内面は明緑色を帯びている。素地は３点も淡橙白色の細粒子で、微細な茶褐色や黒色の鉱物が多く含まれている。３・４の２片は表採品である。５は翁屋敷跡Ｅ－３第Ⅲ層より出土している。

ハ）底部（図版25中：６）

皿か鉢の底部片が１片得られていたので、これを図化した。同図６は底面部分の破片で若干、上方に盛り上がっているようである。外底面には僅かに釉が付着しているが、他は露胎のままである。外底面には轆轤痕をナデ消しているがナデは徹底していない。内底面には淡緑色の釉が変色して銀色となっている。文様が描かれているが構図が判らない。素地は淡橙色の細粒子で、微細な茶褐色や黒色の鉱物が多く混入している。翁屋敷跡Ｃ－５第Ⅱ層より出土。

参考文献

亀井明徳　「明代華南彩陶をめぐる諸問題」　『三上　次男博士喜寿記念論文集』（陶磁編）　三上次男博士喜寿記念論文集編集委員会　1985年。



第23図　緑釉陶器

第10節　赤　絵

1．赤　絵（図版25下：1）

赤絵の碗の腰下部片が1点のみ第Ⅰ地区から得られている。

イ）碗

第24図1は腰下部に丸味を持たせた腰折れの碗である。外面には朱色で2本の界線、二重の円文に格子目文、構図不詳文を描く。内面の腰下部に不鮮明な浅い陰圏線を施す。素地は淡灰白色の微粒子である。釉色は淡青白色を帯びる。窯及び時代は景徳鎮、16世紀後半～17世紀前半の所産である。第Ⅰ地区鍛冶屋E－8第Ⅱ層より出土。

2．色　絵（図版25下：2・3）

色絵は鉢と小杯の口縁資料が各1片ずつ得られている。2片とも第Ⅰ地区から出土している。

イ）杯

第24図3は口縁が「タガ」状に屈曲する鉢の破片とみられる。口唇は口禿げとなる。口径の推算は10.4cmであった。外面に花文を描いているが、大部分が禿げ落ちている。残存部からの釉の種類は、黄緑色、黒色、金色の3色が確認されている。釉色は淡灰白色を帯びる。素地は淡灰白色の微粒子である。第Ⅰ地区鍛冶屋E－9西側トレンチ第Ⅱ層の出土。景徳鎮産（16世紀後半～17世紀前半）。

ロ）小杯

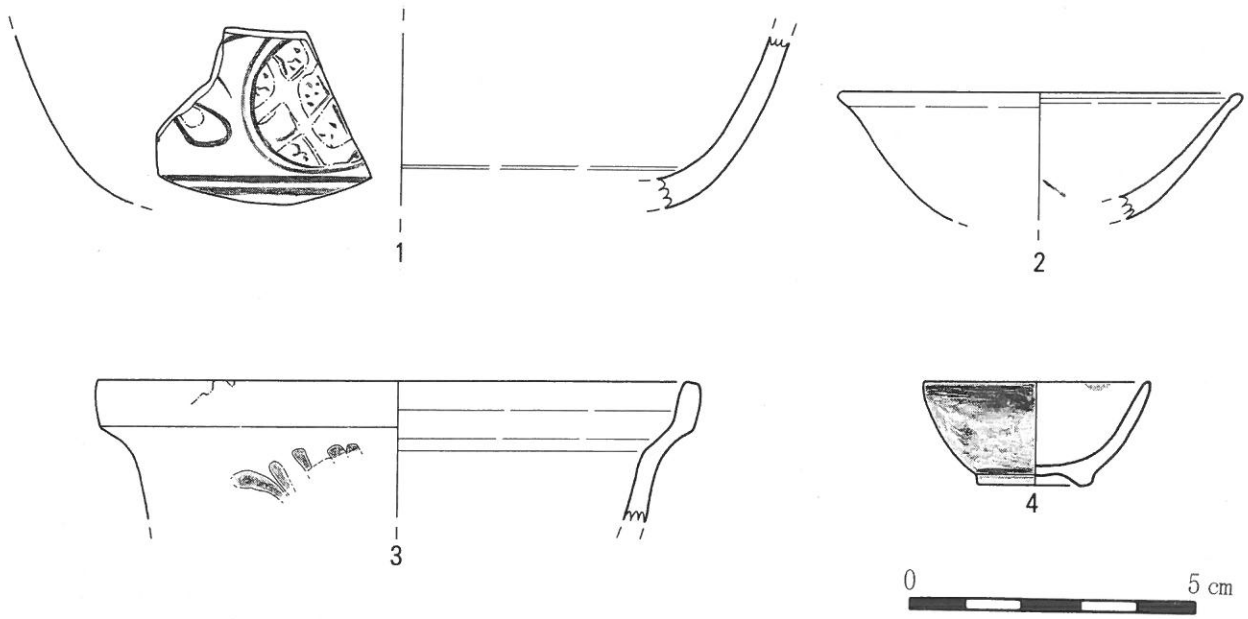
同図2は口縁が僅かに端反る小杯の破片。推算口径は7cmを求めた。内底面に黒色の釉で、細書きの斜沈線を描いている。釉色は淡黄白色を帯びる。素地は白色の微粒子である。産地及び時期について不詳。第Ⅰ地区鍛冶屋第Ⅰ層から出土。

第11節　瑠璃釉

瑠璃釉の小杯が1片のみ第Ⅰ地区から出土している。

イ）小杯（図版25下：4）

第24図4で復元されたサイズは、口径4cm、器高1.8cm、底径は2cmであった。淡紫色の釉を外面から外底面まで施している。一部は内面口縁に垂れている。内面は淡灰白色の釉である。内面に横位の擦痕が認められる（指ナデとみられる）。素地は淡灰白色の微粒子である。徳化窯系の型造り小杯。18世紀頃の製品。第Ⅰ地区D－4第Ⅱ層より出土。



第24図　赤絵、色絵、瑠璃釉

第12節　褐釉陶器

褐釉陶器は中国、中国南部か東南アジア、ベトナム、タイの地域から搬入されているようである。各地域から搬入された褐釉陶器の器種は、壷・洗・水注の３器種が確認されている。以下、産地別に仕分けした後に器種別に、分類の概念を記すことにする。個々の特徴については第９表と第21表に示した。

１．中国産（第25図１～13、第64図１～12）・（図版24・26～28、図版49）

中国産のものは壷・洗・水注の３器種が確認されている。以下、壷・洗・水注の順に記す。

イ）壷（第25図１～12・第64図１～10）・（図版24・26、図版49）

壷の復元可能な小型の壷が、１点のみ得られている。他の資料は全て破片であった。口縁部や底部の形態と立ち上がりの状況から、分類を試みることにした。壷の口縁資料はⅠ類からⅥ類までの６種類に分類し、壷の底部はａ種からｃ種まで分類した。

壷Ⅰ類（第64図１～５）

Ⅰ類の壷は口縁形態と肥厚の大きさなどからａ・ｂの２種類に細分した。

Ⅰ類ａ種：口縁に大きな玉縁状の肥厚を造るもので、大型の壷が予想されるものである（14～15世紀）。

Ⅰ類ｂ種：口縁に小さな玉縁状の肥厚を造るもので、中・小型の壷が予想されるものである（14～15世紀）。

壷Ⅱ類（第25図１）

口縁に隅丸三角形状の肥厚を造る小型の壷である（14～15世紀）。

壷Ⅲ類（第25図２）

口縁が外側に突出し、側面観が歪な梯形状の肥厚を造る小型の壷とみられるものである（14～15世紀）。

壷Ⅳ類（第25図３）

口縁に小さな三角形状の肥厚を造る小型の壷とみられるものである（14～15世紀）。

壷Ⅴ類（第25図４、第64図６）

口縁部の肥厚は微弱で、玉縁状と歪な三角形状の肥厚を造る。薄手の壷にみられる（14～15世紀）。

壷Ⅵ類（第64図７）

口縁部が内側に内傾する「怒り肩」の大型壷で、歪な方形状の肥厚を造るものである（15世紀中頃～16世紀）。

・壷底部の分類（第25図８～12、第64図９・10）・（図版26、図版49）

底面からの立ち上がりの形状からａ種からｃ種までの３種類に分類した。

ａ種：底面からの立ち上がりは内側に閉じ気味に開き、そのまま胴部へ直線的に移行するものである（第25図８・９、第64図９）。

ｂ種：底面からの立ち上がりはａ種よりも外側に開き、途中からゆるやかに外側に反って開くものである（第25図10、第64図10）。

ｃ種：底面からの立ち上がりは、内側に閉じ気味にゆるやかに外側に開いて胴部に移行するもの。揚げ底とベタ底気味の二者が存在する（第25図11・12）。

ロ）洗（第64図11・12）・（図版49）

洗の口造りは側面観が「て」の字状に突出された肥厚の形態となるため、口唇が幅広となる。この種の口縁形態を踏襲するのが全てであった。

ハ）水注（第25図13）・（図版26）

水注の注入口もしくは注ぎ口の破片が１片のみ出土している。

２．中国南部か東南アジア産（第26図14～26、第64図13～15）・（図版27、図版49）

この地域の褐釉陶器として壷・水注・洗の３器種が確認されていて、産地を明確に区別することが困難な資料である。

イ）壷（第26図14～24、第64図13～15）・（図版27、図版49）

復元可能な資料は得られなく、破片のみであった。分類に際しては中国産と同様に、口縁形態と底部の形状か

ら分類を試みた。壷の口縁形態は中国産のものより変化に富んでいて、分類の結果、Ⅰ類からⅧ類までの８種類に分けられた。

壷Ⅰ類（第26図14）

大型の壷で、口縁の内面と外面にサイズの異なる玉縁状の肥厚を造る。内面口縁の肥厚帯直下に浅く窪ませ凹線状とするもの（14～15世紀）。

壷Ⅱ類（第26図15）

大型の壷で肩部が「怒り肩」となるもので、歪な方形状の肥厚を造る。内面の口縁部を内側に突出させて、蓋受け様の段を造るもの（14～15世紀）。

壷Ⅲ類（第26図16）

ナデ肩の中型壷で、口縁の形態はⅡ類と類似するが、内面口縁の突出部の上部に蓋を受ける目的で、明瞭な削りを入れている。外面の胴上部に平行叩きを加え、内面からは円形状の当て具で押さえているようである（14～15世紀）。

壷Ⅳ類（第64図13）

口縁部で内側に内傾する「怒り肩」の大型壷で、歪な三角形状の肥厚を造るもの。

壷Ⅴ類（第26図17）

口縁が微弱に外反する「怒り肩」の中型壷である。肥厚は微弱で口唇外端が僅かに突出する程度のものである（14～15世紀）。

壷Ⅵ類（第64図14）

小さな玉縁状の肥厚を有する薄手の小型壷とみられるものである（14～15世紀）。

壷Ⅶ類（第64図15）

口縁に微弱な玉縁状の肥厚を造る薄手の小型壷とみられるもの（14～15世紀）。

壷Ⅷ類（第26図18）

口縁に三角形状の肥厚を造るもので、壷Ⅵ類・壷Ⅶ類と同様の薄手の小型壷である（14～15世紀）。

※壷底部の分類（第26図19～24）

底面からの立ち上がりの形状などからａ種からｄ種までの４種類に分類した。なお、壷の口縁分類と同一の底部、あるいは同一系統の底部として判別された資料については、口縁分類の壷Ⅰ類から壷Ⅷ類を前に位置づけて、底部分類のａ種からｄ種の細分分類を後に冠して記述することにした。記述の例としては壷Ⅰ類ａ種、壷Ⅷ類ｃ種などに組み合わせて表現することにした。

ａ種：底面からの立ち上がりは内側に、閉じ気味に直線的に胴部へ移行するもの。

ｂ種：底面からの立ち上がりは、ａ種よりも僅かに外側に開きゆるやかに外向きに反って胴部へ移行するもの。

ｃ種：底面から一端垂直に立ち上がってくびれるものと、途中から外側にゆるく反って胴部へそのまま移行するものの二者が存在する。揚げ底とベタ底気味のものが含まれている。

ｄ種：底面から大きく外側に立ち上がりながら丸みを持たせて胴部へ移行するもの。

ロ）水注（第26図26）・（図版27）

水注の口縁とみられるものが一片出土している。口縁部の肥厚は微弱で、やや内側に傾く長頸型の水注とみられるものである。

ハ）洗（第26図25）・（図版27）

内面に茶黒色の釉を掛けた底部片が一片出土している。

３．タイ産（第27図27～39、第64図16）

タイの褐釉陶器が得られている。確認された器種は壷のみであった。復元資料は得られていない。他にタイの鉄絵や小壷が若干、出土しているが、これについては別に項目を設けて述べることにする。以下、壷の口縁と底部についての分類概念を述べてみることにする。

イ）壷（第27図27～39、第64図16）・（図版28、図版49）

壷は口縁形態の分類でⅠ類～Ⅵ類までの６種類に分けた。底部は形状等からはａ種・ｂ種の２種類に分類した。

壷Ⅰ類（第27図27）

口頸部で一端締まった後に口縁を外側へ外反させて歪な三角形状の肥厚を造る（14～15世紀）。

壷Ⅱ類（第27図28）

「怒り肩」の大型壷で歪な方形状の肥厚を造る。内面は口縁を内側に突出させて突出部の上部を僅かではあるが、窪ませているものである（14～15世紀）。

壷Ⅲ類（第27図29～32）

口頸部をラッパ状に大きく外側に外反させて、口縁を肥厚させる大型壷の口縁破片である。肥厚の造りなどからａ・ｂの２種類に分類した（14～15世紀）。

ａ種：肥厚部の造りは口唇を僅かに撮み上げ、口縁下端を三角形状に突出させるもの。口唇と口縁下端の間を浅く窪ませている。（第27図29・30）。

ｂ種：肥厚部の造りは「タガ」状の口縁となるもので、口唇を上方に撮み上げている。口縁下端は丸味のある三角形状に仕上げるもの。口唇と口縁下端の間の成形で２種類の手法が確認されている。口唇と口縁下端までの間を、浅く窪ませるものとやや丸味を持たせるものである。（第27図31・32）。

壷Ⅳ類（第27図33）

口縁部をきつく折り曲げて玉縁状に口唇部を成形するため、口縁が突出した状態となる。口縁下端に丸味を持たせて仕上げている中・小型の壷である（15・16世紀）。

壷Ⅴ類（第64図16）

口縁をきつく折り曲げて疑似肥厚の口縁とする中型の壷である。肥厚帯中央より下位に削りを加えて窪ませている（15・16世紀）。

壷Ⅵ類（第27図34・35）

口頸部で内側にやや内傾させる小型の壷で、口縁に小さな玉縁状の肥厚を造る（15・16世紀）。

・壷底部の分類（第27図38・39）・（図版28）

底面からの立ち上がりの状況からａ・ｂの２種類に分類した。

ａ種：底面から外側へやや開き気味に直線的に胴部へ移行するもの。（第27図38）。

ｂ種：底面からの立ち上がりの部分で一端くびれさせた後に、直線的に外側に開かせて、そのまま胴部へ移行させるもの。（第27図39）。

４．産地不明・器種不明（第27図40）

歪な形をした器の口縁なのか、脚なのか判然としない器種不明の陶器が一片得られていたので、図化を試みることにした。

第７表ａ　褐釉陶器観察一覧

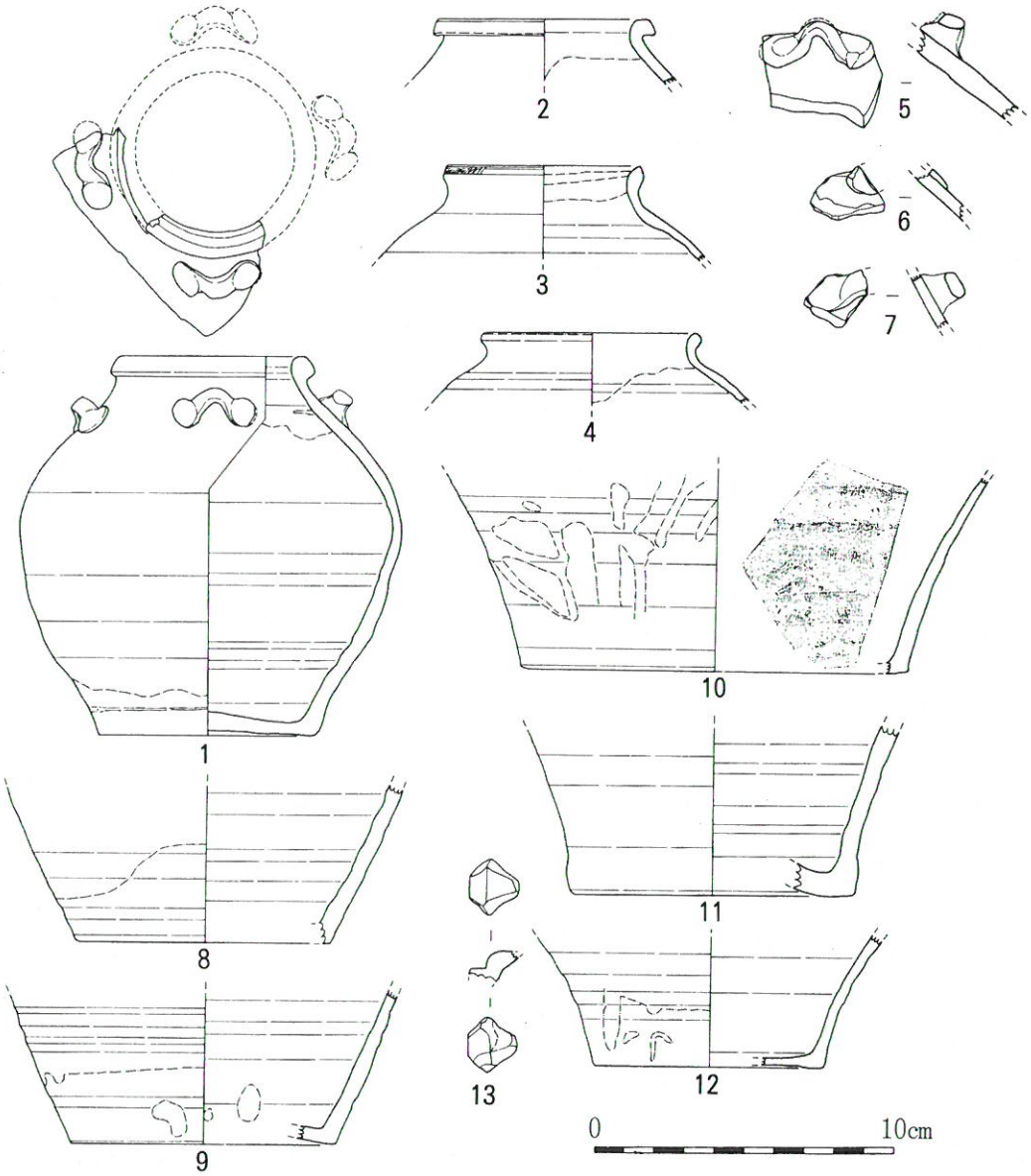
挿図図版	番号	器種	分類	法量	特徴	産地	出土地
第25図 図版24	1	壺	Ⅱ	8.8 17.7 10.3	唯一復元された小型の壺である。底面からやや内側に閉じ気味に立ち上がり、ゆるやかに反りながら胴下部へ移行する。胴下部から丸みを持たせながら中央部へ移行する。胴下部から頸下部の状況はナデ肩様にスムーズに口頸部まで移行するが頸部で内側へ内傾する。口縁部は隅丸三角形状の肥厚を造る。肥厚帯下端と頸部には篦などの削りを加えているようである。横耳を四箇所に貼り付けているものとして考えられた。茶褐色の釉を内面の頸下部付近から外面の胴下部まで掛けている。外面は胴中央部から下は轆轤成形で底面から立ち上がる箇所は篦削りである。外底面は器面の保持が悪く、部分的に篦削りやナデが加えられるが雑な仕上げである。素地は灰色の細粒子で粗い白色の鉱物と細かい黒色の鉱物が少量含まれている。	中国産	鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第25図 図版26	2		Ⅲ	9.6 － －	小型の壺とみられる。口縁の肥厚は歪な台形状を呈し、口唇と肥厚帯直下に削りなどを加え肥厚を強調する。茶褐色の釉を口唇外端から外面に施している。口唇は篦削り後に釉の掻き取りを兼ねた指ナデが加えられている。淡灰色の細粒子で微細な灰褐色の鉱物や粗い白色鉱物が少量含まれている。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第25図 図版26	3		Ⅳ	8.5 － －	薄造りの小型の壺とみられる。口縁に小さな三角形状の肥厚を造る。茶褐色の釉を内面の口縁近くから外面に施している。素地は淡橙白色の細粒子で粗い白色や茶褐色の鉱物を僅かに含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第25図 図版26	4		Ⅴ	10.2 － －	薄造りの小型の壺。口縁の肥厚は微弱で歪な三角形状となる。口唇部には釉の掻き取りを兼ねた雑な削りが加えられ平坦な面が生じている。茶褐色の釉は内面の頸下部から外面まで施されている。但し口唇は釉掻きで露胎する。素地は灰褐色の細粒子で細かい白色の鉱物が少量混入する。		鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第25図 図版26	5	壺把手	Ⅰ	－ － －	大型壺の把手の破片。リボン状の把手を貼り付けたもので耳の根元に指圧を強く入れて貼り付けている。黄茶色の釉を外面に施している。素地は淡灰紫色の細粒子で、粗い白色や茶褐色の鉱物を少量含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第25図 図版26	6		Ⅰ～Ⅲ	－ － －	壺の把手破片で、リボン状の把手を横位に貼り付けたものである。明緑色の釉を外面に施している。非常に細かい貫入が入っている。素地は灰黄色の細粒子で粗密な白色や黒色の鉱物を少量含んでいる。		翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層

第７表ｂ　褐釉陶器観察一覧

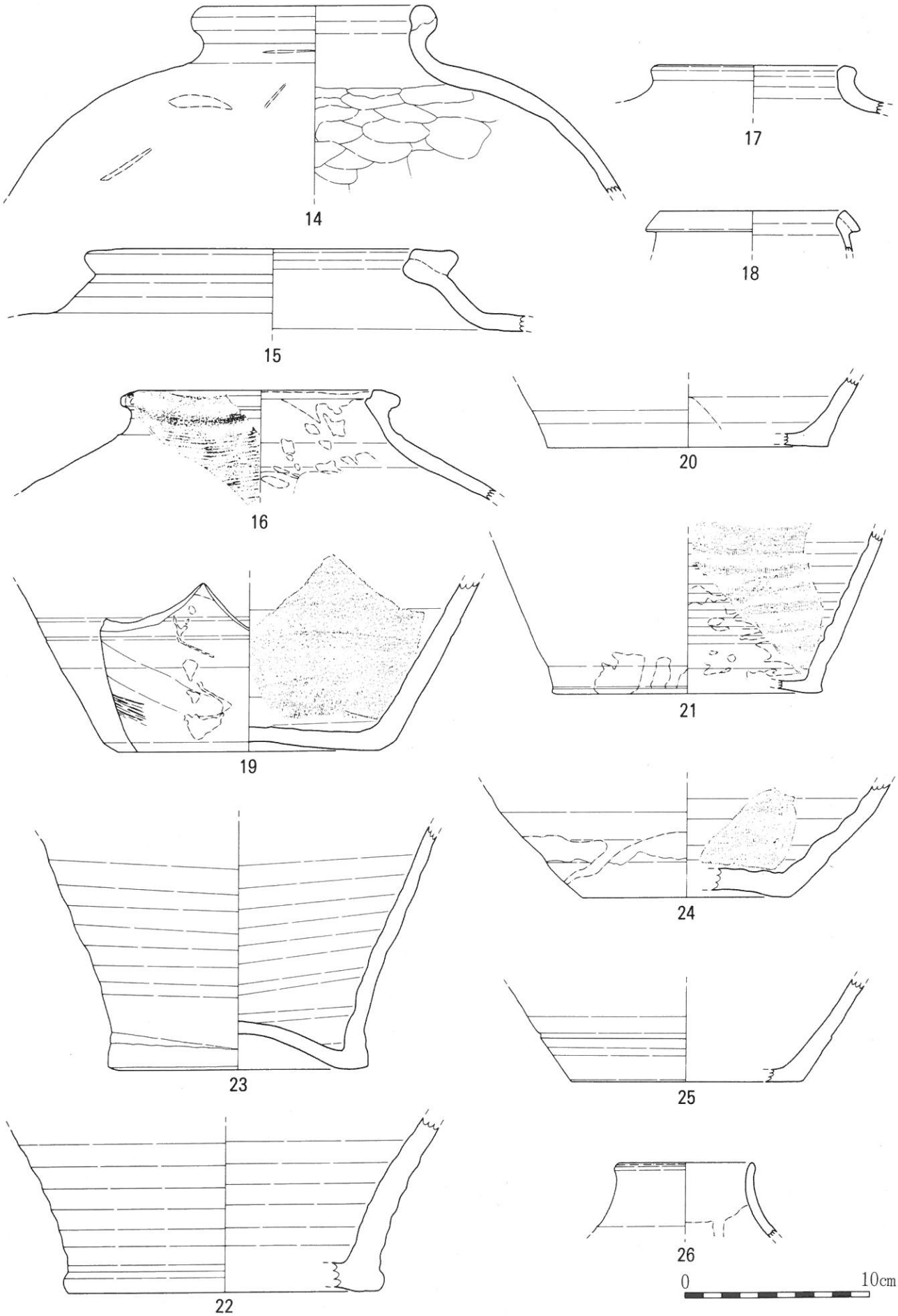
挿図図版	番号	器種	分類	法量	特　　徴	産地	出土地
第25図 図版26	7		Ⅰ～Ⅲ	－ － －	壺の把手破片で、リボン状の把手を横位に貼り付けたものである。茶褐色の釉を外面にのみ施している。素地は淡橙色の細粒子で僅かに細かい石英が含まれている。	中国産	翁屋敷跡 Ｃ－５ Ⅰ層
第25図 図版26	8	壺底部	a	－ － 11.0	底面を欠いているが僅かに残存している。底面から立ち上がりの箇所に小規模な篦削りを加えている。他は轆轤成形後に雑なナデを加えている。外面にのみ黄緑色の釉を胴下部に施している。非常に細かい貫入が観られる。素地は淡橙色の細粒子で、粗密のある白色や茶褐色の鉱物が含まれている。		鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第25図 図版26	9		a	－ － 12.6	底面の縁辺部は磨耗し平坦な面となる。他は凹凸のある雑な状況にある。立ち上がり部分から胴下部は轆轤成形後にナデを加えているが消え切っていない。釉掛けの範囲には明瞭な轆轤痕が観られる。釉色は黄緑色で外面の胴下部まで施している。非常に細かい貫入が認められる。素地は淡橙色の細粒子で、粗密のある白色鉱物と微細な黒色鉱物が含まれている。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第25図 図版26	10		b	－ － 18.2	立ち上がりの部分から胴下部は轆轤成形後にナデを加えている。光沢のある茶褐色の釉が施された部分に轆轤痕が顕著に認められる。内面には茶色の泥釉とみられるものを薄く施している。内面の轆轤痕を徹底して目の細かい刷毛様のもので消している。淡灰色の細粒子で、粗い白色や黒色の鉱物を少量混入させている。		鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅲ層
第25図 図版26	11		c	－ － 10.8	底面は3.4～5.3mmと薄く仕上げられている。底面は雑な仕上げで僅かながら上方に盛り上がっている。釉掛けの部分には轆轤痕が認められるが、釉の掛けられていない部分は轆轤痕をナデや削りで消している。淡橙色の細粒子で、微細な白色鉱物を少量含んでいる。希に粗いものが観られる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第25図 図版26	12		c	－ － 13.4	外底面は内側に盛り上がって揚げ底状となる。立ち上がりの部分で一端くびれた後に胴上部へ向かってゆるやかに内側に閉じ気味に反っている。黄茶色の釉を底面近くまで施している。素地は淡黄灰色の細粒子で、微細な黒色や茶褐色の鉱物を少量含んでいて希に粗い鉱物が観られる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第25図 図版26	13	水注		－ － －	水注の口縁か注ぎ口の根元の破片とみられるもので細片の為、判らない。黄緑色の釉を両面に施している。非常に細かい貫入が観察される。素地は黄灰色の細粒子で細かい白色や茶色の鉱物が多量に含まれている。		翁屋敷跡 Ｅ－５ Ⅱ層
第26図 図版27	14	壺	Ⅰ	13.4 － －	大型の壺である。胴上部から下に叩きを加えていることが内面の状況から窺えるが当て具の形が把握出来ない。内外面に灰緑色の釉を掛けている。口縁の肥厚は陶土の継ぎ足しによって成形されている。素地は灰褐色の細粒子で、粗密のある白色の鉱物を多量に含ませていて手触りでも判断できる。	中国南部か東南アジア産	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅱ層
第26図 図版27	15		Ⅱ	19.8 － －	大型の壺の破片。非常に細かい貫入のある茶黒色の釉を両面に施しているが、内面の釉は大半が禿げ落ちている。茶黒色の釉を施す前に黄白色の化粧土を塗っているようである。口縁部の肥厚は陶土の継ぎ足しで成形され、内面口縁部を突出させ小さな肥厚を造る。この肥厚直上部は浅く窪ませて蓋受けの段を意識したものとみられる。茶紫色の微粒子で、混入物は観察出来ない。		鍛冶屋跡 Ｅ－８ Ⅰ層
第26図 図版27	16		Ⅲ	14.8 － －	上記15と同様の口縁形態であり、やや小さい歪な方形状の肥厚となっている。口縁の直径は14.8cmを測った。内面の口縁の突起は上方から削りを入れて造られていて、蓋を受ける目的が強く感じられた成形手法である。外面の肥厚帯直下には深い指圧を加えているために頸下部に稜が走っている。胴上部に横位の方向に平行叩きを加えている。内面に当て具で押さえた痕跡が認められる。黄茶色の釉を口唇から外面に施している。内面は釉が垂している。胴上部に胎土目が帯状に付着する。黄白色の細粒子で、微細な鉱物（黒色・白色・茶褐色）が少量含まれている。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第26図 図版27	17		Ⅴ	11.0 － －	口唇を篦などで削り平坦に仕上げているようである。茶黒色の釉を両面に施している。素地は灰色の細粒子で微細な黒色鉱物と粗い白色鉱物を少量含んでいる。		翁屋敷跡 Ｅ－４ Ⅱ層
第26図 図版27	18		Ⅷ	10.0 － －	三角形状の肥厚を持つ薄手の小壺とみられる。茶黒色の釉を両面に掛けている。素地は良質で硬く、淡灰色の微粒子である。微細な黒色や茶色の鉱物と粗い白色の鉱物を少量含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第26図 図版27	19	壺底部	a	－ － 14.0	外底面の縁辺部は使用によって磨耗する。底面からの立ち上がりの箇所に削りを加えている。他は轆轤痕を指ナデで消すが徹底しない。外面の胴下部に茶黒色の釉を掛けている。内底面は細かい貫入のある黄緑色の釉が垂れている。淡橙白色の粗粒子で、粗密のあるガラス質や白色の鉱物を多量に含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第26図 図版27	20	壺底部	b	－ － 15.2	外底面は平坦にナデを加えている。両面とも轆轤成形後にナデを加えて仕上げている。内面にのみ黄茶色の釉が残っている。素地は淡灰色の微粒子で、微細な灰褐色の鉱物に粗い白色や灰褐色の鉱物が少量含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅲ層
第26図 図版27	21		b	－ － 14.8	褐釉陶器で唯一、淡黄白色の釉を施したものである。素地は淡橙白色の粗粒子で、少量ながら粗密な白色鉱物を主体に細かい茶褐色の鉱物を僅かに含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第26図 図版27	22	壺	Ⅱｃ	－ － 16.9	壺Ⅱ類タイプの底部とみられる。外面は黄灰色の釉を用い、内面が淡黄白色の釉（化粧土？）を掛けている。素地は淡橙白色の粗粒子で、細かい白色や茶色の鉱物を少量含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅰ層
第26図 図版27	23		Ⅱｃ	－ － 14.0	壺Ⅱ類に所属するとみられる。底面中央部は盛り上がっていて丁寧なナデを加えて仕上げている。釉は黄茶色の釉を底面近くまで施している。素地は淡橙白色の粗粒子で、稀に粗い白色や茶褐色の鉱物が含まれている。		鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅱ層
第26図 図版27	24		Ⅱｄ	－ － 11.1	外底面は雑なナデを加えている。底面の縁辺は磨耗し光沢を帯びている。外面の胴下部までチョコレート色の釉を掛けている。立ち上がりの箇所にナデを加えて轆轤痕を消しているようである。内面は起伏の著しい轆轤痕が観察される。素地は淡灰色の微粒子で、粗密のある白色や茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｇ－９ 表採
第26図 図版27	25	洗		－ － 13.0	内面のみ黒褐色の釉を施している。外底面は篦削り後にナデを加えている。外面は轆轤成形後に軽くナデを加えている。素地は淡灰色の細粒子で、粗い茶褐色や白色の鉱物を少量含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第26図 図版27	26	水注		7.9 － －	内側に軽く内傾するタイプの薄手の水注とみられる。口縁は小さな玉縁を造る。口唇の釉はナデによって掻き取られ露胎する。茶褐色の釉は内面の頸部から外面まで施されている。素地は灰褐色の微粒子で、微細な白色や黒色の鉱物を少量含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第27図 図版28	27	壺	Ⅰ	17.0 － －	両面に黒褐色の釉を掛けている。素地は紫白色の細粒子で細かい白色や茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。	タイ産	鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅲ層
第27図 図版28	28		Ⅱ	19.0 － －	肩上部に胎土目の目痕がみられる。両面に茶褐色の釉を施す。部分的に細かい貫入が観察される。素地は紫白色の細粒子で、細かい白色鉱物を多量に含んでいる。希に粗い白色の鉱物が含まれている。		鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅱ層
第27図 図版28	29		Ⅲａ	20.0 － －	ラッパ状に口縁が大きく開いて外反する。黒褐色の釉は外面が口縁と頸下部に掛けられている。内面の釉は大半が剥落し、口縁に帯状に残存している。淡紫色の細粒子で、細かい白色や茶褐色の鉱物を含んでいる。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第27図 図版28	30	壺把手	Ⅲａ	－ － －	上記のタイプの把手とみられるもので、黒褐色（下地に白化粧土）の釉を外面のみに施している。茶紫色の細粒子で、混入物は観察出来なかった。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層

第７表ｃ　褐釉陶器観察一覧

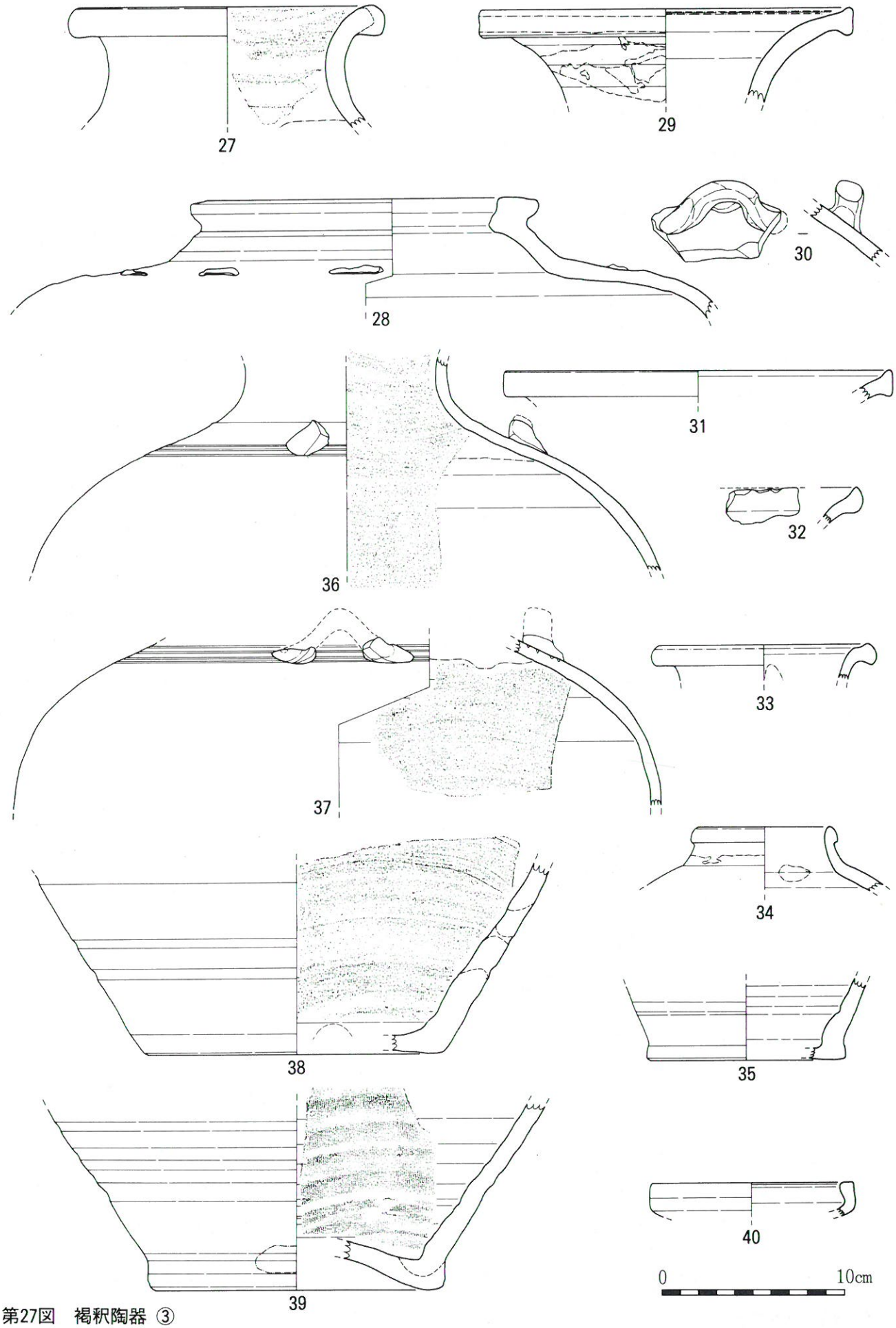
挿図図版	番号	器種	分類	法量	特　　徴	産地	出土地
第27図 図版28	31	壺	Ⅲｂ	21.2 － －	両側に黒褐色の釉を施している。素地は茶褐色の細粒子で、粗密のある白色鉱物を多量に含んでいる。	タイ産	鍛冶屋跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第27図 図版28	32		Ⅲｂ	－ － －	両面に茶褐色の化粧土とみられるものを施した後に内外面の口縁に黒褐色の釉が掛けられているようである。素地は紫白色の粗粒子で、微細な白色鉱物を多量に含んでいる。希に粗い白色鉱物が混入している。		翁屋敷跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第27図 図版28	33		Ⅳ	－ － －	両面に黒褐色の釉を部分的に掛けていて徹底していない。素地は灰褐色の粗粒子であるが混入物は観察が困難であった		翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅰ層
第27図 図版28	34		Ⅵ	8.0 － －	胴上部に目痕がある。光沢のある茶褐色の釉を外面のみに施す。淡橙白色の細粒で、微細な茶褐色の鉱物と粗い白色の鉱物を含んでいる。前者が多く、後者は希であった。		翁屋敷跡 Ｅ－７ Ⅰ層
第27図 図版28	35		Ⅵ	10.7 － －	壺Ⅵ類タイプの底部として考えられた。釉は残存しない。素地は黄白色の細粒子である。粗い白色や茶色の鉱物が希に含まれている。		翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅱ層
第27図 図版28	36	壺胴部		－ － －	緑褐色の釉を外面に施している。頸下部には三角形状の陽圏線、胴上部に三本の陰圏線を施し圏線の上に横耳を貼り付けている。素地は灰褐色の粗粒子で、微細な白色鉱物を多量に含んでいる。希に粗目の白色鉱物が存在する。残存する胴部の最大径は34cmであった。		鍛冶屋跡 Ⅱ層
第27図 図版28	37			－ － －	外面に緑褐色の釉を施している。胴上部に４本の陰圏線を施し、圏線上に横耳を貼り付けている。素地は灰褐色の細粒子で、微細な白色鉱物を少量含んでいる。希に粗い白色の鉱物が混入している。胴部での残存直径は35.4cmであった		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第27図 図版28	38	壺底部	a	－ － 14.0	両面に釉掛けはない。外底面の縁辺部は使用によって磨耗する。立ち上がりの箇所は削りが集中的に入って轆轤痕が消えている。素地は淡紫灰色の細粒子で、微細な茶褐色や白色の鉱物が少量含まれている。希に微細なガラス質の鉱物が含まれている。		鍛冶屋跡 Ｅ－９ Ⅱ層
第27図 図版28	39	壺	Ⅱｂ	－ － 16.0	壺Ⅱ類タイプの底部とみられる。外面に胎土目の目痕が観られる。外面の釉は緑黒色を帯びていて、底面近くまで施している。内面は底面近くまで灰緑色の釉を掛けている。外底面が揚げ底状に成形されている。素地は茶紫色の細粒子で、微細な白色鉱物が少量含まれている。		鍛冶屋跡 Ｃ－９ Ⅱ層
第27図 図版28	40	不明		－ － －	器の口縁なのか脚部なのかどうか判断が出来なかった資料である。上面は平坦に仕上げている。黄灰色の自然釉とみられるものが両面と上面に認められるが良くは判らない。素地は灰褐色の細粒子で、微細な白色鉱物が僅かに含まれている程度である。	不明	翁屋敷跡 Ｅ－６ Ⅲ層



第25図　褐釉陶器 ①



第26図　褐釉陶器 ②



第27図　褐釉陶器 ③

第13節　褐釉水注

管見の限りで、県内では報告例のない中国景徳鎮の宜興窯の水注（ケンディ）の破片が第Ⅰ地区から７片出土している。素地（磁器と同種）や釉色などが褐釉陶器と異なっていたため、改たに項目を設けて分離させた。宜興窯は茶道具が多く生産されているようである。今回、得られた資料は1590年～1630年代（16世紀終末～17世紀前半頃）の製品として同定されている。以下に特徴的なものを５片図化した。図化を省略した２点は、いずれも胴部片で、翁屋敷跡の第Ⅱ層と第Ⅲ層から出土している。推定された個体数は２個体であった。

イ）水注の口縁破片（図版29　１段：１）

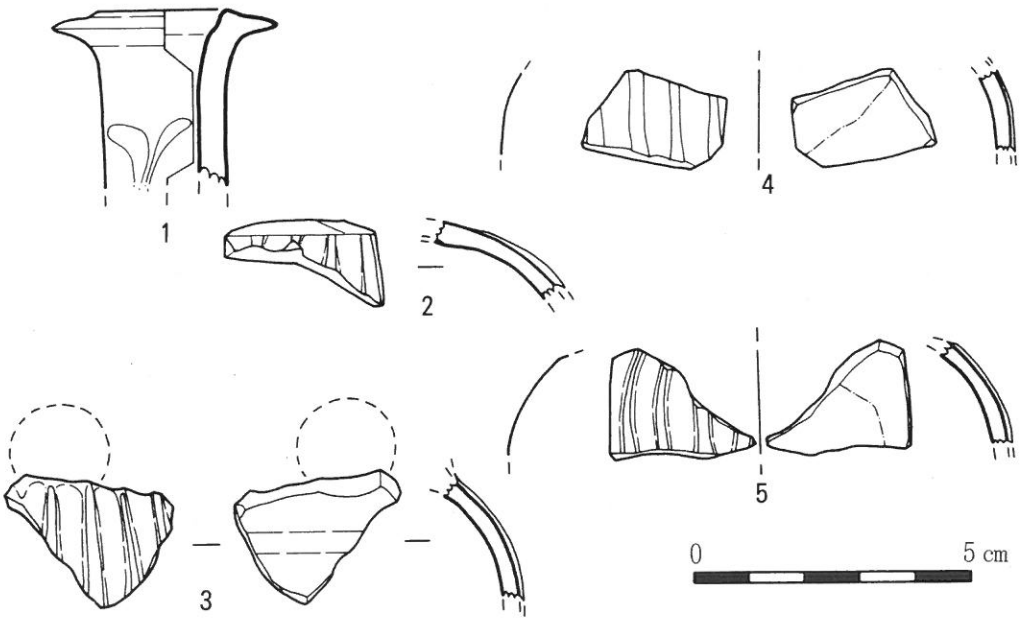
第28図１はやや頸の長い注入口で、口縁を鍔状に成形する。口縁端部の復元直径は4.0cm、内面の口縁端部の内径は2.0cmを測った。口縁内面に浅い窪みを造っている状況から口縁に蓋が取り付けられていたことが予想される。光沢のある明茶色の釉を両面に施し、頸部に白色の釉で草花を描く。素地は淡灰色の細粒子で微細な黒色の鉱物が少量含まれている。翁屋敷跡Ｄ－４第Ⅱ層の出土である。

ロ）水注の胴部片（図版29　１段：２～５）

同図２は水注の肩部近くの破片である。肩部と胴上部の境い目に丸彫りの界線を一条施し、界線直下から起伏のある蓮弁文（縦沈線）とみられるものを幅5.0mm前後の丸篦とみられる工具で縦位に緻密に彫り込んでいる。光沢のある茶褐色の釉を外面にのみ施している。内面は回転擦痕が認められる。素地は淡灰色の細粒子で微細な黒色の鉱物が少量含まれている。翁屋敷跡Ｄ－５第Ⅱ層の出土である。

同図３は水注の注ぎ口が貼り付けられたとみられる胴上部の破片で、内面は弧状に抉られた箇所が残存する。胴部に幅広の丸篦とみられる工具で縦位に密な蓮弁文状（縦沈線）のものを彫り込んでいる。光沢のある茶紫色の釉を外面にのみ施している。内面は回転擦痕が観察される。翁屋敷跡Ｅ－４第Ⅱ層出土。

同図４・５の２片は胴部の細片である。２片とも幅広の丸篦状工具で縦位に蓮弁文状（緻密な縦沈線）を彫り込んでいる。２片とも内面に釉が垂れている。５は光沢のある明茶色の釉を掛けている。４はあまり光沢のない茶紫色の釉を施している。２片とも内面に回転擦痕が観察される。素地は２片とも淡灰白の細粒子で微細な黒色鉱物が少量含まれている。２片とも翁屋敷跡Ｅ－４の第Ⅱ層から出土している。



第28図　褐釉水注

第14節　中国産無釉陶器

中国産無釉陶器として紹介するのは、中国景徳鎮の宜興窯で低火度で焼成された陶器片で、釉が掛けられていない。これも茶道具と関連する器種が予想され、管見の限りでは、宮古・八重山地域では今日まで報告例のなかった資料とみられる。第Ⅰ地区のみで出土している。これらの資料は前述した褐釉水注（ケンディ）と同時期の16世紀終末～17世紀半頃に比定されるものとして今のところ考えられる。確認された器種は、壷（蓋と身）・袋物の２種類であった。

イ）壷（図版29　２段：１～３）

第29図１は身を受ける為の突起が貼り付けで成形されている壷の蓋として判断したものである。当初、合子の身とも考えていたが、突起の内側の調整が雑な点などから蓋とし取り扱うことにした。蓋甲外面は研磨様の仕上げでやや光沢がある。内面はナデで光沢のない仕上げである。突起及び蓋甲下端は丁寧な篦ナデとみられるもので調整する。器色は赤茶色を帯びている。焼成は他と比較して脆弱である。素地は赤茶色の粗粒子で、微細な石英？が微量ながら含まれている。翁屋敷跡Ｅ－７第Ⅱ層より出土。

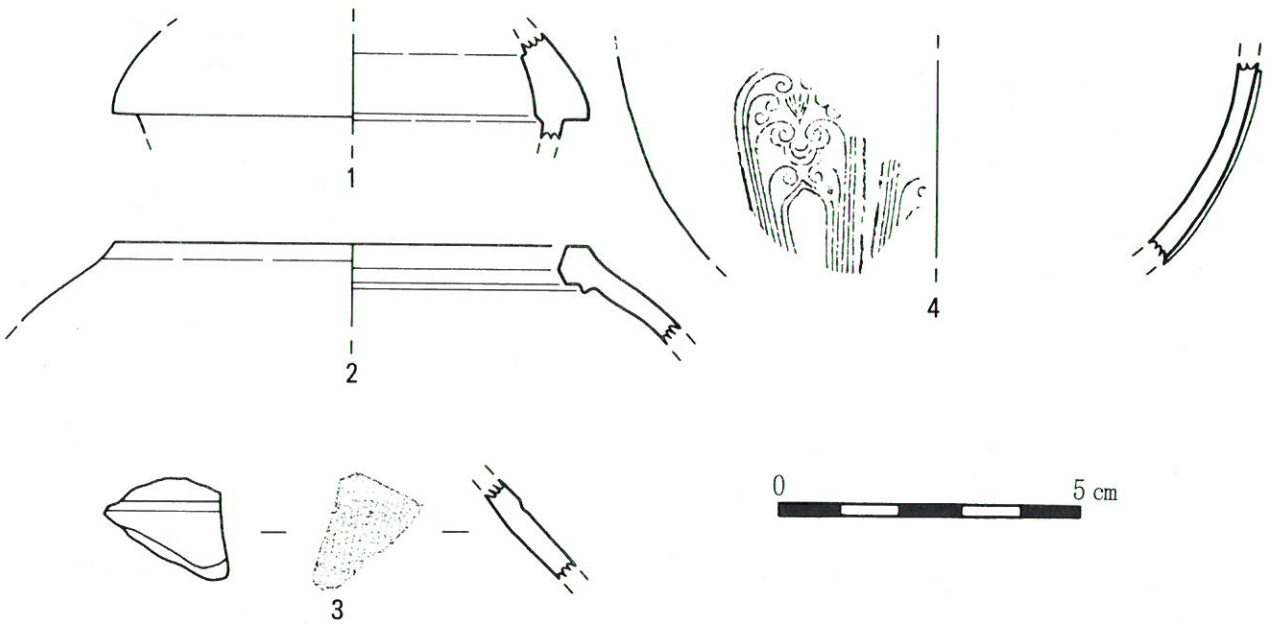
同図２は上記１の身の部分とみられ、１の資料と重ねたところ本品は蓋と綺麗に合致した。口縁は内傾し、頸部が目立たないナデ肩の壷が考えられる。器面の調整は外面がやや雑な研磨様の手法で仕上げている。口唇と内面の口縁には削りを加えている。内面の肥厚直下は削り調整で掻き取った陶土が、そのまま付着している。素地は茶褐色の粗粒子で、微細な白色鉱物や茶褐色の鉱物が少量含まれている。焼成はやや悪く、脆い。器色は茶褐色を呈している。翁屋敷跡Ｅ－５第Ⅱ層の出土である。第29図１の身の部分とみられる。

同図３は壷の胴上部の破片とみられる。外面に丸彫りの界線を施している。両面とも回転擦痕が認められるが、外面は研磨様の調整で大半が消されている。器の色合いは茶褐色を呈している。素地は濃茶色の細粒子で、混入物が観察出来なかった。焼成は他と比較して良好で硬い。翁屋敷跡Ｅ－３第Ⅱ層の出土。

ロ）袋物（図版29　２段：４）

同図４は胴下部の破片とみられる。装飾化した子持ちの蓮弁様の浮文を貼り付けている。内面に指圧痕やナデが加えられている。色調は外面が灰褐色を帯び、内面は灰黒色を呈している。素地は灰紫色の細粒子で、混入物は観察出来なかった。焼成は良く、硬い。鍛冶屋の第Ⅱ層より出土。

以上の観察状況から推定された個体数は壷が２個体（第29図１・２と３）、袋物（同図４）は１個体であった。



第29図　中国産無釉陶器

第15節　タイ産鉄釉

1．タイ産鉄釉

ここではタイ産鉄釉と東南アジア産、中国産か東南アジア産の鉄釉を取り扱うことにした。第Ⅰ地区のみから出土している。産地別に分類整理して、以下のように記述した。

1．タイ産鉄釉

タイ産鉄釉の器種としては、合子と小壷の2種類が確認されている。合子は蓋の破片が2片、蓋か身の破片とみられるものが2片の計4片である。小壷は口縁の破片が1片のみ出土している。

イ）合子（図版29　3段：1～4）

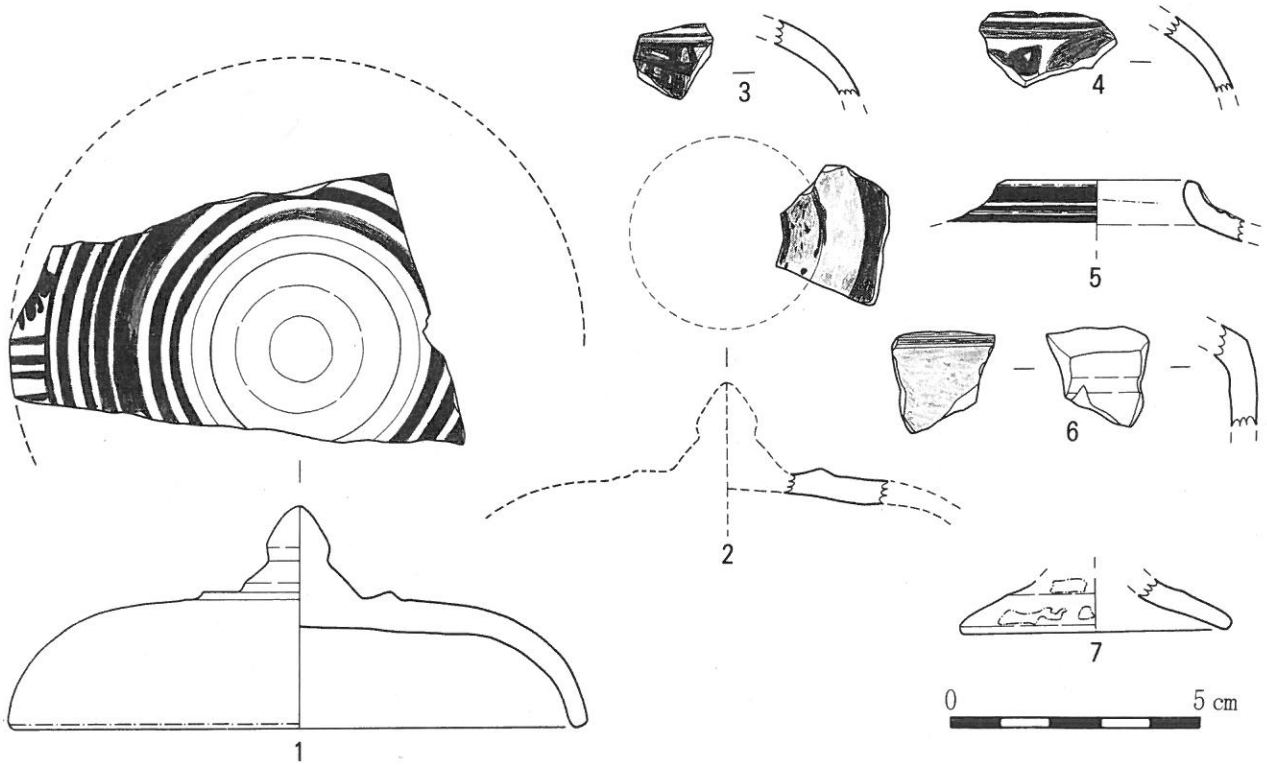
第30図1は仏塔状の撮みを蓋甲頂部に貼り付けた資料であり、図上復元を試みた。縁端の径は11.4cm、高さ4.4cmを測った。蓋甲外面には界線7本と花文を描き、縦位の沈線で区画する。沈線は黒色の釉で描いている。撮みの周辺には三角形状の凸帯を廻らしている。内面は無釉で露胎のままである。素地は淡灰色の細粒子で、微細な黒色鉱物や粗い灰黒色の鉱物が多量に含まれている。翁屋敷跡より表採。（15・16世紀）

同図2は蓋甲頂部近くの破片で、撮みの部分から破損している。外面には三角形状の凸帯が残っている。内面は露胎のままである。素地は淡灰色の細粒子で、粗密のある灰黒色の鉱物を少量含んでいる。翁屋敷跡E－6第Ⅱ層より出土。（15・16世紀）

同図3・4は合子の蓋か身の細片とみられるものである。2片とも外面に界線3本と縦位の沈線を2・3本描く。沈線の脇に花文や格子目様の文様を鉄釉で描く。内面は2片とも露胎する。素地は2片とも淡灰色の細粒子で、微細な黒色鉱物を多量に含んでいる。3は翁屋敷跡E－3第Ⅱ層より出土。4は翁屋敷跡C－5第Ⅱ層から出土。（15・16世紀）

以上、諸特徴などから判断された推定個体数は3個体の合子が考えられるところである。

ロ）小壷（図版29　3段：5）



第30図　タイ産鉄釉（図版29　3段：1～7）

同図５の推算された口径は4.0cmであった。口縁は内傾気味である。茶黒色の釉を内面口縁から外面に施した後に口唇の釉を掻き取っている。外面の頸下部には丸彫りで三本程度の界線を施している。淡灰色の細粒子で、細かい黒色や灰黒色の鉱物を少量含んでいる。翁屋敷跡Ｅ－６第Ⅱ層より出土。

２．東南アジア産（図版29　３段：６）

同図６は肩部が「く」の字状に折れる瓶の破片とみられるもので、外面に黄茶色の釉（非常に細かい貫入）を施している。内面には茶褐色の化粧土とみられるものを掛けている。素地は橙白色の粗粒子で、粗い白色や茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。僅かに粗い石英が含まれているようである。翁屋敷跡から採集した。(15・16世紀)

３．中国産か東南アジア産（図版29　３段：７）

同図７は壷や瓶などの蓋もしくは脚の破片である。縁辺での最大復元直径は5.4cmであった。外面にのみ茶褐色（細かい貫入）の釉を施している。素地は染付か青磁のものを使用している。淡灰白色の微粒子である。翁屋敷跡Ｅ－４第Ⅱ層より出土。

参 考 文 献

金武正紀　「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」　『貿易陶磁研究』　№11　日本貿易陶磁研究会　1996年。

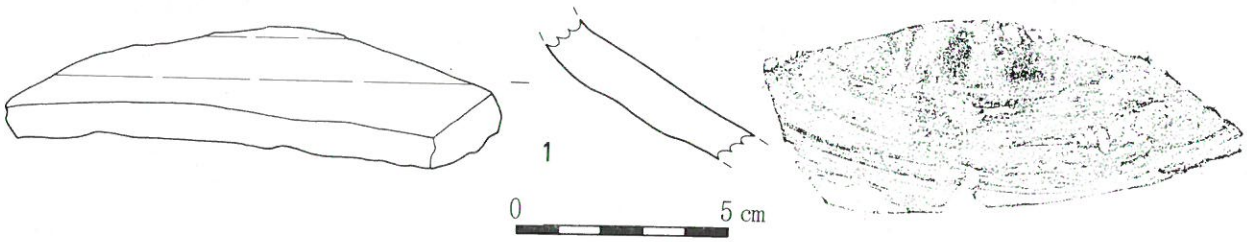
第16節　カムイヤキ窯須恵器

この種の須恵器は、これまで単に須恵器、類須恵器、中世須恵器、南島須恵器などと称されていたが、鹿児島県の徳之島のカムイヤキ窯で焼成されていたことが判明したので、ここではカムイヤキ窯須恵器として報告する。

第31図１は壷の肩部の破片である。器色は茶褐色を帯びている。外面の叩きは回転擦痕（指）で消されている。内面には当て具痕（形状不詳）が存在するが、刷毛目状の調整で当て具痕は消されている。素地は茶褐色の微粒子で、微細な石英と細かい石灰質砂粒を少量含んでいる。Ⅰ地区鍛冶屋Ｅ－８Ⅱ層より出土。

註

註１　伊仙町教育委員会『カムイヤキ古窯跡群Ⅰ・Ⅱ』「伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書」３・５　1985年。



第31図　カムイヤキ窯須恵器（図版29　４段：１）

第17節　本土産陶磁器

点数的には多くないものの、肥前系の染付を中心に京焼きや瀬戸・美濃系のものが確認されている。特に、磁器の場合は肥前系の染付碗が主流で京焼きの碗が１点（第33図25）だけみられる。肥前系は皿、瓶、壺などもみられる。両者は18世紀前後のものが主体であるが、瀬戸・美濃系のものは明治以降のものが中心のようである。数の少ない陶器も肥前系のものが確認されただけで、産地の特定できないものが多かった。特徴的なものを第32図～第33図に示した。以下、肥前系のものから簡記する。

１．肥前系の資料

今回得られた本土産陶磁器の主体をなすが、量的にはそれほど多くない。ほとんどが磁器で、僅かに陶器の資料も認められる。得られた資料はほとんど破片で、全形の窺えるものは１点（第32図14）だけである。これらの資料の多くは17世紀後半～18世紀頃のもののようで、特徴的なものを第32図および第33図20～24に示した。以下、

磁器と陶器に分けて略述する。

・磁　器

ほとんどが染付の資料で、器種的には碗が圧倒的に多く、皿、瓶、壺などがみられる。以下、器種別に簡記する。

a．碗

特徴的な口縁部と底部の資料を第32図１～13に示した。以下、それぞれについて略述する。

口縁部

１～６に示したものである。いずれもやや内湾気味の器形を示し、口唇部は舌状につくる。１は他の資料にくらべ厚手である。推算口径をみると１・２が約13cm、３・４が約11cm、５・６が約10cmとなっている。５・６はやや小振りのもののようである。

６以外はいずれも外面にだけ文様が認められる。１は口縁部に２本の圏線を配し、体部には花文を描いている。２は船・鳥・島・草花などが描かれた山水図である。３は梅文が施され、４は草花文を施している。５は破片の左端に僅かに呉須の部分が認められるだけで、どのような文様か不明。いずれも呉須の発色はやや鈍く、３は他の資料に比べ緑味のある発色となっている。

どれも破片の全面に施釉されており、淡青～淡灰白色の透明釉である。６だけが両面に貫入が認められる。素地は１～５が乳白色の細かなもので、６はやや粗いものである。

底　部

７～13に示したもので、腰折れのものとそうでないものに大別される。前者のものは７に示すもので、他は後者に入るものである。７は筒形の碗になるかとみられるもので、推算底径が約６cmを測る。高台際からやや水平方向に張り出し、それから直方向に立ち上がっている。高台は低く、逆三角形状につくり、畳付けは尖り気味になる。本資料では畳付け部だけが釉剥ぎされ、他は全面施釉である。外体面および高台外面、外底面に施文されている。高台外面は２本の、外底面は１本の圏線が廻る。外体面の文様構図は判然としない。淡青白色の透明釉で、素地は乳白色の細かなものである。

８～13は高台際からスムーズに外側へ開きながら移行するものである。８はやや直線的になるもので、他は腰部が丸味を持つものである。高台は８～10が方柱状に、11～13は逆三角形状につくるものである。いずれも畳付けの幅は狭いものの、平坦面をつくる。また、高台内面が凹面をなすように削っており、全体的に高台が内側へすぼまるようにみえる。推算高台径は８・９が５cmを越し、10・11が４cm足らず、12・13が４cmを越す。高台径は４～６cmぐらいが一つの目安になっていたかとみられる。

文様は高台脇、高台外面、外底面および内底面、それに外体面が施文の対象になっている。前三者の部位には１～２本の圏線を廻らすものが多い。10は外底面に文字を施している。内底面も外側に圏線を廻らし、中央部に別の文様を配すものがみられ、今回は花卉文を施すもの（８・10）だけが確認できた。外体面はつる草を配すもの（９）、梅文を配すもの（12）がみられるだけで、他は判然としない。いずれも呉須の発色はやや鈍く、８・12は緑味を帯びたものである。

いずれも総釉の後、高台畳付けを釉剥ぎするもので、その部分に砂粒の溶着が認められる。11・12は内底面を蛇の目状に釉剥ぎするもので、12はその部分に砂粒が密にみられる。８・12は灰白色の失透性の釉で、他は淡青白色の透明度のある釉が施される。素地は８・12が灰白色でやや細かく、他は乳白色のやや細かなものである。

b．皿

第32図14～19に示したものである。14は唯一全形の窺えるもので、15は口縁部、16は胴部、17～19は底部の資料である。14は逆三角形状に低くつくられた高台際からゆるやかな弧を描いて口唇部にいたる。口唇部内面が破損しており、口唇部の形状は判然としない。推算口径が約12cm、高さが約３cm、推算高台径が約６cmである。内体面に斜め格子文を描き、下部に２本の圏線を廻らす。呉須の発色は鈍く、外面に文様はみられない。淡灰白色

の失透気味の釉を総釉の後、高台畳付けを釉剥ぎし、内底面を蛇の目状に釉剥ぎしている。畳付けには砂粒が溶着し、内底面には重ね焼きの痕跡が認められる。素地は淡灰白色の細かなものである。

15～19の資料をみると器形や高台のつくりなどは14とほぼ似通っている。15の推算口径は約14cm、17・18の推算高台径は約8cmといずれも14よりやや大きめとなっている。19の推算高台径は約6cmで、14と同じような大きさである。文様は内体面の下部に圏線、その上方に別の文様を配するという似たような構成であるが、16は外面の高台脇にも1本の圏線を廻らしている。内体面の文様は15が梅文で、16は判然としない。17～19の底部資料をみると高台畳付けの釉を剥ぎ、内底面を蛇の目状に釉剥ぎするという同じ手法がみられる。18は内体面に呉須の一部がみられ、なんらかの文様が施されたものとみられる。17は内底面に五弁花が認められ、この部分も施文の対象となっているようである。いずれも呉須の発色は鈍い。

16だけが淡青白色のやや透明度のある釉で、他の4点は淡青緑色のやや失透気味の釉である。後者の4点は外面に細かく密な貫入が認められる。5点とも淡灰白色のやや細かな素地である。

c．瓶

第33図20～22に示すもので、22は20・21よりも小型のものである。20は口縁部、21・22は胴上部の資料である。3点とも17世紀後半頃のもののようである。20は頸部が若干外側へ開きながら立ち上がり、上端部を折り曲げるように強く外反させている。折り曲げ部上端は明瞭な稜を有すが、下端部は丸味を持って仕上げている。推算口径は約5cmで、頸部下端の推算径が約2cmである。文様はみられない。青灰白色のやや失透気味の釉が全面にみられ、内外面の口縁部に荒い貫入が見受けられる。素地は淡灰白色の細かなものである。

21は外面に網目文の施された胴上部の破片である。最も膨らみのある下端部で推算径が約9cm。呉須の発色は鈍い。青灰白色のやや失透気味の釉で、細かな気泡が目立つ。内面には露胎の部分がみられる。素地は乳白色の細かなものである。

22は上手ものの資料で、胴部中央付近が最も膨らみ、丸味のある形状を呈すもののようである。最も膨らむ部分の推算径が約6cm、頸部下端の推算径が約1cmを測る。外面に施文しており、胴上部に幅広の圏線を廻らし、そこから下方へ唐草文を施している。頸部にも施文されたようである。呉須の発色は比較的良好である。淡青白色の透明釉が外面に施される。内面は上端に釉垂れがみられるだけで、露胎としている。素地は淡灰白色の細かなものである。

・陶　器

碗とすり鉢の口縁部が1点づつ確認でき、第33図23・24に示した。23に示したものは灰釉碗の資料で、推算口径は約11cmを測る。腰部が丸味を帯び、口縁部の方へ開き気味になる。腰部を深く削り込み、胴上部も若干削っており、その間は幅広の凸帯状になる。口縁部も若干削り込んでおり、肥厚口縁のようにみえる。口唇部は舌状を呈す。施釉は外面の腰部から内面にかけてのようで、外面の腰部以下は露胎のようである。内外面とも釉はほとんど剥がれ、残っている部分も泡状になり、釉の状況は窺えない。素地は磁質の細かなものであるが、砂粒も散見される。1590～1630年代の所産のようである。

24はすり鉢の資料で、口縁部を玉縁状に肥厚させる。内外面とも口縁部にだけ暗茶褐色の釉を施す。推算口径は約29cmである。外面は凹凸部が比較的明瞭である。内面の櫛目は細く浅いものとやや太く深いものがみられるほか、重なり合う部分もあり、櫛目の単位は判然としない。また、底部の方からかき揚げられている櫛目は胴上部までのものと口縁部までのものがみられ、後者のものは口唇下約2cmのところでナデ消されている。内外面とも暗褐色を呈し、芯部は灰黒色を呈す。素地は磁質の細かなものである。17世紀後半頃の所産のようである。

2．京焼きの資料

碗の底部資料が1点だけ確認できた。第33図25に示すもので、推算高台径は約3cmである。高台際から胴部へ弧を描くように向かうもので、高台は逆台形状にシャープにつくる。畳付けは平坦。外面の胴部に緑釉による菊

花文が絵付けされている。内面は全釉であるが、底面に目跡が認められる。外面は高台脇までの施釉で、高台および外底面は露胎である。淡黄白色の失透釉であるが、外面は二次的な火を受けたようで、光沢が失われている。素地は淡灰白色の緻密なものである。18世紀頃の所産かとみられる。

3．その他

産地の判然としないものや明治以降の所産とみられるものをここで扱った。第33図26～40に示すもので、26～33は前者の、34～40は後者の資料である。26・27は磁器の資料で、26は口縁部、27は胴部の資料である。どちらも筒形の器形をなすものであるが、全体的な状況はつかめない。26の推算口径は約10cmで、27の推算径も大体同じような大きさである。26は外面に青灰白色の失透釉、内面に青磁釉を掛け分け、口唇部と内面の口縁部を釉剥ぎして口禿としている。内外面に貫入が認められる。内面の口唇下約2.5cmの箇所に約3mm幅の浅い凹線を廻らす。素地は灰白色のやや粗いものである。27は外面に淡緑色の釉を施し、内面は露胎とする青磁の資料である。外面は細かく密な貫入が著しい。外面の下端部に横位に施されたやや幅広の沈線が1本と右傾の細沈線が3本認められる。素地は灰白色の細かなものである。

28～33は陶器の資料である。28は推算口径が約6cmと小型の香炉になるかとみられる。胴部からややすぼまるように口縁部にいたり、上端部を内側へ鉤状に折り曲げる。折り曲げ部の先端は舌状を呈す。外面は文様を陽刻するが、どのような文様か判然としない。水色を呈す箇所が多いものの、稜をなす部分は透明である。素地は黄白色のやや細かなものである。29は端部の内側が三角形状に盛り上がり縁部をつくるもので、小破片のため器種など判然としない。縁部の外面は斜めに面取りして整えている。破片の全面に透明釉（白化粧）がみられ、内外面とも細かく密な貫入が著しい。素地は黄白色のやや細かなもの。17世紀頃の薩摩焼きの可能性がある。

30は関西系とみられる土瓶の口縁部である。口唇部を平坦で水平につくり、約5mmの短い頸部から球状を呈して胴部へ移行する。横断面が半円形状で、表面に凹線様のものを縦位に4本配した把手が胴上部に残る。推算口径は約7cm。外面および把手の両面、内面の胴上部に白濁色の失透釉を施している。口唇部、内面の頸部および胴下部は露胎である。外面には鉄釉により絵付けされる箇所も見受けられるが、どのような文様か判然としない。素地は暗褐色の細かなものである。

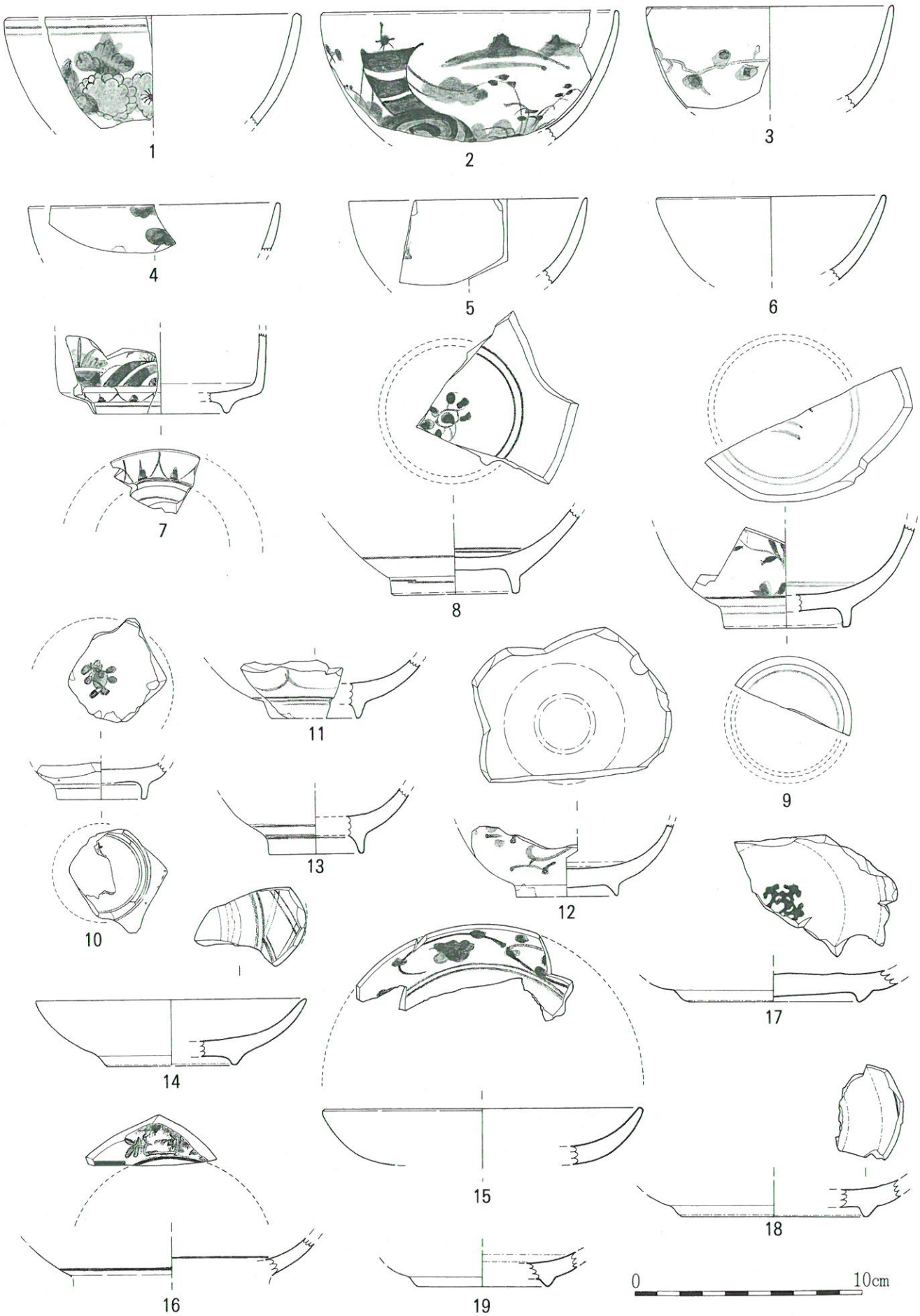
31は推算底径が約5cmの底部資料で、底面からゆるやかな弧を描きながら胴部へ立ち上がっていく。内外面にロクロ痕が著しい。外底面をのぞく全面に鉄釉がみられ、内底面のほぼ中央にはスタンプ（花？）が認められる。素地は暗茶褐色の緻密なものである。

32・33は素地や釉の状況などから同一個体かとみられる壺形の口縁部と底部の資料である。口縁部が玉縁状に肥厚し、頸部が締まり、ナデ肩を呈して胴中央部付近で最も膨らむ。そこからスムーズにすぼまりながら底部へ移行するという器形が想定される。底面部中央は若干削り込まれており、立ち上がり部は丸味を帯びる。ただ、立ち上がり部は非常に滑らかな器肌を有し、その直上に黄色味を帯びた部分が同心円状にみられることなどからすると高台様のものが剥がれた可能性もある。肩部と頸部の境をなす稜の直下に縦耳が付されたようであるが、何ヶ所に付したのか判然としない。

施釉は外面の胴下半部から内面にかけてのようで、33の底部資料の外面は露胎である。また、口唇部内側は釉剥ぎしている。施釉部分は白化粧が施されている。外面は黒味の強い鉄釉が施され、黒色を呈すところと暗茶褐色を呈す部分がみられる。内面は黒釉が施されているものの、剥げ落ちている部分がかなりみられ、その部分では白化粧土や素地が露出している。特に底面部で著しい。素地は細かく、微砂粒を密に含み、ザラつく感じで、口縁部上端と底部は黄白色を呈し、肩部は暗灰色を呈す。

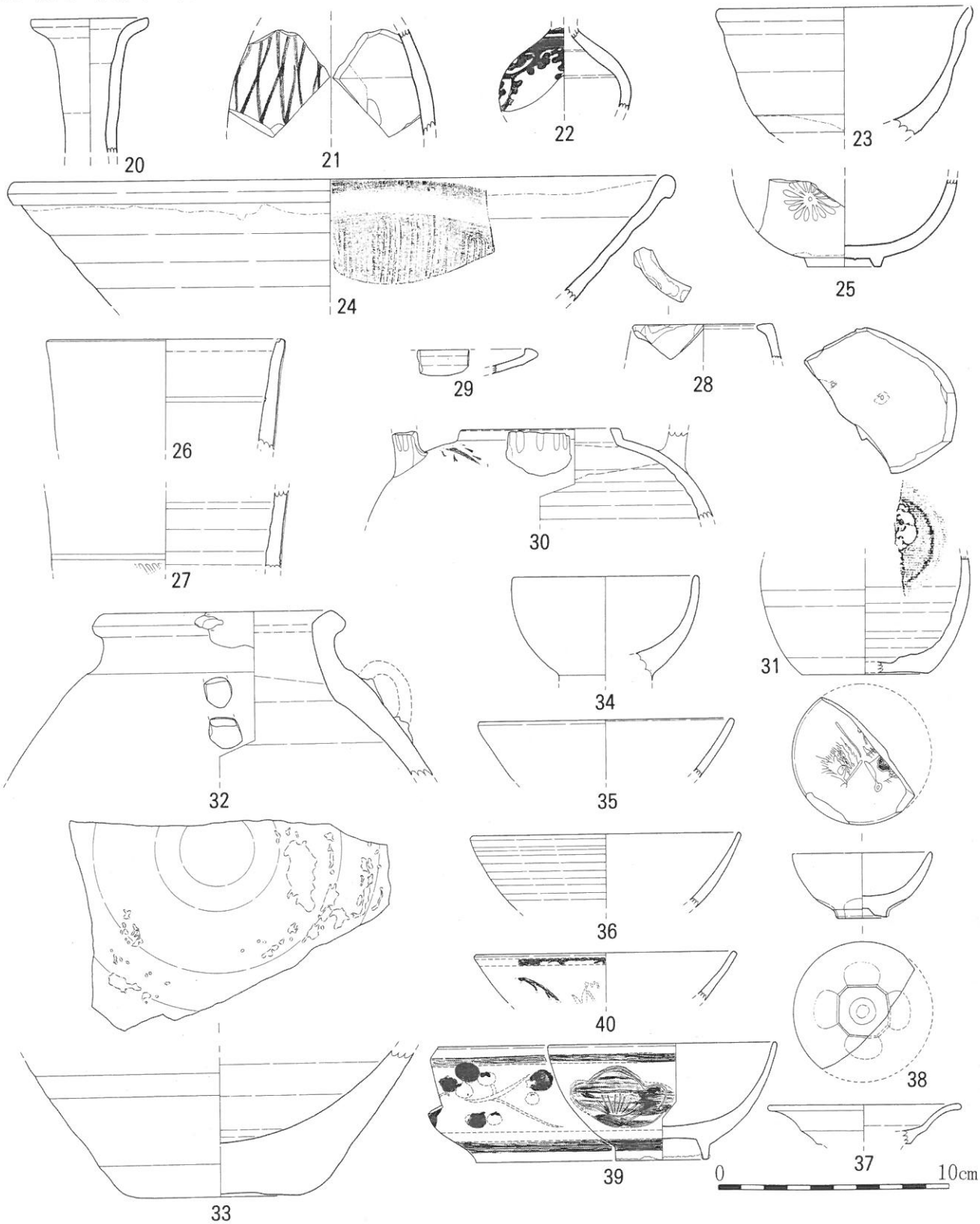
34～40は明治以降の資料とみられる。34～36は白磁小碗の口縁部で、いずれも内湾気味の資料である。推算口径は34が約8cm、35が約11cmを測る。36は外面に細沈線が数本みられるほか、体部下半に面取りする部分が見受けられる。37は外反皿の口縁部資料で、推算口径は約8cmである。高台際と体部を内側へ弧状を呈すように整形しており、腰部に明瞭な稜が廻る。

38～40は大正～昭和初期の瀬戸・美濃系のもののようである。3点とも小碗の資料で、38・39は全形の窺える



第32図　本土産陶磁器 ①

ものである。いずれも内湾気味のもので、口唇部は舌状を呈す。38は推算口径が約6㎝、高さが約3㎝、底径が約2㎝である。高台は方形の角を斜めに切った形状をなし、各辺の際を若干面取りする。内底面に赤を主体とした絵付けを配す。39は推算口径が約10㎝、高さが約5㎝、高台径が約4㎝である。高台は畳付けの方へ細くなり、畳付けは平坦にする。畳付けの部分は釉剥ぎしており、その周辺に砂粒の溶着が認められる。外面に絵付けが施されている。口縁部に赤の圏線、高台際に赤の幅広圏線、その上方に緑の幅広圏線を廻らし、両者の間に赤と緑と黄色により梅文を描いている。40は推算口径が約11㎝を測る口縁部資料で、外面の上端部に黄色の圏線、その下方に青色の絵付けを行なっているが、どのような図柄か不明。



第33図　本土産陶磁器 ②

第18節　沖縄産施釉陶器

今回得られた資料のほとんどは沖縄本島の湧田、壺屋系の施釉陶器かとみられるが、胎土に砂粒を多く混入するという異なる特徴を有するものも若干見受けられた。これら資料のほとんどは第２層からの出土である。器種の明確なものは碗、小碗、皿、急須、酒器、鍋、壺・瓶類、蓋、火取などバリエーションに富んでいる。量的には碗が圧倒的で、他の器種はそれほどでもない。いずれの器種の場合も施釉の状況には数種みられるようである。特徴的なものを第34図～第36図に示した。以下、碗から略述する。

ａ．碗

得られた資料のほとんどが小破片で、全形の窺えるような大型の資料（第34図１・２・９）にはあまり恵まれなかった。これらの資料を施釉されている釉の状況から下記のように分類した。

第１類－内外面に灰釉を施すもの。「フィガキー」により施釉されており、内外面とも器体の下方に露胎部を設ける。

第２類－内外面に鉄釉を施すもの。施釉の方法や範囲は第１類とほぼ同じであるが、内底面のほぼ中央に円形状に鉄釉を薄く塗る。蛇の目釉剥ぎが意識されているようにみえる。

第３類－外面に鉄釉、内面に灰釉を掛け分けるもの。外面は高台際までの施釉で、高台や外底面は露胎となっており、内底面は蛇の目状に釉剥ぎしている。

第４類－内外面とも白化粧（素地に白土を塗る）を施し、透明釉を施すもの。総釉のあと畳付けとその両側を釉剥ぎし、内底面も蛇の目状に釉剥ぎする。

以上の４類で、量的には第４類が多く、第２類、第１類、第３類の順であった。特徴的なものを第34図１～15に示した。以下、類別に簡記する。

・第１類

第34図１～３に示したもので、１・２は全形の窺える資料である。１は高台際からほぼ直線的に外側へ開いて口縁部に至り、２は体部がやや膨らみ、ゆるやかな弧を描いて口縁部に至る。２点とも上端部で僅かに外反気味になり、口唇部は丸く仕上げている。高台は逆三角形状につくり、畳付けは平坦。外面の高台際に段（１は高台部、２は体部側を削り込んで設けている）をつけて体部との境目を明瞭にしている。２点とも同じような大きさで、推算口径は約13cm、高さは約６cm、推算高台径は約７cmである。１は外面に鉄釉の文様が施されていたものかと考えられる。両者とも細かな素地で、１は暗灰色、２は灰白色を呈す。１は露胎の部分が黄色味を帯び、特に底面部は黄褐色を呈す。釉は１が暗灰緑色の失透性、２は透明度のある淡灰緑色を呈す。

３は口縁部の破片で、推算口径は約13cm。口唇部は１・２と似たつくりである。釉は黄色味のある灰褐色であるが、内外面とも白く濁った箇所が多く見受けられる。素地は暗灰色の細かなものである。

・第２類

第34図４～７に示したもので、４・５は口縁部の、６・７は底部の資料である。これらの資料をみると全体的な器形は高台際から外側へ開きながら口縁部に向い、口縁部上端で僅かに外反するものである。しかし、第１類と同じように直線的に開いていくもの（４・６）、体部の下方が若干膨らみ気味になるもの（５・７）が見受けられる。いずれの場合も口唇部は舌状に仕上げており、また、高台は逆三角形状につくり、畳付けを平坦にするという共通点がみられる。６・７は２点とも高台外面部を若干削り込んで体部との境目をつくっている。４・５の推算口径は約14cmと約16cm、６・７の推算高台径は約７cmと約６cmである。

釉は５だけが茶色味を帯び、他は緑味を帯びた黒色である。６・７の施釉範囲をみると外面は６が高台際まで、７は高台脇までの施釉となっている。内面は露胎部に鉄釉を薄く塗り足し、内底中央部の鉄釉部分と同心円を描くように仕上げている。６は体部に施釉されているものより茶色味の強い釉が塗られているが、７は体部と同じような釉が使用されている。また、６は内底部に塗られた釉の約４cm内側に同心円になるように施された１本の沈線が認められる。いずれも素地は黄灰白色のやや細かなものである。

・第３類

第34図８に示した底部資料が本類に入る。破損のため、高台の形状や高台際からの立ち上がりの状況などは判然としない。下端の推算径は約７㎝である。外面に施された鉄釉は緑味を帯びた黒色で、内面に施された灰釉は緑味が強く透明度がある。蛇の目釉剥ぎの内側に沿うように重ね焼きの際の溶着痕が認められる。素地は灰褐色の細かなものである。

・第４類

第34図９～15に示したものである。９は全形の窺えるもので、腰部がゆるやかに膨らみ口縁部が外反する。口唇部は舌状を呈し、高台は逆三角形状につくる。畳付けは平坦であるが、その両側を釉剥ぎの際に斜めに削り取っており、畳付け部は狭くなっている。高台外面の畳付け近くに砂粒の溶着がみられる。推算口径は約13㎝、高さは約６㎝、推算高台径は約７㎝である。素地はやや粗目で、口縁部は灰褐色、腰部以下は黄灰色になっている。

他の口縁部資料はいずれも９と同じような特徴を有すものの、外反の度合いに若干の違いがみられ、また、推算口径も若干のバラツキが認められる。これらの資料からすると細部で若干の違いが認められるものの、９は本類の典型的な器形、大きさを示している資料のひとつとみられる。15は絵付けが施された資料である。

ｂ．小　碗

量的にはそれほど多くない。ほとんどは小破片の資料で、全形の窺えるようなものは第34図17に示すものだけである。本種も碗と同様施釉されている釉の状況から下記のように分類した。

第１類－内外両面とも鉄釉を施すもの

第２類－外面に鉄釉、内面に透明釉（白化粧）を施すもの

第３類－内外両面とも白化粧して透明釉を施すもの

以上の３類で、特徴的なものを第34図16～20に示した。以下、類別に略述する。

・第１類

第34図16に示した口縁部資料である。外側へ開きながら口縁部にいたり、上端部を外反させる。外反部の外面を平坦に整えているため、口唇部は尖り気味になっている。推算口径は約８㎝を測る。釉調はやや緑味を帯びるが、内面は風化のためか白く濁っている。橙褐色のやや細かな素地である。

・第２類

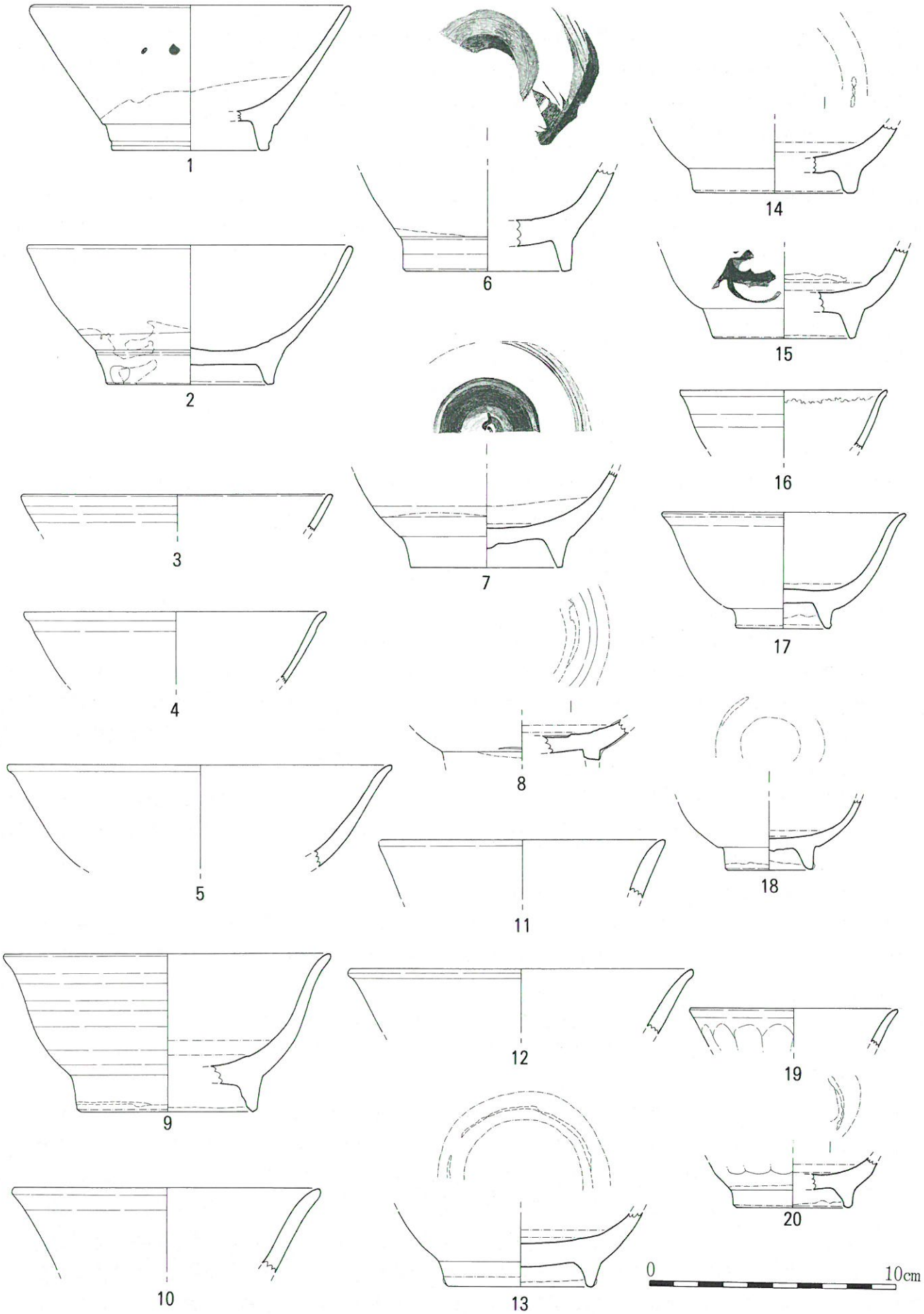
第34図17・18に示したものである。全形の窺える17をみると腰部が丸みを持ち、外側へ開きながら口縁部に移行し、口縁部上端で外反する。口唇部は舌状を呈す。高台は逆三角形状につくり、畳付けは平坦。畳付けの両側を斜めに面取りする。推算口径は約10㎝、高さは約５㎝、推算高台径は約４㎝である。外面から高台の内側半分まで施釉され、そこから外底面にかけては露胎。畳付けおよびその両側を釉剥ぎしており、内底面を蛇の目状に釉剥ぎする。その部分には石灰様のものが溶着している。やや細かな素地で、口縁部は灰褐色、体部下半は淡黄褐色を呈す。

18は17よりやや小振りの底部資料で、器形や施釉の状況などは17とほぼ似ている。外面は薄く全面に施釉する。細かい貫入が密に認められる。素地はやや細かなもので、灰褐色を呈す部分と淡黄褐色を呈す部分が見受けられる。

・第３類

第34図19・20に示すもので、前者は口縁部、後者は底部の資料である。両者とも体部を連続的に縦方向に面取りするものである。この２点からすると腰部の膨らみがあまりなく、外側へ開きながら口縁部に向かう外反口縁の器形が想定される。19は口唇部を尖り気味にしている。20は高台を逆三角形状につくり、畳付けは平坦にする。19の推算口径が約８㎝、20の推算高台径が約５㎝である。

総釉のあとに畳付けおよびその両側を釉剥ぎし、内底面を蛇の目状に釉剥ぎするもののようである。19は外面よりも内面の白化粧土が厚く施されている。釉は19の方がより透明度があり、20は若干褐色味を帯びている。両者とも内外面に貫入が認められる。20の内底面（蛇の目釉剥ぎの内側）には砂粒の溶着がみられる。素地は２点とも淡黄灰色のやや細かなものである。



第34図　沖縄産施釉陶器 ①

c．皿

第35図21・22に示したもので、21は腰部の小破片、22は灯明皿とみられる口縁部の破片である。

21は全体の形状や大きさなど窺えないものの、現存の資料からすると小皿かと推定される。内外面とも緑味を帯びた灰釉が施釉され、外面は現資料の下端で釉剥ぎされている。素地は灰白色の細かなものである。22は推算口径が約11cmを測り、底部から口縁部へ直線的に開くものである。外面の口唇下約５mmの箇所に微弱な段を設けている。口唇部は平坦のようである。口唇部の上にとびだすように三角形状の突起を有す。灯心をささえる突起かとみられ、接着部は若干厚くなっている。それを示しているのか突起部下方の口唇部に比べ、突起頂部周辺は失透している。外面の口縁上端から内面にかけて透明釉（白化粧）が施されており、外面は段の箇所から下方が露胎である。素地は淡黄灰色のやや細かなものである。

d．急　須

第35図23～27に示すもので、23は口縁部の、他は底部の資料である。これらをみると内外面に透明釉を施すもの（23～25）と外面にのみ鉄釉を施し、内面は露胎にするもの（26・27）がみられる。いずれの場合も外面の施釉は底部に付される３つの脚部までのようで、それ以下は露胎である。以下、略述する。

・透明釉（白化粧）を施釉するもの

23の口縁部と24・25の底部から想定すると、底部から口縁部の方へ球状を呈し、口縁部上端が直方向に立ち上がる短頸（約７mm）を有す。口縁部上端は内側を直方向に、外側を斜め方向に釉剥ぎするため平坦な口唇部は狭く、尖ったようにみえる。底部の脚（先端が丸くなった逆三角錐状を呈す）は若干凹む感じでつくられる。また、体部の中央付近に注ぎ口、その上方と反対側に把手をかける突起（約６mmの小孔を有す）が付されている。注ぎ口の接着部の内面には２個の小孔（約６mm）がみられ、その周辺が打欠かれている。23の推算口径が約６cm、24・25の推算底径は約８cmで、高さは10cm前後かとみられる。

23は頸部直下から体部下方の範囲に２本１組の直線的な沈線で構成された文様が認められる。文様は注ぎ口のある場所を中心として両方向へ展開するが、全体の構図は不明。施文された箇所を中心に呉須、緑釉、鉄釉が施され、その後に透明釉が施釉されている。24も23と同様、有文の資料であるが、破片の上端に横位の沈線と呉須がみられるだけで全体の様子はつかめない。

３点とも白化粧土は外面に厚く塗っている。23は内外面に細かく密な貫入が、25は外面に粗い貫入が認められる。いずれも素地はやや細かく、23・25は灰褐色を呈し、24は淡黄灰色を呈す。23は橙褐色を呈す部分も見受けられる。

・鉄釉を施釉するもの

26・27とも底部の破片で、26は底部が完全に残る。２点とも底径が５cmを測るベタ底で、この種の底径の大きさを示しているかと考えられる。26は底面から外側へ丸く膨らんで立ち上がり、立ち上がり部にはほぼ正三角形の位置に24・25と同じような脚が付されている。釉は26が茶色味を帯び、27は施釉の状況は不明。２点とも素地は細かく、26は内面が橙褐色、外面が暗灰褐色を呈し、27は黄白色を呈す。

e．酒　器

第35図28～33に示したものである。いわゆるカラカラと呼ばれる容器で、器形的には体部中央で稜を有し、算盤玉状の形状を示すもの（28・29）と押し潰されて膨らみが強く、楕円形状を示すもの（30）が見受けられる。いずれの場合も外面だけに施釉し、内面は露胎である。前者を第１類、後者を第２類とし、以下にそれぞれの特徴について略述する。

・第１類

28・29に示した胴部破片で、２点とも口縁部や底部の状況は不明である。両者とも体部中央の稜をつくる部分の推算径が約13cmである。いずれも外面は透明釉（白化粧）が施釉され、また、稜の上方には細い線彫りによる文様とそれに合わせた配色（呉須、緑釉、鉄釉などを施釉）がみられるものの、全体の構図は不明。29は28より

も濁った感じである。素地は28が灰白色、29が黄白色のやや細かなものである。

・第２類

30に示すもので、低い蛇の目状高台をつくる。推算高台径は約８㎝。暗緑色の灰釉を施釉しているが、施釉範囲は高台際までのようで、以下は露胎になるとみられる。体部のほぼ中央を象嵌技法（線彫りによる沈線などに白土を埋め込んで文様を描出する技法）による鋸歯状文が１条囲繞するようである。また、釉の表面は薄い膜を張ったように白くなっている。素地は淡黄灰色の細かなものである。

31・33は外面の高台際まで鉄釉を施釉し、高台以下および内面は露胎とする底部資料である。両者とも茶色味を有す釉であるが、わりと厚く施釉され黒色を呈す。２点とも素地は暗灰色の細かなものである。32は頸部付近の資料であるが、小破片のため全体の形状は不明。象嵌技法により上下の圏線の間に型押しの花文をあしらうもののようである。外面は透明釉が施されるものの、内面は露胎である。素地は暗灰色の細かなものである。急須の可能性もあるが、とりあえずここに示した。

ｆ．鍋

第35図34～36に示したもので、34・35は身の口縁部、36は蓋の資料である。いずれも小破片のため全体の形状はつかめない。34・35は口縁部をく字状に外反させるもので、蓋受け部となる外反部上端は34がほぼ平坦面をなすが、35ははっきりとした凹面に仕上げている。そのため、35は外反部の内側と上端部に比較的明瞭な稜をつくる。２点とも口唇部は平坦にする。34は頸部よりも外反部が厚くつくられ、資料の端部には口唇部に付された把手の接着部の痕が認められる。推算口径は34が約18㎝、35が約17㎝を測る。

両者とも内面の口縁部上端から外面に緑味のある鉄釉を施釉しているが、内面の口縁部上端すなわち蓋受け部の釉は掻き取っている。素地は34が灰白色、35が橙褐色のやや細かなものである。

36は背面がやや丸味をもつ蓋の資料である。縁部を折り曲げて身との合わせ目を幅広く平坦にするものである。縁部の推算径が約18㎝である。現資料からすると総釉のあと折れ曲がり部の内側と縁部を釉剥ぎしている。鉄釉のようであるが、全体的に白く濁っている。素地は暗茶褐色の細かなもので、白色の砂粒が散見される。素地や釉の状況などから、八重山焼きの範疇に入るものかもしれない。

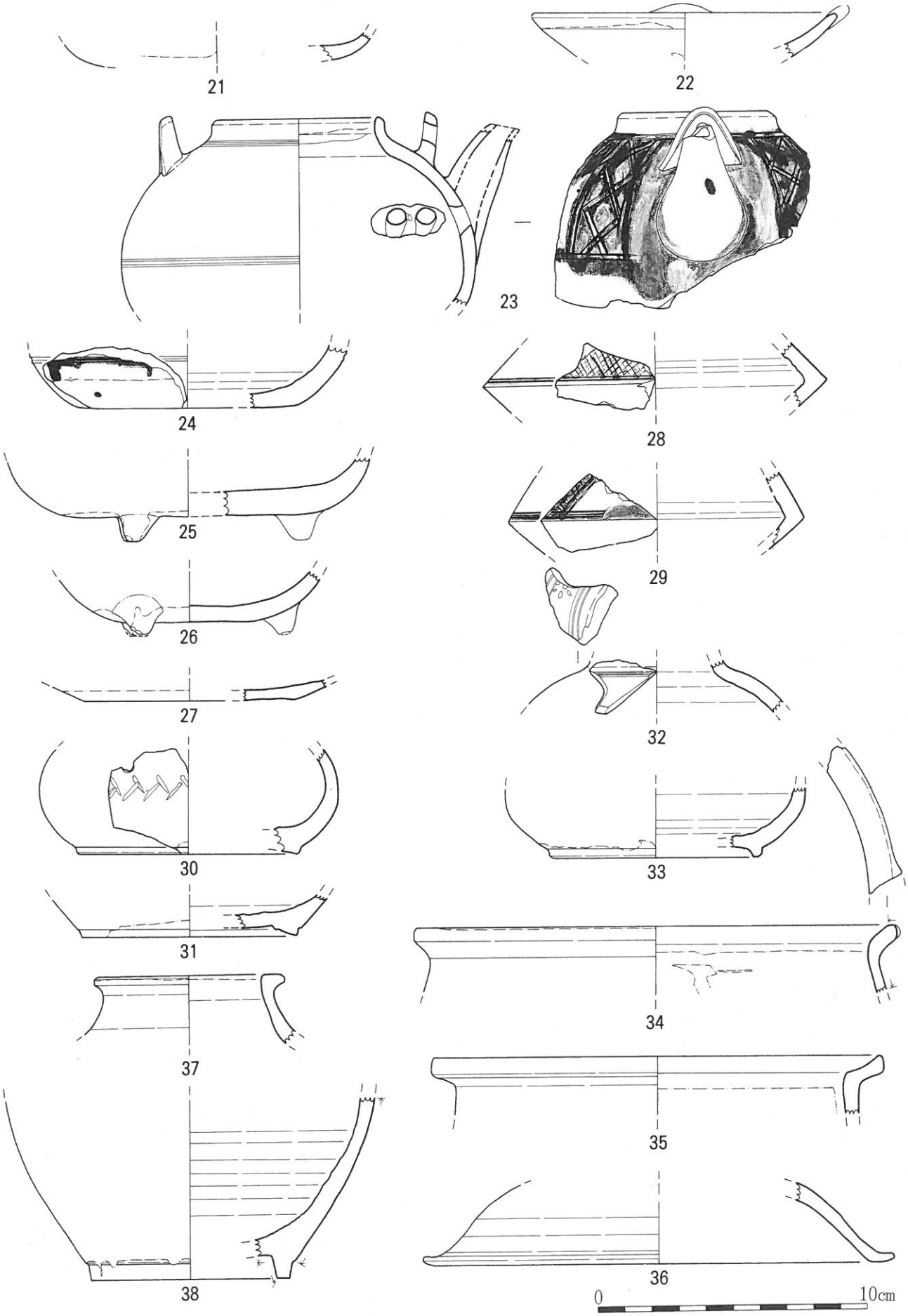
ｇ．壺・瓶類

壺類や瓶類になるかとみられる資料が得られているものの、ほとんどのものが破片のため全形が窺えずここにまとめて扱った。ただ、第35図37・38および第36図39に示した資料は器種の窺えるものである。特徴的なものを第35図37・38および第36図39～46に図示した。以下、それぞれの特徴について簡記する。

37・38は素地や釉の状況などから同一個体かとみられる口縁部と底部の資料で、食料油専用の広口の四耳壺であろう。高台際から頸部下端までゆるやかな弧をえがき、そこから口縁部の方へすぼまるように頸部が立ち上がり、口縁部上端を逆Ｌ字状に肥厚させるという器形が想定される。これまでの類例資料からすると、頸部直下付近の肩部に穿孔された縦耳が４個付されるようである。高台は方柱形にしっかりつくり、畳付けは平坦に仕上げる。37の推算口径が約７㎝、38の推算高台径が約７㎝である。

茶褐色の鉄釉が外面の高台際から内面にかけて施釉され、高台外面と畳付けは露胎となっている。口唇部の釉を剥いで口禿とし、また、高台内側および外底面にも釉を塗布している。内面の釉は薄く均一的であるが、外面および内面の口縁部上端は厚い部分や薄い部分がみられる。内面はロクロ痕が明瞭に認められる。素地は灰白色の細かなもので、小さな気泡が散見される。

39は嘉瓶と呼ばれるもので、口縁部が破損している。ハの字状に若干開き気味につくられた頸部下端から丸味をもつ肩部が張り出してすぼまるように胴中央部へいたり、そこから高台際までは丸く膨らむ。瓢箪を連想させる器形である。高台は外側へ開き気味に厚く、低くつくられている。頸部下端までの高さが15㎝、頸部の破損部（最も高く残っている部分）までの高さが21㎝である。高台径は約８㎝、胴下部の最大径が10㎝、胴中央部の径が９㎝、肩部の径が９㎝、頸部下端の径が６㎝を測る。



第35図　沖縄産施釉陶器 ②

総釉のあと畳付けとその両側を釉剥ぎしているが、釉剥ぎは丁寧ではなく波打つ感じになっている。厚く施釉されたところや釉垂れの部分は黒色を呈すが、釉の薄い部分は暗黄褐色を呈す。外面には砂粒の溶着が散見され、高台外面や外底面には砂目様の溶着が認められる。また、図でみるように若干右側に傾いているが、その部分は釉がダマ状を呈して帯状に縦方向へ走るのが認められる。素地は暗灰白色のやや細かなものであるが、畳付けをみると黄褐色を呈す部分や橙褐色を呈す部分などが見受けられる。

40・41は口縁部の破片である。40は玉縁状に肥厚するもので、推算口径が約2㎝、41は外反口縁の資料で、推算口径は約4㎝である。2点とも外面から内面の口縁部上端に鉄釉を施すもので、40は黄色味を帯び、41は緑味を帯びる。どちらも内面の頸部中央以下は露胎のようである。素地は40が暗茶褐色、41が淡灰白色の細かなもので、40は白色の微砂粒が混入されている。

42は頸部～肩部の資料で、上端の径が約2㎝、下端の推算径が約9㎝を測る。口縁部が外反して頸部で締まり、ナデ肩を呈する丸味のある器形が想定される。肩部上方に浅い段を設け、それから約1㎝下方に丸彫りの圏線が2本、さらにその下方約1㎝のところに同じような圏線が2本認められる。茶色味を帯びた黒釉で、内面の肩部以下は露胎である。素地は灰白色の細かなものである。

43～46に示したものはいずれも底部の資料である。43は畳付けから上方へゆるやかなカーブを持って外底面を削り、あげ底状につくるもので、44もややあげ底状を呈す。45は碁笥底、46は高台を有すものである。46は素地の特徴から八重山焼きの資料かとみられる。

あげ底状につくる43・44はいずれも推算底径が約5㎝を測り、素地は暗灰白色で粗く、黒色や白色の微砂粒を混入するものである。43は徳利や花瓶などのスマートな器形が想定される。器壁は比較的厚みがあるものの、底面部は約3㎜と非常に薄くなっている。両面とも白化粧が施され、灰緑色の灰釉が施釉されている。内面は全釉のようであるが、外面は底部近くまでの施釉で、そこから畳付けおよび外底面は露胎である。底面の露胎部は淡黄褐色を呈す。44は小型の袋物が予想される。内外面とも緑味のある鉄釉が施され、外底面だけを露胎にしている。

45は碁笥底で、畳付けは平坦。推算底径は約10㎝を測る。外面の畳付け際まで黒釉がみられ、それ以下は露胎。内面も無釉のようである。素地は暗灰白色で細かく、黒色や白色の微砂粒が散見される。

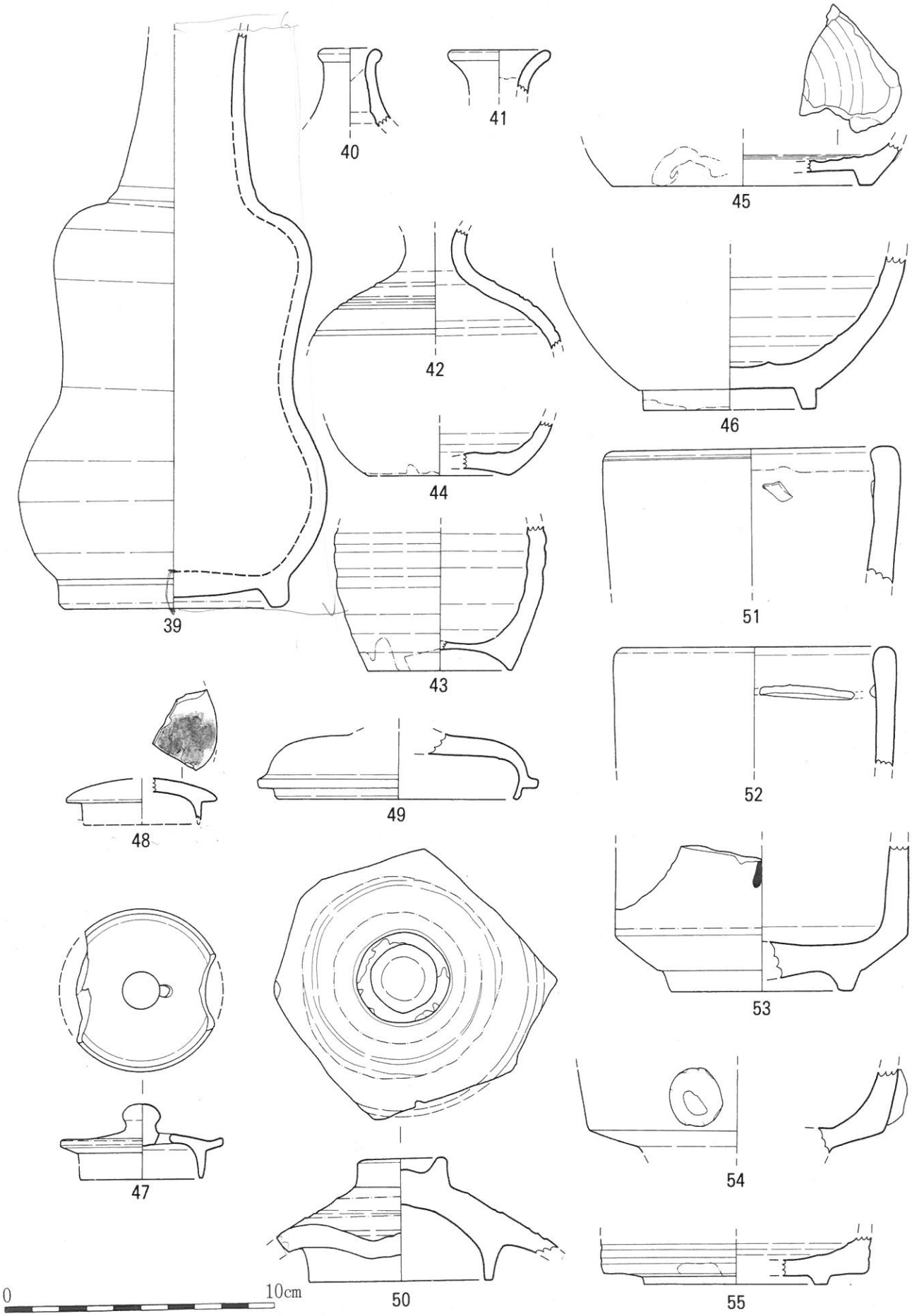
46は高台を有すもので、推算高台径は約6㎝。高台は貼りつけてつくっており、畳付けは平坦に仕上げている。黒釉を外面の高台際まで施釉し、高台および外底面や内面は露胎のようである。釉は細かな凹凸が入り乱れ、凸部は黒色、凹部は暗黄褐色を呈し、斑状になっている。素地は暗茶褐色の細かなもので、微砂粒を多量に含む。赤色粒も散見される。

h．蓋

第36図47～50に示したものである。急須や壺類の蓋かとみられる。47は中央部に宝珠状のつまみを有すもので、それに接するように1個の小孔（内面から外面へやや斜め方向に穿ったもので、径は約5㎜）がみられる。甲部は中央部の方から縁部の方へ下がり気味に整形され、端部が若干上方へ跳ね上がるようになり、縁部をつくる。甲部にだけ黒釉を施釉し、縁部の外面を釉剥ぎしている。甲部の径が約6㎝、かかり部の径が約5㎝。素地は淡灰白色の細かなものである。

48は甲部を縁の方へ下がり気味に整形し、縁部をやや角度をもって削る。そのため、端部は尖る。甲部にだけ透明釉（白化粧）を施している。緑釉の部分も見受けられ、文様が意図されたものかも知れない。縁部の推算径が約6㎝、かかり部の推算径が約4㎝を測る。素地は淡黄白色の細かなものである。

49は左端につまみの接着部が残る。甲中央部からほぼ平坦に縁部の方へ整形し、縁部の近くで大きく下方へカーブする。約1㎝下方に鍔状の小さな張り出し部を設ける。張り出し部の外面は平坦で、上部は端部の方へ上がり気味にするものの、下部は水平に仕上げている。かかり部は47・48に比べ短い。張り出し部の推算径が約10㎝、かかり部の推算径が約9㎝である。甲部から張り出し部外面までは緑釉が施され、内面は露胎としている。釉の厚い部分は青味が強い。素地は淡灰白色の非常に細かなものである。



第36図　沖縄産施釉陶器 ③

50は「ミンガーミー」と呼ばれる壺の蓋になるもののようで、縁部が破損している。中央部に高台状のつまみを有し、その際から縁部の方へハの字状に開く。全体的に蛇の目傘のような形状を呈す。かかり部はやや内側へすぼまる。甲部だけに緑味の強い灰釉が施釉され、内面は露胎のようである。甲部は蛇の目状に釉剥ぎし、その部分にだけ白化粧土が認められる。縁部に近いところに2本の圏線が認められる。つまみ部の径が約3㎝、かかり部の径が約7㎝である。素地は黄白色の細かなものであるが、かかり部は赤褐色になっている。また、かかり部の外面や蓋の裏面は赤褐色の化粧土が塗布されているようである。

i．火　取

ヒートゥイと呼ばれる煙草の火種入れで、いずれも腰折れの筒形を呈すものかとみられる（第36図51～55）。細かくみると数種に分類可能かと考えられるが、今回の場合は点数的に少ないので、分類はせずにそれぞれの特徴を以下に簡記する。

51は内面の口縁部から外面に鉄釉を施釉するもので、内面の口縁部（若干の段を設けて境をつくる）以下は露胎とするようである。口唇部は若干凸面を形成するように仕上げ、両側のカドは丸味を帯びる。釉は失透しており、口唇部の内側は剥げているところも見受けられる。推算口径は約11㎝。素地はやや粗いもので、黄白色を呈す部分と橙褐色の部分がみられる。

52～54は外面（口縁上端部から腰部まで）に透明釉を施釉するもので、口唇部および内面、外面の腰部から外底面は白化粧土のままのものである。52は口縁部の、53は底部～腰部の、54は腰部の資料である。52は口唇部を丸く整形しており、53の高台は逆台形状にしっかりつくられ、畳付けは平坦である。53・54の腰折れ部から高台際までは約2㎝を測る。52の推算口径が約10㎝、53の推算高台径が約7㎝、53・54の腰折れ部の推算径が約11㎝である。53は腰部の上方に呉須の部分が認められ、54は脚とみられる円形状の貼りつけ部が残る。また、52は内面の口唇下約2㎝のところに重ね焼きしたものの縁部が溶着している。いずれも淡黄白色を呈す素地で、52・53はやや粗いもの、54はやや細かいものである。

55は底部～腰部の資料であるが、53に比べ腰折れ部から高台際までがやや水平に仕上げられている。高台は逆台形状を呈すものの、こじんまりと狭く、低くつくられる。畳付けは平坦である。推算高台径が約7㎝、腰折れ部の推算径が約10㎝を測る。腰部までの外面に灰白色の透明釉を施釉し、腰折れ部以下および内面は露胎のようである。腰折れ部直上には鉄釉が施された2本の圏線が認められる。素地は淡灰白色の非常に細かなものである。

第19節　沖縄産無釉陶器

今回得られたものはほとんど破片の資料であるが、すり鉢、壺、水甕、小皿、急須、蓋、水鉢、香炉などバラエティーに富んだ器種が確認されている。得られた資料のほとんどが胎土に白色微砂粒を多量に混入するほか、白色砂粒や赤色粒を含むという同じような特徴が見受けられる。施釉陶器とは異なり、ほとんどが八重山焼きの範疇に入るものかとみられる。出土層の主体は第1、第2層であり、施釉陶器と同じような出土状況を示す。特徴的なものを第37図～第39図に示した。以下、すり鉢から略述する。

a．すり鉢

出土量はそれほど多くなく、全形の窺えるような資料も見受けられない。大きめの破片から第37図に示した。1～7は口縁部の、8～10は底部の資料である。以下、それぞれの特徴について略述する。

・口縁部資料

図示した7点の器形をみると、いずれも底部から直線的に外側に開いて口縁部にいたるもので、上端部を逆L字状に外側へ折り曲げるものである。これらの資料の口縁部の形状をもう少し細かくみると、下記の3種が認められる。

第1種－外反部の下方約1㎝のところで角度を変えて立ち上がり明瞭な稜を有するもの

第2種－第1種の稜を設けている箇所に断面三角形の凸帯を廻らすもの

第３種－胴部からそのまま口縁部へ移行するもの

の３種である。第１種、第２種はやや黒味を帯びたものが多く、第３種は明るい色合のものが目立つ。以下、種別に略述する。

第１種

第37図１・２に示したものである。１は胴上部の稜の直下に幅広（約８㎜）の凹線を廻らし、より強調したものである。口唇部および外反部のカドは丸味を帯び、胴上部の稜をつくる部分の内面に凹線様の溝が１本廻る。口唇部はほぼ水平になっており、櫛描きの波状文を施している。内面の櫛目は凹線様のところまでかきあげられているが、何本単位なのか判然としない。推算口径は約22㎝。

２は注ぎ口を有すもので、推算口径は約28㎝を測る。口縁部上端の折れが小さく、折れ曲がり部の下端が丸味をもっており、一見、肥厚口縁にみえる。口唇部は平坦で内傾するが、内側で若干の平坦部をつくり、縁としている。注ぎ口はナベ底状につくり、約４㎝幅である。内面の櫛目は10本１組のようで、口唇下約１㎝のところに配された凹線（６㎜幅）様のもので上端部をそろえている。

第２種

３・４に示したもので、２点とも小破片のため大きさなどは窺えない。３は４より薄手の資料である。口唇部はいずれも若干内傾し、４は３よりも凸面につくる。また、３は折れ曲がり部の外面が内傾するものの、４は外傾する。３は折れ曲がり部下端から凹面をなして凸帯を配すが、４はその間に平坦面を設けている。内面の櫛目は両者とも７本１組のようである。上端部をナデているが、消えきらずに残る。

第３種

５～７に示したものである。いずれも口唇部を平坦に仕上げ、水平にするものであるが、５・６は折り曲げ部外面がほぼ垂直で、７は内傾するものである。５・６は胴部から口縁部への開きがほぼ同じで、７はより大きく開く。５・６は口唇部の外側寄りに１本の沈線を廻らす。推算口径は５が約27㎝、６が約22㎝、７が約31㎝である。５は内面に櫛目が認められるものの、何本単位なのか判然としない。

・底部資料

第37図８～10に示す３点である。３点とも底面からの立ち上がり部に稜を有すもので、９・10は立ち上がり部をヘラ状工具により調整している。８・９は底面から胴部へ直線的に外側へ開くもので、８は底面から約５㎝、９は約２㎝のところでさらに外側へ開くため、その部分で若干くびれる。推算底径は８が約10㎝、９が約13㎝。内面の櫛目は８が11本１組で、９は判然としない。両者とも内底面から密に掻き上げ、内底面の中央部では横方向への櫛目もみられる。10は胴下部がやや丸く膨らむように立ち上がるもので、推算底径は約11㎝。内面の櫛目は９と同じで何本単位なのか判然としない。櫛目の施し方は８・９とほぼ同様である。

ｂ．壺

無釉陶器の中で最も多く得られているが、ほとんどが破片の資料である。特徴的な口縁部、胴部の資料を第37図11～15および第38図16～27に、底部の資料を第39図29～38に示した。これらの資料をみると大きさや器形などに若干のバリエーションがみられる。以下、部位別に特徴を簡記する。

・口縁部資料

第37図11～15および第38図16～20に示した。これらを大きさ、口縁部の形状で下記のように分類した。

第１種－推算口径が10㎝前後のもの

ａ－口縁部が玉縁状に肥厚するもの

ｂ－口縁部上端を逆Ｌ字状に外側へ折り曲げて外反させるもの

第２種－推算口径が14㎝前後のもの

ａ－口縁部が玉縁状に肥厚するもの

ｂ－口縁部上端を逆Ｌ字状に外側へ折り曲げて外反させるもの

の２種であるが、どの種が主体なのか、量的な傾向はつかめなかった。以下、種別に略述する。

第１種

第37図11～15に示すもので、11～13はａの、14・15はｂの資料である。11～13の資料はいずれも肥厚部下端に凹線様のものを廻らして肥厚部を強調し、そこから直方向の短い頸部（約３㎝）を有している。頸部以下の状況は判然としない。ただ、12をみると肩部のあまり張らないナデ肩が推察される。12は頸部下端に２本の圏線を廻らし、それに一部重なるように文字のようなものを書いている。

14・15も直方向の短い頸部を有すようである。14は15よりも薄手に仕上げられているもので、口唇部の両端や外反部下端の稜はよりシャープにつくられている。２点とも外反部の外面はやや内傾する。14は同一個体かとみられる肩部の資料があり、それからすると肩部の張る器形が想定される。この肩部資料には沈線とその上下に丸と短沈線が施されているが、どのような意味合いのものか判然としない。14は破片の全面に泥釉が施され、暗茶褐色を呈すが、割れ面をみると黒灰色を呈す。

第２種

第38図16～20に示すもので、16～18はａの、19・20はｂの資料である。16～18の資料は細かくみると肥厚の形状に若干の違いがみられる。16は最も締まる部分が肥厚部の直下にくるもので、17・18は肥厚部のやや下方にある。そのため17・18は口縁上端が外側へ開く感じになる。18は推算口径が約18㎝と大きめであるが、とりあえずここに入れた。16はそれほど肩部の張らないもののようで、肩部上方に２本の沈線を廻らし、その直上に耳を付すものである。24に示したものからすると本資料も３箇所に耳を配したかと考えられる。16は外面に緑味の強い自然釉が多くかかる。19・20は外反部の外面をやや内傾気味にするもので、頸部の最も締まる部分が20は外反部に近く、19はやや下方になる。２点とも頸部下端には２本の沈線を廻らしている。

・胴部資料

第38図21～27に示したもので、肩部の状況がわかるものである。破片上端に頸部への立ち上がり部が僅かに残る21～25の上端部の推算径は21～24が10㎝前後、25が約12㎝を測る。これからすると前者は口縁部の第１種に、後者は第２種に含め得るものかと考えられる。21～24はいずれもナデ肩で、胴部が膨らむものである。第１種は全体的に丸味のある器形のものが普通であったかと推察される。21・23・24は頸部下端を若干深く削り込み、段を有す。

21・23は頸部下端の段の直下に１本の沈線を廻らすもので、21はその下方に櫛描きの波状文を施す。22は肩部上方に５本の沈線を施す。24は頸部下端の段からほぼ等間隔に幅広の浅い沈線を施しており、現資料で５本認められる。また、肩部上方に耳を貼りつけており、３箇所に付されたものかとみられる。23・24は泥釉がかけられている。

25は胴部の膨らみがあまりなく、スマートな器形が想定される。肩部上方に１本の沈線を廻らす。

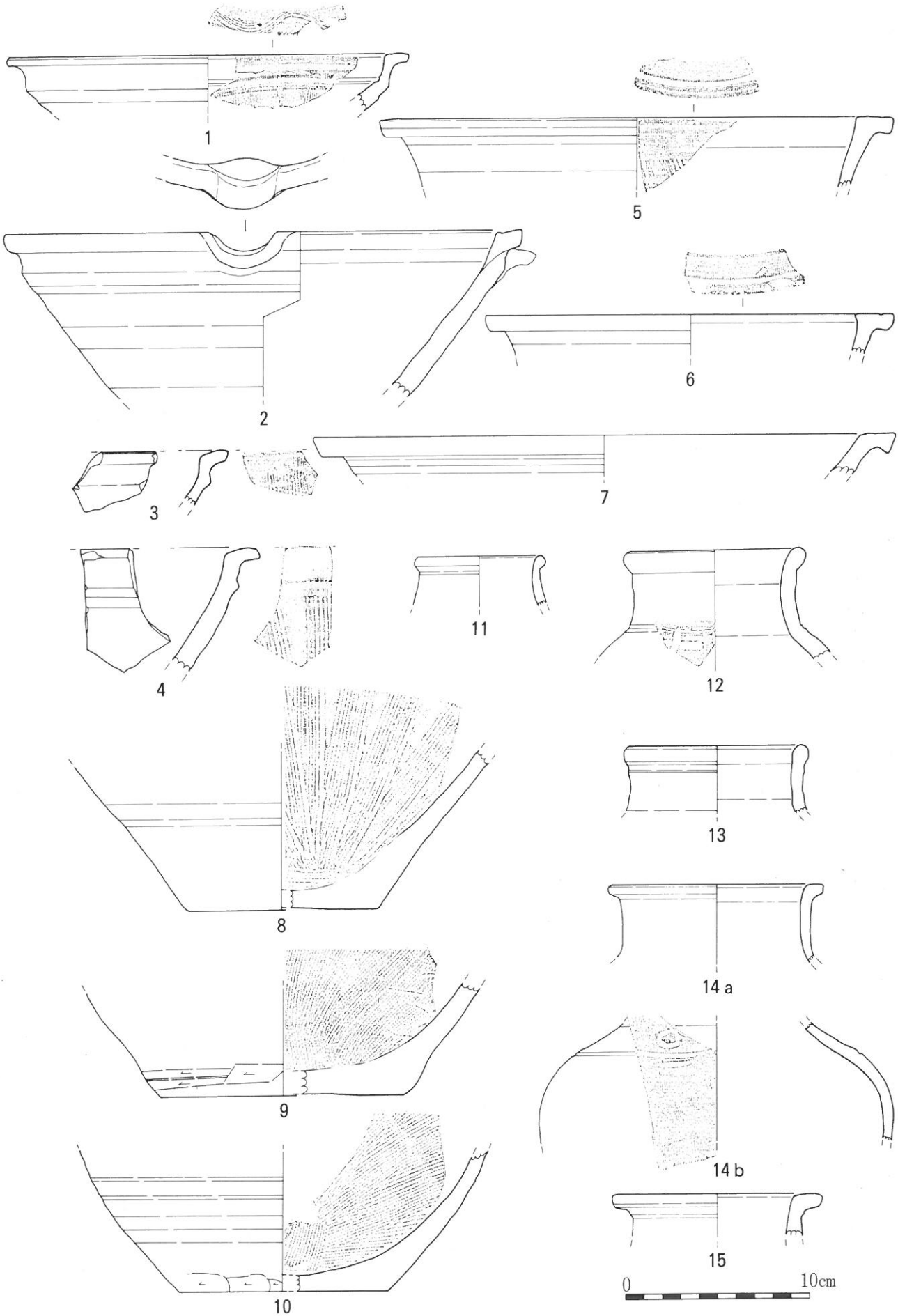
26・27は肩部～胴部の資料で、器形、大きさなどからすると、25と同様に口縁部の第２種に入るものかとみられる。２点とも肩部上方に１本の沈線を施すが、27は約３㎝の間隔を開けてもう１本の沈線を配している。

・底部資料

特徴的なもの10点を第39図29～38に示した。胴上部まで有すものは30に示すものだけで、他は胴下部までの資料である。ほとんどが壺の底部資料になるかとみられる。いずれも推算底径の算出ができ、それをみると大体８～10㎝ぐらいのものと15㎝以上のものにまとめられよう。口縁部の分類にあてはめれば前者が第１種、後者は第２種として把握することが可能かと考えられる。それぞれの特徴について簡記する。

まず、推算底径が８～10㎝ぐらいのものについてみる。第39図29～35に示したのがそれである。胴上部まである30は底面から外側へ開いて立ち上がり、胴部中央付近で膨らみ、そこからすぼまるように口縁部へ向うもので、全体的に丸味のある器形のようである。29・31も外側へ膨らみ気味に底面から立ち上がっており、30と似たような器形が想定される。34は底面から直線的に外側へ開くものであるが、やはり同じような器形が予想される。これらとは別に底面から直線的に角度を持って立ち上がる32・33・35のようなものも見受けられる。

29・31は底面からの立ち上がり部に、35はそのやや上方にヘラ削りを施している。32・33は底面部の縁が押し潰されたように外側へはみだしている部分がみられる。29～31は32～35に比べ、丁寧なつくりである。29・31は



第37図　沖縄産無釉陶器 ①

底面部も滑らかな仕上げであるが、32～35はザラつく感じである。また、内面には成形の際の削り痕が明瞭に残るものが多い。30は外面の大部分に緑黄色の自然釉がかかる。29は外面の胴下部まで泥釉を施したようである。

つぎに推算底径が15cm以上のものをみてみよう。36～38に示したものであるが、底面からの立ち上がりの状況は三者三様である。36は直線的に外側へ開き胴下部でやや弧を描く感じで、30に近い器形が想定される。37はくびれるように立ち上がり、胴下部で外側へ膨らみ気味になる。38はやや角度を持って直線的に立ち上がる。後二者はどのような器形をなすか判然としない。3点とも立ち上がり部を斜めにするもので、37・38はヘラで削っている。37・38は滑らかな器肌を有し、37は縦方向の、38は横方向のハケ目様の調整痕が認められる。36の器表面は土器に近いイメージを抱かすもので、底面部に砂粒の露出が著しい。

c．水　甕

口縁部上端を大きく逆L字状に折り曲げた小破片が1点（第38図28）だけ確認できた。口唇部を幅広く（約5cm）つくり、外側寄りに2本の凹線が廻る。そこからほぼ直線的に胴部へ移行するもののようである。折り曲げ部内側の稜は僅かに上方へ飛び出し、外面はやや上方に谷をもつ略3の字状を呈して内傾する。折り曲げ部と頸部の境目に若干の段を有す。頸部には2本1組の沈線で波状文がラフに施され、その直下に2本の凹線が配されている。

d．小　皿

明確なものを第39図39に示した。推算口径が約11cm、高さが約2cm、推算底径が約8cmである。底面から口縁部の方へ開いて向うが、立ち上がり部の直上に幅広の（約8mm）凹線様のものが廻り、その部分でくびれた感じになっている。口唇部は丸味を持つ。底部は碁笥底状を呈し、底面部は若干凹面をつくる。内面にロクロ痕が比較的明瞭に残る。外面は化粧土を塗っているようで赤味のある暗褐色を呈す。

e．急　須

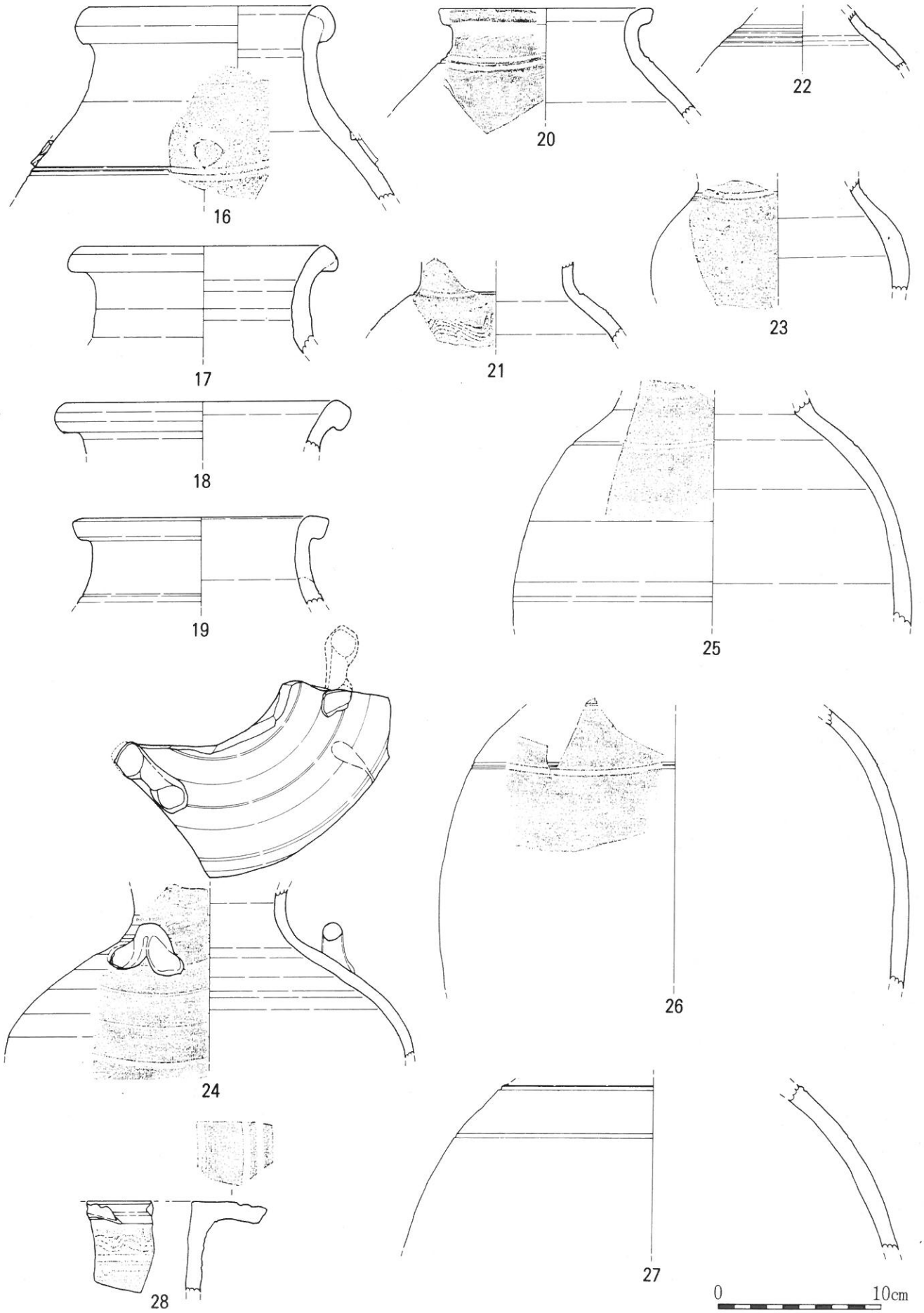
第39図40・41に示した口縁部資料である。40は薄手のものである。大きく膨らんだ胴部から急激にすぼまり、そこから直方向に立ち上がって口縁部をつくる。口唇部は平坦にし、立ち上がり部の内面を若干水平方向へ飛び出させ蓋受けとしている。推算口径は約6cmで、最も膨らんでいる胴部の推算径が約11cmである。注口は最も膨らんだ胴中央部に付されたようである。

41は胴部のやや下半部で稜を有し、底部の方へは直線的に、口縁部の方へは若干弧を描くように向うものである。口縁部はやや内傾して立ち上がり、口唇部は舌状をなす。立ち上がり部内面の蓋受けは斜め下方に飛び出す。推算口径は約7cm。胴上部に注口の接続痕がみられ、その部分の身には表から穿った孔（直径が約1cm）が1個みられる。

40は41に比べると素地づくりのときから丁寧な作業が行なわれたようで、器形や成形の違いなどと合わせてみると、異なる用途の可能性も考えられる。

f．蓋

2点確認でき、第39図42・43に示した。42は甲中央部につまみを有し、内側にはかかり部を設ける。つまみの形状は不明。1段下がるように削り込んでつくられている縁部も破損のため状況はつかめない。段の上部もやや斜位（段の方へ下る）に削っており、段の部分は凸帯状になる。斜位に削っている部分からつまみ部にかけては平坦である。段の部分の推算径が約7cm、かかり部の推算径が約6cmである。43は中央部から縁部へゆるやかに弧を描きながら下がるものである。つまみの有無は不明。縁部の推算径は約8cm。甲部には約1cm幅のやや深い削り調整がみられ、その間に稜が認められる。この削り調整により、縁部は僅かに肥厚しているようにみえる。裏面は比較的滑らかな仕上げである。



第38図　沖縄産無釉陶器 ②

g．水　鉢

第39図44・45に示す２点である。いずれも口縁部が肥厚し、その直下から外側へ膨らみながら胴部へ移行するものである。44は口唇部を広く、水平にする。肥厚部外面の下端が若干内側へ入り込み、頸部との境をつくる。45は逆三角形状の肥厚を示すもので、口唇部は内傾する。両者とも推算口径は約19cm。44は肥厚部下約１cmの箇所に櫛描きのゆるやかな波状文が認められる。また、口唇部の外側約５mmのところから外面には泥釉がかけられているが、ほとんど剥げ落ちている。

h．香　炉

第39図46・47に示したものである。46は口縁部、47は脚部の資料で、２点とも筒形のようである。46は口縁部上端を鉤状に内側へ突出させる。47の脚は逆円錐状を呈し、先端部は平坦にしている。底面部の縁に付されており、高さは約１cm、底面との接着部径は約３cm、脚部先端の径は約１cmである。

i．器種不明

第39図48～53に示したものである。48・49は壺や瓶などの袋物になるかとみられる口縁部破片である。48はラッパ状に大きく外反するもので、推算口径は約６cm、破片下端部の推算径は約４cmである。口唇部は丸味を帯びる。49も外反口縁で、上端部を下方へ折り返すように強く曲げている。折り返しの先端部はやや尖り気味になる。推算口径は約４cm。50は口縁部破片の資料で、推算口径が約２cm、破片下端の推算径が約６cmを測る。口縁部上端の内面が破損しており、形状は判然としない。最もすぼまる頸部に１条の凹線様のものを廻らし、肩部との境としているようである。その下方から丸く膨らむように胴部へ移行する。全体的に丸味を持った小型壺が想定される。外面は非常に丁寧な仕上げで、滑らかな器肌を有す。

51は底部から肩部まで有す資料である。胴部に指で押さえたような凹部を廻らし、その上下に沈線を１本づつ配している。この凹部が廻るため、肩部から３の字状を呈して底部に向う。底部はベタ底で、推算底径は約９cm。凹部直上の肩部の推算径が約15cm、現存の高さが約12cmである。全体的な特徴からすれば壺形の可能性が高い。外面は泥釉が底部近くまで施されている。

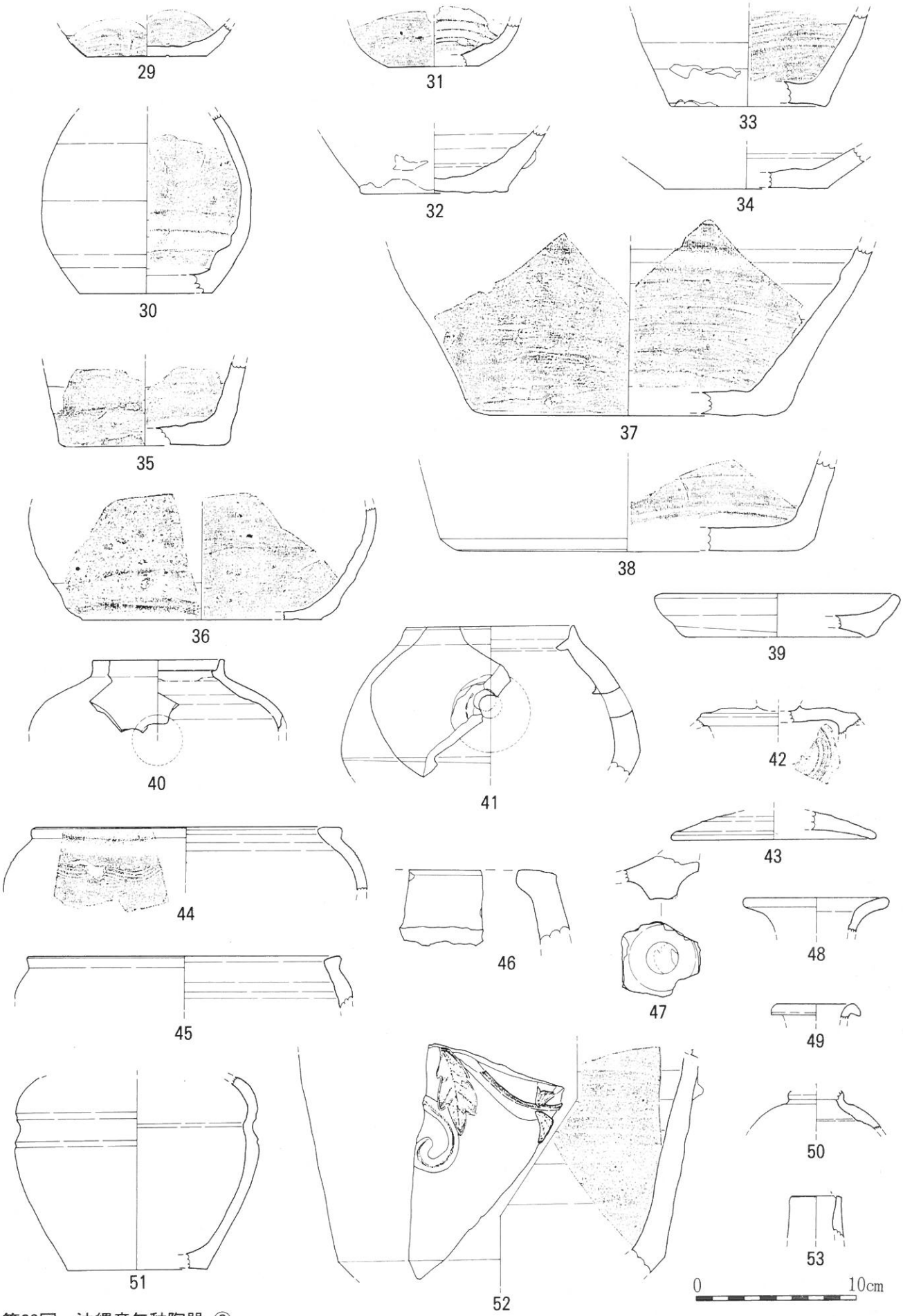
52は草花文を貼りつけている胴部破片で、全体の形状は窺えない。図では口縁部の方へ直線的に向う腰折れの資料として示した。腰折れの部分の推算径が約20cm、破片上端部の推算径が約25cmである。貼りつけられている草花文は比較的丁寧なつくりで、葉っぱの部分は葉脈まで表現している。外面は滑らかな器肌を有し、内面には成形の際の調整痕が認められる。

53は小破片の資料で、推算径は約２cmを測る。平坦に整形された口縁部から直線的に下方へ移行するもので、内面の口縁部を若干削り細くしている。全体的な状況からすると本資料自体で器になる可能性は低いようにおもえる。

第20節　陶質土器

量的には僅少である。ほとんど小破片の資料で、器種の明確なものも少ない。得られた資料をみると、沖縄本島の壺屋で「アカモノ」と通称されているものと同じような特徴を有す資料やそれとは異なる特徴を有すものなどが見受けられる。前者はロクロを使用するもの、後者は使用しないものである。資料から受ける感じは異なるものの、焼成が良好であることや器色が橙褐色のような明るい色合のものであることなどが似ている点としてあげられよう。出土層の主体は第１、第２層である。特徴的なものを第40図に示した。以下、それぞれについて簡述する。

１・２に示したものは丁寧なつくりで、胎土は緻密、薄手に仕上げられたものである。１は口唇部を平坦にし、その下方約１cmのところに稜が廻っている。２はベタ底の資料で、底面からの立ち上がり部は明瞭な稜を有し、若干開き気味に胴部へ向うもののようである。１の推算口径が約４cm、２の推算底径が約５cmである。これらの諸特徴からすると、２点とも茶入れ壺のような小型のものが想定されよう。本来的には別項目で扱うべきものか



第39図　沖縄産無釉陶器 ③

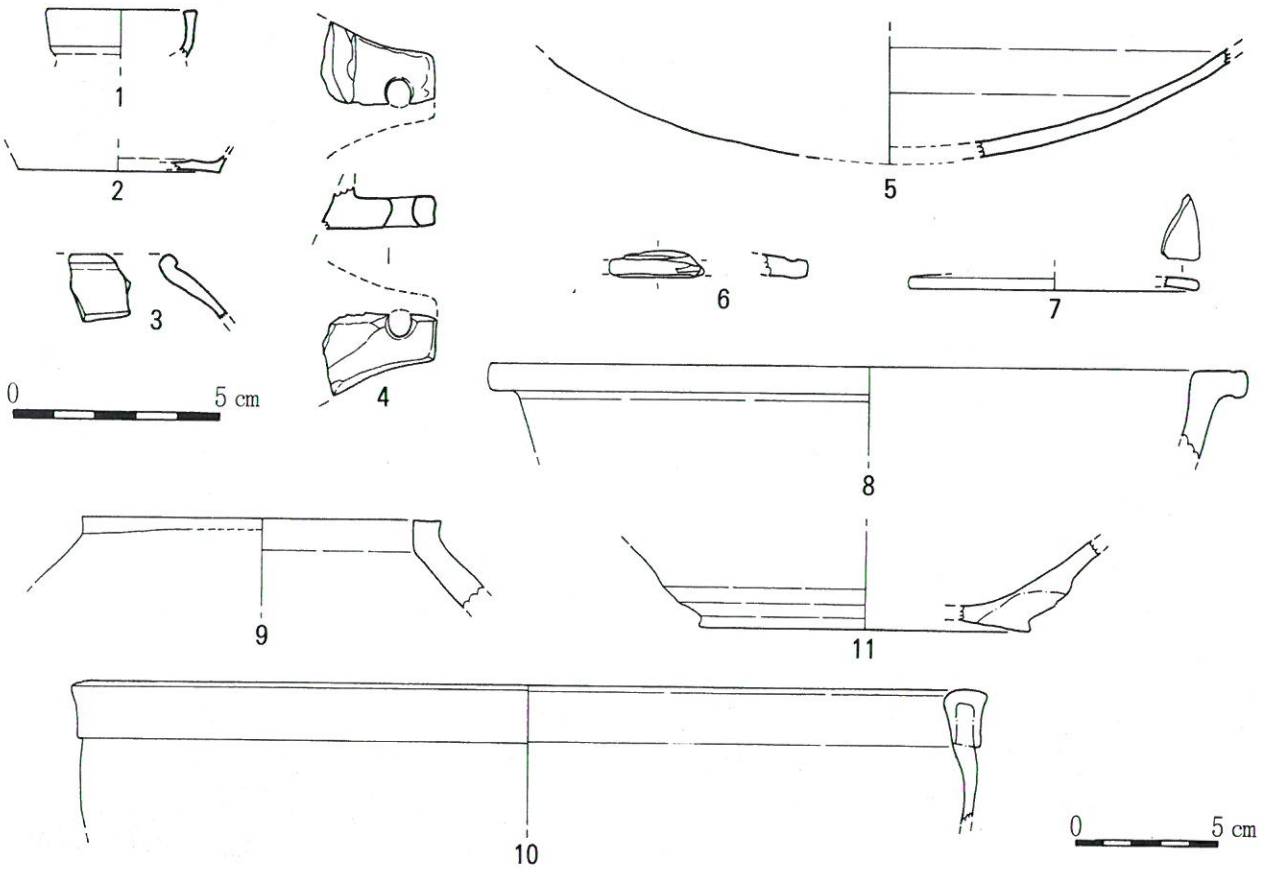
もしれない。

3～8に示すものは「アカモノ」と似たような特徴を有すものである。3は若干肥厚気味になる口縁部が頸部で僅かに締まり、そこからやや膨らみながら胴部へ移行するもののようである。小破片のため全体的な形状や大きさなど不明。4・5は土瓶の資料で、4は把手、5は底部付近のものである。4はこの種に普通にみられる把手で、台形状を呈すものの中央やや上方に径約5㎜の円形の孔を穿つものである。5は丸底になるかとみられるもので、外面に煤が付着している。

6・7は蓋の縁部の資料かとみられるもので、端部はやや平坦に仕上げている。全体の形状は不明。6は7よりも厚く、端部近くの表面に凹線が1本廻る。7は推算径が約10cmを測る。8は口縁部上端を逆L字状に折り曲げ、そこから直線的にすぼまりながら胴部へ移行するもののようで鉢形が想定される。推算口径は約26cm。口唇部の外側寄りに1本の沈線を廻らす。

9は胎土に金雲母が密にみられ、赤色粒や石英などの白色粒もかなり含む。短頸の壺形のように図示したが、上端から約3㎝下方に焼成前に穿たれた孔（直径約1㎝の円形状）が認められる。口唇部は平坦に切った感じであり、まったく別の器種のものかもしれない。推算口径は約12cm。

10・11は無釉陶器と似た感じの胎土であるが、焼成は陶器ほどではない。石英などの粗い粒や赤色粒を混入しており、特に11の外底面で著しく器面に露出する。10は口縁部を扁平の長方形状に肥厚させるもので、口唇部は厚く、丸味をおびる。肥厚帯の長さは約2㎝で、そこから直線的に胴部へ向うもののようである。推算口径は約31cmを測る。11は底面部が潰れた感じで外側へとびだし、立ち上がり部がくびれる。そこから外側へ開いて胴部にむかう。外面の調整はかなり強弱がみられ、凹凸をなしている。内面は比較的滑らかな仕上げである。推算底径は約11cmを測る。



第40図　陶質土器

第21節　石　　器

Ⅰ地区の調査では、石斧、砥石の２種類の石器と用途不明石器、硯等の石製品が出土した。以下、それぞれの形態・特徴について記述する。

第８表　石器・石製品観察

挿図番号		種類	出土地点	層	法量（cm／g） 長さ	幅	厚さ	重量	石質	観察事項
第41図・図版39	1	石斧	表採		10.5	4.6	1.9	140	輝緑石	全面的に研磨・調整された磨製石斧である。完全形で、平面形は短冊形を呈する。刃部は鈍角で研磨仕上げは雑である。刃部先には僅かに使用痕が見られる。
	2	石斧	E－9	Ⅱ	7.4	4.6	1.5	90	輝緑石	両面刃部に加工を施した局部磨製石斧である。一部僅かに欠損しているが、ほぼ完全形と思われる。平面形はバチ形を呈する。裏面に自然面を残し、両側面はラフな打剥離調整である。刃部は鈍角である。
	3	砥石	E－9	Ⅲ	7.8	6.9	3.6	270	微粒砂岩（ニービ）	L字状の隅部があり、平面形は方形状に近い形だと推定される。矢柄などの研磨に使用したと考えられる砥石である。三面（表面・背面・側面）に直線状の磨面溝ある。深くシャープな溝３本、同一方向に走る。線状痕の幅輪は殆ど同じで、横断面はVもしくはU字状で深さ平均２cmを計る。
	4	機種不明	E－9	Ⅰ	4.7	4.6	0.3	10	黒色千枚岩	扁平状の石器と思われる用途不明品である。側面に斜位の加工痕が走る。他に破片数十点の黒色千枚岩が確認されている。
	5	硯	D－9	Ⅱ	8.9	6.4	1.4	70	緑色千枚岩	墨受部から胴部に至る半資料である。中央部から墨受部に向けて斜めに溝が走る。墨受部から胴部まで緩やかに立ち上がる。裏目の浅い彫り込みは認められない。
	6	硯	G－9	Ⅱ	5.8	6.2	1.0	60	黒色千枚岩	墨受部の破損品である。裏目の浅い彫り込みは認められない。裏面に細線で「宮良」と刻まれている。
	7	硯	G－9	Ⅱ	8.1	6.4	1.8	130	泥岩製？	墨受部から胴部に至る半資料である。中央部から墨受部に向けて縦溝が走る。裏目には浅い彫り込みが認められる。
	8	硯	表採		11.0	6.2	2.3	210	砂岩？もしくは粘土質	同一個体で復元を試みた墨受部と摺部である。人工品（土製品）の可能性がある。裏目には浅い彫り込みが認められる。

小　結

安定した土層からの出土は、局部磨製石斧と砥石のみで極端に数が少ない。局部磨製石斧は、方形状石組遺構の西隣からの出土ではあるが、遺構との関連性は感じ取れなかった。

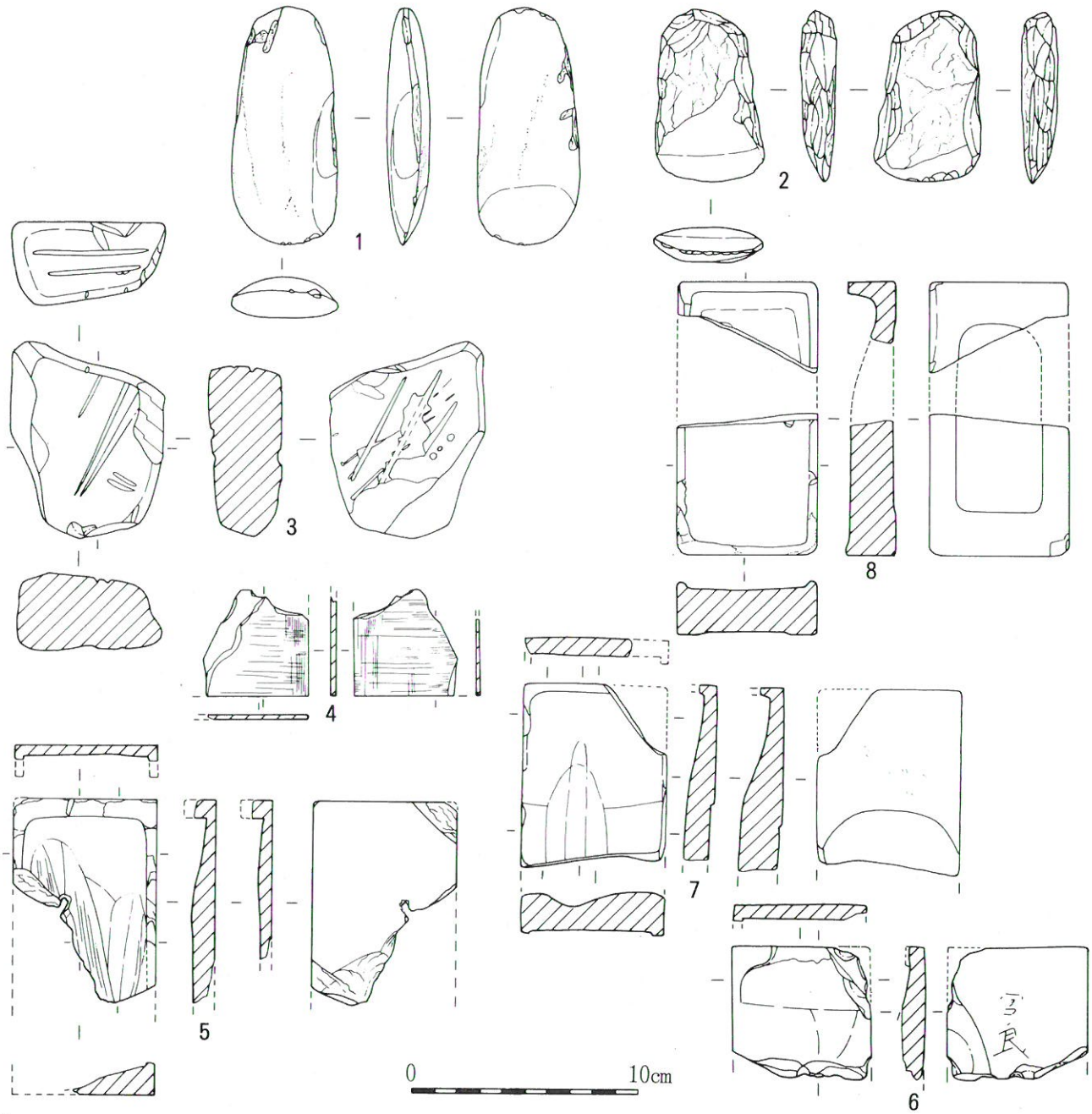
石斧の石材として用いられている輝緑岩は西表島では産出しないことから、石垣島などからの搬入が考えられる。当時の交易関係を知る上でもこの資料は貴重なものと言える。また隣接する屋敷跡（石垣善彦氏所有）には、頭大の輝緑岩が屋敷囲いの石垣に使用されており、このことから輝緑岩は原石のまま現地に搬入され、この地にて石斧に加工された可能性が推測される。

第22節　骨製品

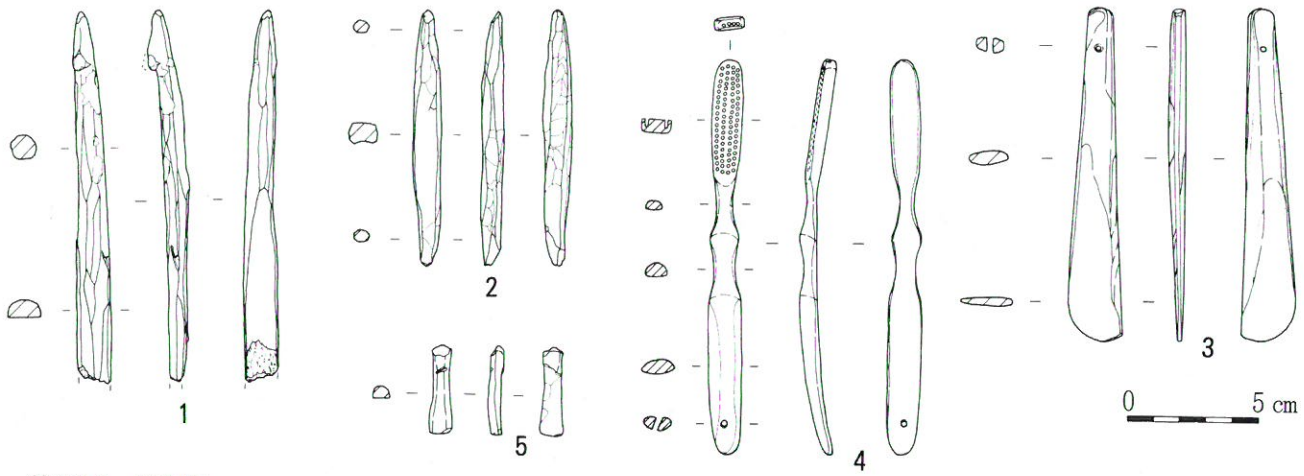
今回の調査では、Ⅰ地区の鍛冶屋跡地において骨製品が出土した。出土遺物はヤス、尖頭製品、骨箆、歯ブラシの４種類である。製品以外では、食用時についたと考えられる刃物痕のある獣骨片が数多く出土している。以下、各製品の形態・特徴について記述する。

第９表　骨製品観察一覧

挿図図版		種別	骨	法量（cm／g） 最大長	最大幅	最大厚	観察事項	出土地・層	
第42図・図版39	1	ヤス	シカ（角）	14.2	1.2	0.9	先端部とかえりが僅かに欠損している。尻部も折れているが、残長からほぼ完全形に近いと考えられる。側面形は先端から尻部にかけて鈍い湾曲を描いている。裏面下部は平坦に調整され、柄に取り付けやすいよう加工されている。固定式の組み合わせ銛（ヤス）を思わせる資料である。	E－9	Ⅲ
	2	尖頭状製品	イノシシ	9.7	1.1	0.8	尖頭状の製品で、決め手を欠くが製作途中品とも考えられる資料である。上下端とも尖頭に細工され、一部に刃こぼれと考えられる痕が見られる。表面の一部を除き全体的に雑仕上げである。断面は中央部が浅い凹型であるが、ほぼ楕円形を呈する。完成品か疑問の残る製品である。	E－9	Ⅲ
	3	箆	ウシ	12.7	1.5	0.5	ヘラ状製品の完成品である。全体形は青竜刀形を呈し、偏平状で全面とも丁寧に研磨が施されている。裁縫用の箆と考えられる。	E－9	Ⅱ
	4	歯ブラシ	ウシ	15.1	1.2	0.5	完形品の歯ブラシである。全体的に丁寧に研磨が施され、側面形は僅かに湾曲を描いている。頭部には４穴×19／20穴と頭部側上面に４穴があり、柄部の孔は斜めに穿孔されている。	E－9	Ⅱ
	5	歯ブラシ	ウシ	3.8	0.8	0.4	歯ブラシの頚部片である。上製品より長めの頚で、裏面は丁寧な平坦仕上げである。	E－9	Ⅱ



第41図　石器・硯（１地区）



第42図　骨製品

小　結

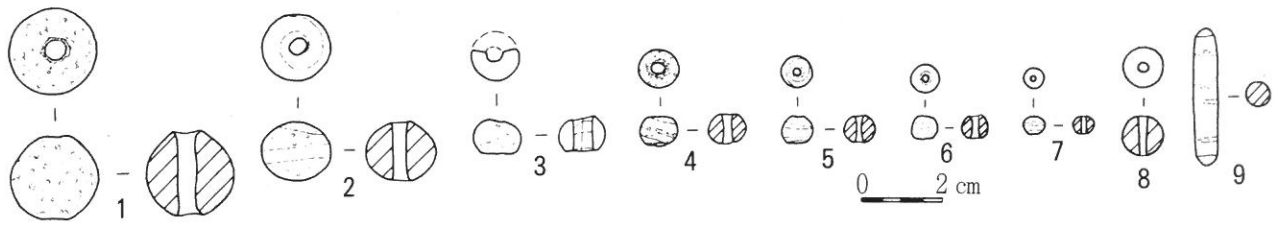
Ⅰ地区の鍛冶屋跡地からの出土である。獣骨の出土量が発掘範囲の割には多く、特に刃物痕の入った骨が目に付いた。ヤスは、組み合わせ式の固定ヤスと考えられる資料である。注目すべきことは素材として鹿角が使用されていることで、八重山諸島における出土の前例が見あたらない。また、この時期に関して県内初資料の可能性がある。出土地点は方形状石組遺構の後背付近であり、遺構と何らかの関連を窺う事の出来得る重要な資料と思われる。尖頭状製品は、先端部のつくりから錐状の用途・機能が考えられるが、ヤスと供判していることから、ヤスと同様に漁労用道具とも考えられる。類例資料との比較・検討が待たれる。

第23節　玉　　類

今回の調査では、Ⅰ地区の「慶来慶田城翁屋敷跡」で6個、「鍛冶屋跡」で2個の合計8個の玉類が出土した。これらの資料のほとんどが、丸玉の中でも小孔の位置する上下面をやや偏平にしたタイプの玉であった。同色の玉はない。「翁屋敷跡」で出土する遺物の殆どが耕作による影響のため小破片となっいるのに対し、玉類には影響が少なく、検出された全てが完形品であった。「鍛冶屋跡」の遺構内出土のガラス玉だけが破片資料である。以下、それぞれについて記述する。

第10表　玉製品観察一覧

挿図図版		法量（mm／mg） 最大幅	高	孔径	重量	材質	観察事項	出土地・層		備考
第43図・図版46	1	20.5	19.5	5.3	10.3	ガラス	アバタ状のキズが多数見られる大型丸玉である。輪積み痕は不鮮明で、水色を呈する。	表採		慶田城次男家（翁屋敷の南隣）
	2	15.9	13.0	3.7	4.5	ガラス	多少アバタ状のキズが見られる臼形玉である。輪積み痕は鮮明で、白色を呈する。	鍛冶屋跡	G－9Ⅱ	
	3	11.2	8.3	3.6	－	ガラス	半形品の中型丸玉である。輪積みは不鮮明で、水色を呈する。	鍛冶屋跡	E－9Ⅱ	方形状石組遺構の西隅上面より
	4	9.0	6.9	4.0	0.7	ガラス	偏平形で光沢の少ない丸玉である。孔径が大きく、雑で切り取りが大きい。光沢のない水色を呈する。	翁屋敷跡	D－4Ⅱ	図3～7まで供伴遺物
	5	7.0	5.7	2.0	0.6	ガラス	臼玉に近い玉である。輪積み跡は不鮮明で、青紫色を呈する。	翁屋敷跡	D－4Ⅱ	〃
	6	6.4	5.1	2.0	0.4	ガラス	孔部分を平らに仕上げた臼形玉である。輪積み痕は不鮮明である。良質のガラス玉で緑色を呈する。	翁屋敷跡	D－4Ⅱ	〃
	7	4.6	4.0	1.5	0.1	ガラス	孔部が平らな小型丸玉である。輪積み痕は鮮明で、青色を呈する。	翁屋敷跡	D－4Ⅱ	〃
	8	9.3	8.6	2.5	1.0	石製	完全丸形の玉である。玉石を加工したきめ細い磨きである。全体に白色を呈し、橙色の連続模様が走る。	翁屋敷跡	D－4Ⅱ	〃
	9	5.8	33.1	－	8.3	石製	棒状に加工された製品である。上下先端部を磨きによって尖頭状に加工している。用途不明。	翁屋敷跡		



第43図　玉製品

小　結

この種の玉類は県内において、グスク時代の遺跡からの出土例が多い。八重山地域ではフルスト原遺跡などで出土しており、祖納半島北側の上村遺跡大竹御嶽地域でも１個出土している。地元の方によると、他の屋敷跡地でも耕作中に時折玉類が見られるとのことであり、調査期間中に幾つか見せて頂いた。出土する玉類の用途・機能は装飾品あるいは祭祀関連用のものと推定されるが、興味深いことは「鍛冶屋跡」のガラス玉（第43図３）が方形状石組遺構の上面剥ぎ取りの際に検出されたものであったことである。県内における中世・近世期の墳墓調査の件数が少なく、遺構が墳墓か否か現段階では確定出来ないが、副葬品的な意図の窺える資料であると言える。今後、総合的な墳墓の調査・研究が必要であり、類似遺構の調査が待たれる。

第24節　鉄 製 品

Ｉ地区の鉄製品は棒状あるいは板状のものなどが、翁屋敷跡、鍛冶屋跡の両地点で多量に得られた（第1表）。全体的に錆膨れが進行し、あるいは細片となって原形の窺えるものは少ない。製品として判別できる手斧、山刀鉄釘、鋏の資料を以下に示した。

第44図1の手斧は、異物が付着してさらに大きな錆膨れを形成している。柄を装着する袋部は、幅約２㎝で長さは不明である。全長９㎝、刃幅8.1㎝、刃の厚さ４㎜、重量144.2ｇを測る。同様の製品がカンドウ原遺跡（註１）で出土しているが、本品が全長９㎝と短く、長期間使用された結果研ぎ減ったものと考えられる。鍛冶屋跡Ｅ－９西Ⅲ層出土。

同図２は、山刀として扱った資料である。刃、柄とも破損しているが現存の計測で刃わたり９㎝、柄部５㎝、峯幅８㎜、重量125gとなっている。峯の部分で縦位のヒビ割れが見られ、叩きによる成形であることを示している。本資料は身の厚みに対して刃の幅が細く、使用時の研ぎ減りの可能性が考えられる。鍛冶屋跡Ｇ－９Ⅱ層出土。

同図３は角状に折り曲げて成形された釘である。錆び膨れはあるものの断面は方形状をなすのが分かる。先端部は欠損し、頭部の折り曲げの角度や長さは判然としない。縦位に亀裂がいくつも見られ、剥離している箇所もある。現存する長さは４㎝、重量5.8ｇ。鍛冶屋跡方形状遺構内部より出土。同図４も鉄釘で錆が全体を覆って原形の幅などは不明だが、３と同様に身の断面が方形をなす。先端に向かって細くなり、身は反っている。全長7.8㎝、重量13.1ｇ。翁屋敷跡Ｄ－４Ⅱ層出土。

同図５は、鉄製鋏で、一端は角の部分で折れているが、もう一端は角をもって先端が尖る。頭部の長さは5.5㎝、身の長さ2.1㎝、現重量16.9ｇを測った。鍛冶屋跡Ｅ－９西Ⅲ層出土。

以上が翁屋敷跡、鍛冶屋跡の両地点で得られた鉄製品である。その他の判別困難な資料を概観すると、板状製品で鉄鍋の可能性が考えられるものも若干含まれている。いずれにせよ、これまで八重山地域における鉄製品の出土傾向について指摘があったように（註２）、今回の出土資料も日常生活品で占められたものになっている。

註

註１　沖縄県教育委員会『カンドウ原遺跡発掘調査報告（Ｉ）－排水溝に伴う緊急調査－』「沖縄県文化財調査報告書 第49集」1983年

註２　沖縄県教育委員会 大城慧『文化課紀要』「沖縄グスク時代鉄器・鉄滓出土地名表」第６号 1990年

第25節　青銅製品

本地区で青銅製品としては、簪、釘状製品などが得られている。両地区で合計20点となっている。形状の判別できる資料について以下に述べる。

１．簪

一般的に方言名である「ジーファー」は女性用の本簪を指すことから、本項では当該製品を「簪」とし、取り

扱った。本遺跡で出土した簪はすべて青銅製である。鍛冶屋跡地で１点、翁屋敷跡で６点出土している。出土した資料の頭部から、スプーン状－ａ類、花弁状のもの－ｂ類、耳かき状－ｃ類の３種に分られる。

ａ類としたスプーン状の頭部をもつのは第44図６～８である。いずれも竿は六角形を呈する。６、７は先端部にむかって次第に太くなっており、サイズの違いを除けばほぼ同じ様なつくりである。８は竿の下半分が欠損し、頭部の破損も著しい。残存状態からすると、比較的幅の広い頭部をもっていたかと推察される。

第11表　簪計測表

単位：cm／g

挿図図版	番	分類	頭長	頭長幅	現長	現重量	備考	出土地
第44図・図版52	6	a	1.3	1.4	17	13.3	完形	鍛冶屋跡 E－9 Ⅰ
	7		1.2	1.2	9	6.5	完形	翁屋敷跡 D－4 Ⅰ
	8		2.15	1.3	7.9	5.7	破損	翁屋敷跡 D－5 Ⅱ
	9	b	－	－	8.9	7.4	欠落	翁屋敷跡 D－4 Ⅱ
	10		－	－	1.75	7.9	欠落	翁屋敷跡 E－4 Ⅱ
	11	c	2.1	0.5	4.5	1.8	破損	翁屋敷跡 E－3 Ⅱ
	12		1.3	0.45	3.4	1.2	破損	翁屋敷跡 D－4 Ⅱ

ｂ類の９は装飾部の細かな綾と６つの外角が花弁を表している。10のような竿に装着された頭部と考えられ、直径1.8cmで、裏面には竿と接合させるためのくぼみがある。同10図は花弁状の装飾となる頭部があったと考えられ、欠落して竿のみの資料となっている。首部は装飾部との接合のために丸く抉られている。竿上部には左傾の斜線が認められる。竿は四角に面取りされ先端は４角錐である。

耳かき状のｃ類は同図11、12である。２点とも竿部分から欠損しているが、頭部の形状からすると両者はほぼ同じサイズになるものであろう。頭部裏面は丸味を帯び、11の竿断面は丸、12は六角である。

２．釘状製品

第44図13は釘に類似した製品である。頭部に角をもち、最頂部は平坦に成形される。先端部は片側が削られ若干鋭くなっている。全長3.1cm、重量5.7ｇ。翁屋敷跡Ｄ－４Ⅱ層出土。

小　結

以上がＩ地区で出土した青銅製品である。第44図６，７の簪については、カブと称される半月形の頭部を持つことから女性用の簪であろう。一方、男簪の髪差は「花・首・ムディ・竿」の部分で構成され、９は「花」、10が以下の部分となる。同様の竿は宮古・八重山地域では宮国元島（註１）の例がある。９の頭部の装飾については、阿波根古島（註２）での裏が空洞になっているもの、喜如嘉のワラビンチャー墓（註３）、御細工所跡（註４）の扁平なものと比べ厚みがあり、つくりが重厚な印象を受ける。同図11、12は簪の項で扱ったものの頭部を含め全体的に小さいことから、本簪よりも副簪の可能性が考えられる。

註

註１　沖縄・宮古上野村教育委員会『宮国元島』「宮国元島遺跡調査報告」1980年３月

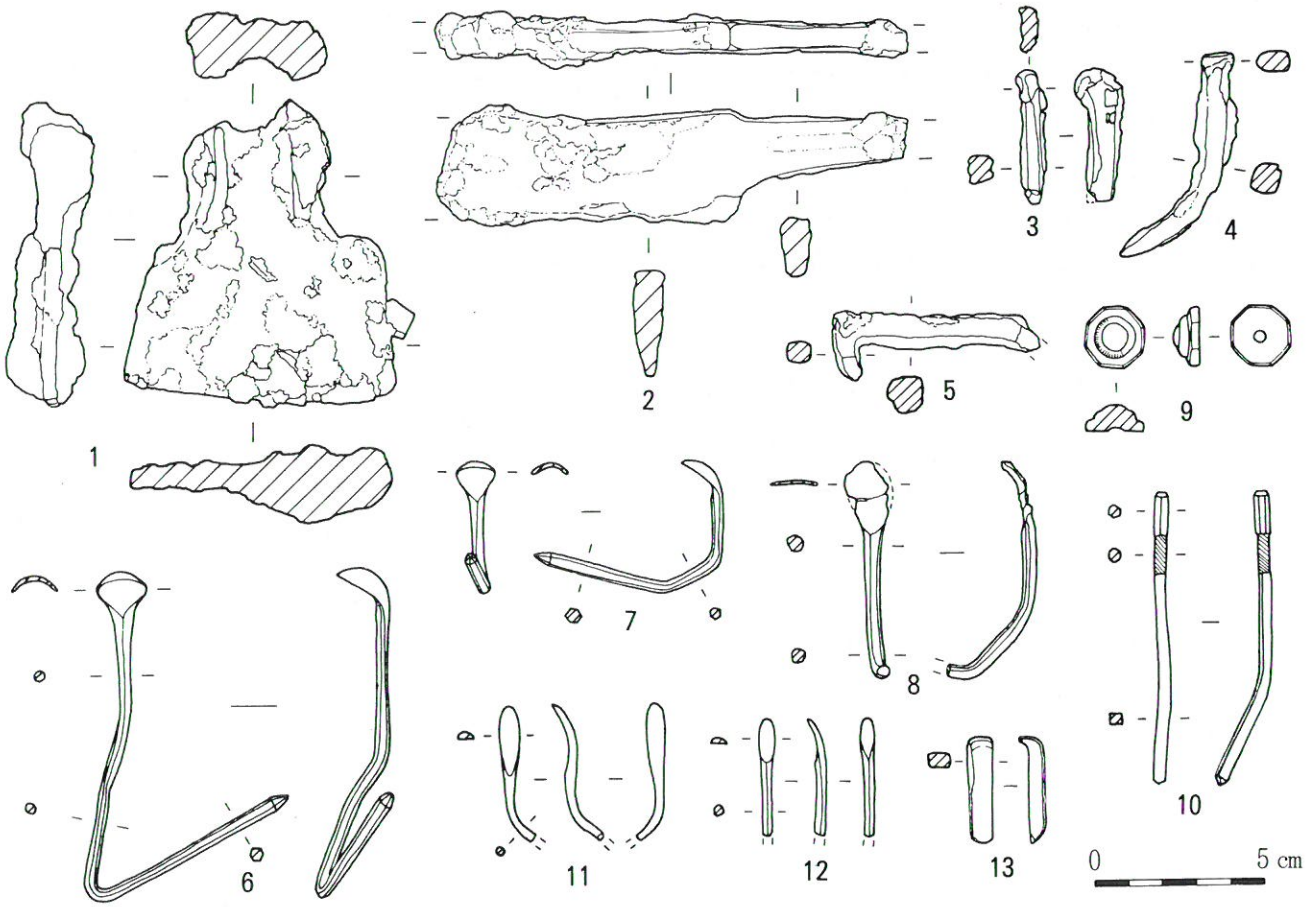
註２　沖縄県教育委員会『阿波根古島遺跡』「沖縄県文化財発掘調査報告書」第96集　1990年３月

註３　沖縄県教育委員会『喜如嘉貝塚・付編ワラビンチャー墓の確認調査』「沖縄県文化財調査報告書」第114集　1994年３月

註４　那覇市教育委員会『御細工所跡－城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告－』「那覇市文化財調査報告書」第18集　1991年３月

参考文献

『沖縄大百科事典』「簪」真栄平房敬　沖縄タイムス社　1981年



第44図　鉄・青銅製品

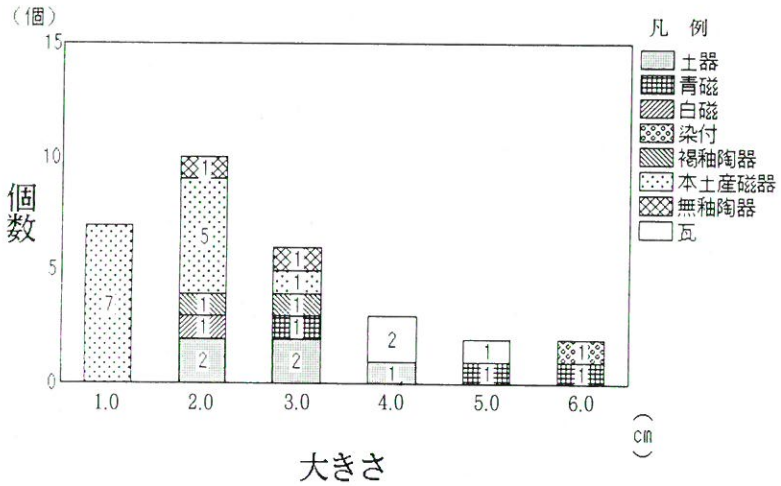
第26節　円盤状製品

本製品は、磁器、陶器、瓦などを円盤状に打割調整した二次製品である。Ⅰ地区では、鍛冶屋跡14点、翁屋敷跡16点、計30点が得られている（第12表）。

素材別の内訳は、土器５点、青磁３点、白磁・染付が各１点、褐釉陶器２点、本土産磁器13点、無釉陶器２点、瓦３点となっている。今回最も多く得られた本土産磁器製は、鍛冶屋跡３点、翁屋敷跡10点であるのに対し、次いで多い土器製では、鍛冶屋跡５点、翁屋敷跡１点である。また、本土産磁器製13点のうち11点が明治～昭和にかけての現代製であり、このことは、本製品の使用時期について１つの参考資料となるものである。

第12表　円盤状製品出土状況

出土地 / 素材	鍛冶屋跡 表採	Ⅰ	Ⅱ	不明	小計	翁屋敷跡 Ⅰ	Ⅱ	小計	合計
土器		3		1	4		1	1	5
青磁		1	1		2		1	1	3
白磁			1		1			0	1
染付			1		1			0	1
褐釉陶器					0		2	2	2
本土産磁器 白磁			1		1		2	2	3
本土産磁器 染付			2		2		2	2	4
本土産磁器 色絵					0		1	1	1
本土産磁器 型紙刷り					0	1		1	1
本土産磁器 銅版転写					0		3	3	3
本土産磁器 印文					0		1	1	1
無釉陶器			1	1	2			0	2
瓦	1				1		2	2	3
合計	1	4	7	2	14	1	15	16	30



第45図　円盤状製品の大きさと素材の相関

大きさでは、最小のもので1.65cm、最大のもので6.5cmで、1cm～3cm大が大半であり、それらの素材は殆どが磁器である（第45図）。

部位別でみてみると、胴部が殆どを占め24点、底部が6点であり、I地区の資料からは口縁部利用の資料は見られない。それに対応して、断面観でも湾曲が15点と半数を占め、平11点、凹4点である。

剥離方向に付いては、外→内15点、内→外7点、両面7点、丁寧に研磨が施されているため不明とした1点がある。今回、研磨調整が施されている資料としては、土器製・無釉陶器製の各1点ずつがある。打割調整によるものが殆どである本製品では、研磨調整によるものはあまり見られないことからも好資料といえる。

形態については、個々の打割調整によっても異なってくると思われるが、不定形18点、次いで円9点、楕円3点である。

個々の詳細については、第13表に示し、そのうち12点を図示している（第46図）。

第13表a　円盤状製品観察一覧

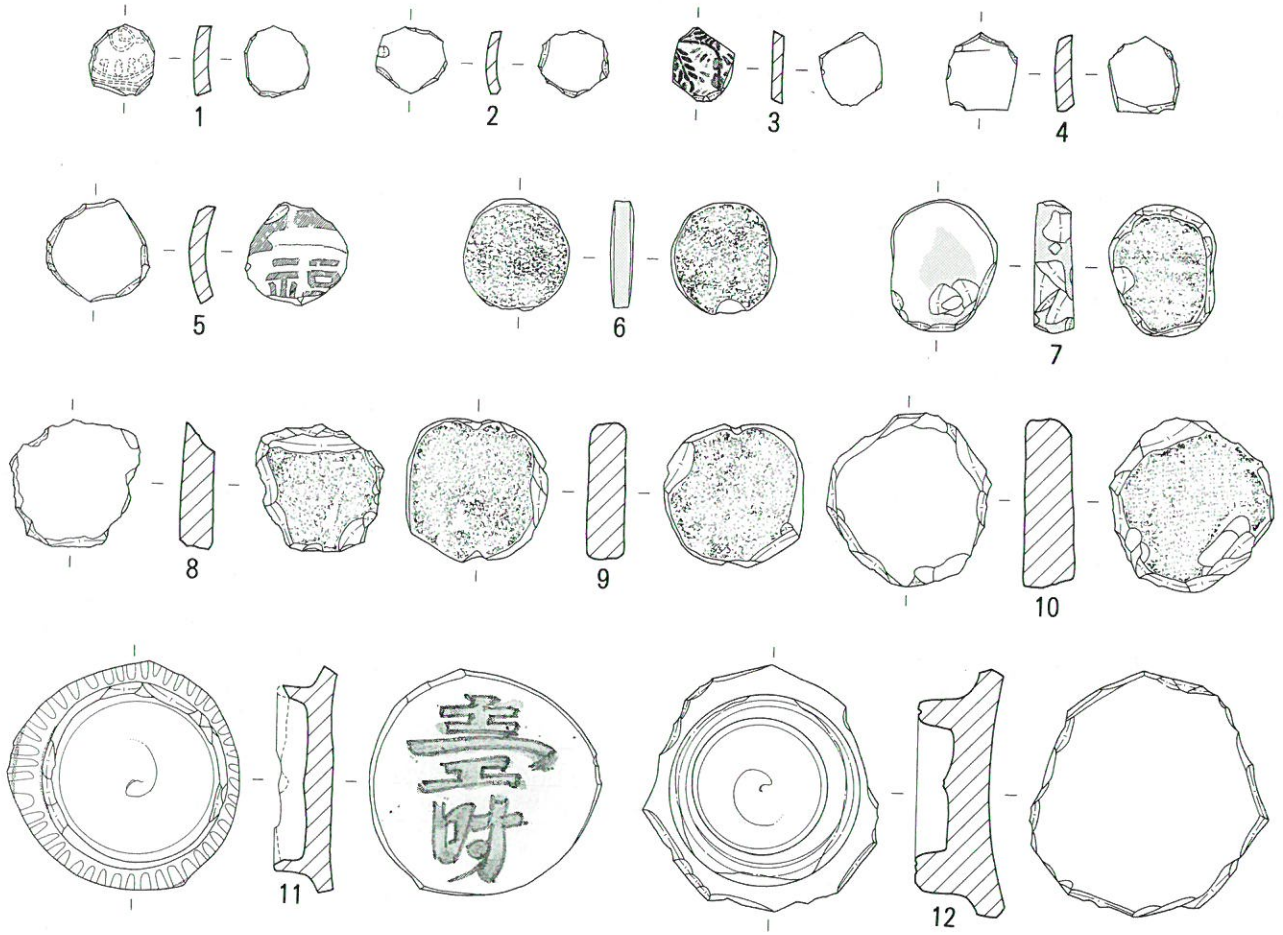
単位：cm／g

挿図図版	番号	素材	長径	短径	厚さ	重量	器形	部位	完/破/未	形態	剥離方向	断面	釉色	観察事項	出土地
第46図図版41	1	本土産磁器	1.85	1.7	0.4	2	碗	胴部	完	不定形	内→外	湾曲	表裏：白色	剥離は比較的丁寧。色絵。時計の模様を施している。時代は大正。	翁屋敷跡 E−4 Ⅱ
第46図図版41	2		1.9	1.7	0.3	1.3	小碗		完	不定形	外→内	湾曲	表裏：白色	剥離は比較的丁寧。白磁。時代は明治以後。	翁屋敷跡 E−4 Ⅱ
第46図図版41	3		1.9	1.6	0.3	1.3	碗		未	不定形	外→内	湾曲	表裏：白色	剥離は粗雑で形態も不定形なため、未製品とも考えられる。型紙刷り。時代は明治～大正。	翁屋敷跡 E−4 I
第46図図版41	4		2.05	1.8	0.4	2.6	碗		未	不定形	外→内	湾曲	表裏：灰褐色	剥離は粗雑で形態も不定形なため、未製品とも考えられる。国産（肥前）、17C後半。	翁屋敷跡 E−7 Ⅱ
第46図図版41	5		2.7	2.55	0.45	4.8	皿		完	不定形	内→外	湾曲	表裏：白色	剥離は比較的丁寧。裏面に「福」の文字がみられる。銅版転写。時代は明治後半～大正。	翁屋敷跡 E−4 Ⅱ
第46図図版41	6	土器	2.9	2.8	0.6	5.4	不明	胴部	完	円	不明	平		側面は研磨調整により剥離方向は不明。側面全体に研磨を施し、丁寧に成形されている。	鍛冶屋跡 E−9 I
第46図図版41	7	無釉陶器	3.5	2.9	1	13.6	不明	胴部	完	不定形	外→内	平		剥離調整の痕が見られるが、表面の一部及び側面全体に研磨を施し、丁寧に成形されている。	鍛冶屋跡 E−8 Ⅱ
第46図図版41	8	褐釉陶器	3.35	3.1	0.9	0.9	不明	胴部	未	不定形	内→外	湾曲	表：黒色	剥離は比較的丁寧であるが、形態から未製品と考えられる。	翁屋敷跡 D−4 Ⅱ
第46図図版41	9	土器	3.7	3.6	1	16.2	不明	胴部	完	円	外→内	平		剥離は比較的丁寧。上下にくぼみが見られることから、二次的利用も考えられる。	鍛冶屋跡 E−9 I
第46図図版41	10	瓦	4.5	4.3	1.3	28.2	平瓦	胴部	完	不定形	両面	平		剥離は比較的丁寧。赤瓦を利用。	鍛冶屋跡 E−9表採
第46図図版41	11	染付	6.1	6	0.8	44.7	碗	底部	完	円	外→内	凹	表裏：青白色	剥離調整が多くはなされていないものの、成形は比較的丁寧。裏面に「壽」の文字。中国産、16C末～17C前半。	鍛冶屋跡 G−9 Ⅱ
第46図図版41	12	青磁	6.5	6.3	1.2	88.7	碗	底部	完	不定形	外→内	凹	表裏：濃緑色	剥離は比較的丁寧。中国産。15C頃。	鍛冶屋跡 E−8 Ⅱ
		本土産磁器	3.1	2.8	0.7	11.7	碗	底部	完	不定形	外→内	凹	表裏：青白色	剥離は粗雑。染付。17C後～18C初。	鍛冶屋跡 G−9 Ⅱ
			1.8	1.7	0.5	2	碗	胴部	完	不定形	両面	湾曲	表裏：白色	剥離は比較的丁寧。表に、青釉で横方向に一条施されている。時代は明治以後。	鍛冶屋跡 E−9 Ⅱ
		土器	4.5	−	1.1	23.9	不明	胴部	破	円	外→内	湾曲		破損品。剥離は比較的丁寧。	鍛冶屋跡 D−9 I
		白磁	2.7	2.7	0.4	4.2	袋物	胴部	完	不定形	外→内	湾曲	表：淡褐色 裏：灰褐色	剥離は粗雑。産地・時期とも不明。	鍛冶屋跡 D−5 Ⅱ
		本土産磁器	2.18	1.92	0.3	2.3	碗	胴部	完	楕円	外→内	湾曲	表裏：白色	剥離は比較的丁寧。白磁。時代は明治以後。	鍛冶屋跡 C−9 Ⅱ
		土器	2.91	2.84	0.7	5.4	不明	胴部	完	不定形	両面	湾曲		剥離は比較的丁寧。	鍛冶屋跡 不明
		無釉陶器	2.9	2.49	1.6	15.8	不明	胴部	完	楕円	外→内	平		剥離は比較的丁寧。	鍛冶屋跡 不明
		青磁	5.92	5.61	1.3	84	碗	底部	完	不定形	外→内	凹	表裏：濃緑色	剥離は粗雑。	鍛冶屋跡 E−9 I
		本土産磁器	1.93	1.86	0.3	1.4	袋物	胴部	未	不定形	両面	平	表：白色	剥離も粗雑で形態も不定形なため、未製品とも考えられる。白磁。時代は明治以後。	翁屋敷跡 D−5 Ⅱ
			1.65	1.54	0.4	1.5	皿		未	不定形	内→外	湾曲	表裏：白色	剥離も粗雑で形態も不定形なため、未製品とも考えられる。銅版転写。時代は明治以後。	翁屋敷跡 E−3 Ⅱ
			1.92	1.44	0.3	1.5	碗		完	不定形	両面	湾曲	表裏：青白色	剥離は比較的丁寧。染付。明治以降。	翁屋敷跡 E−3 Ⅱ
			2.08	2.01	0.5	3.1	皿	底部	完	楕円	内→外	平	表裏：白色	剥離は比較的丁寧。銅版転写。時代は明治後半～大正。	翁屋敷跡 D−4 Ⅱ
			2.93	2.87	0.6	7	皿	胴部	完	円	内→外	湾曲	表裏：白色	剥離は比較的丁寧。印文。時代は昭和。	翁屋敷跡 D−4 Ⅱ
		青磁	3.92	−	1.2	17.9	皿	底部	破	円	外→内	平	表：淡緑色	剥離は比較的丁寧。中国産、時代は明治？	翁屋敷跡 E−4 Ⅱ

第13表ｂ　円盤状製品観察一覧

単位：cm／ g

挿図図版	番号	素材	長径	短径	厚さ	重量	器形	部位	完/破/未	形態	剥離方向	断面	釉　色	観　察　事　項	出土地
		褐釉陶器	2.14	2.02	0.4	2.2	不明	胴部	完	不定形	両　面	平	表：黒色	剥離は比較的丁寧。	翁屋敷跡 E−4 Ⅱ
		土器	3.93	−	0.9	12.5	不明	胴部	破	円	外→内	湾曲		破損品。剥離は比較的丁寧。	翁屋敷跡 D−4 Ⅱ
		瓦	4.27	4.14	1.3	24.9	平瓦	胴部	完	円	両　面	平		剥離は比較的丁寧。赤瓦を使用。	翁屋敷跡 D−4 Ⅱ
			5.39	−	1.2	35.9	平瓦		破	円	内→外	平		剥離は比較的丁寧。赤瓦を使用。	翁屋敷跡 D−4 Ⅱ



第46図　円盤状製品

第27節　煙　管

煙管の雁首が13点、吸い口が３点が得られている。ほとんどがパイプ形の資料であるが、１点だけ柱状形の可能性をもつ資料（第47図８）が出土している。材質は無釉陶器、施釉陶器、青銅製、土製、陶質土器と同じ材質の資料などが得られている。量的には無釉陶器製のものが最も多く、他の材質のものは僅少であった。以下、材質別に概略を記述する。図示した資料については大きさや形状などを観察表に示した。また、無釉陶器と青銅製のものは大きめの資料を選んで製図示した。

１．無釉陶器製（第47図１～４）

すべて雁首である。形態は火皿と羅宇接続部分を細かく面取りし、いずれの種類も多角形のもの（１～３）と、丸形を呈するもの（４）などがみられ、前者のものが主流をなす。また１点だけ粗雑な造りで、雁首の火皿になると思われる資料（９）が得られている。素地は精緻で混和材を含まないものが多く、茶褐色、黒褐色、赤褐色のものなどがあり、茶褐色を呈するものが多い。外面に自然釉がみられる。第47図２は飴色の釉薬が掛かってい

るようである。

2．施釉陶器製（第47図5．6）

雁首1点（5）、吸い口1点（6）が得られている。素地は白灰色できめ細かく、透明釉が掛かり貫入はみられない。いずれも、てづくね成形されているようである。また羅宇接続部分の径がほぼ同じであることを考慮すると、1セットの可能性が考えられる。

3．陶質土器製（第47図7）

雁首の羅宇接続部分と考えられる資料が2点出土している。両者とも、羅宇接続部分を八角形に面取りするタイプのようで、素地は橙褐色、混和材に細かい石英と砂粒が確認できる。

4．土製（第47図8）

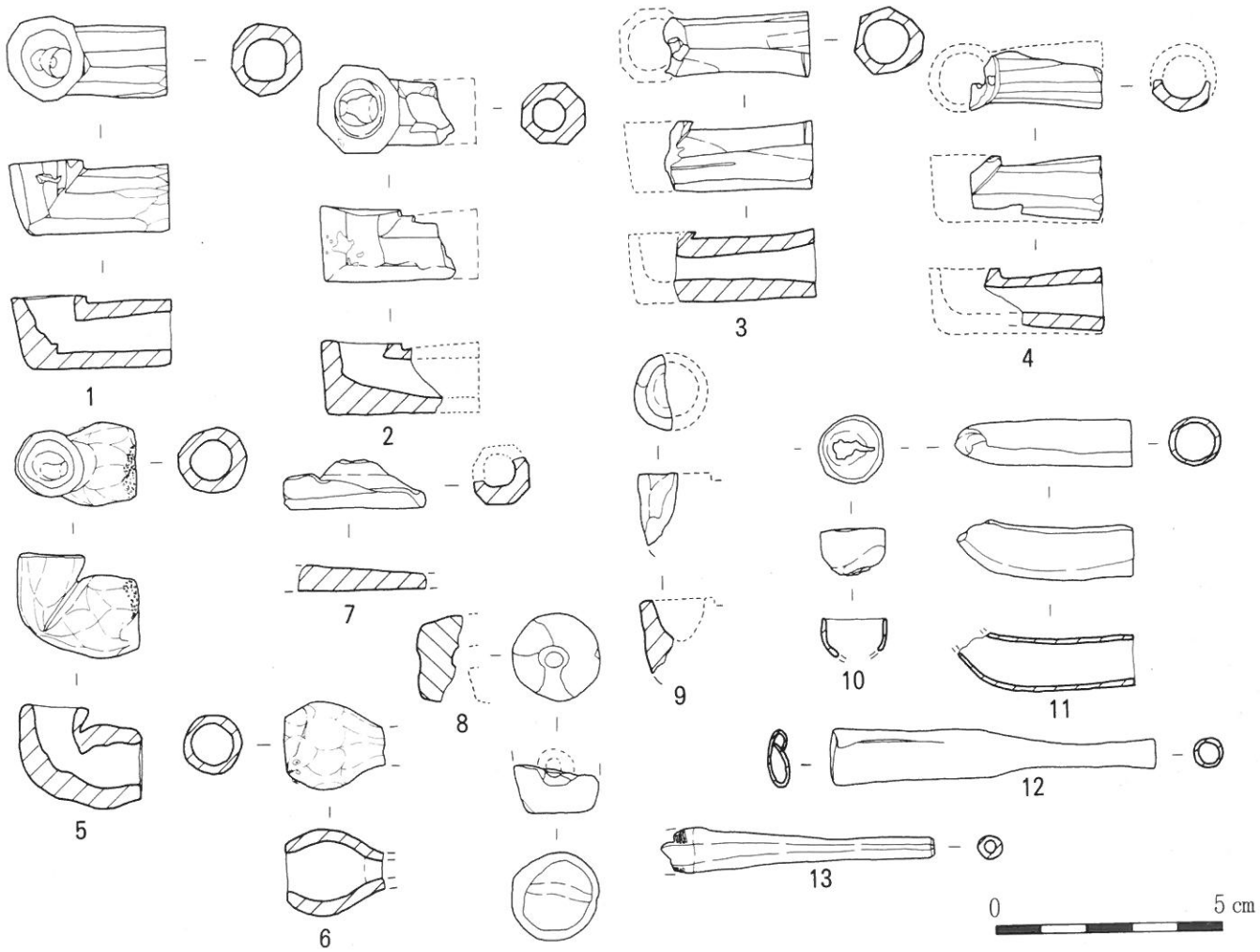
形態から柱状形の煙管とみられるもので、1点だけ得られている。残存する羅宇接続部分の径は0.4cm、頭部外面に少々凹みがみられ、網目のような痕が残る。

5．青銅製（第47図10～13）

パイプ形の雁首2点と吸い口2点が得られている。雁首は破損が著しいが吸い口はまだ原形を留める資料である。

小　結

Ⅰ地区から出土した煙管は、鍛冶屋跡、屋敷跡ともⅠ・Ⅱ層から得られたものである。鍛冶屋跡のⅡ層からは17世紀前後の肥前陶磁器や沖縄産の施釉・無釉陶器などが多く出土しており、今回得られた製品の中にはそれらの資料と同時期のものも含まれている可能性も考えられる。本遺跡で得られた煙管は陶製や青銅製のものが多く、先島で比較的多く出土している石製の煙管は見受けられない。当地区で主流となるのは無釉陶器の煙管で、素地の細かい点が特徴で、類似資料が上村遺跡（註1）などから得られている。施釉陶器の資料は先島からの報告例は



第47図　煙　管

少なく、宮古島の住屋遺跡（註２）で出土しているようである。今回報告した資料のなかで注意されるのは施釉陶器の資料であろう。本土産磁器の可能性もあり、煙管の流通を示唆しているのかもしれない。文献資料によると、18世紀後半には薩摩産煙草が琉球市場に登場しており（註３）、遺跡から出土する煙管からも、たばこの流通解明の手がかりを得ることが出来れば、今後の文献資料の追加などもあわせ、たばこの普及状況にせまれるものと考える。陶質土器の煙管は先島では他に報告例がないが、陶質土器のものは沖縄本島浦添城跡（註４）から類例を見ることが出来るが、形態が円柱形で同一のタイプではない。土製の煙管は、報告例があまり聞かれない資料であるため、煙管以外の製品である可能性も否定できない。 宮古島の砂川元島（註５）で破片資料が得られているようである。青銅製の煙管は先島ではカンドウ原遺跡（註６）、本島では古我知古墓（註７）などで類例の報告があるが、雁首が破損しているため実際の形態が特定出来ないのが残念である。

第14表　吸い口観察一覧

単位：cm／g

挿図図番	番号	材質	全長	羅宇接続部 内径 外径	吸い口 内径 外径	現重量	素地	吸口形態	羅宇接続部形態	観察備考	出土地
第47図図版42	6	施釉陶器	－	0.9 1.3	0.35 0.8	6.9	白色	丸形	丸形	灰緑色の透明釉、貫入なし。てづくねによる作り。吸い口には破損したときに入ったヒビが残る。	翁屋敷跡 E－4Ⅱ
	12	青銅製	7.2	1.2 －	0.65 －	6		丸形	丸形	羅宇接続部は破損しているため、正確な計測値ではない。	鍛冶屋跡 G－9Ⅱ
	13	青銅製	－	－ －	0.3 0.45	5.8		丸形		羅宇接続部の残存部分に、幅１mmにも満たない線刻がみられる。	不明

第15表　煙管（雁首）観察一覧

単位：cm／g

挿図図版	番号	材質	全長	火皿内径 外径	羅宇接続部内径 外径	現重量	素地	火皿形態	羅宇接続部形態	観察備考	出土地
第47図図版42	1	無釉陶器	3.5	1.1 1.7	0.9 1.5	9.5	黒褐色	十二角	十角形	黒褐色だが一部自然釉がみられる	鍛冶屋跡 D－4Ⅱ
	2	無釉陶器	－	1.1 1.8	－ －	4.1	茶褐色	八角形		羅宇接続部の二面を除いて外面に飴色の釉がかかる	鍛冶屋跡 G－9Ⅱ
	3	無釉陶器	－	－ －	0.8 1.5	7.1	黒褐色		八角形	素地の内面は茶褐色、刷毛目状の工具で面取りした跡が残る	翁屋敷跡 E－6Ⅱ
	4	無釉陶器	－	－ －	0.7 1.4	3.6	朱泥色		丸形	小刻みに面取りを施し成形している	翁屋敷跡 E－4Ⅰ
	5	施釉陶器	2.7	1.0 1.45	0.95 1.5	8.9	白灰色	丸形	丸形	釉は透明釉で貫入はない。てづくね成形。	鍛冶屋跡 表採
	7	陶質土器	－	－ －	－ －	2.8	橙褐色		八角形	混和材に微粒な石英と砂粒がみられる	翁屋敷跡 C－5Ⅱ
	8	土製	－	－ －	－ －	3	橙褐色	円柱状		煙管頭部、外面に凹みがある	翁屋敷跡 E－6Ⅰ
	9	無釉陶器	－	－ －	－ －	1.4	淡青灰色	丸形		瓦質？若干風化している	翁屋敷跡
	10	青銅製	－	－ －	－ －	1.5		丸形		11と同一個体か？	翁屋敷跡 E－4Ⅱ
	11	青銅製	－	－ －	1 1.1	6.1				10と同一個体か？	翁屋敷跡 E－3Ⅱ

註

註１　沖縄県教育委員会　『上村遺跡－重要遺跡確認調査報告－』「沖縄県文化財調査報告書第98集」 1991年３月

註２　平良市教育委員会　『住屋遺跡』「平良市文化財報告書第２集」 1992年３月

註３　真栄平房昭　『新しい琉球史像－安良城盛昭先生追悼論集－』 「煙草をめぐる琉球社会史」 榕樹社　1996年10月

註４　沖縄県浦添市教育委員会　『浦添城跡発掘調査報告書』「浦添市文化財調査報告書　第９集」　1985年３月

註５　砂川元島遺跡調査団　『沖縄・宮古島砂川元島遺跡発掘調査概報（第二次）』　1976年

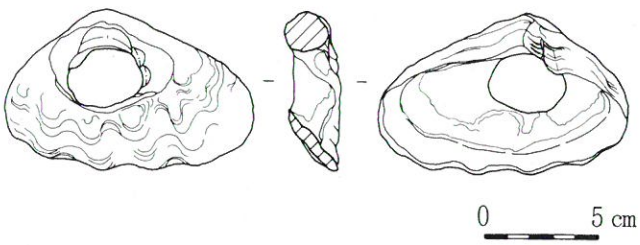
註６　沖縄県教育委員会　『カンドウ原遺跡－灌・排水工事に係る緊急発掘調査－』「沖縄県文化財調査報告書第58集」 1984年３月

註７　沖縄県教育委員会　『石川市　古我知原内古墓－沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（7）－』「沖縄県文化財調査報告書第85集」 1987年12月

第28節　貝製品

貝錘と考えられる二枚貝有孔貝製品が１点、屋敷跡から表面採集で得られ第48図に示した。

ヒメジャコの左殻を利用した資料で、大きさは殻長約11cm、殻高約７cm、重量は119ｇである。孔は殻頂と前背縁よりに内側から穿たれ、略楕円形で短径2.8cm、長径3.4cmを呈す。孔の周辺から殻頂にかけてかなり摩耗しており、全体的ににもかなり風化が進行している。

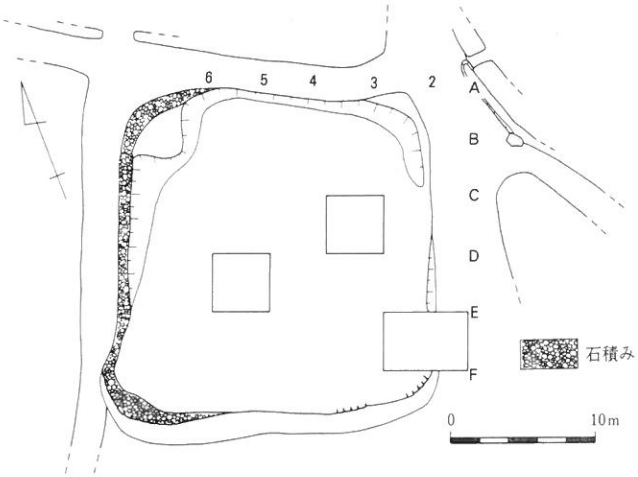


第48図　貝製品

遺構と出土遺物

Ⅱ 地 区

Ⅱ地区での調査は、地元でウカリ村と伝えられ、「仮屋薩摩在番」の設置されていた場所だと考えられる屋敷跡の発掘を行った。以下、層序・遺構について記述する。



第49図　伝薩摩在番跡と発掘地

1．仮屋薩摩在番跡（第49図）

本場所では、まず屋敷内に３ヶ所のグリットを設け掘り下げた。その結果、Ⅰ～Ⅱ層は全面的な範囲で確認されたが、茶褐色のⅢ層とした土層はＣ－３では見られなかった。そして、Ｅ－２、Ｄ－５では、Ⅲ層下に全く別の土層が確認され、部分的な堆積状況が考えられた。このようなことから、細粒砂岩を最下位層として捉え、Ｄグリットの層序を基本層として掘り下げた。また、Ⅲ層までは耕作による撹乱を受けていることが分かった。地山は細粒砂岩であるが、一部では赤土の地山が見られる場所もある。地山の検出地形から屋敷内中央部には溝状に落ち込みが見られた。Ｄ－５東南隅では、現地表面から約140cmの深さで地山に、同グリット西半分では約70cmで達すること、さらにＣ－３の地山面は、（赤土）フラット面で、傾きが確認出来ないことから、屋敷の中央部に溝状の地形の存在が考えられる。

(1) 層序（第50図）

Ⅰ層：全面的に広がる淡灰色の表土層で、耕作のため波状に堆積している。層厚は約５cm～20cmを有する。ガラス等の現代遺物を多量に含む撹乱層である。

Ⅱ層：全面的に広がる茶褐色土層で、南東側に厚く堆積している。約20～30cmの層厚を有する。鉄釘等の現代遺物を多量に含む撹乱層である。

Ⅲ層：茶褐色土の撹乱層で、南側に厚く堆積している。上層と同色土層であるが、砂岩粒の混ざりの多いことから上層と区別した。Ｃ－３では見られず、直地山へとなる。

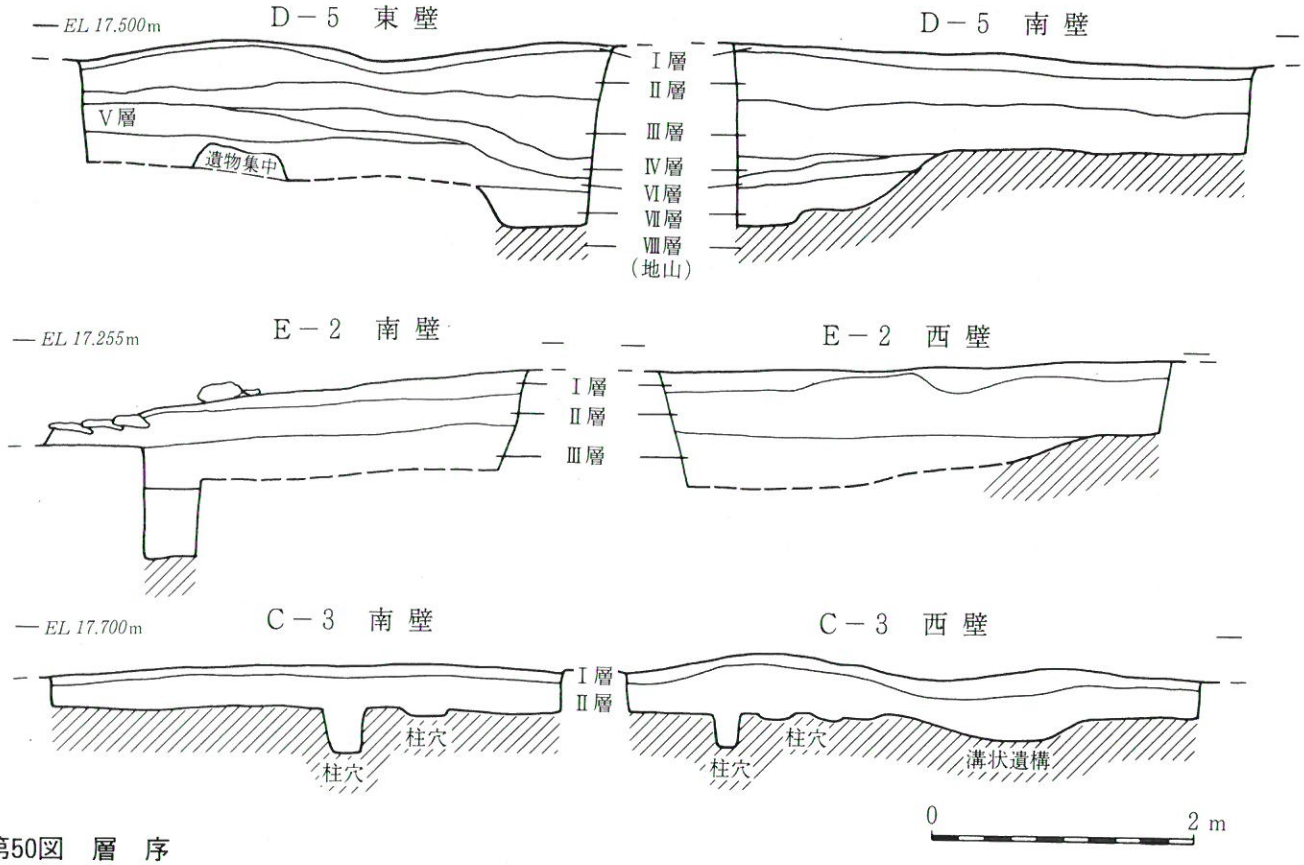
Ⅳ層：暗黒褐色土の遺物包含層で、約15～20cmの層厚を有する。Ｄ－５の東半分のみで確認された包含層で部分的に堆積していると考えられる土層であり、南側に流れた状況で厚くなる。復元土器を含め遺物が多量に出土した。

Ⅴ層：茶褐色土の遺物包含層で、約20cmの層厚を有する。上層と同じく部分的に堆積していると考えられ、Ｄ－５の東半分のみで確認された包含層である。北側で厚く堆積している。

Ⅵ層：明茶褐色土の遺物包含層である。約50cmの層厚を有し、多量の遺物が出土しており、中には煤の付着する土器が見られる。砂質の度合いから分層を設けることの可能な土層である。また、羽口の未完成品と考えられる縁取られた砂岩が検出されている。この層を含め、下層からは陶磁器は検出されなかった。

Ⅶ層：暗茶褐色土の無遺物層で、細粒砂岩の風化土と考えられる。Ｄ－５の南側に堆積し、層厚は50cm前後を有する。

Ⅷ層：細粒砂岩と赤土からなる地山である。Ｃ－３では表土から約50cm、Ｅ－１・２で約70cmで地山に達する。Ｄ－５の西側半分では約70cmで赤土に達するが、東側半分では約140cmで細粒砂岩の地山に達することから、中央部に大溝状の存在が考えられる。



第50図　層　序

(2) 遺　構

柱　　穴（第51図）

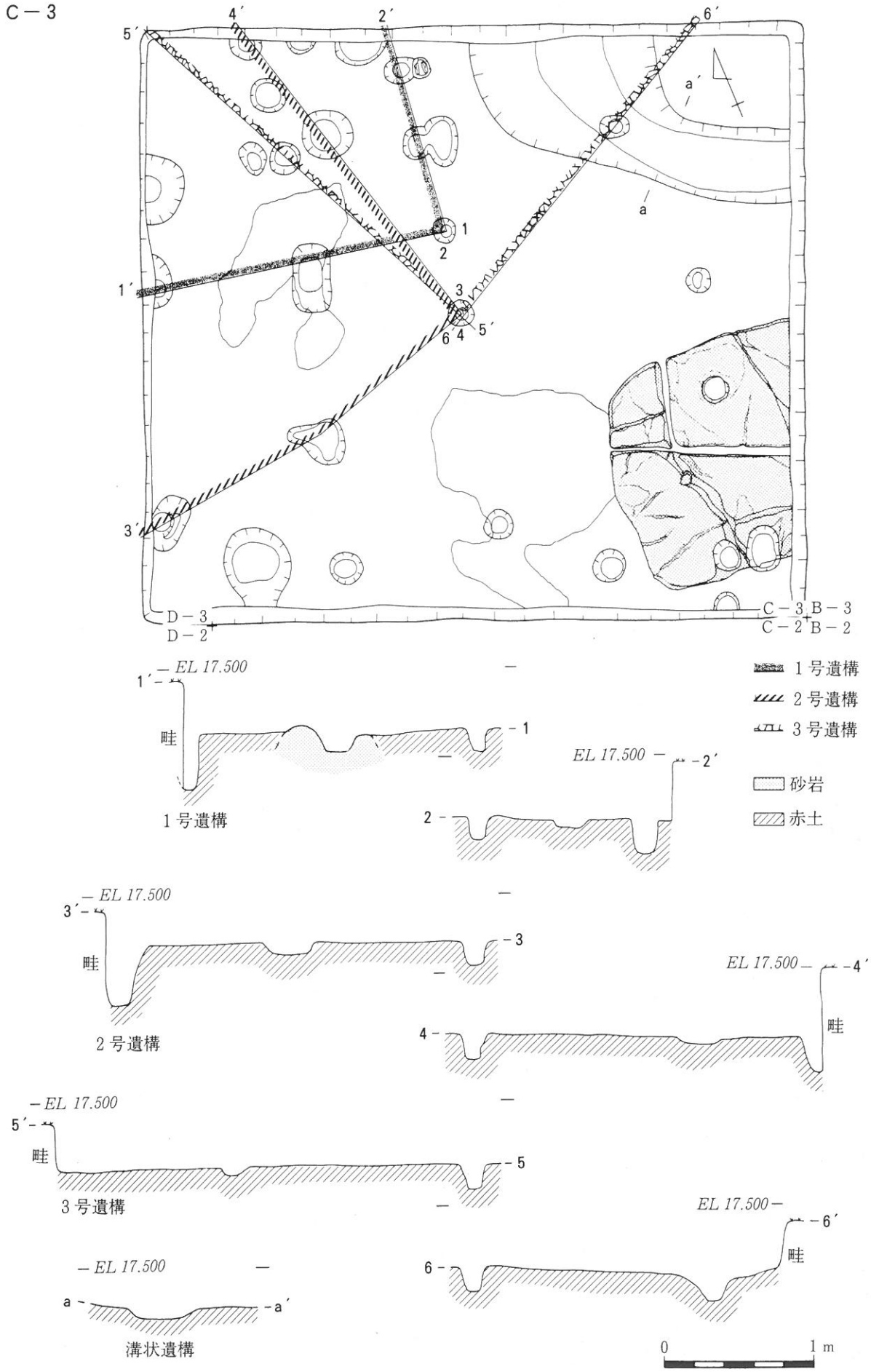
Ｃ－３の地山面から、27ヶ所の柱穴が検出された。円形を主とし、楕円形も見られる。平均幅は約15～20cm（最大約30～40cm）、深さ約５～15cm（最深約40cm）を測る。赤土の地山直から掘られているが、中でも硬めの砂岩盤上に幾つかの柱穴が穿たれていることは、明確な遺構として押さえることが出来るものである。また、切合っている柱穴があることや検出された数から見て、幾度かの建て直しが行われていることがうかがえる。この柱穴群から、３件の平面的プランを導き出すことができた。柱穴間の断面については第51図で示した。

溝状遺構（第51図）

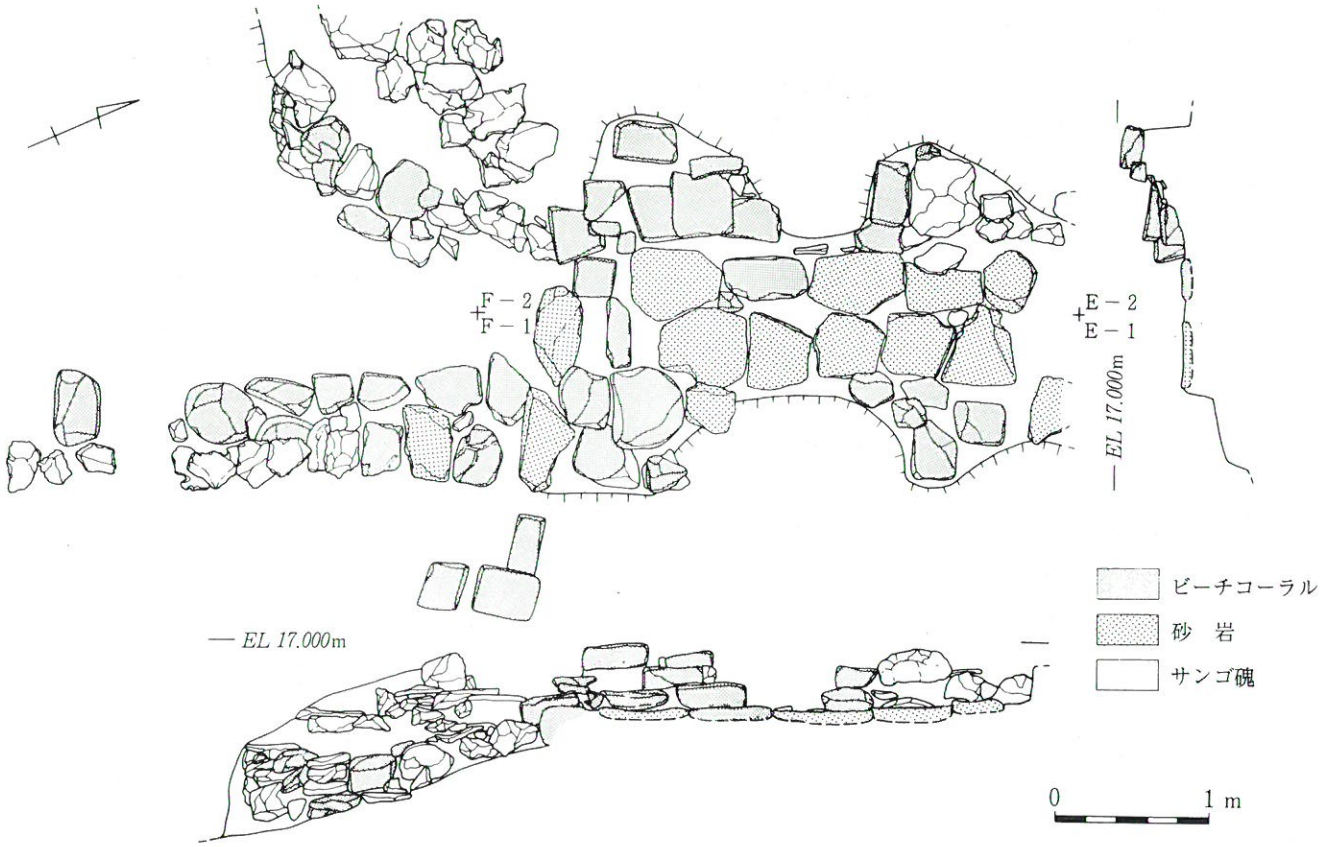
Ｃ－３の柱穴群に伴い、北西隅でカーブを描く溝状遺構が検出された。赤土の地山に掘り込まれ、約60cm幅の深さ10～20cm（定面部は浅い凹を呈す。）を測る。北西にカーブを描いて発掘外へと延びているため、全長は不明である。上記の柱穴群との関係については、ほぼ同レベルで検出していることから、柱穴群に伴う遺構と推測される。この溝状遺構内には柱穴が１ヶ所見られることから、一時的に使用されたものだと考えられる。

石敷・石段遺構（第52図）

Ｅグリットの基準ラインに沿って検出された石敷の遺構である。ビーチコーラルと平らな砂岩石を敷いて造られた道であり、南側では階段状を形成する。遺構は幅約80cmを測り、全長については発掘外まで延びているため不明である。現存する石段は２～３段の途中で切れるが、同屋敷南側の石垣の積高を見ると、かなりの段数があったものと考えられる。この箇所は屋敷門の可能性が高い場所であり、古地図（註１）には階段と考えられるものが描かれていることから、検出された遺構は屋敷内に造られた屋敷道ではないかと思われる。また、階段部南側では東西に、屋敷囲いの石垣が延びている。西側石垣の延びは、膨らみを持ちながら曲がり、本屋敷の南側石垣を形成する。東側石垣は、直線状に延びて跡切れるが、本屋敷の東側石垣を形成すると考えられる。


C－3
D－3
D－2
C－3
B－3
C－2
B－2
1号遺構
2号遺構
3号遺構
砂岩
赤土
EL 17.500
畦
1号遺構
2号遺構
3号遺構
溝状遺構
0
1 m

第51図　柱穴・溝状遺構



第52図　石敷・石段遺構

註

註１　社団法人温故学会所蔵の古地図の写しを参考にさせていただいた。

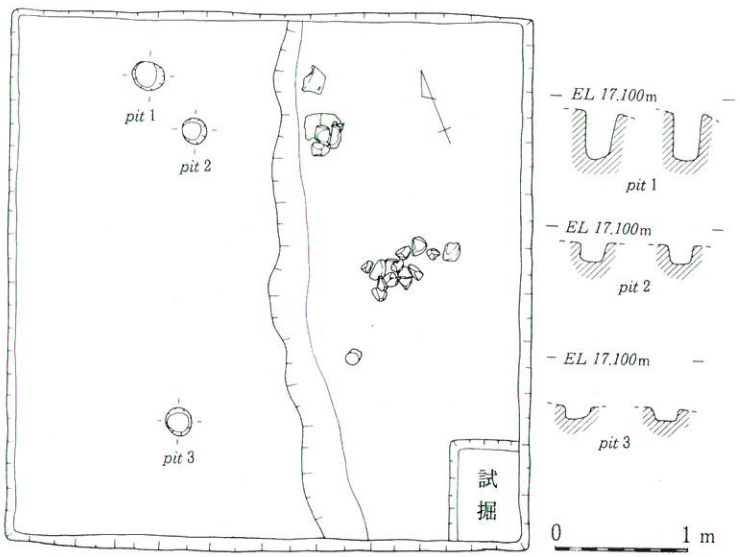
柱　　穴（第53図）

Ｄ－５の西側の地山（赤土）に３ヶ所の柱穴が検出された。円形を呈する幅約15～20cm、深さ約20～40cmの柱穴である。西半分の地山面のみでの確認に留まり、柱穴数と調査範囲の狭さから平面的プランはつかめなかった。

集石遺構（第53・54図）

集石遺構と認定し得るものがⅥ層下部で検出された。集石は、長軸約75cm、短軸40cmの規模を有し、明確な掘り込みは確認しえなかった。砂岩塊と石灰岩塊からなる集石で、拳大の石が用いられている。10数個体の中には加熱を受けているように感じられる石があり、さらに、周辺から炭片と煤の付着した土器を検出していることから、何らかの関連がうかがわれるが、遺構の用途等については判然としなかった。

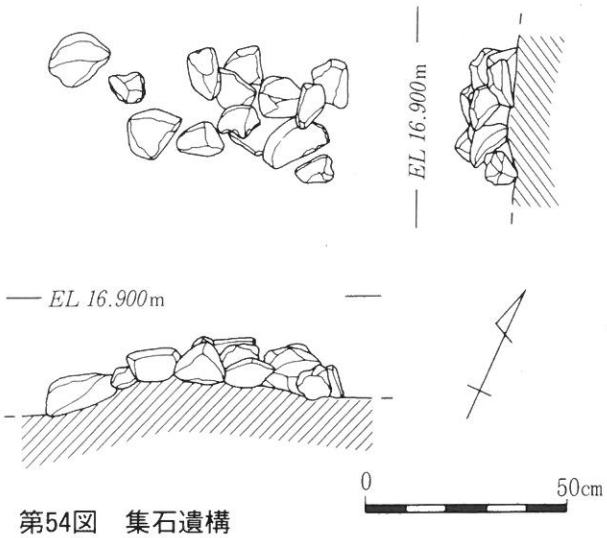
この遺構は、調査範囲が狭く、用途が判然としなかったことから、今後の調査による遺構の性格把握等が期待されることから現地に保存した。



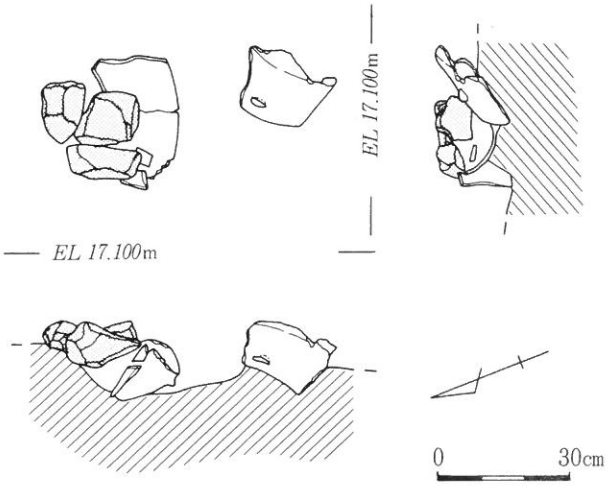
第53図　柱穴状遺構

土器出土状況（第53・55図）

第Ⅳ・Ⅴ層・Ⅵ層には多くの遺物が包含され、煤の付着した大破片の出土があった。Ⅴ層中には、土器内に砂岩塊３個を意図的入れ込んだと思われる土器片が検出された。しかし、明確な掘り込みは確認しえなかった（復元土器：第56図３）



第54図　集石遺構



第55図　土器出土状況

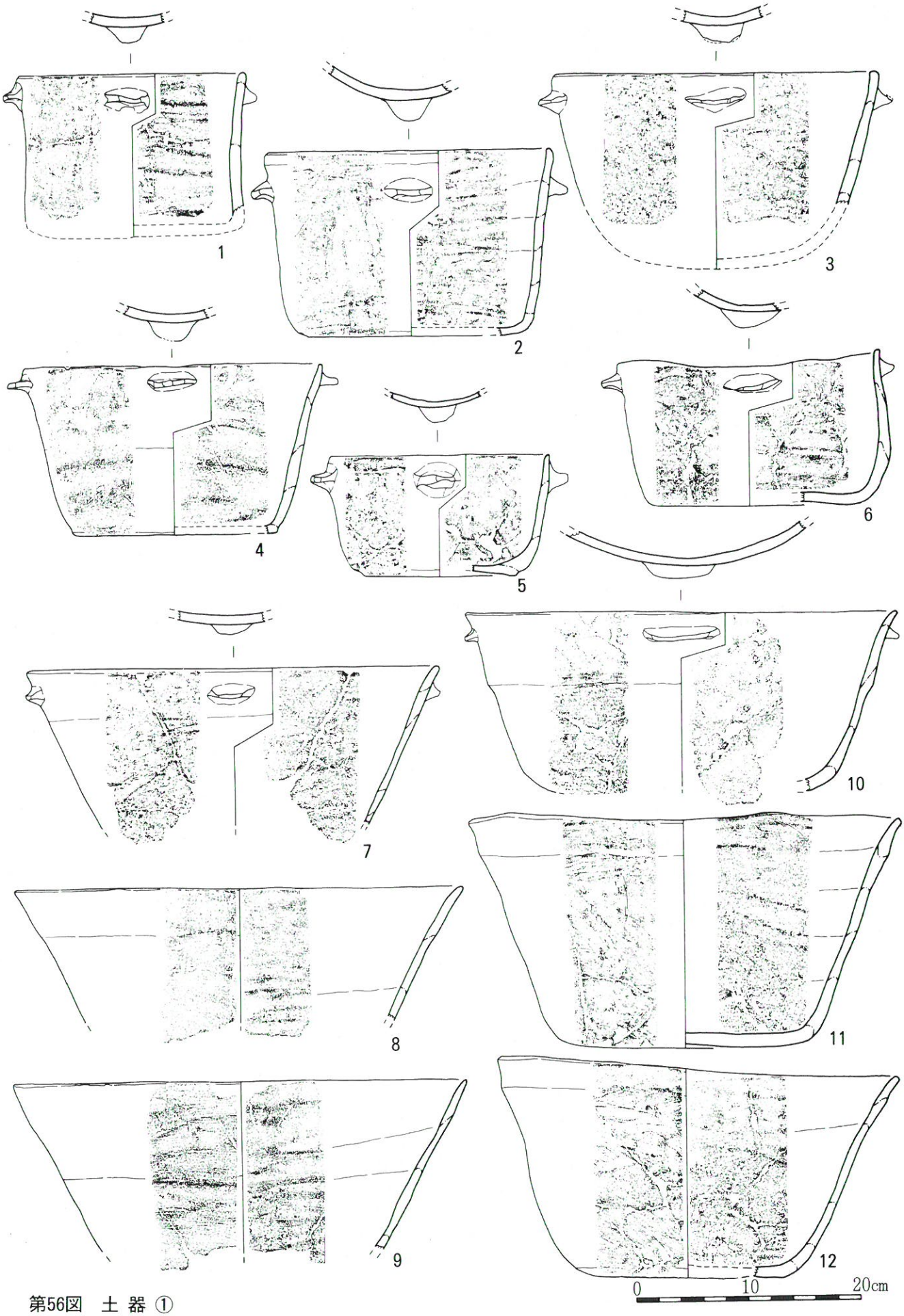
第１節　土　器

本地区から総数1917点の土器片が得られた。鍋形土器を主体とし、多くの復元土器も得られている。以下、Ⅰ地図にて示した分類概念に沿って観察表に記述する。

第16表　土器観察一覧

挿図番号 図版番号	器形	分類	法量 口 底 高	形態上の特徴	器面調整	器色	焼成・胎土・混入物	出土地区 層
第56図１ 図版43の１	鍋形土器	Ⅰ類	20.9 － －	直口状に立ち上がり、胴中央部で僅かにしぼまる。口唇は舌状につくり、のち平坦に成形している。口唇から下2.8cm前後に耳を貼り付けている。	ナデ仕上げが施されている。内面に指頭圧痕が見られる。	全体的に明茶褐色を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。混入物は殆ど含まない。	Ｄ－５ Ⅳ層 上面
第56図２ 図版43の２			29.6 － －	直口状に立ち上がり、口縁部で内彎する。口唇は舌状い成形しているが、部分的に平坦面もある。口唇から下2.4cm前後に耳を貼り付けている。	ナデ仕上げが施されている。内面に指頭圧痕が見られる。	全体的に明茶褐色で、内面には煤が付着している。	焼成は良く、かたく焼きしまり、胎土も細かい。アズキ色状粒が混入されている。	Ｄ－５ Ⅳ層
第56図３ 図版43の３			26.1 21.4 16.7	直口状に立ち上がり、口縁部で内彎する。口唇は平坦に仕上げられているが雑である。口から下3.9cm前後に耳を貼り付けている。耳は横長で、断面は厚く三角状を呈する。	ナデ仕上げが施されているが、雑である。	全体的に暗茶色で内面は明茶を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。貝殻破片を混入している。	Ｄ－５ Ⅴ層 土器集中部
第56図４ 図版44の１			27.0 9.3 15.4	僅かに膨らみをもち直口状に立ち上がり、口縁でゆるやかに内彎する。口唇は平坦に成形され、口唇下1.7cmに耳を貼り付けている。耳は横長で厚さは薄い。底部には小さなくびれが見られる。	全体的に丁寧なナデ仕上げが施されている。	全体的に明茶で部分的に淡茶色を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。貝殻破片を混入している。	Ｄ－５ Ⅴ・Ⅵ層 上面
第56図５ 図版43の４			20.0 13.9 10.8	やや小型の鍋であるが、全体的に耳が大きく感じられる。口唇を尖り気味に成形され、口唇から下2.3cm前後に耳を貼り付けている。耳は半月状で厚い。底部は高台のような造りに仕上げている。	ナデ仕上げが施されているが、雑である。	外面は明茶で部分的に淡黄色で内面は暗茶を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。僅かに貝殻破片を混入している。	Ｄ－５ Ⅲ層 落ち込み
第56図６ 図版43の５			25.0 9.8 13.8	全体的に直口状の鍋だと考えられるが、右断面は下膨れ状となる。口唇は尖り気味に成形している。口唇から下1.9cm前後に耳を貼り付けている。耳は横長で厚手である。	ナデ仕上げが施されているが、雑である。	全体的に淡茶色で部分的に淡黄色を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。混入物を殆ど含まない。	Ｄ－５ Ⅳ層
第56図７ 図版44の２		Ⅱ類	37.6 － －	直口状に立ち上がり逆ハの字となる。口唇は舌状に成形されている。口唇下2.5cm前後に耳が貼り付けられている。耳は横長で、小さ目である。薄手の土器である。	ナデ仕上げが施されている。部分的にヘラ削りが残る。	全体的に明褐色を帯び、内面に煤の付着が見られる。	焼成は良く、胎土は細かい。石灰質・石英質の砂粒が混入されている。	Ｄ－５ Ⅱ層
第56図８ 図版44の３			40.6 － －	直口状に立ち上がり逆ハの字となる。口唇は舌状で丁寧に成形されている。薄手の土器である。	ナデ仕上げが施されているが、雑である。	外面は淡茶で内面が明茶を帯びる。一部煤の付着が見られる。	焼成は良く、胎土は細かい。貝殻破片が混入されている。	Ｄ－５ Ⅱ層
第56図９ 図版44の４			41.2 － －	直口状に立ち上がり逆ハの字となる。口唇は舌状で丁寧に成形されている。薄手の土器である。	ナデ仕上げが施されている。内面に指頭圧痕が見られる。	茶褐色で口縁付近で暗褐色を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。石灰質微砂粒と僅かに石英が混入されている。	Ｄ－５ Ⅴ層

1～12 ＝鍋形土器



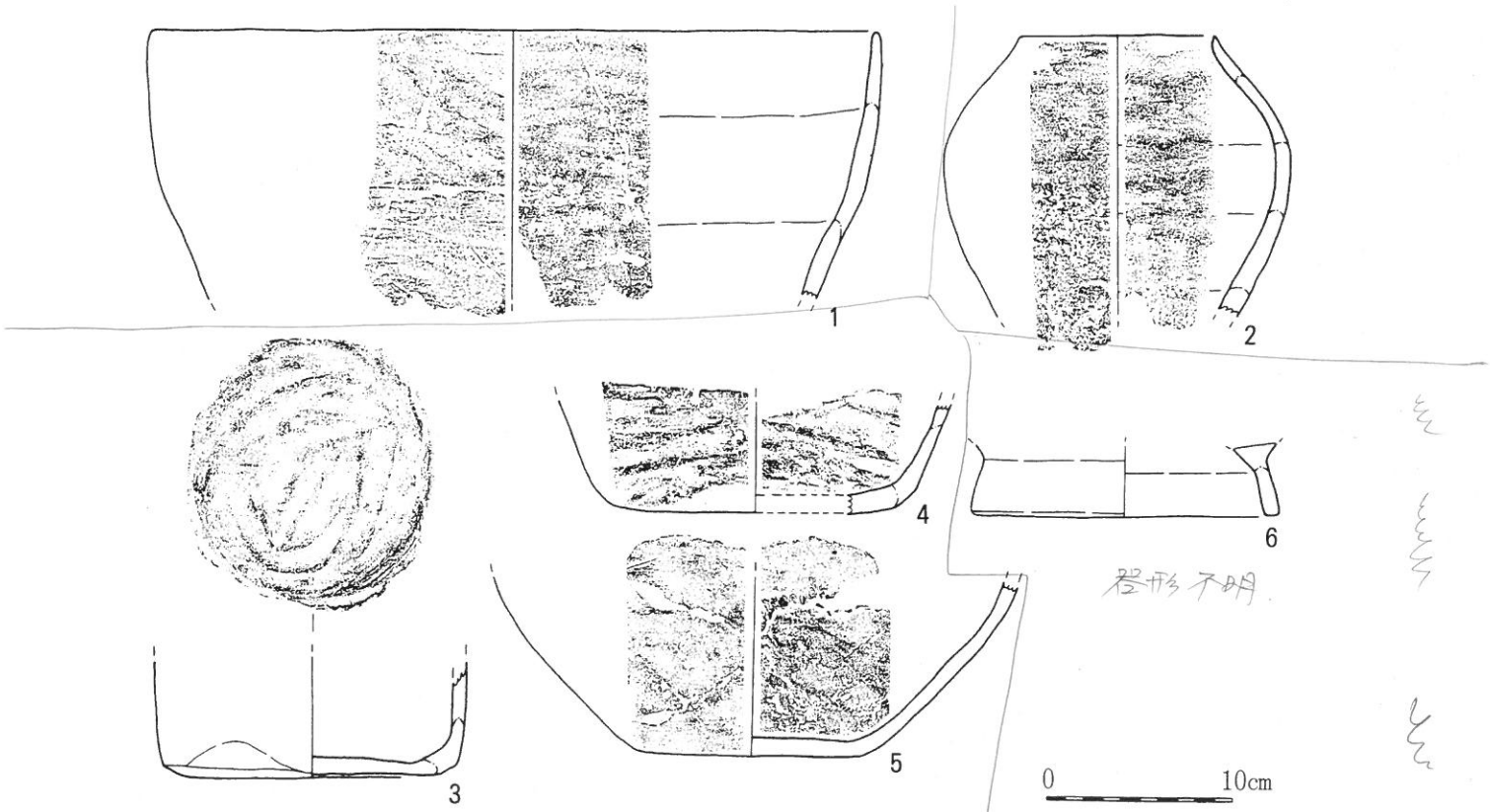
第56図　土 器 ①

押図番号 図版番号	器形	分類	法量 口底高	形態上の特徴	器面調整	器色	焼形・胎土・混入物	出土地区 層
第56図10 図版43の8	鍋形土器	Ⅲ類	39.0 － －	直口状に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇外端を僅かに突出させて舌状に成形している。口唇下2.4cmに狭長の耳が張り付けられている。耳は横長で薄い。	ナデ仕上げが施されているが、雑である。	全体的に明茶色。部分的に淡褐色と褐色を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。貝殻砕片が混入されている。	D－5 Ⅲ層
第56図11 図版43の6			大39.2 小38.4 22.4 21.1	直口状に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁は疑似肥厚口縁を思わせる。口唇は平坦に丁寧に成形している。	ナデ仕上げが施されている。内面に指頭圧痕が見られる。	全体的に茶褐色土を帯びている。	焼成は良く、胎土は細かい。貝殻砕片や石灰質微砂粒が混入されている。	D－5 Ⅲ層
第56図12 図版43の7			大39.2 小36.3 20.0 19.8	直口状に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁は類似肥厚口縁を思わせる。口唇は平坦に丁寧に成形している。	ナデ仕上げが施されている。内面に指頭圧痕が見られる。	全体的に茶褐色土を帯びている。内外面とも煤が付着している。	焼成は良く、胎土は細かい。細かい貝殻片や石灰質微砂粒が混入されている。	D－5 Ⅲ層
第57図1 図版44の5		Ⅳ類b	39.7 － －	僅かに膨らみをもち立ち上がり、口唇下12～13cm前後で内彎を描く。	全体的にナデ仕上げが施されているが雑である。指頭圧痕が見られる。	茶褐色と明茶色を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。細かい。貝殻砕片や石灰質砂粒が混入されている。	D－5 Ⅲ層
第57図2 図版44の6	壺形土器	Ⅲ類？	10.4 胴部で最大 19.0	小型の壺胴部である。胴部から口縁部にナデ肩状を呈する。口唇は尖り気味に成形している。胴部下に黒く変色していることから煮沸に使用された可能性がある。	ナデ仕上げが施されているが、雑である。下部の壁面の欠落がある。	全体的に明茶色である。下部に煤が付着している。	焼成は良く、胎土は細かい。石英質粒が僅かに見えるだけで殆ど混入物を含まない。	D－5 Ⅲ層 落ち込み
第57図3 図版44の7	鍋形（底部）	Ⅰ類	－ 14.8 －	立ち上がりが僅かに角をなし、直口に立ち上がる。口縁形分類のⅠ類に相当すると考えられる。	底内は指頭圧痕が明確に残る。全体的に丁寧なナデ仕上げが施されている。	外面は茶褐色で内面は明褐色から橙色を帯びる。外面一部に煤の付着が認められる。	焼成は良く、かたく焼きしまっている。石英質石アズキ状石粒が混入されている。	D－5 Ⅲ層 落ち込み
第57図4 図版44の8		Ⅱ類	－ 15.6 －	丸味を帯び、緩やかに立ち上がる。口縁形分類のⅠ類およびⅡ類に相当すると考えられる。また、小型の壺の可能性もある。	全体的にナデ仕上げが施されている。指頭圧痕が見られる。	外面の一部で黒色が見られ、内面は明茶から橙色を帯びる。	焼成は良く、胎土は細かい。貝殻砕片が少量で、殆ど混入物を含まない。	D－5 Ⅱ層
第57図5 図版44の9		Ⅲ類	－ 12.3 －	僅かに丸みを帯び、逆ハの字状に立ち上がる。胴部近くで丸みをおびることから壺の可能性がある。	ナデ仕上げが施されているが、内面底は雑である。	全体的に茶褐色土を帯びている。	焼成は良く、胎土は細かい。貝殻砕片が少量で、殆ど混入物を含まない。	D－5 Ⅴ層 遺物集中部

第2節　パナリ焼

第17表　パナリ焼観察表　1＝鍋形土器、　2＝壺形土器　3～5＝鍋形（底部）

押図番号 図版番号	器形	分類	法量 口底高	形態上の特徴	器面調整	器色	焼形・胎土・混入物	出土地区 層
第57図6 図版44の10	不明	脚部	－ 16.8 －	パナリ焼きの脚部である。脚は僅かに膨らみをもってハの字に広がる。畳付は平坦に成形している。D－5・E－2のⅡ層より出土し接合した。	ナデ仕上げが施されているが、多孔である。	明茶褐色である。	焼成は悪く、脆い。粘着性が弱い。混入物を殆ど含まない。	D－5 Ⅱ層



第57図　土器②

第3節　青　　磁

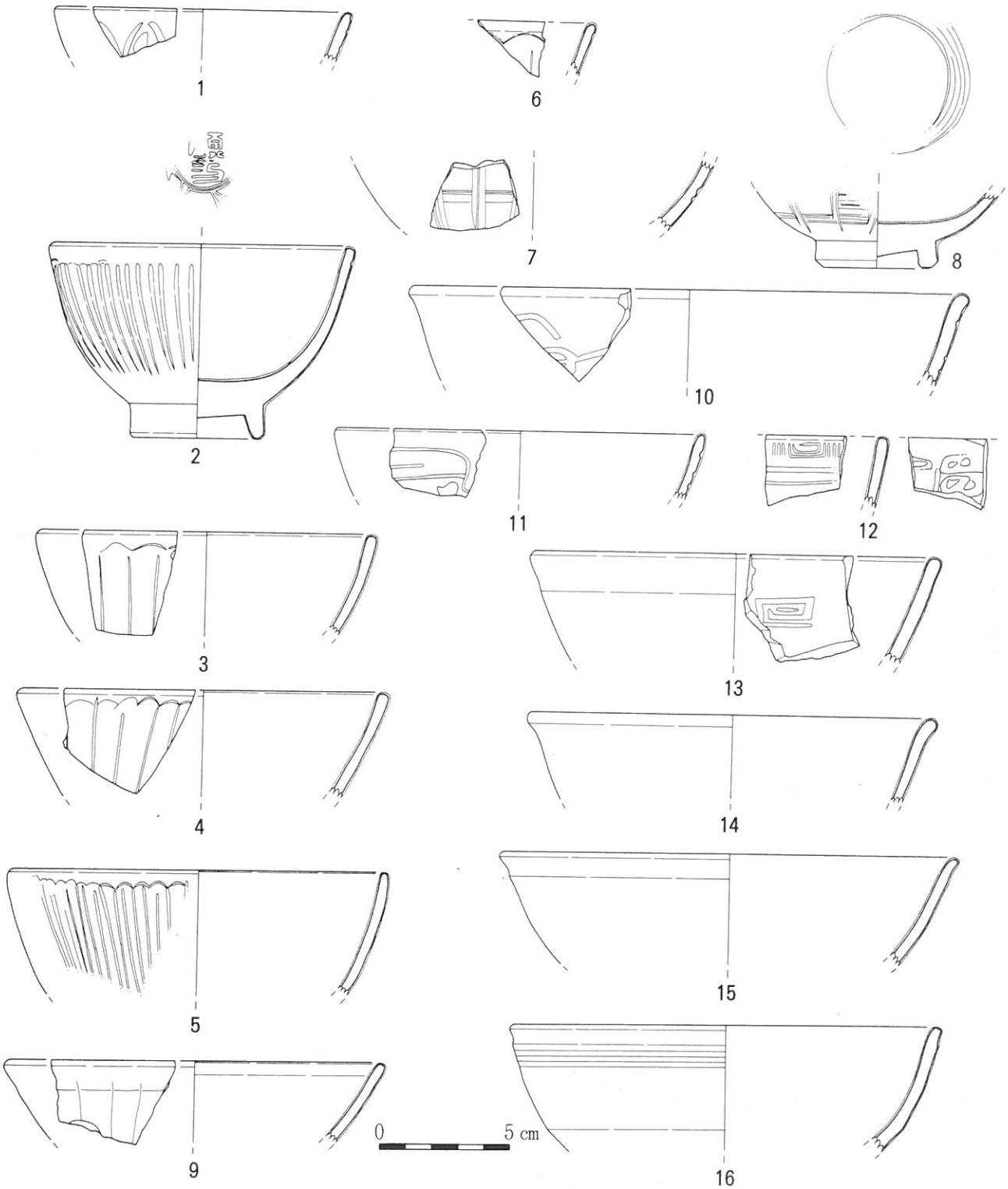
Ⅱ地区の青磁の分類とその概念については、Ⅰ地区の青磁の項（22頁～25頁）に示してある。Ⅰ地区では碗・皿・盤・鉢・杯・瓶・香炉・壺の8器種が確認されているが、Ⅱ地区では碗・皿・盤・杯の4器種のみが存在していた。碗についての特徴として、碗Ⅰ群（14世紀前半～15世紀中頃）に時期に位置づけられる碗は碗Ⅰ群B類b種のみが確認されている程度で、主流が碗Ⅱ群（15世紀中頃～16世紀中頃）であることが理解されるところである。他に碗Ⅳ群のA類・B類、碗Ⅴ群などについては未確認であった。

第18表a　慶来慶田城青磁観察一覧

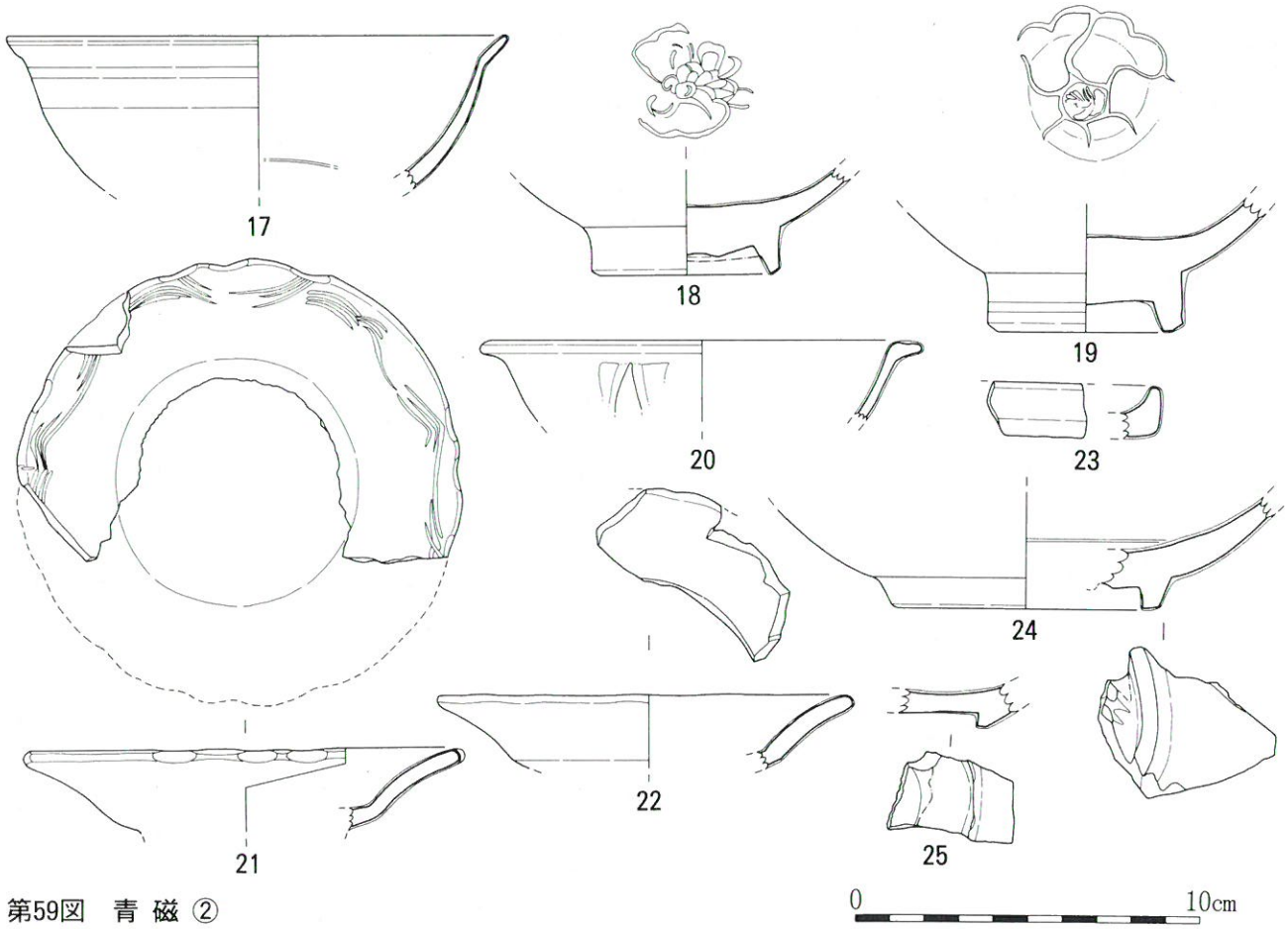
挿図図版	番号	名称など	分類	法量	器形・成形・文様等の特徴	素地・釉色	施釉・貫入	出土地
第58図 図版45	1	蓮弁文碗	ⅠBb	11.2 － －	厚手の内湾碗。口唇は丸味を持たせて成形。片切り彫りによる幅の狭い蓮弁を描く。蓮弁には丸箆を加え蓮花を強調。	淡灰白色の微粒子。淡青緑色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	薩摩在番所跡 表採
第58図 図版47	2	細蓮弁文碗	ⅡA	11.4 7.4 4.8	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。蓮弁は高台脇まで箆による細蓮弁を描く。弁先は釉が厚く掛けられ判然としない。見込に「顯氏」の字款を施す。総釉後に外底釉を蛇ノ目状に掻き取る。	淡灰白色の微粒子。青緑色の釉。	外底面の釉のみ掻き取る。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層下部
第58図 図版45	3		ⅡB	13.0 － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。丸箆で蓮弁を描いた後に弁先を描くが蓮弁とのズレや描き忘れが生じている。	灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物が僅かに混入する。濃青緑の釉。	両面に施釉。貫入はない。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅲ層
第58図 図版45	4		ⅡC	14.0 － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。丸箆で蓮弁を描いた後に線描きで弁先を描いている。蓮先が口唇外端まで達している箇所もある。	灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物が僅かに混入する。灰緑色の釉。	両面に施釉。両面に細かい貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅳ層
第58図 図版45	5			14.4 － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。丸箆で蓮弁を描いた後に線描きで弁先を描いている。蓮先の描き方はⅡAと類似し間隔が密であるが、弁先の描き方で異なっている。一応本タイプに含めた。	橙茶色の微粒子。黄茶色の釉。	両面に施釉。貫入はない。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅳ層
第58図 図版45	6		ⅡD	－ － －	内湾型の碗。口唇は丸味を持たせて成形。線描きによる蓮弁と弁先を描くがズレた構図となっている。口縁直下に削りが加えられている。	淡灰色の微粒子。微細な黒色鉱物が希に含まれている。灰緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅴ層
第58図 図版45	7		ⅡE	－ － －	蓮弁が叉状工具によって描かれた蓮弁文碗の胴部片。	淡灰白色の微粒子。淡黄緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅴ層
第58図 図版45	8			－ － 4.7	高台際まで叉状工具によって蓮弁を描いている。畳付に研磨を加えている。見込みに途切れた圏線を施す。	淡灰色の細粒子。淡黄緑色の釉。	内面は施釉。外面は高台外面まで施釉。貫入はない。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第58図 図版45	9		ⅡF	14.4 － －	唯一の直口型の碗。外面に線彫りの蓮弁文のみを描く。弁先は消失している。	灰色の粗粒子。灰緑色の釉。	内面は施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅳ層
第58図 図版45	10	ラマ式	Ⅲ	21.0 － －	外反口縁の碗で、外面に片切り彫りでラマ式蓮弁類似文様を描いている。	淡灰白色の微粒子。淡緑青色の釉。	両面とも施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第58図 図版45	11	雷文帯碗	ⅥA	14.0 － －	直口口縁の碗。文様は外面のみに残存し、箆描きで雑な雷文を描いている。	淡灰白色の微粒子。淡緑青色の釉。	両面とも施釉。貫入はない。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第58図 図版45	12		ⅥB	－ － －	直口口縁の碗。口縁の端部近くで器壁が厚くなる。口縁外面にスタンプによる雷文とラマ式蓮弁文を施す。内面にもスタンプによる文様を施すが構図は不詳である。	淡灰白色の微粒子。淡黄緑色の釉。	両面とも施釉。貫入はない。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅳ層
第58図 図版45	13	陽印花雷文帯碗	Ⅶ	15.5 － －	直口口縁の碗。胴上部と口縁端に幅広（幅10.5㎜）の箆で軽く削りを加えたため胴上部に稜線が走っている。内面には陽刻の雷文帯を型押しする。	淡灰白色の微粒子。(半磁胎傾向)。黄緑色の釉。	両面とも施釉。両面に細かい貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第58図 図版45	14	無文碗	ⅧⅠA	15.5 － －	疑似肥厚タイプの碗。口縁が微弱に肥厚する。	淡灰色の細粒子。淡黄緑色の釉。	両面とも施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅳ層
第58図 図版45	15		ⅧⅠD	17.3 － －	口縁が微弱に外反する碗。口縁外端を僅かに突出させた口造り。胴上部に不鮮明な稜が入る。	淡灰白色の微粒子。明緑黄色の釉。	両面とも施釉。貫入はない。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅳ層
第58図 図版45	16			16.2 － －	口縁が微弱に外反する碗。口縁直下に6.3㎜幅の箆で浅く削りを加えたために胴上部にやや鮮明な稜が走る。稜線の直下から刷毛目様の調整が入っている。	淡灰色の微粒子。明青緑色の釉。	両面とも施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第59図 図版46	17		ⅧⅡA	15.0 － －	口縁がきつく外反する碗。口唇を尖らせ気味に丸味を持たせて成形。外面に轆轤痕が観察される。内面胴下部に圏線を施している。	淡灰色の微粒子。僅かに微細な黒色鉱物が混入する。明灰緑色の釉。	両面とも施釉。両面に細い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅴ層
第59図 図版46	18		ⅧⅡa	－ － 5.5	釉は高台内面途中まで残存。外底釉を掻き取って露胎させる。見込みに印花花文。	淡橙色の微粒子。黄緑色の釉。	両面とも施釉。外面の釉は高台内面途中まで施釉。両面に細かい貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第59図 図版46	19		ⅧⅡb	－ － 5.8	高台の外面から下に丸箆で削りを加えている。見込みに印花文を施す。外底釉を歪な方形状に掻き取っている。畳付は部分的に研磨。	淡灰色の微粒子。黄緑色の釉。	内面は総釉。外底面は掻き取る。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第59図 図版46	20	口折皿	Ⅰ	12.8 － －	口折皿の口縁破片。片切り彫りで尖り気味の蓮弁を描く。口造りは平縁で仕上げている。	淡灰色の微粒子。灰青色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第59図 図版46	21	稜花皿	Ⅱ	12.8 － －	口唇に刻みを入れてラマ式蓮弁の弁先を表現。腰下部で折れる。内面の口縁外端には3本櫛によるラマ式蓮弁の弁先を描く。内底に圏線を描く。	淡灰色の微粒子。青緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 D－5 Ⅳ層

第18表ｂ　慶来慶田城青磁観察一覧

挿図図版	番号	名称など	分類	法量	器形・成形・文様等の特徴	素地・釉色	施釉・貫入	出土地
第59図 図版46	22	稜花皿	Ⅱ	12.0 －	口唇に刻みを入れてラマ式蓮弁の弁先を表現。内面には文様が観察されない。無文の稜花皿か。	灰褐色の粗粒子。細かい白色の鉱物が多量に混入。明黄緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅳ層
第59図 図版46	23	盤	Ⅱ	－ －	鍔端をつまみ上げたタイプの盤の口縁。	淡灰白色の細粒子。淡青緑色の釉。	両面に施釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 Ｃ－３ Ⅱ層
第59図 図版46	24		Ⅰ	－ － 7.8	高台を保持した盤の破片。Ⅰ群タイプの盤に所属する高台か。見込みに陽圏線を描く。外底面に丸箆で深く刻みを入れる。	淡灰色の微粒子。淡青緑色の釉。	両面に総釉。両面に粗い貫入。	薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅴ層
第59図 図版46	25	杯	Ⅱ	－ －	碁笥底の杯の底部破片。外底釉を雑に掻き取っている。	淡灰色の微粒子。淡青緑色の釉。	両面に総釉。外底面を総釉後に雑に掻き取っている。	薩摩在番所跡 Ｅ－２ Ⅰ層



第58図　青磁①



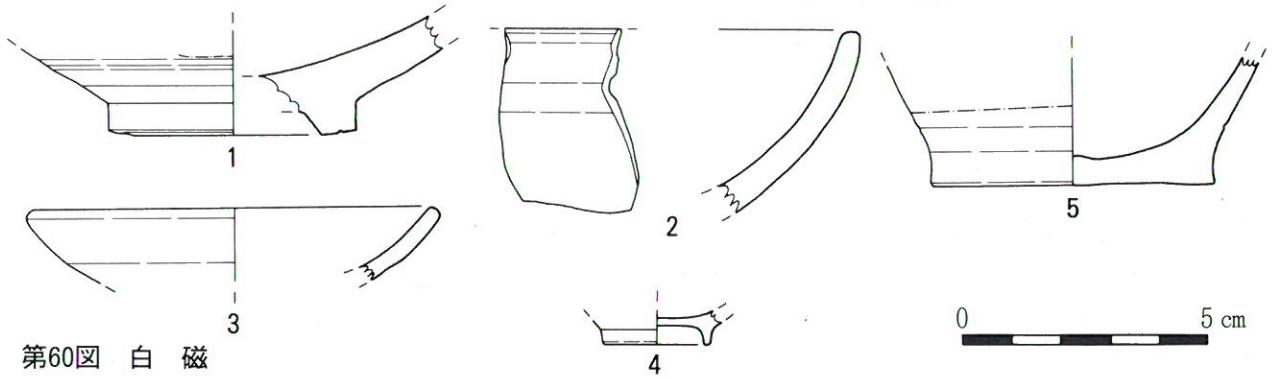
第59図　青 磁 ②

第４節　白　　磁

本地区の白磁の分類概念については、Ⅰ地区の第４節白磁（33頁～34頁）の項目で述べてあるので、参照のこと。Ⅰ地区の白磁で碗・小碗・皿・小杯・灯火器・蓮華の６種類の器種が確認され、Ⅱ地区では碗・皿・小杯・壺（アンピン）の４器種が各１点ずつ得られている。薩摩在藩（1641～1648年）の時期と一致する資料はない。

第19表　白磁観察一覧

挿図図版	番号	器種	分類	法量	特　　徴	出土地
第60図 図版47	1	碗	Ⅱ	－ － 5.0	灰白色の釉を用いて、外面は高台際まで施している。内面は総釉される。素地は淡灰白色の細粒子で微細な黒色の鉱物を少量含んでいる。貫入はない。	薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第60図 図版47	2	碗	Ⅵ	－ － －	ビロースクタイプ碗の流れを汲む内彎型の碗。外面に轆轤痕が観察される。淡灰白色の釉を両面に施している。素地は淡灰色の細粒子である。貫入はない。	薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第60図 図版47	3	皿	Ⅰ	8.4 － －	抉入高台皿の口縁とみられる。外面に轆轤痕が観られる。口縁は内彎し、口唇が平坦に削り取られている。淡黄白色の釉を両面に施している。素地は白色の細粒子である。貫入はない。	薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅰ層
第60図 図版47	4	小杯		－ － 2.2	淡灰白色の釉を畳付を除いて施している。素地は淡灰白色の微粒子である。貫入はない。	薩摩在番所跡 Ｃ－３ Ⅱ層
第60図 図版47	5	壺		－ － 6.5	底面からの立ち上がり部分で削り成形。一端くびれさせた後に外側に軽く開かせている。底造りは削りによってベタ底成形とする。内面は轆轤痕が顕著に観察される。釉色は淡灰白色を帯び、内面と外面の腰下部に施している。淡灰色の細粒子。貫入はない。	薩摩在番所跡 Ｅ－１ Ⅰ層



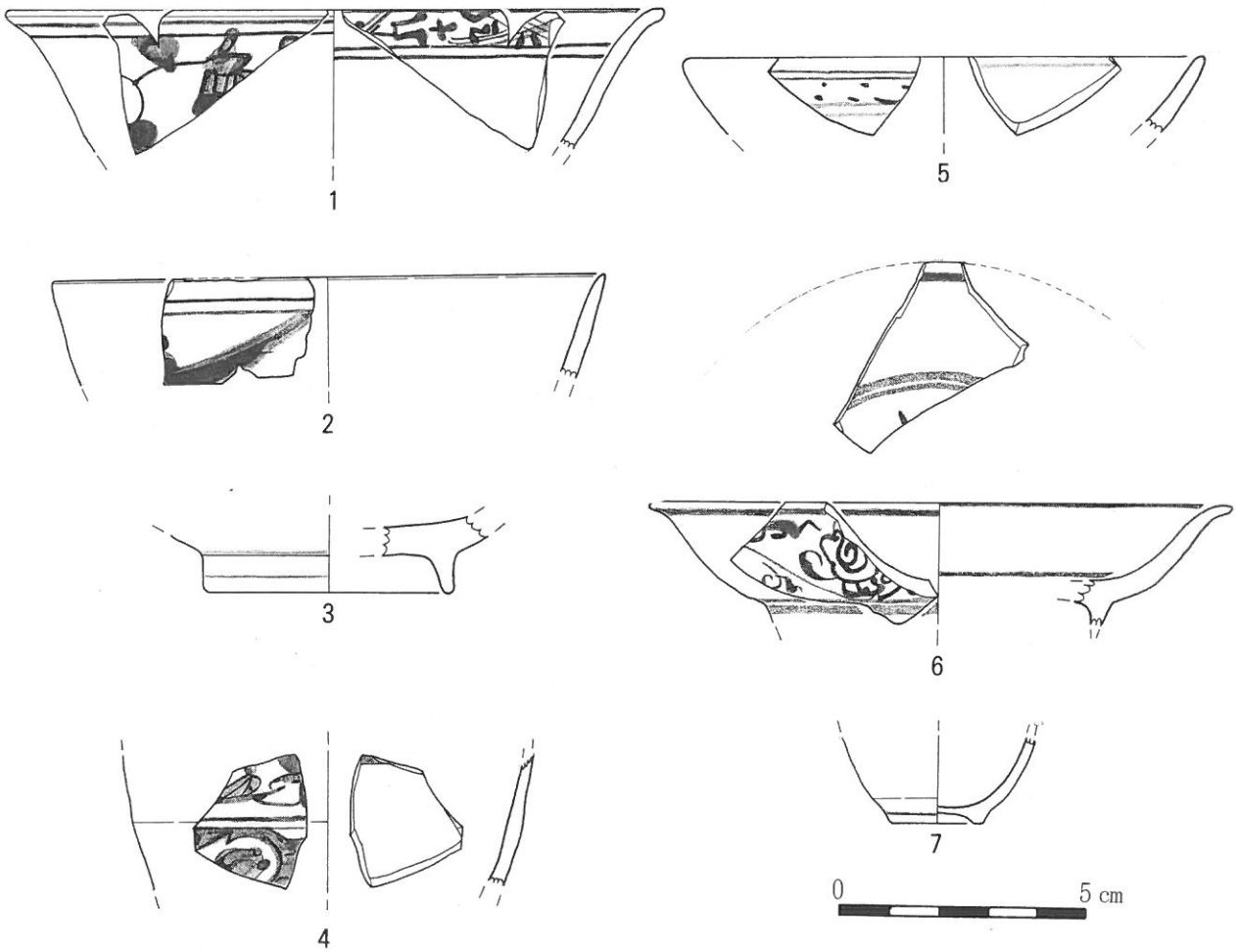
第60図　白　磁

第5節　染　　付

本地区の染付の分類とその概念については、Ⅰ地区の染付の項（38頁・39頁）に述べてある。Ⅰ地区での器種構成は碗・小碗・小皿・皿・小杯・瓶・水注の7種類が確認されている。Ⅱ地区では碗・小碗・小皿・小杯の4器種のみが認められている。薩摩在藩（1641～1648年）の時期と並行する器種は小杯Ⅰ類のみが該当するようである。他の器種は在藩普請以前の下部にあった遺物包含層の時期のものか、或いは近隣からの造成の際に土砂と一緒の持ち込まれてきた資料も含まれていることなどが考えられるところである。

第20表　染付観察一覧

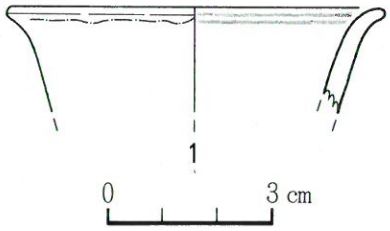
挿図図版	番号	器種・仮	分類	法量	文様・呉須・釉色・素地等の特徴	産地・年代	出土地
第61図 図版48	1	碗	Ⅰ	13.2 － －	外反口縁碗。外面に界線と唐草文。内面は四方襷文と界線。呉須は鮮明。淡青白色の釉。白色の微粒子。	景徳鎮 16世紀代	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第61図 図版48	2		Ⅵa	11.0 － －	口縁が微弱に外反。外面に2本の界線と飛馬文。呉須は鮮明。淡青白色の釉。白色の微粒子。	景徳鎮 16世紀後半～17世紀前半	薩摩在番所跡 E－1 Ⅰ層
第61図 図版48	3			－ － 5.0	高台破片、高台脇と高台外面に界線。呉須は鈍く、不鮮明。淡青白色の釉。淡い灰白色の微粒子。	福建系 17世紀頃	薩摩在番所跡 E－2 Ⅰ層
第61図 図版48	4	小碗	Ⅱc	8.2 － －	円筒型で腰折れ。外面に波濤文帯・界線・ダミ技法による唐草文を描く。界線の箇所に隆圏線を廻すら。内面口縁端に界線。淡青白色の釉。淡灰白色の微粒子。	景徳鎮 16世紀後半～16世紀中頃	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第61図 図版48	5	小皿	Ⅰ	10.4 － －	碁筒底の口縁。外面に抽象的な波濤文と界線。内面に界線。呉須は鈍い。淡黄茶色の釉。淡橙茶色の細粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	薩摩在番所跡 D－5 Ⅱ層
第61図 図版48	6		Ⅳ	11.6 (2.6) (6.4)	外反のきつい小皿、外面の口縁と高台に界線、胴部に室相華唐草文。内面は口縁と底面に界線と構図不詳の文様。呉須はやや鮮明。淡青白色の釉。淡灰白色の細粒子。	景徳鎮 16世紀前半～16世紀中頃	薩摩在番所跡 E－2 Ⅱ層
第61図 図版48	7	小杯	Ⅰ	－ － 2.0	小杯の高台破片。外面高台に界線。呉須は鈍い。淡青白色の釉。淡灰白色色の微粒子。畳付に釉薬の固まりが粒状に付着。	福建 18世紀頃	薩摩在番所跡 E－2 Ⅱ層



第61図　染　付

第６節　鉄釉染付

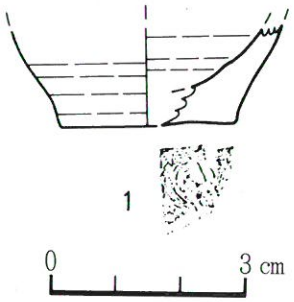
第62図１は口縁が僅かに外反する小杯の破片である。推算された口径は6.8cmであった。外面に茶褐色の釉を施している。内面の口縁には呉須で二本の界線を描く。釉色は淡灰白色。素地は淡灰白色の細粒子。Ⅱ地区薩摩在藩跡Ｃ－３第２層の出土（景徳鎮。18世紀）。（図版47　下左：１）。



第62図　鉄釉染付

第７節　茶入れ壺

第63図１は、いわゆる糸切り底の資料である。釉掛けはない。外面は指ナデ調整。内面は轆轤成形。素地は精選された明茶色の微粒子であるが、微細な白色や茶褐色の鉱物が僅かに含まれている。推算底径は2.7cmと求められた。Ⅱ地区薩摩在番Ｅ－２第Ⅱ層の出土。（図版47　下左：１）。



第63図　茶 入 壺

第８節　褐釉陶器

Ⅱ地区の褐釉陶器の分類概念は、Ⅰ地区の第12節の褐釉陶器（52頁～54頁）の項目に記載してあるので、参照されたい。本地区では壺と洗の２器種のみが確認されⅠ地区で出土した水注は確認されていない。

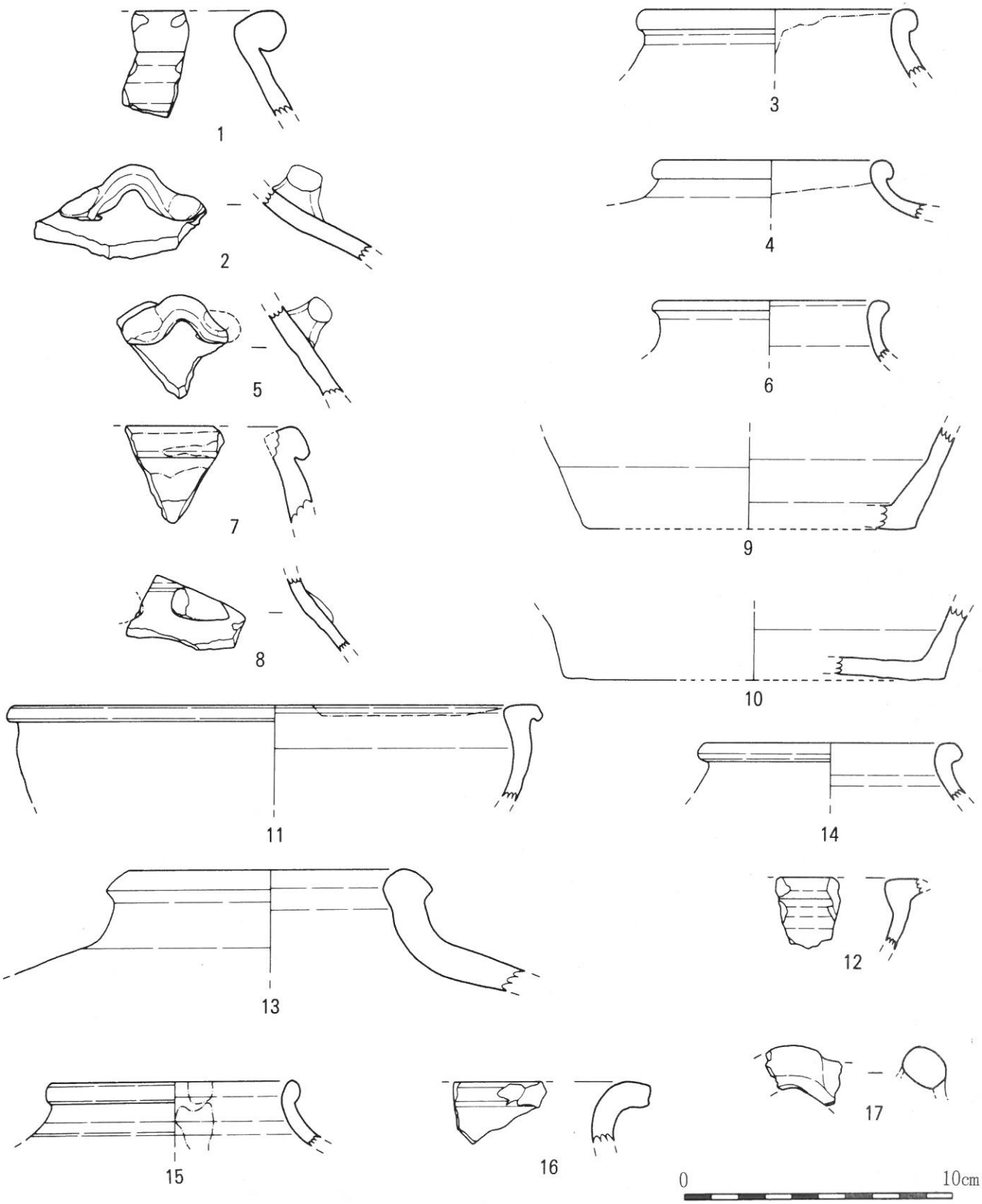
第21表ａ　褐釉陶器観察一覧

挿図図版	番号	器種	分類	法量	特　　徴	産地	出土地
第64図 図版49	1	壺	Ⅰａ	－ － －	大きな玉縁状の肥厚（幅1.9cm×厚さ1.5cm）を造るもので、肥厚帯直下に篦などで削りを加えて肥厚を強調する。口唇内端近くに胎土目の目痕が観られる。黄茶色の釉（非常に細かい貫入が観られる）を口唇端から外面に施している。素地は橙白色の細粒子で、細かい白色や茶色の鉱物を少量含み、希に粗い石英？が含んでいる。	中国産	薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第64図 図版49	2		Ⅰａ	－ － －	壺Ⅰ類ａ種に所属するとみられる横耳が貼り付けられた胴部片である。横耳は丁寧なナデで成形されている。黄緑色の釉を外面にのみ施している。釉には細かい貫入が認められる。素地は橙白色の細粒で、粗い白色や茶色の鉱物を少量含んでいる。		薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅴ層
第64図 図版49	3		Ⅰｂ	10.4 － －	小さな玉縁状の肥厚を造る。茶褐色の釉は口縁の内面から外面に施されているが、口唇の釉はナデによって掻き取られている。肥厚帯直下は施釉以前に削りが加えられている。素地は淡灰色の微粒子で、粗密のある白色鉱物を僅かに含んでいる。		薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅴ層
第64図 図版49	4		Ⅰｂ	9.0 － －	小さな玉縁状の肥厚を有する。灰緑色の釉を内面の口縁から外面まで施している。肥厚部は釉を施す前に篦や指ナデで軽く成形を行っている。淡橙白色の細粒子で、細かい白色や茶褐色の鉱物を少量含んでいる。希に粗目の白色の鉱物が含まれている。		薩摩在番所跡 Ｅ－２ Ⅱ層
第64図 図版49	5		Ⅰｂ	－ － －	小さめの横耳を貼り付けた壺Ⅰ類ｂ種～壺Ⅳ類のいずれかのグループに属するものとみられる胴部片である。外面のみ茶黒色の釉を施している。素地は淡橙白色の細粒子で、細かい白色や茶褐色の鉱物が少量含まれている。希に粗目の石英？とみられるものが含まれている。		薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第64図 図版49	6		Ⅴ	8.8 － －	口縁に微弱な肥厚を造る小型の壺で、肩部は「怒り肩」である。二次的に火を受けて変色したと観られる淡灰色の釉を両面に施す。素地は明茶色の細粒子で、微細な白色や茶色の鉱物が僅かに含まれている。希に粗い石英？や茶褐色の鉱物が含まれている。		薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅴ層
第64図 図版49	7		Ⅵ	－ － －	歪な方形状の肥厚を造る大型壺の口縁破片で、肩部が「怒り肩」のタイプになるものである。暗茶色の釉を両面に掛けているが、口唇・肥厚中央部の釉をナデで掻き取っている。素地は橙茶色の細粒子で、粗い白色やガラス質の鉱物を多量に含んでいる。希に粗い茶黒色の鉱物が含まれている。		薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅴ層
第64図 図版49	8	壺把手	Ⅰｂ ～Ⅳ	－ － －	頸下部に２本の界線を施し、その直下に横耳を貼り付けたものである。外面にのみ黄緑色の釉を掛けている。細かい貫入がみられる。素地は灰白色の微粒子で、微細な黒色鉱物を少量含んでいて、希に粗い白色の鉱物が含まれている。		薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅴ層
第64図 図版49	9	壺底部	ａ	－ － 12.4	壺Ⅰ類ａ種と釉色や素地などが類似する。黄緑色の釉を外底面近くまで施している。外底面の縁辺は磨耗している。素地は橙白色の細粒子で、粗い白色や茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。		薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅳ層
第64図 図版49	10		ｂ	－ － 14.2	外底面の縁辺近くに砂目が僅かに付着する。外面は縦位と横位方向にナデが加えられ轆轤痕が消されている。釉は残存しない。素地は灰白色の細粒子で、粗い白色や褐色の鉱物が含まれている。希に３㎜程度の灰黒色の鉱物が含まれている。		薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅳ層
第64図 図版49	11	洗		20.0 － －	灰黒色の釉を内面の口縁端部から下に掛けている。口唇外端近くに胎土目の目痕が帯状に付着している。外面は轆轤成形後に雑なナデを加えている。淡灰色の細粒子で、細かい白色や茶褐色の鉱物が少量含まれていて、希に粗い白色や茶褐色の鉱物が含まれている。		薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅱ層
第64図 図版49	12			－ － －	口縁外端部を欠く洗の破片・内面に細かい貫入が観られる黄緑色の釉を施す。外面は轆轤を回転擦痕やカンナで消している。淡灰色の微粒子で、細かい白色や茶褐色の鉱物を少量ながら含んでいる。		薩摩在番所跡 Ｃ－３ Ⅱ層
第64図 図版49	13	壺	Ⅳ	12.2 － －	「怒り肩」タイプの中型壺とみられる。明緑色の釉を両面に施す。非常に細かい貫入がある。淡灰色の粗粒子で、微細な色色や茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。希に粗目のものが含まれている。	中国産か東南アジア産	薩摩在番所跡 Ｄ－５ Ⅳ層
第64図 図版49	14		Ⅵ	9.8 － －	小型の壺で、小さな玉縁状の肥厚を造る。黄緑色の釉を内面の口縁から外面まで施している。（細かい貫入が観察される。）口唇や中央付近の釉をナデで掻き取り露胎させている。素地は淡灰色の細粒子で、粗密のある茶褐色や白色の鉱物を少量含んでいる。		薩摩在番所跡 Ｅ－２ Ⅱ層
第64図 図版49	15		Ⅶ	9.4 － －	小振りの壺で薄造りである。口縁に玉縁状の肥厚を造る。茶黒色の釉を口唇外端から外面に施している。口唇中央から内端は釉を掻き取って露胎させている。淡灰色の細粒子で、粗密のある白色鉱物を少量含んでいる。		薩摩在番所跡 表採
第64図 図版49	16	壺	Ⅴ	－ － －	口縁をきつく折り曲げて疑似肥厚の口縁を造る。黒褐色の釉を外面のみに施している。内面は茶褐色の鉄釉が付着する。素地は茶紫色の細粒子で、微細な白色・ガラス質・茶褐色の鉱物が少量含まれている。	タイ産	薩摩在番所跡 Ｅ－２ Ⅱ層

第21表ｂ　褐釉陶器観察一覧

挿図図版	番号	器種	分類	方量	特　　徴	産地	出土地
第64図 図版49	17	壺 把 手	Ⅲ	― ― ―	壺Ⅲ類タイプに貼り付けられた把手とみられる。黒褐色の釉を施している。素地は灰褐色の細粒子で、細かい白色の鉱物を微量に含んでいて、僅かに茶褐色の細かい鉱物が含まれている。	タイ産	薩摩在番所跡 Ｆ－２ Ⅰ層

その他にタイの褐釉は壺Ⅲ類の把手片とタイの褐釉の壺Ⅴ類の２種類が確認されている。



第64図　褐釉陶器

第９節　本土産陶磁器

ほとんどが肥前系とみられる陶磁器の小破片で、量的には僅少である。その他、明治以降の所産かと思われるものが若干みられる。特徴的なものを第65図に示した。以下に略述する。

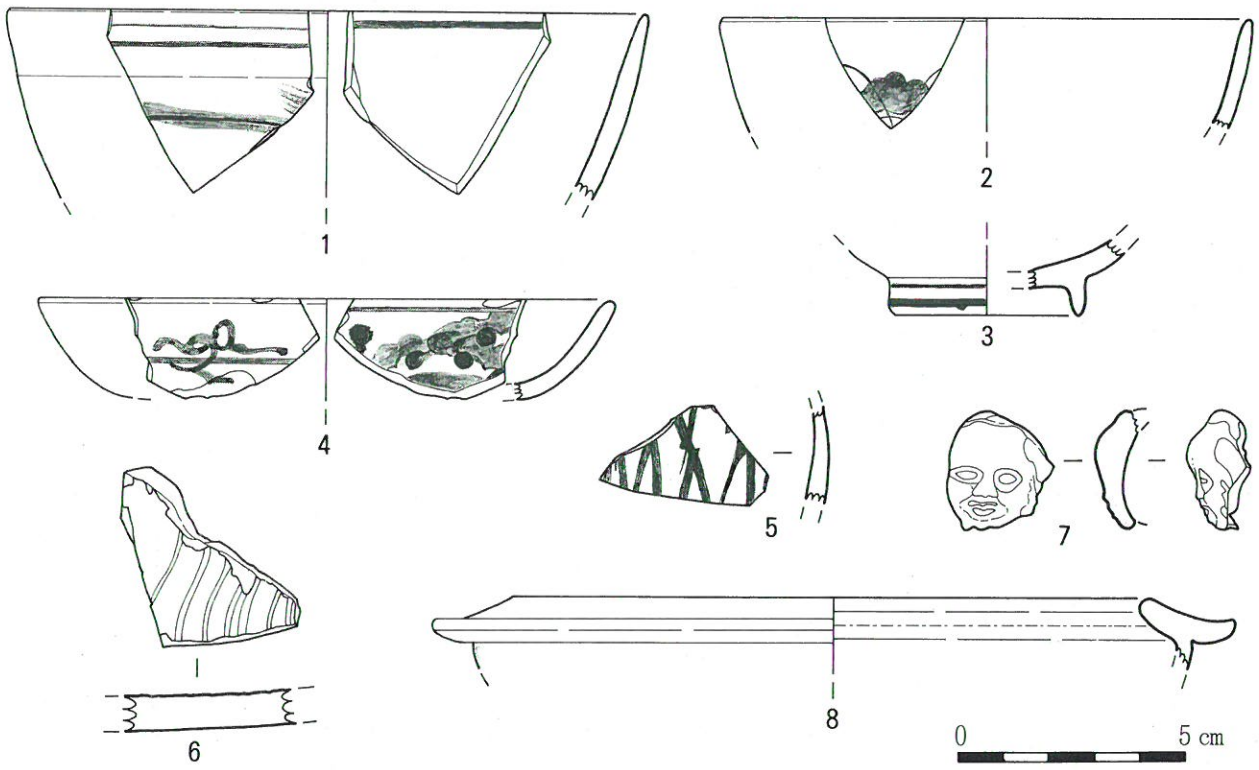
１～６は肥前系の資料で、１～５は磁器、６は陶器である。前者は17世紀後半～18世紀前半頃のもののようで、後者は18世紀頃のもののようである。１～３は染付碗の資料である。１・２は口縁部の資料で、２点とも直口気味の器形をなし、口唇部は舌状にしている。推算口径は１が約14cm、２が約12cmを測る。１は口縁部の外面に２本、内面に１本の圏線を廻らし、外面の胴部にも施文するが全体の状況は判然としない。２は外面の胴部に草花文の一部が認められる。両者とも呉須の発色は鈍く、青灰白色のやや失透気味の釉が施されている。素地は１が暗灰白色のやや細かなもので、２が淡灰白色のやや細かなものである。３は推算高台径が約４cmの底部資料である。高台は方柱状につくり、畳付けを斜めにしている。そのため、接着面は狭くなっている。高台外面に２本の圏線が認められる。呉須の発色は鈍い。淡灰白色の失透気味の釉を総釉のあと、畳付け部を釉剥ぎしている。内外面に細かく密な貫入が認められる。素地は淡灰白色のやや粗いものである。

４は推算口径が約13cmの直口皿の口縁部資料である。腰部からゆるやかなカーブを描いて口縁部にいたり、口唇部は舌状に仕上げる。内外面に施文するが、構図は判然としない。呉須の発色は鈍い。青灰白色のやや失透気味の釉が全面にみられる。素地は淡灰白色の細かなものである。５は網目文を施す瓶の胴部破片である。呉須は上述の４点に比べるとやや良好な発色で、外面に青白色の透明度のある釉が施されている。内面は露胎。素地は乳白色の細かなものである。

６は陶器の資料で、内外面に暗黒色の化粧土を塗布し、内面に白土を埋め込んだ沈線で曲線を描く。現資料で７本認められるが、本来の本数は不明。また、曲線の下方にも白土の部分がみられる。三島手の皿かとみられる。胎土は暗褐色の細かなもので、微砂粒の混入が見受けられる。

７は明治以降の所産かとみられる白磁の資料である。型押しの人面部の資料で、表裏面に施釉されている。現資料からは全体の状況はつかめない。

８は器種の判然としない口縁部資料である。口縁部上端をＴ字状につくり、口唇部は幅広く、上方へ弧状を呈す。推算口径は約18cm。内面にだけ灰釉が認められる。素地は淡灰白色の細かなもので、磁質である。



第65図　本土産陶磁器

第10節　沖縄産施釉陶器

本地区からの出土は非常に少ない。ほとんどが沖縄本島の壺屋系のものである。特徴的な５点を第66図１～５に示した。１・２は透明釉（白化粧）を施す碗の資料で、１は口縁部、２は底部である。高台際から外側へ開き気味に立ち上がり、口縁部上端を僅かに外反させるという器形が想定される。また、総釉のあと高台畳付け部を釉剥ぎし、内底面を蛇の目状に釉剥ぎする。釉剥ぎしている部分には重ね焼きの際の溶着痕がみられるなど、この種碗の特徴を有す。２の推算高台径は約７㎝を測る。施釉されているところ全面に細かく密な貫入が認められる。素地は黄白色のやや粗いものである。

３は皿の口縁部資料で、外面に鉄釉、内面に透明釉（白化粧）を施す。底部から口縁部の方へ若干開き気味になり、波状口縁をつくる。口唇部は舌状を呈す。やや濁った感じの釉調で、素地は暗灰色で細かい。

４は鉄釉の施された口縁部破片で、壺になるかとみられる。頸部と肩部のつなぎ目から破損している。頸部はほぼ垂直に立ち上がり（約３㎝）、口縁部上端を折り曲げるように外反させ、外反部内面のカドを丸味を持って仕上げている。口径は約３㎝。現資料では内外面とも施釉されている。素地は暗褐色の細かなものである。

５は高台を逆台形状につくる底部資料で、畳付けは平坦である。推算高台径は約７㎝。現資料に施釉されたところは見受けられない。小破片のため器種は不明。素地は淡橙褐色の細かなもので、粗砂粒の混入が散見される。

第11節　沖縄産無釉陶器

量的には多くない。ほとんど小破片の資料で、すり鉢と壺、蓋が確認できるだけである。これらの資料の多くは、胎土に微砂粒を多量混入し、白色の粗砂粒や赤色粒などを含むもので、八重山で焼かれたものかとみられる。ほとんどのものが第２層からの出土である。特徴的なものを第66図６～12に示した。

６・７はすり鉢の胴部資料で、２点とも器形は窺えない。７は６よりも薄手の資料で、赤褐色を呈す。６の器色は暗褐色を呈す。両者とも外面の口縁部近くに凹線を廻らすもののようで、７は胴部との境目により明瞭な稜が認められ、その箇所の推算径が約26㎝を測る。内面にみられる櫛目の一組の条数は判然としないが、どちらも上端部がナデ消される。

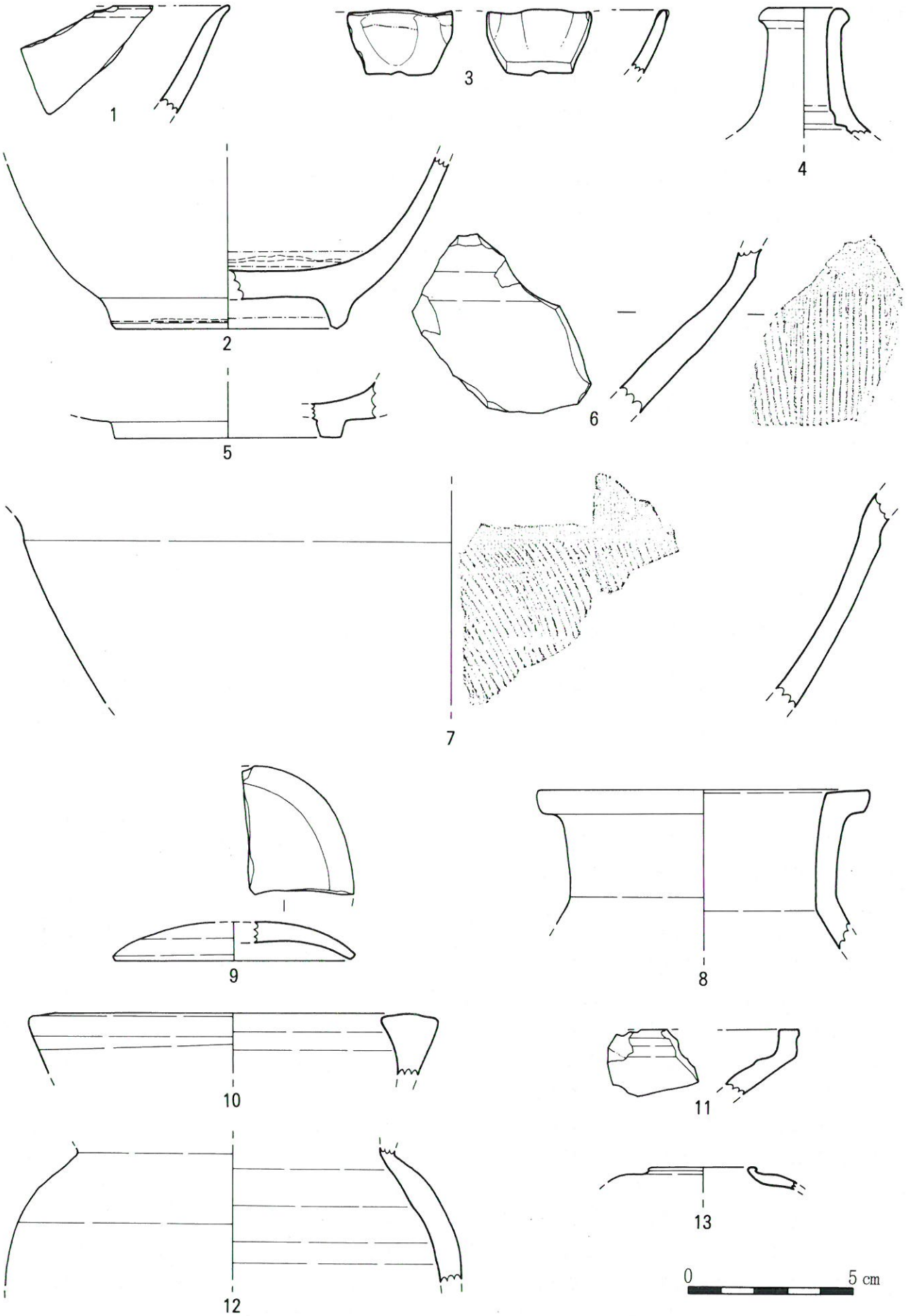
８は口縁部上端を逆Ｌ字状に外反させる壺形の資料で、ほぼ直立する頸部は２㎝を若干越す。幅広い口唇部は若干凹面をなし、内傾する。外反部の内面や先端部の上下の稜は比較的明瞭であるが、頸部下端の内面には不明瞭な稜が廻る。推算口径は約10㎝。外面は暗褐色、口唇部から内面は暗茶褐色を呈す。

９は蓋とみられるもので、他の資料に比べ胎土が精選され細かい。資料の全面に茶褐色の化粧土が塗布されている。甲部は滑らかな仕上げで、ほぼ平坦な中央部周辺から弧を描くように端部へいたり、端部は舌状につくる。端部の裏側に非常に狭い平坦部をつくる。縁部の推算径が約７㎝である。

10～12は器種の判然としないものである。10・11は口縁部、12は胴部の資料である。10は口縁部上端が逆三角形状に両側へ張り出すもので、内側の方へ大きく張り出す。口唇部は広く、やや凸面をなす。推算口径は約12㎝を測る。外面から口唇部は暗褐色、内面は暗茶褐色を呈す。11は口縁部上端を逆く字状に内側へ折り曲げるものである。折り曲げ部に凹線様のものを廻らし、先端部は平坦に仕上げている。内外面とも暗褐色を呈す。12は胴部が膨らみ丸味のある形状を示すもので、頸部下端から胴部中央付近までの資料である。頸部下端の推算径が約９㎝、胴部中央付近の推算径が約12㎝を測る。雑な感じのつくりで、割れ面に気泡が散見される。両面とも暗褐色を呈す。

第12節　陶質土器

量的に僅少で、しかも小破片のものばかりである。１点だけを第66図13に示した。小型壺になるかとみられるもので、張り気味の肩部の先端を僅かに直方向に立ち上げて口縁部をつくる。口唇部は平坦で、内面を斜め方向にしているため、断面が逆三角形状を呈す。推算口径は約３㎝。両面とも淡黄褐色を呈す。



第66図　沖縄産施釉・無釉陶器・陶質土器

第13節　瓦

Ⅰ・Ⅱ地区のそれぞれに瓦が出土した。その量は少なく、殆どが小破片のため全形を窺えるものは数点であった。軒瓦片は全く確認されなかった。出土状況はⅠ層のみの出土で、他は表採によって得られた資料である。小破片で出土数が少ないため、Ⅰ地区「鍛冶屋跡」とⅡ地区「薩摩在番跡」出土の瓦片を一括し、両地区で出土量の多いⅡ地区で記述した。

Ⅰ地区からの瓦の出土数は少なく、殆どが赤瓦の小破片で完形品はなく、灰色瓦の出土は極めて稀であった。Ⅱ地区においては、灰色瓦が赤瓦の出土量を上回っているが、その殆どがやはり小破片である。平瓦・丸瓦のはっきりとした瓦を図示した。第67図1から5は灰色の瓦で6から10は赤瓦である。

第22表　瓦観察一覧

挿図番号		所見	焼成 胎土・混入物	出土地・層
第67図	1	横断面が波形を呈する桟瓦片である。切り込みが見られず、並桟か切り込み桟か不明である。	焼成は良好。胎土は細かい。瓦面は淡灰色で一部濃灰色を帯びる。	薩摩在番 E－1　表採
	2	横断面が波形を呈する桟瓦片である。隅部に切り込みのある切り込み桟瓦と考えられる。	焼成は良好。胎土は細かく淡黄色で瓦面は濃灰色を帯びる。	薩摩在番 E－1　Ⅰ層
	3	横断面が偏平な平板状の瓦片？である。	焼成は良好。胎土は細かく淡灰色で瓦面は濃灰色を帯びる。	薩摩在番 E－1　Ⅰ層
	4	横断面が波形を呈する桟瓦片である。隅部に切り込みがある切り込み桟瓦と考えられる。内側に5条1組の溝が走る。	焼成は良好。胎土は細かく淡黄色で瓦面は濃灰色を帯びる。	薩摩在番 E－1　表採
	5	焼成不良の桟瓦片で、褐色味を帯びる。端部で緩やかな波形を呈する。	焼成は不良。胎土は細かい。瓦面は淡褐（灰）色を帯びる。	鍛冶屋　表採
	6	赤丸瓦片である。胴頂部に有段の瓦受けがあり、内面に布目痕が見られる。	焼成は不良。胎土は細かいが脆い。瓦面は明褐色を帯びる。	鍛冶屋　表採
	7	赤丸瓦片である。胴頂部に有段の瓦受けがあり、内面に布目痕が見られる。	焼成は不良。胎土は細かい。瓦面は明褐色を帯びる。	鍛冶屋　表採
	8	赤丸瓦片である。胴頂部に有段の瓦受けがあり、内面に布目痕が見られる。	焼成は不良。胎土は細かい。瓦面は明褐色を帯びる。	薩摩在番 E－1　表採
	9	表面にヘラによるナデ調整痕が残る赤瓦片である。内面に布目痕が見られる。	焼成は良好。胎土は細かい。瓦面は明褐色を帯びる。	鍛冶屋 E－8　Ⅱ層
	10	ある程度全形の推定できる唯一の赤瓦で、表面にヘラによる調整痕が、内面に布目痕が見られる。	焼成は良好。胎土は細かい。瓦面は茶褐色を帯びる。	薩摩在番 E－1　表採

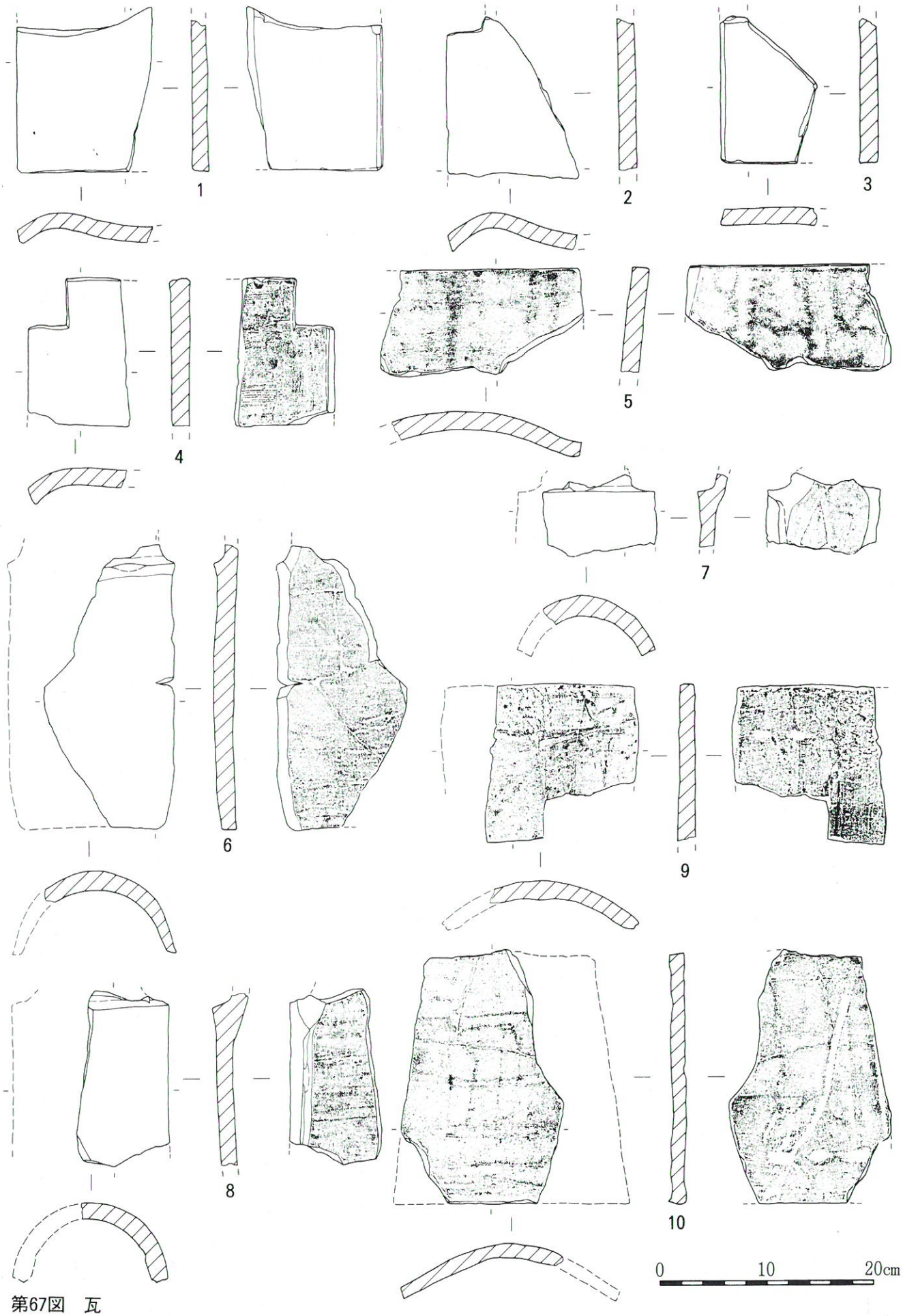
第23表　瓦出土状況表

		出土層	赤瓦 丸瓦	赤瓦 平瓦	赤瓦 不明	赤瓦 小計	灰色瓦 丸瓦	灰色瓦 平瓦	灰色瓦 不明	灰色瓦 小計	合計
Ⅰ地区	屋敷跡	表採									
		Ⅰ層	2	24	18	44		8		8	52
		Ⅱ層	5	46	24	75	1	2		3	78
		不明		8	1	9					9
	小計		7	78	43	128	1	10		11	139
	鍛冶跡	表採	1	2		3		1		1	4
		Ⅰ層	6	11		17		3		3	20
		Ⅱ層	7	10		17		2		2	19
		Ⅲ層									
		不明	(1)			1		1		1	2
	小計		15	23		38		7		7	45
Ⅱ地区	薩摩在番	表採									
		Ⅰ層	3	8		11		47		47	58
		Ⅱ層		3		3		12		12	15
		Ⅲ層									
		Ⅳ層									
		Ⅴ層									
		Ⅵ層									
		不明	1	4		5		8		8	13
	小計		4	15		19		67		67	86
合計			26	116	43	185	1	84		85	270

小　結

Ⅰ・Ⅱ地区ともに赤瓦は、殆どが小片であり大きめのものは数点見られる程度である。そのため丸瓦・平瓦の区別が厳しく、殆どを平瓦に分類したが、判別不明の瓦が多かった。祖納集落の南側には瓦窯跡遺跡が発見されており、赤瓦はそこで製作された可能性が考えられる。灰色瓦は、1674年に西村五郎兵衛によって発明されたいわゆる桟瓦と呼ばれるものである。生地は白っぽく細かいものが殆どで、泥質からなり、断面は波形を呈している。並桟瓦、切込み桟瓦に分類され、濃灰色と淡灰色があり、中には焼成不良と思われるものが数点確認された。

灰色瓦の類似資料が竹富島の民家に見られたが、その瓦は慶田城村内の屋敷から吹き替えのため竹富島に運ばれたことが確認されている。一度使用した瓦が再利用されたことは、瓦が当時貴重なものであったことを窺い知ることができる。瓦の一部が竹富島の喜宝院蒐集館に展示されている。その瓦（丸瓦・平瓦）には「摂津国日根郡田川村田中製作所」（現大阪）と刻印されており、桟瓦が明治の炭抗期に持ち込まれた可能性を示唆している。その桟瓦の多くが、Ⅱ地区の薩摩在番跡と推測される屋敷において、表採・出土していることは興味深い。



第67図　瓦

第14節　石　器

Ⅱ地区の調査では、くぼみ石、砥石、敲打石の３種類の石器と硯、滑石製品が出土した。以下それぞれの形態・特徴について記述する。

第24表　石器・石製品観察一覧

挿図番号		器種	出土地点	層	法量（cm、g） 長さ	幅	厚さ	重量	石質	観察事項
第69図・図版52	1	くぼみ石（敲打器）	D－5	Ⅳ	10.1	8.2	6.3	730	砂岩	全体形が俵形を呈する隅丸長方形状の石器である。完全形と考えられる。表面中央部に径約５㎜の浅い窪みがあり、上下・両側面も窪んでいる。下端に敲打のような使用痕が見られる。
	2	砥石	D－3	Ⅱ	9.1	6.2	3.4	260	微粒砂岩	砥石と判断される石器である。裏面に剥離面を残しているが、他面は丁寧な磨きである。平面形は逆バチ形で、横断面は半月形を呈する。側面は稜線が鮮明で、砥石と判断された使用痕が残る。下端部は二方向から加工され、鈍角な刃部状となる。
	3	敲打石	フチコ表採		12.3	6.6	4.7	590	微粒砂岩	敲打、あるいはくぼみ石と判断される石器である。平面形は長方形状の完形に近いものと考えられる。表面中央部には浅い窪みがあり、上下端部に敲打による使用痕が見られる。
	4	硯	表採		4.5	6.1	2.1	60	砂岩	墨受部の破損品である。裏目には浅い彫り込みが認められる。摺部への立ち上がりが急である。
第68図図版52		滑石製品	E－2	Ⅰ	2.9	0.6	0.6	10.2	滑石	棒状に加工された滑石である。上下両端を四方から削り、尖頭状となる。鉛筆的な使用が考えられるが用途不明である。

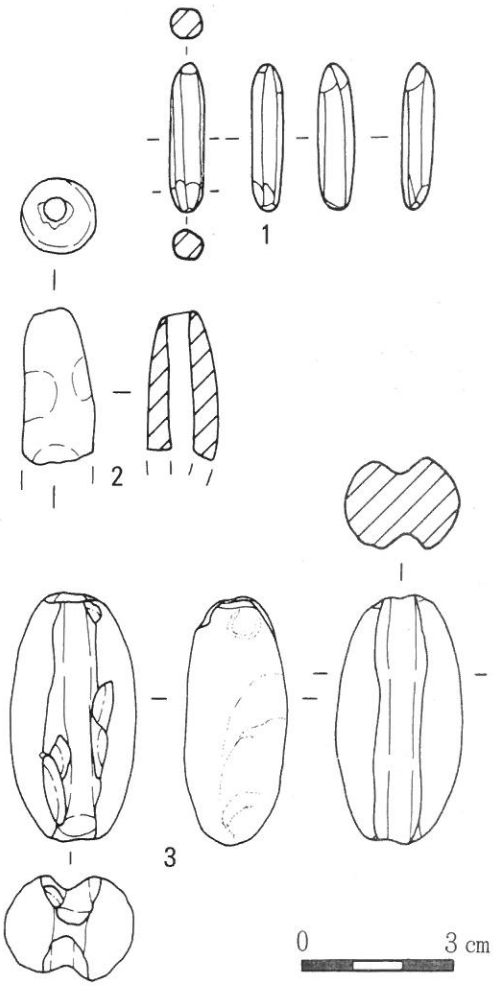
小　結

発掘によって得られた石器は、くぼみ石と砥石、滑石製品の３点である。滑石の棒状製品は県外からの移入で、グスク時代相当期に出土する例が多い。滑石製品は上下端部が削られ尖状形態の痕跡を残しているが、用途に関しては不明である。滑石は県内において、土器の胎土に混入された例が見られるが、今回の調査では滑石の混入した土器は確認出来なかった。滑石は県内では産出されず、その殆どが九州からの移入と考えられることから、往時の交易の広さを示す貴重な石材であると言えよう。

第15節　錘

Ⅱ地区でのみ錘が得られた。陶製、石製の２点である。第68図２は円筒を呈する陶錘で、長さは下半部分が欠損しているため不明である。残存状態の計測で幅1.4cm、現重量5.1ｇ、孔径は５㎜を測った。整形時のナデが明瞭に残り、全体のつくりが粗雑になっている。素地は橙褐色で細かい。上村遺跡（註１）でも陶製で１点、成屋遺跡（註２）で長さ４cm前後土製の錘が６点出土している。E－２Ⅰ層出土。

第68図３は、サンゴ石灰岩を用いた石製の錘である。楕円状で、紐かけ用の溝が約９㎜で縦位に走る。最大長５cm、幅2.5cm、重量21.7ｇを測った。両先端は若干磨耗しているが、全体の状態は良く、縦位の溝などから漁網錘として使用されたものであろう。D－５Ⅲ層より出土している。八重山地域では長方形、もしくは円形の偏平な石に孔を穿つもの、溝を有するものなどが見られる。

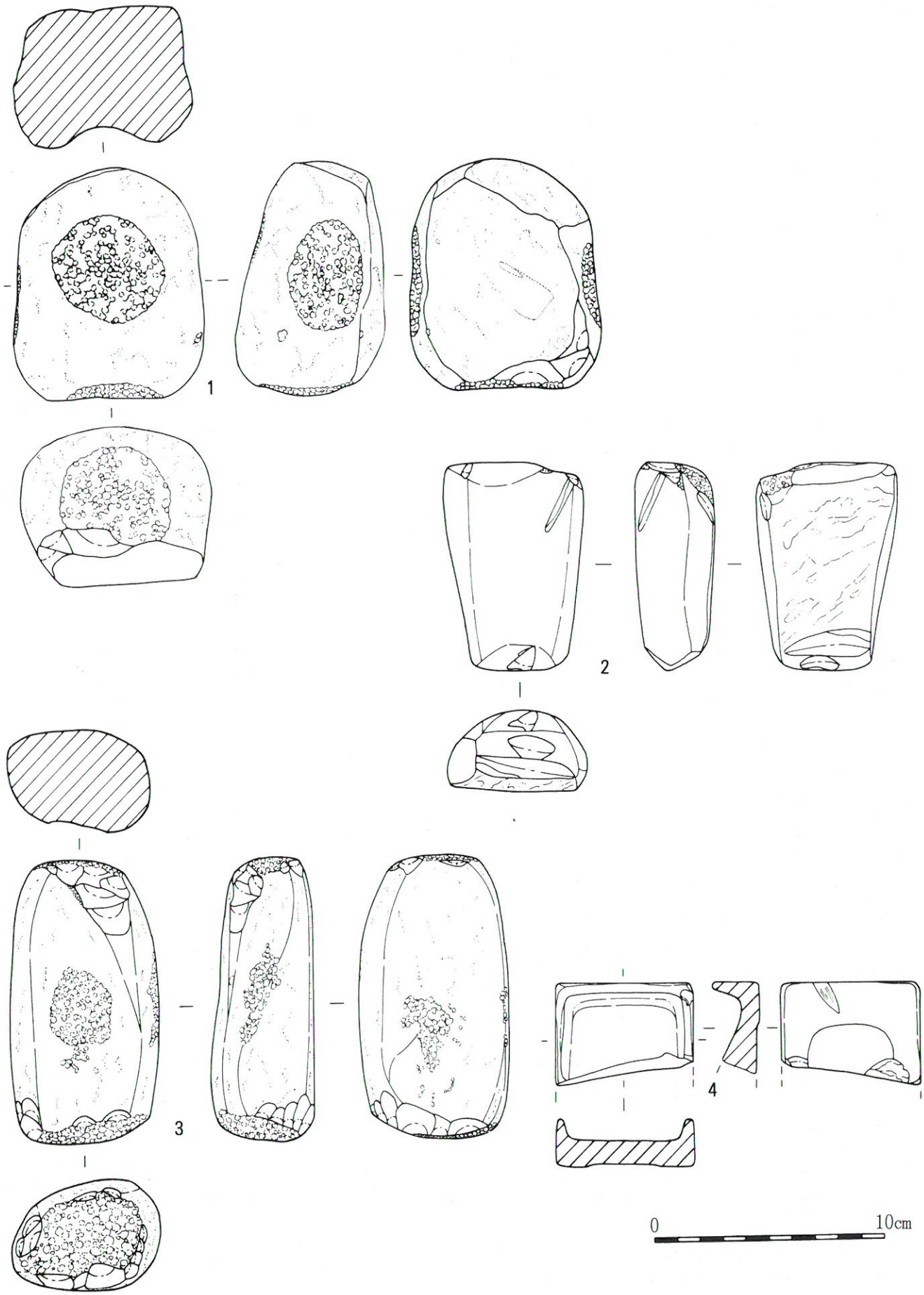


第68図　滑石製品・錘

註

註１　沖縄県教育委員会　『上村遺跡』　1991年

註２　青山学院大学史学研究室　『西表・成屋遺跡発掘調査概報』青山学院大学成屋遺跡調査団　1987年



第69図　石器・硯（Ⅱ地区）

第16節　鉄 製 品

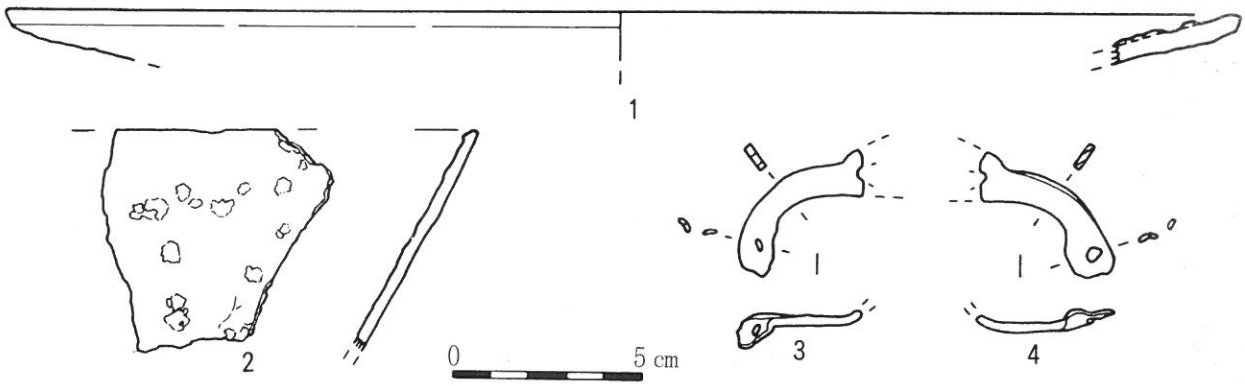
Ⅱ地区薩摩在番所跡では、Ⅰ地区同様良好な資料を欠くため、明確に製品として判別できる鉄鍋の資料を記載する。どちらも薩摩在番所跡南斜面からの表採品である。

第70図１は口径33cmを測った鉄鍋の口縁部である。５mmの厚さをもつ。口縁部の位置で屈曲し、大きく開く浅めの鍋である。内外面における錆の状況は若干異なるが全体的に残存状態は良好である。上村遺跡（註１）で、口径下３cmでくの字形に折れる鉄鍋の資料があるが、形態状は似るものの口径、深さの点で異なる。現重量60.2ｇを測る。第70図２も鉄鍋の口縁部破片である。３mmの厚さで、１よりはやや深めであろう。口唇部が内側に傾き、口縁形態は直口的に開く。現重量40.8ｇ。

註１　『上村遺跡－重要遺跡確認調査報告－』「沖縄県文化財調査報告書第98集」沖縄県教育委員会　1991年３月

第17節　青銅製品

Ⅱ地区での青銅製品の出土は少なく、４点得られた。いずれも用途不明品の製品である。第70図３、４とも形状を同じくするもので直接、接合できないが両者の間に装飾部をもって一製品となっていた可能性が強い。３、４どちらも孔径は４mmで、重量は３が3.5ｇ、４は3.4ｇを測った。孔の部分で反っていることからこの部分ではりつけ、装飾に用いられたのではないか。D－５Ⅱ層下部出土。



第70図　鉄製品・青銅製品

第18節　円盤状製品

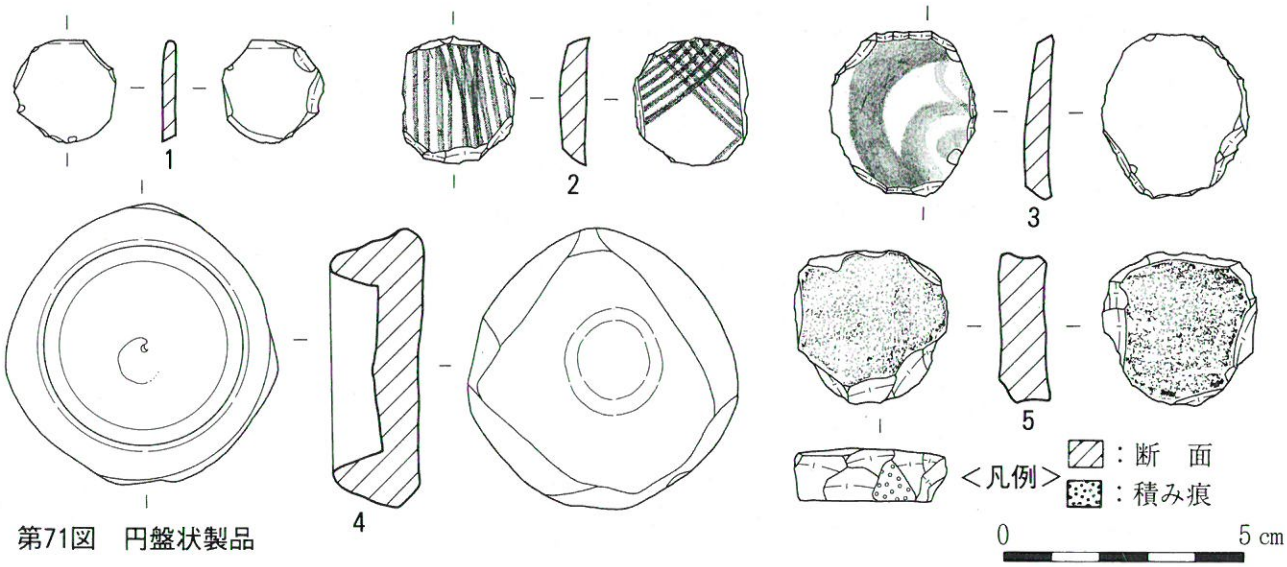
本製品は、磁器、陶器、瓦などを円盤状に打割調整した二次製品である。Ⅱ地区である薩摩在藩所跡では、全部で５点得られている（第71図）。これは、Ⅰ地区の鍛冶屋跡、翁屋敷跡と比較すると少ない出土量である。

素材の内訳は、土器１点、青磁１点、染付１点、本土産磁器２点である。こちらの本土産磁器は、２点とも現代製である。

部位別では、胴部３点、底部１点、口縁部１点である。この口縁部利用は、Ⅰ・Ⅱ地区合わせてもこの１点だけである。個々の詳細については、第25表に示している。

第25表　円盤状製品観察一覧

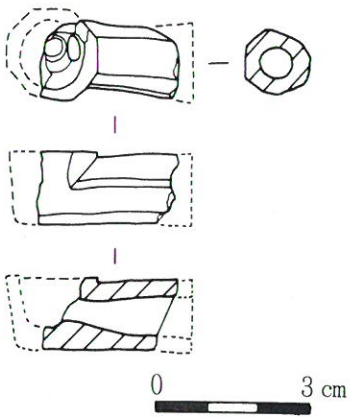
挿図図版	番号	素材	長径	短径	厚さ	重量	器形	部位	完／破／未	形態	剥離方向	断面	釉色	観察事項	出土地
第71図 図版53	1	本土産磁器	2.12	2.1	0.3	1.8	碗	口縁部	完	円	外→内	湾曲	表裏：白色	剥離は比較的丁寧。口縁部を利用し、成形されている。白磁。時代は明治以後。	薩摩在藩所跡 C－３　Ⅱ溝
第71図 図版53	2		2.38	－	0.55	6	皿	胴部	破	円	内→外	湾曲	表裏：白色	破損品。剥離は比較的丁寧。表裏とも青釉で櫛目状の模様が施されている。時代は明治以後。	薩摩在藩所跡 D－５　Ⅱ
第71図 図版53	3	染付	3.4	3.1	0.45	7.6	碗	胴部	完	楕円	両面	湾曲	表裏：青白色	剥離は比較的丁寧。表に丸模様。中国産（福建周辺）、18C。	薩摩在藩所跡 E－１　Ⅰ
第71図 図版53	4	青磁	5.8	5.8	0.9	67.3	碗	底部	完	不定形	外→内	凹	摩滅のため不明	剥離は粗雑。中国産、15C～16C前半？	薩摩在藩所跡 D－５　Ⅱ
第71図 図版53	5	土器	3.2	3.1	0.95	12	不明	胴部	完	不定形	外→内	平		剥離は比較的丁寧。トーン部分は剥離や研磨によるものではなく、土器製作時の積み痕と考えられる。	薩摩在藩所跡 D－５　Ⅳ 黒色土



第71図　円盤状製品

第19節　煙　　管

Ⅱ地区では雁首は１点のみが出土した。第72図は火皿が破損しており、羅宇接続部は面取りによって、十角形を呈する。素地は小豆色で、外面に自然釉が掛かる。現重量4.9ｇでＤ－５Ⅱ層、撹乱層からの出土である。



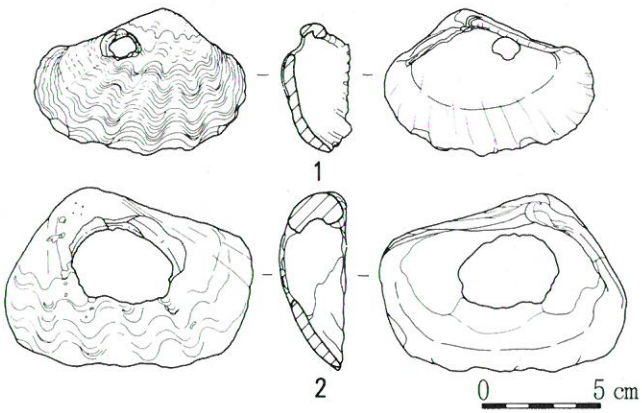
第72図　煙　管

第20節　貝 製 品

貝製品は二枚貝有孔製品が２点得られている。撹乱層からの出土であるがヒメジャコ製の貝錘と考えられる資料で、それぞれの特徴等は以下の通りである。

第73図１は、ヒメジャコの右殻を利用した資料で、大きさは殻高5.4㎝、殻長9.0㎝、重量49.5ｇと、同図２に比べるとやや小振りである。孔は短径１㎝、長径1.2㎝と小さめで楕円形を呈し、後背縁近くに内側から穿たれている。外面、孔の周囲と殻頂部分が若干摩滅している。Ｄ－５Ⅱ層より出土。

第73図２は、ヒメジャコの左殻を利用しており、大きさは殻高7.4㎝、殻長10.4㎝、重量92.5ｇと１よりは若干大きく殻も厚い。孔はやや殻頂より殻長の真ん中に穿たれ、楕円形で短径2.9㎝、長径4.4㎝を測るが、縁がだいぶ摩耗している。貝の内側には石灰が点々と付着している。Ｄ－５Ⅱ層より出土。



第73図　貝 製 品

第21節　貝　　類

本遺跡では、巻貝25科76種、一枚貝３科３種、二枚貝14科31種、計42科110種の貝類が出土している。これらの出土状況については、第26表ａ・ｂに示している。なお、図版54～56に掲載した貝類の種名については、その写真番号が第26表ａ・ｂの番号と一致しているため、それを参照して頂きたい。また、集計方法及び、最少個体数の算出方法については、第26表に示している。

地区別の出土状況をみると、Ⅰ地区は831個体（78.8％）で、その内訳は鍛冶屋跡707個体（67.0％）、翁屋敷跡124個体（11.8％）、Ⅱ地区（薩摩在藩所跡）は223個体（21.2％）であり、大半が鍛冶屋跡からの出土である。

層別の出土状況をみると、鍛冶屋跡ではⅠ層が最も多いが、これは隣接する翁屋敷跡が耕作地として使用されていた時の投げ込みによるもので、それに対応して翁屋敷跡からの出土量は少ない。また、薩摩在藩所跡では、殆どが攪乱層からの出土である。

Ⅰ・Ⅱ地区とも、巻貝はマガキガイC.luhuanus（LINNAEUS）139個体、クモガイL.lambis lambis（LINNAEUS）87個体が主体となっており、全体の21.4%である。ついで多いのがコオニコブシV.turbinellum（LINNAEUS）の82個体であり、いずれも外洋・サンゴ域に棲息する貝類である。二枚貝ではシレナシジミCoaxans（GMELIN）203個体、イソハマグリA.striata（GMELIN）172個体が主体で全体の35.6%である。シレナシジミは河口干潟・マングローブ域、イソハマグリは外洋・サンゴ域に棲息するもので、先に挙げた2種も含め、いずれも食用可能である（註1）。また、これら主体となっている貝類は上村遺跡（註2）と一致しており、出土した貝類の構成をみても類似している。これを踏まえたうえに、それらの棲息地から見ても、遺跡の立地する周辺の海域（註3）を中心に採集したものと考えられる。

また、ここでは出土量の多かったシレナシジミとマガキガイについて計測を試みた（第27・28表）。計測部位はシレナシジミが殻長、マガキガイが殻径・殻長である。計測方法については、全体的に出土量が少なかったため、完形ではなくても計測部位が破損していなければ計測を行っている。

シレナシジミ：殻長の大きさは4.0～12.0cmの範囲であり、主体となるのは5.0～9.0cm大である。地域は異なるものの、古我地原貝塚（註4）と比較すると（第74図）、古我地原貝塚では、殻長3.0～5.0cm大でやや小さめの貝が主体である。また、チヂフチャー洞穴遺跡（註5）で主体となるのは殻長5.0～6.0cm大で、二者と比較しても本遺跡の方が大きい。

マガキガイ：殻径2.7～3.8cmの大きさの範囲で、主体は3.0～3.3cm大である。マガキガイの大きさについては、現生種の報告例がある（註6）。ここでは殻長についての報告があり、同じ先島では宮古島の資料が紹介されている。新里産は3.57～5.11cm大で平均が4.56cm、また、多良間産では3.31～5.32cm大で平均が4.19cmである。本遺跡の殻長については、3.5～6.6cm大で平均は5.04cmとなり、現生種のものより大きめである。また、遺跡から出土している種についての報告例に平敷屋トウバル遺跡（註7）があり、こちらの殻長の平均は5.3cmで、比較すると本遺跡はやや小さめである。

最後に、本遺跡では貝製品の出土は僅か3点であり、シレナシジミは貝刃や民具等に利用されるが製品は見られず、出土した貝の殆どが食用目的のみで採集されたものと推測される。また、時代が下るにつれての貝の小型化等については島袋氏が触れており（註7）、今後の資料の増加に期待したい。

註

註1　白井　祥平　『原色沖縄海中動物生態図鑑【改訂版】』　沖縄教育出版　1977年6月

註2　『上村遺跡』　沖縄県教育委員会　1991年3月

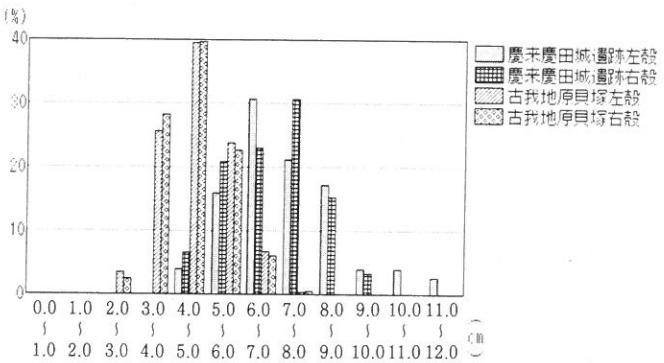
註3　『西表の潮間帯－1978 西表の潮間帯現状調査報告』　沖縄県・自然保護課　1980年3月

註4　『古我地原貝塚（本文編）』　沖縄県教育委員会　1978年12月

註5　『チヂフチャー洞穴遺跡』　浦添市教育委員会　1988年3月

註6　山口　正士　「サンゴ礁の貝類資源【3】マガキガイ」『海洋と生物91』 vol.16 no.2 1994年

註7　『平敷屋トウバル遺跡』　沖縄県教育委員会　1996年3月



第74図　シレナシジミ大きさ殻長別構成比

第26表　貝類出土状況　巻貝（ａ）

巻貝			出土地層序	鍛冶屋跡 表採 完形	殻頂	破片	鍛冶屋跡 Ⅰ層 完形	殻頂	破片	鍛冶屋跡 Ⅱ層 完形	殻頂	破片	鍛冶屋跡 Ⅲ層 完形	殻頂	破片	鍛冶屋跡 小計 完形	殻頂	破片	個体数	鉄屋敷跡 Ⅰ層 完形	殻頂	破片	鉄屋敷跡 Ⅱ層 完形	殻頂	破片	鉄屋敷跡 Ⅲ層 完形	殻頂	破片	鉄屋敷跡 不明 完形	殻頂	破片	鉄屋敷跡 小計 完形	殻頂	破片	個体数	薩摩在番跡 表採 完形	殻頂	破片	薩摩在番跡 Ⅰ層 完形	殻頂	破片	薩摩在番跡 Ⅱ層 完形	殻頂	破片	薩摩在番跡 Ⅲ層 完形	殻頂	破片	薩摩在番跡 不明 完形	殻頂	破片	薩摩在番跡 小計 完形	殻頂	破片	個体数
1		ﾊﾞｲｱﾞｳﾆ	E. eburnea(DESHAYES)													0	0	0					1									0	1	0	1																		0	0	0	0
2	ﾌﾀﾉﾊｶﾞｲ科	ﾍﾞｯｺｳｶﾞｲ	C. grata(GOULD)													0	0	0														0	0	0							1										0	0	1	△
3	(Family PATELLIDAE)	ﾌﾀﾉﾊｶﾞｲ科不明	Gen. et sp. indet.													0	0	0														0	0	0							1										0	0	1	
4	ｴｾﾞﾉｶｻｶﾞｲ科 (Family ACMAEIDAE)	ｴｾﾞﾉｶｻｶﾞｲ科不明	Gen. et sp. indet.													0	0	0														0	0	0					1													1	0	0	1
5		ｵｷﾅﾜｲｼﾀﾞﾀﾐ	M. (M.)labio(LINNAEUS)	Ⅱ-1-b				1								0	1	0	1	1												1	0	0	1																0	0	0	
6		ﾆｼｷｳｽﾞ	T. (T.)maculatus	Ⅰ-2-a												0	0	0														0	0	0					1													1	0	0	1
7	ﾆｼｷｳｽﾞ科	ﾑﾗｻｷｳｽﾞ	T. (T.)stellatus(GMELIN)	Ⅰ-3-a												0	0	0														0	0	0			1	1													1	1	0	2
8	(Family TROCHIDAE)	ｷﾞﾝﾀｶﾊﾏ	Te. (Te.)pyramis(BORN)	Ⅰ-4-a				3	8		2		1	1	7	1	6	15	7													0	0	0						1	4			1							0	1	5	1
9		ｵﾗﾁﾊﾞﾃｲﾗ	T. (Tectus)niloticus	Ⅰ-4-a	1	1	5	9	26	4	4	18	1	8	15	6	22	64	28			8			6							0	0	14	△			3		1			1	5		1			1				1	3	8	4
10		ﾆｼｷｳｽﾞ科不明	Gen. et sp. indet.	Ⅰ-2-a		1	1		2		2	1	2	1	1	2	4	5	6						2							0	0	2	△					2											0	2	0	2
11	ｶﾀﾍﾞｶﾞｲ科 (Family ANGARIIDAE)	ｶﾀﾍﾞｶﾞｲ	A. atrata(REEVE)					1								0	1	0	1													0	0	0																	0	0	0	
12		ﾁｮｳｾﾝｷﾞｴ	T. (M.)argyrostomus argyrostomus(LINNAEUS)	Ⅰ-3-a			1			1	1	1		3	1	1	4	3	5		1		1									0	1	1	1						2	1			1						0	2	2	2
13		ﾁｮｳｾﾝｷﾞｴの蓋	(Operculum)	Ⅰ-3-a				1		1						2	0	0	2	1		2	10		1	1						12	0	3	12				2											4	0	0	4
14	ﾁｮｳﾃﾝｷﾞｴ科	ｶﾝｷﾞｸの蓋	L. c. granurata(GMELIN)(Operculum)	Ⅱ-1-b												0	0	0														0	0	0					1													1	0	0	1
15	(Family TURBINIDAE)	ｻｺｳｶﾞｲ	T. (L.)marmoratus(LINNAEUS)	Ⅰ-4-a			2		3		1	8		5	36	0	6	49	6			2			7			1				0	0	10	△			2			2										0	0	4	△
16		ｻｺｳｶﾞｲの蓋	(Operculum)	Ⅰ-4-a				1	2		1			1		3	2	0	5						1	1						1	0	1	1																1	0	0	1
17		ｵｵﾍﾞﾂｽｶﾞｲ	L. cinerea(BORN)					2	1							2	1	0	3													0	0	0																	0	0	0	
18	ﾃﾞﾏｵﾌﾞﾈ科	ﾌﾄｽｼﾞﾌﾈｶﾞｲ	Ne. (R.)costata (GMELIN)	Ⅰ-1-a												0	0	0														0	0	0							1										0	0	1	△
19	(Family NERITIIDAE)	ﾃﾞﾏｵﾌﾞﾈ	Ne. (T.)albicilla (LINNAEUS)	Ⅰ-1-b				1		1		4	1			3	0	4	3	2												2	0	0	2					1		1				1					2	0	1	2
20		ﾆｼﾐﾃﾞﾏｵﾌﾞﾈ	Ne. (A.)polita (LINNAEUS)	Ⅰ-0-c					1		1					0	1	1	1		1	1										0	1	1	1																0	0	0	0
21	ｵﾆﾉﾂﾉｶﾞｲ科	ｵﾆﾉﾂﾉｶﾞｲ	C. nodolosum(BRUGUIERE)	Ⅰ-2-c	1		1	4	1	3		3	4	1		6	6	4	14	10		2	3		1	5						0	3	8	3			1			1			1	1	1				2	2	2	3	4
22	(Family CERITHIIDAE)	ｺｵﾆﾉﾂﾉｶﾞｲ	C. columna(SOWERBY)	Ⅰ-2-a												0	0	0				1										0	0	1	△											1					0	1	0	1
23	ｳﾐﾆﾅ科	ｶﾜﾌｲｶﾞｲ	Ce. djadjariensis	Ⅲ-1-c					4			1	8			0	5	8	5			1										0	0	1	△													1		1	3		0	1	4	1
24	(Family POTAMIDIDAE)	ｾﾝｺﾞﾝｶﾞｲ	T. telescopium(LINNAEUS)	Ⅲ-0-c				1	1	1	1	1				2	2	1	4													0	0	0																1	0	0	1	△
25		ｲﾎﾞｳﾐﾆﾅ	B. zonalis(BRUGUIERE)	Ⅲ-1-c			2									0	0	2	△													0	0	0																	0	0	0	
26		ﾑﾗｻｷﾋﾄﾖｶﾞｲ	C. mutabilis(SWAINSON)	Ⅰ-2-c				1								1	0	0	1													0	0	0																	0	0	0	
27		ﾏｶﾞﾗｶﾞｲ	C. luhuanus(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c	1			4	15	3	4	15	10	7	36	16	16	66	29	82	1	6	7	2	22	55		1	3		2	3	29	67	32	1	3		3	5	6	2	3	3				6	2	1	12	13	10	25
28	ﾌﾗﾞﾎﾗ科	ｵｵﾂﾞﾏｶﾞﾗｶﾞｲ	G. glibberulus gibbosus(RODING)	Ⅰ-2-c					1						1		0	2	0	2												0	0	0						1		1	3	1							1	4	1	5
29	(Family STROMBIDAE)	ｽｲｼｮｳｶﾞｲ	L. c. turturella(RODING)	Ⅱ-2-c		2			1		1		1		1		1	4	1	5												0	0	0																	0	0	0	
30		ｸﾁｶﾞｲ	L. lambis lambis(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c		13	9	6	14	43		21	53	2	18	36	8	66	141	74		1	36			42			2		2	0	1	82	1		8	4		3	17		1	14					1	0	12	36	12
31		ｽｲｼﾞｶﾞｲ	H. chiraga(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c					3				1			1	0	3	2	3												0	0	0											1					0	0	1	△
32		ﾊﾏｼﾞｮｳﾀﾞｶﾗ	M. (M.)mauritiana(LINNAEUS)	Ⅰ-1-a					1								0	1	0	1												0	0	0					1												0	0	2	△
33		ﾔｸｼﾏﾀﾞｶﾗ	M. (A.)arabica asiatica(SCHIDER)	Ⅰ-2-a				1							1		1	1	0	2						2						0	0	2	△					1											0	2	0	2
34		ﾍﾅﾀﾙﾕｷ	R. c. mikado(SCHILDER)	Ⅰ-3-a					3			1					0	4	0	4												0	0	0						1		1	3	1							1	4	1	5
35	ﾀｶﾗｶﾞｲ科	ﾊﾅﾋﾞﾗﾀﾞｶﾗ	M. (O.)annulus(LINNAEUS)	Ⅰ-1-a													0	0	0							1						0	0	1	△																0	0	0	0
36	(Family CYPRAEIDAE)	ﾖｼﾀﾞｶﾗ	C. tigris(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c			1	1	3	2		1			1		1	5	3	6			1						1			0	0	2	△			1		1	1	6		1							1	3	6	4
37		ﾋﾒﾖｼﾀﾞｶﾗ	L. lynx(LINNAEUS)	Ⅰ-2-a													0	0	0													0	0	0										1		1					1	0	1	1
38		ｵｵﾆｽｽﾀ	P. (M.)vitellus(LINNAEUS)	Ⅰ-2-a						1							0	0	1	△					1							0	1	0	1								1		1					1	0	1	1
39		ﾀｶﾗｶﾞｲ科不明	Gen. et sp. indet.														0	0	0			2				1			1			0	0	4	△																0	0	0	0
40	ﾀﾏｶﾞｲ科 (Family NATICIDAE)	ﾓｽｶﾞｲ	M. melanostoma(GMERIN)	i-2-c													0	0	0													0	0	0							1										0	0	1	△
41	ﾔﾂｼﾛｶﾞｲ科 (Family TONNIDAE)	ﾔﾂｼﾛｶﾞｲ科不明	Gen. et sp. indet.							1							0	0	1	△												0	0	0																	0	0	0	0
42	ﾄｳｶﾑﾘ科	ﾄｳｶﾑﾘ	C. cornuta(LINNAEUS)								1						1	0	0	1												0	0	0																	0	0	0	0
43	(Family CASSIDAE)	ｾﾐｶﾞﾙ	C. erinaceus(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c					1								0	1	0	1												0	0	0																	0	0	0	0
44	ｱｶｶﾞﾗ亜科 (Subfamily ARGOBUCCININAE)	ｵｵﾌｼﾞｶﾞｲ	C. tritonis(LINNAEUS)	Ⅰ-4-a			1		1	2			1	1			1	1	4	2												0	0	0																	0	0	0	0
45	ｵﾆﾆｼ科 (Family BURSIDAE)	ｵﾆﾆｼ	B. b. dunkeri(KIRA)	Ⅰ-3-a							1						1	0	0	1												0	0	0							2			2							0	0	4	△
46		ｶﾞﾝﾋﾞﾗﾎﾞﾗ	C. (C.)brunneus(LINK)	Ⅰ-4-a								1		1	1		1	2	0	3												0	0	0																	0	0	0	0
47	ﾌｸｲﾎﾞｶﾞｲ科	ﾌｸｲﾎﾞﾚｲｼ	D. (R.)rubusidaeus(RODING)	Ⅰ-3-a					2	1	2	1	2	7	2		9	5	3	14			1	2								2	0	1	2					4	1			1						4	2	0	6
48	(Family MURICIDAE)	ﾂﾌﾚｲｼ	M. tuberosa(RODING)	Ⅰ-3-a										6	2	1	6	2	1	8						1			1			0	0	2	△					1	1		1	1						0	2	2	2
49		ｼﾗﾅﾐﾎﾞｲ	T. (S.)armigera(LINK)	Ⅰ-3-a				1			2				1		3	1	0	4												0	0	0																	0	0	0	0
50		ﾌｸｲﾎﾞｶﾞｲ科不明	Gen. et sp. indet.														0	0	0													0	0	0											1					0	0	1	△
51	ｵｷﾅﾜﾚﾖｺﾊﾞｲ科	ｵｷﾅﾜﾚﾖｺﾊﾞｲ	N. arcularia(LINNAEUS)														0	0	0													0	0	0																	1	0	0	1
52	(Family NASSARIIDAE)	ｺﾌﾞﾑｼｶ	P. globosus(QUOY & GAIMARD)	Ⅱ-2-c													0	0	0													0	0	0										1						0	1	0	1
53		ｲﾄﾏｷﾎﾞﾗ	P. trapezium(LINNAEUS)	Ⅰ-2-a							1			1			2	0	0	2												0	0	0						1											0	1	0	1
54	ﾄﾏｷﾎﾞﾗ科	ﾏﾙﾆｼ	L. smaragdula(LINNAEUS)	Ⅰ-3-a									3			1	0	0	4	△			2									0	0	2	△																0	0	0	
55	(Family FASCIOLARIIDAE)	ｻﾄﾋﾞﾎﾞﾗ	F. nicobaricus(RODING)	Ⅰ-2-c													0	0	0											1		0	0	0																	0	0	1	△
56		ﾌﾅﾏｷﾋﾞﾄｷ	La. belcheri(REEVE)														0	0	0													0	0	0																	1	0	0	1
57	ﾏｸﾗｶﾞｲ科 (Family OLIVIDAE)	ﾏｸﾗｶﾞｲ科不明	Gen. et sp. indet.										1				0	0	1	△												0	0	0																	0	0	0	
58	ｵﾆｺﾌﾞｼｶﾞｲ科	ｵﾆｺﾌﾞｼｶﾞｲ	V. ceramicum(LINNAEUS)	Ⅰ-3-a	1			3		3	1	1			1	2	5	2	5	7			1			1						0	0	2	△	1				2				1						1	2	1	3
59	(Family VASIDAE)	ｺｵﾆｺﾌﾞｼｶﾞｲ	V. turbinellum(LINNAEUS)	Ⅰ-3-a			1	8	5	3	6	9	1	17	3	5	31	17	10	48	6	3	5	5	4	7			1			11	7	13	18	4			2	5	4	2	2	1	1				9	7	5	16
60		ｸﾛﾐﾅﾐｶﾞｲ	C. m. bandanus(HWASS in BRUGUIERE)	Ⅰ-2-c													0	0	0													0	0	0								2									2	0	0	2
61		ｸﾛｵﾀﾞﾒﾓﾄﾞｷ	L. eburneus(HWASS)	Ⅰ-2-c													0	0	0													0	0	0				1				1	1								1	2	0	3
62		ｱﾝｺﾞﾝｸﾛｵﾀﾞﾒ	L. litteratus(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c			3		1	4		6	2			6	0	7	15	7						2						0	0	2	△									1					0	0	1	△
63		ｸﾛﾌﾋﾄﾞﾞｷ	L. leopardus(ROEDING)	Ⅰ-2-c		1	1			1			2			1	0	1	5	1		1	1		7	5			1			0	8	7	8		1			1										0	2	0	2
64		ﾐﾄﾞﾘﾐﾅｼ	Rh. imperialis(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c				1				1				1	1	1	1	2												0	0	0																	0	0	0	
65		ﾏﾀﾞﾗｲﾓ	V. ebraeus(LINNAEUS)	Ⅰ-1-a													0	0	0				2									2	0	0	2							1									0	0	1	△
66		ﾀﾁｶﾞﾀｲﾓ	V. fulgetrum(SOWERBY)	Ⅰ-1-a													0	0	0			1			1							0	2	0	2																1	1	0	2
67	ｲﾓｶﾞｲ科	ｱｶｼﾏﾐﾅｼ	L. generalis(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c				1				1					1	1	0	2												0	0	0																	0	0	0	
68	(Family CONIDAE)	ｶﾊﾞﾐﾅｼ	R. vexillum(GMELIN)	Ⅰ-2-c					1								0	1	0	1												0	0	0																	0	0	0	
69		ﾔﾏﾄﾞｼｮﾀﾞﾘｲﾓ	R. miles(LINNAEUS)	Ⅰ-2-a								2	2		1	2	0	3	4	3		2	3			3		1	2			0	3	8	3									1					0	0	1	△
70		ｲﾎﾞｶﾊﾞﾍﾞｲﾓ	V. distans(HWASS)	Ⅰ-2-c													0	0	0					1		1						1	0	1	1															0	0	0	
71		ｲﾎﾞｼｬﾏｲﾓ	V. lividus(HWASS)	Ⅰ-2-a													0	0	0					3		1						3	0	1	3					1										0	1	0	1
72		ﾆｼﾓﾐﾅｼ	De. striatus(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c									1				0	0	1	△												0	0	0						1										0	1	0	1
73		ｷﾏﾀｶﾞﾐﾞ	V. flavidus(LAMARCK)	Ⅰ-2-a				3	1								3	1	0	4					1	1						1	1	0	2															0	0	0	
74		ｲﾓｶﾞｲ科不明	Gen. et sp. indet.	Ⅰ-2		1			2	3			5			1	0	3	9	3			3			4						0	0	7	△			1			2		2	11							0	2	14	2
75	ﾀｹﾌｼｶﾞｲ科 (Family TEREBRIDAE)	ﾍﾞﾆﾀｸ	S. dimidiata(LINNAEUS)	Ⅰ-2-c				1									1	0	0	1												0	0	0																	0	0	0	
76	ﾌﾈﾒｶﾞｲ科 (Family BULLIDAE)	ﾌﾈﾒｶﾞｲ	B. vernicosa(GOULD)	Ⅰ-2-c													0	0	0													0	0	0								1									1	0	0	1
77	ｵｶﾐﾐｶﾞｲ科 (Family ELLOBIIDAE)	ﾏﾀﾞﾗﾄﾗｼｲﾉﾐｶﾞｲ	P. pantherina(A. ADAMS)														0	0	0					1								1	0	0	1										1					0	0	1	△
78	ﾅﾝﾊﾟﾝﾏｲﾏｲ科 (Family CAMAENIDAE)	ｼｭﾀﾏｲﾏｲ	S. (S.)mercatoria mercatoria(PFEIFFER)	V													0	0	0			1										0	0	1	△																0	0	0	
79	ｵﾅｼﾞﾏｲﾏｲ科 (Family BRADYBAENIDAE)	ｵｷﾅﾜｸｽｶﾜﾏｲﾏｲ	A. despecta despecta(SOWERBY)	V-9			1									5	0	0	1	△						2						0	0	2	△							3	3	7							3	3	7	6
80	巻貝不明									1			3			5	0	0	9	△						7						0	0	7	△			1						2					0	0	3	△
小計					4	19	29	41	78	112	28	76	132	49	87	144	122	260	417		11	17	82	27	39	157	2	2	13	0	0	4	40	58	256		7	16	12	13	31	47	26	28	70	1	1	0	8	2	4	55	78	133	
個体数						23			119			104			136				382		28			66			4			△				98		23			44			54			2			10			133	

注 個体数：二枚貝は、右殻、左殻のそれぞれの完形と殻頂を合計し多いほうを個体数とした。（二枚貝の各地区の小計と個体数は必ずしも一致しない。）
巻貝は、完形と殻頂を合計し個体数とした。

第26表　貝類出土状況　二枚貝（ｂ）

二枚貝			出土地層位	鍛冶屋跡 表採 完形 L	表採 殻頂 L	表採 殻頂 R	表採 破片	Ⅰ層 完形 L	Ⅰ層 完形 R	Ⅰ層 殻頂 L	Ⅰ層 殻頂 R	Ⅰ層 破片	Ⅱ層 完形 L	Ⅱ層 完形 R	Ⅱ層 殻頂 L	Ⅱ層 殻頂 R	Ⅱ層 破片	Ⅲ層 完形 L	Ⅲ層 完形 R	Ⅲ層 殻頂 L	Ⅲ層 殻頂 R	Ⅲ層 破片	小計 完形 L	小計 完形 R	小計 殻頂 L	小計 殻頂 R	小計 破片	個体数
1	ﾌｼｶﾞｲ科	ｴｾﾞｶﾞｲ																					0	0	0	0	0	
2	(Family ARCIDAE)	ﾓﾓｲﾛｾﾞﾐﾙｶﾞｲ	Ⅱ-2-c																				0	0	0	0	0	
3	ｳｸﾞｲｽｶﾞｲ科	ｸﾛﾁｮｳｶﾞｲ																					0	0	0	0	0	
4	(Family PTERIIDAE)	ﾐﾔｼﾞﾛｳｶﾞｲ	Ⅰ-1-a									1											0	0	0	1	0	1
5	ｳﾐｷﾞｸ科	ﾉﾉｶﾞｲ	Ⅰ-2-a																				0	0	0	0	0	
6	(Family SPONDYLIDAE)	ﾉﾉｶﾞｲの一種	Ⅰ-2-a		2				1			1											1	2	0	1	0	3
7	ｲﾀﾎﾞｶﾞﾗﾐ科	ﾆｾﾏｶﾞﾗﾐ	Ⅱ-1-a																				0	0	0	0	0	
	(Family OSTREIDAE)																											
8	ﾂﾂｶﾞｲ科	ｳﾗﾋﾒﾂﾂｶﾞｲ																					0	0	1	0	4	
	(Family LUCINIDAE)		Ⅱ-2-c																									
9	カゴﾞｶﾞｲ科	カゴﾞｶﾞｲ																					0	0	0	0	0	
	(Family FIMBRIIDAE)		Ⅰ-2-c																									
10	キヌﾀﾞﾚ科	ﾅｲﾄｳｶﾞｲ																					0	0	0	0	0	
11	(Family CHAMIDAE)	キヌﾀﾞﾚｶﾞｲの一種	Ⅰ-2-a																				0	0	0	0	0	
12	ｻﾞﾙｶﾞｲ科	ﾓﾛｺｷｭｳｻﾞﾙｶﾞｲ											1										0	0	0	0	0	1
13	(Family CARDIIDAE)	カﾗﾌﾈｶﾞｲ	Ⅱ-2-c															1					0	1	0	0	0	1
14		ｼﾅﾉﾏﾒ	Ⅰ-2-a							1		1	1				2		1			8	0	2	0	1	11	3
15	ｼｬｺｶﾞｲ科	ｼｬｺﾌﾞｸ	Ⅰ-2-c						1	1		2	3								1	3	1	0	0	3	7	3
16	(Family TRIDACNIDAE)	ｾﾋﾞｼｬｺ	Ⅰ-2-c							1							6	1		1		7	1	0	1	0	14	2
17		ﾓﾀﾞｼｬｺ	Ⅰ-2-a	1					9	2	1	1	1	19	1	1	3	1	15	1		1	5	5	2	5	2	48	9
18		ｼｬｺｶﾞｲ科不明	Ⅰ-2																				0	0	0	0	0	
19	ﾏﾃﾞﾀｴﾏｽｵｳｶﾞｲ科	ｲﾌﾊﾏｸﾞﾘ	Ⅰ-1-c	2	6	4	2	1	22	26	22	36		5	13	9	27	30	10	8	9	5	3		45	50	58	71	16	123
	(Family MESODESMATIDAE)																													
20	ﾆｯｺｳｶﾞｲ科	ﾓﾓｲﾛｷｭｳｼﾗﾄﾘ	Ⅱ-1-c																						0	0	0	0	0	
21	(Family TELLINIDAE)	ｻｻﾉﾊｶﾞﾗ	Ⅰ-2-c																1						0	0	0	1	1	△
22		ﾋﾀﾞﾘﾐｽﾞﾗｶﾞｲ	Ⅰ-2-c																		3				0	0	0	0	0	
23	ｼｵｻｻﾞﾅﾐ科	ﾓﾓｲﾛｷｭｳﾏｽｵｳｶﾞｲ	Ⅱ-1-c						1			1	1	4					1						0	1	1	6	1
	(Family PSAMMOBIIDAE)																													
24	ｼﾞｭﾝｺﾞﾐ科	ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ																												
	(Family CORBICULIDAE)		Ⅲ-0-c	4	4	5	11	32	36	18	34	35		139	18	18	20	29	101	9	14	25	23	37	67	54	84	98	309	169
25		ﾌﾗｽﾉﾉｶﾞｲ																							0	0	0	0	0	
26		ｽﾉﾒｶﾞｲ	Ⅱ-1-c											4					1					1	0	0	0	0	6	△
27	ﾏﾙｽﾀﾞﾚｶﾞｲ科	ｵｵｱｼｼﾞｲﾄﾐｶﾞｲ	Ⅱ-1-c	1																			1	1	0	0	1	1	
28	(Family VENERIDAE)	ﾌﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ	Ⅲ-1-c	1											1			1	1				1	1	2	0	1	2	3
29		ﾏﾙｽﾀﾞﾚｶﾞｲ科不明																							0	0	0	0	0	
30	二枚貝不明													2										1	0	0	0	0	3	△
合計				9	12	9	13	45	62	46	58	78		178	33	28	50	61	138	19	25	32	27	64	123	111	149	179	425	320
個体数						28				142						93						57								

二枚貝			出土地層位	鞴屋敷跡 Ⅰ層 完形 L	Ⅰ層 完形 R	Ⅰ層 殻頂 L	Ⅰ層 殻頂 R	Ⅰ層 破片	Ⅱ層 完形 L	Ⅱ層 完形 R	Ⅱ層 殻頂 L	Ⅱ層 殻頂 R	Ⅱ層 破片	Ⅲ層 完形 L	Ⅲ層 完形 R	Ⅲ層 殻頂 L	Ⅲ層 殻頂 R	Ⅲ層 破片	不明 完形 L	不明 完形 R	不明 殻頂 L	不明 殻頂 R	不明 破片	小計 完形 L	小計 完形 R	小計 殻頂 L	小計 殻頂 R	小計 破片	個体数
1	ﾌｼｶﾞｲ科	ｴｾﾞｶﾞｲ																					0	0	0	0	0	
2	(Family ARCIDAE)	ﾓﾓｲﾛｾﾞﾐﾙｶﾞｲ	Ⅱ-2-c											3					1				0	0	0	0	4	△
3	ｳｸﾞｲｽｶﾞｲ科	ｸﾛﾁｮｳｶﾞｲ												2									0	0	0	0	2	△
4	(Family PTERIIDAE)	ﾐﾔｼﾞﾛｳｶﾞｲ	Ⅰ-1-a																				0	0	0	0	0	
5	ｳﾐｷﾞｸ科	ﾉﾉｶﾞｲ	Ⅰ-2-a																				0	0	0	0	0	
6	(Family SPONDYLIDAE)	ﾉﾉｶﾞｲの一種	Ⅰ-2-a								1			1									0	0	1	0	1	1
7	ｲﾀﾎﾞｶﾞﾗﾐ科	ﾆｾﾏｶﾞﾗﾐ	Ⅱ-1-a																				0	0	0	0	0	
	(Family OSTREIDAE)																											
8	ﾂﾂｶﾞｲ科	ｳﾗﾋﾒﾂﾂｶﾞｲ											1			1		3					0	0	1	0	4	1
	(Family LUCINIDAE)		Ⅱ-2-c																									
9	カゴﾞｶﾞｲ科	カゴﾞｶﾞｲ																					0	0	0	0	0	
	(Family FIMBRIIDAE)		Ⅰ-2-c																									
10	キヌﾀﾞﾚ科	ﾅｲﾄｳｶﾞｲ																					0	0	0	0	0	
11	(Family CHAMIDAE)	キヌﾀﾞﾚｶﾞｲの一種	Ⅰ-2-a																				0	0	0	0	0	
12	ｻﾞﾙｶﾞｲ科	ﾓﾛｺｷｭｳｻﾞﾙｶﾞｲ																					0	0	0	0	0	
13	(Family CARDIIDAE)	カﾗﾌﾈｶﾞｲ	Ⅱ-2-c																				0	0	0	0	0	
14		ｼﾅﾉﾏﾒ	Ⅰ-2-a											3				1	13				0	0	0	1	16	1
15	ｼｬｺｶﾞｲ科	ｼｬｺﾌﾞｸ	Ⅰ-2-c											2			1		8				0	0	1	0	10	1
16	(Family TRIDACNIDAE)	ｾﾋﾞｼｬｺ	Ⅰ-2-c																1				0	0	0	0	1	△
17		ﾓﾀﾞｼｬｺ	Ⅰ-2-a											7					39				0	0	0	0	46	△
18		ｼｬｺｶﾞｲ科不明	Ⅰ-2																2				0	0	0	0	3	△
19	ﾏﾃﾞﾀｴﾏｽｵｳｶﾞｲ科	ｲﾌﾊﾏｸﾞﾘ	Ⅰ-1-c	1	2		1		1	1													1	1	0	3	1	2	4
	(Family MESODESMATIDAE)																											
20	ﾆｯｺｳｶﾞｲ科	ﾓﾓｲﾛｷｭｳｼﾗﾄﾘ	Ⅱ-1-c																2									
21	(Family TELLINIDAE)	ｻｻﾉﾊｶﾞﾗ	Ⅰ-2-c																				1	0	0	0	3	△
22		ﾋﾀﾞﾘﾐｽﾞﾗｶﾞｲ	Ⅰ-2-c																3					0	0	0	0	
23	ｼｵｻｻﾞﾅﾐ科	ﾓﾓｲﾛｷｭｳﾏｽｵｳｶﾞｲ	Ⅱ-1-c																					0	0	0	0	
	(Family PSAMMOBIIDAE)																											
24	ｼﾞｭﾝｺﾞﾐ科	ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ																										
	(Family CORBICULIDAE)		Ⅲ-0-c	1	6	2	49			5	11			91		1		7					0	1	12	13	147	18
25		ﾌﾗｽﾉﾉｶﾞｲ																					0	0	0	0	0	
26		ｽﾉﾒｶﾞｲ	Ⅱ-1-c											2									0	0	0	0	2	△
27	ﾏﾙｽﾀﾞﾚｶﾞｲ科	ｵｵｱｼｼﾞｲﾄﾐｶﾞｲ	Ⅱ-1-c																				0	0	0	0	0	
28	(Family VENERIDAE)	ﾌﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ	Ⅲ-1-c				1							3									0	0	0	0	4	△
29		ﾏﾙｽﾀﾞﾚｶﾞｲ科不明												2									0	0	0	0	2	△
30	二枚貝不明						12							112				1					0	0	0	0	125	△
合計				1	1	8	2	79	0	0	9	13	287	0	0	1	0	10	0	0	0	0	2	1	1	18	15	378
個体数						9				16						1					△							

二枚貝			出土地層位	個体数	薩摩在番跡 表採 完形 L	表採 殻頂 L	表採 殻頂 R	表採 破片	Ⅰ層 完形 L	Ⅰ層 完形 R	Ⅰ層 殻頂 L	Ⅰ層 殻頂 R	Ⅰ層 破片	Ⅱ層 完形 L	Ⅱ層 完形 R	Ⅱ層 殻頂 L	Ⅱ層 殻頂 R	Ⅱ層 破片	Ⅲ層 完形 L	Ⅲ層 完形 R	Ⅲ層 殻頂 L	Ⅲ層 殻頂 R	Ⅲ層 破片	Ⅳ層 完形 L	Ⅳ層 完形 R	Ⅳ層 殻頂 L	Ⅳ層 殻頂 R	Ⅳ層 破片	不明 完形 L	不明 完形 R	不明 殻頂 L	不明 殻頂 R	不明 破片	小計 完形 L	小計 完形 R	小計 殻頂 L	小計 殻頂 R	小計 破片	個体数
1	ﾌｼｶﾞｲ科	ｴｾﾞｶﾞｲ								1					1																	1	1	0	0	0	2
2	(Family ARCIDAE)	ﾓﾓｲﾛｾﾞﾐﾙｶﾞｲ	Ⅱ-2-c	△																												0	0	0	0	0	
3	ｳｸﾞｲｽｶﾞｲ科	ｸﾛﾁｮｳｶﾞｲ		△			1																									0	0	0	0	1	△
4	(Family PTERIIDAE)	ﾐﾔｼﾞﾛｳｶﾞｲ	Ⅰ-1-a																													0	0	0	0	0	
5	ｳﾐｷﾞｸ科	ﾉﾉｶﾞｲ	Ⅰ-2-a																										1			1	0	0	0	1	
6	(Family SPONDYLIDAE)	ﾉﾉｶﾞｲの一種	Ⅰ-2-a	1			1		1							2																1	0	0	1	2	2
7	ｲﾀﾎﾞｶﾞﾗﾐ科	ﾆｾﾏｶﾞﾗﾐ	Ⅱ-1-a							2																						0	0	2	0	0	2
	(Family OSTREIDAE)																																				
8	ﾂﾂｶﾞｲ科	ｳﾗﾋﾒﾂﾂｶﾞｲ		1																												0	0	0	0	0	
	(Family LUCINIDAE)		Ⅱ-2-c																																		
9	カゴﾞｶﾞｲ科	カゴﾞｶﾞｲ																														0	0	0	0	1	△
	(Family FIMBRIIDAE)		Ⅰ-2-c																																		
10	キヌﾀﾞﾚ科	ﾅｲﾄｳｶﾞｲ													1																	0	1	0	0	0	1
11	(Family CHAMIDAE)	キヌﾀﾞﾚｶﾞｲの一種	Ⅰ-2-a			1																										0	1	0	0	0	1
12	ｻﾞﾙｶﾞｲ科	ﾓﾛｺｷｭｳｻﾞﾙｶﾞｲ												1																		1	0	0	0	1	1
13	(Family CARDIIDAE)	カﾗﾌﾈｶﾞｲ	Ⅱ-2-c											1																		0	0	0	0	1	△
14		ｼﾅﾉﾏﾒ	Ⅰ-2-a	8				1	3	2	1			1			1															2	1	1	1	18	4
15	ｼｬｺｶﾞｲ科	ｼｬｺﾌﾞｸ	Ⅰ-2-c	3						1							1															1	0	1	0	4	2
16	(Family TRIDACNIDAE)	ｾﾋﾞｼｬｺ	Ⅰ-2-c	7						1																						0	0	0	0	1	△
17		ﾓﾀﾞｼｬｺ	Ⅰ-2-a	5						4	1		2		17	1	1	1	2								1				3	2	1	3	2	57	6
18		ｼｬｺｶﾞｲ科不明	Ⅰ-2	△																												0	0	0	0	3	△
19	ﾏﾃﾞﾀｴﾏｽｵｳｶﾞｲ科	ｲﾌﾊﾏｸﾞﾘ	Ⅰ-1-c	4		1					2	4	7	1		14	17	16	17	6	1		1									17	22	23	19	6	45
	(Family MESODESMATIDAE)																																				
20	ﾆｯｺｳｶﾞｲ科	ﾓﾓｲﾛｷｭｳｼﾗﾄﾘ	Ⅱ-1-c																	1												0	0	0	0	1	△
21	(Family TELLINIDAE)	ｻｻﾉﾊｶﾞﾗ	Ⅰ-2-c	△																												0	0	0	0	0	
22		ﾋﾀﾞﾘﾐｽﾞﾗｶﾞｲ	Ⅰ-2-c	△																												0	0	0	0	0	
23	ｼｵｻｻﾞﾅﾐ科	ﾓﾓｲﾛｷｭｳﾏｽｵｳｶﾞｲ	Ⅱ-1-c								1	1								4												0	0	1	0	5	1
	(Family PSAMMOBIIDAE)																																				
24	ｼﾞｭﾝｺﾞﾐ科	ｼﾚﾅｼｼﾞﾐ																																			
	(Family CORBICULIDAE)		Ⅲ-0-c	18	1	2	2	2	13	3	3	4	6	45		1	2	1		90										1	1	4	6	9	9	149	16
25		ﾌﾗｽﾉﾉｶﾞｲ																		1												0	0	0	0	1	△
26		ｽﾉﾒｶﾞｲ	Ⅱ-1-c	△										1			1			3												0	0	1	0	4	1
27	ﾏﾙｽﾀﾞﾚｶﾞｲ科	ｵｵｱｼｼﾞｲﾄﾐｶﾞｲ	Ⅱ-1-c																													0	0	0	0	0	
28	(Family VENERIDAE)	ﾌﾗｽｼﾞｹﾏﾝｶﾞｲ	Ⅲ-1-c	△							1				1	1	1			1											2	1	1	3	0	3	4
29		ﾏﾙｽﾀﾞﾚｶﾞｲ科不明		△																												0	0	0	0	0	
30	二枚貝不明			△																15												0	0	0	0	15	△
合計				26	1	4	2	4	22	11	8	17	7	65	17	22	23	20	179		1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	6	31	34	44	32	273
個体数						8				30						48						1				△							3					90

注　個体数：二枚貝は右殻、左殻のそれぞれの完形と殻頂を合計し多いほうを個体数とした。（二枚貝の各地区の小計と個体数は必ずしも一致しない。）
巻貝は、完形と殻頂を合計し個体数とした。

凡例：貝の生棲地の分類（黒住氏の分類による）

外洋～内湾		水深		底質	
Ⅰ	外洋・サンゴ礁域	0	潮間帯上部（Ⅰではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a	岩盤
		1	潮間帯中・下部	b	軽石
Ⅱ	内湾・軽石地域	2	亜潮間帯上縁部（Ⅰではイノー）	c	岩礫底、砂泥底、砂底
		3	干瀬（Ⅰのみ適用）	d	マングローブ植物上
Ⅲ	河口干潟・マングローブ域	4	礁斜面およびその下部	e	淡水の流入する礫底
Ⅳ	淡水域	5	止水		
		6	流水		
Ⅴ	陸部	7	林内		
		8	林内・林縁部		
		9	林内部		
		10	海浜部		
Ⅵ	その他	11	打ち上げ物		
		12	化石		

第27表　シレナシジミ大きさ別一覧（殻長）

大きさ＼地区	鍛冶屋跡 左殻	鍛冶屋跡 右殻	翁屋敷跡 左殻	翁屋敷跡 右殻	薩摩在番跡 左殻	薩摩在番跡 右殻	小計 左殻	小計 右殻	合計
0.0～1.0							0	0	0
1.0～2.0							0	0	0
2.0～3.0							0	0	0
3.0～4.0							0	0	0
4.0～5.0	3	4		2			3	6	9
5.0～6.0	10	18			2	1	12	19	31
6.0～7.0	21	19			2	2	23	21	44
7.0～8.0	15	23			1	5	16	28	44
8.0～9.0	12	11		1	1	2	13	14	27
9.0～10.0	2	3			1		3	3	6
10.0～11.0	2				1		3	0	3
11.0～12.0	2						2	0	2
合計	67	78	0	3	8	10	75	91	166

第28表　マガキガイ大きさ別一覧（殻径）

大きさ＼地区	Ⅰ地区 鍛冶屋跡	Ⅰ地区 翁屋敷跡	Ⅱ地区 薩摩在番所跡	合計
2.7～2.8	1			1
2.8～2.9	4			4
2.9～3.0	1			1
3.0～3.1	4		2	6
3.1～3.2	5		5	10
3.2～3.3	7		1	8
3.3～3.4	1		2	3
3.4～3.5	4		2	6
3.5～3.6	1		1	2
3.6～3.7	1			1
3.7～3.8	1			1
合計	30	0	13	43

第22節　脊椎動物遺体

慶来慶田城遺跡の動物遺体は、地区別でⅠ地区鍛冶屋跡獣骨643点・魚骨88点、翁屋敷跡獣骨115点、魚骨５点で、Ⅱ地区の薩摩在番跡からは獣骨51点・魚骨８点が出土している。両地区とも魚骨よりも獣骨が多く出土しているが、特にⅠ地区鍛冶屋跡からは、ほぼ完存の資料が多く、数種類の獣・魚骨が出土している。Ⅰ地区は鍛冶屋跡のⅡ・Ⅲ層で、同地点出土の動物遺体の７割が得られている。Ⅱ地区では、ほとんどがⅠ～Ⅲ層の攪乱層から出土していて、遺物包含層であるⅣ層からウシの骨が数点とその下の遺物包含層であるⅤ層からヨコシマクロダイの顎骨が１点出土したのみである。以下、種別の出土状況を略記する。なお、計測値の単位はmmである。

第29表　脊椎動物遺存体種名一覧表

脊椎動物門	Phylum VERTEBRATE
Ⅰ．軟骨魚綱	Ⅰ．Class Chondrichthyes
1．サメ目	1．Order Lamniformes
a．メジロザメ科	a．Family Charcharhinidae
属・種不明	Gen.et sp.indet.
Ⅱ．硬骨魚綱	Ⅱ．Class Osteichthyes
1．ウナギ目	1．Order Anguilliformes
a．ウツボ科	a．Family Muraenidae
ウツボ属の一種	Gymnothorax sp.
2．スズキ目	2．Order Perciformes
a．ハタ科	a．Family Serranidae
属科不明	Gen.et sp.iudet.
b．タイ科	b．Family Sparidae
クロダイ属の一種	Acahtlhopagrus sp.
c．フエフキダイ科	c．Family Lethrinidae
ハマフエフキ	Lethrinus nebulosus
ヨコシマクロダイ	Monotaxis grandculis
d．ベラ科	d．Family Labrdae
コブダイ	Semicossyphus reticulatus
属・種不明	Gen.et sp.indet.
e．ブダイ科	e．Family Scaridae
イロブダイ	Bolbometopom bicolor
ナンヨウブダイ	Scarus gibbus
属・種不明	Gen.et sp.indet.
f．ニザダイ科	f．Family Acanthuridae
属・種不明	Gen.et sp.indet.
3．フグ目	3．Order Tetraodontiformes
a．カワハギ科	a．Family Aluteridae
モンガラカワハギ	Balistoides conspicillum
属・種不明	Gen.et sp.indet.
b．フグ科	b．Family Tetraodoutidae
属・種不明	Gen.et sp.indet.
c．ハリセンボン科	c．Family Diodontiae
属・種不明	Gen.et sp.indet.
Ⅲ．爬虫綱	Ⅲ．Class Reptilia
1．カメ目	1．Order Testudinata
a．リクガメ科	a．Family Testudinidae

b．イシガメ科
セマルハコガメ
c．ウミガメ科
属・種不明
Ⅳ．鳥綱
1．スズメ目
a．カラス科
カラス
2．キジ目
a．キジ科
ニワトリ
Ⅴ．哺乳綱
1．齧歯目
a．ネズミ科
クマネズミ属の一種
2．クジラ目
科・属不明
a．イルカ科
属・種不明
3．食肉目
a．イヌ科
イヌ
b．ネコ科
ネコ
4．海牛目
a．ジュゴン科
ジュゴン
5．偶蹄目
a．イノシシ科
リュウキュウイノシシ
ブタ
b．ウシ科
ウシ
ヤギ

b．Family Emydidae
Cuora flavomarginata flavomanginata
c．Family Chelonidac
Gen.et sp.indet.
Ⅳ．Class Aves
1．Order Passeriformes
a．Family Corvidae
Corbus sp.
2．Order Galliformes
a．Family Phasianidae
Gallus gallus var.domestica
Ⅴ．Class Mammalia
1．Order Rodentia
a．Family Murida
Ruttus sp.
2．Order Cetacea
Fam.et gen.indet.
a．Family Delphinidac
Gen.et sp.indet.
3．Order Canirora
a．Family Canidae
Canis familiaris
b．Family Felidae
Felis catus
4．Order Sirennia
a．Family Dugongidae
Dugong dugong
5．Order Artiodactyla
a．Family Suidae
Sus lemcomystax riukiuanus
Sus scrofa var.demesticus
b．Family Bovidae
Bos taurus
Capra hircus

(1) 軟骨魚類

サメ目でメジロザメ科・種不明の脊椎骨がⅠ地区鍛冶屋跡Ⅱ層で1点、翁屋敷跡Ⅲ層から1点出土している。

第30表　サメ計測（脊椎骨）

	最大長	上下径	左右径	地　区	グリット	層
図版57－1	8.7	21.1	18.7	鍛冶屋跡	C－9	Ⅱ

(2) 硬骨魚類

魚骨の出土量は、獣・魚骨をあわせた全体的な割合からみると若干少ない。2つの地区すべて共通して出土しているのはブダイ科で、その他にⅠ地区では主にフエフキダイ科、ベラ科、フグ目などが確認され、Ⅱ地区ではハタ科、フエフキダイ科、などが得られた。

(3) 爬虫類

リクガメは、セマルハコガメと種不明の破片がⅠ地区から出土している。

ウミガメは種不明であるが両地区で確認でき、Ⅰ地区鍛冶屋跡のⅡ層から、幅2㎜の厚みのある刃物によって、明瞭なキズが残る、部位不明のウミガメの破片が1点得られている（第58図版⑤）。

第31表　カメ出土量

種名	部位	出土地／層	鍛冶屋跡 表採 右	左	不明	Ⅰ層 右	左	不明	Ⅱ層 右	左	不明	Ⅲ層 右	左	不明	不明 右	左	不明	翁屋敷跡 Ⅰ層 右	左	不明	Ⅱ層 右	左	不明	薩摩在番跡 Ⅰ層 右	左	不明	合計 右	左	不明
リクガメ	セマルハコガメ	中腹板										1															1		
		縁骨板								1										3			1					1	4
	種不明	破片			2						4			2															8
ウミガメ		椎骨板																								1			1
		破片						2			3(1)			9			1						2						17(1)

凡例：「」若　（）切痕

(4) 鳥類

鳥類はニワトリとカラスが確認できたが、すべてⅠ地区鍛冶屋跡から得られている。

ニワトリはⅠ層でオスの中足骨が、Ⅲ層からは脛骨・骨体が得られた。カラスはⅡ層から大腿骨・遠位端、Ⅲ層から尺骨・近位端が出土している。また、種不明で左右不明の橈骨破片がⅠ層から得られた。

第32表　ニワトリ計測一覧（中足骨）

R／L	近／遠	BP	Bd	GL	地区	グリット	層
L	完存	15.4	17.1	98.4	鍛冶屋跡	E－9西	Ⅱ

(5) 哺乳類

ネズミの左下顎骨が、Ⅰ地区鍛冶屋跡のⅢ層から1点出土している。

クジラの肋骨と考えられる破片1点が、Ⅰ地区翁屋敷跡のⅡ層から、イルカの肋骨と考えられる資料も、同地区Ⅰ層から1点出土している。

イヌはⅠ地区鍛冶屋跡の各層から確認され、歯牙や肋骨、肩甲骨などのほかに、キズの残る下顎骨、軸椎、脛骨があり、キズは鋭利な刃物によるものと考えられる。

ネコ（イエネコ）もⅠ地区鍛冶屋跡からの出土で、右の上・下顎骨に歯牙のついた資料がⅡ・Ⅲ層から出土し、またⅡ層からは左大腿骨遠位端も1点得られている。Ⅲ層では大腿骨片、出土層不明であるが完存の踵骨が得られている。

第33表　イヌ計測一覧

部位		R／L	備考	最大長	最大幅	厚さ	全高	地区	グリット	層
上顎骨	P4	R	咬耗僅かに有り	16.1	8.1			鍛冶屋跡	E－9	Ⅱ
		R		14.9	7.8			鍛冶屋跡	C－9	Ⅲ
	犬歯	L	咬耗なし	8.8	5.2		36.2	鍛冶屋跡	E－9	Ⅱ
		R	やや磨滅	8.6	5.4		33.6	鍛冶屋跡	E－9	Ⅰ
下顎骨	M1	R	e、厚さは中央厚	18.3	7.2	10.4		鍛冶屋跡	E－9	表採
	咬筋窩		e			6.75		鍛冶屋跡	E－9	表採

第34表　イヌ歯牙出土量

部位	出土地／層位		右 C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	左 I3	C	dm2	合計	個体数
上顎骨	鍛冶屋跡	Ⅰ層	1										1	1
													0	
		Ⅱ層				1	1				1		3	1
													0	
		Ⅲ層					1						1	1
													0	
下顎骨	鍛冶屋跡	表採		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)				6	1
													0	
		Ⅱ層						1					1	1
													0	
		Ⅲ層								1	1		2	1
												1	1	

凡例：（　）切痕

第35表　イヌ出土量

部位		出土地／層	鍛冶屋跡 Ⅱ層 右	左	不明	Ⅲ層 右	左	不明	合計 右	左	不明
椎体	軸椎							1			1
肋骨								1			1
肩甲骨						1			1		
脛骨	完存			(1)						(1)	
	遠位端			(1)						(1)	
中足骨	完存			1						1	

凡例：（　）切痕

第36表　ネコ歯牙出土量

部位	出土地／層位		右 C			P3	P4	M1	合計	個体数
				dm3	dm4					
上顎骨	鍛冶屋跡	Ⅱ層		1	1				2	1
		Ⅲ層	1						1	1
下顎骨	鍛冶屋跡	Ⅱ層				1	〈1〉	1	3	
		Ⅲ層					1	1	2	

凡例：〈　〉未萠出

第37表　ネコ出土量

部位		出土地／層	鍛冶屋跡 Ⅱ層 右	左	不明	Ⅲ層 右	左	不明	不明 右	左	不明	合計 右	左	不明
大腿骨	近位骨端はずれ～遠位部							1						1
	遠位端			1									1	
踵骨	完存								1			1		

ジュゴンはⅠ地区鍛冶屋跡のⅠ層で肋骨、Ⅱ層から椎弓片、Ⅲ層からは若体の後頭顆が得られている。同地区翁屋敷跡では、抉ったように明瞭なキズの残る棘突起と肋骨などが確認された。Ⅱ地区薩摩在番跡Ⅱ層からは肩甲骨が1点出土している。

第38表　ジュゴン出土量

出土地	層	鍛冶屋跡									翁屋敷跡									薩摩在番跡			合計		
		Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅲ層			Ⅰ層			Ⅱ層			不明			Ⅱ層					
部位		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭蓋骨	後頭顆								「1」															「1」	
椎体	脊弓片						1																		1
	棘突起												(1)												(1)
肋骨	破片		1	1									(1)			3(1)								1	4(2)
肩甲骨	遠位端																				1			1	
破片																			1						1

凡例：「　」若　（　）切痕

イ．イノシシ属

本遺跡で最も多く出土しており、総数433点を数える。内訳はⅠ地区鍛冶屋跡から353点、同地区翁屋敷跡46点、Ⅱ地区薩摩在番跡12点という状況である。鍛冶屋跡のⅡ層が194点、Ⅲ層115点と出土総数のほとんどを占める。薩摩在番跡ではわずかだがⅠ～Ⅲ層までは各層で確認され、Ⅳ層より下の層からは出土していない。鍛冶屋跡からは序文で述べた通り、完存に近い資料が多いが、頭蓋骨と確認できる資料は断片的な出土である。肋骨は表43では少量であるが、それと判別可能な資料のみを抽出したためで、細かく破損して出土した標本として、部位不明の破片資料としたものに多く含まれているとも考えられる。個体数は、出土量の多い鍛冶屋跡では、包含層のⅡ・Ⅲ層出土の資料を元に割り出した。また、歯の咬耗度を調べるために同層出土のdm４、Ｍ１、Ｍ２、Ｍ３を標本として第76図にグラフを作成した。結果、四肢骨から分かる個体数は、Ⅱ層では点数の多い脛骨から、成獣13体、若獣１体、幼獣１体で、Ⅲ層では同じく点数の多い大腿骨から、成獣８体、若獣１体、幼獣１体で、合計成獣21体、若獣２体、幼獣２体である。歯牙では、Ⅱ層でdm４の乳歯から個体は３体、Ⅲ層では２体で幼獣の個体数は合計５体となる。成獣の個体数は、永久歯であるＭ３の咬耗が激しい個体（第76図・Ｍ３のｃ～ｎの数）で数えると、Ⅱ層が５体、Ⅲ層で３体となり、合計個体数は成獣が８体ということになる。翁屋敷跡は四肢骨では上腕骨の数から成獣７体、歯牙はＭ３から８体で、Ⅱ地区薩摩在番跡では、四肢骨が各層１体ずつと考えて３体、歯牙は２体と推算できる。しかし、Ⅱ地区はすべて撹乱層からの出土で、ブタになる可能性も考えられる。

解体時によるものと考えられる切痕の残る資料は、翁屋敷跡Ⅲ層、薩摩在番跡のⅢ層を除いては全地区、各層でみられる。ほとんどが鋭利な刃物によるものと考えられ、各層においても違いは確認できなかった。

ロ．ブタ

Ⅱ地区のⅠ層から、歯牙（Ｍ３）が２点出土している。

ハ．ウシ

イノシシについでもっとも多く出土しており、破片総数106点を数える。ほとんどがⅠ地区の鍛冶屋跡からの出土で、特にⅡ層からの出土が集中している。鍛冶屋跡出土の資料から割り出せる個体数は、イノシシ属同様にⅡ・Ⅲ層出土の資料から割り出すと、Ⅱ層では四肢骨の脛骨で４体、歯牙では６体、Ⅲ層からは同じく四肢骨の脛骨で３体、歯牙では１体である。総数のうち３割に切痕がみられるが、いずれも鋭い刃物によるものと考えられる。Ⅱ地区、Ⅳ層からは火を受けた可能性のある資料が得られている。同層は炭も多く含み、共伴する土器にも、炭が多く付着したものが出土している。

ウシの歯牙もほとんどⅠ地区からの出土で、上顎骨が、右５点、左22点、下顎骨は右６点、左５点などが得られ、Ⅱ地区薩摩在番からはⅠ層で破片を含めわずか３点の出土である。

ニ．ヤギ

少量だがⅠ地区鍛冶屋跡から出土した。Ⅰ層からキズありの脛骨と上腕骨片、Ⅱ層からは幼体の左肩甲骨片、橈骨、尺骨が得られている。

第39表　ヤギ出土一覧

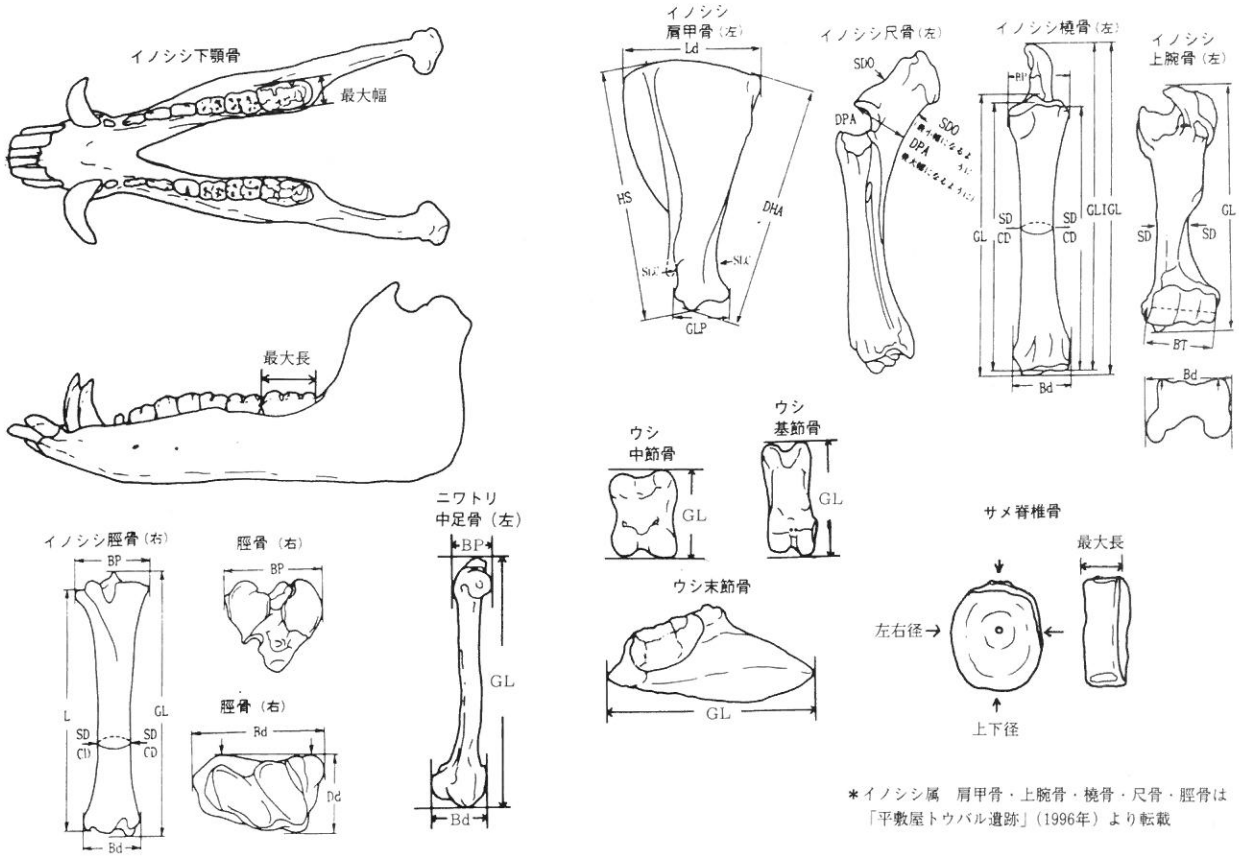
出土地	層序	右・左	部位		備考	個数
鍛冶屋跡	Ⅰ層	左	脛骨	骨体	（切痕）	1
			上腕骨	遠位端	（切痕）	1
	Ⅱ層	左	肩甲骨	骨端はずれ	「幼」	1
			橈骨	骨体		1
		右	尺骨	骨体		1

ホ．種不明

Ⅰ地区鍛冶屋跡とⅡ地区薩摩在番跡から、四肢骨片数点が出土している。詳細は第40表の通りである。

第40表　種不明出土一覧

出土地	層序	右・左	部位		個数
鍛冶屋跡	Ⅱ層	左	上腕骨	遠位部	1
		不明		破片	1
	Ⅲ層	不明	橈骨	遠位骨端はずれ	1
	Ⅳ上面	不明		破片	1
薩摩在番跡	Ⅳ層	不明		破片	1



＊イノシシ属　肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨・脛骨は「平敷屋トウバル遺跡」（1996年）より転載

第75図　イノシシ属・ウシ・ニワトリ・サメの計測位置

第41表　イノシシ属計測一覧　歯骨・肩甲骨・上腕骨・尺骨・橈骨・脛骨

部位	部位2	R/L	備考	最大長	最大幅	地区	グリット	層
上顎骨	P4	L	a	6	6.3	鍛冶屋跡	G-9	I
	M1	L	a	9.3	7.5		G-9	I
	M2	L	a	10.2	10		G-9	I
	M3	L		20.6	10.43		C-9	II
	M3	L		22.4	13.8		C-9	II
	P4	L	b	7	7		E-7	I
	M1	L	b	10.07	6		E-7	I
	M2	L	b	13	9.1		E-7	I
	M3	L		25.6	13.4		E-8	III
	M3	L		23.4	12.9		E-9	I
	P4	L	c	7	7.5		E-9	II
	M1	L	c	10.09	8		E-9	II
	M2	L	c	10.95	10.08		E-9	II
	M3	L		24.3	15.1		E-9	II
	M3	L		20.3	10.45		E-9	II
	M3	L		20.48	10.29		E-9	II
下顎骨	M3	L		26.8	12	鍛冶屋跡	D-9	I
	M3	L		24.7	11.7		C-9	III
	M3	L		26.2	11.6		E-8	III

部位	R/L	近/遠	備考	GLP	BG	SLC	地区	グリット	層
肩甲骨	R	遠位端		29	20	20	鍛冶屋跡	C-9	III
	R	遠位部	若			14.7		C-9	III
	L	骨体～遠位端		31.9	21.5	20.5		C-9	II
	R	骨体～遠位端		30.5	19.7	20.2		E-8	III

部位	R/L	近/遠	BT	地区	グリット	層
上腕骨	L	遠位端	28.8	鍛冶屋跡	G-9	II

部位	R/L	近/遠	BP	SD	地区	グリット	層
橈骨	L	近位端～骨体	22.8	14	鍛冶屋跡	G-9	II
	L	近位端	22.2	13.3		E-8	III
	L	近位端	22.9			E-9	II
	L	骨体		13.1		E-9	III

部位	R/L	近/遠	DPA	地区	グリット	層
尺骨	L	骨体～遠位部	26.6	鍛冶屋跡	G-9	II
	L	骨体～遠位部	29.2		C-9	III

部位	R/L	近/遠	Bd	Dd	SD	地区	グリット	層
脛骨	L	骨体～遠位端	23.6	20.1	13.9	鍛冶屋跡	E-9	I
	L	骨体～遠位端	24.6	24.6	13.6		E-8	III

第42表　ウシ計測一覧　上腕骨・尺骨・橈骨・指骨

部位	R/L	近/遠	SD	地区	グリット	層
上腕骨	L	遠位部	33.3	鍛冶屋跡	C-9	II
	L	遠位部	37.2		E-9	I
	R	遠位部	31.8		E-9	表採
	L	骨体～遠位部	34.8		E-7	I

部位	R/L	近/遠	備考	DPA	地区	グリット	層
尺骨	R	近位部～遠位部	d	58.8	鍛冶屋跡	G-9	II

部位	R/L	近/遠	備考	BP	SD	地区	グリット	層
橈骨	R	近位端～遠位部	d	67	35.5	鍛冶屋跡	G-9	II
	R	近位端		80.7			E-9	III
	L	近位端		79.1			C-9	II
	L	近位端		68.5			E-7	I
	R	近位端		89.6			G-9	II

部位	R/L	近/遠	GL	地区	グリット	層
基節骨	R	完存	60.2	鍛冶屋跡	G	II
	L	完存	59.8		E-9西	III
	L	完存	56.4		E-9西	III
	L	完存	59.3		E-7	I
	L	完存	57.2		C-9	II
中節骨	L	完存	38.7	鍛冶屋跡	E-9	II
末節骨	L	完存	61	鍛冶屋跡	E-9	II

第43表　イノシシ属出土量

部位	出土地	鍛冶屋跡												翁屋敷跡												薩摩在番跡												合計		
	層位	表採			Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅲ層			不明			表採			Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅲ層			不明			表採			Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅲ層					
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭蓋骨	頭頂骨							1「1」			1	2	1																						1									2	3	1
	頬骨					1				1																																		0	2	0
	頭蓋骨項稜															1																												0	0	1
	頭蓋骨蝶形骨体									1																																		0	0	1
	頭蓋骨底部						1																																					0	0	1
	頭頂～側頭骨									1																																		0	1	0
	側頭骨				2			3		2	5																																	5	2	5
	側頭骨頬骨突起										1	1	1																															1	1	1
	後頭顆				1								3										1															1						3	3	0
	岩様部骨胞									1																																		0	1	0
上顎骨	破片					1				1	3			2																														0	2	5
下顎骨	下顎角									1																																		0	1	0
	筋突起									1																																		0	1	0
	関節突起											3																																3	0	0
	破片				2			2		3		2																																6	3	0
椎体	環椎							3		(1)		1																							1									4	0	1
	環椎環椎翼							2																																				2	0	0
	腹弓									1			2																															0	0	3
	背結節									1																																		0	0	1
	軸椎												1(1)																															0	1	1
	胸椎									1																																		0	0	1
	腰椎												1																															0	0	1
	棘突起									4																																		0	0	4
	破片						3			1			2																										1				0	0	7
肋骨	破片																								1															1				0	0	2
肩甲骨	近位部											1																																0	1	0
	骨体							2(1)				1																																2	1	0
	骨体～遠位端									(1)		(2)																																0	0	0
	遠位部					1		[1]「1」{1}		1(2)〔2〕{1}		2{1}	1		{1}「1」								3														1						6	3	0
	遠位端											1												1											1					1				2	1	0
	破片									4		1	1																										1				1	5	1
上腕骨	近位部							1																																				1	0	0
	近位部～遠位端							1																																				1	0	0
	骨体	1	2					3		2〔2〕		1	2							1	1		2(1)〔1〕												1(1)									9	7	0
	骨体～遠位部							2(1)				(1)「1」	1																														2	1	0
	骨体～遠位端	(1)																																									0	0	0
	遠位部		1					2(1)		(2)			1										1	2																			3	4	0
	遠位端									1											1																						0	2	0
	遠位骨端のみ											1													1																		1	0	1
	破片																					1																					0	0	1
橈骨	近位端				(1)	1		(1)		(1)		1	(1)											(1)																			1	1	0
	近位部～骨体												1																														0	1	0
	近位端～骨体							3(2)		(1)																									1			(1)					3	1	0
	近位端～遠位部																				1																						0	1	0
	近位端～遠位骨端はずれ		1																																								0	1	0
	骨体												1(1)			2							2																				2	1	2
	遠位骨端はずれ							1																																			1	0	0
尺骨	近位部							2(1)				1	1																														3	1	0
	近位部～遠位部							2(2)		1(2)			(1)																														2	1	0
	骨体	1						4		1(1)		1								1	(2)		1	(3)														1					8	2	0
	骨体～遠位部									1																																	0	1	0
	遠位部							1		1																																	1	1	0
	破片																																								1		1	0	0
手根・足根骨																									1																		0	0	1
中手骨 Ⅲ	完存												1																														0	1	0
	近位端	1						1				1																												1			4	0	0
Ⅳ	近位端～遠位部									1(1)			2																														0	3	0
Ⅴ	完存		(1)							1			1																														0	2	0
	近位端		[1]					[1]		1		1			1																							1					2	2	0
	近位端～遠位部									1		1	1																														1	2	0
寛骨	腸骨部							3(1)		1(1)			3																														3	4	0
	恥骨部							2																																			2	0	0
	坐骨部							1(1)		1																																	1	1	0
	臼部		2	(1)				2		2		1																															3	4	0
	破片												2																														0	0	2
大腿骨	近位部							1〈1〉		[3]		2	[1]																						1			1					3	2	0
	近位部～遠位部		1					2				1(2)	2																														3	3	0
	近位骨端はずれ～遠位端												1																														0	1	0
	近位骨端はずれ											1																														1	0	0
	骨体	1[1]						1[1]		6[1]		1	1											1														1					3	8	0
	遠位部	1						(1)		1(1)〔1〕			2[1]										1	[1]																			2	3	0
	遠位端		1																																								0	1	0
	遠位骨端のみ											(1)								1																							1	0	0
	破片						[2]			[2]			[1]																														0	0	0
脛骨	近位部				[1]			1(1)〔1〕																																			1	0	0
	近位部～骨体				1			1				1																															3	0	0
	近位部～遠位部							3(1)		5		1	2																														4	7	0
	近位部～遠位端				(1)			3				1「1」																															4	0	0
	骨体	(1)			(1)			1〔2〕		1〔1〕		1																															2	1	0
	骨体～遠位端					(1)							1																														0	1	0
	遠位部				1			1(1)		1														(1)																			2	1	0
	遠位骨端はずれ							《1》																																			0	0	0
	破片											1	3												1																		1	3	1
腓骨	近位部							《1》																																			0	0	0
	骨体～遠位部											1																															1	0	0
	遠位部							(1)		1			(1)																														0	1	0
	遠位端							(1)		1		2																															2	1	0
距骨	完存				1	(1)		1		1(1)		2	1							1			1	1																			6	3	0
踵骨	完存									1(1)			(2)																														0	1	0
	近位部～遠位端							1																																			1	0	0
	近位骨端はずれ～遠位部							1																																			1	0	0
	骨体		2							1(1)		1											1																				2	3	0
	遠位端									1																1																	0	2	0
足根骨	中心											1																														1	0	0
中足骨 Ⅱ	完存												1																														0	1	0
Ⅲ	近位端							1				1	1			2											1																2	4	0
	完存				1																																						1	0	0
Ⅳ	近位端							1				1			1					1	1																	1					4	2	0
	近位端～遠位部					1																																					0	1	0
不明	完存							1				1																															2	0	0
中足骨	近位部～遠位部													1																													0	0	1
	遠位端													1																													0	0	1
	破片													1																													0	0	1
指骨 基節骨	ⅡorⅤ（完存）							1		1																																	1	1	0
	ⅢorⅣ（完存）							1				2	3																														3	3	0
	完存																																		1								0	1	0
	遠位端		1																																								0	1	0
中節骨	完存		1																																								0	1	0
小計		0	0	0	14	17	4	65		52	18	42	42	14	1	1	3	0	2	0	5	4	1	13	5	4	0	1	0	0	1	0	0	0	1	2	4	1	4	3	2	2	0	0	149	132	48
幼								2				2				1																											4	1	0
若								1		2		1	1		1																												3	3	0
キズあり		1			4	3	1	17		17		6	5	1								2		1	5											1			1					30	33	2
半欠					1	1	2	6		9	2		2	1										1	1																			8	13	5
キズあり・半欠								1																																			1	0	0
キズあり・若					1																																						1	0	0
キズあり・幼								2																																			2	0	0
合計		1	0	0	20	21	7	94		80	20	51	50	16	2	2	3	0	2	0	5	6	1	15	11	4	0	1	0	0	1	0	0	0	1	3	4	1	4	4	2	2	0	0	198	182	55
個体数		△			3			11「1」{1}				7「1」{1}			△			△			2			4			1			△			△			1			1			1			31〔2〕{2}		

凡　例　（）：キズ有　［］：半欠　「」：幼　｛｝：若　〈〉：キズ有り半欠　〔　〕：キズ有り若　《》：キズ有り幼　△：出土しているが、個体数がだせないもの。

第44表　イノシシ属歯牙出土量

出土地/層位		部位	右 I1	右 I2	右 I3	右 C	右 dm2	右 dm3	右 dm4	右 P1	右 P2	右 P3	右 P4	右 M1	右 M2	右 M3	左 I1	左 I2	左 C	左 dm1	左 dm2	左 dm3	左 dm4	左 P2	左 P3	左 P4	左 M1	左 M2	左 M3	左右不明 I1	左右不明 C	左右不明 dm2	左右不明 P2	左右不明 M3	合計	個体数
上顎骨	鍛冶屋跡	表採																										1	〈1〉						1	1
																																			0	
		I層																								1	2	2	1						6	1
																																			0	
		II層				♂4				1♂1	1♂1	3♀1	3♂1	4♀1	5♀1	4♀1	2♀1	1		♂4				2	1	3	3	6	10	6〈1〉		1				53	10
																																			0	
		III層	1			♀2								1	1♂1	1	1♂〈1〉	1		♂2			2	2	2♂1	3♂1	1♂1	2♀1♂1	2♀1♂1	2♂〈1〉						22	4
							1																												1	
	屋敷跡	表採														1																			1	1
																																			0	
		II層				♀1					2				4	7		1								1		1	3					1	20	7
																																			0	
	薩摩在番跡	表採	1	1	1						1																								4	1
																																			0	
		II層																									1								1	1
																																			0	
	小計		2	1	1	0	0	0	0	1	4	3	5	6	9	11	3	0	0	0	0	2	4	3	6	6	11	16	12	0	1	0	0	1	108	26
			0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
下顎骨	鍛冶屋跡	表採				♂4																						1	1						2	
																																			0	
		I層	1																																1	
																																			0	
		II層	4			♂7♀1			「1」	2		2	1♀1	1♀1	4♀1	1♀1	2♀1〈2〉	2	1	♂2♀6	1	1	2	3	2	2	4	3〈1〉	1	3♀1					42	
																																	1		1	
		III層				♂2			2			1♀1	1♀1	1♀1	1♀1	1♀1			{1}♂1			♂1	1♂1	1	1	3♀1{1}	3♀1	4♀1	3♀1						23	
																																			0	
		不明																								1			1						2	
																																			1	
	屋敷跡	I層				♂1																							2						2	
																																			0	
		II層	1												1	2	3	1	4	♂2♀1									3	1	1			1	18	
																																			0	
		不明														1		1																	2	
																																			0	
	薩摩在番跡	I層	1															1																	2	
																																			0	
		II層				♀1														♀1															0	
																																			0	
	小計		7			0	0	0	4	0	2	2	2	6	4	7	5	5	0	1	1	2	4	3	4	7	6	6	7	1	1	0	0	1	88	
			0			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0	4	
破片	鍛冶屋跡	I層	1																																1	
		II層	4																																4	
		III層	5																																5	
	薩摩在番跡	I層	1																																1	
	未萌出・♂															1													1						2	
	未萌出・♀															2																			2	
	半欠							1																			1		2						4	
	♀・半欠																		1							1									2	
	♂雄					18				1	1	1	1	1					10			1	1	1	1	1	1	1							41	
	♀雌					5						3	3	3	3	3			8							1	2	2	2						35	
	合計		20	1	1	23	1	1	4	2	7	9	11	16	16	24	8	5	19	1	1	5	9	7	11	16	21	26	26	1	2	1	1	2	298	

凡例：〈〉：未萌出　「」：幼　｜：若　　♂雄、♀雌、

第45表　ウシ出土量

部位		出土地/層位	鍛冶屋跡 表採 右	左	不明	鍛冶屋跡 I層 右	左	不明	鍛冶屋跡 II層 右	左	不明	鍛冶屋跡 III層 右	左	不明	屋敷跡 I層 右	左	不明	屋敷跡 II層 右	左	不明	薩摩在番跡 表採 右	左	不明	薩摩在番跡 I層 右	左	不明	薩摩在番跡 II層 右	左	不明	薩摩在番跡 III層 右	左	不明	薩摩在番跡 IV層 右	左	不明	薩摩在番跡 不明 右	左	不明	合計 右	左	不明
頭蓋骨	側頭骨頬骨突起									1																														0	1	0
下顎骨	筋突起									(1)																														0	0	0
	破片						1																																	1	0	0
椎体	環椎																			1							1												0	0	2
	棘突起																																						(1)	0	0	1
肋骨	破片						1					7(2)		1	(1)	4							1		1			1											2	1	14
肩甲骨	骨体～遠位部								[1]																															0	0	0
	遠位部									[1]																														0	0	0
	破片						(1)					2												3																3	0	2
上腕骨	骨体								1			1																						1						1	0	2
	遠位部		(1)				1(1)		(1)	(1)																														0	1	0
	遠位骨端のみ						(1)			(1)																														0	0	0
	破片																																			1				0	0	1
橈骨	近位端					1	1		1(1)			1[1]																							1				3	2	0
	近位部～遠位端								1																															1	0	0
	遠位部																											1												0	1	0
尺骨	近位部～遠位部								(1)																															0	0	0
	骨体								(1)				1																						1					1	1	0
手根骨	破片													1	(1)																									0	0	1
	中間											(1)	1																											0	1	0
	橈側手根骨												1																											0	1	0
中手骨	近位端											1		[1]																										1	0	0
	骨体								1				1																											1	1	0
	破片							1									1																							1	0	1
寛骨	腸骨部								(1)				(1)																											0	0	0
	腸骨部（破片）								(1)	(1)																														0	0	0
大腿骨	近位部																				(1)																			0	0	0
	骨体								[1]																															0	0	0
	遠位部								(1)																															0	0	0
脛骨	近位部											1																												1	0	0
	近位部～骨体									[1]																														0	0	0
	骨体～遠位部						1																																	0	1	0
	骨体								(1)				(1)																											0	0	0
	遠位端												[1]																											0	0	0
	破片									1(1)											1																			0	2	0
腓骨	破片									1																														0	1	0
足根骨	第４中心足根骨									2																														0	2	0
中足骨	骨体										[1]																													0	0	0
	破片										1																													0	0	1
指骨 基節骨	完存												1(1)																											0	1	0
	遠位端								1	1(1)																														1	1	0
	破片							1(1)		1	2			(1)			(1)																							0	1	3
中節骨	完存									(1)																														0	0	0
	完存									(1)																														0	0	0
末節骨	近位端								1(1)																															1	0	0
	破片									1		1																												1	1	0
	小計		0	0	0	3	3	3	6	8	14	6	4	5	0	0	0	1	0	1	0	1	1	3	1	0	0	1	2	0	0	1	0	2	1	0	0	0	19	20	28
	キズ有り		1				3	1	10	7	2	1	4	1	1			1					1															1	14	15	5
	半欠								2	2	1	1	1	1																										3	3	2
	合計		1	0	0	3	6	4	18	17	17	8	9	7	1	0	0	2	0	1	0	2	1	3	1	0	0	1	2	0	0	1	0	2	1	0	0	1	36	38	35
	個体数			△			3			4			3			△			△			△			△			△			△			△			△			10		

凡　例：　()：キズ有　[]：半欠　△：出土しているが、個体数が出せないもの。

第46表　ウシ歯牙出土量

出土地/層位		部位	右 I1	右 I2	右 I3	右 I4	右 I5	右 dm4	左 P2	左 P3	左 P4	左 M1	左 M2	左 M3	合計	個体数
上顎骨	鍛冶屋跡	I層								1	1	2	2		6	2
															0	
		II層		1	1	2			1		1	1	4	6	17	6
															0	
		III層											1	1	2	3
															0	
	屋敷跡	II層		1											1	1
								1							1	
	薩摩在番跡	I層									1				1	2
															0	
	小計		0	2	1	2	0	0	1	3	3	7	7	7	27	14
			0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
下顎骨	鍛冶屋跡	I層					1								1	
															0	
		II層				1							3		4	
															0	
		III層					3						1		4	
															0	
	屋敷跡	I層											1		1	1
															0	
		II層	1												1	
															0	
	小計		1	0	0	1	4	0	0	0	0	5	0	1	11	
			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
破片	鍛冶屋跡	I層	2												2	
		II層	1												1	
	屋敷跡	II層	2												2	
		不明	1												1	
	薩摩在番跡	I層	2												2	
合計			9	2	1	3	4	1	1	1	3	3	12	7	47	

第47表　遺構出土の獣魚骨一覧

出土地	備考	種名	右/左	部位	遠/近
方形状遺構	上面	イノシシ	右	上腕骨	骨体
			右	中手Ⅴ	近位端
			右	中足骨Ⅳ	近位端
			左	脛骨	近位部～遠位端
			左	上顎骨dm2	幼
			左	大腿骨	骨体
				軒・軒骨	遠位端
		魚骨 ベラ科(ｺﾌﾞﾀﾞｲ)	左	前上顎骨	歯pm
		不明	不明	不明	
	内部	イノシシ	右	尺骨	骨体
			右	大腿骨	遠位端のみ
			右	踵骨	骨体
			左	大腿骨	骨体
				尺骨	破片
		魚骨 ハタ科	右	歯骨 A	
		魚骨 ハタ類		歯	
		魚骨 ハリセンボン科		棘	

凡　例

- 0.5才未満
- 0.5～1.5才
- 1.5～2.0才
- 20才以上
- Ⅱ　層
- Ⅲ　層

咬耗状況

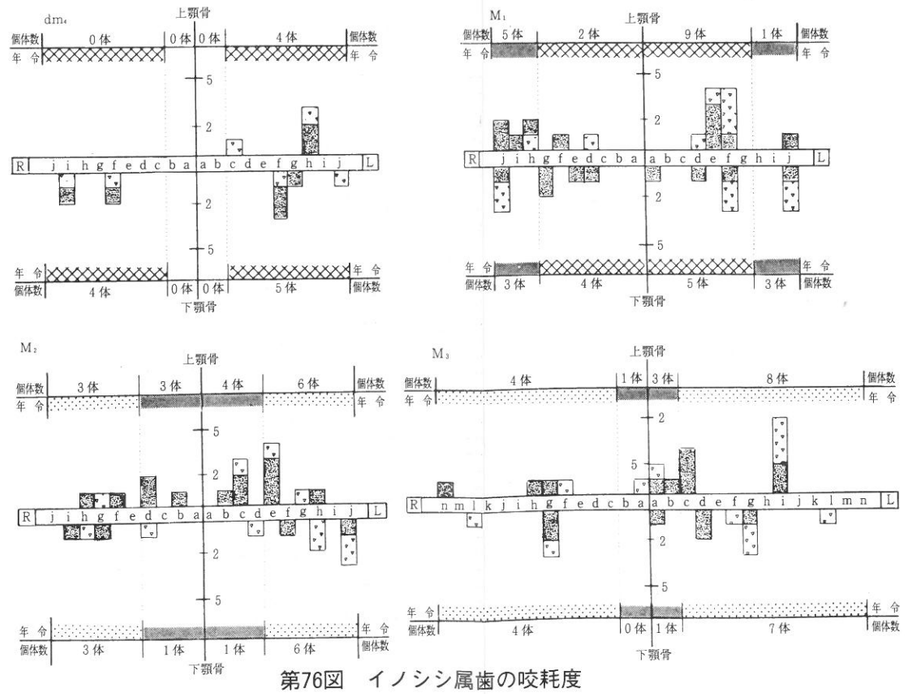
＜　＞：未萌出
＋：エナメル質咬耗
＋＋：小窩独立
＋＋＋：同連絡
⊕：全面窩

dm4 M1 M2の場合

a：＜　＞
b：－　－
c：＋　－
d：＋　＋
e：＋＋　＋
f：＋＋　＋＋
g：＋＋＋　＋＋
h：＋＋＋　＋＋＋
i：⊕・＋＋＋
j：⊕・⊕

M3の場合

a：＜　＞
b：－・－・－
c：＋・－・－
d：＋・＋・－
e：＋・＋・＋
f：＋＋・＋・＋
g：＋＋・＋＋・＋
h：＋＋・＋＋・＋＋
i：＋＋＋・＋＋・＋＋
j：＋＋＋・＋＋＋・＋＋
k：＋＋＋・＋＋＋・＋＋＋
l：⊕・＋＋＋・＋＋＋
m：⊕・⊕・＋＋＋
n：⊕・⊕・⊕



第76図　イノシシ属歯の咬耗度

第48表　魚類出土量

部位			出土地 層位		鍛冶屋跡 Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	不明	小計	屋敷跡 Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	不明	小計	薩摩藩在番跡 Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅴ層	不明	小計	合計
サメ目		種不明	脊椎骨			1			1			1		1						0	2
ウナギ目	ウツボ科	ウツボ	顎骨	R		1			1 0					0 0						0 0	1 0
				L					0 0					0 0						0 0	0 0
スズキ目	ハタ科	A	顎骨	R					0 0					0 0						0 0	0 0
				L			1		1 0					0 0						0 0	1 0
				破片										0		1				1	1
		B	顎骨	R					0 0					0 0						0 0	0 0
				L					0 0					0 0			1			1 0	1 0
	タイ科	クロダイ	顎骨	R					0 0					0 0						0 0	0 0
				L		1			0 1					0 0						0 0	0 1
			第二臀鰭棘			1	1		0 2					0						0	2
			臀鰭血管間棘				2		0 2					0						0	2
	フエフキダイ科	ヨコシマクロダイ	顎骨	R			1		0 1					0 0						0 0	0 1
				L			1		1 0					0 0				1		0 1	1 1
		ハマフエフキ	顎骨	R			2		2 0					0 0		1				0 1	2 1
				L		1			0 1					0 0						0 0	0 1
			主上顎骨	R			1		1 0					0						0	1 0
			前鰓蓋骨	R		1			0 1					0						0	0 1
			角骨	R			1		1 0					0						0	1 0
	ベラ科	コブダイ	顎骨	R	1				1 0					0 0						0 0	1 0
				L					0 0					0 0						0 0	0 0
			咽頭骨	R		1			0 1					0 0						0 0	0 1
				L					0 0												0 0
		種不明	顎骨	R		1			1 0					0 0						0 0	1 0
				L					0 0					0 0						0 0	0 0
			咽頭骨	R		1			0 1					0 0						0 0	0 1
				L					0 0	1	1			0 2						0 0	2
	ブダイ科	イロブダイ	顎骨	R					0 0					0 0						0 0	0 0
				L					0 0	1				1 0						0 0	1 0
			咽頭骨	R		1			1 0					0 0		1				1 0	2 0
				L					0 0												0
		ナンヨウブダイ	咽頭骨	R		2			2 0			1		1 0			1			1 0	4 0
				L		1			0 1				1	0 1						0 0	2
		種不明	顎骨	R		1 2			1 2					0 0						0 0	1 2
				L	1	2	1		1 3					0 0						0 0	1 3
	ニザダイ科	種不明	ウロコ		1				0 1					0						0	1
フグ目	カワハギ科	モンガラカワハギ	顎骨	R					0 0					0 0						0 0	0 0
				L			1	1	0 2					0 0					1	0 1	0 3
		カワハギ類	背鰭棘			1			0 1					0						0	1
	フグ類	種不明	顎骨	R			1		1 0					0 0						0 0	1 0
				L		1			1 0					0 0						0 0	1 0
			方骨	R		1			0 1					0						0 0	0 1
	ハリセンボン科	種不明	顎骨	上顎骨		1			0 1					0 0						0	1
				歯骨					0 0					0 0						0	0
			棘			10	1		0 11					0						0	11
			上顎骨か歯骨						0 0		2			2						0	2
			破片			2			0 2					0						0	2
種不明			咽頭骨			2	1		0 3					0						0	3
			上顎骨	R			1 1		1 1					0 0						0 0	1 1
			舌顎	R			1	1	1 1					0 0						0 0	1 1
			前鰓蓋骨	R			1		1 0					0 0						0 0	1 0
			主鰓蓋骨	R			1		1 0					0 0						0 0	1 0
			角骨	R			1		1 0					0 0						0 0	0
			脊椎骨			2	4	5	0 11		1			0 1						0	12
			尾椎			1	1		0 2					0 0						0	2
			破片			3	7	3	0 13					0 0		1				1	14
個体数					1	7	7	△	15	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	15

凡例　上顎骨　右前上顎骨　左前上顎骨　右上咽頭骨　左上咽頭骨
歯骨　右歯骨　左歯骨　下咽頭骨

△：出土しているが、個体数が出せないもの。

第49表　青磁出土状況

器種	時代	部位	I地区 鍛冶屋跡 表採	I	II	III	不明	小計	I地区 翁屋敷跡 表採	I	II	III	不明	小計	II地区 薩摩在番跡 表採	I	II	III	IV	V	不明	小計
碗	14c頃	胴			1	1		2						0								0
	14c～15c前半	口						0					1	1								0
	14c後半～15c前半	口			2	3		5		1	4			5					1	1		2
		胴		3	2	3		8	1	6	6		2	15		1	1			1		3
		底			5			5						0								0
	14c後半～15c中葉	口		1	14	25		40	1	14	34	2	5	56			8		3	9	4	24
		胴	1	4	13	14	3	35		5	10	1	2	18		1	1			2		4
		底		1	10	2		13		1	2			3			2					2
	14c後半～15c	口		2	3	2		7	1	5	20		8	34								0
		胴					1	1		41	154	1	11	207		8	42		10	10	17	87
		底						0						0			3		1			4
		口～底			1			1						0								0
	14c後半～16c前半	口		2				2						0								0
		胴		1	8	3		12						0			2		1	1	2	6
	15c頃	口				1		1		1	9			10			2		2			4
		胴			2	2		4		7	11			18						2		2
		底						0	1	1	1			3								0
	15c～16c前半	口						0			3			3	1		8		2	2	3	16
		胴						0		1	2		1	4								0
		底						0		1	2			3								0
	15c～16c中葉	底						0			1			1								0
	15c～16c	口						0		4	13		3	20								0
		胴						0		9	27	1	8	45								0
		底						0		2	1			3								0
	明～清前半(15c～17c後半)	胴						0		1	1		3	5								0
	15c・16c	底		1	1			2						0								0
		口～底				2		2						0								0
	15c中葉～後半	底				1		1						0								0
		口～底						0						0			1					1
	15c中葉～16c前半	口	1	2	7	2		12	1	12	36	1	2	52		1			1			2
		胴			8	6	1	15	3	16	46	2	5	72			5		1	1		7
		底			1		1	2	1		1			2			1					1
	15c中葉～16c中葉	口			1	2		3	1					1			10	1	4	6	4	25
		胴			3	2		5	1		2			3		1	7		3	3	5	19
		底				1		1						0								0
	15c後半～16c中葉	口						0						0					2			2
	15c後半～16c	口		1	2	1		4			1			1								0
		胴			1			1						0								0
	年代不明	胴						0						0			1				1	2
碗類　中国産	年代不明	胴	1	1	3	1		6						0								0
碗類	14c後半～15c	口						0						0	1	2	4		1	2	2	12
碗か皿	14c後半～15c前半	底						0						0					1			1
	15c頃	胴						0				1		1								0
碗か鉢	14c後半～15c前半	胴			1			1		1				1			1					1
大碗か鉢	14c後半～15c前半	胴			1			1						0								0
鉢	14c後半～15c前半	胴						0			1			1								0
	14c後半～15c中葉	胴			1			1			1			1								0
小鉢	14c後半～15c前半	口						0						0						1		1
		胴						0		1	2			3								0
	15c頃	口						0			1			1								0
皿	14c・15c	口						0						0			1					1
	14c後半～15c前半	口						0			2		1	3								0
		胴						0			1			1								0
		底						0		2				2								0
	14c後半～15c中葉	口						0		1	1			2								0
		胴						0			1			1								0
		底						0		1				1								0
	14c後半～15c	口				1		1						0								0
		胴			2			2			1			1								0
		底						0						0		1						1
	15c頃	口		1	2	1		4						0								0
		胴			1			1						0								0
		口～底				1		1						0								0
	15c中葉～16c前半	口		1	2	1	1	5			6		1	7		2	8		4		2	16
		胴			2	1		3		1	3			4			5					5
		底		1				1		1	1			2								0
		口～底						0	1					1								0
	15c中葉～16c中葉	口						0		4	4			8								0
		胴						0		1	2			3								0
	15c後半～16c前半	口～底			1			1						0								0
	15c後半～16c	口						0			3			3								0
		胴						0			1			1								0
		底						0			1			1								0
皿　中国?	年代不明	胴						0						0			1					1
皿か小鉢	14c後半～15c中葉	口						0			1			1								0
小皿	15c頃	底				1		1						0								0
盤	14c後半～15c前半	口				1		1		1	1			2			1					1
		胴						0		1	1			2								0
		底			2			2						0								0
	14c後半～15c中葉	口						0						0			1			1		2
		胴				2		2						0								0
		口～底	1					1						0								0
	14c後半～15c	口				1		1						0								0
	15c頃	口						0			1			1								0
		底						0		1				1								0
盤　東南アジア?	14c・15c	口	1					1						0								0
盤か香炉	14c後半～15c	口～底						0			1			1								0
小杯	14c後半～15c中葉	口～底				1		1						0								0
八角の小杯	14c後半～15c中葉	口						0			1			1								0
		底						0				1		1								0
香炉	14c後半～15c中葉	口			1			1						0								0
		胴						0			3			3								0
酒会壷の蓋	14c頃	口						0		1				1								0
袋物	14c後半～15c中葉	胴						0		1	3	1		5								0
瓶	14c後半～15c中葉	胴		1				1						0								0
	年代不明	口						0						0			1					1
不明	15c・16c	口						0		1	6			7								0
	年代不明	口			3	1		4		1	4	4		9			4				1	5
		胴			4			4		5	20		7	32			5					5

第50表　白磁出土状況

器種	時代	部位	I地区 鍛冶屋跡 表採	I	II	III	不明	小計	I地区 翁屋敷跡 表採	I	II	III	不明	小計	II地区 薩摩在番跡 表採	I	II	III	IV	V	不明	小計
碗	12c～13c	口						0		1				1								0
	14c頃	胴						0		1	1			2								0
	明～清前半（15c～18c前半）	口						0		2	8		2	12								0
		胴						0		1	4			5								0
	16c～17c	胴						0						0			2				1	3
	16c後半～17c	口			1			1						0								0
		胴			1	2		3						0			2					2
		底			1	1		2			7			7			1					1
		口～底			1			1						0								0
	17c頃	胴			1	1		2			2			2								0
		底				1		1		1	1			2								0
	17c～18c前半	胴						0						0			1					1
	17c～18c	底			1			1						0								0
	清（17c～19c）	口						0		1	1			2								0
		胴						0			1			1								0
	17c か18c	底			1			1						0								0
	17c後半～18c前半	胴						0		2				2								0
		口～底						0		1	3			4								0
	明末～清（17c後半～19c）	口						0		3	1			4								0
		胴						0		10	29		3	42								0
碗か皿	13c か14c	胴						0					1	1								0
	14c頃	口		1				1						0								0
		底	1			1		2						0								0
	16c～17c	胴						0			1			1								0
碗・小杯類	清（17c～19c）	口		1	1			2						0								0
		胴		1	4		1	6						0								0
小碗	16c～17c	底						0			1			1								0
	17c頃	底						0			2			2								0
	18c～19c前半	口	1	1	2	1		5		4	5		1	10								0
		胴		1	2			3		2	2			4								0
		底		2	1			3		2				2								0
	18c後半～19c前半	口						0						0			1					1
	不明	口		1	1			2						0								0
		胴					1	1						0								0
小鉢	16c後半～17c前半	口						0		1				1								0
皿	14c頃	口						0			1			1			1			1		2
		胴						0		2	2			4			2			1		3
		底				1		1		1				1			1					1
	15c頃	口				2		2						0								0
	15c～16c前半	胴						0						0							1	1
	15c～16c	口			1	1		2						0								0
		胴		2				2						0								0
	明代（15c～17c後半）	口				1		1		1	2			3								0
	15c後半～16c	口				1		1						0								0
	16c頃	底			1			1			2			2								0
	不明	胴						0						0			1					1
小皿	15c～16c中葉	口						0			6			6			1			1		2
		胴						0			3		1	4								0
		底						0			4	1		5								0
小杯	16c～17c	胴						0			2		1	3								0
		底						0			1			1								0
	16c後半～17c	口						0			1			1								0
		胴						0					1	1								0
		底						0		1				1								0
	清（17c～19c）	口						0			1			1								0
		胴						0			1			1								0
	18c～19c前半	口						0		1			1	2								0
		胴						0		1	2		1	4								0
		底						0		1	3			4								0
		口～底						0			1			1								0
瓶	16c後半～17c前半	底						0						0		1						1
蓋	清（17c～19c）	口						0			1			1								0
袋物	清（17c～19c）	胴						0			2			2								0
		底						0			2			2								0
散蓮華	18c～19c前半	体部						0			1			1								0
灯火器	清（17c～19c）	破片						0			1			1								0
不明	不明	胴		1	2	1		4						0			2					2

第52表　色絵出土状況

器種	時代	部位	I地区 鍛冶屋跡 表採	I	II	III	不明	小計	I地区 翁屋敷跡 表採	I	II	III	不明	小計	II地区 薩摩在番跡 表採	I	II	III	IV	V	不明	小計
碗	17c頃	口				1		1						0								0
碗か皿	16c後半～17c前半	口						0		1				1								0
		胴						0		1				1								0
小碗	18c後半～19c前半	口						0			1			1								0
小杯	18c頃	口						0			1			1								0
瓶	17c頃	胴						0		1				1								0

第51表　染付出土状況

器種	時代	部位	I地区 鍛冶屋跡 表採	I	II	III	不明	小計	I地区 翁屋敷跡 表採	I	II	III	不明	小計	II地区 薩摩在番跡 表採	I	II	III	IV	V	不明	小計
碗	15c後半～16c前半	口				1		1						0								0
		胴						0						0			1					1	2
	15c後半～16c中葉	口			1			1						0								0
		胴			3			3						0								0
		底				1		1						0								0
		口～底				1		1						0								0
	16c前半～中葉	口		1	1	1		3		3	8			11			2				2	4
		胴						0		1	7			8			2					2
		底						0	1	2	6			9								0
	16c頃	口			1			1					1	1		1						1
		胴						0		1	1			2								0
		底			1			1						0								0
	16c前半～17c前半	口					(1)	1		1	1			2		1	2				1	4
		胴						0		1	3			4		3	3				2	8
		底						0		2	4			6								0
	16c後半	底	1					1						0								0
	16c後半～17c前半	口		1				1		3	7	2		12								0
		胴			2	1		3		5	15			20			1					1
		底		1	2			3						0								0
	16c後半～17c後半	口						0			1			1								·0
	17c前半	口			3			3						0								0
		底			2			2			1			1								0
	17c頃	口	1	1	2			4		1	4			5		1	1					2
		胴			3	3	1	7	2	3	8	1		14		1	2					3
		底	1	4				5		2	1			3			2					2
		口～底				1		1						0								0
	17c～18c前半	口						0						0							1	1
		胴						0						0			1				1	2
	17c～18c	胴						0		1				1								0
	清（17c～19c）	胴						0			2			2								0
	17c中葉～18c前半	底		1				1						0								0
	17c後半	口		1	4	1		6						0								0
		胴		6	15	3		24						0								0
		底		1				1						0								0
	明末(17c後半)	胴						0			1			1								0
	17c後半～18c前半	口						0	2	10	66		3	81								0
		胴				1		1	1	25	122		19	167								0
		底						0			4			4								0
	17c後半～18c中葉	胴						0						0			1					1
	17c後半～18c	胴			2			2						0								0
		底						0			2			2								0
	明末～清(17c後半～19c)	口						0	1	12	60		9	82								0
		胴						0		34	100	1	14	149								0
		底						0			4			4								0
	18c頃	口		3	4			7		2	8	1		11								0
		胴		1	4			5		7	38	2	2	49		3					1	4
		底		2				2			6			6			2					2
		口～底				1		1						0								0
	18c中葉～19c前半	胴		1	1			2						0								0
	18c後半～19c前半	口			1		1	2						0								0
		胴			1			1						0								0
	不明	口		2	1			3						0								0
		胴		2	8	3		13						0								0
碗か皿	明（15c～17c後半）	胴						0		2	7			9								0
		底						0		1	3			4								0
	17c頃	口			2			2						0								0
		胴		1	2			3						0								0
		底		2	2	1		5						0								0
	清（17c～19c）	胴		3	4			7						0								0
		底		2	4			6						0								0
小碗	17頃c～18c前半	底						0			1			1								0
	18c頃	口						0		1	2			3			1					1
		胴						0			1			1								0
		底						0			1			1								0
	18c後半	口						0		1				1								0
		胴						0			1			1								0
小鉢	15c後半～16c前半	口					2	2						0								0
		胴		1				1						0								0
		底				1		1						0								0
鉢	17c後半～18c前半	底						0	(1)					1								0
皿	1590～1640年代頃	底				1		1						0								0
	16c前半～中葉	胴						0						0			1					1
		口～底						0						0			1					1
	16c後半～17c前半	口						0		2	4			6								0
		胴						0			2			2								0
		底						0	1	3	1			5								0
	17c前半	胴						0			1			1								0
		底				1		1			1			1								0
	18c頃	胴				1		1			1			1								0
		口～底	1					1						0								0
小皿	16c前半～中葉	口				1		1						0								0
		底						0			1			1								0
	18c頃	底						0		1	1			2								0
		口～底						0			1			1								0
小杯	16c～17c	口						0			3			3								0
		底						0		1	1			2								0
	16c後半～17c前半	口						0		5	17		2	24								0
		胴						0			9			9								0
		底						0			1			1								0
		口～底				1		1						0								0
	17c前半	底						0		1	1			2								0
	17c後半～18c前半	口					1	1		1	2			3								0
		底						0					1	1								0
		口～底				1		1						0								0
	18c頃	口						0			2			2								0
		底						0		1	2			3			2					2
		口～底						0			3			3								0
瓶	15c後半～16c	底		1				1						0								0
	16c頃	胴						0		1	1			2								0
	16c～17c前半	底						0			1			1								0
	16c後半～17c前半	胴		1	1			2						0								0
瓶か壷	16c後半～17c前半	底	1					1						0								0
不明	16c後半～17c前半	胴						0						0			2					2
	17c　明後半～清前半	胴						0						0			4				1	5
	18c後半～19c前半	胴						0						0			1				2	3
	18c頃	胴						0						0			1					1
	不明	口						0						0			3					3
		胴						0						0		2	12				11	25
	不明　産地不明	口						0						0			2				2	4
		胴						0						0		1	4				3	8

慶来慶田城出土の脊椎動物遺体

金　子　浩　昌

小　結

慶来慶田グスクの調査で得られた動物遺体は、西表島におけるこの時期の動物遺体の内容をわれわれにはじめて明かにするものであった。この資料はかって筆者が報告した上村遺跡（註１）との比較研究なども重要な課題であるが、これについてはまたべつの機会に述べるとして、ここでは本遺跡動物遺体の特徴となる点についてふれておきたい。

魚　類：検出された魚種には遺跡における代表的な種類をみたが、量的にはいずれの種類も少なかった。おそらくこのような様相は別に述べるような肉類の供給が魚から獣肉に変わってきたことによるのであろう。ウシ、ブタ、ヤギなどからの肉の供給は魚よりも多く、かつ保存もきくものであったことに基因すると思われる。

爬虫類：セマルハコガメの出土があり、遺跡からの検出例としてははじめてである。

鳥　類：ニワトリその他があるのみである。ニワトリの飼育はグスク期以降である。やや大形であり、野鶏というよりもすでによく飼い慣らされた品種であったろう。本土の中世遺跡から出土する標本と変わらない。遺体の出土が少なく、この地では飼育個体数はまだ少なかったのである。

獣　類・イヌ：鍛冶屋跡地点での出土標本がある。下顎骨は表採品であるが、骨質の保存の状態は現今のものではない。近、遠心部を欠損するが復元長130.0㎜になる。中形犬の大きさであって、この地域の在来犬よりも体型は大きい。おそらく外来のイヌであろう。脛骨は全長165㎜に達し、上記の下顎骨個体よりもさらに大きく中大形である。しかし骨体は華奢で、石器時代犬のような形質はない。これも外来品種であろう。これらのイヌの骨格には解体時についた切痕が明瞭である。沖縄の石器時代遺跡あるいはそれにつづく時期の遺跡から出土するイヌの遺骸にこうした解体痕をみる例は希である。おそらくイヌを食べる風習をもつ別の文化との接触を考えさせる。沖縄においては基本的にはイヌを常習的に食べる風習はなかったはずである。

イエネコ：沖縄におけるネコの飼育はグスク期以降である。日本本土における様相とほぼ変わりないとみている。形質的にも同じである。しかしどのような経緯でこの地にもたらされることになったかは明かではない。

ジュゴン：少ないが本種の遺骸が検出されている。後期以後ジュゴンの遺骸の検出は少なくなる。ジュゴンに関わる伝承もこの頃の時期からのものなのであろう。考古資料と合わせ考えていくのも今後の課題である。

イノシシ属：鍛冶屋跡地点出土のイノシシ属遺骸はもっとも多く検出されている。これらの遺体の多くは歯牙、四肢骨の形質がリュウキュウイノシシにみるのと大きく変わらない点、あるいは歯牙の萌出の状況が２才から３才を中心として、さらに3.5才以上の個体を含む率の高いことから、狩猟によって捕獲されたことが推定される。しかし、さらに遺体の詳細をみるとリュウキュウイノシシとは形質を異にする骨格も検出される。大腿骨の例でサイズの大形のもののあること、特に図版61－26に示した大腿骨は近位骨端の外れる若い個体であるが、現長182.0㎜を計測したものである。骨体の中央径は15.0㎜と細く、またイノシシ特有の後外側稜の発達が弱く、華奢な形質の骨である。これらはおそらく家畜種として当時飼われていたブタであったと考えられる。

薩摩在番跡のイノシシ属遺体は標本の数も少なく、詳細は不明であるが、形質にはブタの特徴をみることができる。この地区の年代は近世とされ、すでにブタの飼育が一般化していた時期である。

ウシ：鍛冶屋跡地点からウシの遺体の出土がやや多くみられた。おそらく10数個体になるのではないかと考えている。イノシシ、ブタそしてウシはここの住む人々の食生活の中での漁食への関心を後退させていったと思われる。ウシの遺骸は歯牙をみるとＭ３の萌出する個体が多い。役畜として使役された後に食用に当てられたのではないかと思われる。

註文献

註１　「上村遺跡」『沖縄県文化財調査報告書　第98集』　沖縄県教育委員会1991年３月

第V章　調 査 の 成 果

西表島祖納には、慶来慶田城用緒に関する幾つかの口碑伝承が伝わっている。伝承では、祖納半島を最初に統治し村づくりを行ったのが大竹祖納堂儀佐で、後少し遅れて慶来慶田城用緒が半島の南側に移り住み、この地を治めたとされている。大竹祖納堂儀佐についてはその記録が皆無で不明点が多いが、慶来慶田城用緒という人物に関しては、ある程度の記録が残り実体がはっきりしている。そのため、今回の調査では、慶来慶田城遺跡（慶田城村）の規模と年代的な把握を押さえることを目的として、彼が居住していたという「慶来慶田城翁屋敷跡」（町指定史跡）とその西隣の「伝鍛冶屋跡」、さらに17世紀中頃に薩摩藩が駐屯していたとされる「伝薩摩在番跡」を調査対象として発掘・測量を行った。その結果、石積みの状況からすると半島北側の「上村遺跡」の石積みの整備・配列の状態に比べ、各屋敷前の通路（道）はさらに整備がいきとどき、計画的な村造りが行われていたと考えられる。（第２図、屋敷配置図）このような屋敷間の配列や通路の整備面から見て、慶来慶田城用緒（慶田城村）は大竹祖納堂儀佐に遅れて半島南側に居を構えたと推察されることから、伝承通り「上村遺跡」に比べて時期的に新しいと考えられる。しかし、時期的な決定に問題が無いわけではなく、出土遺物を見ると「上村遺跡」よりも白磁や青磁等に古手遺物の出土があることから、当地には「上村遺跡」よりもさらに時期的に古く、石積みの伴わない集落の存在の可能性をも窺わせている。また、両村が同時期に存在していたかなど、時期的な比較等には、まだ資料不足の感が拭えないのが現状である。

今回の調査によって、多くの遺構や遺物が検出された。遺構に関しては、Ⅰ地区の「伝鍛冶屋跡」において方形状石組遺構とその周辺にピットが確認された。方形状遺構の内部からは人骨が検出され、検出状況が散乱状態でなく、歯骨が集中し上腕骨と尺骨、橈骨が繋がった形で検出されていること、また、ガラス玉一点が遺構北西隅の板石上から出土していることから、この遺構は埋葬施設として押さえて良いのではないかと思われる。他にこの遺構内から遺物の出土はなかったため、年代決定には資料不足であるが、遺構南側隅から検出されている白磁（第15図11）が伝世されていたとすると、16世紀から17世紀頃の可能性が考えられる。Ⅱ地区では、「薩摩在番跡」の探求を目的として調査を行ったが、その場所を確定するまでには至らなかった。発掘の行われた「伝薩摩在番跡」では、柱穴群、溝状遺構と屋敷内道と推察される石敷・石段遺構が確認された。しかし、屋敷内中央付近での調査では、発掘地が小範囲のため柱跡の検出ができず、よって母屋と思われる建物跡の検出には至らなかった。発掘地の一部には、耕作の影響を受けていない包含層があり、層中に集石遺構と煤の多く付着した復元可能な土器が数多く出土した。また最下層からは羽口の未完成品と思われる砂岩塊が出土している。これら包含層や遺構・遺物は極めて規模の小さい範囲での確認であり、また遺構の性格や面的広がりの把握のためには残すべきだと判断し、今後の究明のために現地に保存した。

遺物については、土器を主体として陶磁器等や自然遺物が数多く検出された。土器はある程度の出現時期が把握できた。鍋形Ⅰ類は14世紀から15世紀頃と考えられ、Ⅱ地区の「伝薩摩在番跡」では多くの復元土器が得られている。青磁には鎬蓮弁文碗等や線彫細蓮弁文碗があり、14世紀前半から16世紀代と幅があるが、両地区とも主体となる時期は15世紀末から16世紀で占めている。白磁は玉縁碗やビロースクタイプ碗を含む13世紀中頃から14世紀中頃の古手の遺物が出土しているが、主体となる時期は15世紀末から17世紀で占めている。県内初確認と見られる蓮華（第16図25）が検出されている。本土産陶磁器は、肥前系染付が中心で僅かに京焼き瀬戸系・美濃系の陶磁器が検出されている。18世紀頃が主体であり、明治以降の陶磁器が多く得られた。その他特筆される遺物として、県内では報告例の見られない、あるいは少ないと言える中国景徳鎮の宜興窯産の水柱の破片（第28図）や鹿角製の固定式ヤス（第42図１）が検出されている。また、「伝薩摩在番跡」付近の屋敷から持ち出された瓦（桟瓦）からは製作所とある程度の製作年代を押さえることができ、明治に開始された西表島での石炭採掘時期に本土から瓦が搬入された可能性が高いと考えられる。

今回の調査では、慶来慶田翁屋敷やその周辺屋敷が伝承や石積みの配置状況から伝承通り新しいという結論に至ったが、出土遺物の中には古手の遺物も多く含まれており、今後の調査によっては時期的位置づけが逆転するか、または下層にさらに古い村跡が存在する可能性をも秘めている。将来、他屋敷跡の追加調査によって両村の成立期等の詳細を知ることが出来るのではなかろうか。今後の調査に期待したい。

付　編

西表島祖納伝鍛冶屋跡出土の人骨

琉球大学医学部解剖学第１講座
土 肥 直 美・北 條 真 子

はじめに

平成５年度から８年度にかけて、沖縄県教育委員会による西表島慶来慶田城遺跡の発掘調査を行われ、少量の人骨が発見された。人骨は平成８年度の調査の際に、慶来慶田城翁屋敷西側にある伝鍛冶屋跡の石組遺構から検出されたものである。出土例の少ない八重山地方の貴重な追加例であったが、残念ながら保存状態が悪く、形質等の詳細を知ることはできなかった。以下に得られた所見を報告する。

出土状態

石組遺構内の人骨は一見散乱しているように見える。しかし、左の上腕骨と前腕の尺骨はほぼ関節した状態にあり、橈骨も原位置に近い場所から出土している。一方、破損の著しい頭骨は、本来の位置よりもやや下方に移動しているように見える。

人骨の出土状態から見て、本遺構には一体分の人骨が埋葬されていると思われるが、今回取り上げられた人骨はその一部のみで左の上半身部分である。また、小規模な撹乱を受けてはいるものの、人骨の位置関係からは一次葬の状態であることが推測される。

人骨所見

【出土部位】

検出された人骨の部位は表１に示すとおりである。また、図１に出土部位の骨格における位置を示している。人骨は１体分であるが、この他、遺構の外からも右大腿骨骨体部が検出されている。

出土して歯は以下の歯式のようにまとめることができる。歯の咬耗度はBrocaの１度である。

M１	P１P２M１	
M３M２M１○○○○○	○○C　　M２	

○　歯槽開放

右下顎M１M２以外は遊離歯

【性別および年齢の推定】

人骨の情報量が少ないので性別の推定は難しいが、上腕骨と尺骨の骨端部がかなり頑丈であることから、性別は男性の可能性が強いように思われる。年齢は歯の咬耗があまり進んでいないので、20～30代の成年と推定される。

なお、遺構の外から検出された大腿骨も比較的頑丈で、おそらく男性のものと思われる。

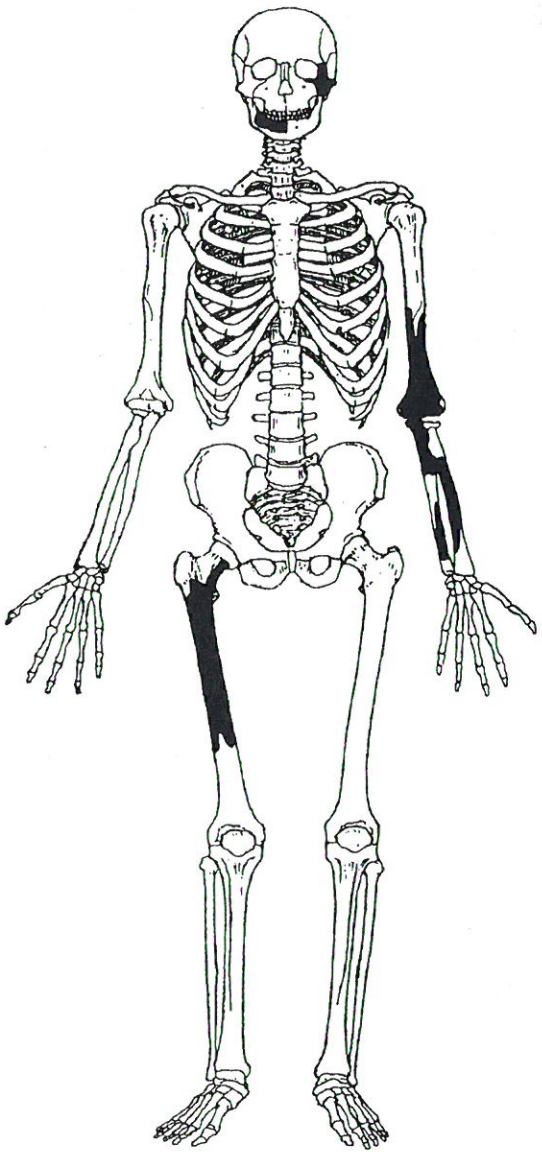
【形　質】

骨の保存状態が悪いので遺構外の大腿骨以外は計測できなかった。大腿骨の計測値を表２に示す。粗線の発達が良好であるが、柱状性は強くない。骨体上部は前後方向にやや扁平である。

ま と め

以上のように、西表島伝鍛冶屋跡の石組遺構から出土した人骨は、頭骨片と左上肢骨片が１体分であった。人骨はおそらく20～30代の男性と思われる。また、遺構外からも男性の大腿骨１本が検出されているが、同一個体に属するものかどうかは分からない。

謝辞　八重山地方における人骨調査の機会を与えていただいた、沖縄県教育委員会の皆さまに心から感謝いたします。



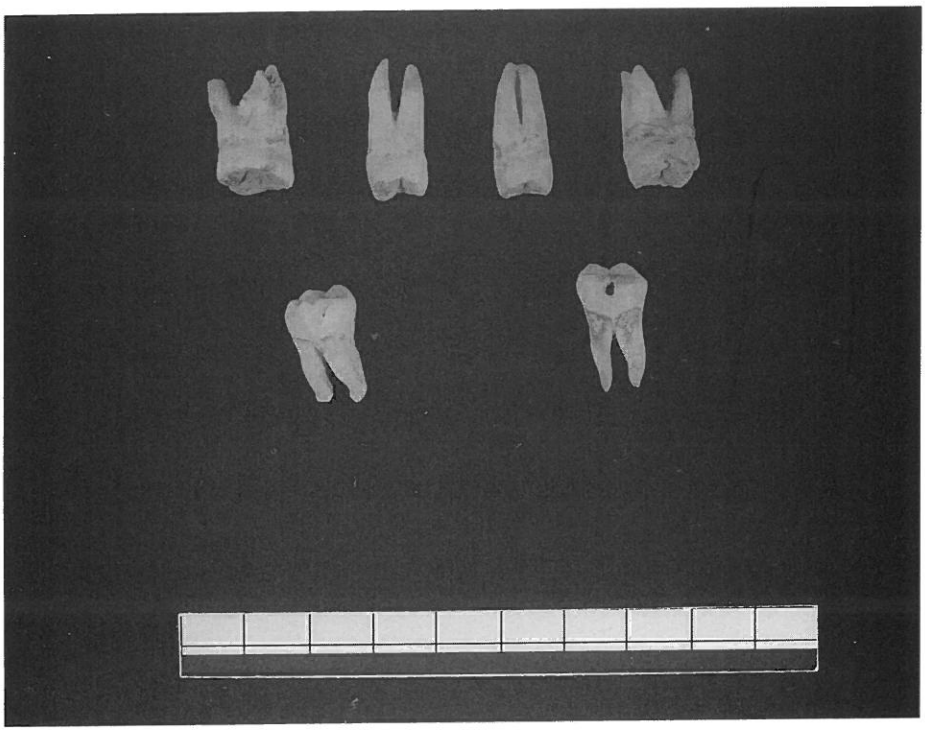
第77図　人骨の出土部位

表１　出土人骨

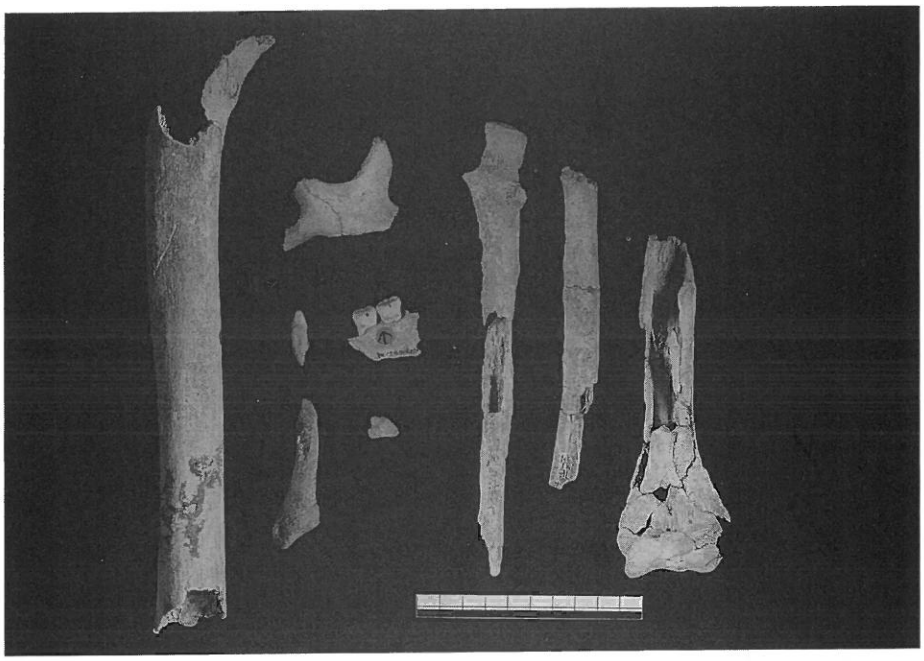
取り上げ番号	人　骨　部　分
①	下顎右第３大臼歯
②	下顎左第２大臼歯
③	上顎右第１大臼歯
④	上顎左第２大臼歯
⑤	上顎左第１小臼歯
⑥	上顎左第２大臼歯
⑦	頭頂骨片、頭骨小片、左上腕骨下半部
⑧	左尺骨、左頭骨骨体部、頭骨細片
⑨	頭骨小片、右側頭骨外耳孔部小片、下顎骨片
⑩	左第５中足骨
遺構内　上	左上顎骨前頭突起片、骨片少量
遺構内　上中	骨片少量
遺構内　中	頭骨片少量
遺構内	頭骨小片少量
	下顎左犬歯、右下顎片（第１・第２大臼歯）

表２　遺構外出土大腿骨（♂・右）の計測値（㎜）

6	骨体中央部矢状径	27
7	骨体中央部横径	28
8	中央周	85
9	骨体上横径	32
10	骨体上矢状径	24



西表伝鍛冶屋跡出土の歯牙



西表伝鍛冶屋跡出土の人骨

図　　版

図版１　遺跡内屋敷：１．第14号屋敷（南石垣）２．第14号屋敷（門）３．第５号屋敷内井戸　４．第９・10号屋敷（西石垣）
５．第37号屋敷（南石垣）６．第38号屋敷（南石垣）７．第41号屋敷（西石垣）８．第42号屋敷（南石垣）

図版 2　発掘作業風景（Ⅰ・Ⅱ地区）

上面
（南側から）

上面
（東側から）

側面
（南側面）

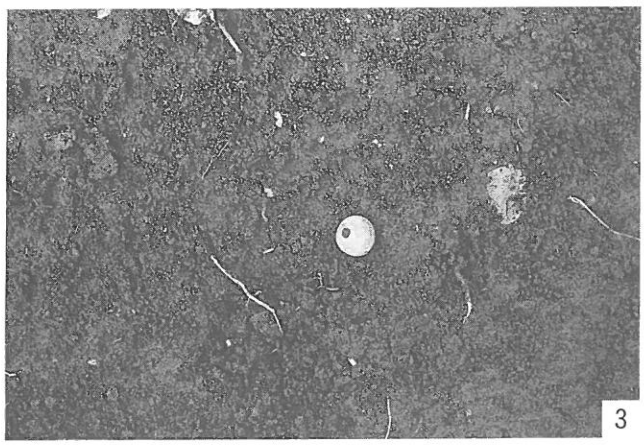
図版３　Ⅰ地区：鍛冶屋　方形状石組遺構①

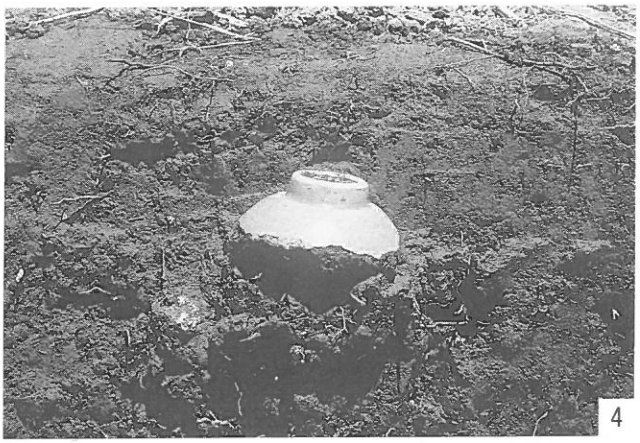
掘り下げ状況
（東半分）

礫除去後
人骨出土状況
（上面）

人骨出土状況
（側面）

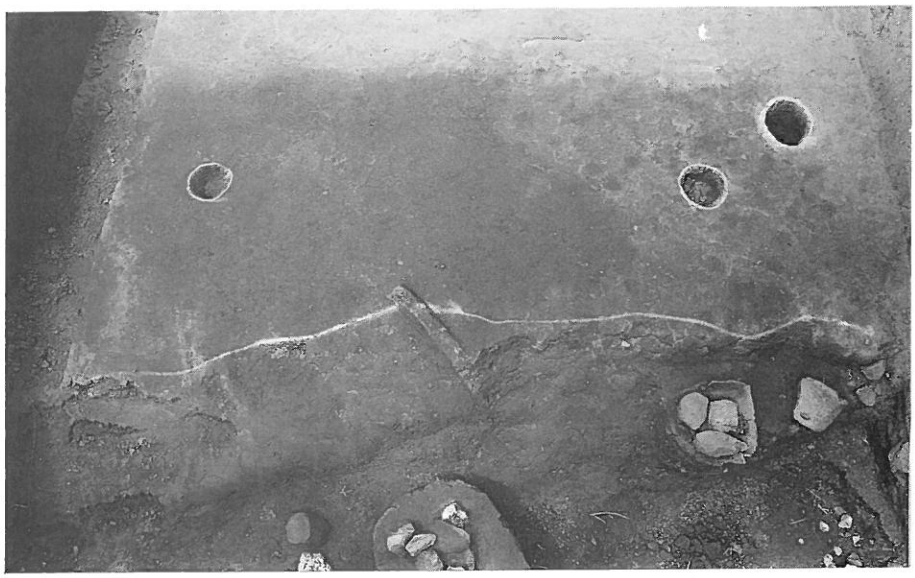
図版 4　方形状石組遺構 ②





図版５　Ⅰ地区：遺物出土状況　１．骨製ヤス　２．石斧　３．ガラス玉　４．青磁　５．青磁・白磁

図版６　Ⅱ地区上：石敷・石段遺構（Ｅ－１，２）
　　下：柱穴群（Ｃ－３）

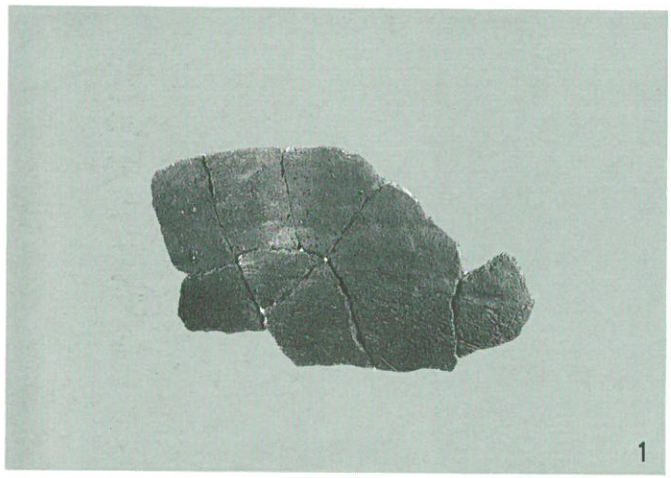


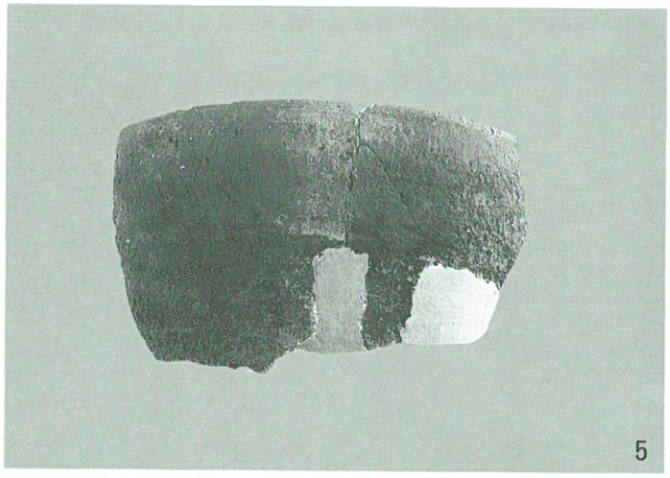
遺構検出状況

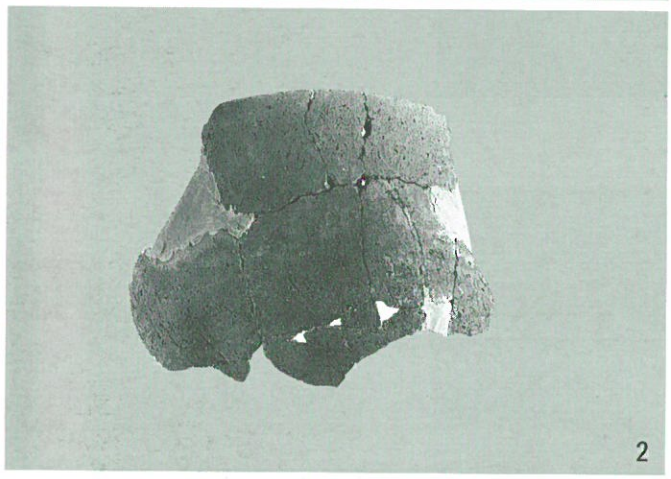
集石遺構

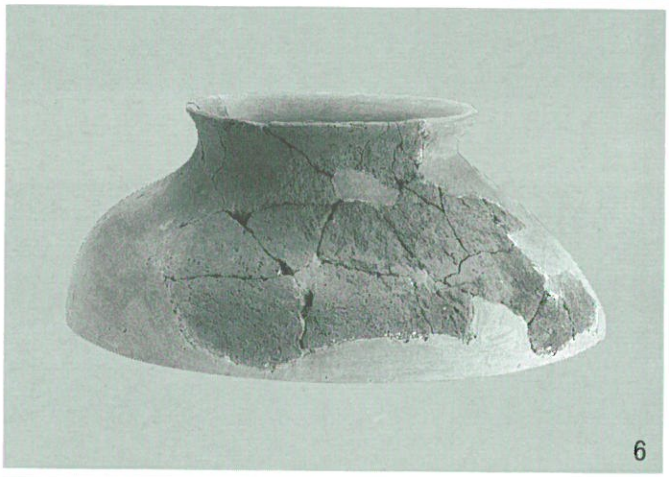
土器検出状況

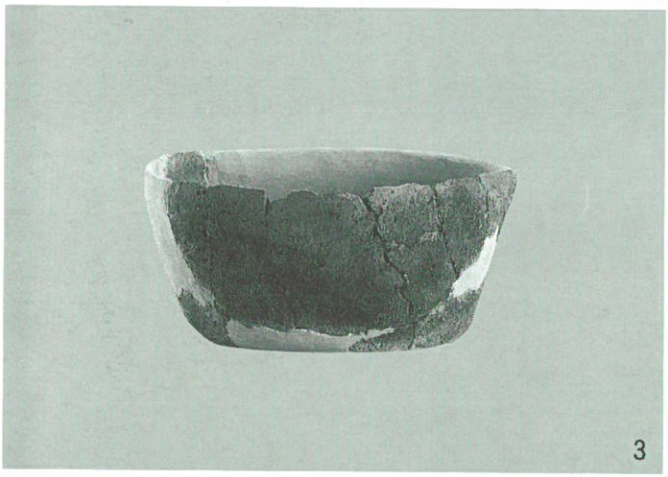
図版７　遺構検出状況（Ｄ－５）

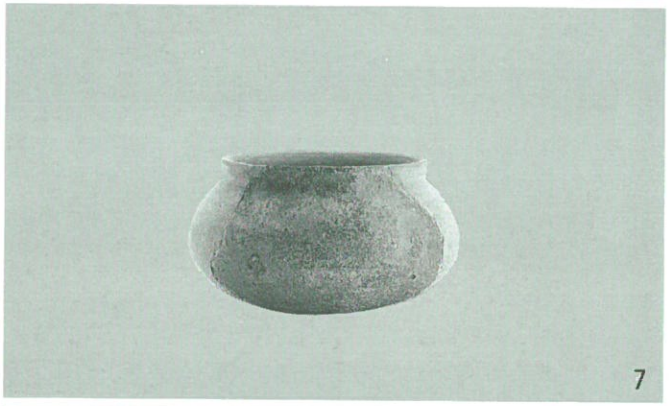




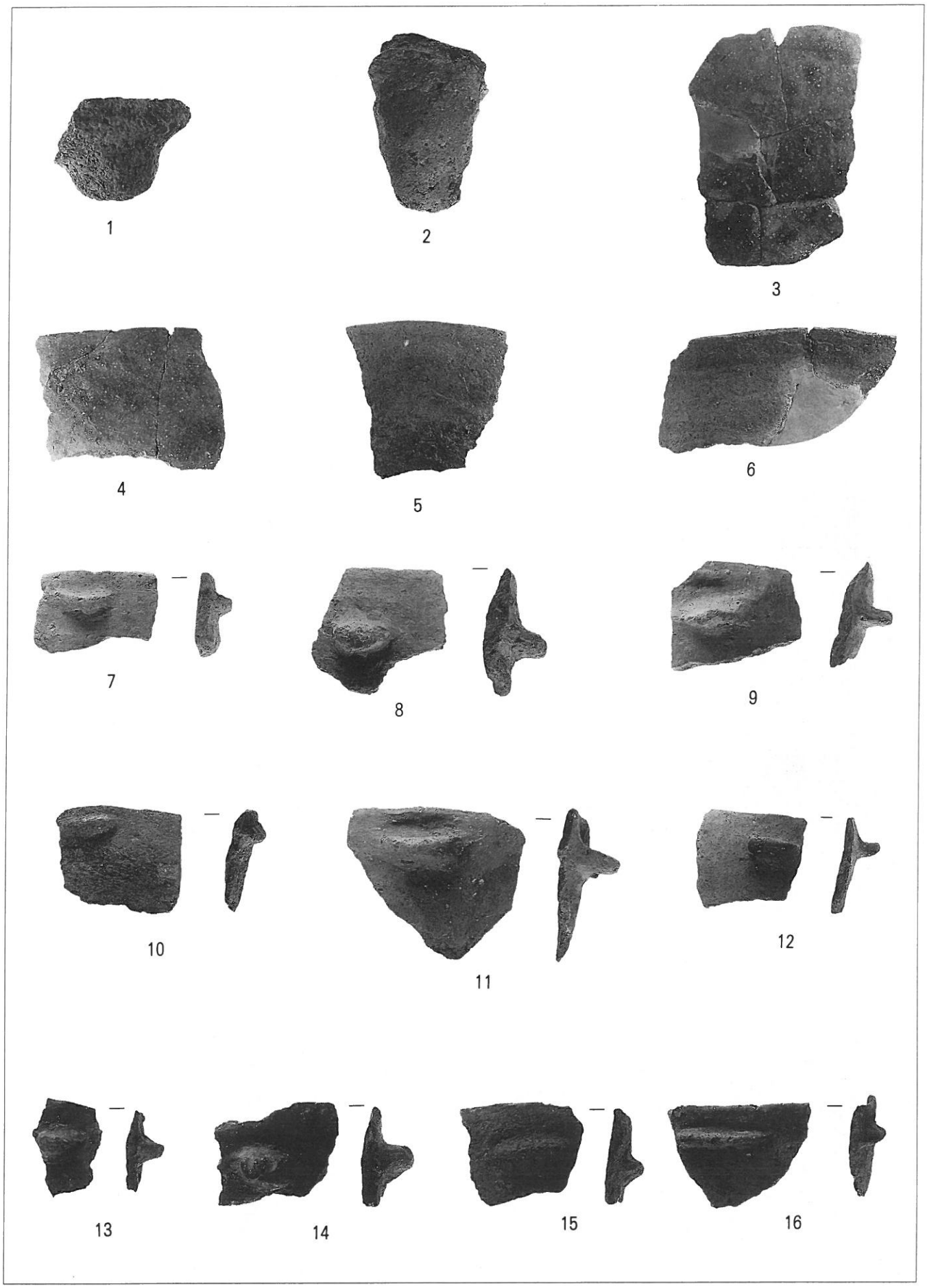




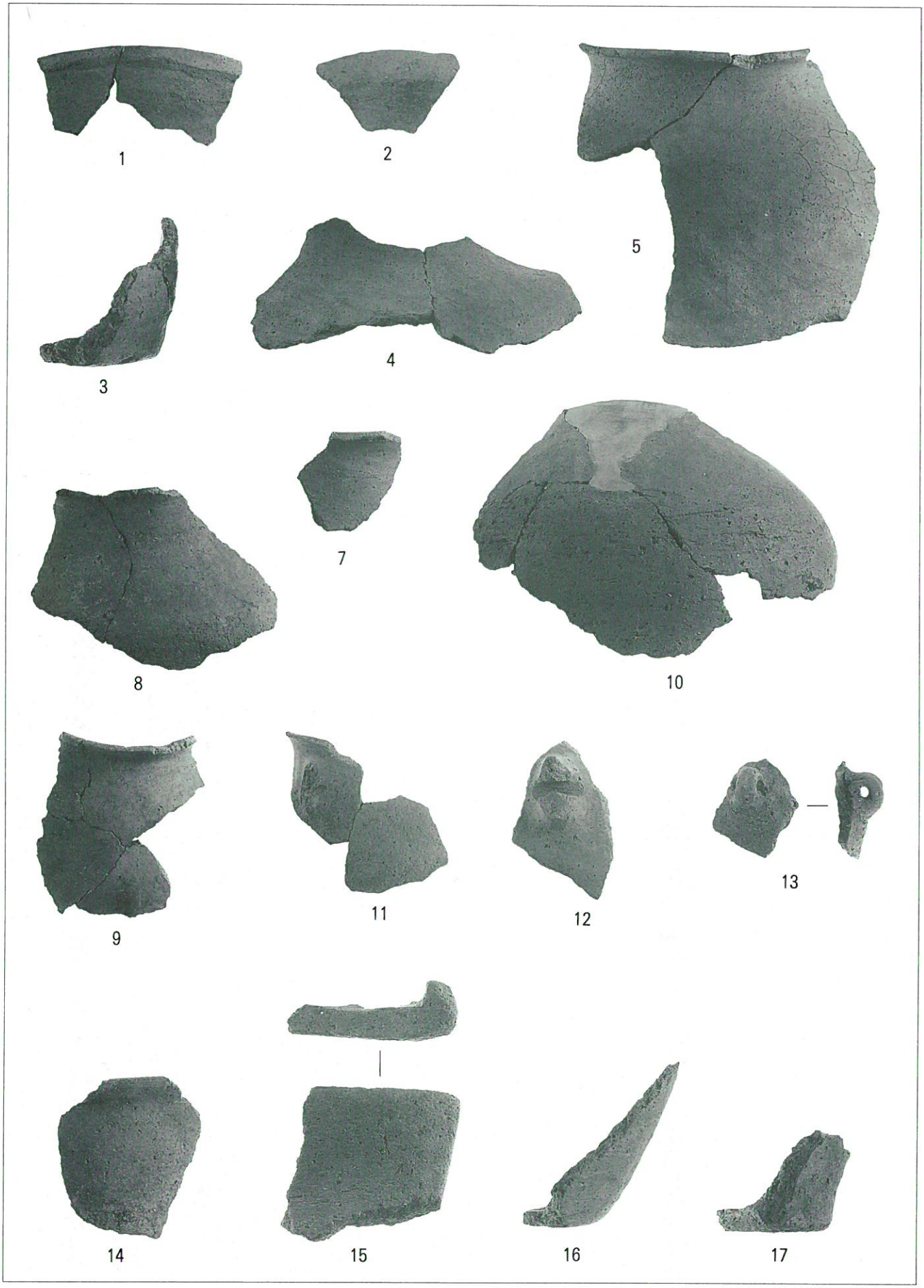




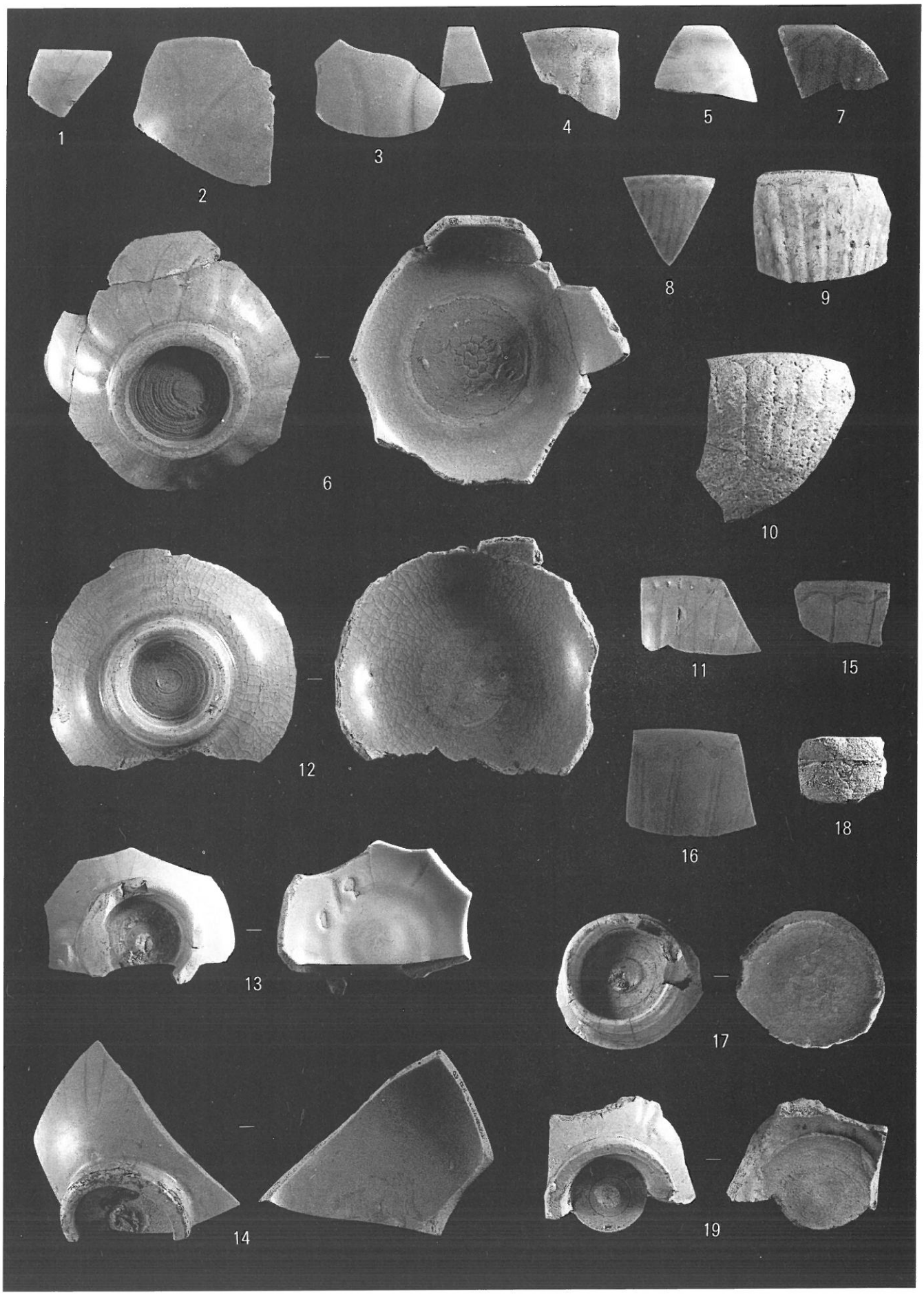
図版 8　土 器



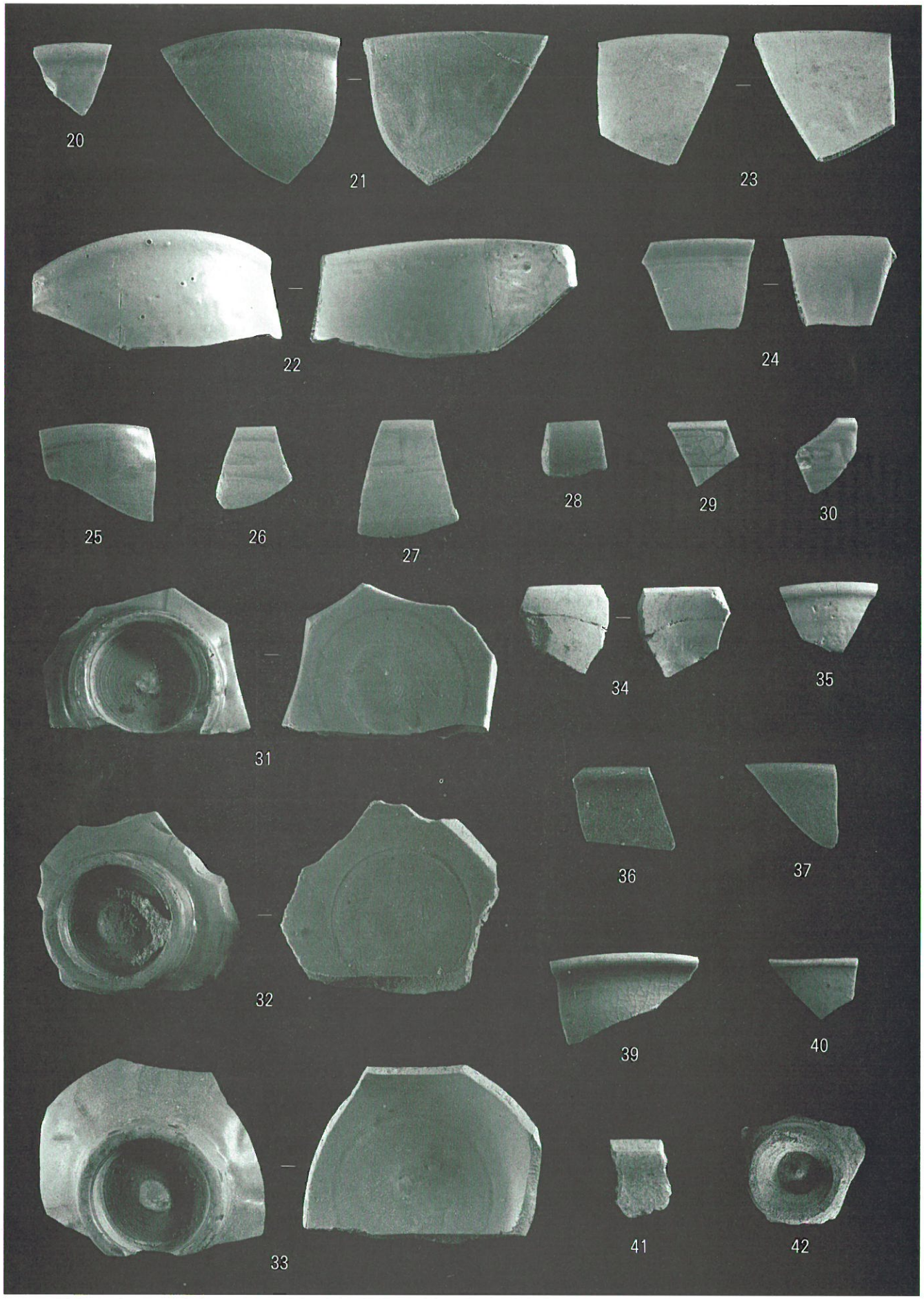
図版９　パナリ焼（１・２）、土 器（３～16）



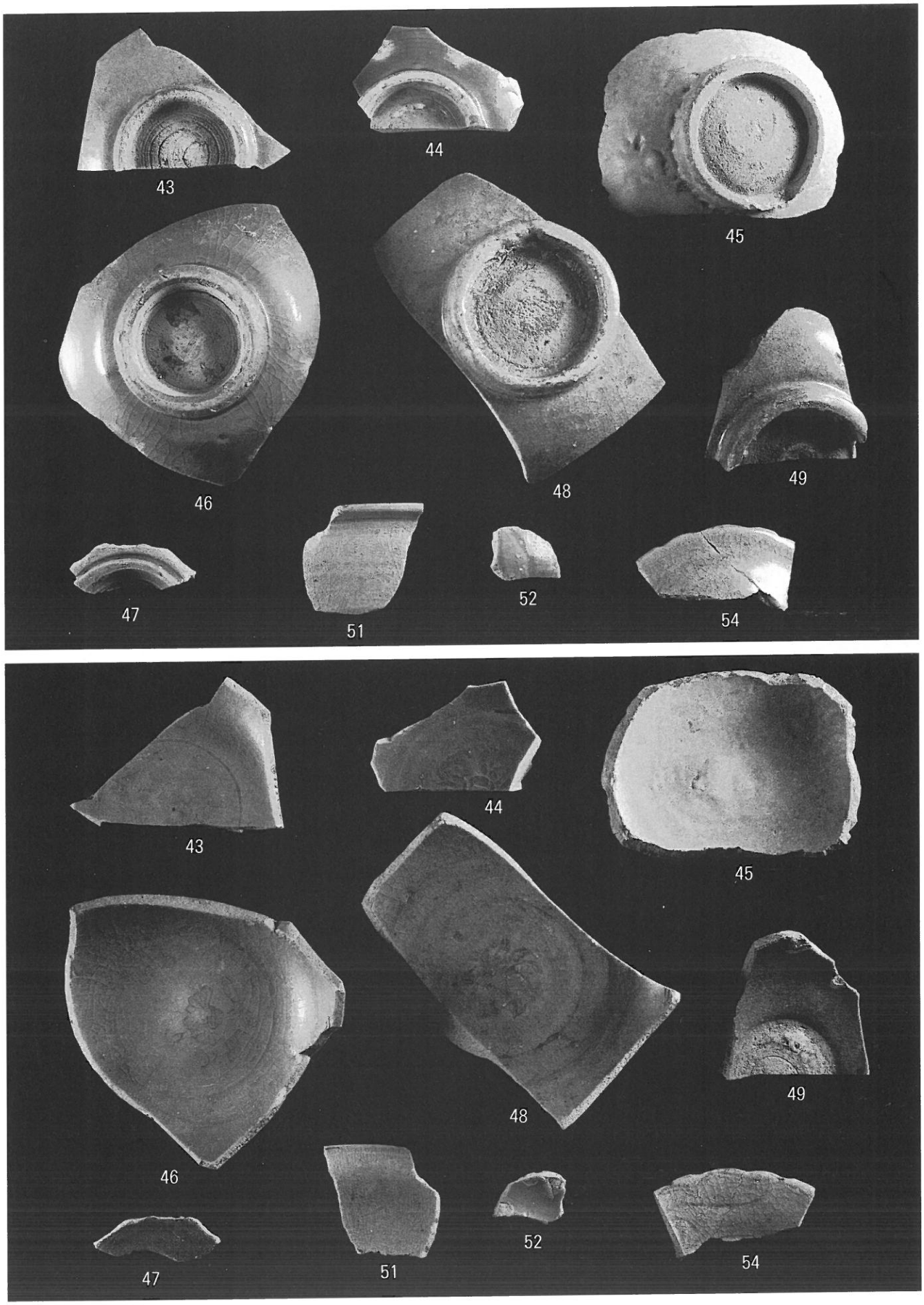
図版10　土 器（1～3）パナリ焼（4～16）



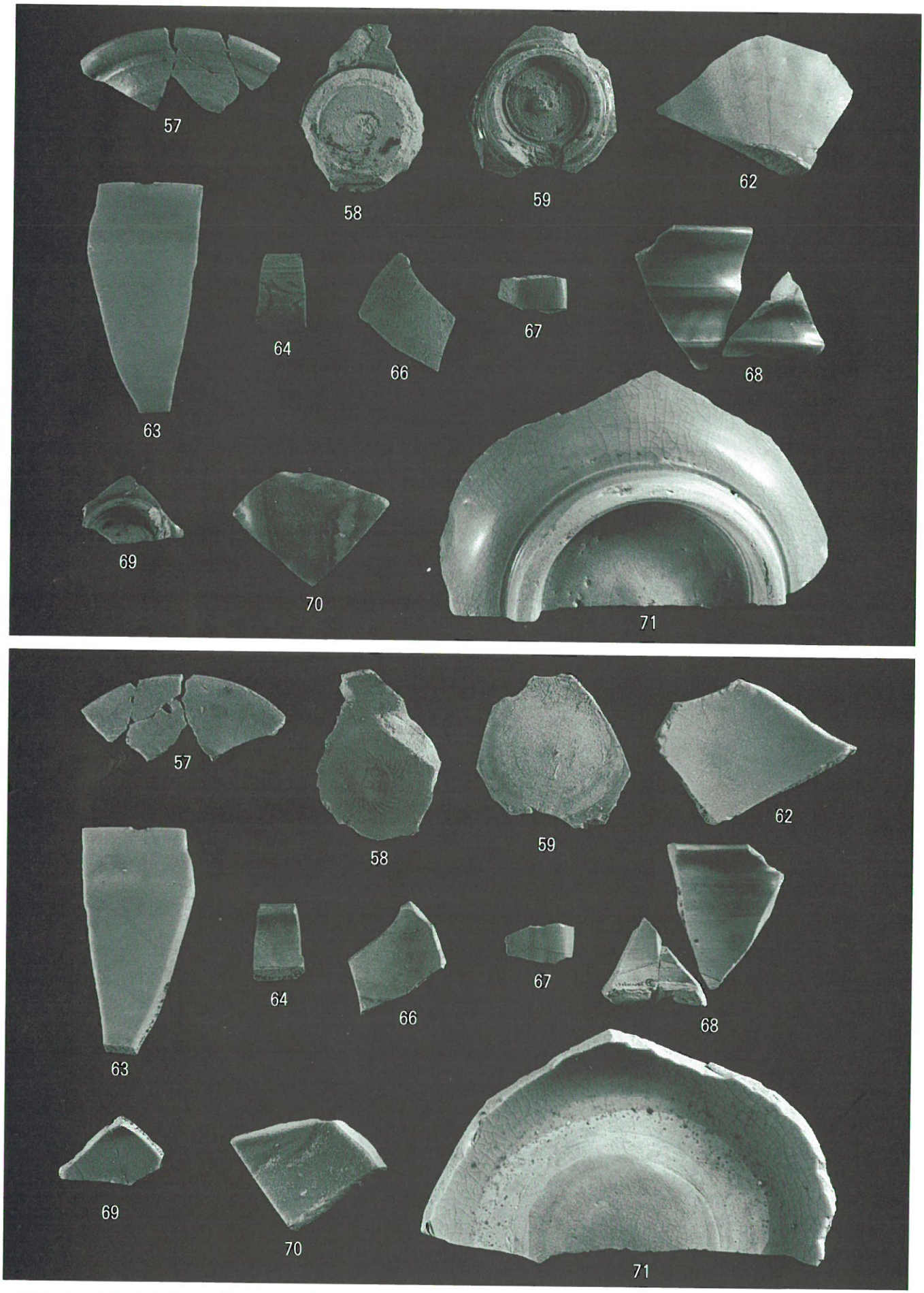
図版11　青 磁①



図版12　青 磁②



図版13　青 磁③（上：表面　下：裏面）

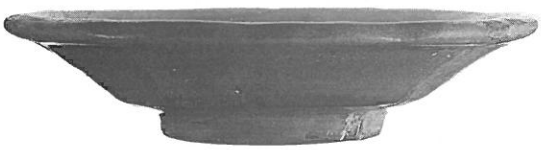


図版14　青 磁④（上：表面　下：裏面）

38

55

50

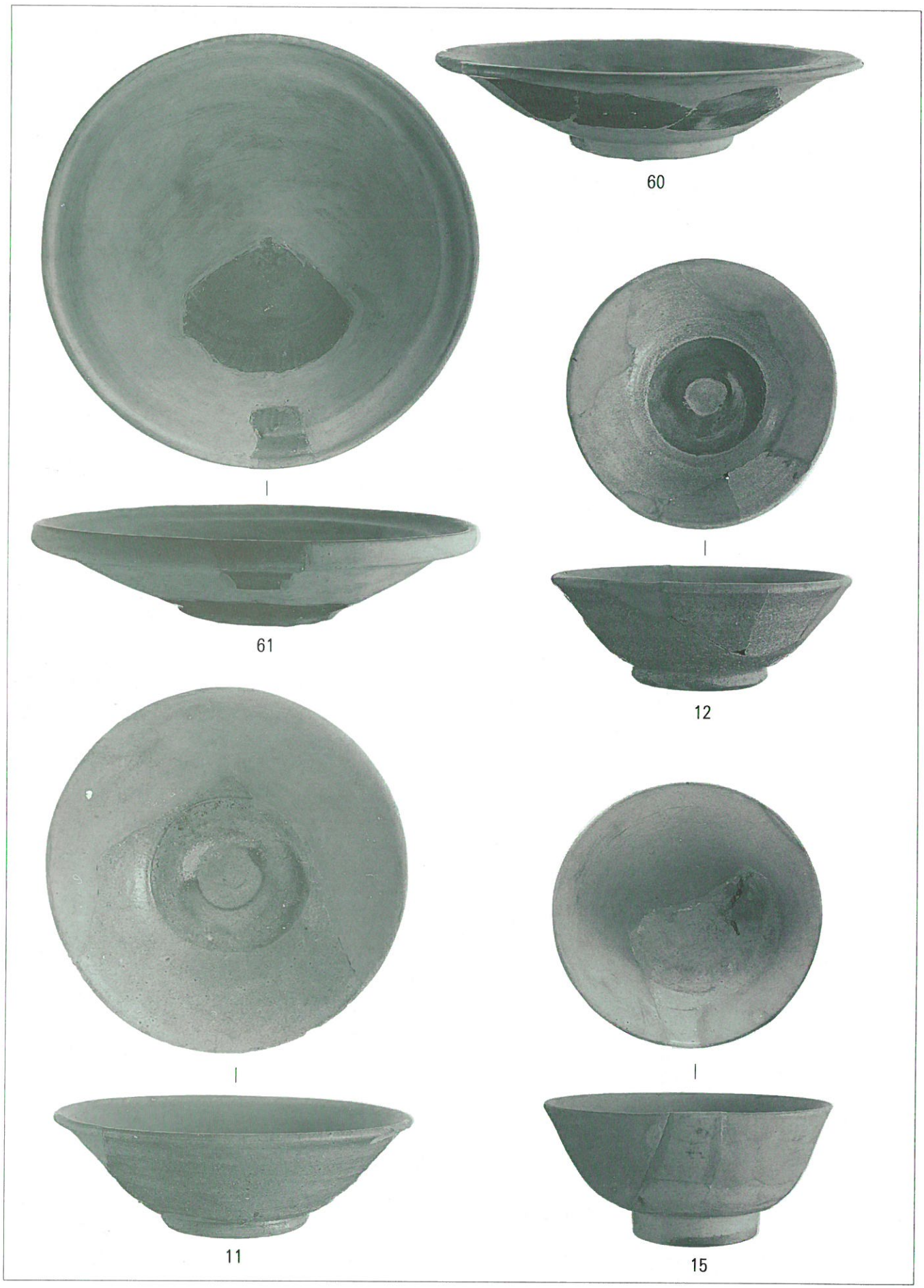


53

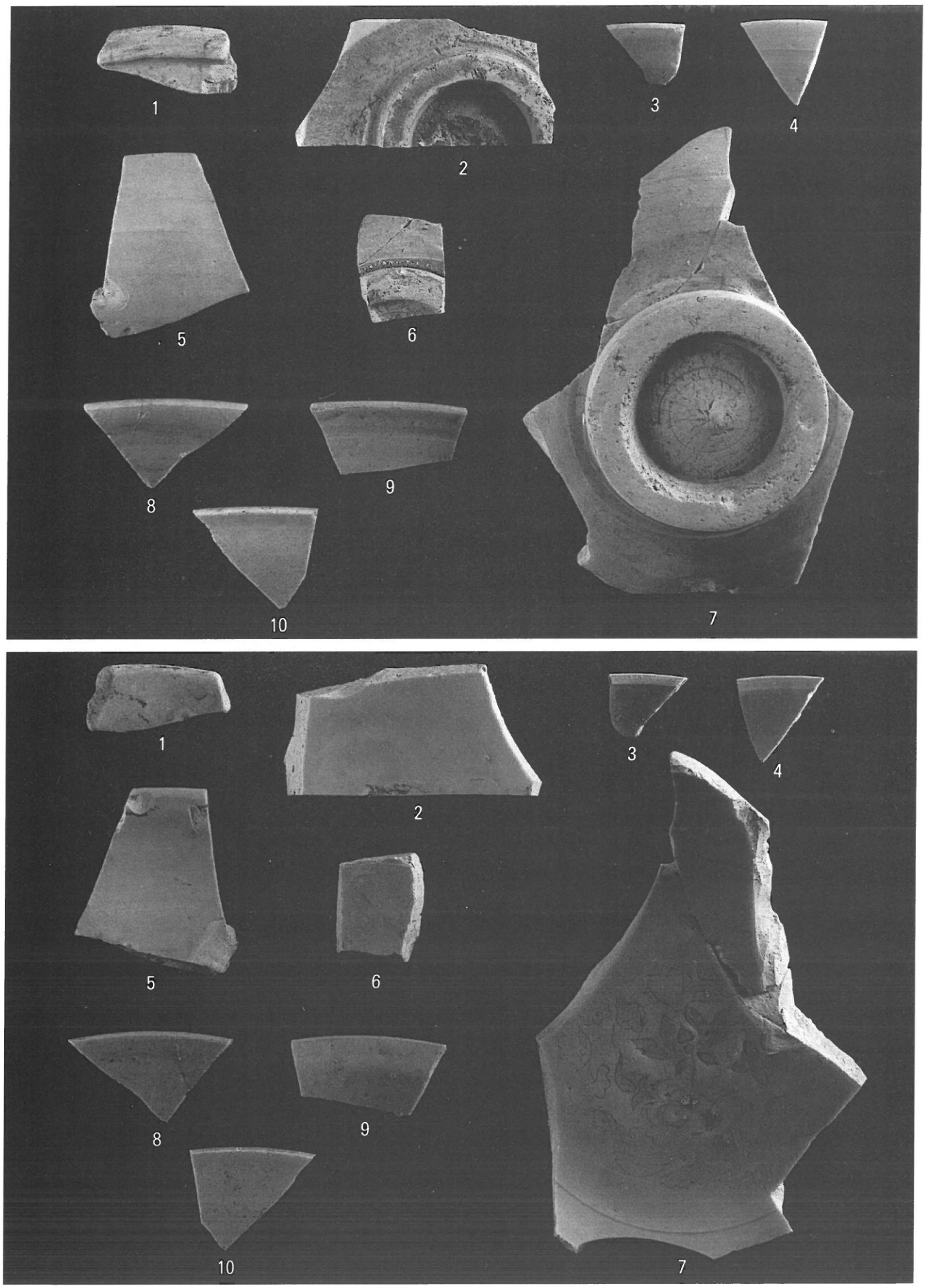
65

56

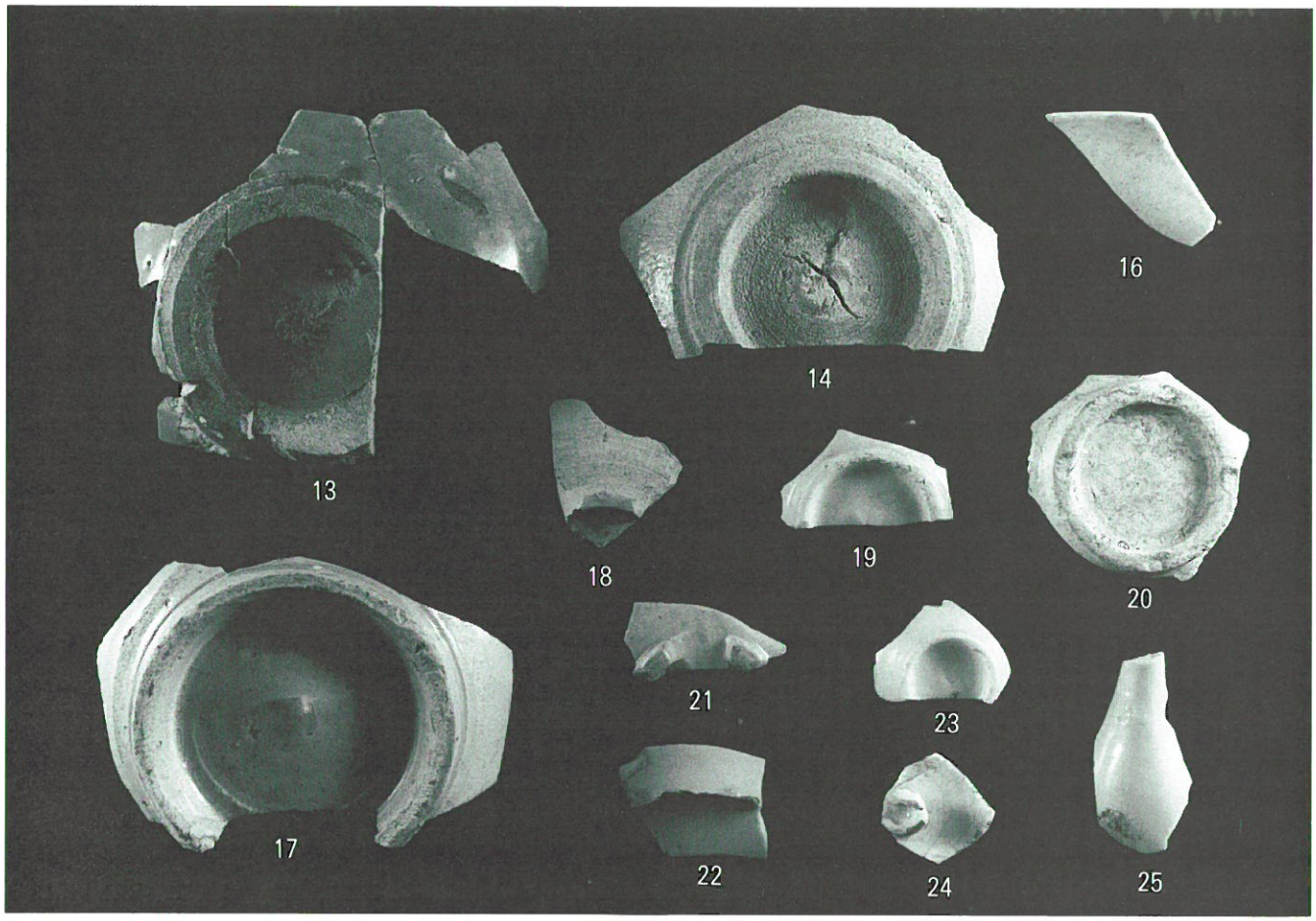
図版15　青 磁（復元）

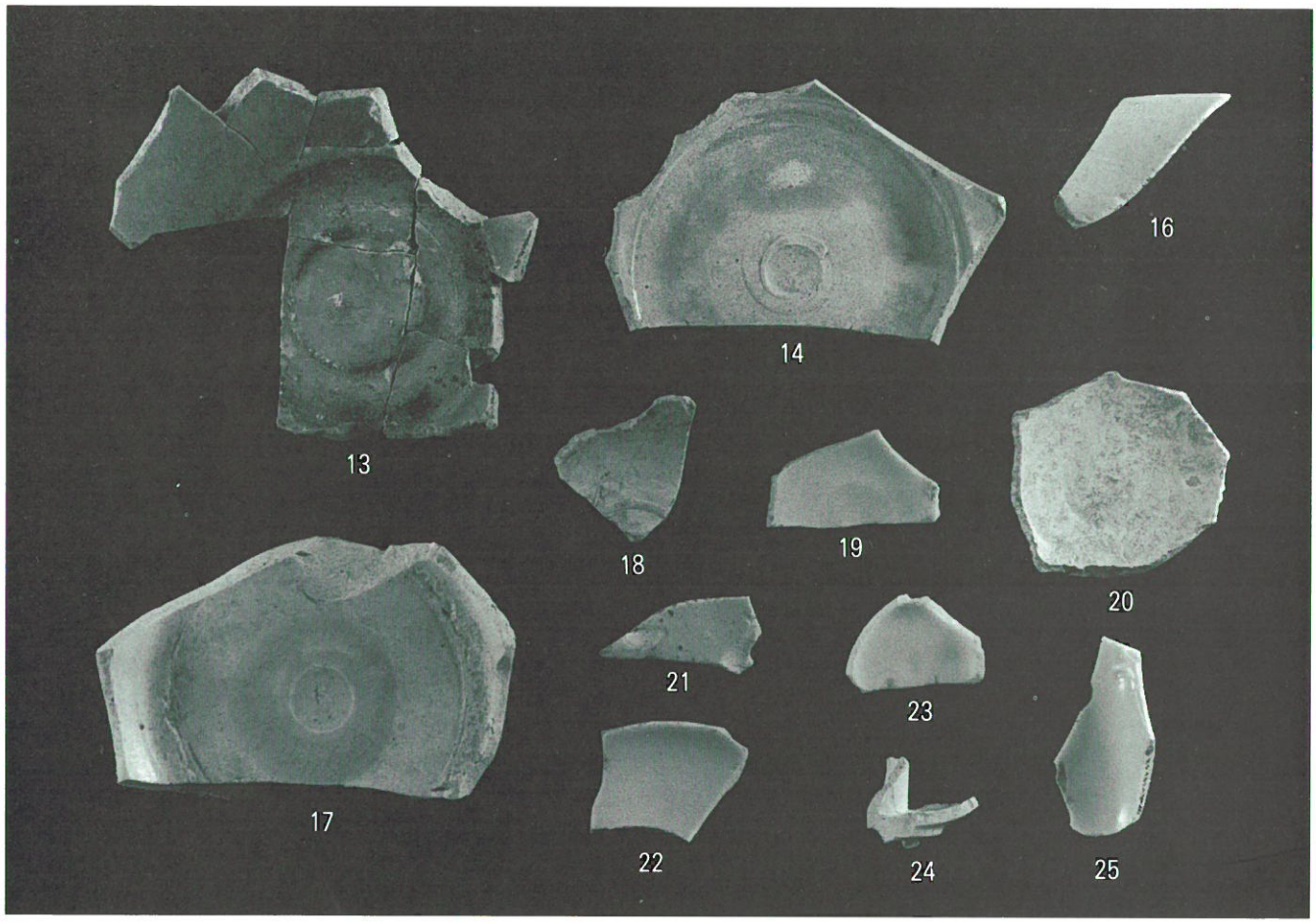


図版16　青 磁 60・61　白 磁 11・12・15（復元）

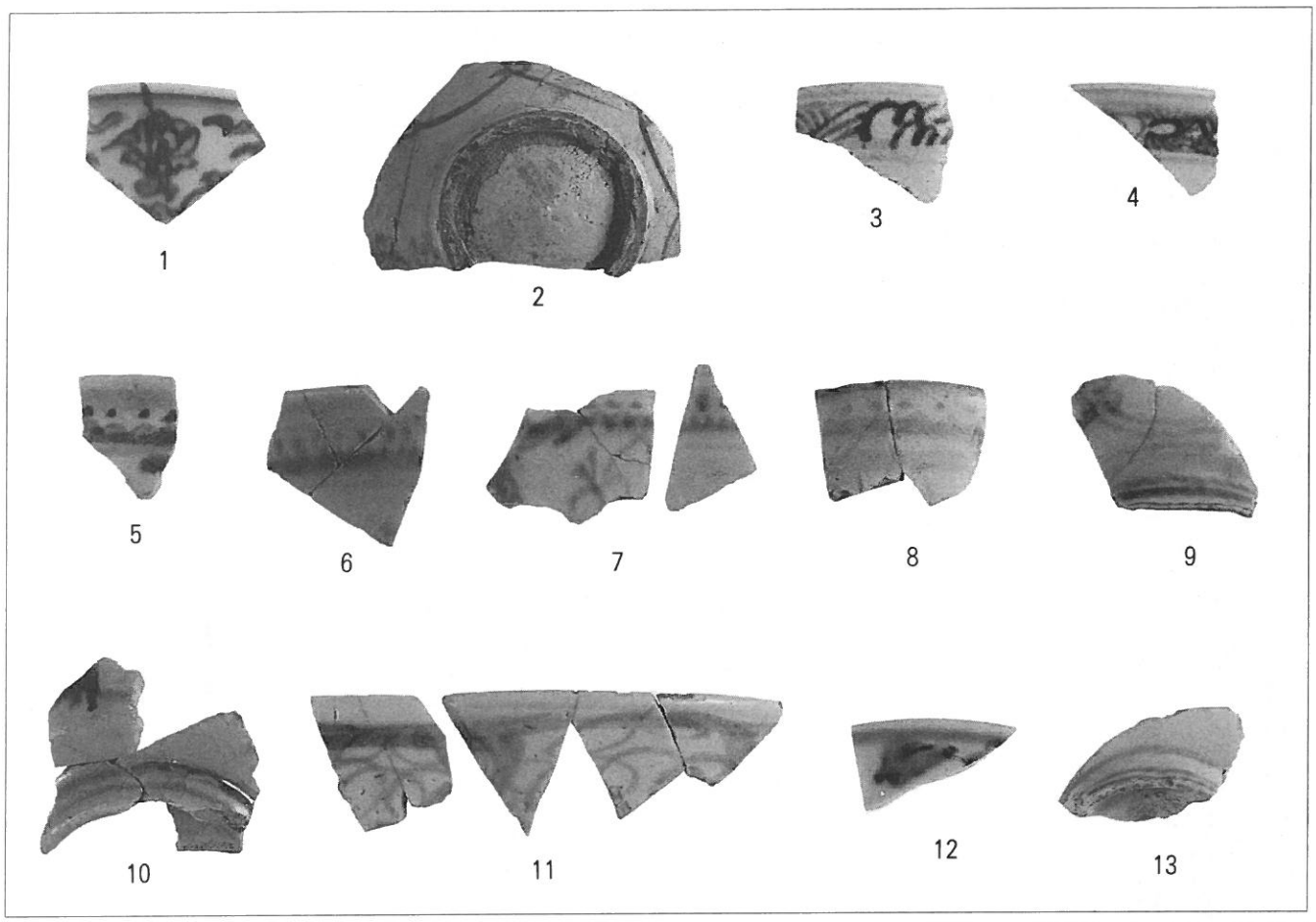


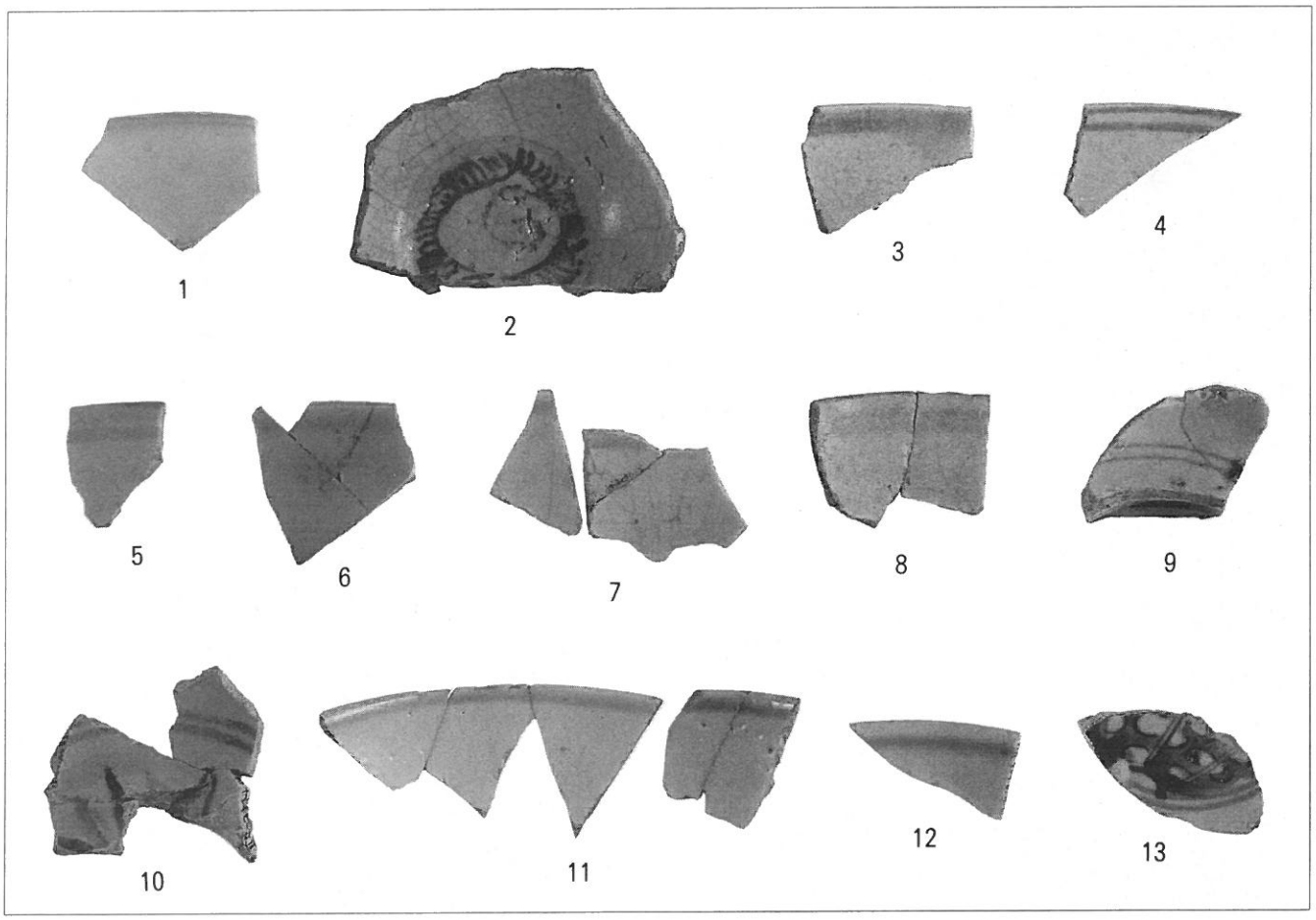
図版17　白 磁①（上：表面　下：裏面）



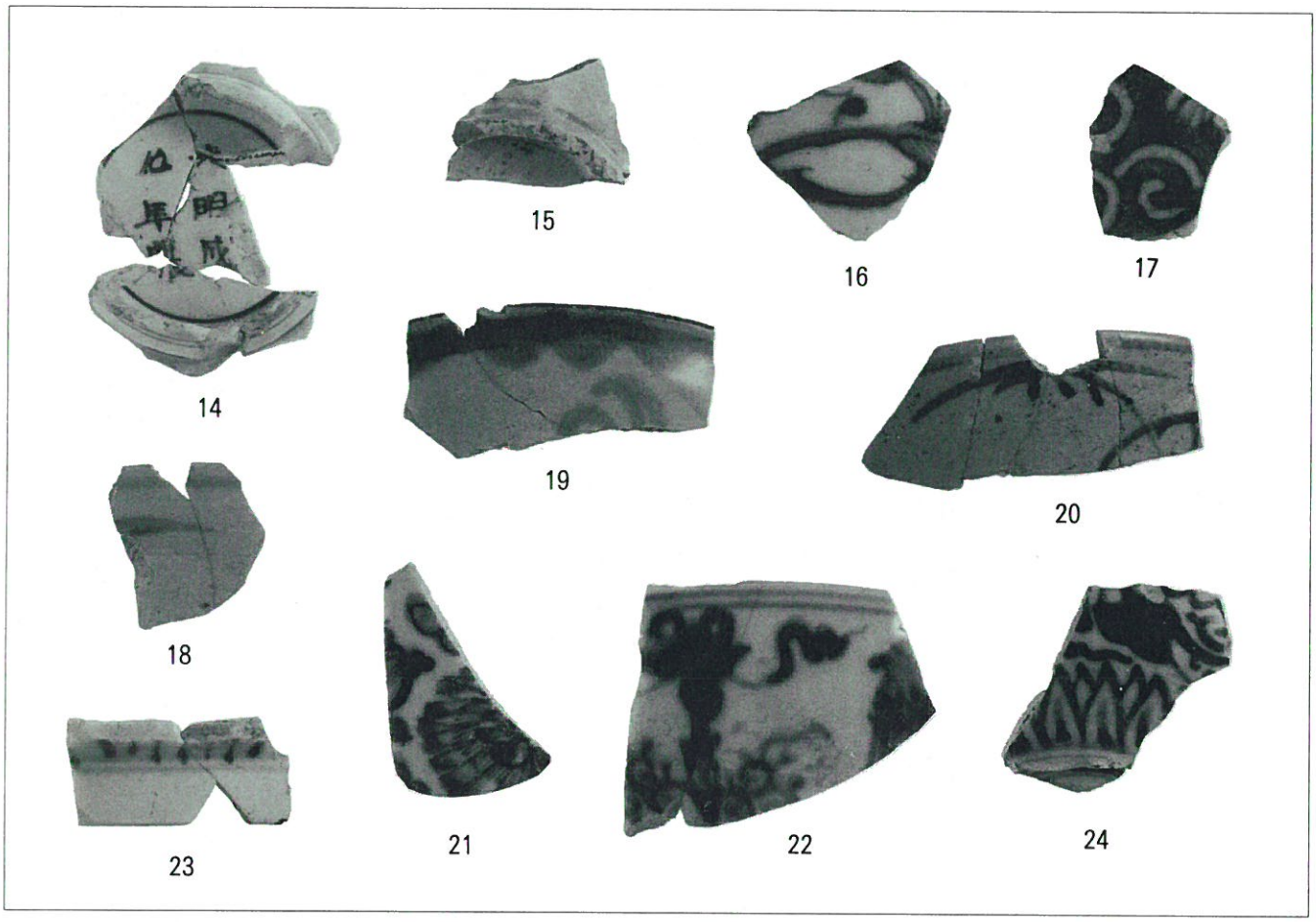


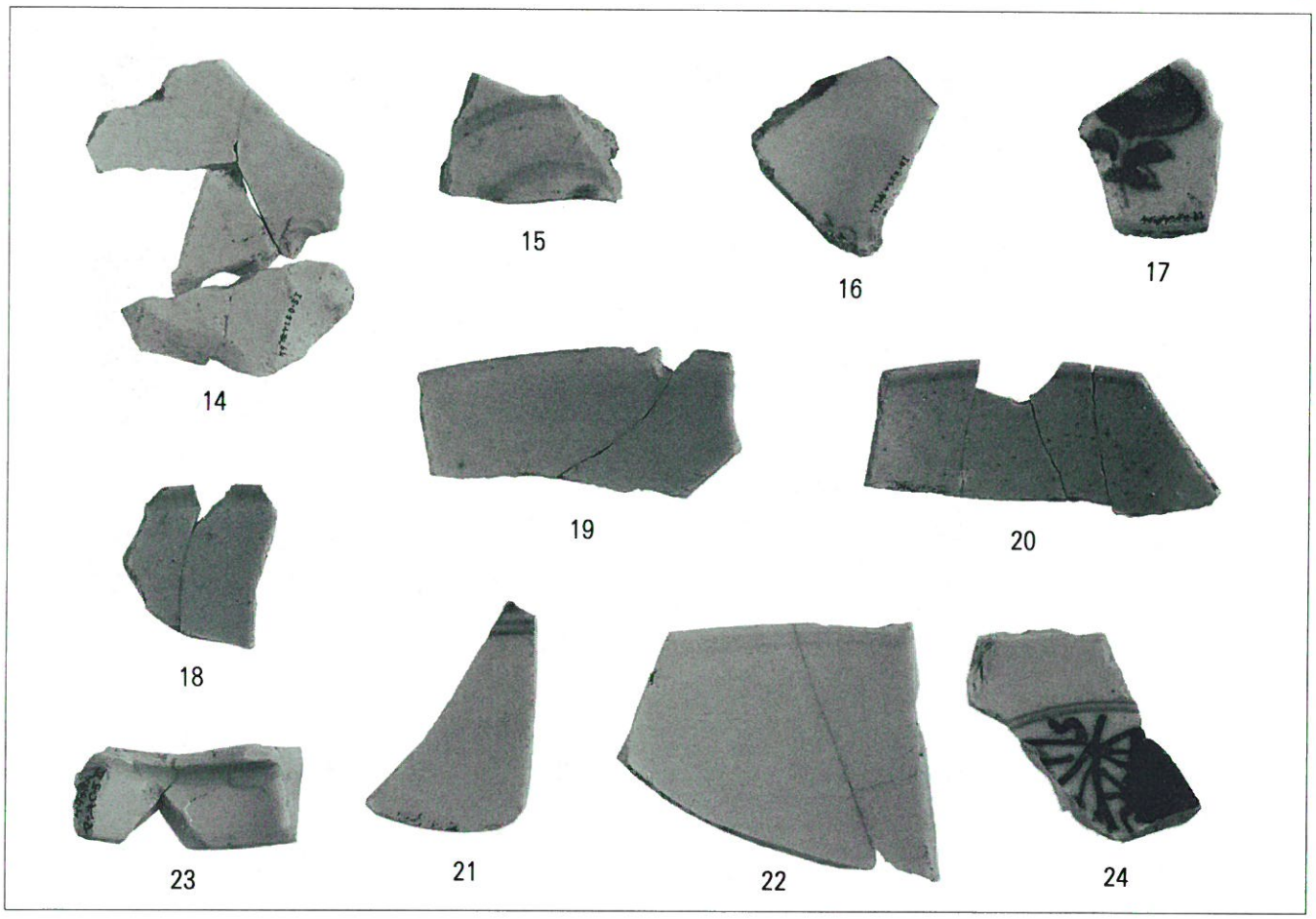
図版18　白 磁②（上：表面　下：裏面）



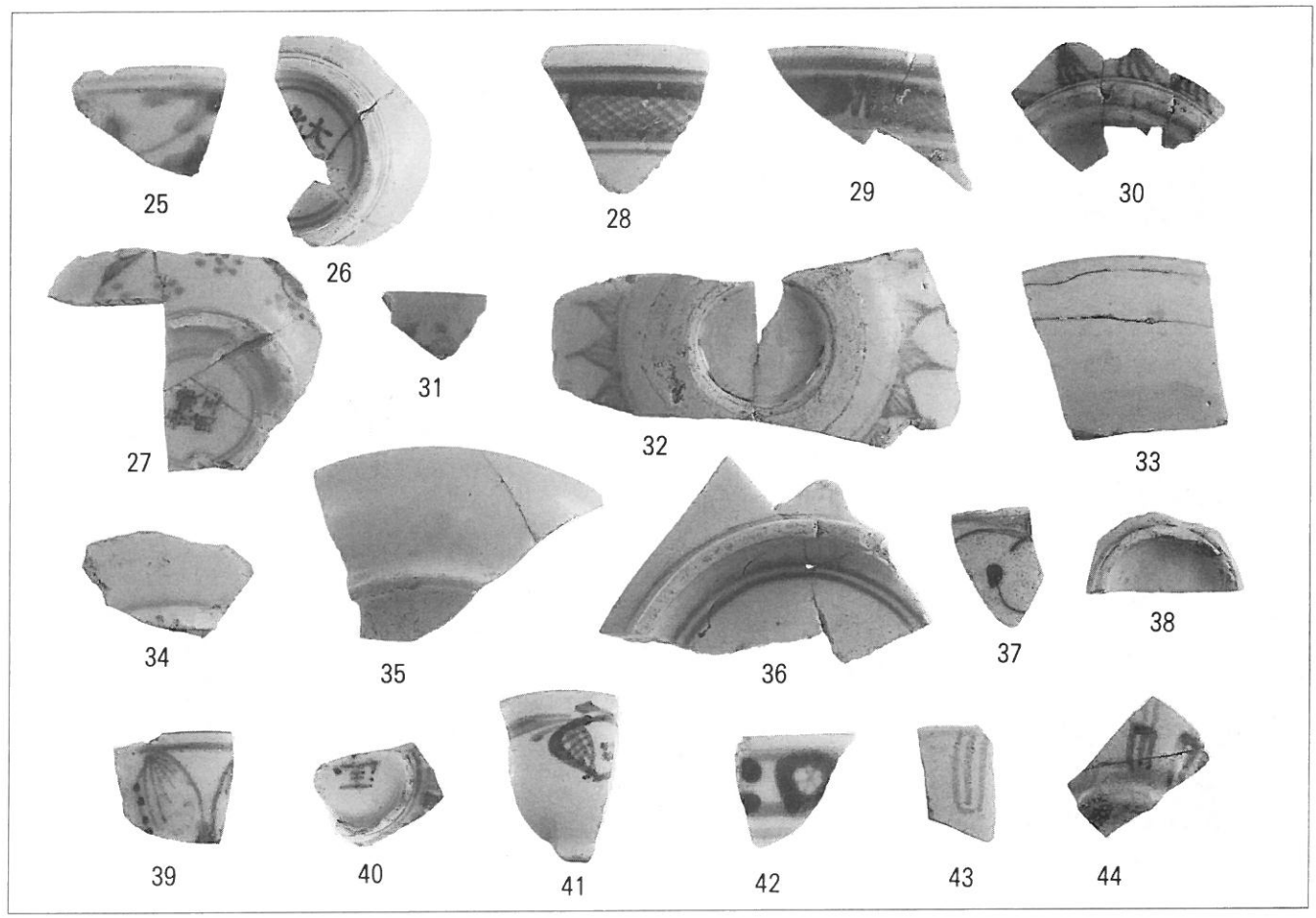


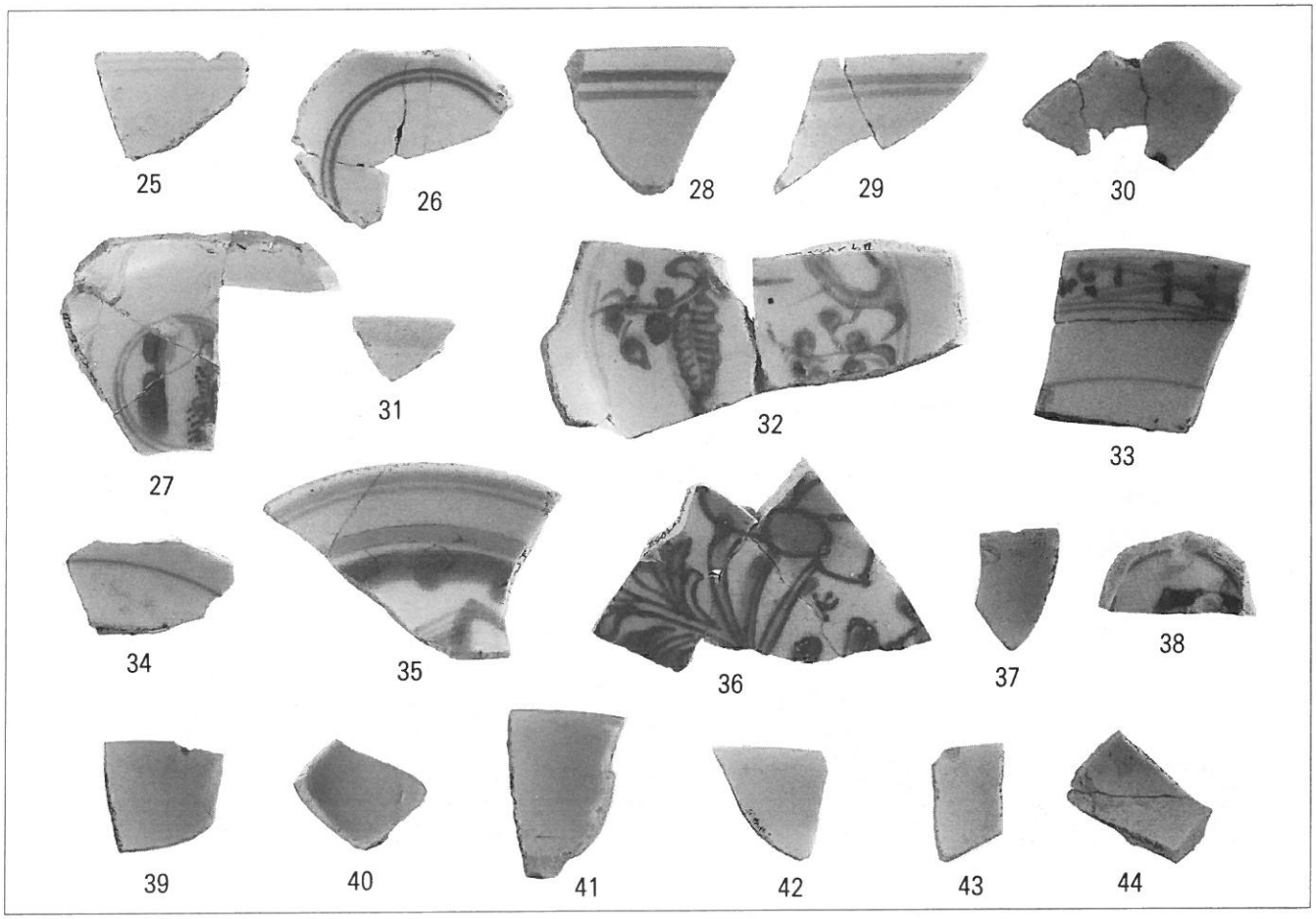
図版19　染 付①（上：表面　下：裏面）



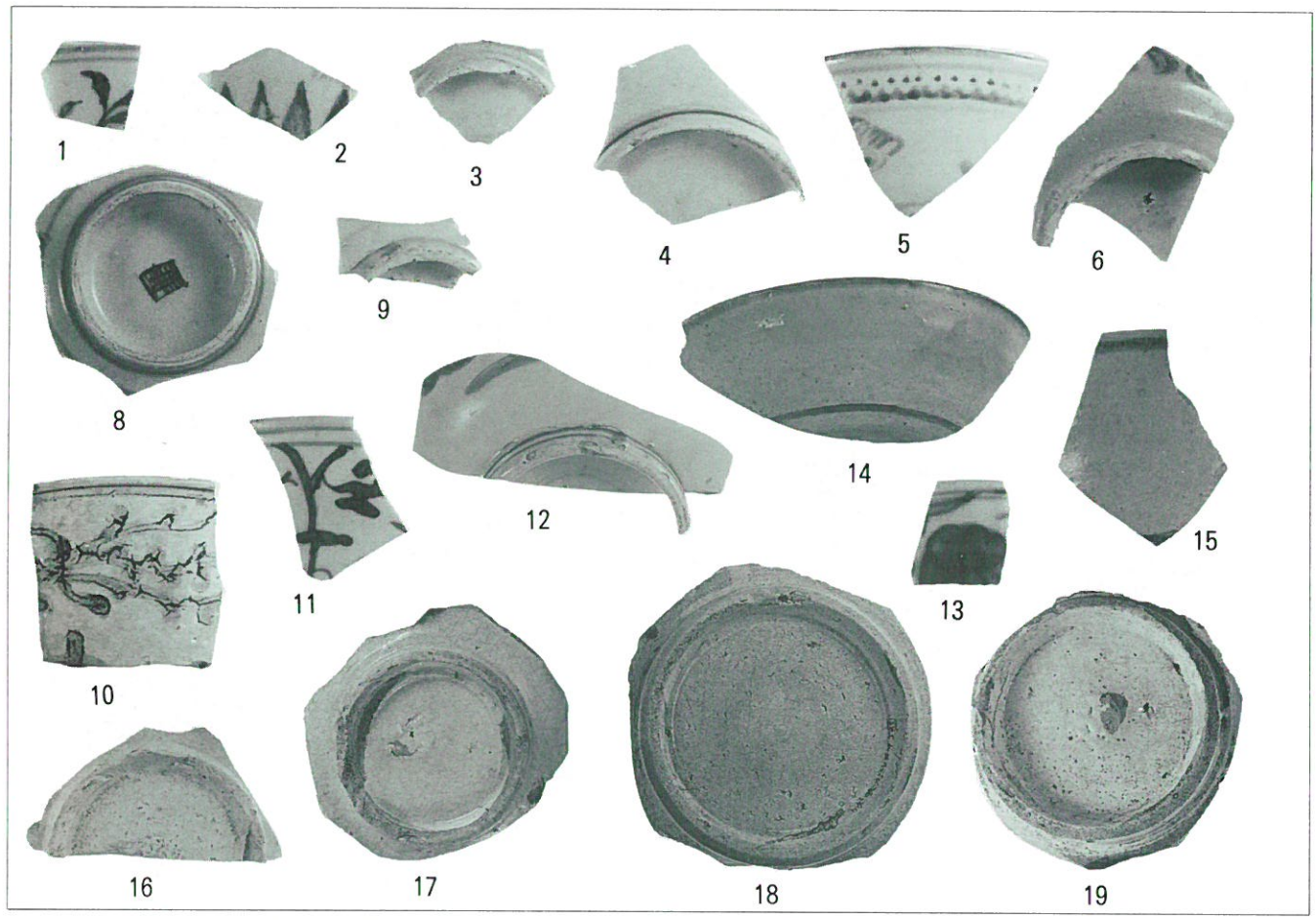


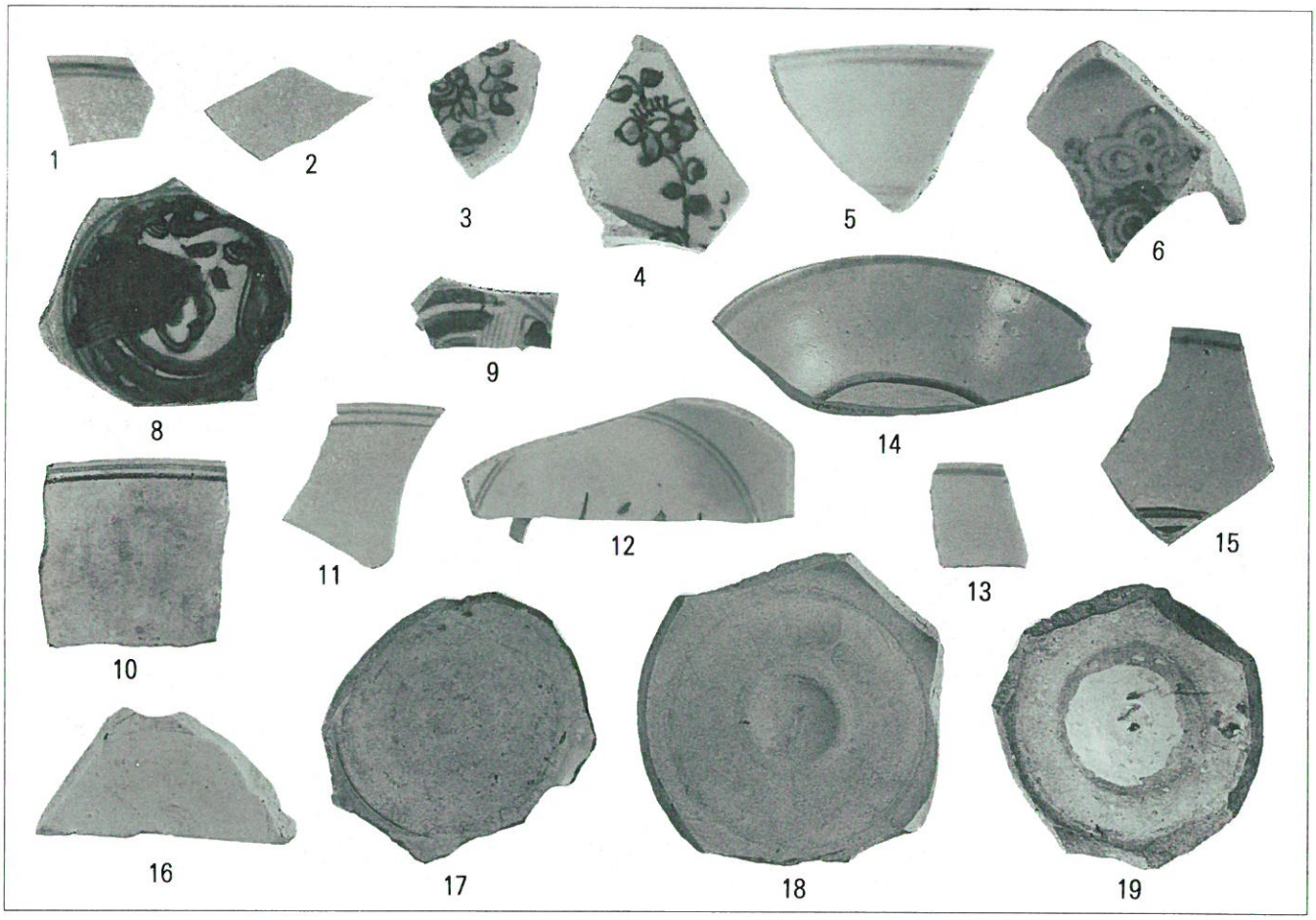
図版20　染 付②（上：表面　下：裏面）



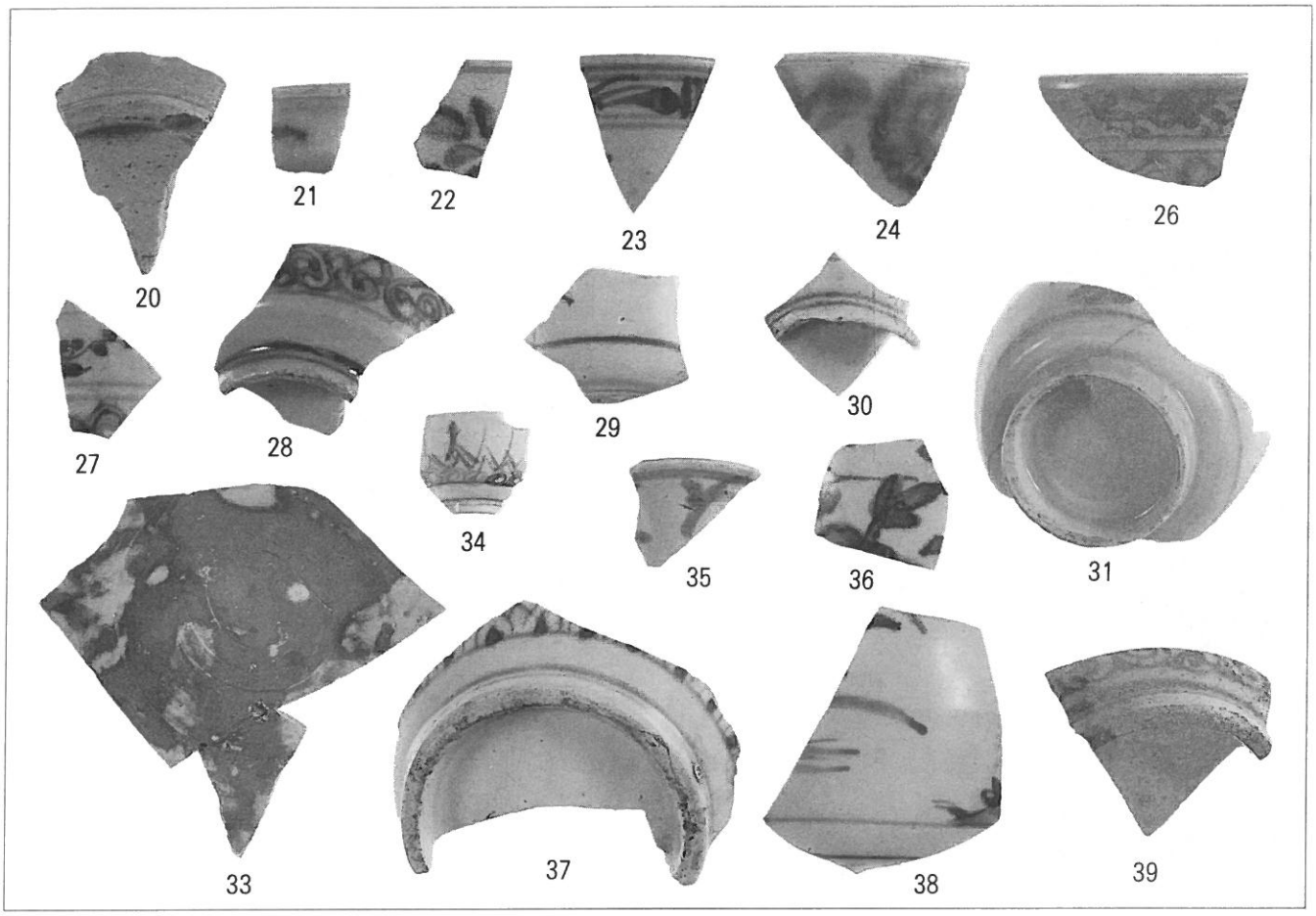


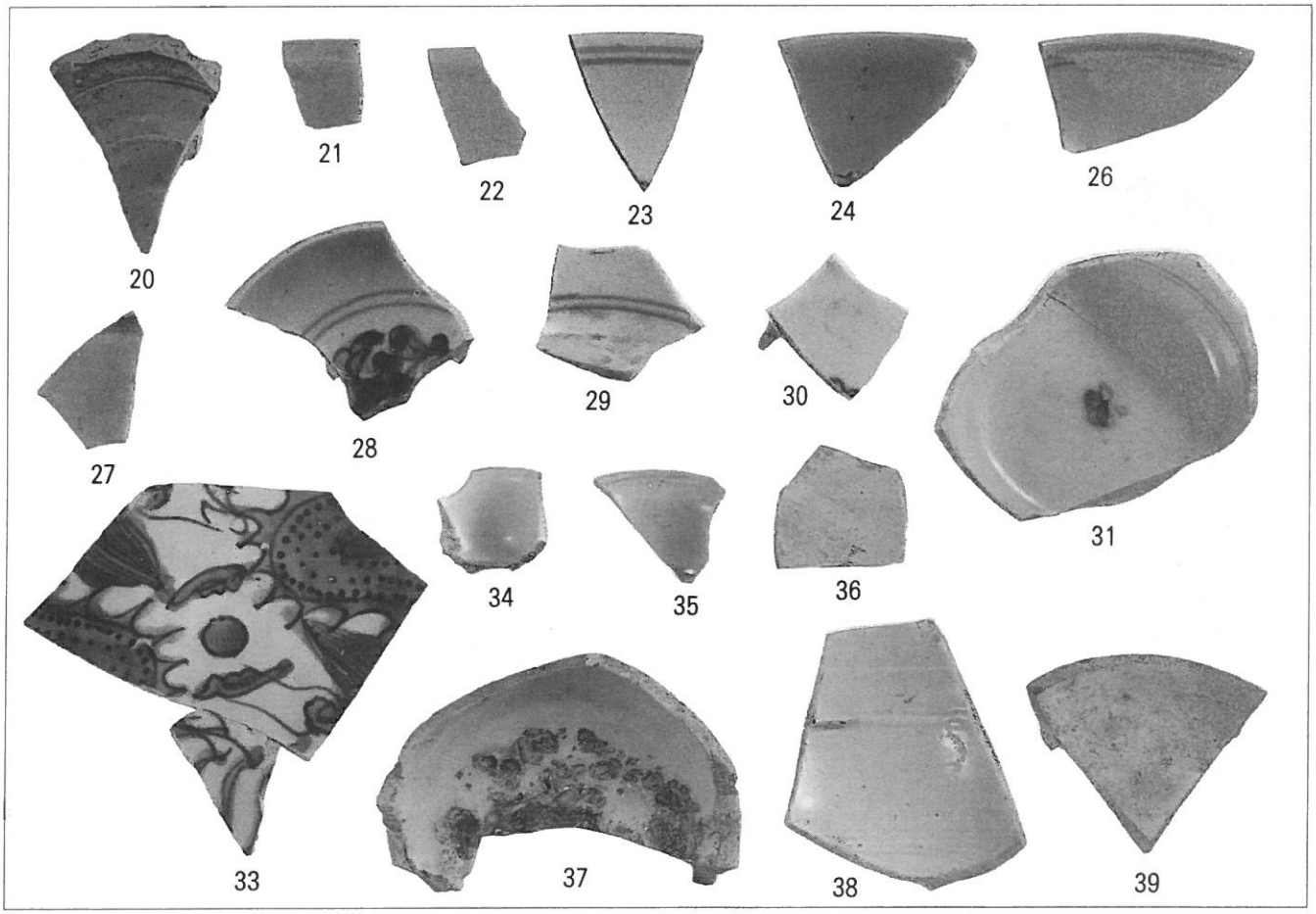
図版21　染 付③（上：表面　下：裏面）



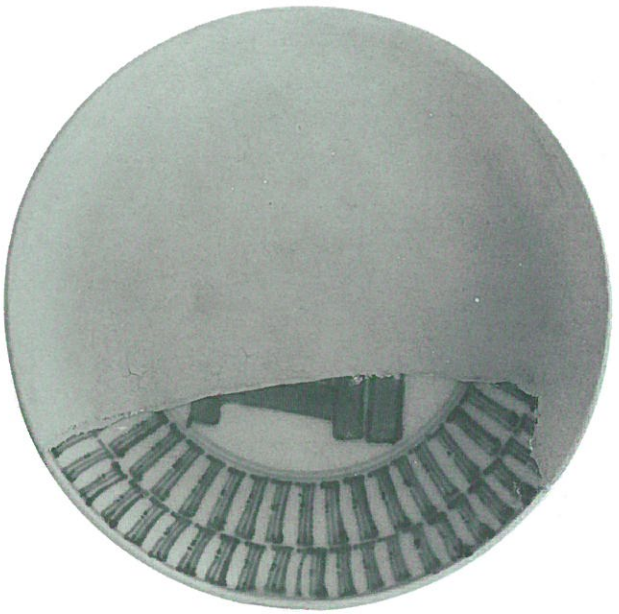


図版22　染 付④（上：表面　下：裏面）





図版23　染 付⑤（上：表面　下：裏面）



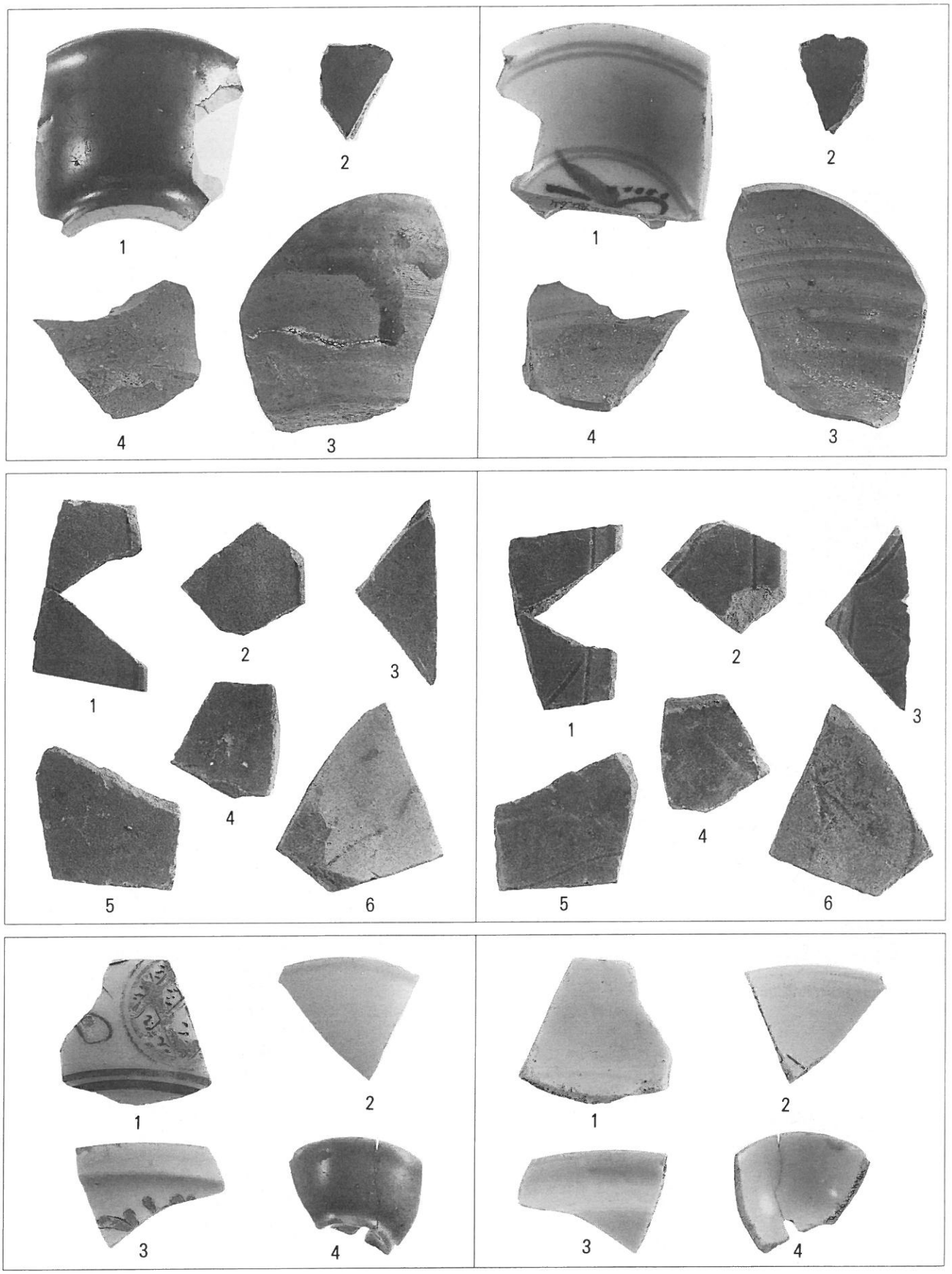
7

32

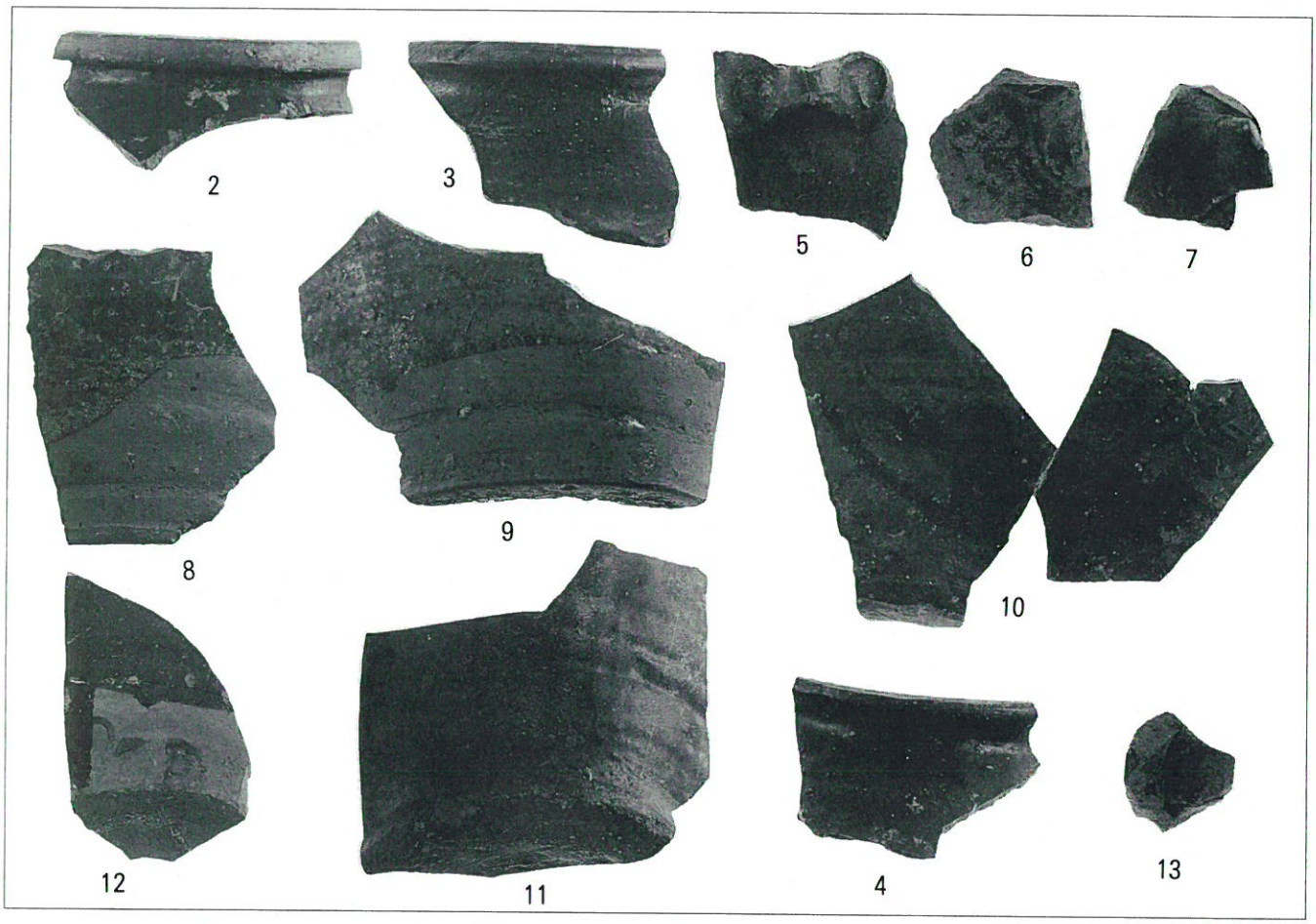
25

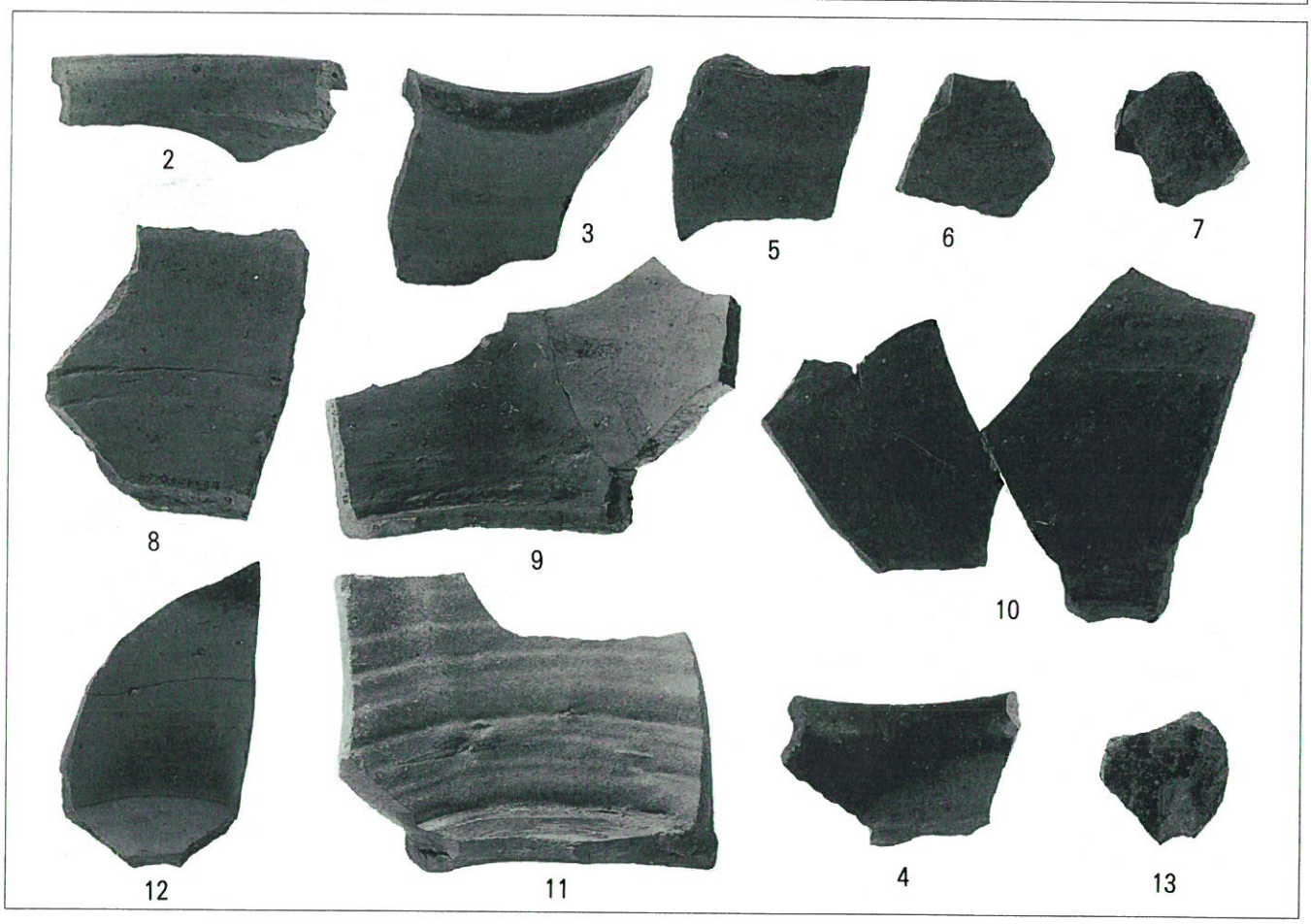
1

図版24　染付 7・25・32／褐釉陶器（復元）

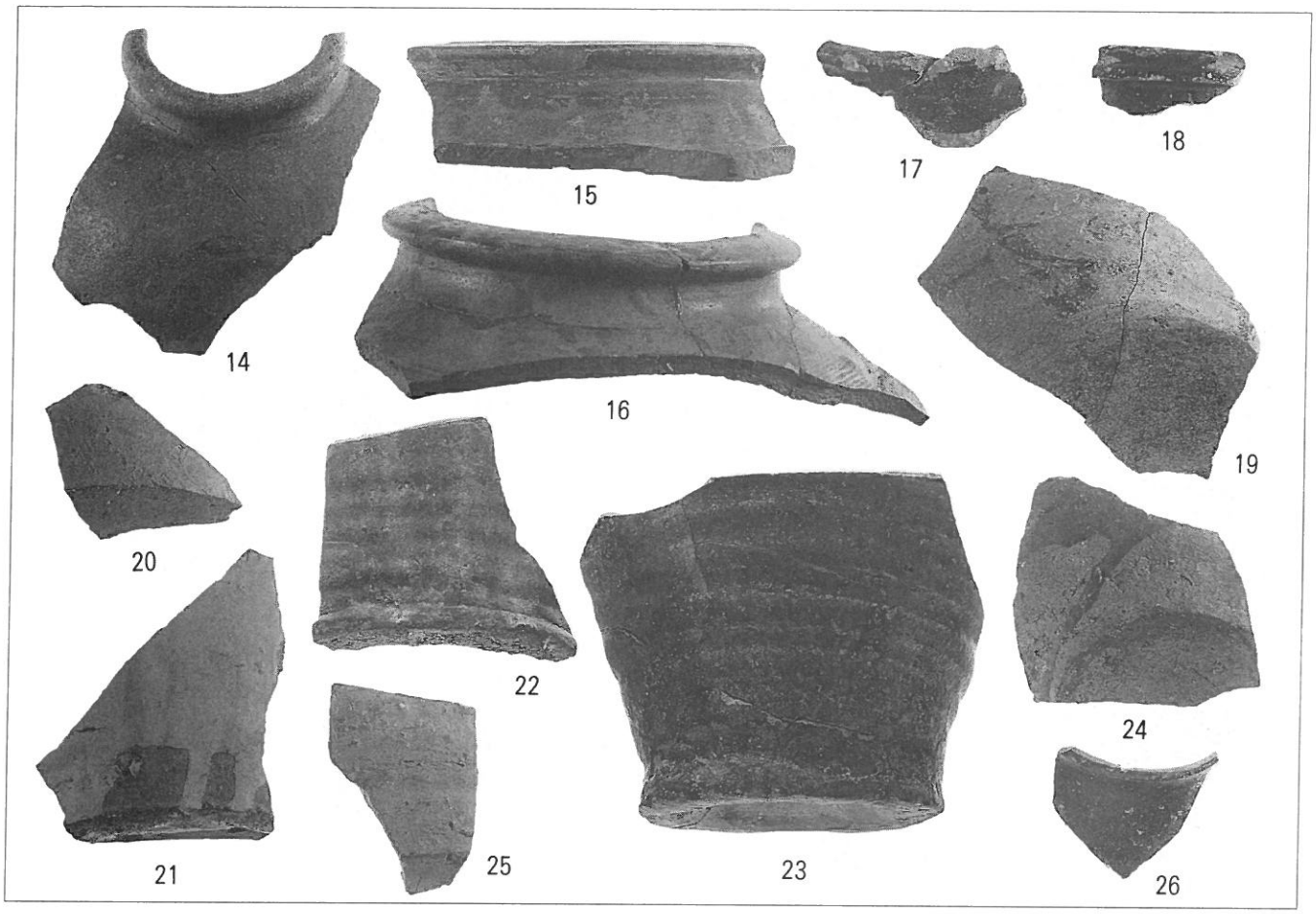


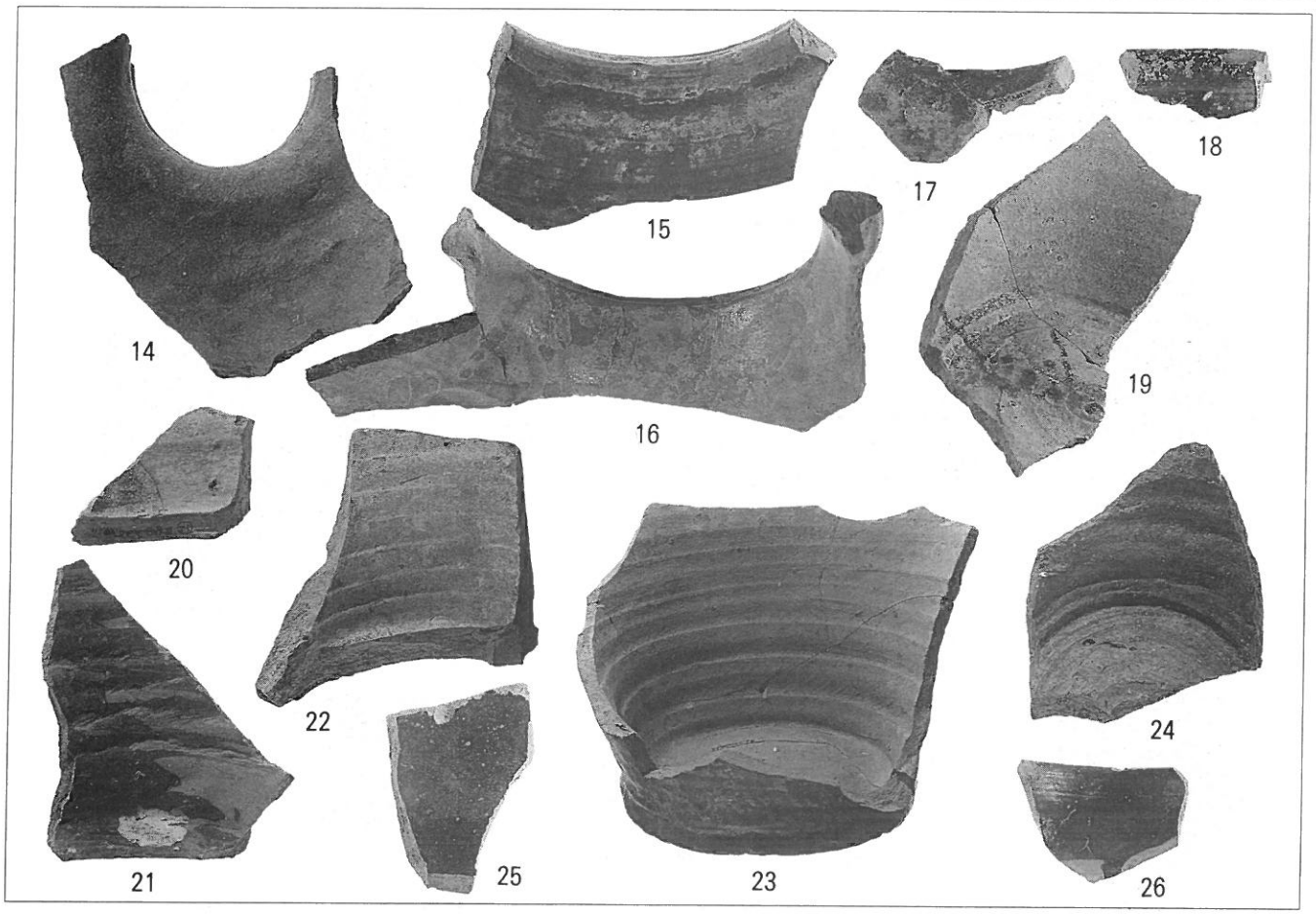
図版25　上：鉄釉陶器、茶入れ壺、天目茶碗（左：表面　右：裏面）
中：緑釉陶器（左：表面　右：裏面）
下：赤絵、色絵　瑠璃釉（左：表面　右：裏面）



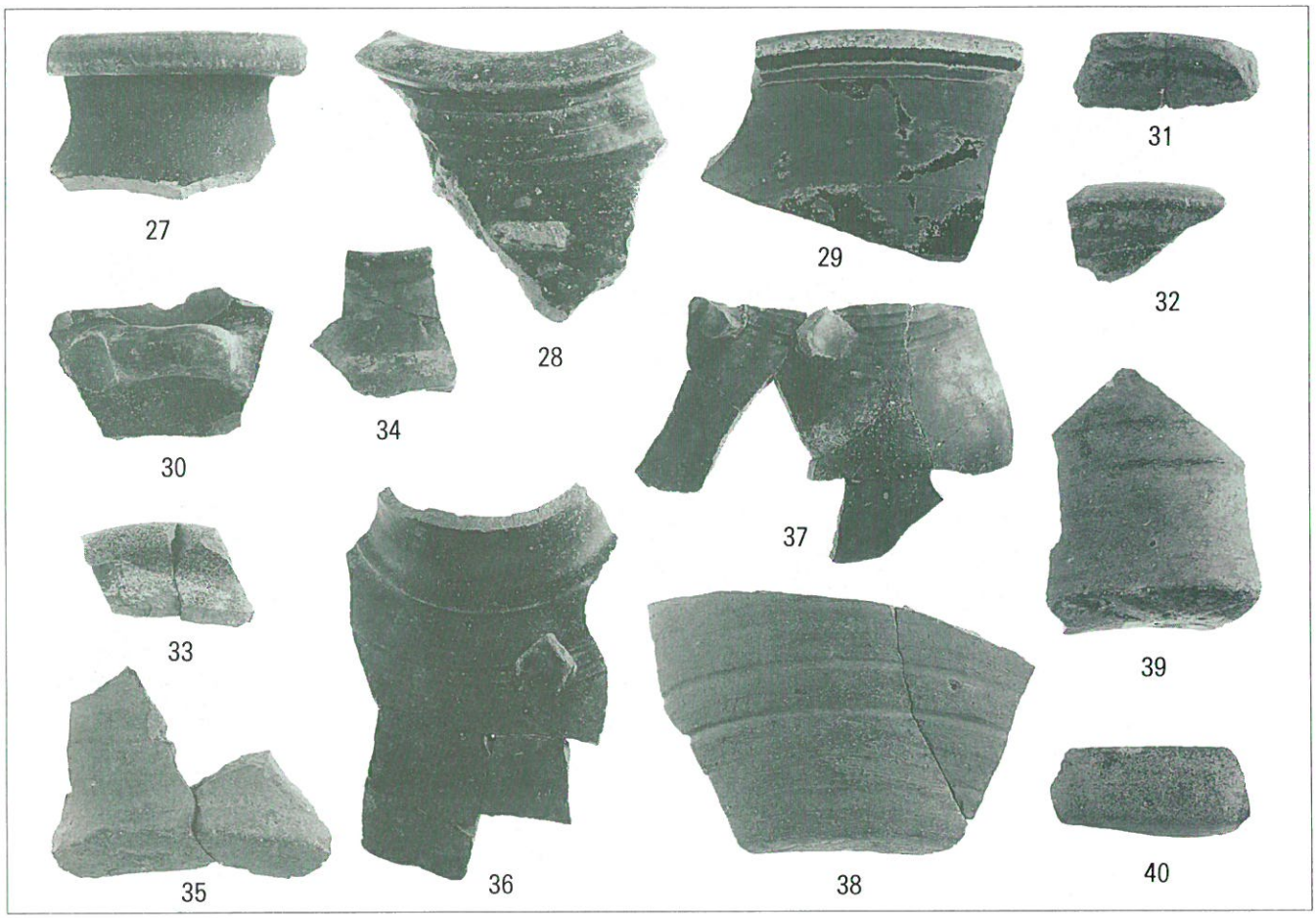


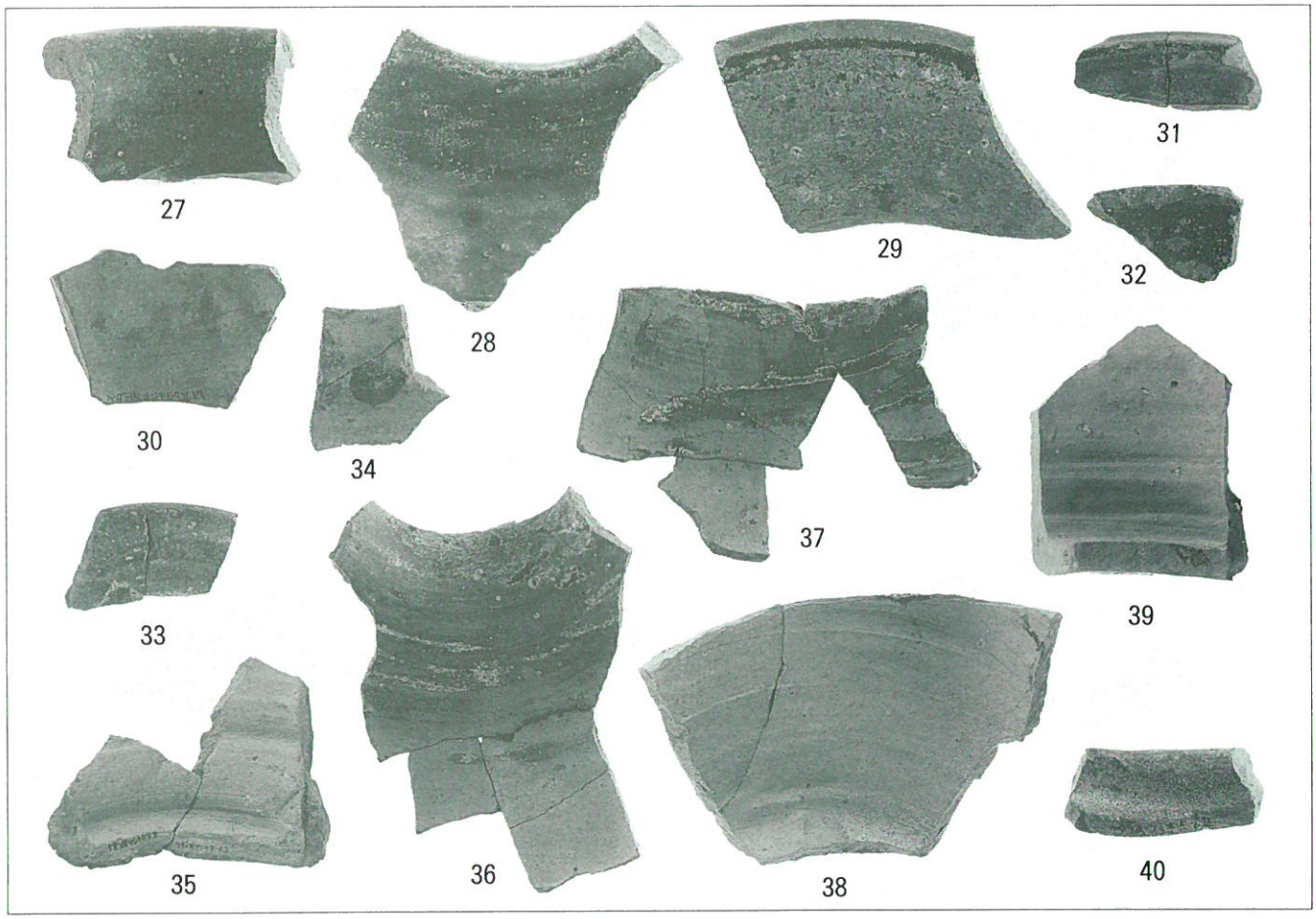
図版26　褐釉陶器 ①


14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

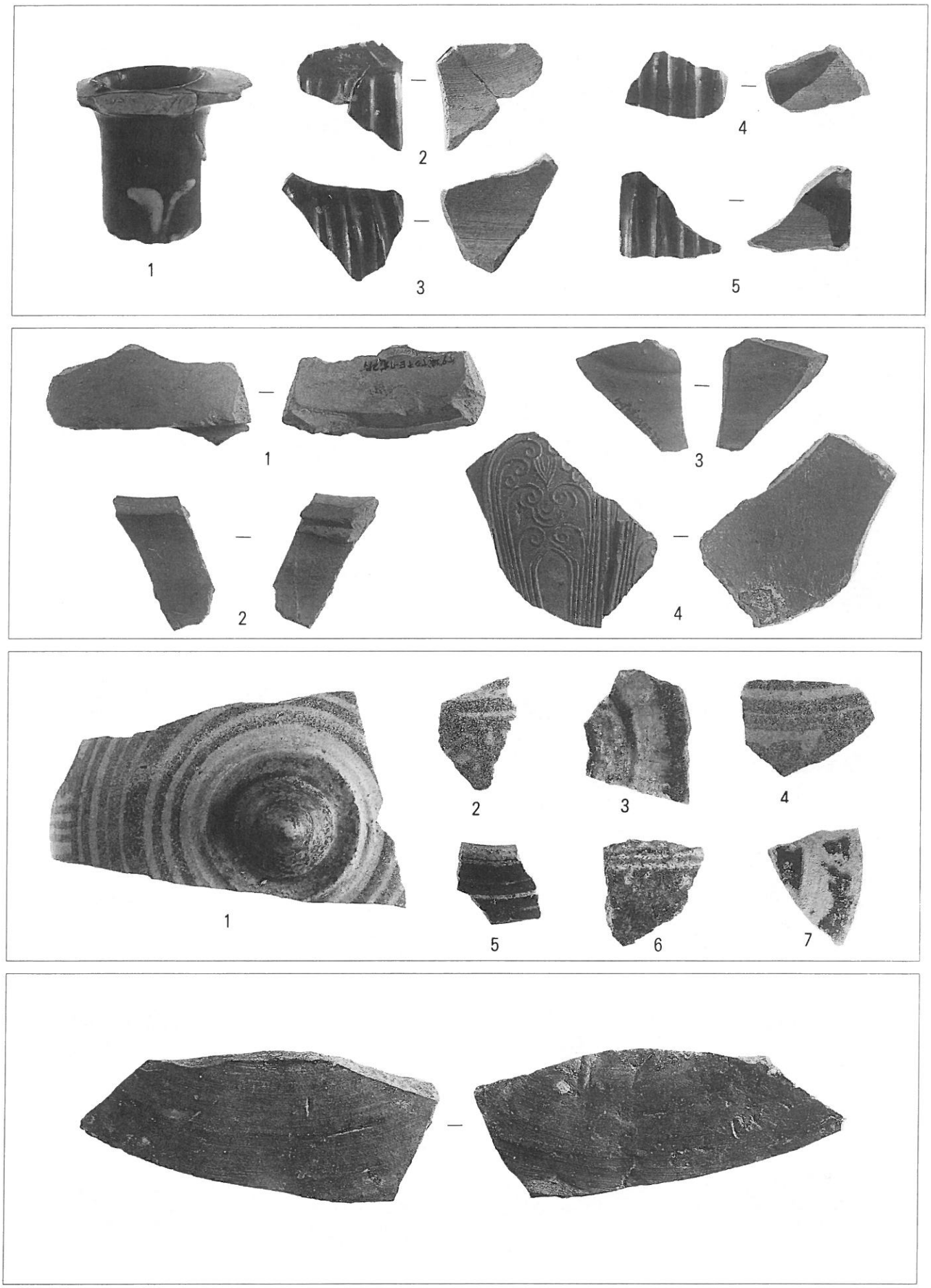

14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

図版27　褐釉陶器 ②

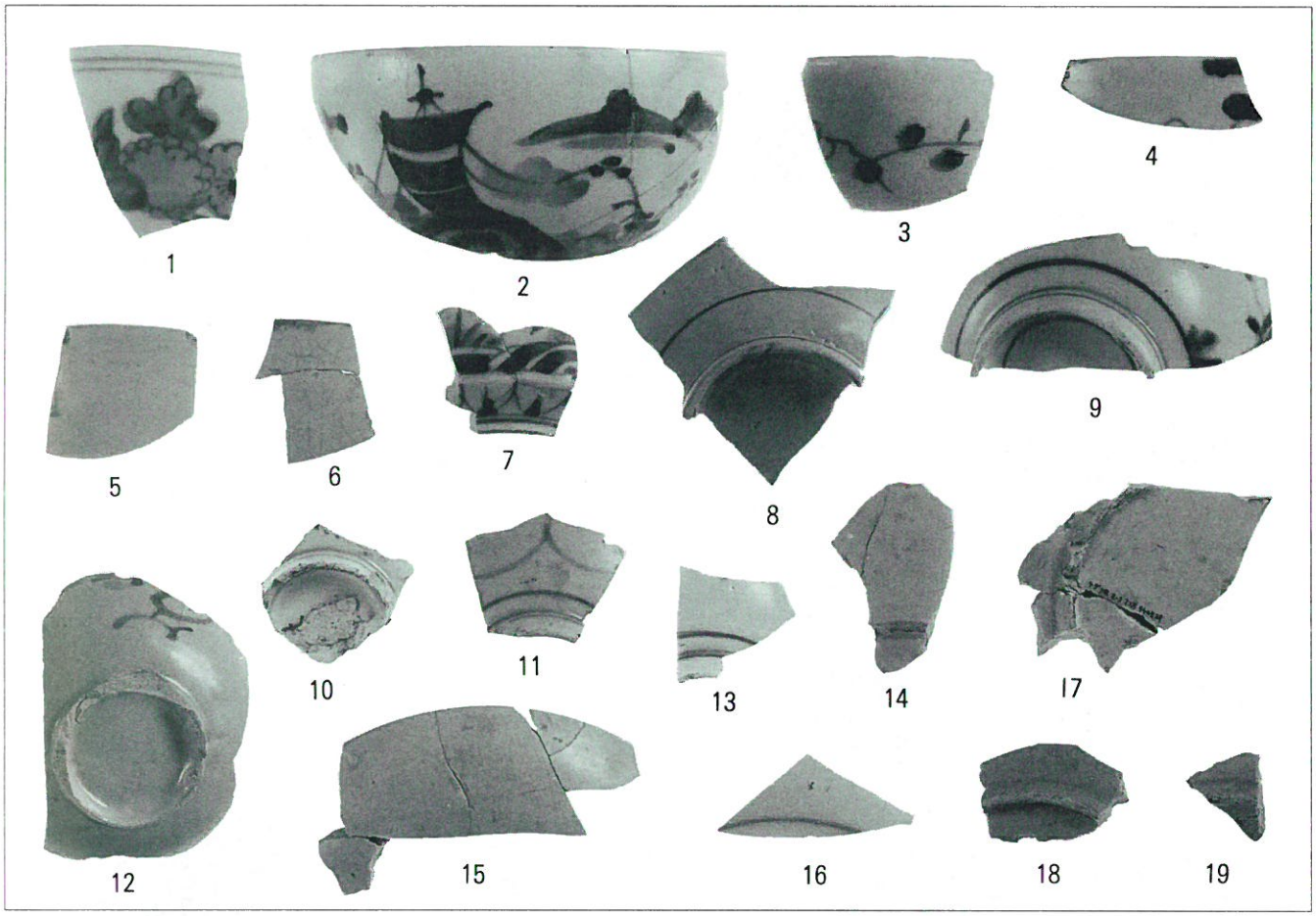

27
28
29
31
32
30
34
37
33
39
35
36
38
40

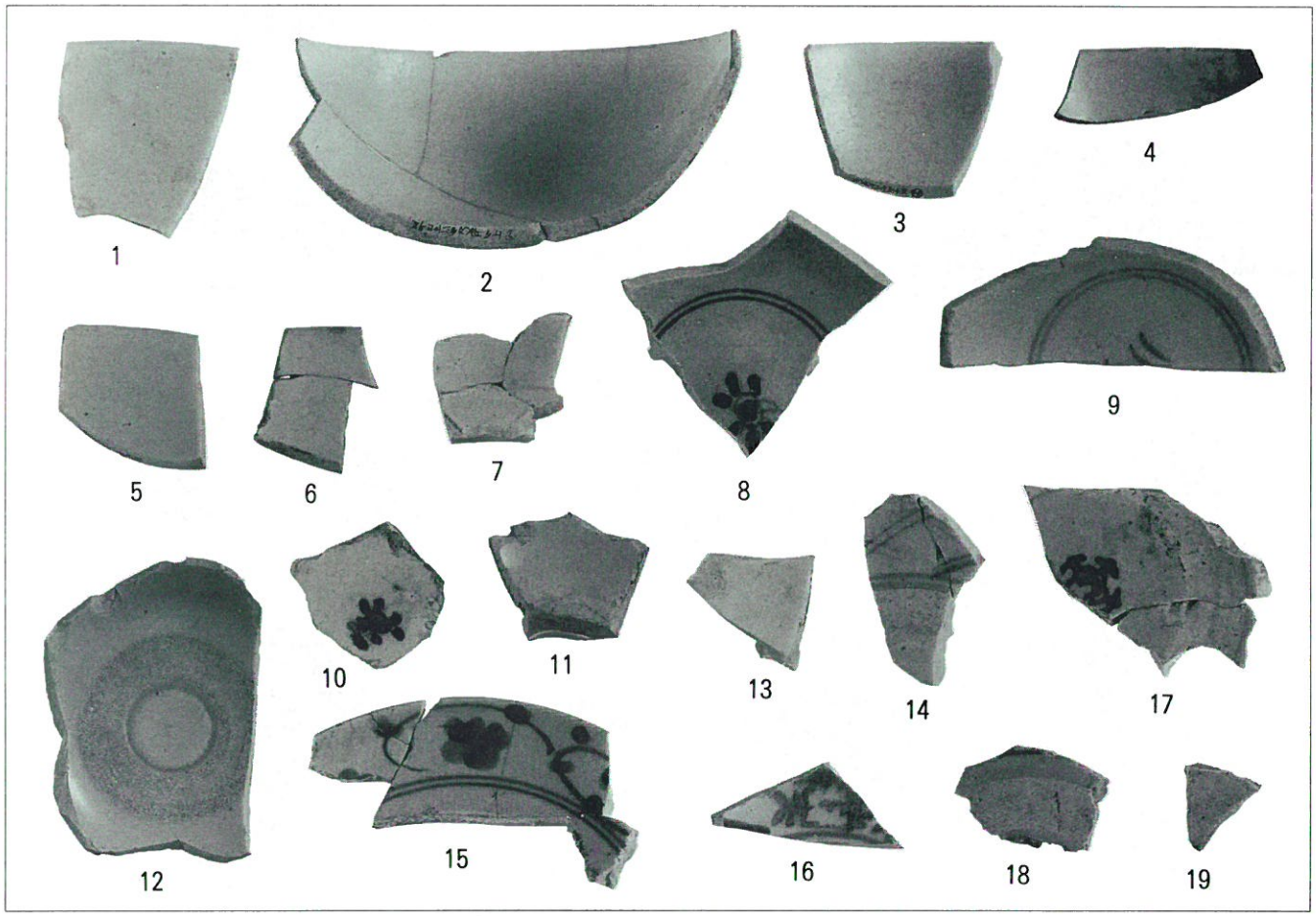

27
28
29
31
32
30
34
37
33
39
35
36
38
40

図版28　褐釉陶器 ③

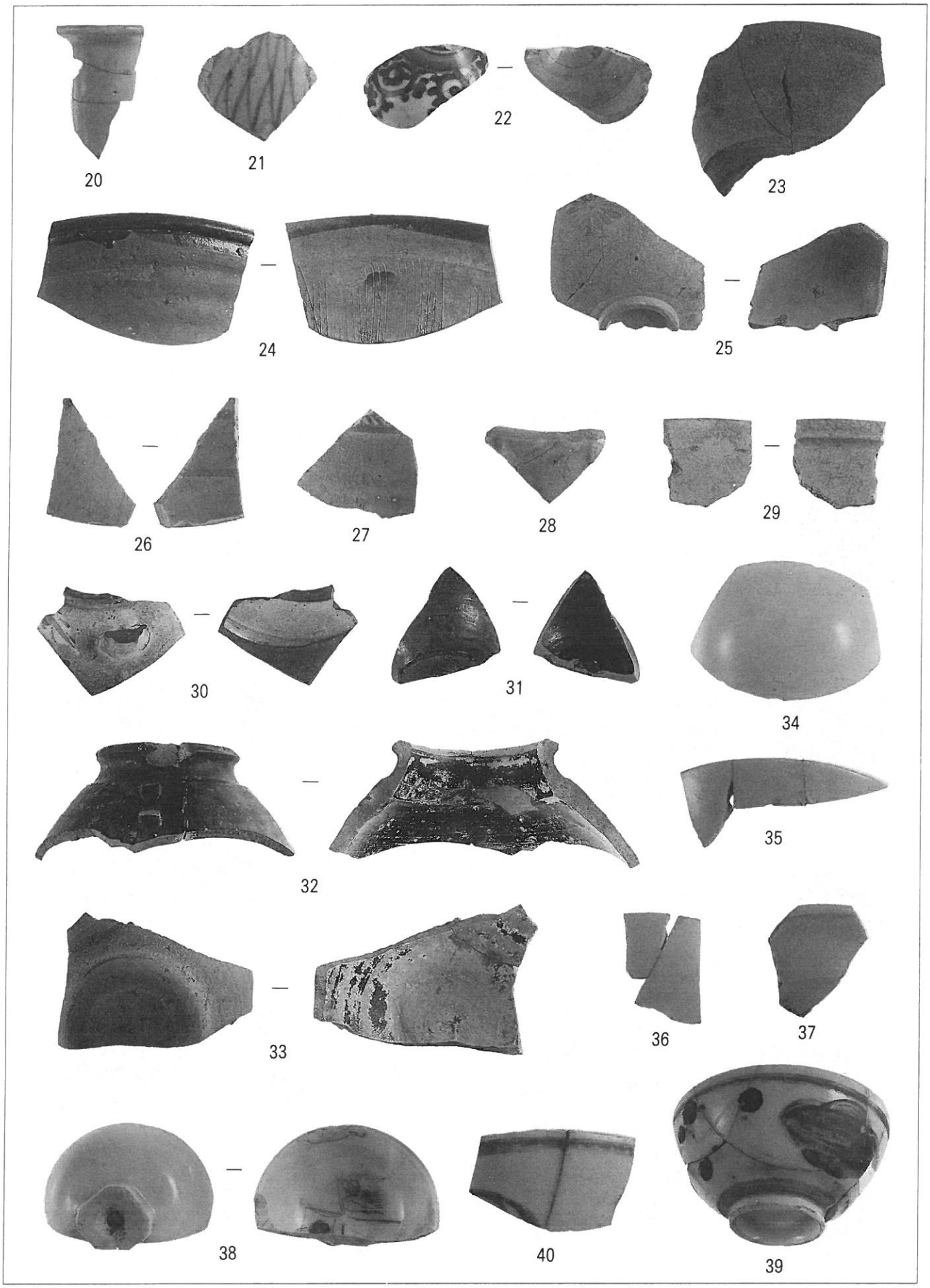


図版29　1段：褐釉水注（表、裏）　2段：中国産無釉陶器　3段：タイ産鉄釉　4段：カムイヤキ窯須恵器

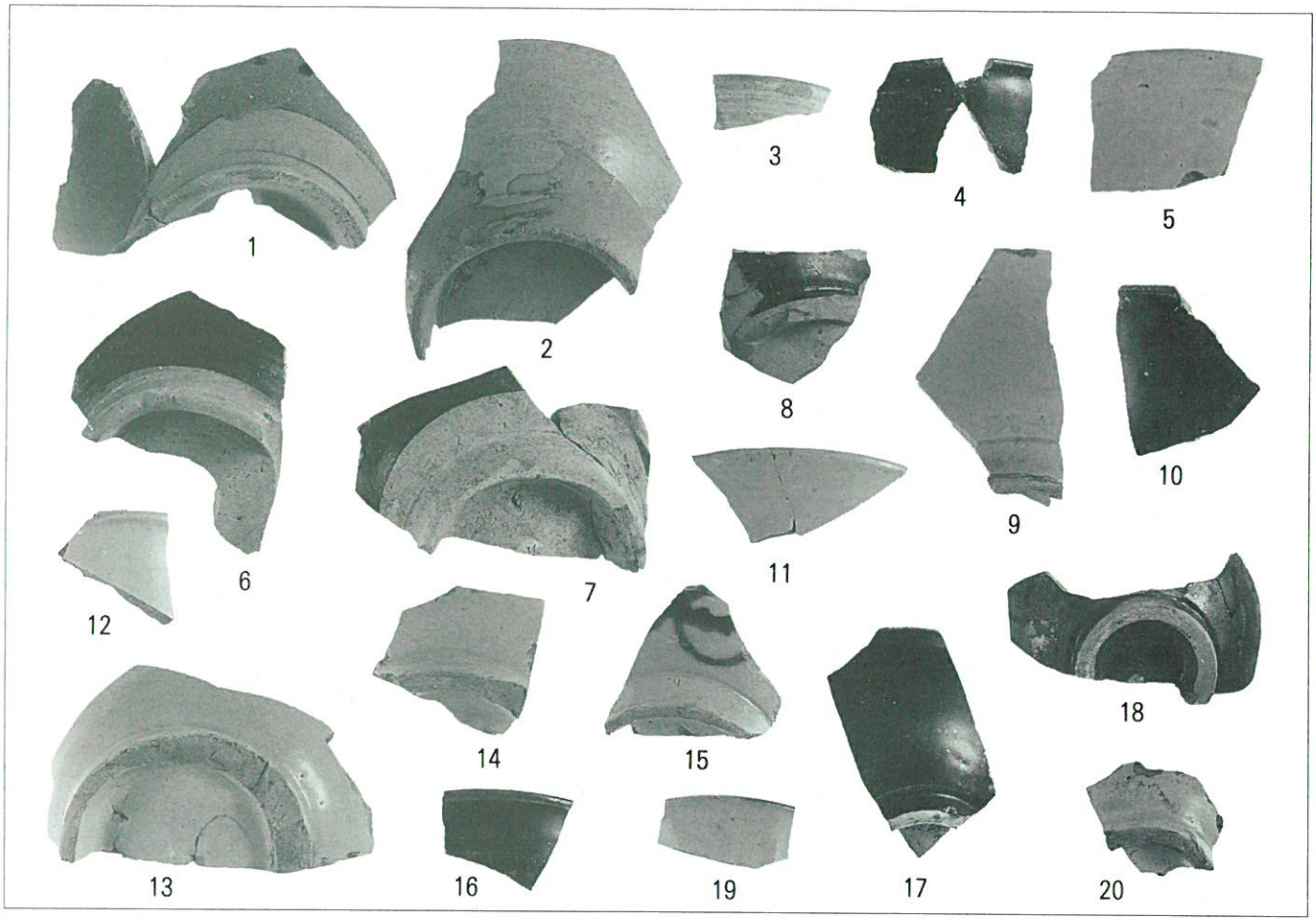


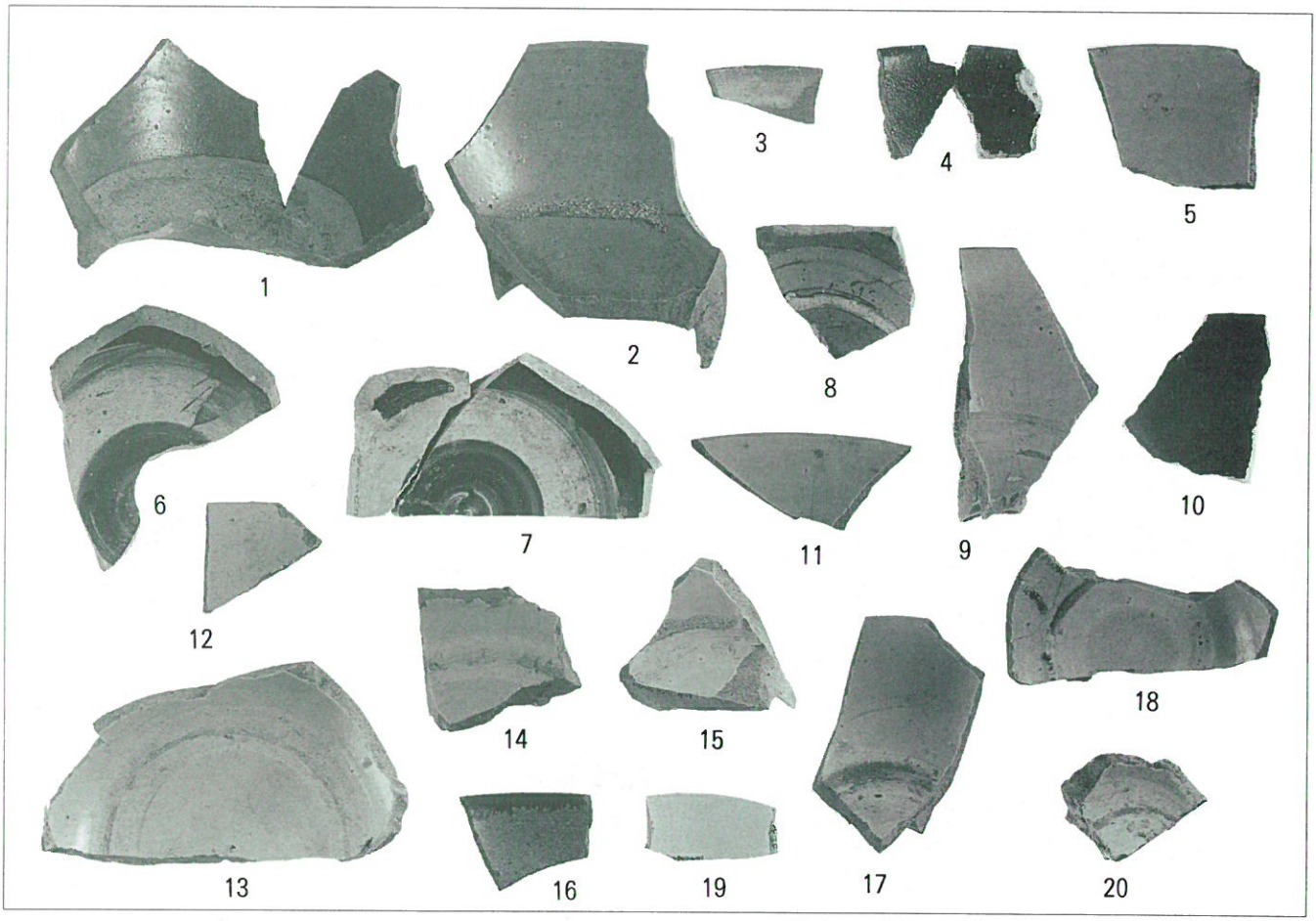


図版30　本土産陶磁器①（上：表面　下：裏面）

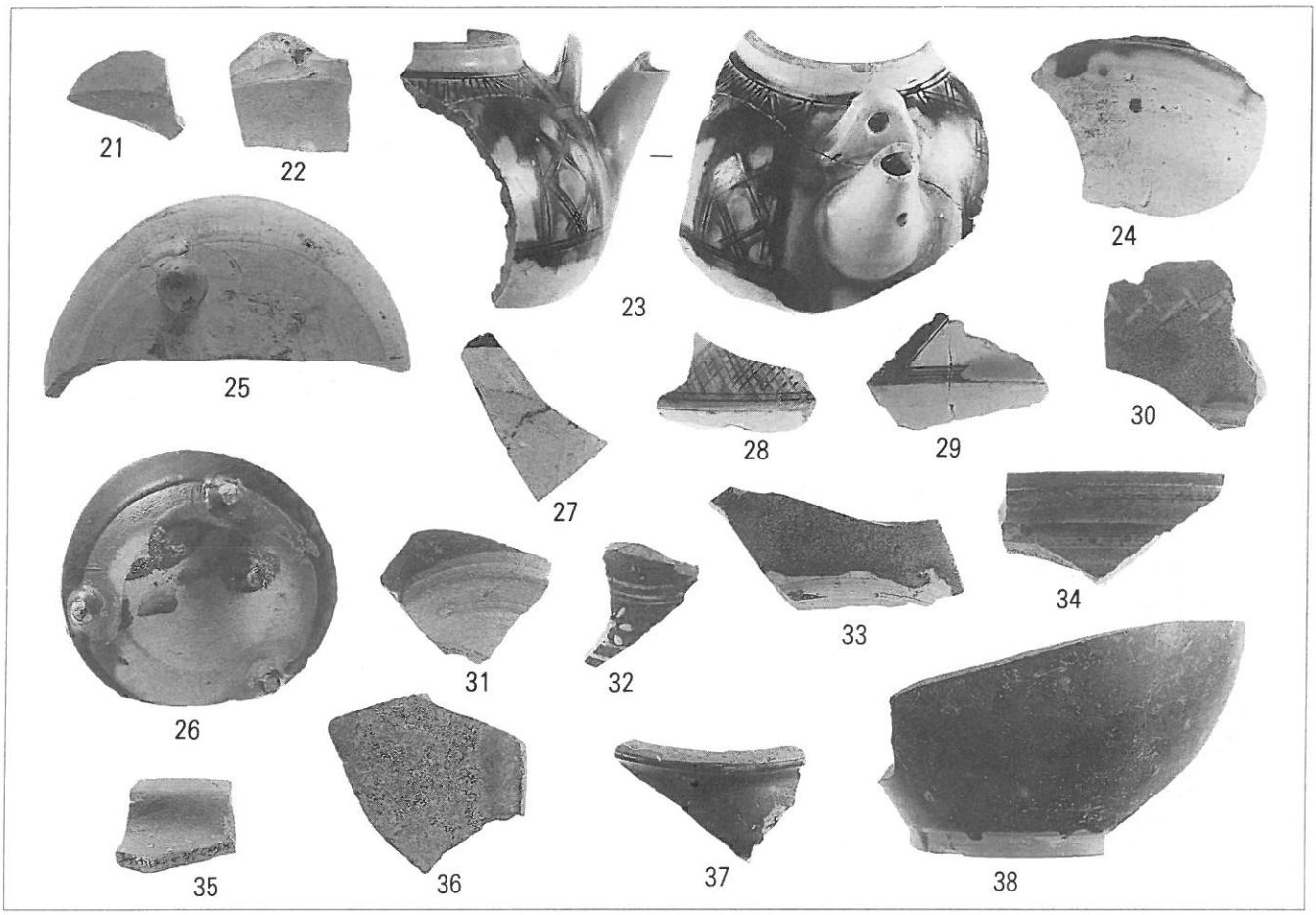


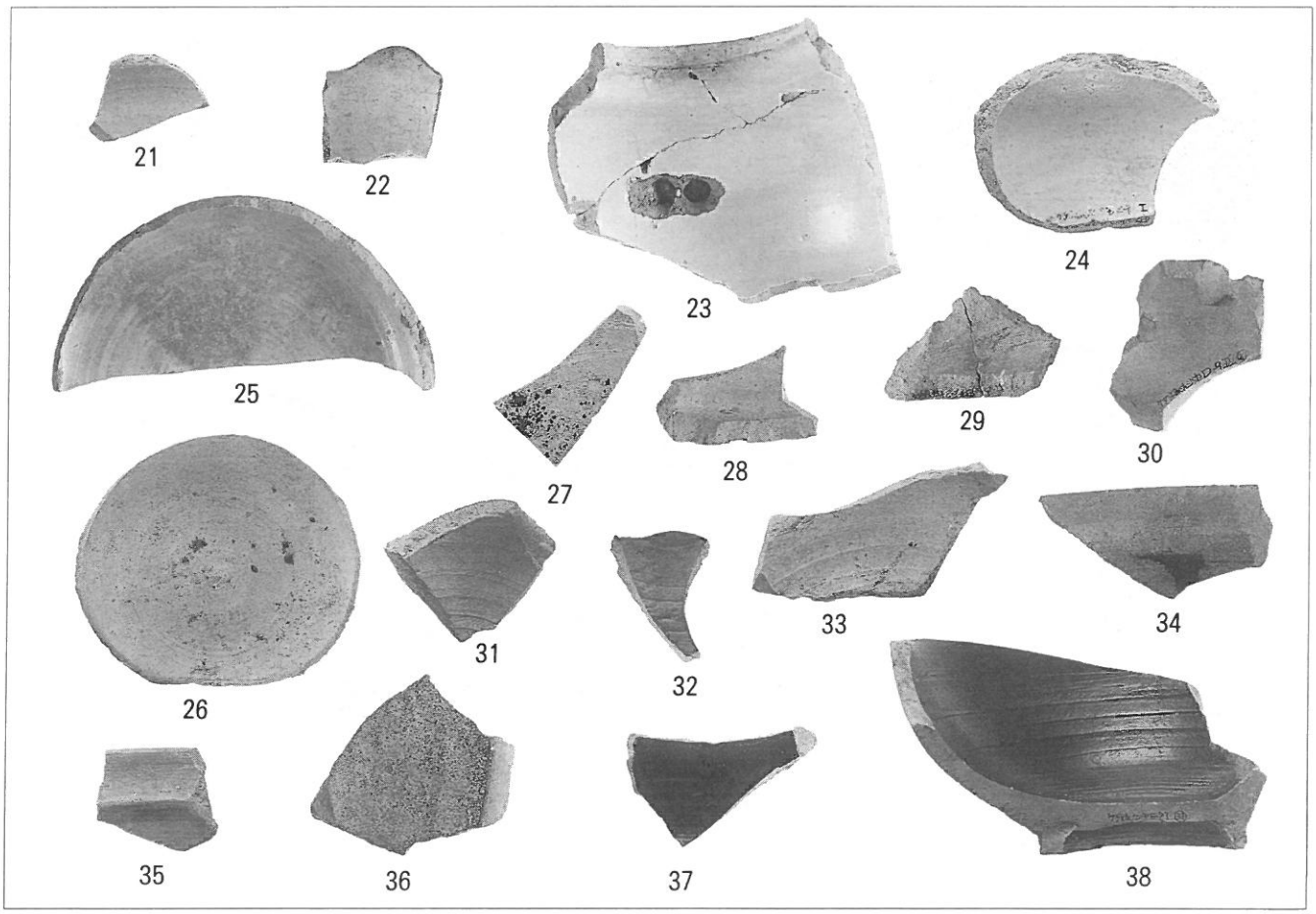
図版31　本土産陶磁器 ②



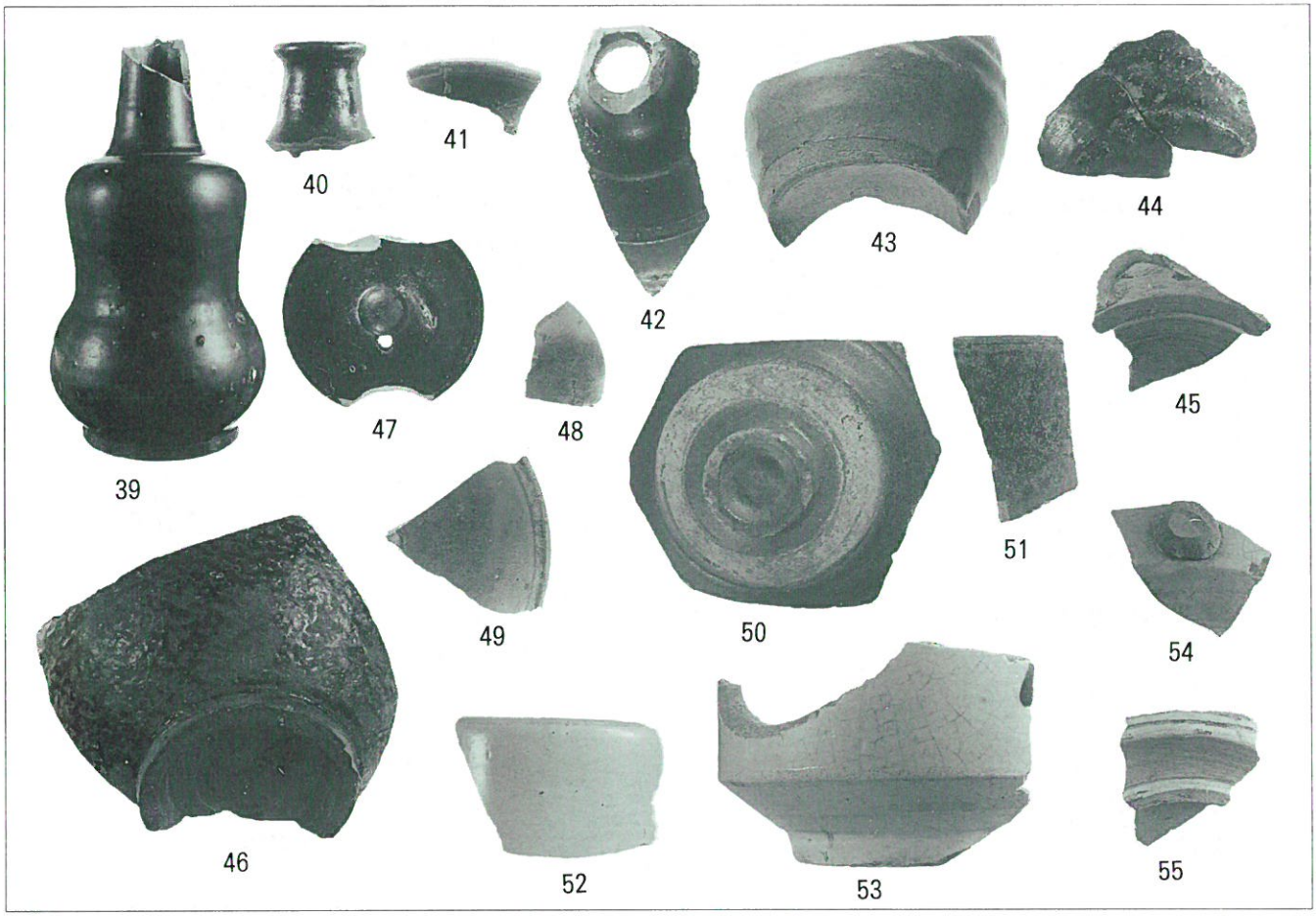


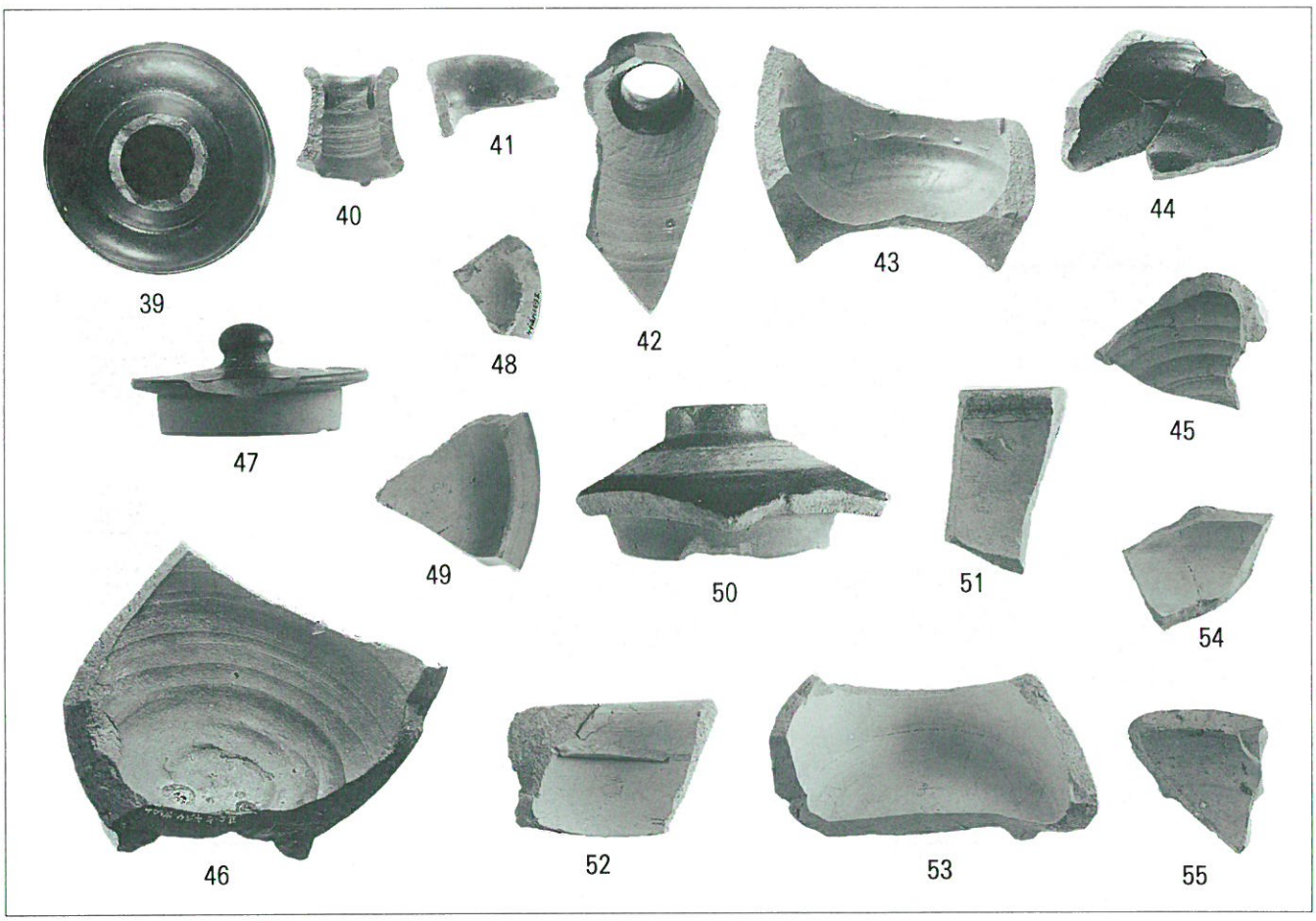
図版32　沖縄産施釉陶器①（上：表面　下：裏面）



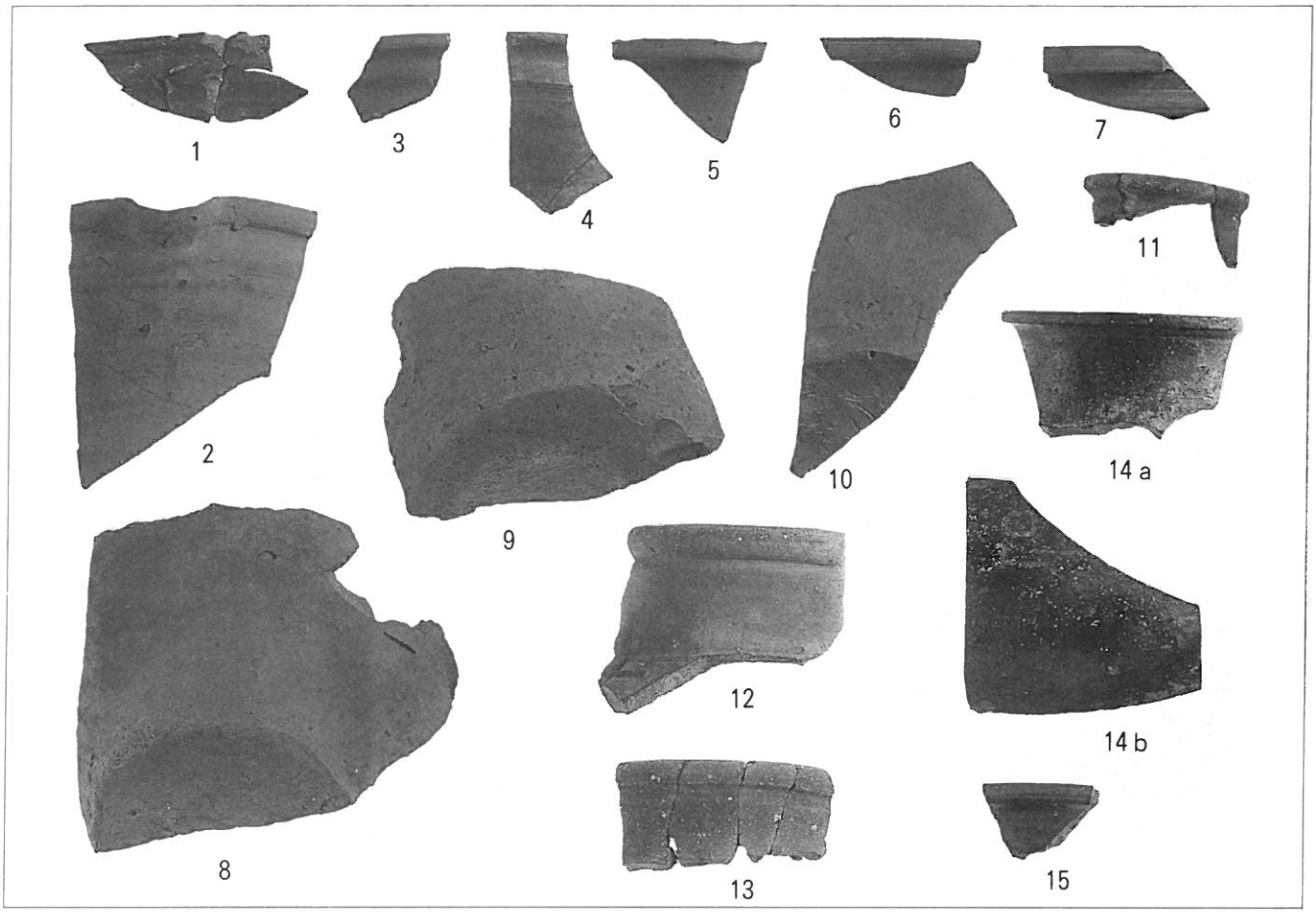


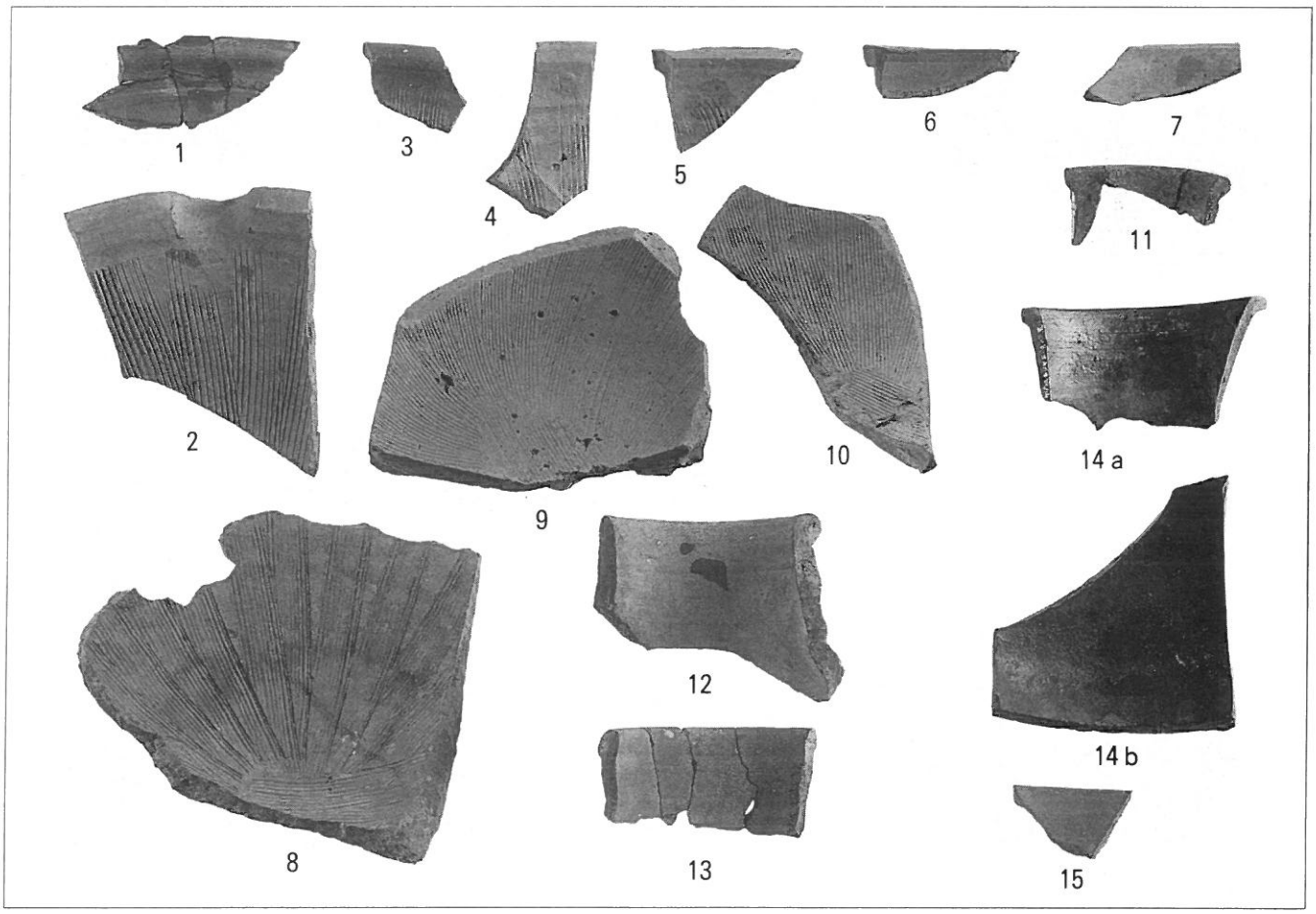
図版33　沖縄産施釉陶器②（上：表面　下：裏面）



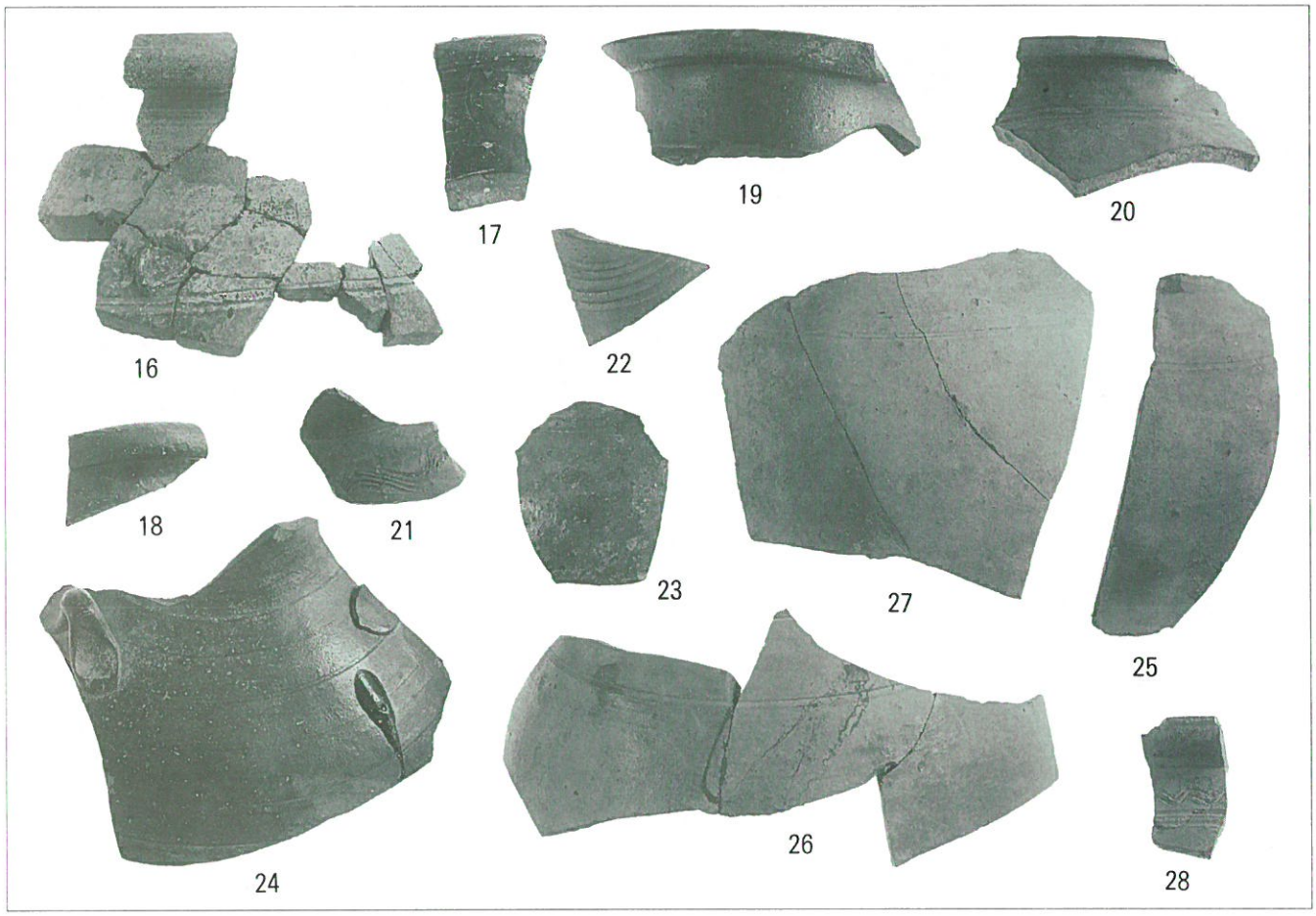


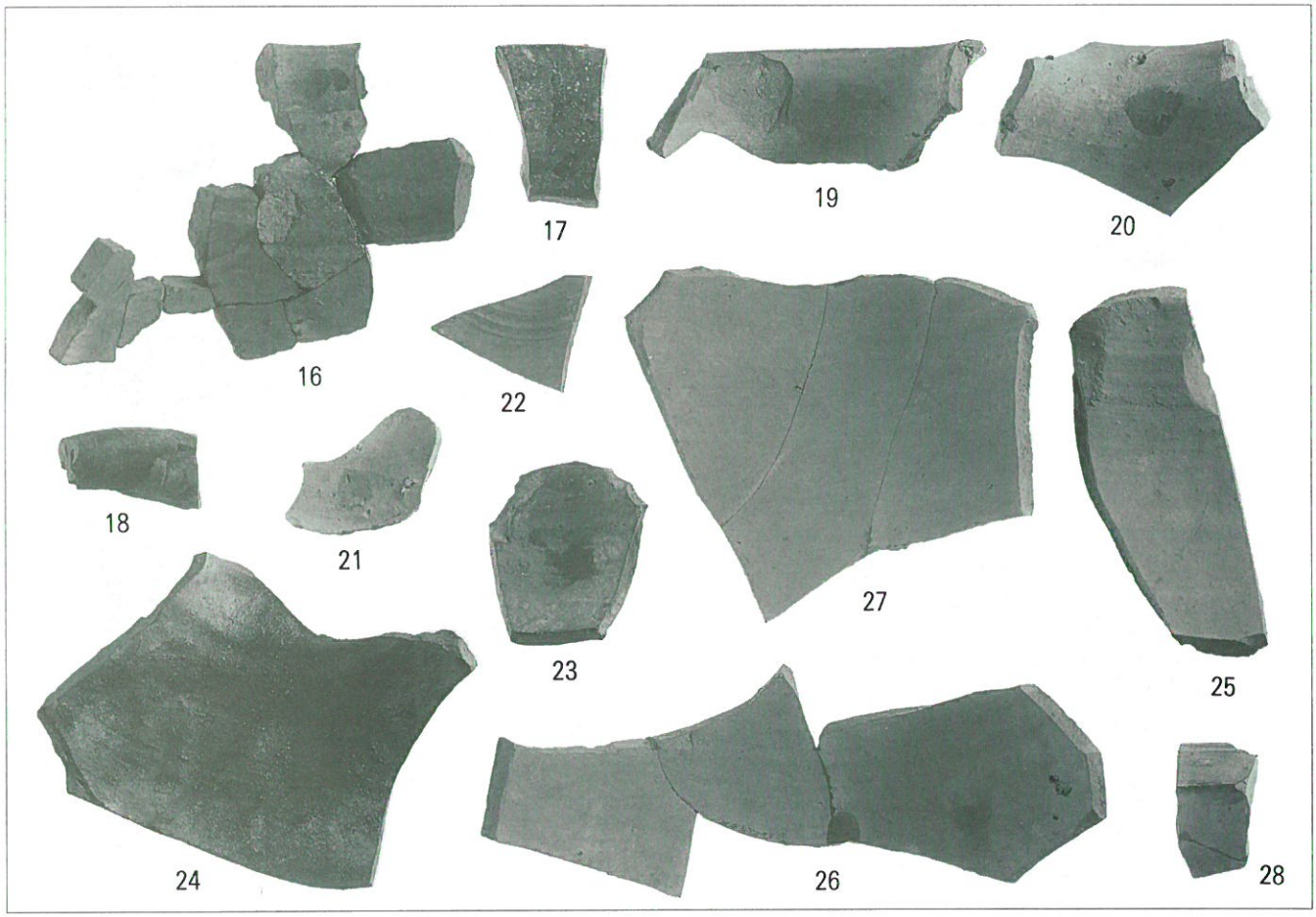
図版34　沖縄産施釉陶器③（上：表面　下：裏面）



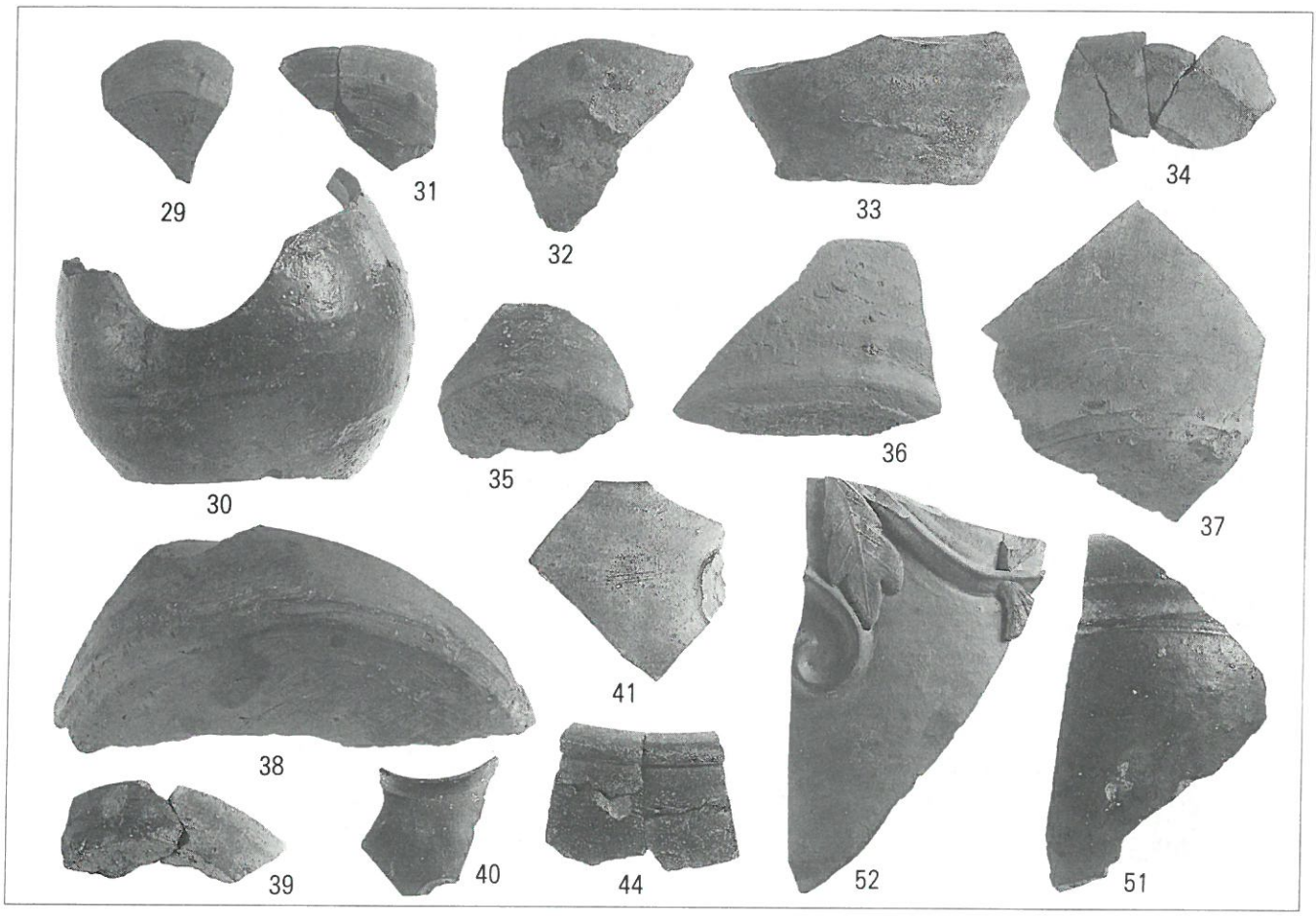


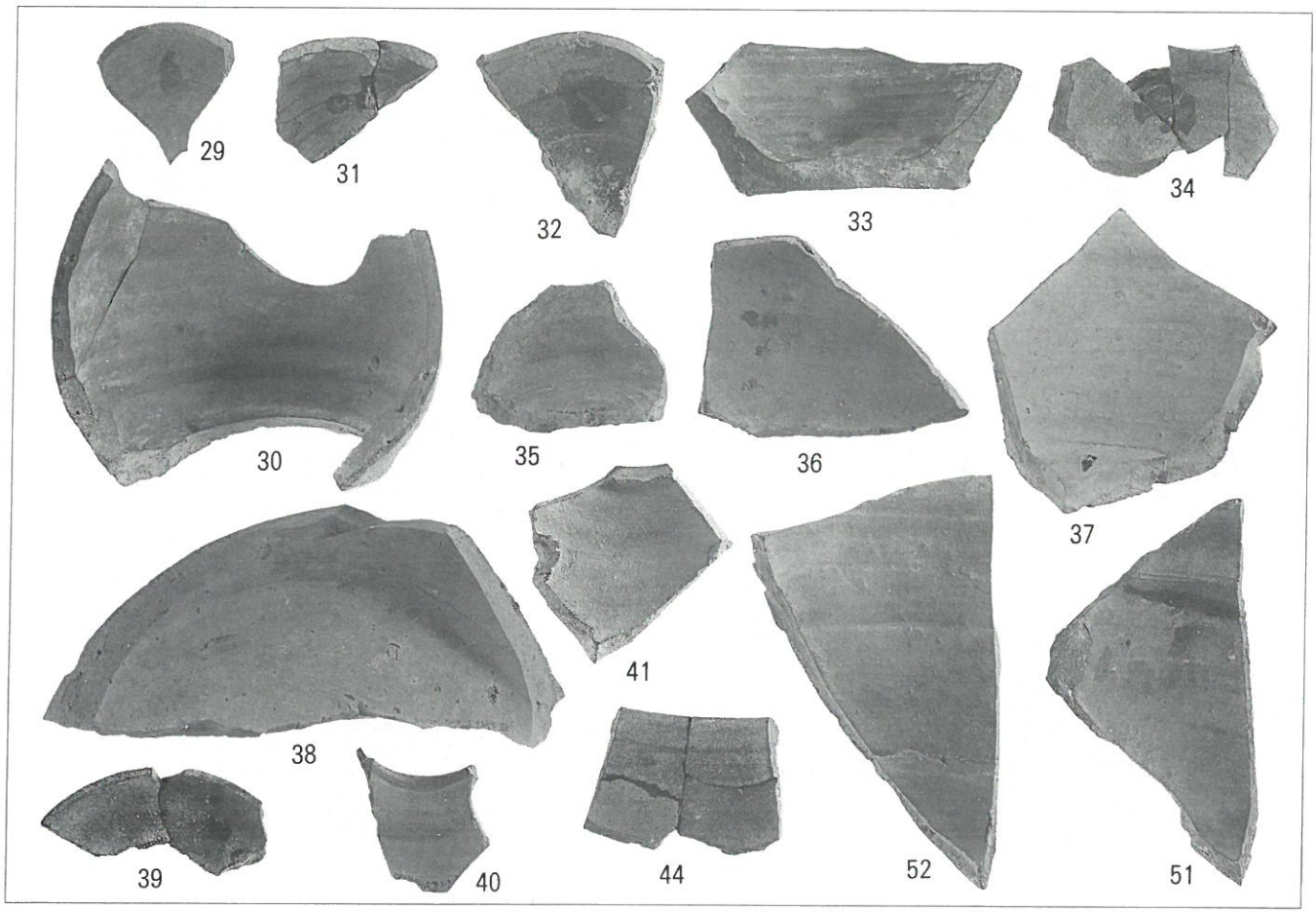
図版35　沖縄産無釉陶器①（上：表面　下：裏面）



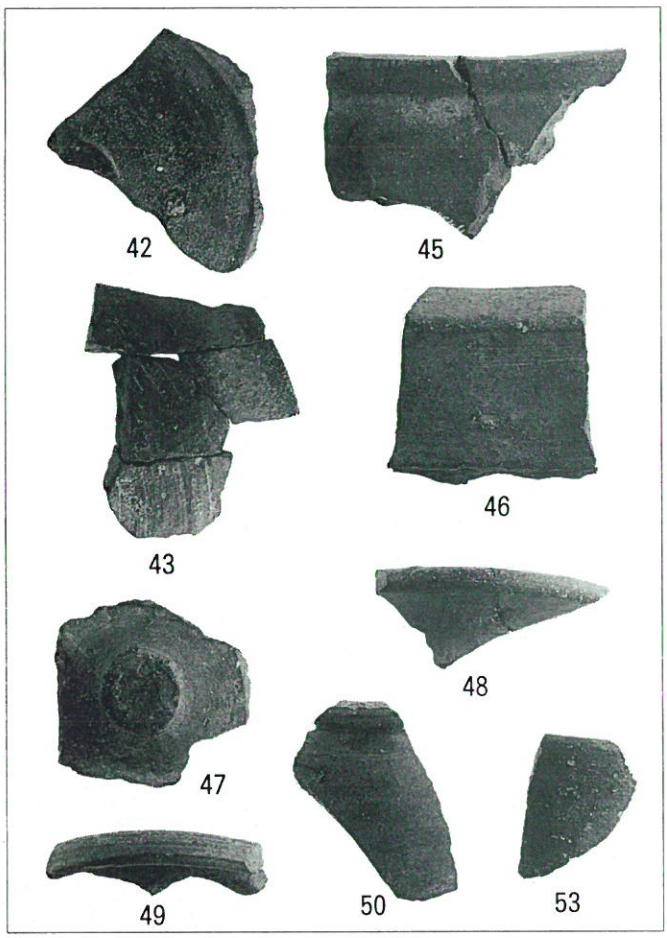


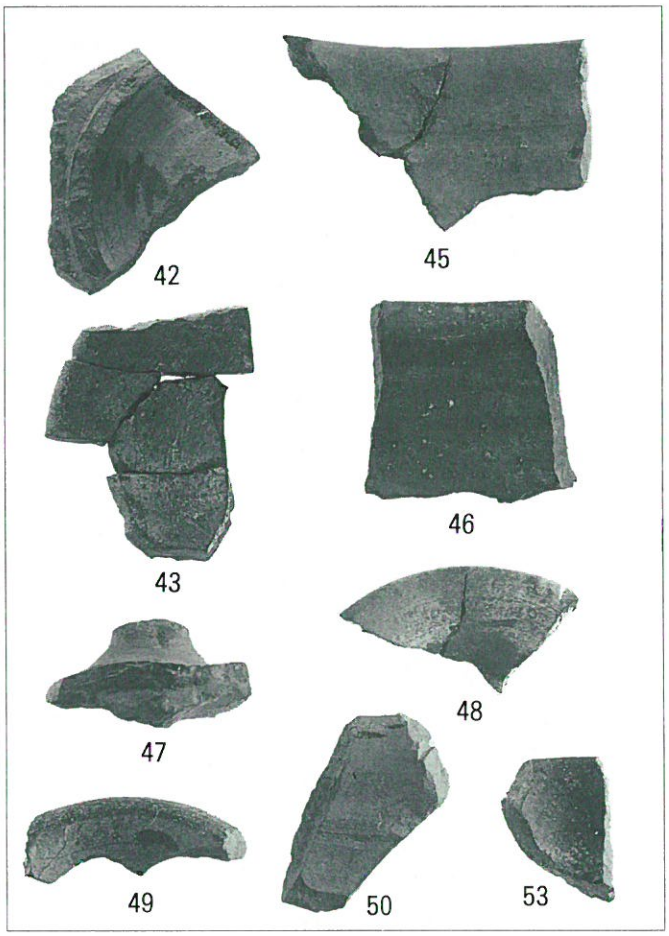
図版36　沖縄産無釉陶器②（上：表面　下：裏面）

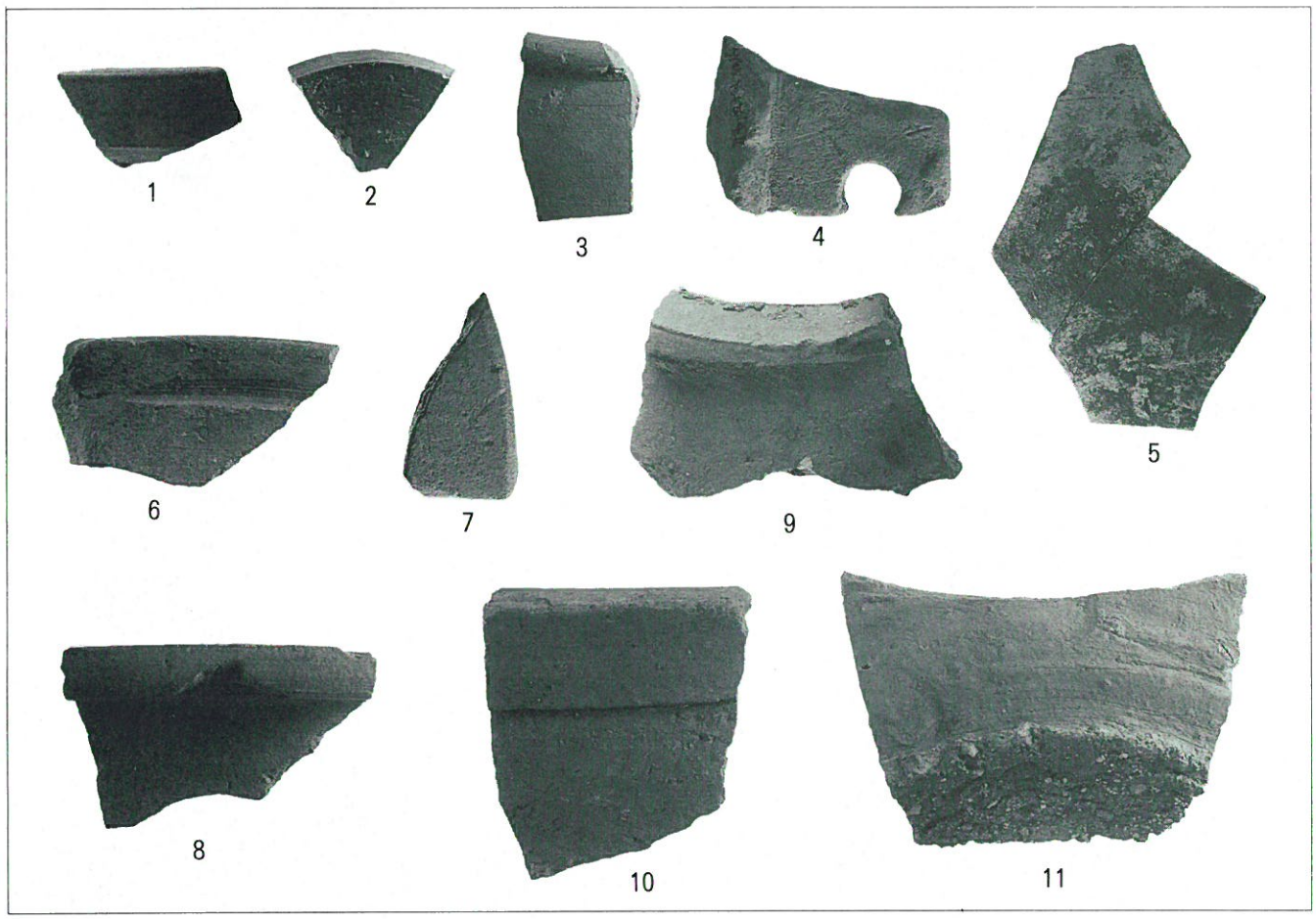




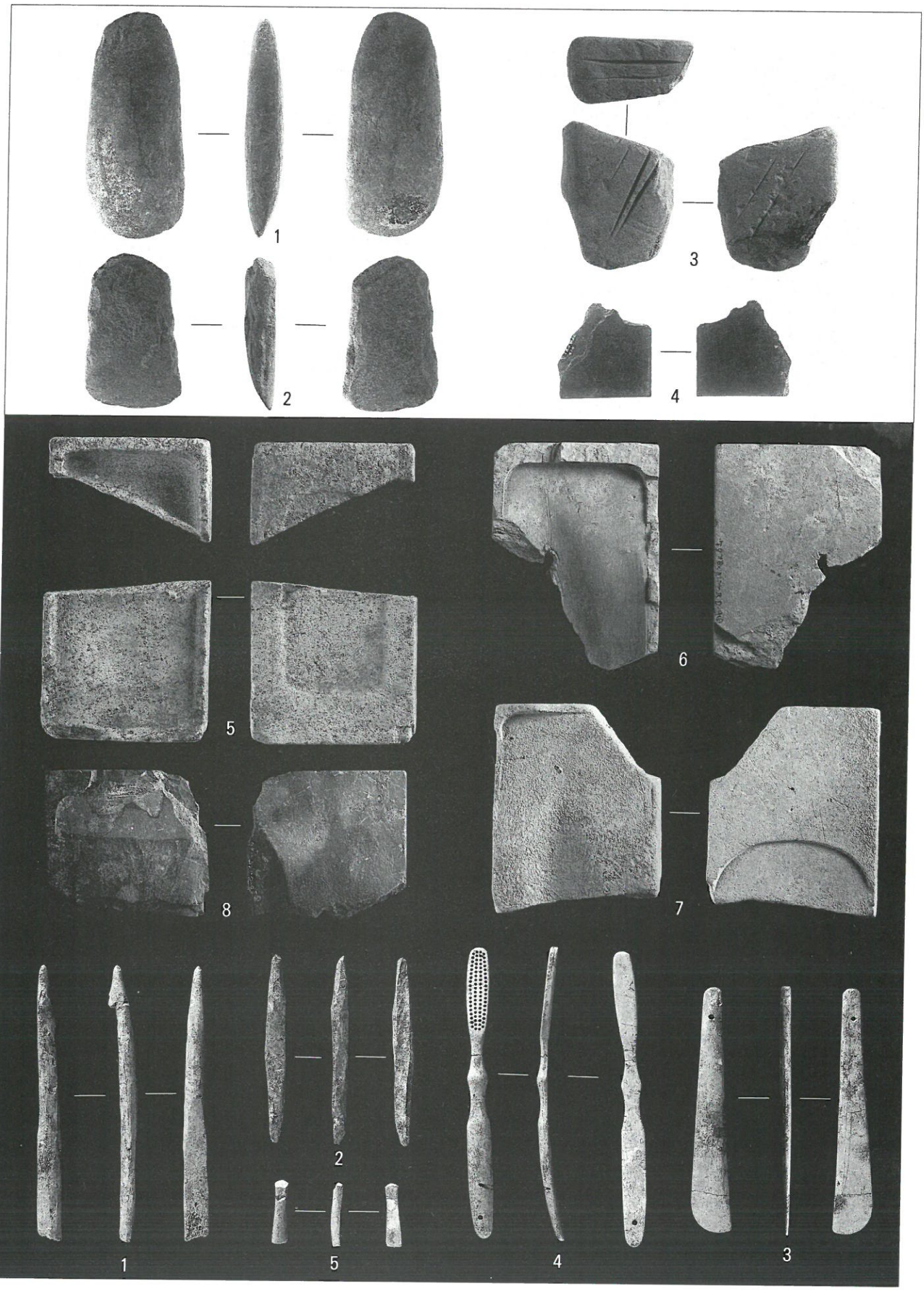
図版37　沖縄産無釉陶器③（上：表面　下：裏面）



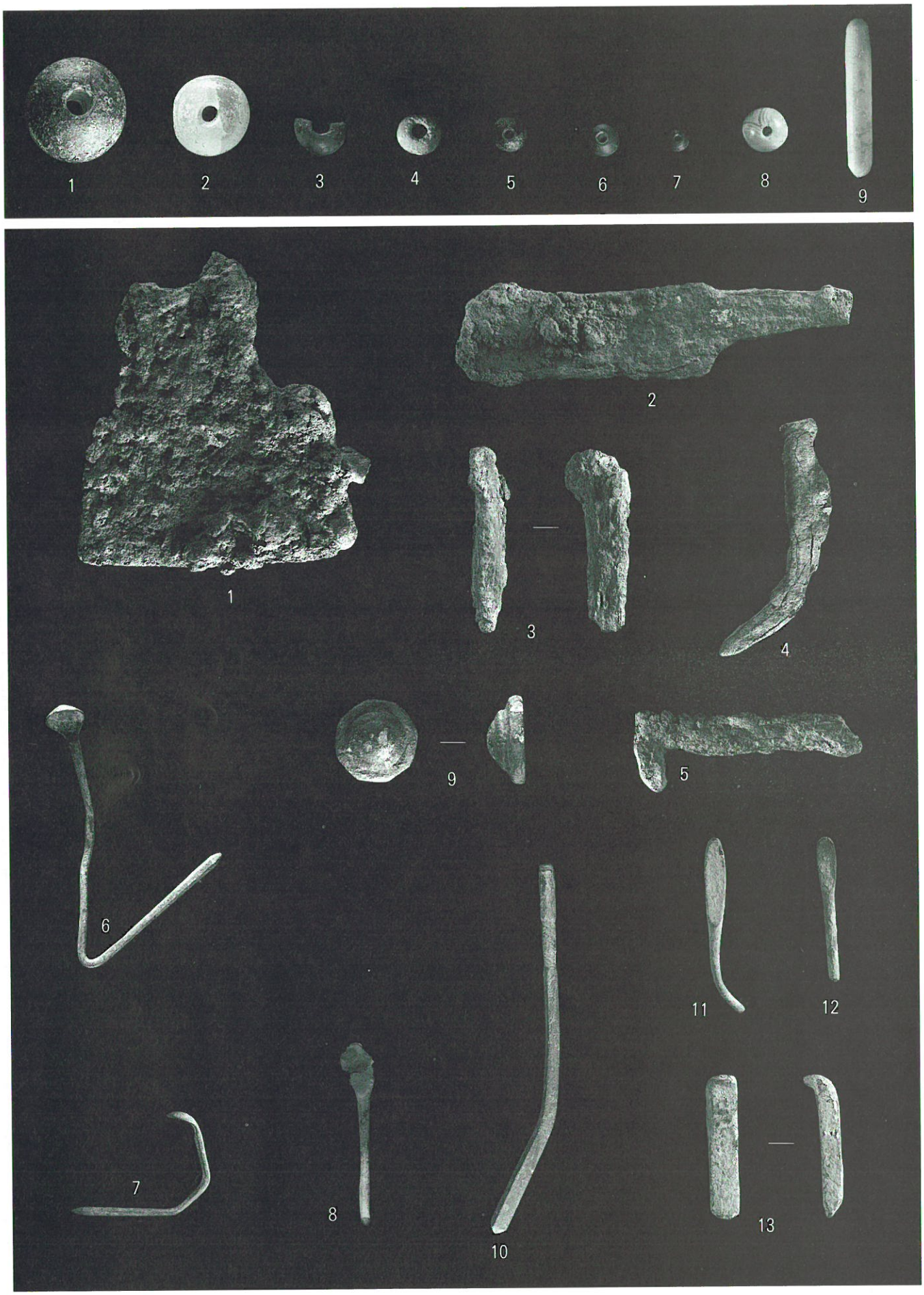




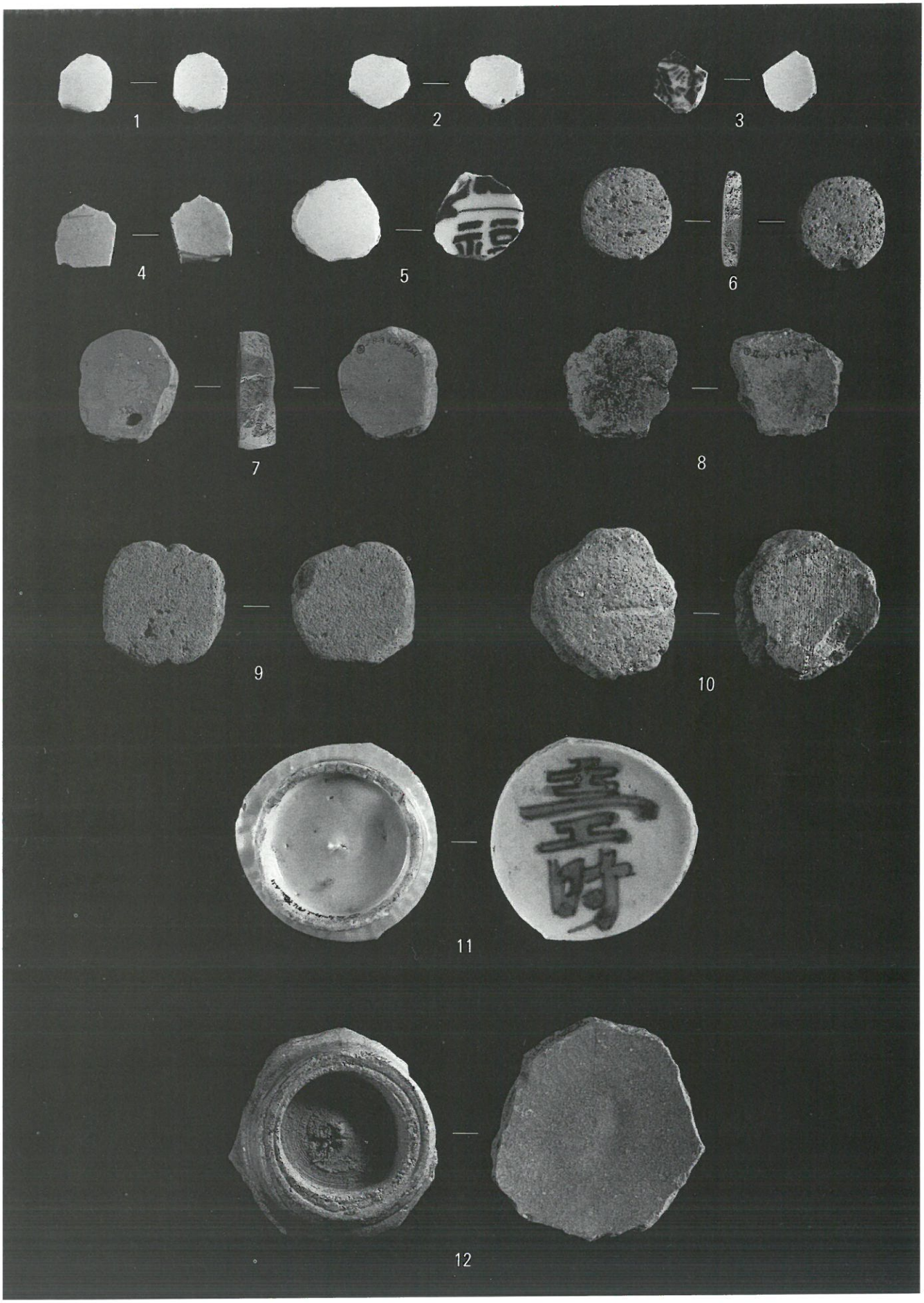
図版38　上：沖縄産無釉陶器④　下：陶質土器（左：表面　右：裏面）



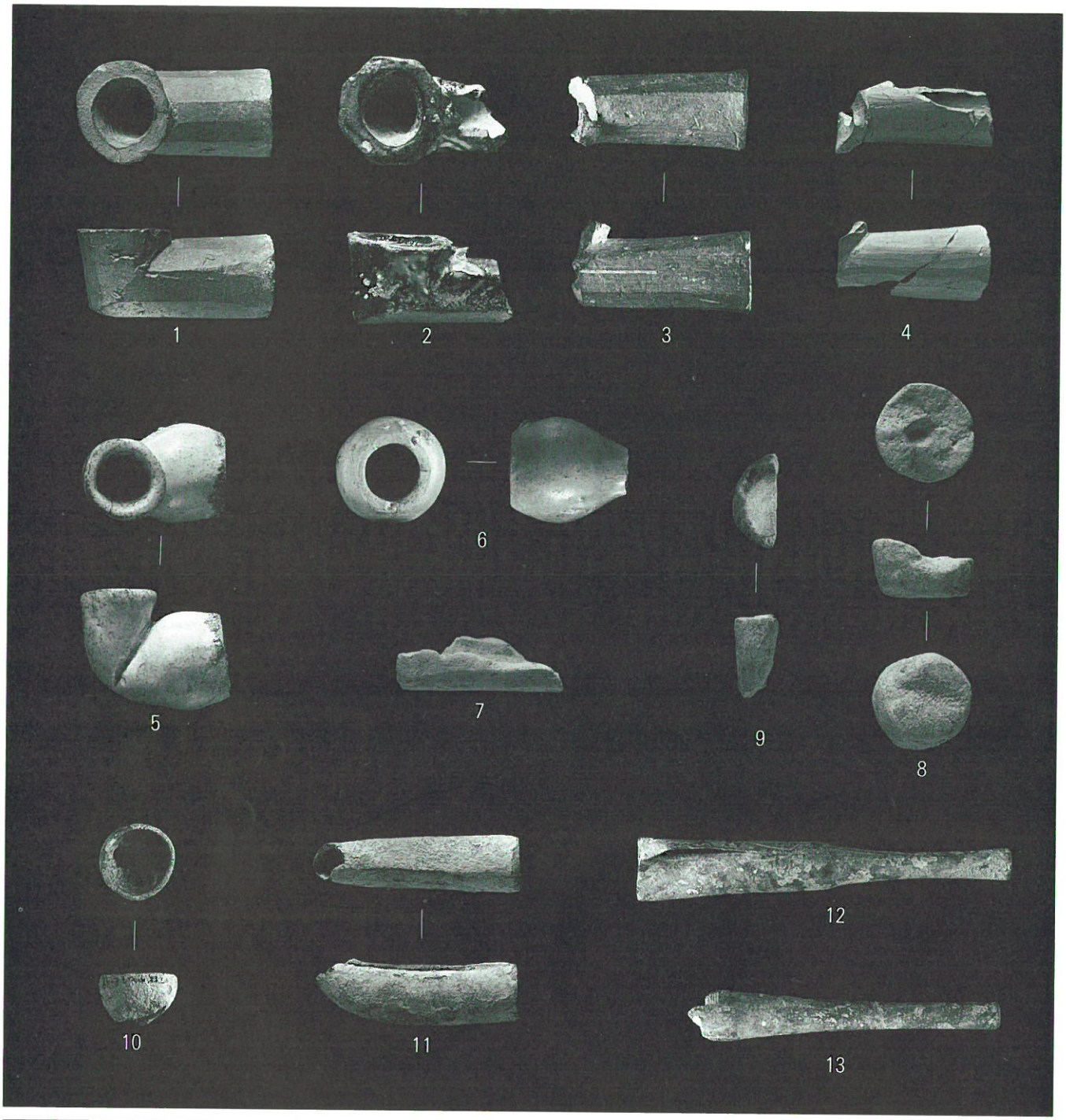
図版39　上：石器　中：硯　下：骨製品



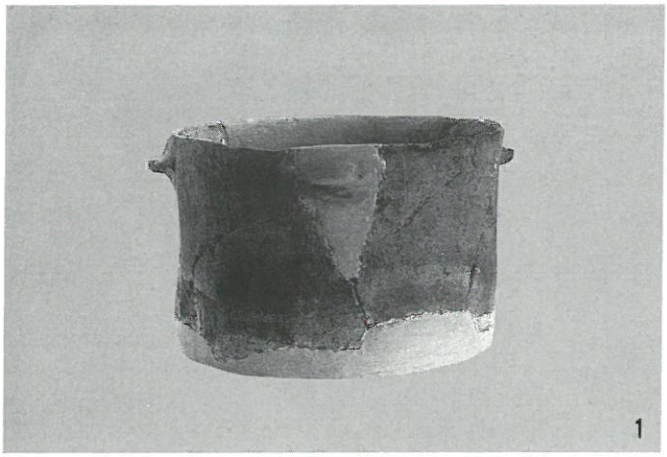
図版40　上：玉　下：鉄・青銅製品

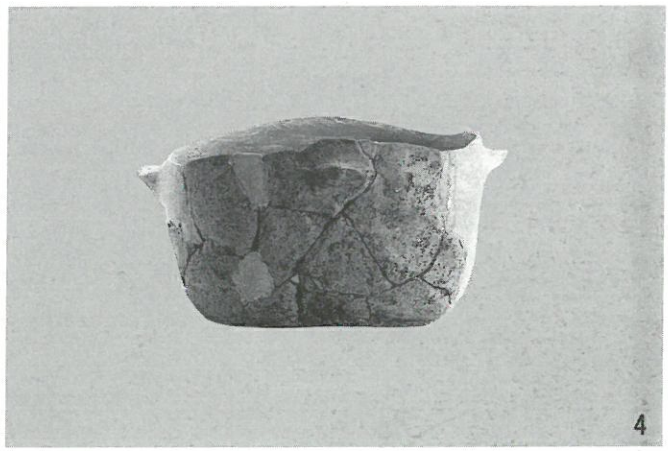


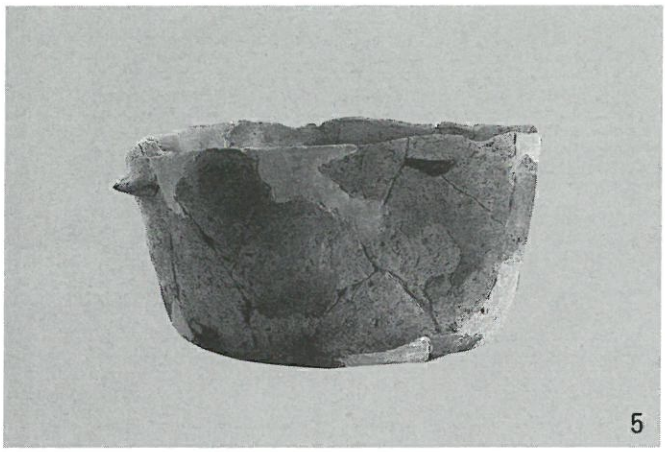
図版41　円盤状製品

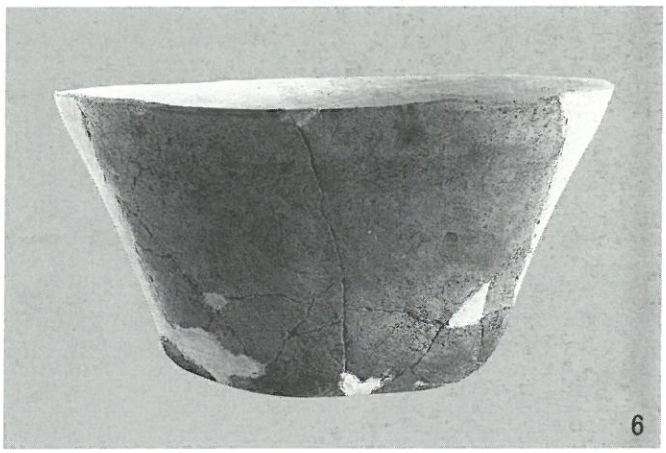


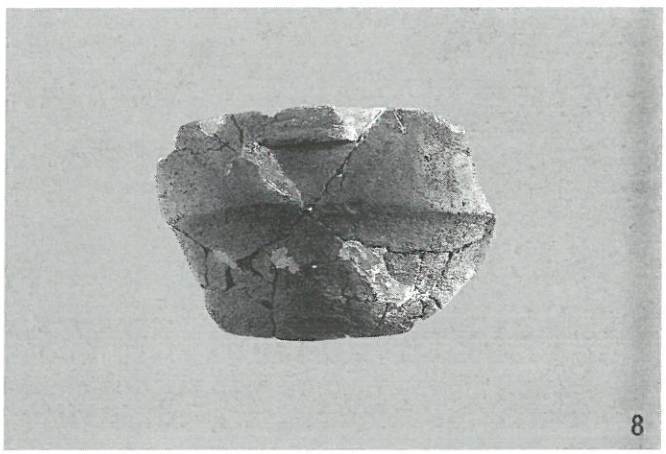
図版42　上：煙管　下：貝製品







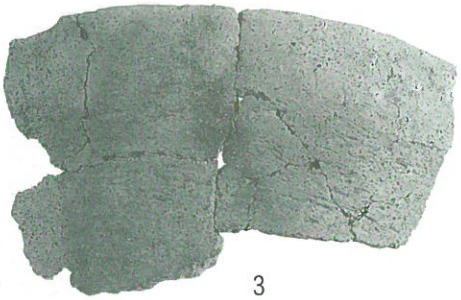




図版43　土 器①（復元土器）

1

2

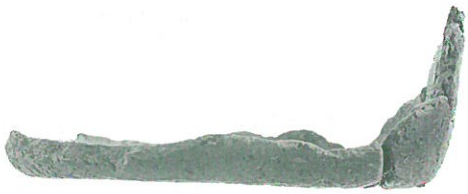


3

4

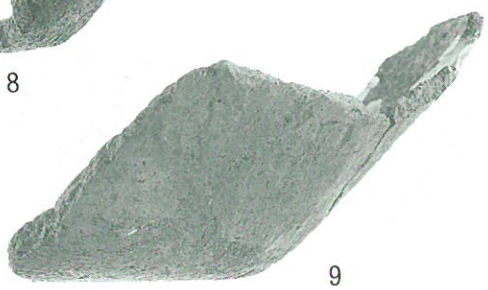
5

6



7

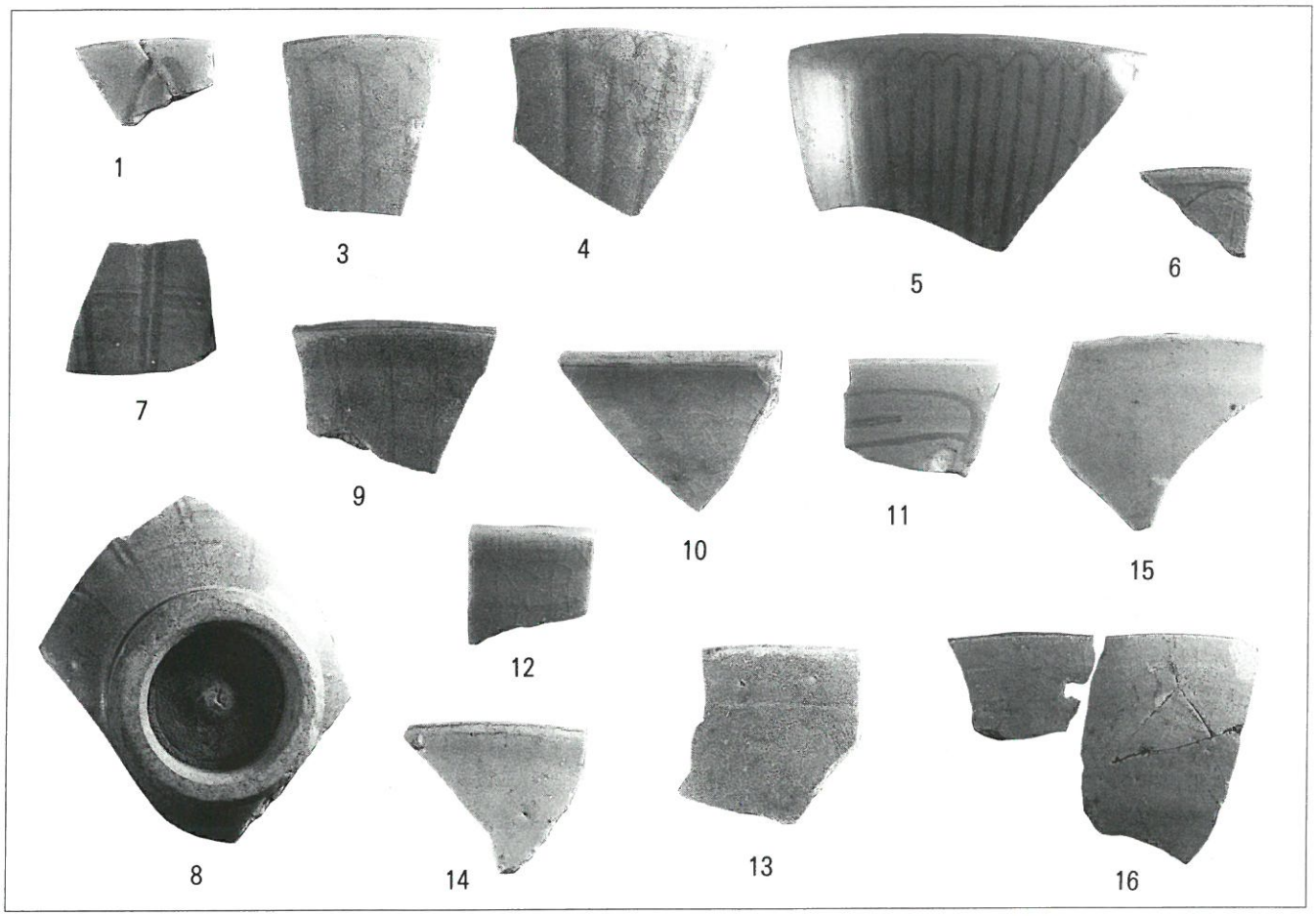
8

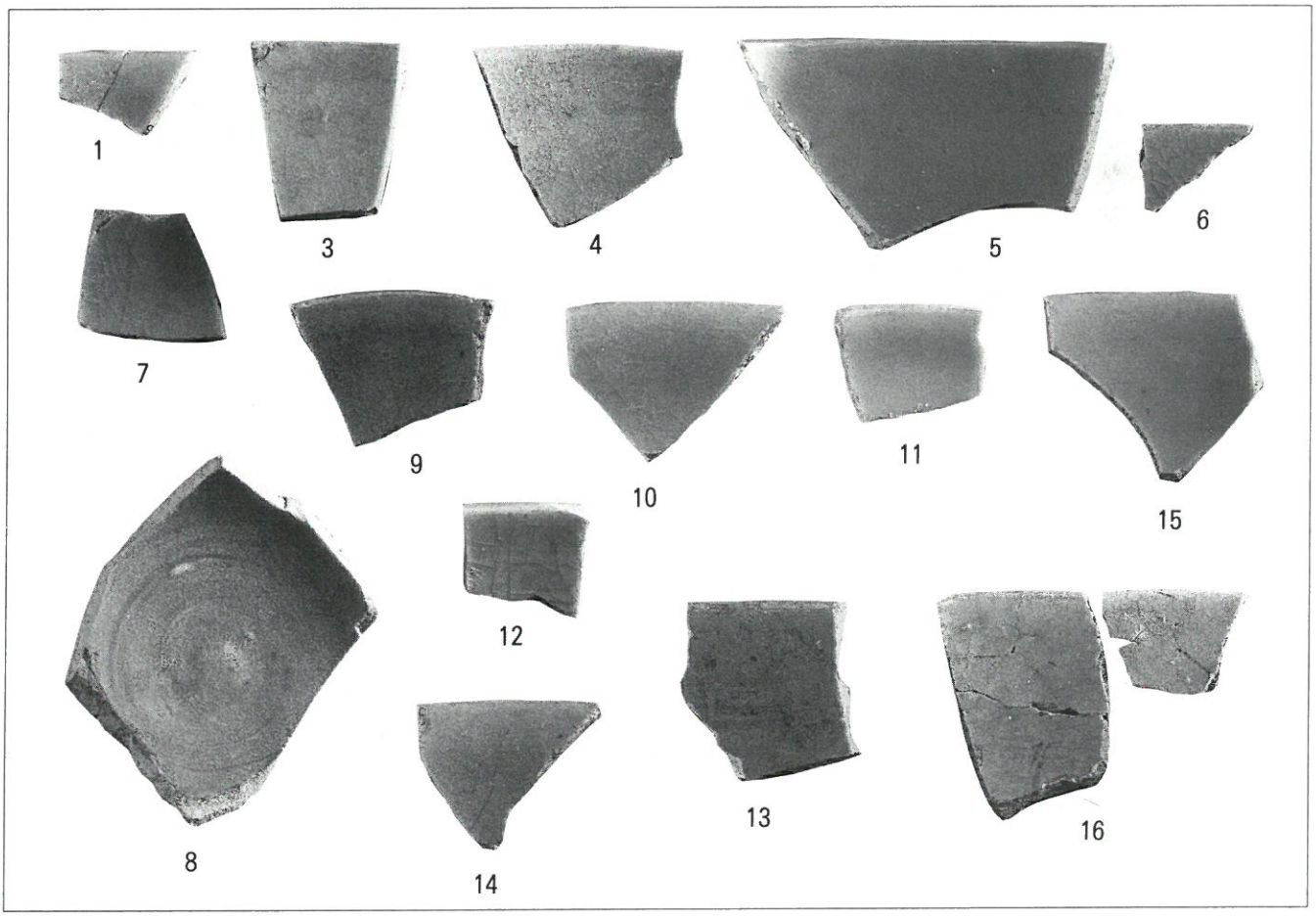


9

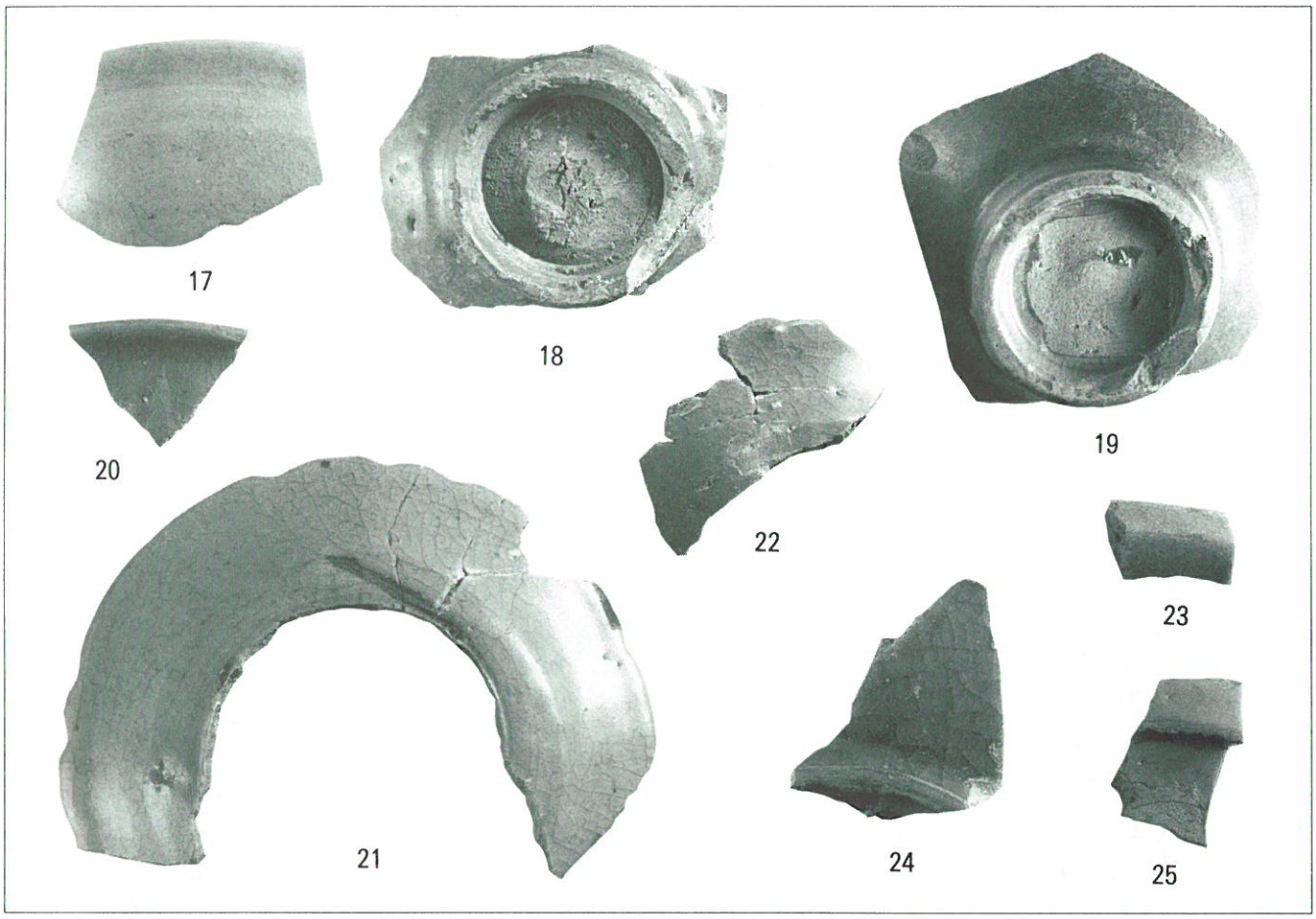
10

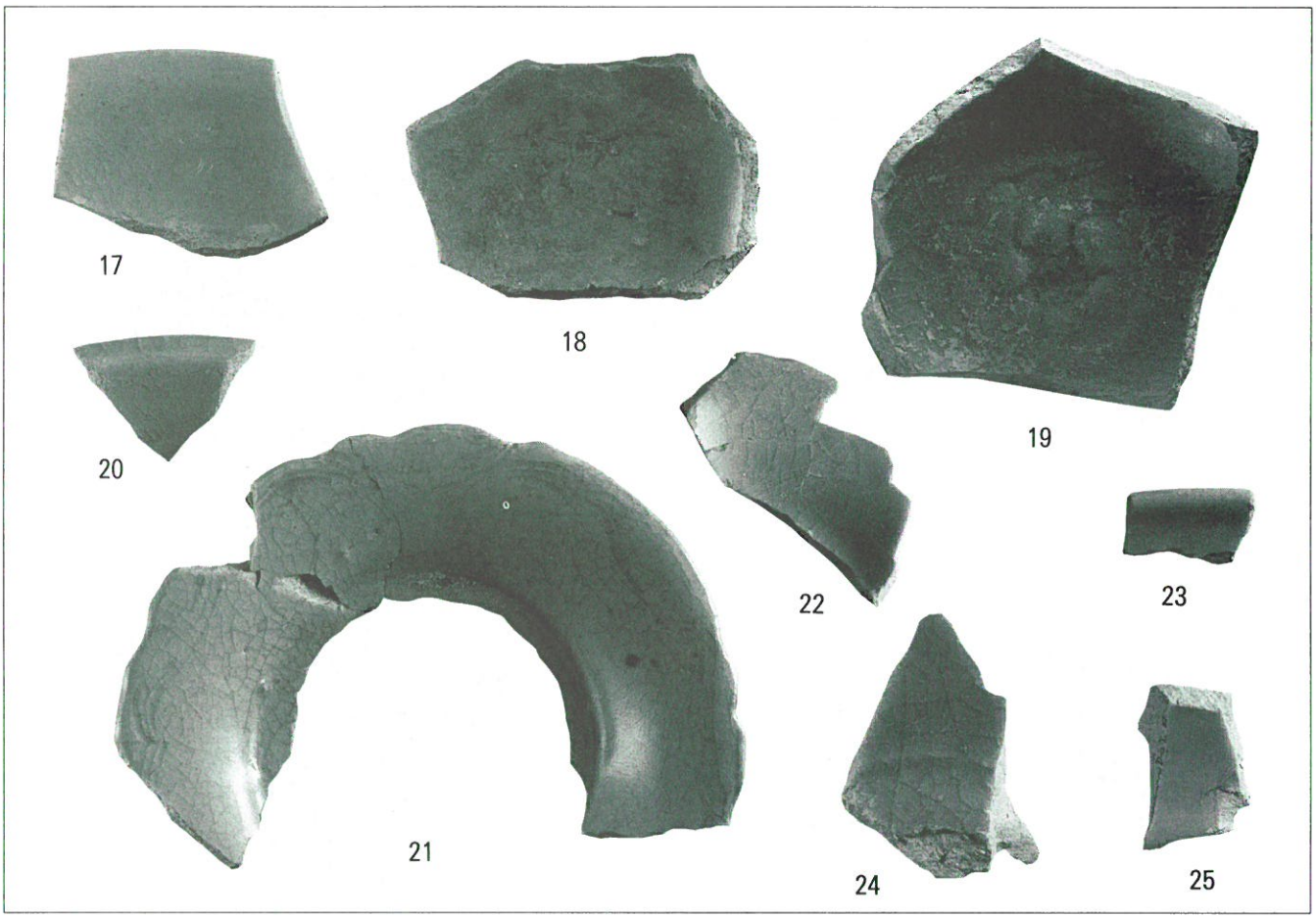
図版44　土 器 ②



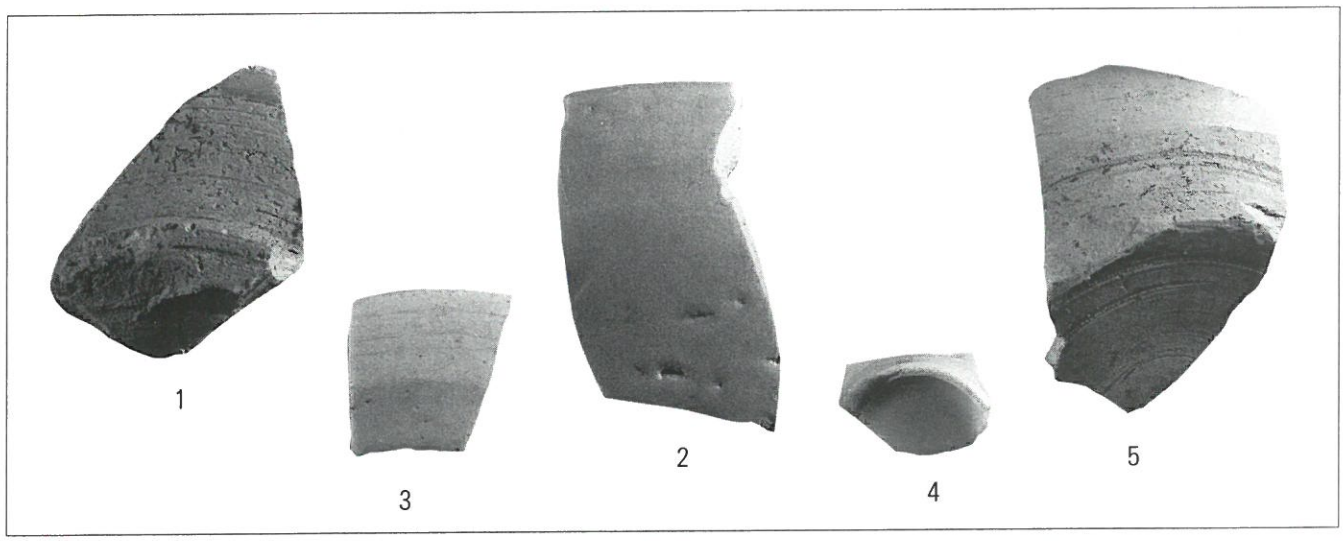


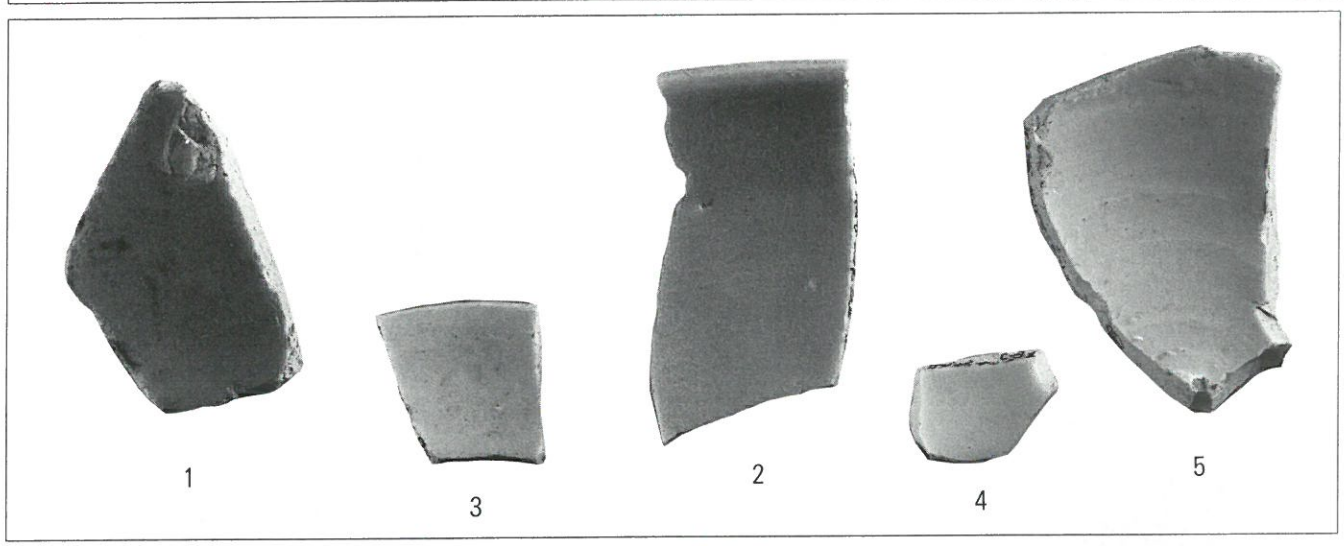
図版45　青 磁①（上：表面　下：裏面）

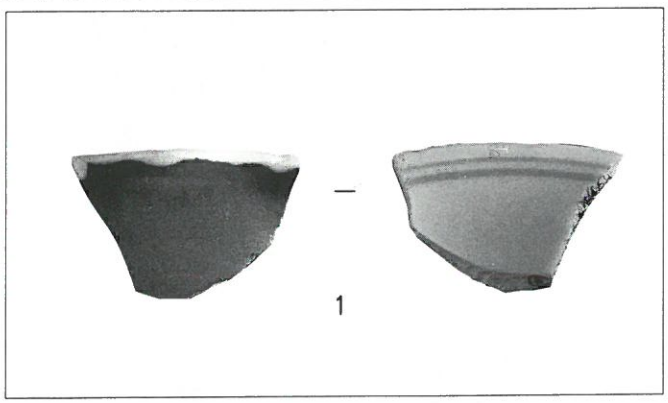


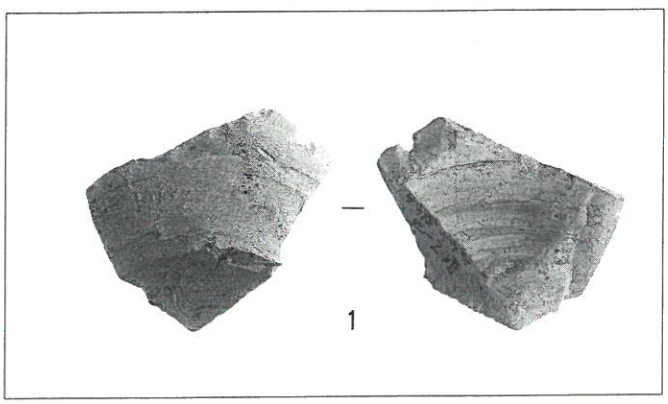


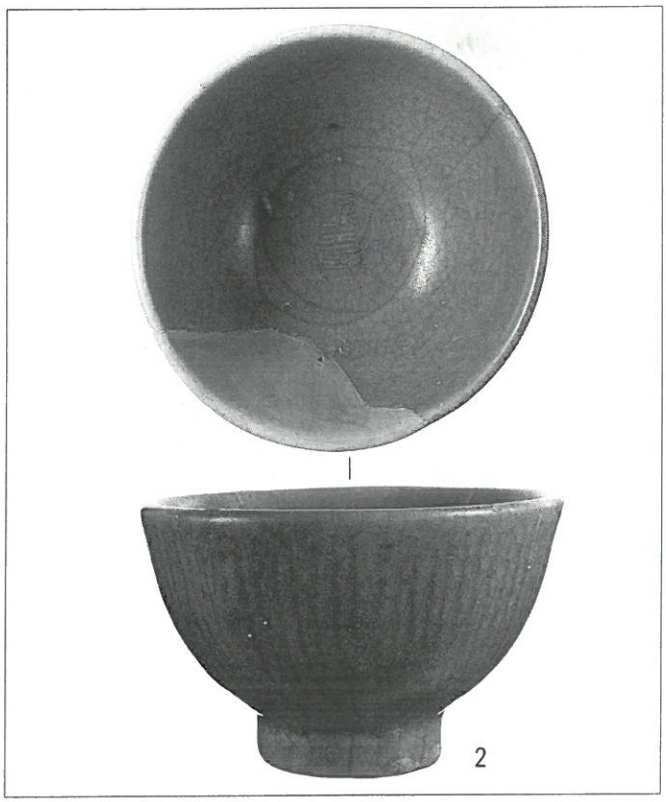
図版46　青 磁②（上：表面　下：裏面）



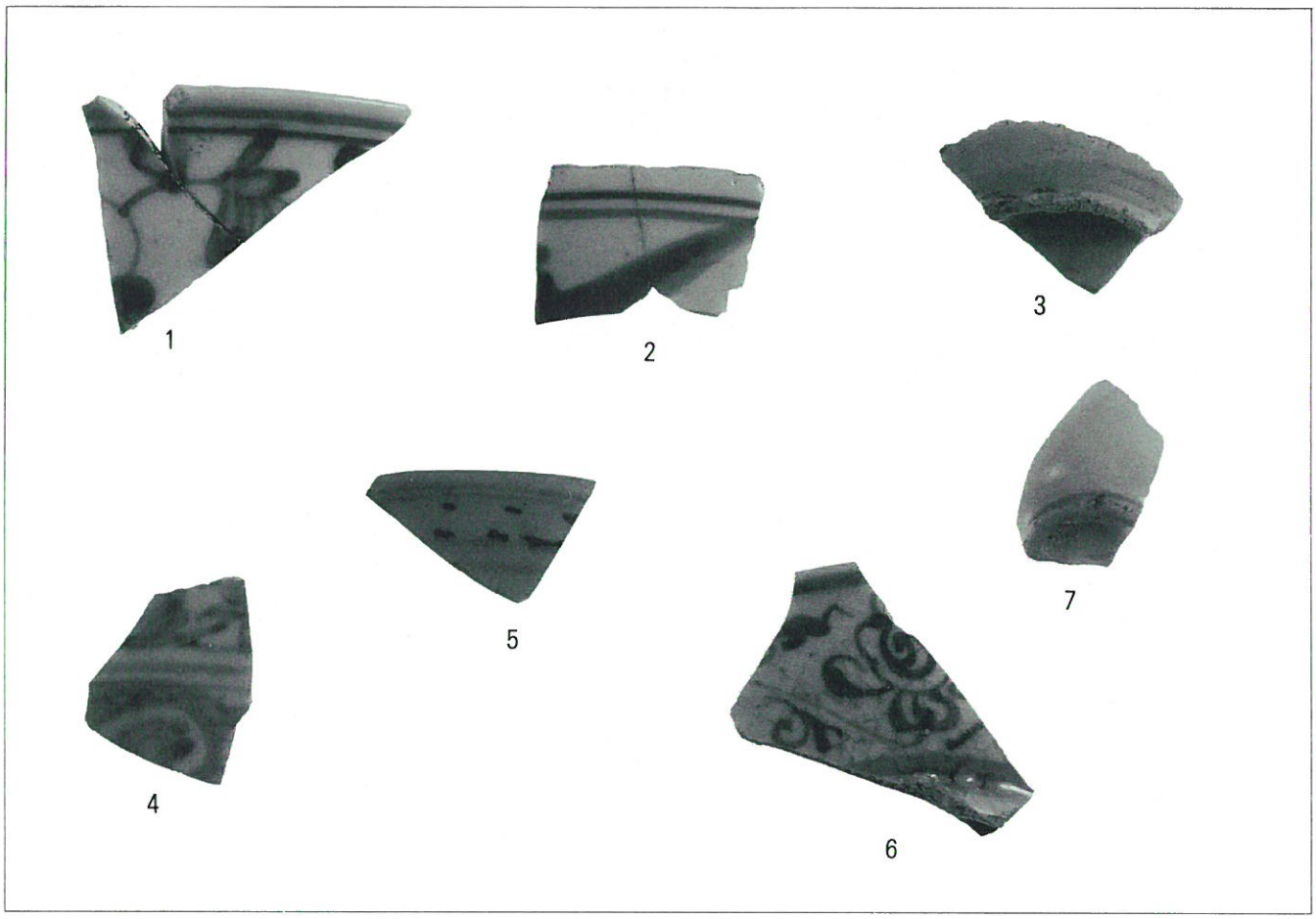


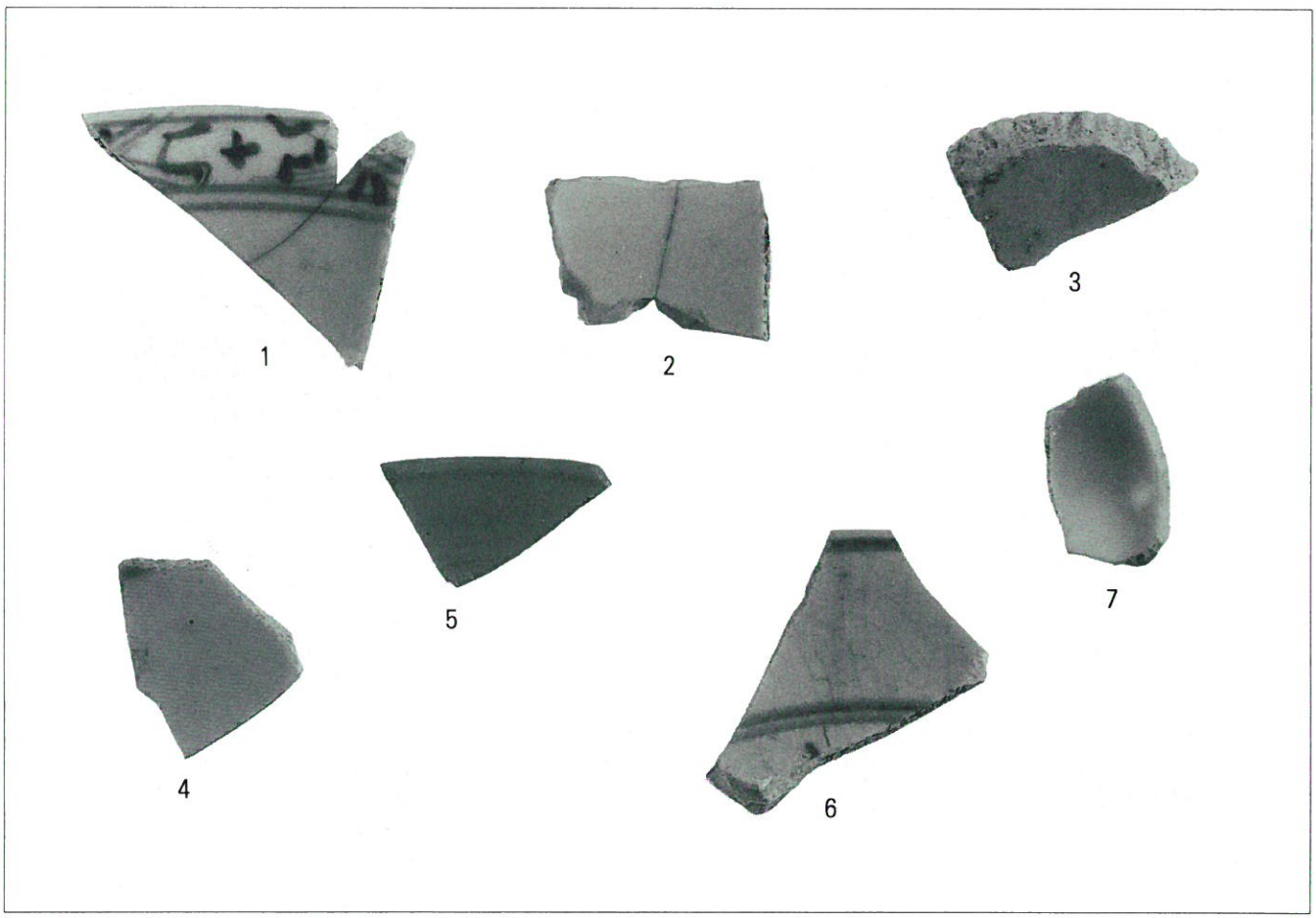




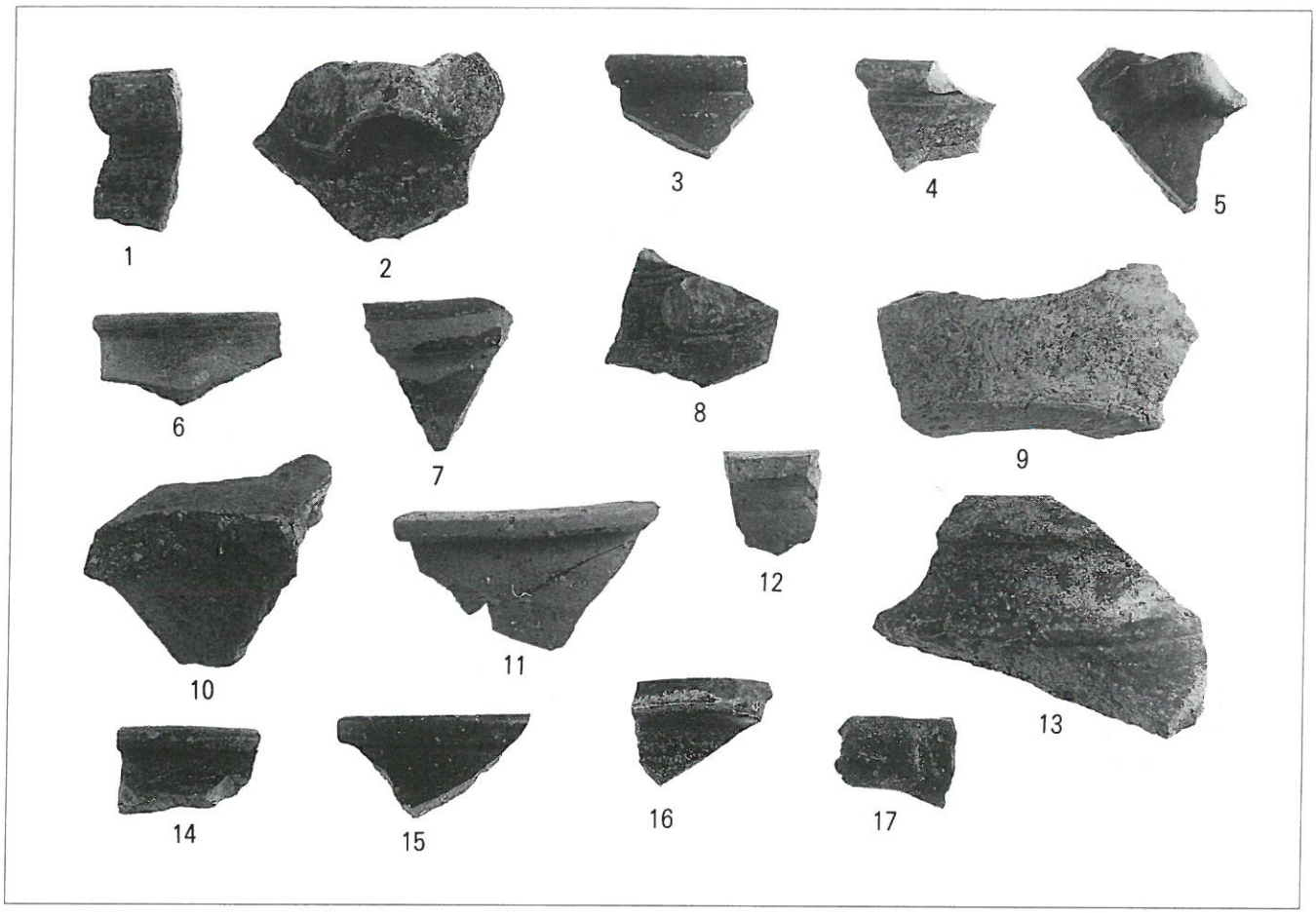


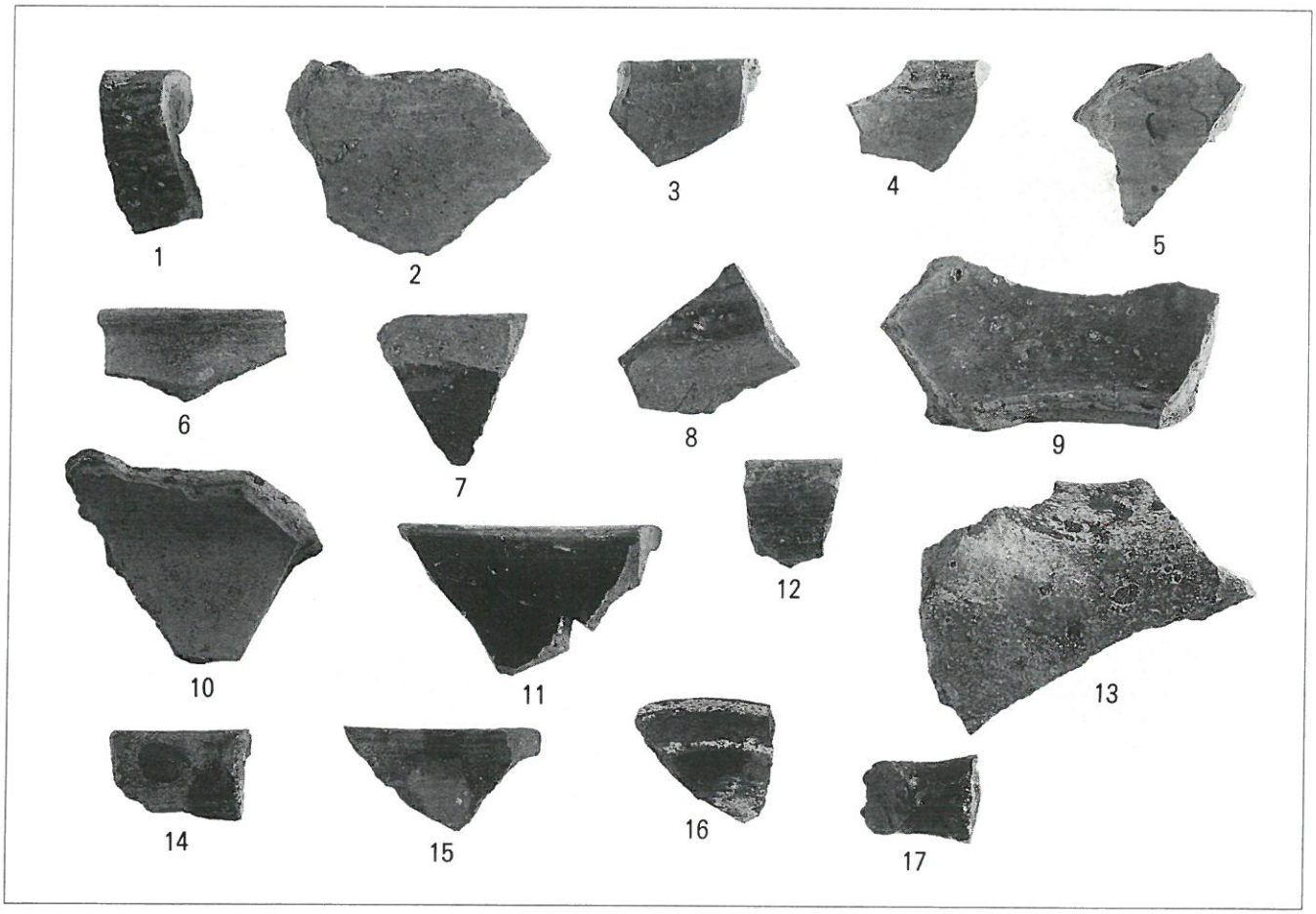
図版47　上：白 磁（表面）　中：白 磁（裏面）　下左：鉄釉陶器、茶入れ壺　下右：青磁（復元）



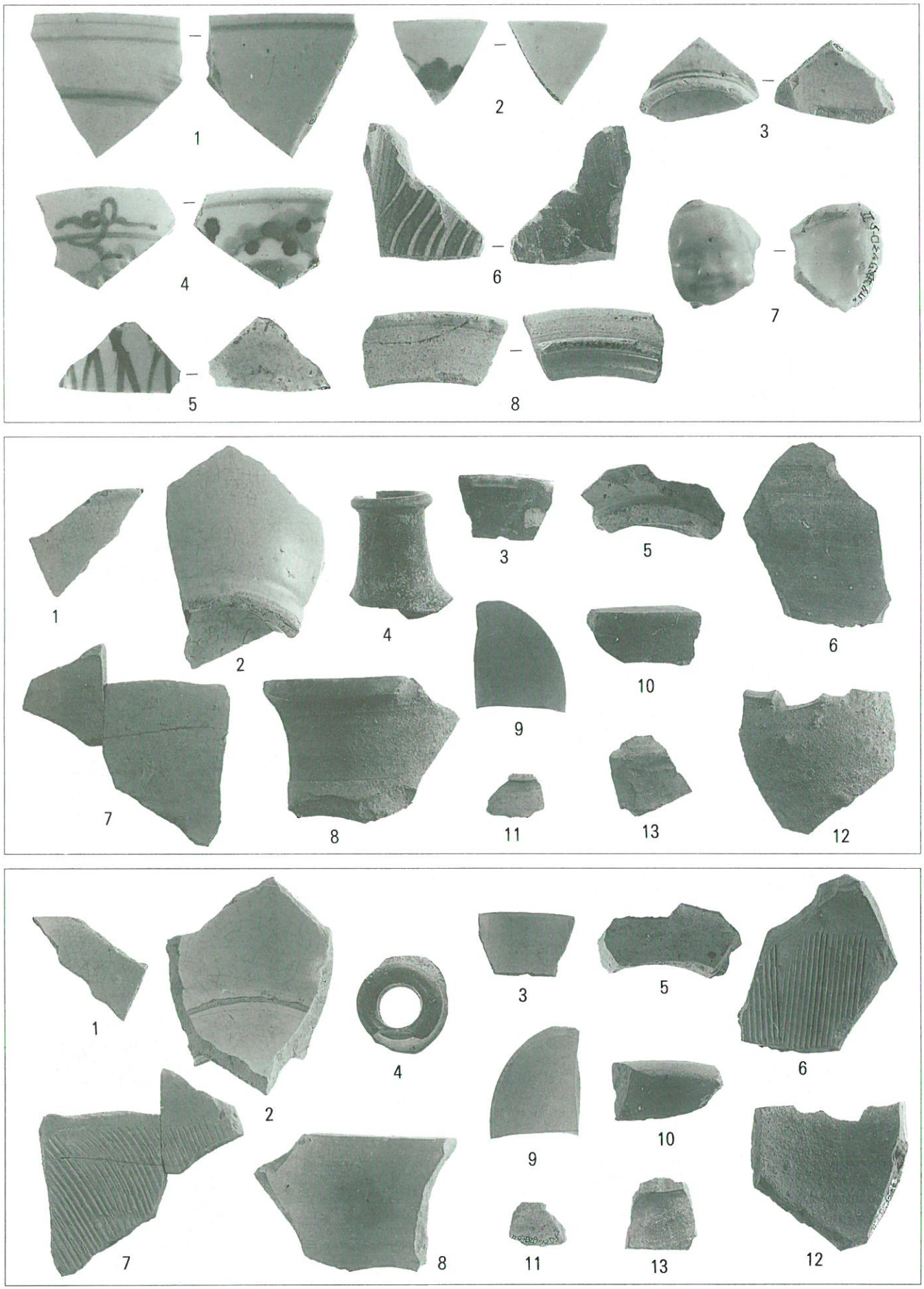


図版48　染 付（上：表面　下：裏面）

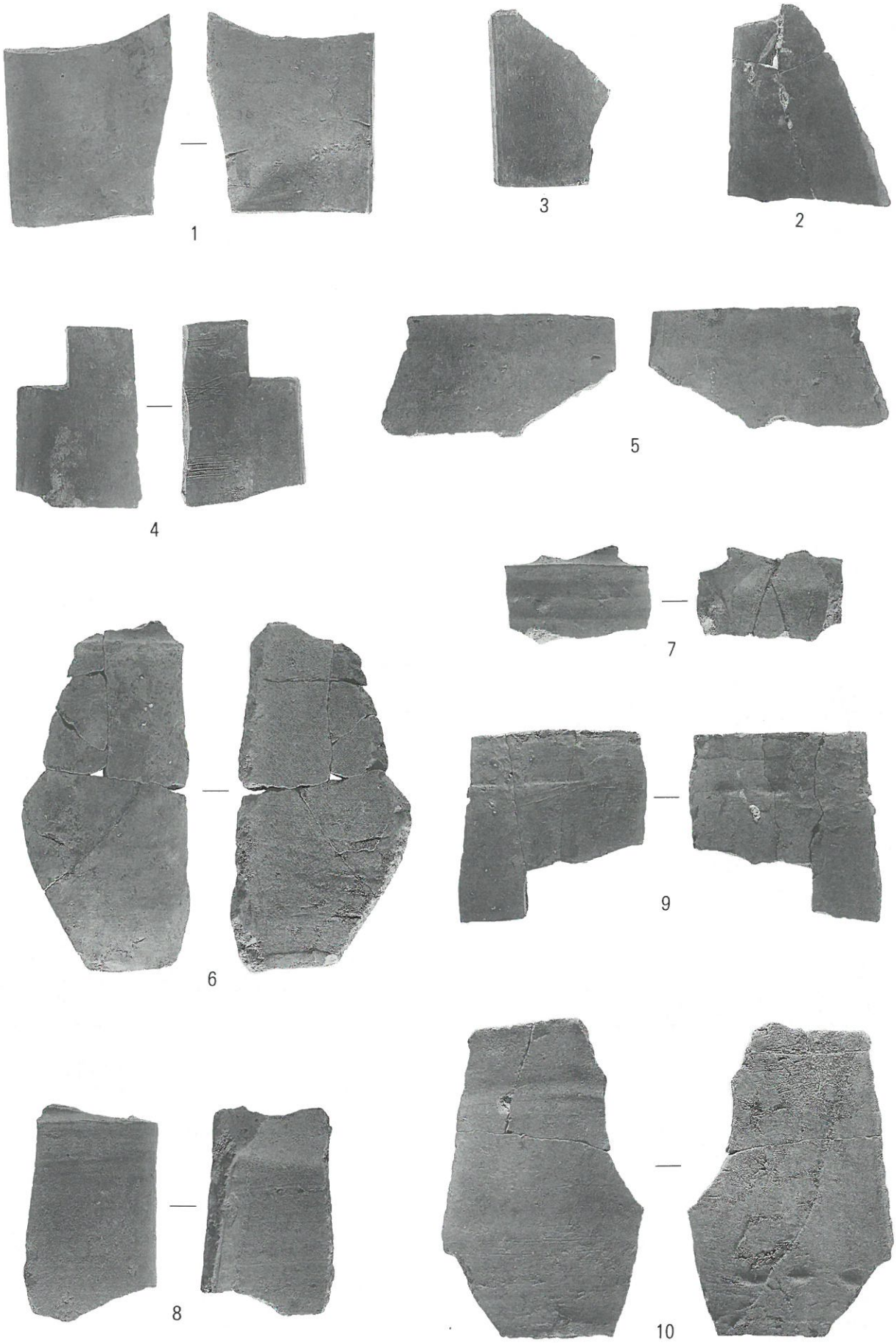




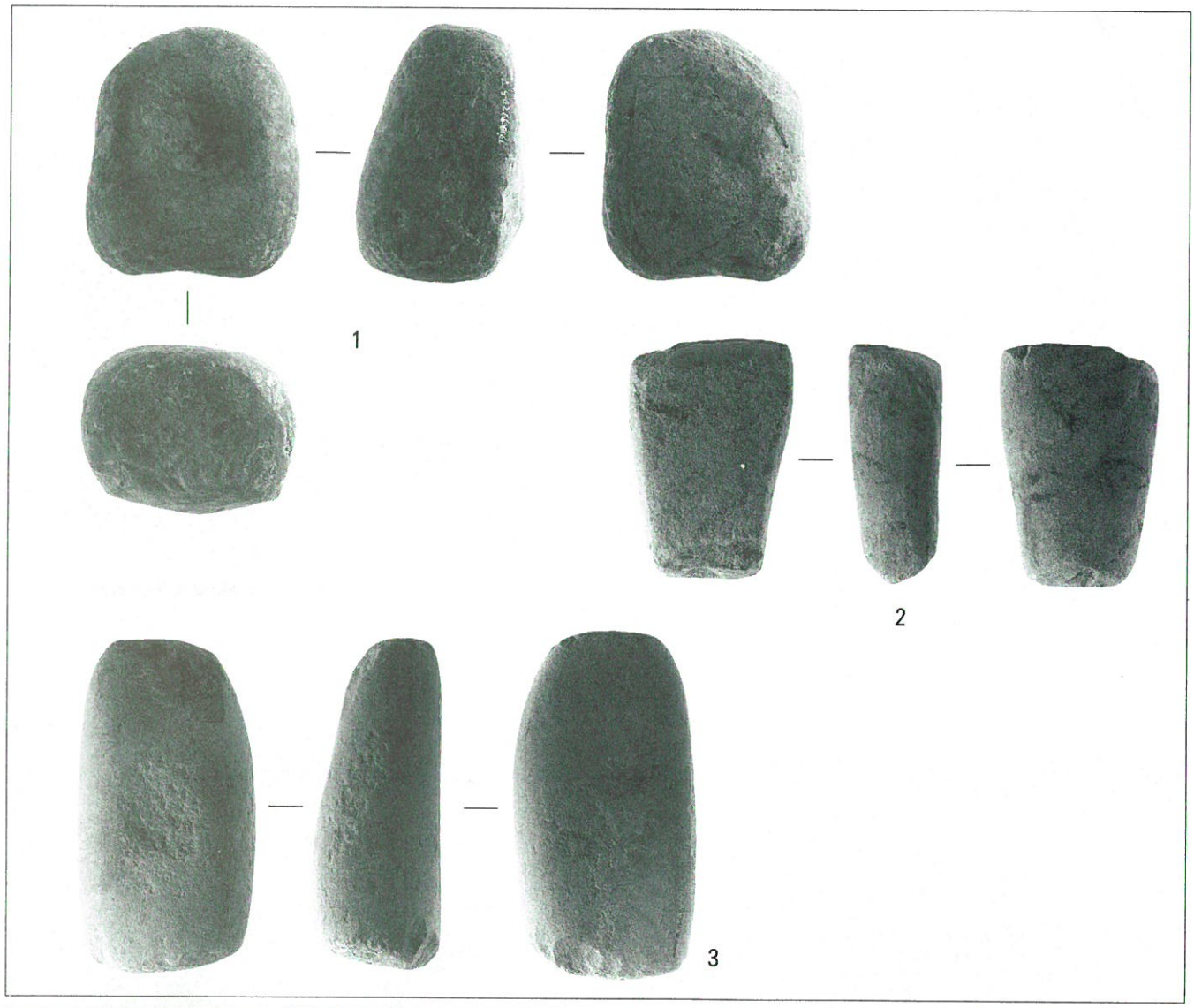
図版49　褐釉陶器（上：表面　下：裏面）

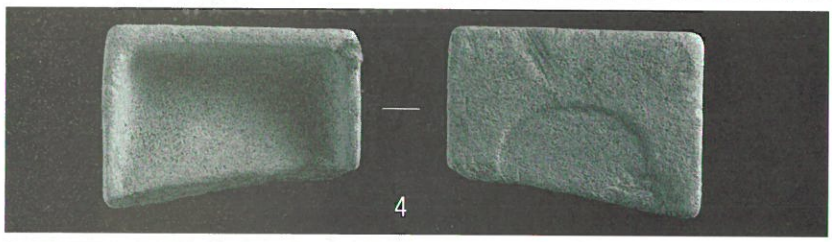


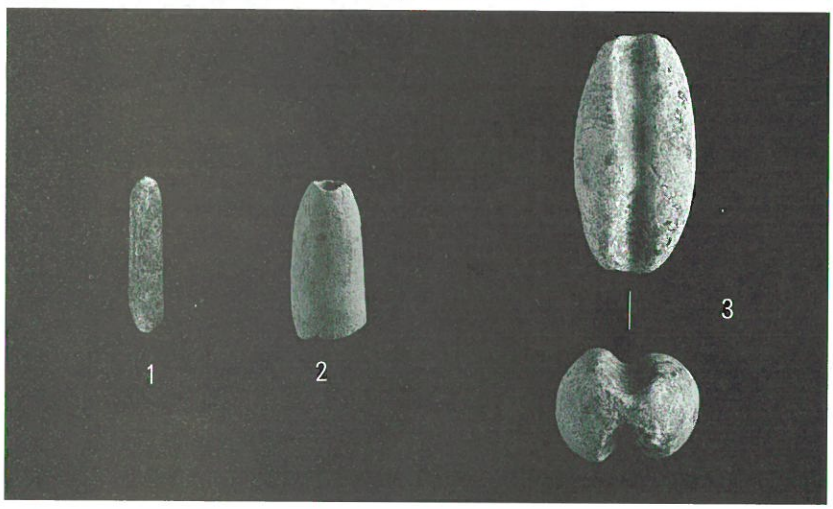
図版50　上：本土産陶磁器　中：沖縄産施釉陶器（表面）　下：沖縄産無釉陶器（裏面）

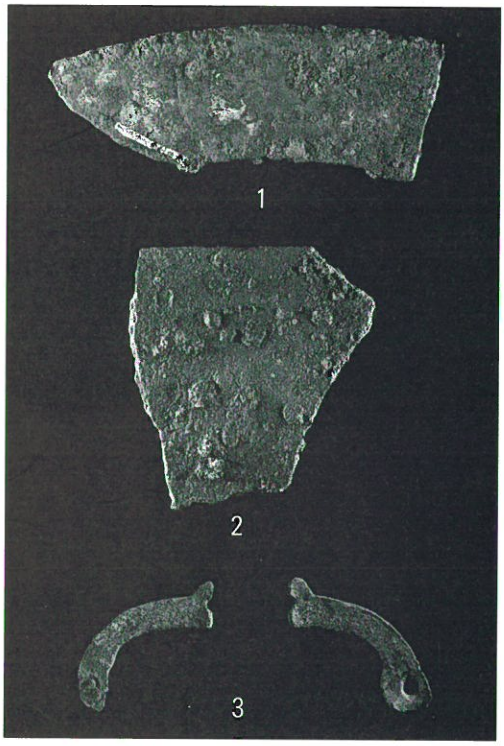


図版51　瓦

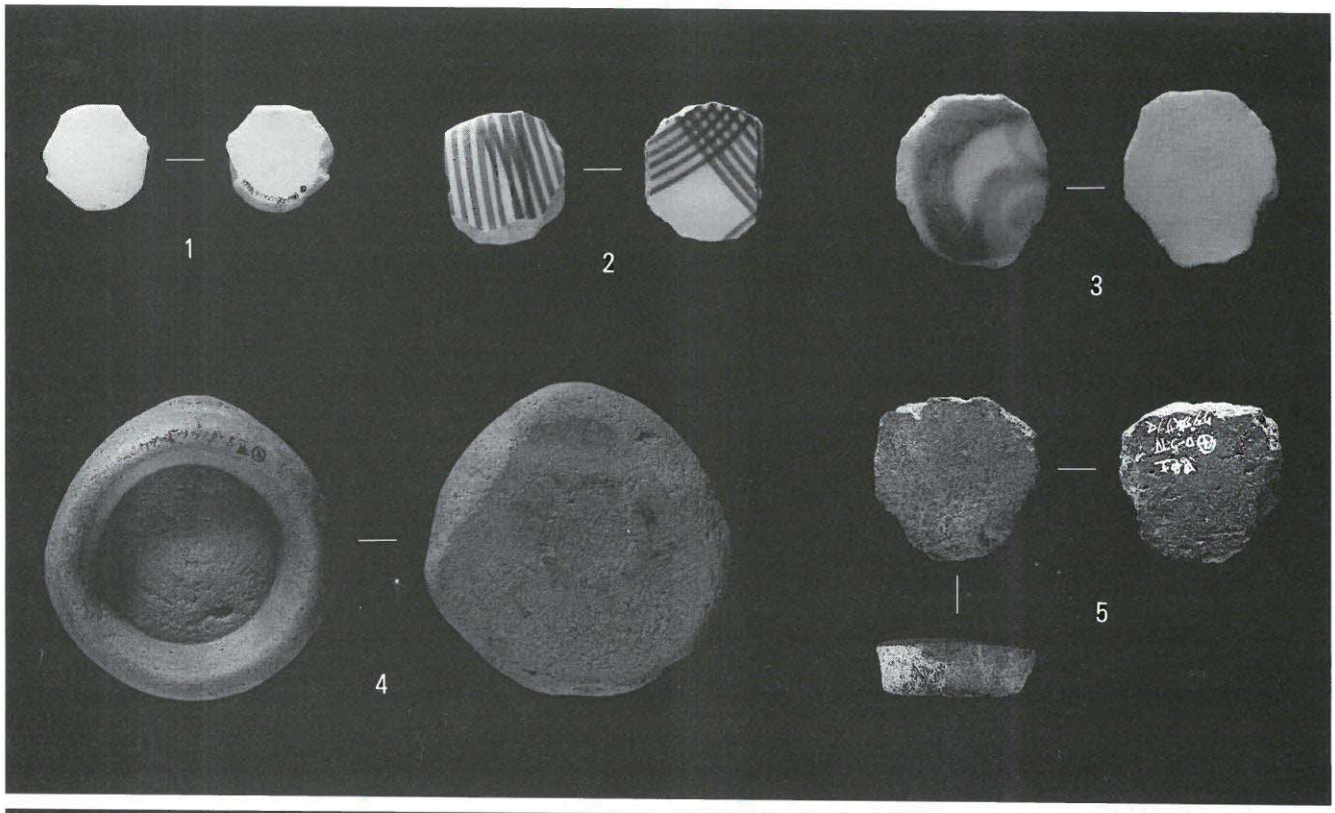


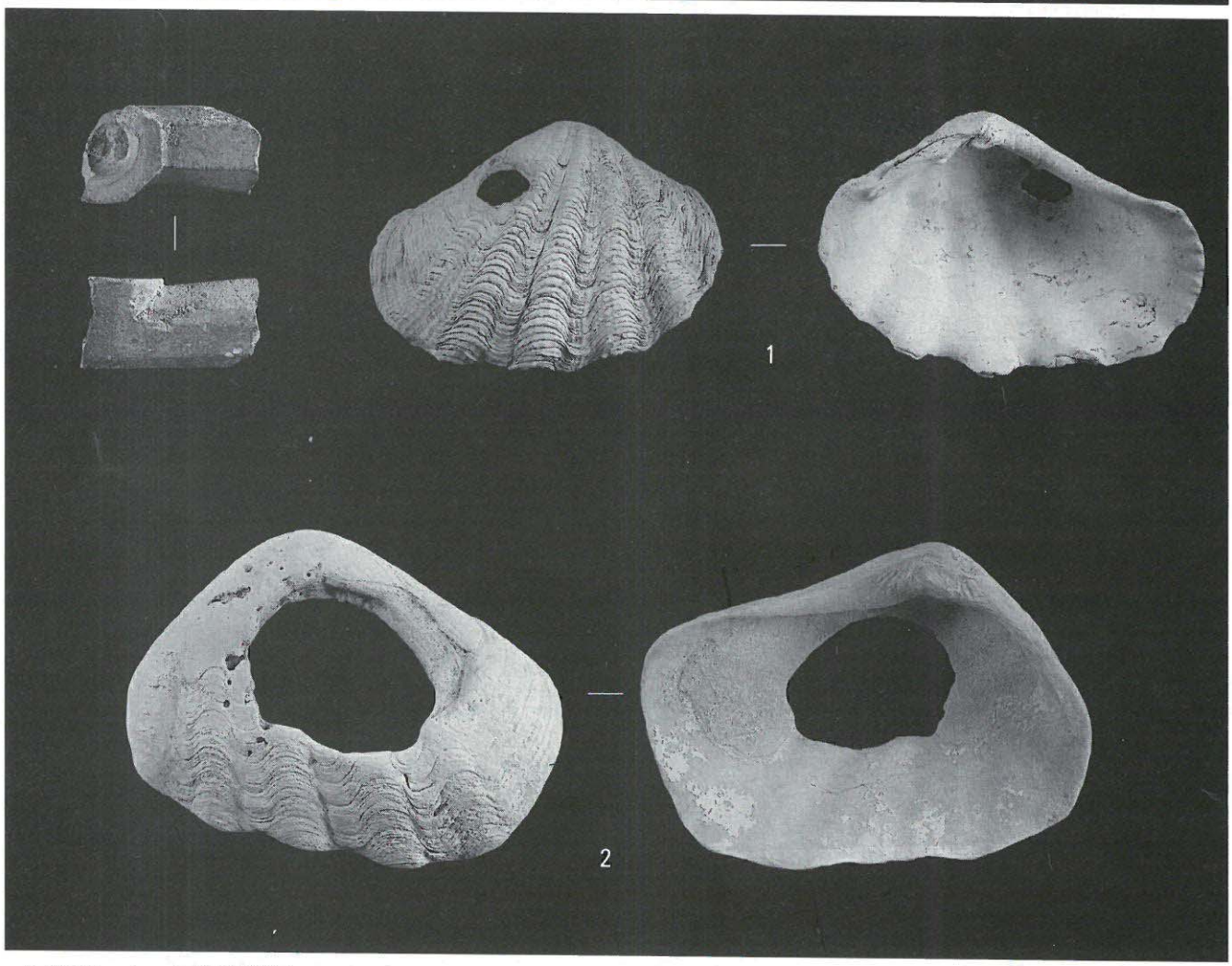




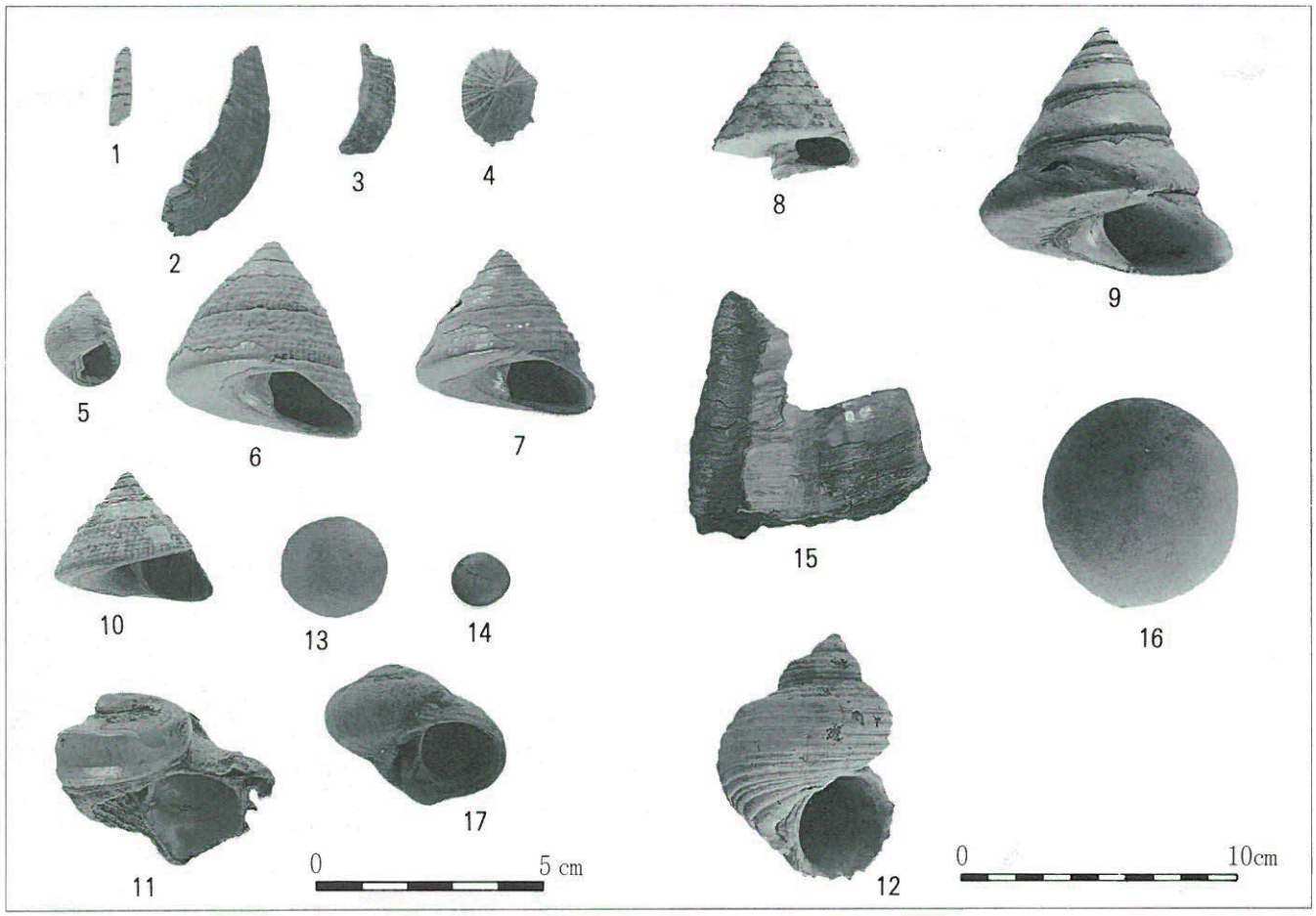


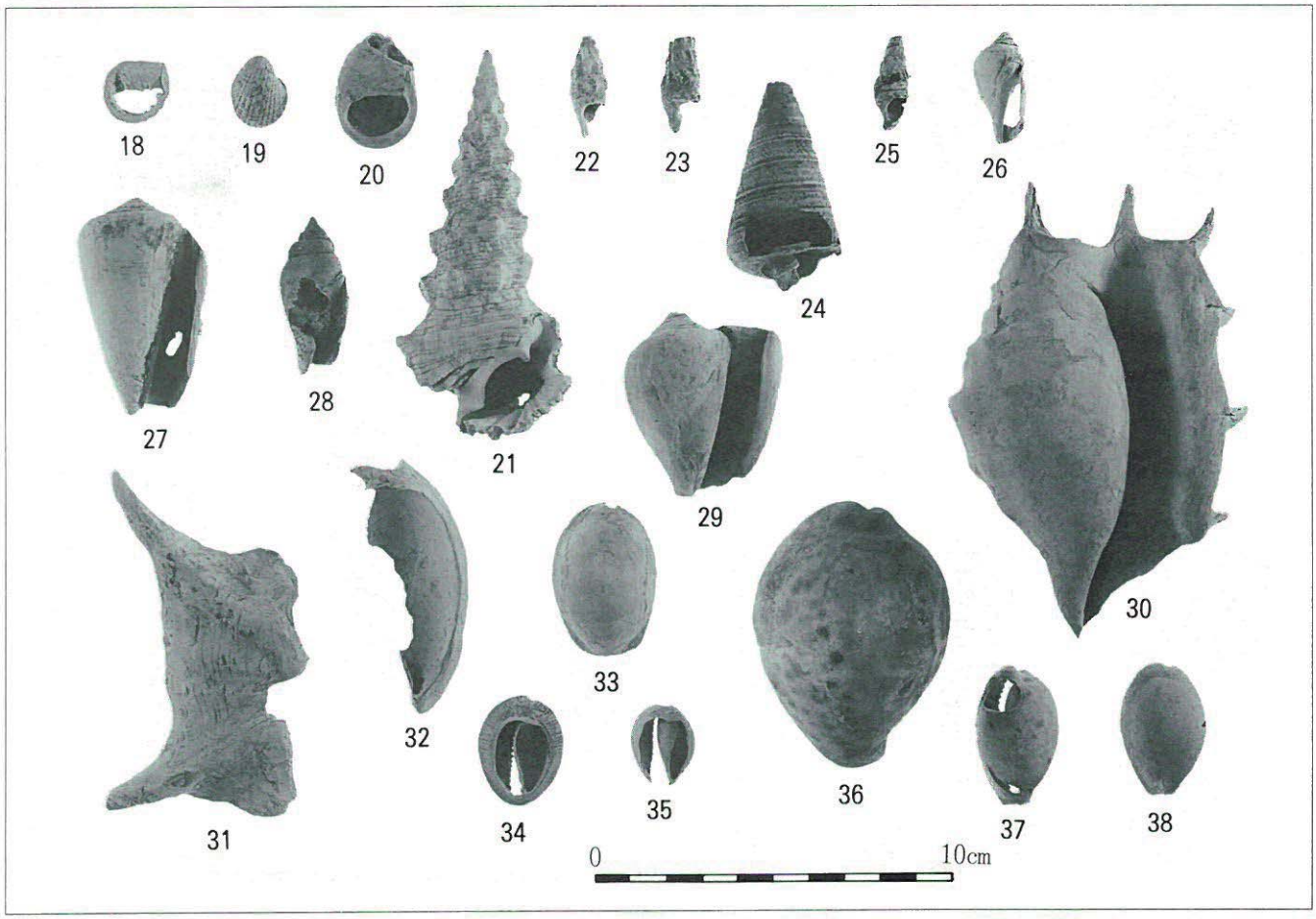
図版52　上：石器・硯　下：滑石製品・錘・鉄・青銅製品



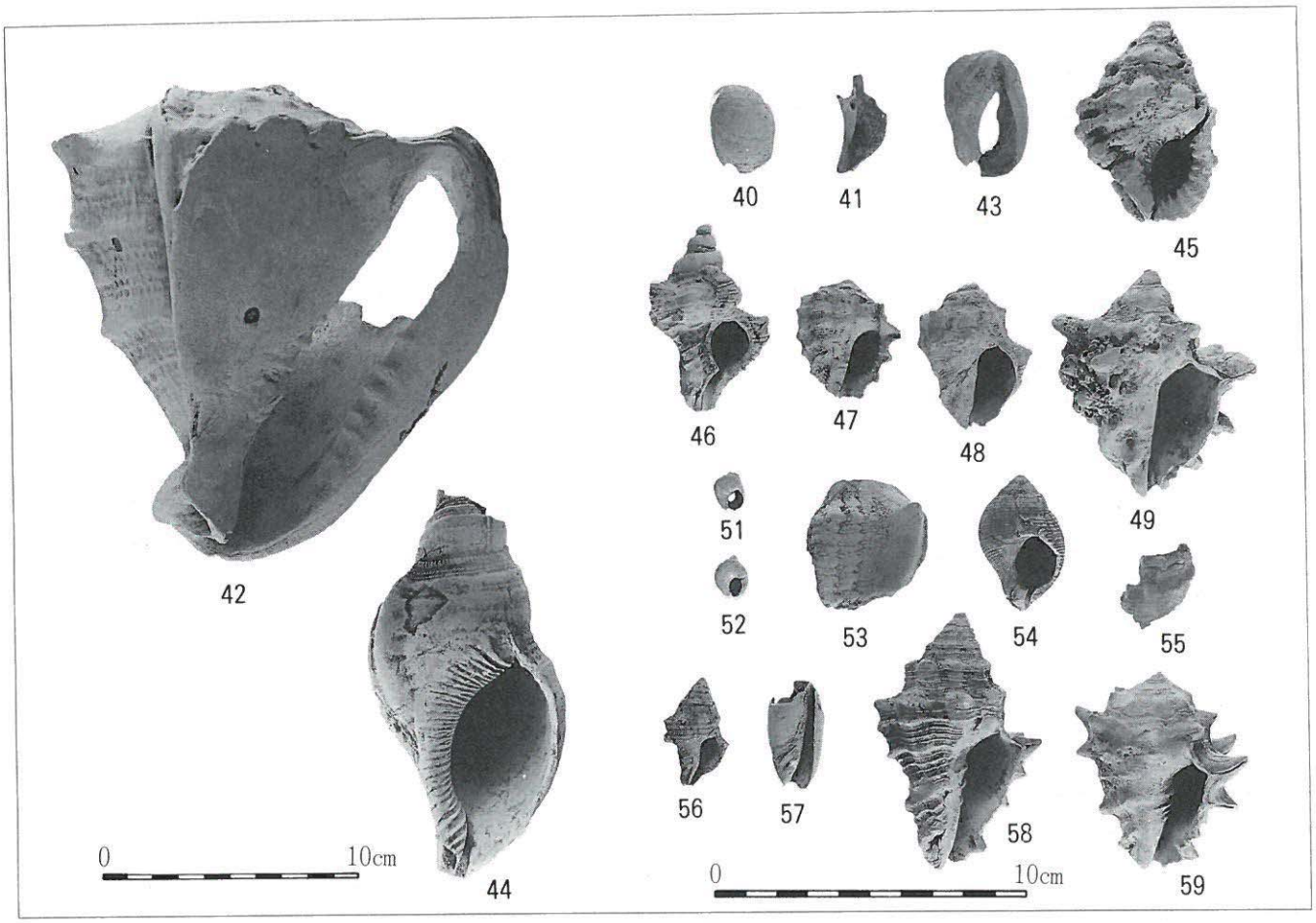


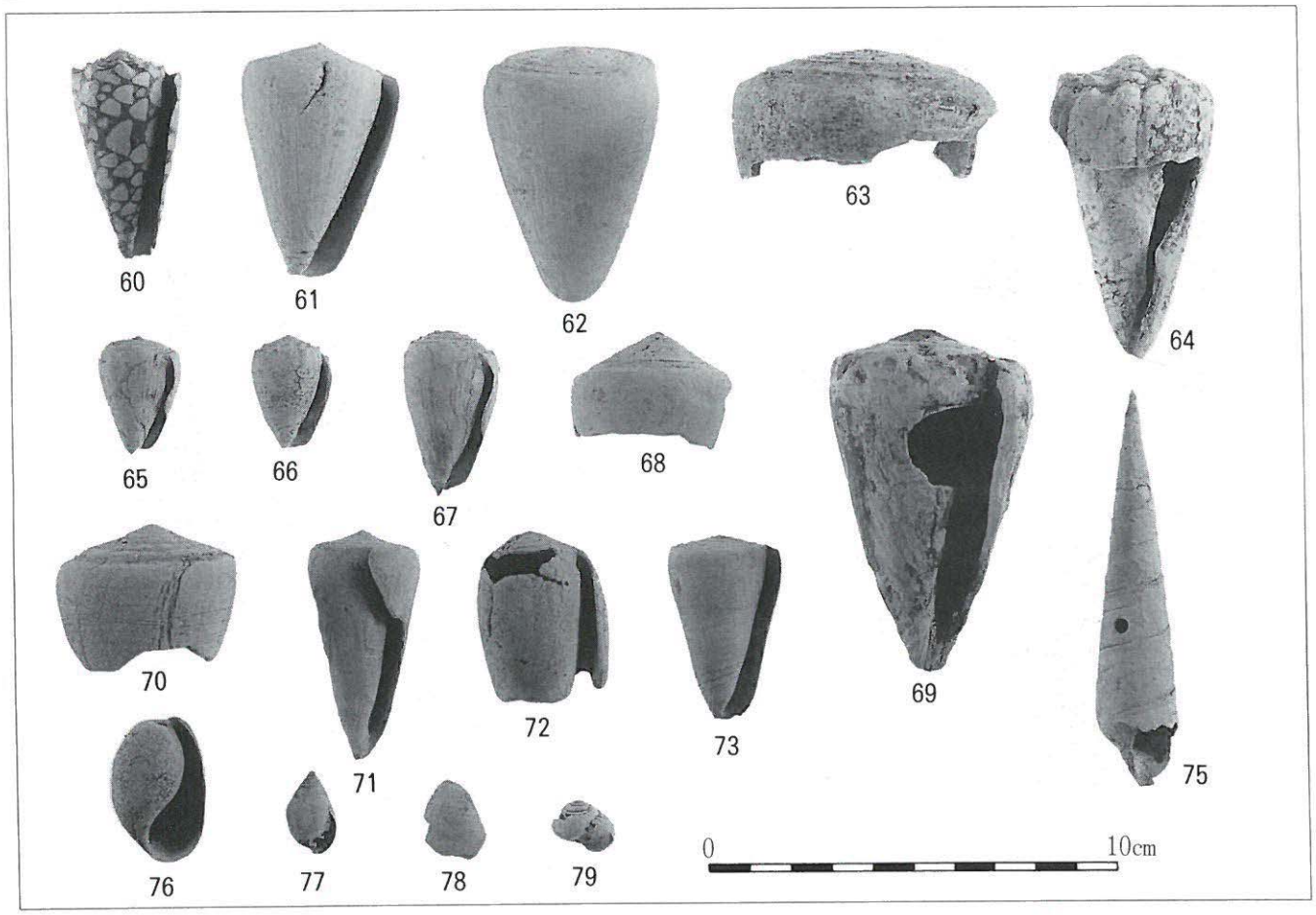
図版53　上：円盤状製品
　　下：煙管・貝製品



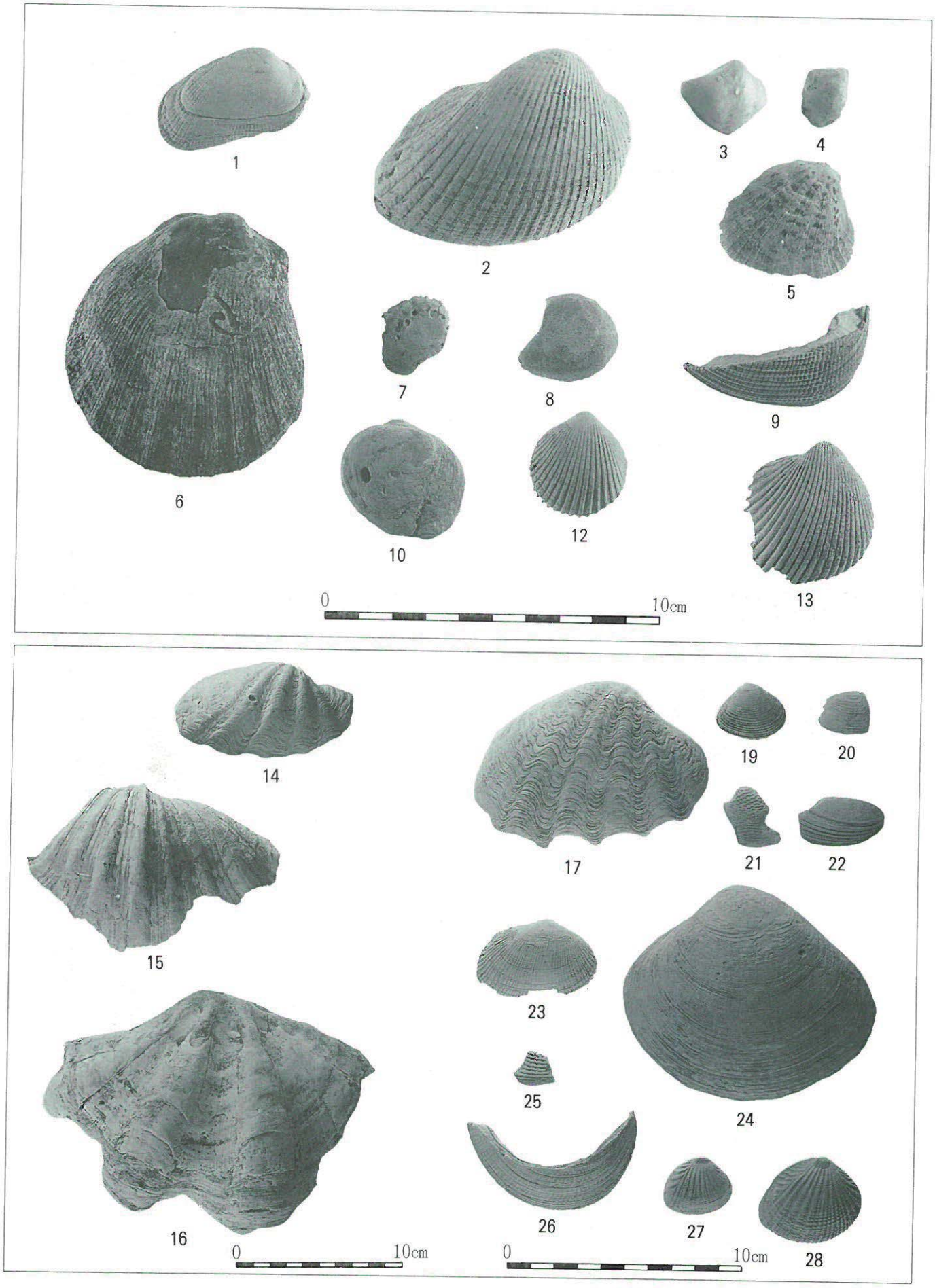


図版54　貝 類①　※貝種名は第26表(a)の番号と一致

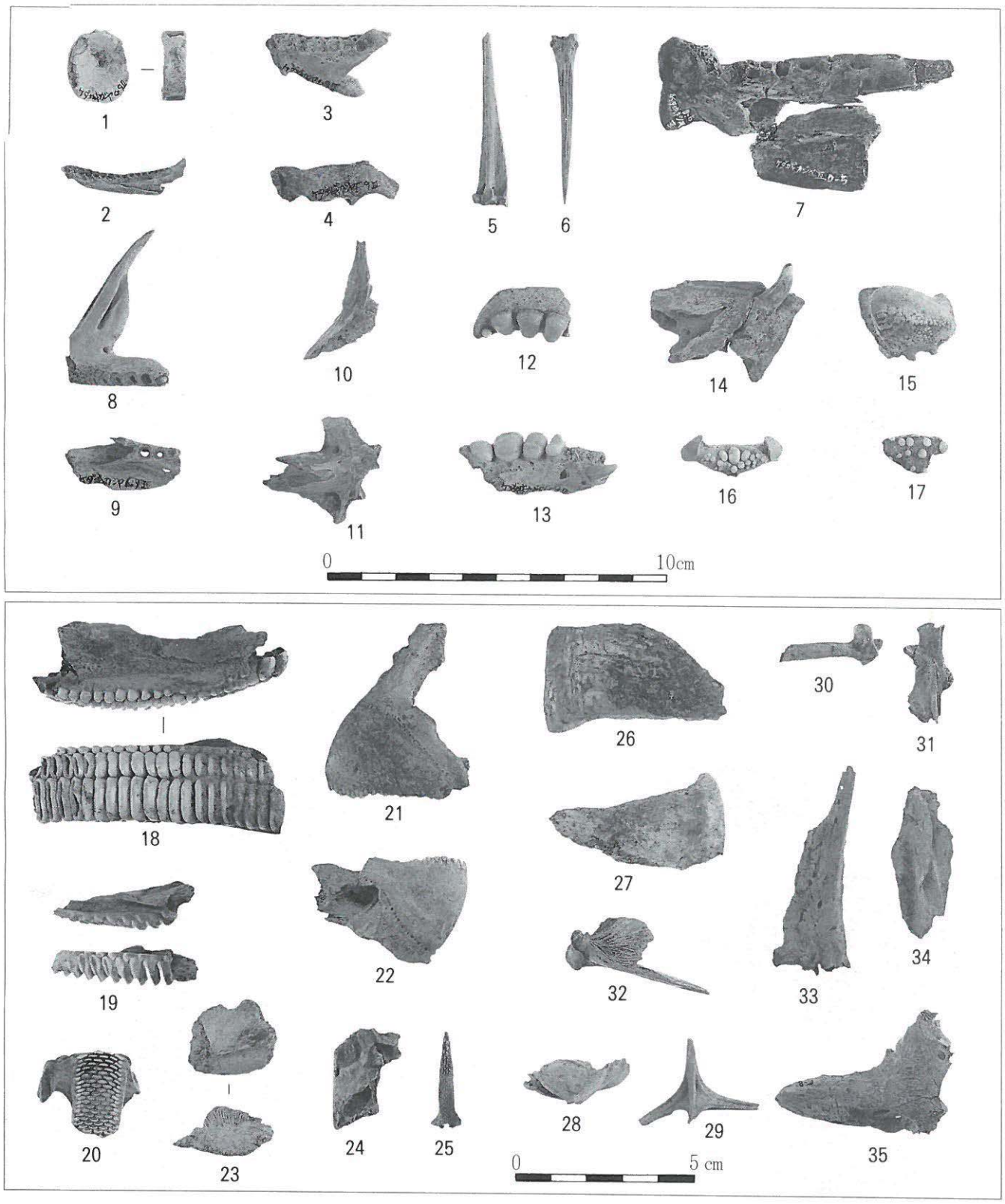




図版55　貝 類②　※貝種名は第26表(a)の番号と一致



図版56　貝 類③　※貝種名は第26表(b)の番号と一致

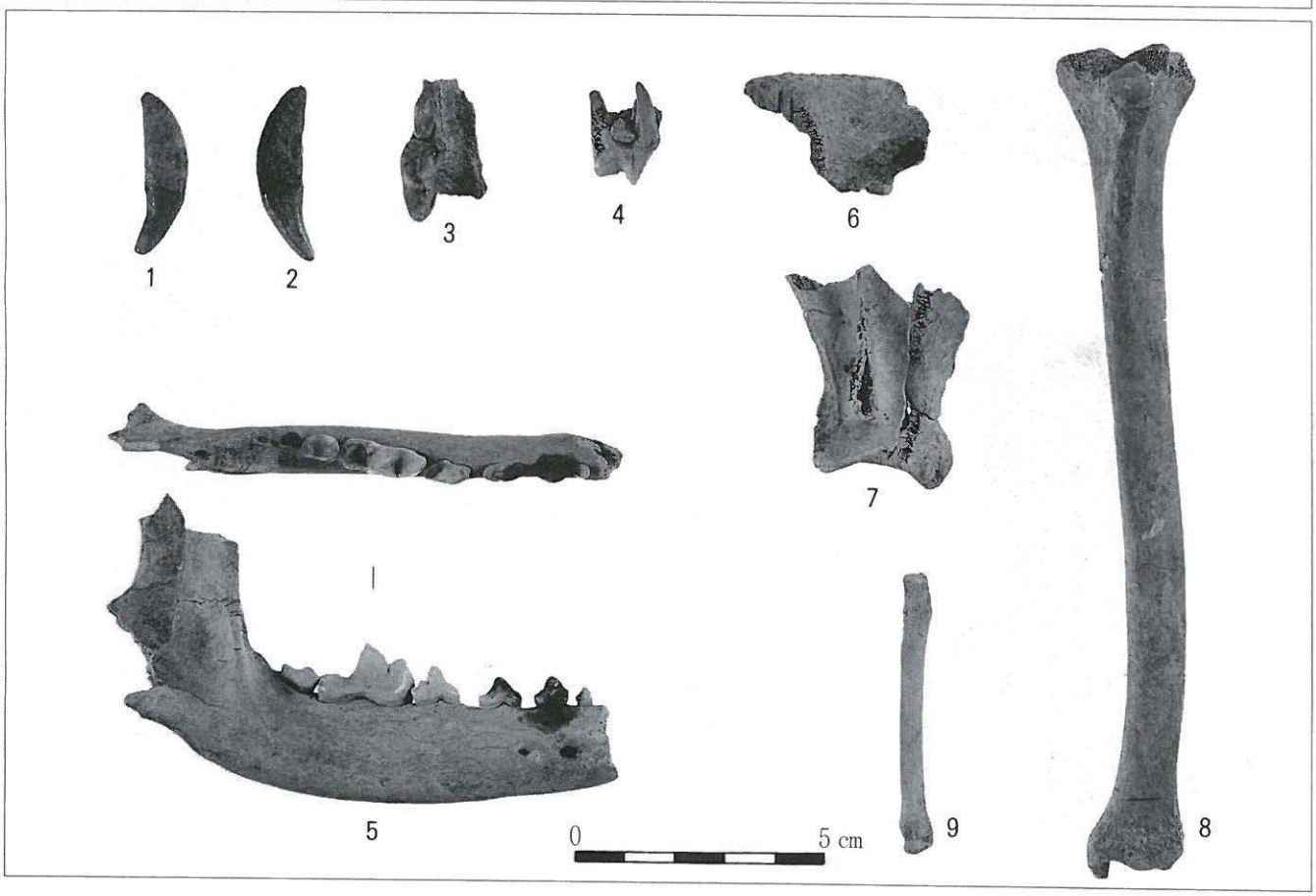


図版57　サカナ　上下

1サメ脊椎骨、2ウツボ科R歯骨、3～5タイ科クロダイ3R歯骨4臀鰭血管間棘5第二臀鰭棘、7ハタ科R歯骨B、6．8～13フエフキダイ科（6．8～10．13）ハマフエフキ6R主上顎骨8R前上顎骨9L歯骨10L前鰓蓋骨13R角骨、（11．12）ヨコシマクロダイ11R歯骨12L前上顎骨、14～17ベラ科（14．15）コブダイ14R歯骨15L上咽頭骨16下咽頭骨A17下咽頭骨B、18～22ブダイ科18イロブダイR上咽頭骨、（19．20）ナンヨウブダイ19R上咽頭骨20下咽頭骨21L前上顎骨22R歯骨、23ニザダイ科ウロコ、24モンガラカワハギ科R歯骨、25カワハギ類背鰭棘、26．27フグ科26L前上顎骨27R歯骨28～30ハリセンボン科28上顎骨29棘30R主上顎骨、32、33フグ類32L方骨33R前鰓蓋骨、31．34．35種不明31L舌顎34R主鰓蓋骨35R角骨

図版58　カメ・ジュゴン・イルカ・クジラ

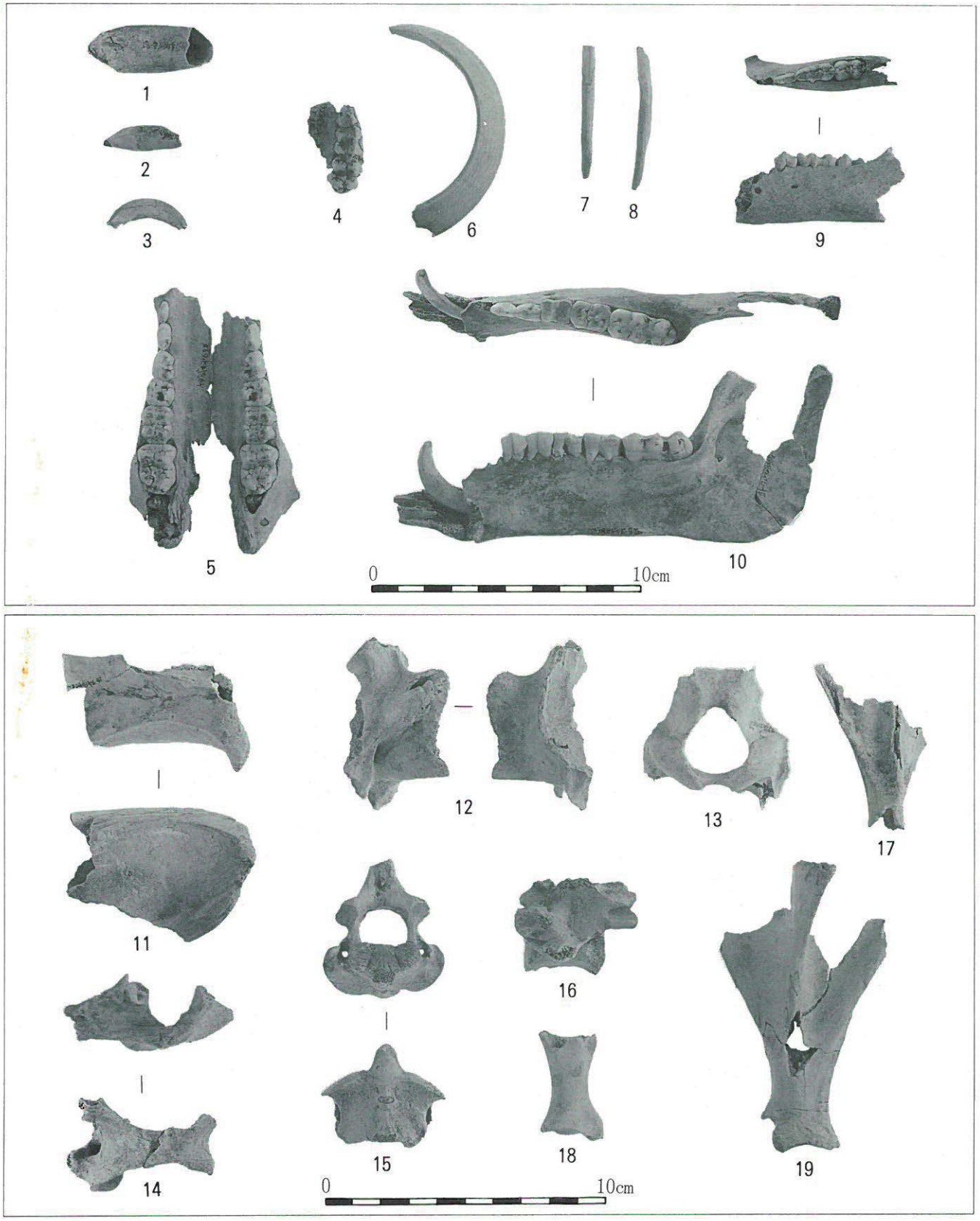
1．2リクガメハコガメ1中腹板2L縁骨板、3～5ウミガメ破片、6イルカ？肋骨破片、7クジラ？肋骨破片、8～10ジュゴン8L肩甲骨遠位端9L後頭顆10L肋骨



図版59　上：ニワトリ・カラス・ネズミ・ネコ　下：イヌ

上：1ニワトリL中足骨♂完存、2．3カラス2R尺骨近位端3R大腿骨遠位端、5ネズミL下顎骨、4．6～9ネコ4L下顎骨CP3・4M6R上顎骨dm3dm4 7R大腿骨近位骨端はずれ～遠位部8L大腿骨遠位端9L踵骨完存

下：イヌ1R上顎骨犬歯2L上顎骨犬歯3R上顎骨P3・4 4R上顎骨P4 5R下顎骨P1・2・3・4・M1・2 6椎体軸椎7R肩甲骨遠位端8L脛骨遠位端9R中足骨Ⅱ完存

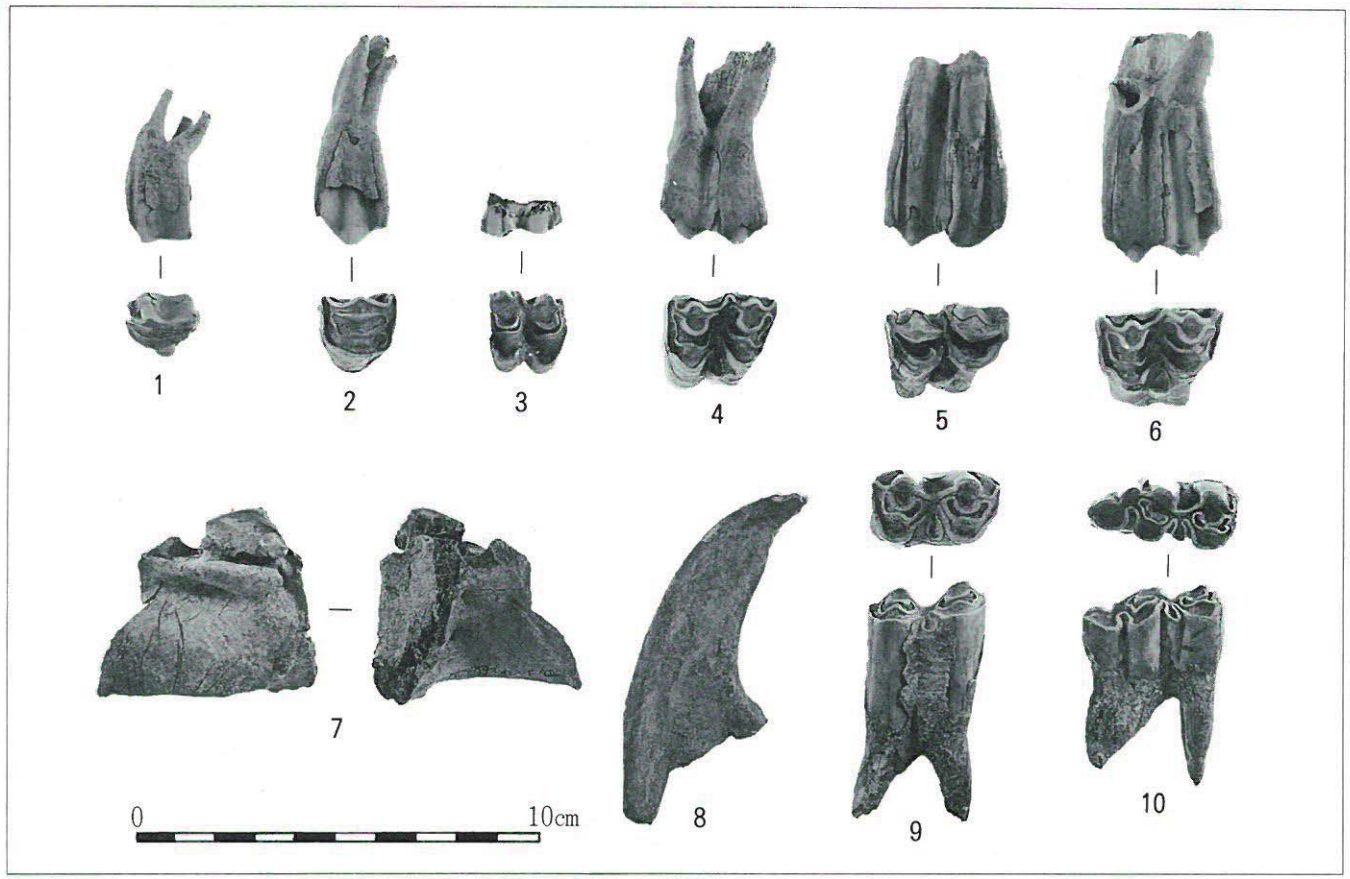


図版60　イノシシ属①

1Ｌ上顎骨犬歯♂、2Ｒ上顎骨犬歯♀、3Ｌ上顎骨Ｉ、4Ｌ上顎骨ｄｍ３・４Ｍ１、5Ｌ上顎骨♂Ｐ２・３・４Ｍ１・２〈３〉Ｒ、Ｐ１・２・３・４Ｍ１・２〈３〉、6Ｌ下顎骨犬歯♂、7Ｌ下顎骨Ｉ１、8Ｌ下顎骨Ｉ２、9Ｌ下顎骨dm３・４〈Ｍ１〉、10Ｒ下顎骨♀CP３・４Ｍ１・２・３、11Ｌ頭頂～側頭骨、12Ｒ側頭骨、13ＬＲ後頭顆、14環椎、腹弓、15軸椎、16椎体・腰椎、17Ｒ肩甲骨遠位部（幼）18Ｒ肩甲骨遠位端（若）、19Ｌ肩甲骨骨体～遠位端

図版61　イノシシ属②

20R上腕骨骨体～遠位部（幼）、21R上腕骨近位部～遠位端、22R橈骨近位部～遠位部、23R尺骨近位部～遠位部、24L中手骨Ⅲ・Ⅳ完存、25L寛骨臼部、26L大腿骨近位骨端はずれ～遠位端、27R脛骨近位部～骨体（幼）、28R距骨、29R脛骨近位部～遠位端、30R腓骨遠位端（切痕）、31L踵骨完存（切痕）、32L R足根骨中心骨、33中足骨Ⅱ完存、34L中足骨Ⅳ完存、35R脛骨遠位端はずれ（幼）切痕、36R中足骨Ⅲ完存、37L基節骨ⅢorⅣ完存、38R中節骨完存



図版62　ウ シ①

（1～6）L上顎骨1 P^2、2 P^4、3 dm_4、4 M^1、5 M^1、6 M^2、7 L頭蓋骨側頭骨頬骨空起基部、8 R下顎骨筋突起、9 R下顎骨M^2、10R下顎骨M^3、11R肩甲骨骨体～遠位部、12R上腕骨遠位部、13R橈骨近位端、14R橈骨近位端～遠位部R、尺骨近位部～遠位部、15R尺骨骨体、16L中間手根骨、17R中手骨近位端

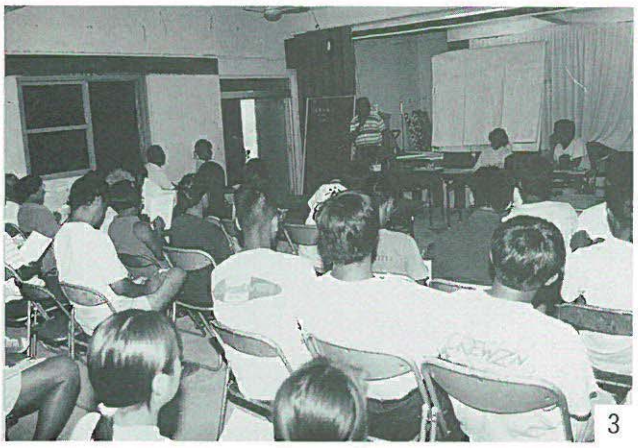
図版63　上：ウシ②　下：切痕

上：（ウシ）18R寛骨腸骨部、19R脛骨近位部、20R大腿骨遠位部、21L脛骨骨体、22L基節骨完存、23L中節骨完存、24L末節骨完存、ヤギ25L腕骨遠位端

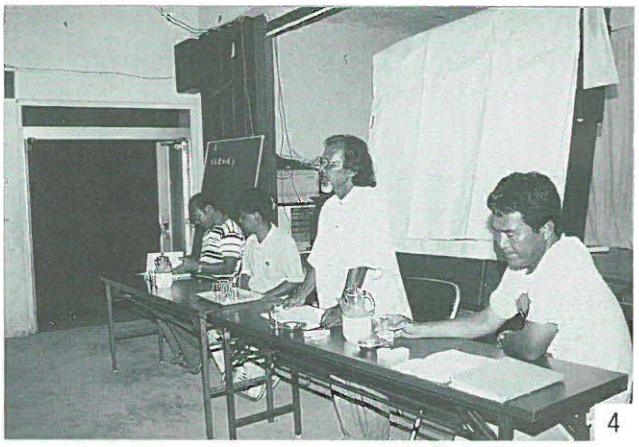
下：1R肩甲骨骨体（イノシシ）、2L肩甲骨骨体～遠位部（イノシシ）、3L上腕骨遠位部（イノシシ）、4L尺骨近位部～遠位部（イノシシ）、5L橈骨近位端～骨体（イノシシ）、6L脛骨破片（イノシシ）、7棘突起（ジュゴン）、8L肋骨（ウシ）、9L寛骨腸骨部（ウシ）、10L基節骨完存（ウシ）

1

2

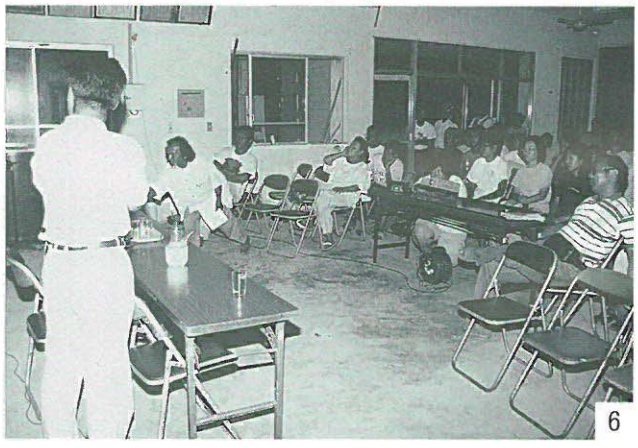


3

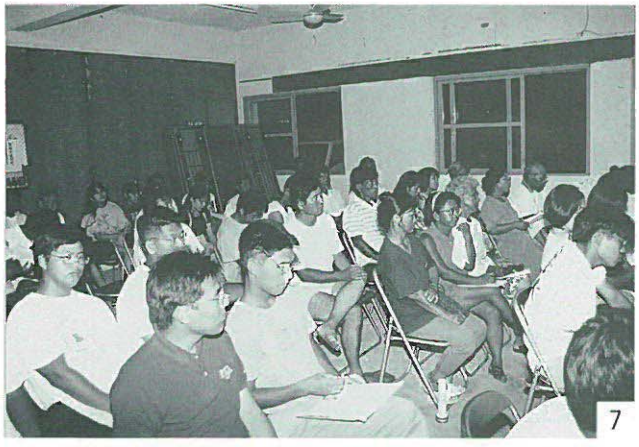


4

5



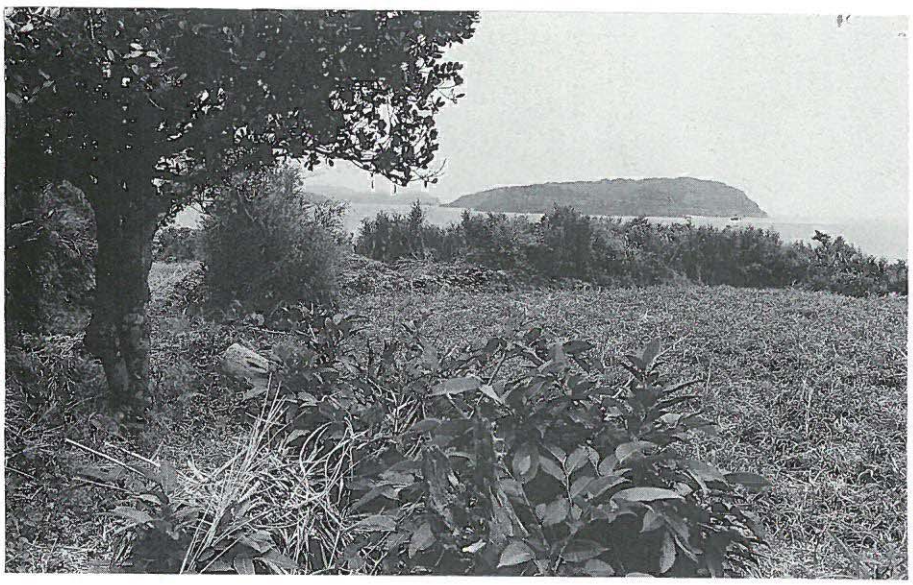
6



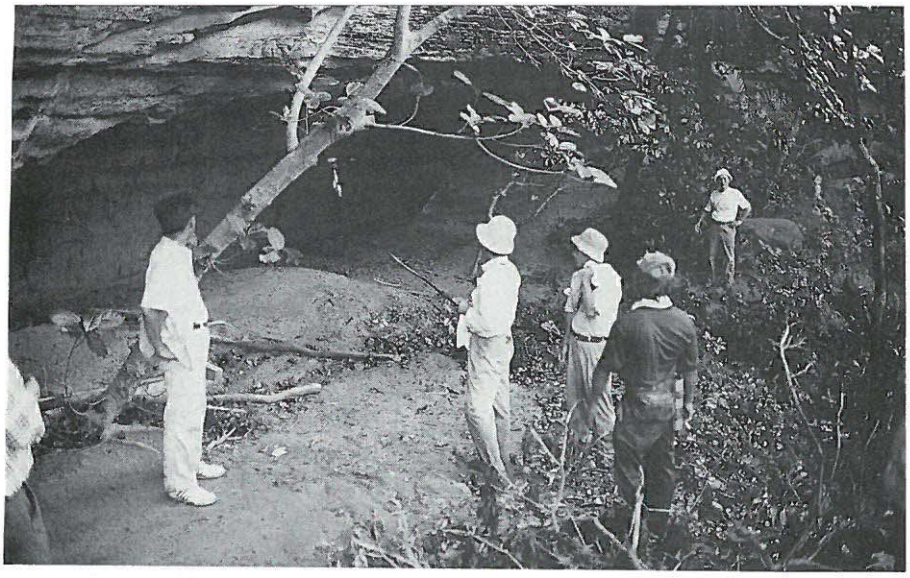
7

8

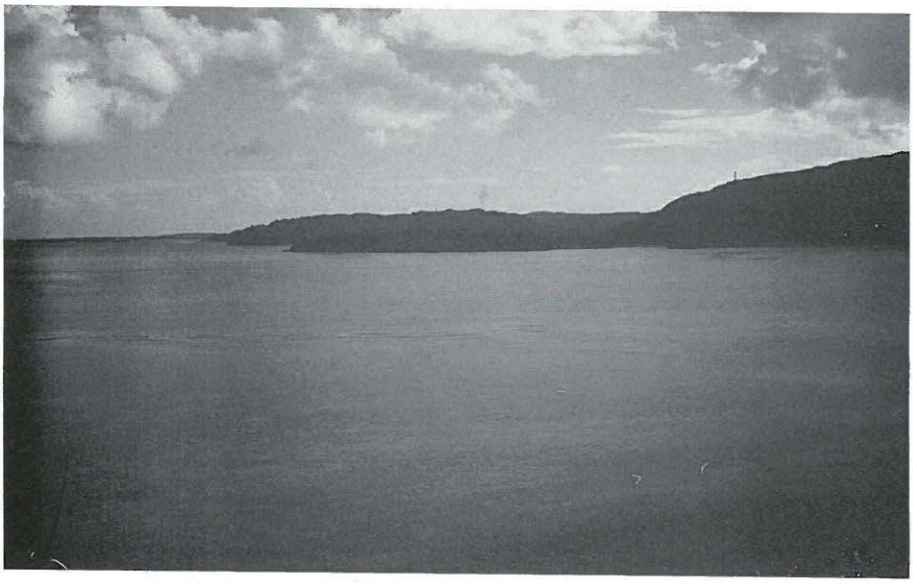
図版64　1．2．講演会（平成７年度）　3．4．5．6．7．講演会（平成８年度）　8．現場説明会



慶来慶田城遺跡
から見た外離島

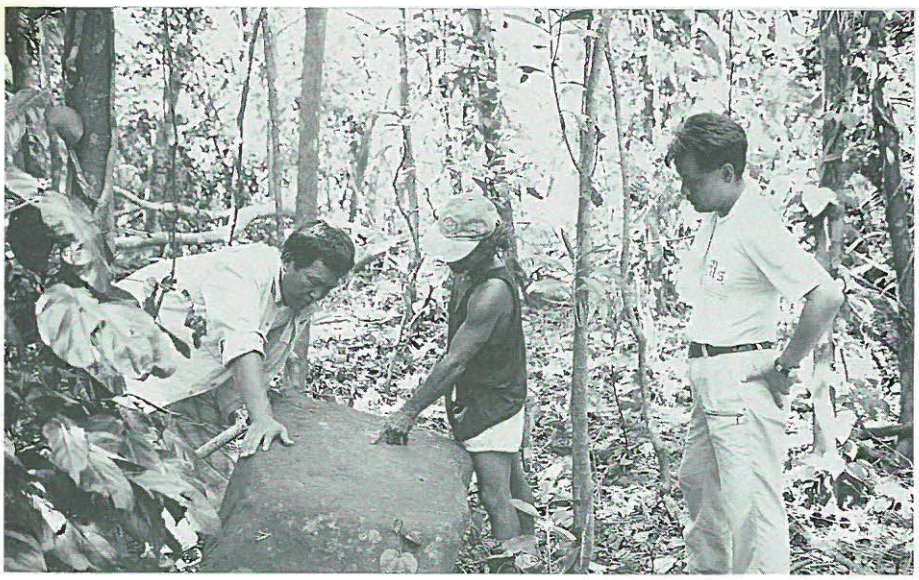


慶来慶田城用緒の
最初の居住地？（洞穴）



外離島から見た
祖納半島

図版65　外離島調査



方位石発見

方位石

屋敷石垣

図版66　鹿川村跡調査

沖縄県文化財調査報告書　第131集

慶来慶田城遺跡

重要遺跡確認調査

平成９年３月31日

発行　沖縄県教育委員会
編集　沖縄県教育庁文化課
〒900 那覇市泉崎１丁目２－２
TEL 098（866）2731 ～ 2733

印刷　合資会社　北部高速印刷
〒905 名護市東江５－11－７
TEL 0980（52）2540㈹